

き こ ない ちよう
木古内町

おお ひら
大平遺跡(3)

— 盛土遺構・包含層編 —

— 北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

第1分冊

本文編

平成28年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



盛土遺構検出状況及び盛土遺構の堆積状況



盛土遺構検出状況



N98区 Bトレンチ南側壁遺物出土状況 E→W



O98区 Bトレンチ南側壁遺物出土状況 E→W



M97区 A トレンチ遺物出土状況 E→W



M99区 PO-10~14 出土状況 SW→NE



Ⅰ群B-2類土器



Ⅰ群B-3類土器



Ⅱ群B-4類土器



Ⅱ群B-5類土器



II群 B-5類土器



V群 C類土器



V群 C類土器



V群 C 類土器



V群 C 類土器



V群 C 類土器



V群 C 類土器



V群C類土器



V群C類土器（下段は写真のみ掲載）



剥片石器



礫石器



石製品（異形石器・線刻礫）



軽石製石製品



石製品（玉類・垂飾・玦状耳飾）



接合資料

例 言

- 1 本書は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局が行う北海道新幹線建設工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成22・23年度に委託を受けて実施した、木古内町大平遺跡の埋蔵文化財発掘調査についての報告書である。
- 2 報告内容は、大平遺跡の平成22・23年度調査範囲(4,375㎡)の遺構と遺物である。今回は「盛土遺構・包含層編」として焼土・剥片集中・礫集中・盛土遺構・包含層の報告を行う。
- 3 大平遺跡の報告書は、平成21年度に発掘調査が行われた北海道新幹線建設工事埋蔵文化財発掘調査の報告書が1冊、平成22・23年度調査範囲の「遺構編」が1冊、刊行されている。
- 4 調査は第2調査部第1調査課が担当した。
- 5 本書は、中山昭大、鈴木宏行、芝田直人、酒井秀治、熊谷仁志、佐藤和雄、立川トマスが執筆し、文末に執筆者を示した。編集は、酒井が担当した。
- 6 遺物の整理は、土器等を熊谷、石器等を酒井が担当した。
- 7 現地調査および室内での写真撮影・整理は立川・中山が担当した。
- 8 基本基準杭設置については、平成22年度が株式会社光栄コンサルタント、平成23年度が函館土木調査株式会社に依頼した。
- 9 動物遺体の同定については、パレオ・ラボに依頼した。
- 10 黒曜石現在産地同定については、有限会社遺物材料研究所に依頼した。
- 11 土器・石器実測の一部については、株式会社トラスト技研に依頼した。
- 12 調査にあたっては、下記の諸機関および諸氏に御協力、御指導をいただいた。

独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、木古内町教育委員会、北斗市教育委員会、
知内町郷土資料館、市立函館博物館、七飯町歴史館、北海道開発局函館工事事務所
飯島義雄（ぐんま史跡維持支援団）、石井淳平（厚沢部町教育委員会）、
井上 巖（第四紀地質研究所）、木元 豊（木古内町教育委員会）、
佐野忠史（青森県つがる市教育委員会）、須藤 隆（東北大学）、竹田 聡（知内町教育委員会）、
時田太郎（シン技術コンサルタント）、中村五郎（福島県考古学会）、
成田滋彦・小田川哲彦・岩田安之（青森県埋蔵文化財調査センター）、
福田裕二・佐藤智雄・吉田 力・小林貞（函館市教育委員会）、
古屋敷則夫（青森県上北町教育委員会）、村木 淳（八戸市教育委員会）、
村本周三（北海道教育委員会）、森 靖裕（北斗市教育委員会）、山田 央（七飯町歴史館）、
横山英介（北海道考古学研究所）

記号等の説明

1. 遺構の表記には以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付けた。
H：竪穴住居跡 P：土坑 F：焼土 FC：剥片集中 S：礫集中
2. 遺構図等には真北を示す方位印を付した。図の天方向は、 $N-40^{\circ}-W$ である。遺構平面図の「+」は調査区または小調査区ラインの交点で、傍らの名称記号は右下の調査区を表す。また、小黑丸とその下の数字およびセクションレベルは標高（単位m）である。
3. 掲載した遺構・遺物の図は基本的に以下の縮尺にしている。ただし、遺構位置図、地形図、遺物出土状況図などは任意の縮尺であるため、各図にはスケールを付けてある。
遺 構 1：40（一部1：50） 復原土器 1：4 土器拓本 1：3
剥片石器・磨製石器 1：2 礫石器 1：3（一部1：4） 土製品・石製品 2：3
4. 写真図版では、復原土器は任意、土器拓本・礫石器・接合資料はおおよそ1：3、石鏝はおおよそ2：3、剥片石器・土製品・石製品はおおよそ1：2で掲載している。石製品の一部にはおおよそ1：3で掲載したものもある。
5. 遺構の規模は、「長軸の上端/下端×短軸の上端/下端×確認面からの最大深」（単位m）で示している。
6. 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字（I、II、III…）、遺構内の層序についてはアラビア数字（1、2、3…）を使用した。
7. 土層の色調は『新版標準土色帖29版』（小山・竹原2007）に準じた。
8. 火山灰は『北海道の火山灰』（北海道火山命名委員会1982）に準じ、以下の略号を用いた。
駒ヶ岳d降下火山灰層：K o - d 白頭山-苦小牧火山灰：B - T m
9. 遺物図右下の太ゴチックアラビア数字は掲載番号であり、これに後続する小文字アルファベット（a、b、c…）は同一個体を示す。
10. 石器の大きさは、図の最大長・最大幅・最大厚（単位cm）で示した。破損しているものについては現存最大値を（ ）で示した。
11. 石器の実測図中でたつき痕は「V-V」、すり痕は「| ←→ |」、磨滅痕は「| - |」で範囲を示した。また、光沢部分、付着部分、被熱部分をドットのスクリーントーンで示した。アスファルト付着部分は黒塗りして示した。
12. 文中において「北埋調報」としているものは、財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書もしくは公益財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書の略である。

目 次

【第1分冊】

口 絵	
例 言	
記号等の説明	
目 次	
挿図目次	
表 目 次	

I 緒言

1 調査要項	1
2 調査にいたる経緯	4
3 調査の経過	4
4 調査結果の概要	5

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境	7
2 周辺の遺跡	7

III 調査の方法

1 調査範囲	13
2 土工	13
3 測量と記録	13
4 整理の方法	14
5 保管	17
6 遺跡の土層	17
7 遺物の分類	18

IV 焼土・剥片集中・礫集中と出土遺物、盛土遺構

1 焼土	23
2 剥片集中	23
3 礫集中	29
4 盛土遺構	79
一覧表	133

V 盛土遺構と包含層の出土遺物

1 土器	145
2 石器等	369
一覧表	435

VI 自然科学的分析

1 大平遺跡出土の動物遺体	449
2 木古内町大平遺跡出土黒曜石製石器の原材産地分析	455
3 大平遺跡出土滑石等の同定	468

VII 総括

1 土器	473
2 石器等	547

引用参考文献
報告書抄録

【第2分冊】

図版目次

写真図版

挿 図 目 次

I 緒言

図 I-1 大平遺跡の位置	2
図 I-2 大平遺跡遺構位置図	3

II 遺跡の位置と環境

図 II-1 遺跡の位置と木古内町の地形	9
図 II-2 木古内町の地盤図	9
図 II-3 木古内町内の遺跡	11
図 II-4 北海道新幹線概要図	12
図 II-5 北海道新幹線木古内町環境図	12

III 調査の方法

図 III-1 グリッド設定図・年度別調査範囲	15
図 III-2 発掘調査範囲と周辺の地形	15
図 III-3 土層模式図	19
図 III-4 M96盛土遺構土層断面図	19
図 III-5 Mラインメインセクション (Aトレンチ)	20
図 III-6 トレンチ位置図及び調査範囲状況図	21

IV 焼土・剥片集中・礫集中と出土遺物、盛土遺構

図 IV-1 焼土位置図	30
図 IV-2 F-46 ~ 53・60・64	31
図 IV-3 F-30 ~ 34	32
図 IV-4 F-16・17・19・20・29・66 ~ 68	33
図 IV-5 F-8・9・13・21・22・57	34
図 IV-6 F-14・23・26・27・39・56	35
図 IV-7 F-1 ~ 3・7・10 ~ 12・15・23 ~ 25・28・42	36
図 IV-8 F-4 ~ 6・36 ~ 38・40・43・44・59・97	37
図 IV-9 F-35・41・61 ~ 63・69・75 ~ 78・95・96	38
図 IV-10 F-70・71 ~ 74・83 ~ 87・90 ~ 92・94	39
図 IV-11 F-79 ~ 82・88・89	40
図 IV-12 剥片集中位置図	41
図 IV-13 FC-6・10・13・15・23・24・26・27・ 29 ~ 31・35・70・105	42
図 IV-14 FC K ~ N95・96K	43
図 IV-15 FC K ~ N97・98K	44
図 IV-16 FC K ~ M99 ~ 0K	45
図 IV-17 FC・S-2 K ~ M1 ~ 3K	46
図 IV-18 FC・S-1 N ~ P1 ~ 3K	47
図 IV-19 F・FC 土器	48
図 IV-20 FC-4・6・8・9・15・19 石器	49
図 IV-21 FC-7 石器	50
図 IV-22 FC-10・12 石器	51
図 IV-23 FC-21・29・32・33・44・45 石器	52
図 IV-24 FC-48 石器	53
図 IV-25 FC-47・49・52 石器	54
図 IV-26 FC-50・55 石器	55
図 IV-27 FC-53・56・60 石器	56
図 IV-28 FC-62・84・85・91・93・98・99 石器	57
図 IV-29 FC-86 石器	58
図 IV-30 FC-88・101・103・109 石器	59
図 IV-31 FC-94・105・111・117 石器	60
図 IV-32 FC-120・122・125・127・S-2 石器	61
図 IV-33 接合資料 (1)	62
図 IV-34 接合資料 (2)	63

図 IV-35 接合資料 (3)	64
図 IV-36 接合資料 (4)	65
図 IV-37 接合資料 (5)	66
図 IV-38 接合資料 (6)	67
図 IV-39 接合資料 (7)	68
図 IV-40 接合資料 (8)	69
図 IV-41 接合資料 (9)	70
図 IV-42 接合資料 (10)	71
図 IV-43 接合資料 (11)	72
図 IV-44 接合資料 (12)	73
図 IV-45 接合資料 (13)	74
図 IV-46 接合資料 (14)	75
図 IV-47 接合資料 (15)	76
図 IV-48 接合資料 (16)	77
図 IV-49 接合資料 (17)	78
図 IV-50 堅穴住居跡・土坑位置図、 盛土遺構・掘土範囲図	80
図 IV-51 焼土・剥片集中と盛土遺構範囲図	83
図 IV-52 POと盛土遺構範囲図	84
図 IV-53 98ライン (Bトレンチ) メインセクション図	85
図 IV-54 盛土・掘土出土土器の分布	86
図 IV-55 盛土・掘土出土石器の分布	87
図 IV-56 盛土・掘土出土土器の分布	88
図 IV-57 盛土・掘土出土土器の分類別出土点数分布	89
図 IV-58 95・96ラインPO出土土器の垂直分布	90
図 IV-59 97ラインPO出土土器の垂直分布 (1)	91
図 IV-60 97ラインPO出土土器の垂直分布 (2)	92
図 IV-61 98ラインPO出土土器の垂直分布	93
図 IV-62 99ラインPO出土土器の垂直分布	94
図 IV-63 N95 ~ N0ラインPO出土土器の垂直分布	95
図 IV-64 POの土器出土位置図 K・L87 ~ 91K IIA・IIIA・IIB-1・3 ~ 5 (1a・1e・If・2a・2a(4)・2b・2d)	96
図 IV-65 POの土器出土位置図 M・N88・89・O87 ~ 91K IIB-3・4 (1a・1e・2b)・IV・VC	97
図 IV-66 POの土器出土位置図 K98・L96 ~ 98K I・IIA・IIIA・IIB-1 ~ 5	98
図 IV-67 POの土器出土位置図 M95 ~ 98K I・IIA・IIB-2・5	99
図 IV-68 POの土器出土位置図 M95 ~ 98K IIB-3	100
図 IV-69 POの土器出土位置図 M95 ~ 98K IIB-4 (1a・2b・If・1e)	101
図 IV-70 POの土器出土位置図 M95 ~ 98K IIB-4 (2a・2a1A)	102
図 IV-71 POの土器出土位置図 N95 ~ 98K IIB・IIB-2 ~ 4・IIIA	103
図 IV-72 POの土器出土位置図 N95・96K IIB-5	104
図 IV-73 POの土器出土位置図 N97・98K IIB-5	105
図 IV-74 POの土器出土位置図 O84 ~ 98・P97・98K I・IIB-3 ~ 5・IIIA	106

図IV-75	POの土器出土位置図 K・L99～1区 ⅡB-2～5	107
図IV-76	POの土器出土位置図 M・N99～2区 ⅡB-1～3	108
図IV-77	POの土器出土位置図 M・N99～2区 ⅡB-3～5	109
図IV-78	POの土器出土位置図 O・P99～2・Q2区 ⅢA・ⅡB-2～5	110
図IV-79	調査区別土器出土位置図 K～Q0～2区	111
図IV-80	調査区別土器出土位置図 K～O99区	112
図IV-81	調査区別土器出土位置図 K・O99区	113
図IV-82	調査区別土器出土位置図 K・L・O・P98区	114
図IV-83	調査区別土器出土位置図 L～P96区	115
図IV-84	調査区別土器出土位置図 L・O97区	116
図IV-85	調査区別土器出土位置図 M97区 ⅡB-1～3	117
図IV-86	調査区別土器出土位置図 M97区 ⅡB-4・5	118
図IV-87	調査区別土器出土位置図 M98区 ⅡB-2～5	119
図IV-88	調査区別土器出土位置図 M～P95区	120
図IV-89	調査区別土器出土位置図 N97区 ⅡB-2～4	121
図IV-90	調査区別土器出土位置図 N97区 ⅡB-5・ⅢA・Ⅳ	122
図IV-91	調査区別土器出土位置図 N98区 ⅡB-1～5	123
図IV-92	分類別土器出土位置図 ⅡB-1・2	124
図IV-93	分類別土器出土位置図 ⅡB-3 (2a・2b・1e・2a1A・2a(4)・2d)	125
図IV-94	分類別土器出土位置図 ⅡB-3 (1f)	126
図IV-95	分類別土器出土位置図 ⅡB-3 (1a)	127
図IV-96	分類別土器出土位置図 ⅡB-4 (1a・2a・2a1A)	128
図IV-97	分類別土器出土位置図 ⅡB-4 (1e・2b)	129
図IV-98	分類別土器出土位置図 ⅡB-5 (1a・2a・2a1A・2a(4)・3b)	130
図IV-99	分類別土器出土位置図 ⅡB-5 (2b・3b)	131
図IV-100	分類別土器出土位置図 ⅢA・Ⅳ	132

V 盛土遺構と包含層の出土遺物

図V-1	包含層土器 I群A類・I群B類・II群A類(1)	210
図V-2	包含層土器 II群A類(2)	211
図V-3	包含層土器 II群B類 1a(1)	212
図V-4	包含層土器 II群B類 1a(2)	213
図V-5	包含層土器 II群B類 1a(3)	214
図V-6	包含層土器 II群B類 1a(4)	215
図V-7	包含層土器 II群B類 1a(5)	216

図V-8	包含層土器 II群B類 1a(6)	217
図V-9	包含層土器 II群B類 1a(7)	218
図V-10	包含層土器 II群B類 1a(8)	219
図V-11	包含層土器 II群B類 1a(9)	220
図V-12	包含層土器 II群B類 1a(10)	221
図V-13	包含層土器 II群B類 1a(11)	222
図V-14	包含層土器 II群B類 1a(12)	223
図V-15	包含層土器 II群B類 1a(13)	224
図V-16	包含層土器 II群B類 1a(14)	225
図V-17	包含層土器 II群B類 1a(15)	226
図V-18	包含層土器 II群B類 1a(16)	227
図V-19	包含層土器 II群B類 1a(17)	228
図V-20	包含層土器 II群B類 1a(18)	229
図V-21	包含層土器 II群B類 1a(19)	230
図V-22	包含層土器 II群B類 1a(20)	231
図V-23	包含層土器 II群B類 2a(1)	232
図V-24	包含層土器 II群B類 2a(2)	233
図V-25	包含層土器 II群B類 2a(3)	234
図V-26	包含層土器 II群B類 2a(4)	235
図V-27	包含層土器 II群B類 2a(5)	236
図V-28	包含層土器 II群B類 2a(6)	237
図V-29	包含層土器 II群B類 2a(7)	238
図V-30	包含層土器 II群B類 2a(8)	239
図V-31	包含層土器 II群B類 2a(9)	240
図V-32	包含層土器 II群B類 2a(10)	241
図V-33	包含層土器 II群B類 2a(11)	242
図V-34	包含層土器 II群B類 2a(12)	243
図V-35	包含層土器 II群B類 2a(13)	244
図V-36	包含層土器 II群B類 2a(14)	245
図V-37	包含層土器 II群B類 2a(15)	246
図V-38	包含層土器 II群B類 2a(16)	247
図V-39	包含層土器 II群B類 2a(17)	248
図V-40	包含層土器 II群B類 2a(18)	249
図V-41	包含層土器 II群B類 2a(19)	250
図V-42	包含層土器 II群B類 2a(20)	251
図V-43	包含層土器 II群B類 2a(21)	252
図V-44	包含層土器 II群B類 2a(22)	253
図V-45	包含層土器 II群B類 2a(23)	254
図V-46	包含層土器 II群B類 2a(24)	255
図V-47	包含層土器 II群B類 2a(25)	256
図V-48	包含層土器 II群B類 2a(26)	257
図V-49	包含層土器 II群B類 2a(27)	258
図V-50	包含層土器 II群B類 2a(28)	259
図V-51	包含層土器 II群B類 2a(29)	260
図V-52	包含層土器 II群B類 2a(30)	261
図V-53	包含層土器 II群B類 2a(31)	262
図V-54	包含層土器 II群B類 2d(1)	263
図V-55	包含層土器 II群B類 2d(2)	264
図V-56	包含層土器 II群B類 2d(3)	265
図V-57	包含層土器 II群B類 2d(4)	266
図V-58	包含層土器 II群B類 2d(5)	267
図V-59	包含層土器 II群B類 1f(1)	268
図V-60	包含層土器 II群B類 1f(2)	269
図V-61	包含層土器 II群B類 1f(3)	270
図V-62	包含層土器 II群B類 1f(4)	271

ⅣV-63	包含層土器	Ⅱ群B類	Ⅰf (5)	272	ⅣV-118	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (17)	327
ⅣV-64	包含層土器	Ⅱ群B類	Ⅰf (6)	273	ⅣV-119	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (18)	328
ⅣV-65	包含層土器	Ⅱ群B類	Ⅰf (7)	274	ⅣV-120	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (19)	329
ⅣV-66	包含層土器	Ⅱ群B類	Ⅰf (8)	275	ⅣV-121	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (20)	330
ⅣV-67	包含層土器	Ⅱ群B類	Ⅰf (9)	276	ⅣV-122	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (21)	331
ⅣV-68	包含層土器	Ⅱ群B類	Ⅰf (10)	277	ⅣV-123	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (22)	332
ⅣV-69	包含層土器	Ⅱ群B類	Ⅰf (11)	278	ⅣV-124	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (23)	333
ⅣV-70	包含層土器	Ⅱ群B類	Ⅰf (12)	279	ⅣV-125	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (24)	334
ⅣV-71	包含層土器	Ⅱ群B類	Ⅰf (13)	280	ⅣV-126	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (25)	335
ⅣV-72	包含層土器	Ⅱ群B類	Ⅰf (14)	281	ⅣV-127	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (26)	336
ⅣV-73	包含層土器	Ⅱ群B類	Ⅰf (15)	282	ⅣV-128	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (27)	337
ⅣV-74	包含層土器	Ⅱ群B類	Ⅰf (16)	283	ⅣV-129	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (28)	338
ⅣV-75	包含層土器	Ⅱ群B類	Ⅰf (17)	284	ⅣV-130	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (29)	339
ⅣV-76	包含層土器	Ⅱ群B類	Ⅰf (18)	285	ⅣV-131	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (30)	340
ⅣV-77	包含層土器	Ⅱ群B類	Ⅰf (19)	286	ⅣV-132	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (31)	341
ⅣV-78	包含層土器	Ⅱ群B類	2a1A (1)	287	ⅣV-133	包含層土器	Ⅱ群B類	3b (1)	342
ⅣV-79	包含層土器	Ⅱ群B類	2a1A (2)	288	ⅣV-134	包含層土器	Ⅱ群B類	3b (2)	343
ⅣV-80	包含層土器	Ⅱ群B類	2a1A (3)	289	ⅣV-135	包含層土器	Ⅲ群A類	(1)	344
ⅣV-81	包含層土器	Ⅱ群B類	2a (4) (1)	290	ⅣV-136	包含層土器	Ⅲ群A類	(2)	345
ⅣV-82	包含層土器	Ⅱ群B類	2a (4) (2)	291	ⅣV-137	包含層土器	Ⅳ群	(1)	346
ⅣV-83	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (1)	292	ⅣV-138	包含層土器	Ⅳ群	(2)	347
ⅣV-84	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (2)	293	ⅣV-139	包含層土器	Ⅳ群	(3)	348
ⅣV-85	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (3)	294	ⅣV-140	包含層土器	V群C類	(1)	349
ⅣV-86	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (4)	295	ⅣV-141	包含層土器	V群C類	(2)	350
ⅣV-87	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (5)	296	ⅣV-142	包含層土器	V群C類	(3)	351
ⅣV-88	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (6)	297	ⅣV-143	包含層土器	V群C類	(4)	352
ⅣV-89	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (7)	298	ⅣV-144	包含層土器	V群C類	(5)	353
ⅣV-90	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (8)	299	ⅣV-145	包含層土器	V群C類	(6)	354
ⅣV-91	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (9)	300	ⅣV-146	包含層土器	V群C類	(7)	355
ⅣV-92	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (10)	301	ⅣV-147	包含層土器	V群C類	(8)	356
ⅣV-93	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (11)	302	ⅣV-148	包含層土器	V群C類	(9)	357
ⅣV-94	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (12)	303	ⅣV-149	包含層土器	V群C類	(10)	358
ⅣV-95	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (13)	304	ⅣV-150	包含層土器	V群C類	(11)	359
ⅣV-96	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (14)	305	ⅣV-151	包含層土器	V群C類	(12)	360
ⅣV-97	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (15)	306	ⅣV-152	包含層土器	V群C類	(13)	361
ⅣV-98	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (16)	307	ⅣV-153	包含層土器	V群C類	(14)	362
ⅣV-99	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (17)	308	ⅣV-154	包含層土器	V群C類	(15)	363
ⅣV-100	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (18)	309	ⅣV-155	包含層土器	V群C類	(16)	364
ⅣV-101	包含層土器	Ⅱ群B類	1e (19)	310	ⅣV-156	包含層土器	V群C類	(17)	365
ⅣV-102	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (1)	311	ⅣV-157	包含層土器	V群C類	(18)	366
ⅣV-103	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (2)	312	ⅣV-158	包含層土器	V群C類	(19)	367
ⅣV-104	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (3)	313	ⅣV-159	包含層土器	V群C類	(20)	368
ⅣV-105	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (4)	314	ⅣV-160	包含層土器	(1)	380	
ⅣV-106	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (5)	315	ⅣV-161	包含層土器	(2)	381	
ⅣV-107	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (6)	316	ⅣV-162	包含層土器	(3)	382	
ⅣV-108	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (7)	317	ⅣV-163	包含層土器	(4)	383	
ⅣV-109	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (8)	318	ⅣV-164	包含層土器	(5)	384	
ⅣV-110	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (9)	319	ⅣV-165	包含層土器	(6)	385	
ⅣV-111	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (10)	320	ⅣV-166	包含層土器	(7)	386	
ⅣV-112	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (11)	321	ⅣV-167	包含層土器	(8)	387	
ⅣV-113	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (12)	322	ⅣV-168	包含層土器	(9)	388	
ⅣV-114	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (13)	323	ⅣV-169	包含層土器	(10)	389	
ⅣV-115	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (14)	324	ⅣV-170	包含層土器	(11)	390	
ⅣV-116	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (15)	325	ⅣV-171	包含層土器	(12)	391	
ⅣV-117	包含層土器	Ⅱ群B類	2b (16)	326	ⅣV-172	包含層土器	(13)	392	

図V-173	包含層石器 (14)	393
図V-174	包含層石器 (15)	394
図V-175	包含層石器 (16)	395
図V-176	包含層石器 (17)	396
図V-177	包含層石器 (18)	397
図V-178	包含層石器 (19)	398
図V-179	包含層石器 (20)	399
図V-180	包含層石器 (21)	400
図V-181	包含層石器 (22)	401
図V-182	包含層石器 (23)	402
図V-183	包含層石器 (24)	403
図V-184	包含層石器 (25)	404
図V-185	包含層石器 (26)	405
図V-186	包含層石器 (27)	406
図V-187	包含層石器 (28)	407
図V-188	包含層石器 (29)	408
図V-189	包含層石器 (30)	409
図V-190	包含層石器 (31)	410
図V-191	包含層石器 (32)	411
図V-192	包含層石器 (33)	412
図V-193	包含層石器 (34)	413
図V-194	包含層石器 (35)	414
図V-195	包含層石器 (36)	415
図V-196	包含層石器 (37)	416
図V-197	包含層石器 (38)	417
図V-198	包含層石器 (39)	418
図V-199	包含層石器 (40)	419
図V-200	包含層石器 (41)	420
図V-201	包含層土製品	421
図V-202	包含層土製品 (1)	422
図V-203	包含層土製品 (2)	423
図V-204	包含層土製品 (3)	424
図V-205	包含層土製品 (4)	425
図V-206	包含層土製品 (5)	426
図V-207	包含層土製品 (6)	427
図V-208	盛土遺構・包含層遺物出土分布 (1)	428
図V-209	盛土遺構・包含層遺物出土分布 (2)	429
図V-210	盛土遺構・包含層遺物出土分布 (3)	430
図V-211	盛土遺構・包含層遺物出土分布 (4)	431
図V-212	盛土遺構・包含層遺物出土分布 (5)	432
図V-213	盛土遺構・包含層遺物出土分布 (6)	433
図V-214	盛土遺構・包含層遺物出土分布 (7)	434

V章 自然科学的分析

図VI-1-1	大平遺跡の動物遺体	454
図VI-2-1	日本・朝鮮・極東ロシア・アラスカ州における 表IV-2-1使用の石器原材料産地	462
図VI-2-2	黒曜石原産地	463
図VI-3-1	火成岩分類図	468
図VI-3-2	SiO ₂ -Al ₂ O ₃ 図	471
図VI-3-3	SiO ₂ -MgO図	472
図VI-3-4	K ₂ O-CaO図	472
V章 総括		
図VII-1-1	H-14出土土器集成図	499
図VII-1-2	H-16出土土器集成図	500
図VII-1-3	H-20・49出土土器集成図	501
図VII-1-4	H-23出土土器集成図 (1)	502
図VII-1-5	H-23出土土器集成図 (2)	503
図VII-1-6	H-23出土土器集成図 (3)	504
図VII-1-7	H-25・26出土土器集成図	505
図VII-1-8	H-28・29出土土器集成図	506
図VII-1-9	H-30出土土器集成図	507
図VII-1-10	H-36・P-33出土土器集成図	508
図VII-1-11	H-43出土土器集成図	509
図VII-1-12	P-37・38出土土器集成図	510
図VII-1-13	H-43 PO出土状況	511
図VII-1-14	H-23 PO出土状況 (1)	512
図VII-1-15	H-23 PO出土状況 (2)	513
図VII-1-16	H-30 PO出土状況	514
図VII-1-17	H-14・16・20 PO出土状況	515
図VII-1-18	H-25・26・28 PO出土状況	516
図VII-1-19	H-36・49・37・38 PO出土状況	517
図VII-1-20	土器変遷模式図 (1)	523
図VII-1-21	土器変遷模式図 (2)	524
図VII-1-22	土器変遷模式図 (3)	525
図VII-1-23	土器変遷模式図 (4)	526
図VII-1-24	土器変遷模式図 (5)	527
図VII-1-25	土器変遷模式図 (6)	528
図VII-1-26	土器変遷図 (1)	529
図VII-1-27	土器変遷図 (2)	530
図VII-1-28	土器変遷図 (3)	531
図VII-1-29	土器変遷図 (4)	532
図VII-1-30	土器変遷図 (5)	533
図VII-1-31	土器変遷図 (6)	534
図VII-1-32	土器変遷図 (7)	535
図VII-1-33	土器変遷図 (8)	536
図VII-1-34	大平遺跡 V群C類土器集成図	538
図VII-1-35	文様模式図	540
図VII-1-36	V群C類土器の類別	543
図VII-1-37	V群C類土器変遷図	545
図VII-2-1	石製品	553
図VII-3-1	黒曜石製品産地同定試料	555
図VII-4-1	滑石等石製品	557

目 次

I 緒言

表I-1	年度別遺構数・遺物点数一覧	6
表I-2	出土土器点数一覧	6
表I-3	出土石器点数一覧	6

II 遺跡の位置と環境

表II-1	木古内町の遺跡一覧	10
-------	-----------	----

IV 焼土・剥片集中・礫集中と出土遺物、盛土遺構

表IV-1	遺構規模一覧	133
表IV-2	焼土・剥片集中・礫集中出土遺物一覧	136
表IV-3	遺構出土遺物一覧	141
表IV-4	遺構出土掲載土器一覧	142
表IV-5	剥片集中掲載石器一覧	143
表IV-6	剥片集中接合資料一覧	144

V 盛土遺構と包含層の出土遺物

表V-1	盛土遺構・包含層掲載復原土器一覧	435
表V-2	盛土遺構・包含層掲載拓本一覧	439
表V-3	盛土遺構・包含層掲載石器等一覧	441

VI章 自然科学的分析

表VI-1-1	同定された分類群一覧	449
表VI-1-2	各分類群の同定標本数	450
表VI-1-3	同定結果一覧	451
表VI-2-1-1	各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	463
表VI-2-1-2	黒曜石製遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	465
表VI-2-2	湧別川河口域の河床から採取した247個の黒曜石円礫の分類結果	466
表VI-2-3	常呂川(中ノ島～北見大橋)から採取した661個の黒曜石円礫の分類結果	466
表VI-2-4	サナブチ川から採取した80個の黒曜石円礫の分類結果	466
表VI-2-5	金華地区から採取した20個の黒曜石円礫の分類結果	466
表VI-2-6	生田原川支流支線川から採取した19個の黒曜石円礫の分類結果	466
表VI-2-7	生田原川支流大黒沢から採取した5個の黒曜石円礫の分類結果	466
表VI-2-8	木古内町大平遺跡出土黒曜石製石器の元素比分析結果	467
表VI-2-9	木古内町大平遺跡出土黒曜石製石器の産地分析結果	467
表VI-3-1	火山岩分類表	468
表VI-3-2	化学分析表	471
表VI-3-3	原産地対比表	471

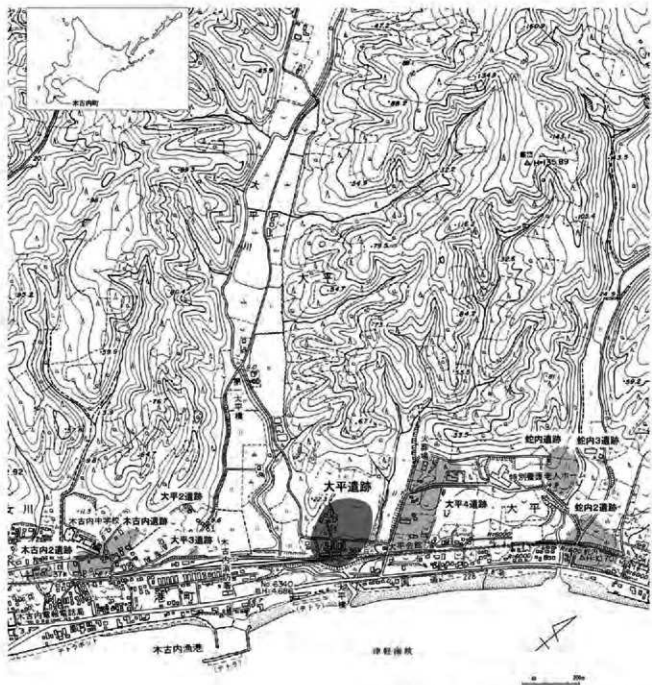
VII章 総括

表VII-1-1	復原土器属性表(1)～(3)	476
表VII-1-2	復原土器観察表	480
表VII-2-1	竪穴住居跡出土すり石一覧	551
表VII-3-1	黒曜石製品原産地同定試料一覧	555
表VII-4-1	滑石製品産地分析試料一覧	558

I 緒 言

1 調査要項

事業名	北海道新幹線建設事業地区における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査及びそれに関連する業務
事業委託者	独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局
事業受託者	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名	大平遺跡（北海道教育委員会登録番号：B-05-07）
所在地	上磯郡木古内町字大平63
調査期間	平成22年5月6日～平成23年3月31日（発掘期間：平成22年5月6日～11月5日） 平成23年4月1日～平成24年3月31日（発掘期間：平成23年5月9日～11月11日） 平成24年4月1日～平成29年3月31日（整理期間）
調査面積	4,375m ²
調査体制	<p>理事長 坂本 均（平成22～27年度） 越田賢一郎（平成27・28年度）</p> <p>副理事長 畑 宏明（平成24～26年度） 中田 仁（平成27・28年度）</p> <p>専務理事 松本昭一（平成22年度） 中田 仁（平成23～26年度） 山田寿雄（平成27・28年度）</p> <p>常務理事 畑 宏明（平成22・23年度） 千葉英一（平成24～26年度） 長沼 孝（平成27・28年度）</p> <p>第1調査部 部長 千葉英一（平成22～26年度） 長沼 孝（平成27・28年度）</p> <p>第2調査部 部長 西田 茂（平成22年度） 三浦正人（平成23～28年度）</p> <p>第1調査部第3調査課 課長 鈴木 信（平成22年度）</p> <p>第2調査部第2調査課 課長 熊谷仁志（平成23年度）（平成23年度発掘担当者）</p> <p>第2調査部第1調査課 課長 熊谷仁志（平成24・25年度） 中山昭大（平成26・27年度）</p> <p>第1調査部第1調査課 課長 中山昭大（平成28年度）</p> <p>主査 立川トマス（平成22・23年度）（平成22・23年度発掘担当者）</p> <p>主査 鈴木宏行（平成23年度）</p> <p>主査 芝田直人（平成22・23年度）（平成22年度発掘担当者）</p> <p>主査 酒井秀治（平成25～28年度）</p> <p>主任 酒井秀治（平成22～24年度）（平成22・23年度発掘担当者）</p> <p>主任 佐藤和雄（平成22・23年度）（平成22・23年度発掘担当者）</p> <p>主任 熊谷仁志（平成26～28年度）</p>



(平成4年日本測量協会公認札幌工事業務所が調査した1:10000図を加工して使用)

図I-1 大平遺跡の位置

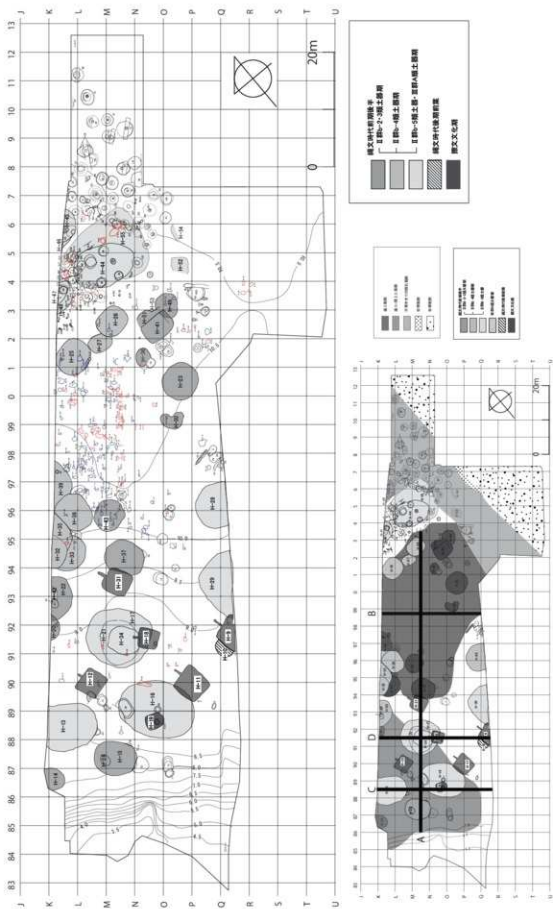


图 I-2 大平遺跡構位圖

2 調査にいたる経緯

「北海道新幹線」事業は、全国新幹線鉄道整備法（昭和45年法律第71号）に基づき、整備計画が定められている。平成10年1月には、政府・与党整備新幹線検討委員会において、新規着工区間として3線3区間の着工が認められ、平成12年12月の同委員会では、すでに着工している区間と新たに着工する区間を併せて、平成13年から3線6区間として整備を推進することとなった。平成17年4月27日、北海道新幹線・新青森-新函館間の工事実施計画認可が国土交通省から独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、「鉄建機構」という）へ交付された。

鉄建機構は、北海道教育委員会（以下、「道教委」という）に北海道新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財保護のための事前協議書を提出した。それを受けて道教委は路線内および付帯施設建設予定地内の埋蔵文化財包蔵地の試掘調査を実施し、木古内町内では蛇内2遺跡、大平遺跡、大平4遺跡、木古内遺跡、木古内2遺跡の5遺跡について工事計画の変更が困難な場合は発掘調査が必要とされた。平成21～23年度にかけて（財）北海道埋蔵文化財センター（以下、「センター」という）により、木古内町内の5遺跡32,626㎡の発掘調査が行われた。

3 調査の経過

(1) 発掘経過

平成22年度：4月中旬より重機による表土除去を開始した。5月6日から調査を開始し、基準杭・方格杭打設を行った。93～97ラインは電柱が撤去されていなかったことから調査を行わず、撤去後にOライン以降の調査を行った。遺跡全体の堆積状況を把握するためB調査坑の再調査、北東-南西方向1本（Mライン+2m）および北西-南東方向3本（88ライン+2m・91ライン+3m・98ライン+3m）に幅1mのトレンチ調査を行った。その結果、大型の竪穴式住居跡や遺物が多量に出土する盛土遺構などの遺構が多数検出されることが判明した。このことから、平成22年度の調査予定範囲は2ラインまでの2,910㎡であったが、K～O93～97区の400㎡および97ライン以降の遺構調査範囲365㎡を平成23年度に行うこととして、養生等を行い11月5日に調査を終了した。平成22年度の調査終了面積は2,145㎡である（図Ⅲ-1）。

平成23年度：5月9日から調査を開始し、基準杭・方格杭打設を行う。平成22年度に未了だった765㎡の調査から再開した。竪穴式住居跡等の遺構が多数検出され、盛土遺構からは多量の遺物が出土した。2ライン以降の範囲は建物の撤去が8月上旬にずれ込んだため、8月下旬から調査を開始した。また、隣接するJR釧電区分所前の355㎡が追加となり、9月中旬から調査を開始した。地表面は削平され包含層はほとんど残っていないが、竪穴住居跡や多数のフラスコ状ピットなどを検出した。調査は11月11日に終了した。平成23年度の調査終了面積は2,230㎡で、2年間の調査面積は4,375㎡となる（図Ⅲ-1）。

(2) 整理経過（盛土遺構・包含層分）

平成22年度：現地調査中に遺物水洗、遺物一次分類、遺物台帳作成、遺物注記、11月から整理作業開始。遺物注記、破片接合、土器復原、遺物実測・墨入れ、遺構素図作成、写真整理。

平成23年度：現地調査中に遺物水洗、遺物一次分類、遺物台帳作成、遺物注記。

4月1日から整理作業開始。遺物注記、破片接合、土器復原、遺物実測・墨入れ、遺構素図作成、写真整理・撮影。

平成24～28年度：4月1日から整理作業開始。破片接合、土器復原、遺物実測・墨入れ、図版素図作成、写真整理・撮影、図版作成、原稿執筆、遺物収納。

4 調査結果の概要

遺跡は、J R 木古内駅から北東へ約2 km、大平川と孫七川に挟まれた低位海岸段丘上に立地し、標高は8～11mである。遺跡の周知範囲はこの段丘の海側、約40,000m²の広さになる。周知範囲の中にはJ R 津軽海峡線が通っており、昭和5年に当時の上磯線が上磯駅から木古内駅まで延伸開業された際の建設工事によってこの範囲は削平されている。なお、平成28年3月26日にJ R 津軽海峡線の函館～木古内間は道南いさりび鉄道に移管されている。

今回の調査報告範囲は周知範囲の南東側、道南いさりび鉄道（旧J R 津軽海峡線）と町道大平2線に挟まれた場所になる。調査前は宅地、牛舎、鶏舎、倉庫として利用されており、地表面はこれらのために一部削平されていた。調査範囲東側の道南いさりび鉄道の近くは、海に向かってのぼる斜面を削平して平坦にされている。

北海道新幹線にかかる発掘調査は平成21年度に町道大平2線を挟んだ北側411m²の調査を行っており、平成22・23年度調査面積の4,375m²を加えると4,786m²になる。また、平成25年度には高規格幹線道路函館江差自動車道の建設に伴う発掘調査でJ R 津軽海峡線より海側の1,700m²の調査が行われている。これらを合わせた発掘調査完了面積は6,486m²となり、周知範囲面積の約16%になる。

平成21年度の調査では、縄文時代前期後半の竪穴住居跡8軒、土坑2基、フラスコ状ピット1基を検出し、土器15,574点、石器等7,220点、合計22,794点が出土している。平成22年度に報告書が刊行されている（北埋調報280）。

平成22・23年度調査では、竪穴住居跡45軒、土坑50基、フラスコ状ピット63基、柱穴状小ピット36基、Tピット2基、焼土93か所、剥片集中121か所、礫集中2か所、盛土遺構1か所を検出した。遺物は土器1,185,504点、石器等571,988点、合計1,757,492点が出土している。

平成27年度に遺構編として竪穴住居跡45軒、土坑50基、フラスコ状ピット63基、Tピット2基、柱穴状小ピット36基の報告を行った（北埋調報321）。主体となる縄文時代前期後半の竪穴住居跡や土坑・フラスコ状ピットのほか、擦文文化期の竪穴住居跡が6軒検出されている。

本報告は、盛土遺構・包含層編として、盛土遺構1か所・焼土93か所・剥片集中121か所・礫集中2か所とその出土遺物および包含層出土遺物の報告を行う。焼土・剥片集中・礫集中からは土器859点、石器205,999点、土製品4点、石製品1点、合計206,863点が出土した。焼土ではフローテーション作業を行い、焼骨片や炭化物を検出している。剥片集中では、多量の真岩の剥片のほかに両面調整石器や礫器・石核などが共存したことから接合作業を行い、多数の接合資料を得た。1つの接合資料で417点が接合したものがあつた。

盛土遺構および包含層からは、土器973,036点、石器211,946点、土製品774点、石製品236点、合計1,185,992点が出土した。土器は縄文時代前期後半の円筒土器下層式のもの950,645点（97.7%）出土し、Ⅱ群B-3～5群に分類されるものが727,782点（76.6%）を占める。ほかには晩期後葉9,974点（1.0%）、中期前葉6,663点（0.7%）、後期前葉4,145点（0.4%）となっている。復原できた個体は787個体となった。石器は石鏃・つまみ付ナイフ・スクレイパーなどの剥片石器、たたき石・すり石（北海道式石冠・扁平打製石器を含む）・石斧・凹み石などの礫石器が多く出土している。土製品は有孔土製円板・擦り切り土器片・焼成粘土塊、石製品は異形石器・垂飾・珠状耳飾り・軽石製石製品（北海道式石冠状・すり石状など）などが出土している。（酒井）

表 I - 1 年度別遺構数・遺物点数一覧

年度	調査面積 (㎡)	遺構名									遺物点数				
		壁穴住居跡	土坑	フラスコ状ビット	Tビット	柱穴状ビット	焼土	割片集中	雑集中	土器	石器等	小計	合計		
平成21年度	411	8	2	3	0	0	0	0	0	0	遺構	7,473	2,645	10,118	22,794
											包含層	8,101	4,515	12,616	
平成22-23年度	4,375	45	30	63	2	36	93	121	2	2	遺構	15,524	7,220	22,794	1,757,492
											壁穴住居跡	189,689	142,684	332,373	
											土坑	16,178	6,925	23,103	
											フラスコ状ビット	4,368	4,086	8,454	
											Tビット	150	91	241	
											柱穴状ビット	446	20	466	
											焼土	275	3,298	3,573	
											割片集中	588	202,611	203,199	
											雑集中	0	131	131	
											小計	211,694	359,896	571,590	
											遺土遺構・包含層	973,810	217,182	1,190,992	
小計	1,185,504	571,008	1,757,492												
合計	4,786	53	52	64	2	36	93	121	2	2	合計	1,201,078	579,208	1,780,286	

表 I - 2 出土土器点数一覧

遺構名	分類																												合計	
	1A	1B-1	1B-4	2A	2B	2C	2D	2E	2F	2G	2H	2I	2J	2K	2L	2M	2N	2O	2P	2Q	2R	2S	2T	2U	2V	2W	2X	2Y		2Z
壁穴住居跡	1			34		75,941	261	6,739	64,677	19,635	12,839	2,289	69																	
土坑	1	1	13	19	3,202	397	512	3,843	4,898	1,783	15	1												111	7	11	1	1	1	
フラスコ状ビット				7	1,801							399	399	1,698	94															
Tビット					8	112																								
柱穴状ビット													144																	
小計	1	1	14	44	10,042	364	11,264	19,635	24,816	16,112	7,615	2,162	9	307	8	4	46	9	393	429	8	9	101	1	14	8	1	1	1	
焼土																														
割片集中																														
遺土遺構・包含層	38	7	129	129	197,077	1,899	25,281	267,868	191,111	296,961	4,863	28	4,146	77	64									8,674	942	8	7	842	13	113
小計	38	7	129	129	197,077	1,899	25,281	267,868	191,111	296,961	4,863	28	4,146	77	64									8,674	942	8	7	849	13	113
合計	11	10	161	168	200,120	2,797	32,071	374,677	219,678	301,714	4,891	28	5,112	78	69	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	

表 I - 3 出土土器点数一覧

遺構名	分類																												合計
	石	石	石	ナイフ	つまみ付ナイフ	スウレイバー	板鍬	板鍬調整石器	片フレイク	Uフレイク	削片	石のり	石のり切り残片	た	石	石	石	すり石	すり石	すり石	すり石	すり石	すり石	すり石	すり石	すり石	すり石	すり石	
壁穴住居跡	111	6	15	11	111	611	1	121	667	636	174,863	67	3	694	11	11	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119
土坑	3	3	1	1	14	63		8	93	30	5,895	5	1	62	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
フラスコ状ビット	8	5	8	1	11	31	1	8	31	36	1,861	1	1	89	8	8	14	38	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
Tビット																													
柱穴状ビット																													
小計	128	16	24	12	136	715	1	137	744	736	176,759	76	4	817	14	14	136	136	136	136	136	136	136	136	136	136	136	136	136
焼土																													
割片集中	8	8	2	1	10	1	1	10	10	10	101,271			1	8														
雑集中																													
遺土遺構・包含層	106	104	112	19	638	3,819	1	661	3,130	3,413	199,252	107	10	916	214	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119
小計	204	104	117	30	810	5,899	1	870	5,630	5,833	261,771	107	10	916	214	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119
合計	167	104	167	31	817	5,899	1	871	5,711	5,871	261,941	108	10	916	214	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

大平遺跡の所在する上磯郡木古内町は、北海道西部の渡島半島南側に位置する。津軽海峡に面し、亀田半島と松前半島の境目にあたる。北東側で北斗市、北側で厚沢部町、西側で上ノ国町、南西側で知内町と町界を接している（図Ⅱ-1）。函館市からは西へ約40kmである。町域はおよそ東西22.5km、南北17.7km、総面積は221.89km²、人口は平成28年12月末で4,430人である。南東側は津軽海峡に面し、北～北西側は300～700m級の渡島丸山、桂岳、梯子岳、瓜谷山、焼山、尖岳、袴腰岳などの山々に囲まれていて、町域の約9割（約199km²）が山岳・丘陵地帯である（図Ⅱ-1）。市街中心地は木古内川、佐女川河口周辺の平坦部に形成されている。平坦地は、海岸線の海岸段丘上と津軽海峡に注ぐ河川によって形成された河岸段丘上に帯状にある。地質図によると、これらの段丘は泥岩砂質シルト岩互層・砂岩及び酸性凝灰岩で形成された中新世後期の厚沢部層などや、礫・砂及び泥で形成された中位段丘堆積物である（図Ⅱ-2）。この上に多くの遺跡が立地している。

木古内の地名は、アイヌ語の「リコナイ（高く昇る源）」、または「リロナイ（潮の差し入る川）」から転訛したものと言われている。しかし「リコナイ」の記述が明治以前にみられないことから「リロナイ」が語源と考えるのが正しいとされる（木古内町ホームページ）。角川日本地名大辞典によると、大平の地名は昭和4年につけられ、由来は江戸期の松浦武四郎『竹四郎廻浦日記』に「ヲヒラ川 スフケサワの川ノ名也」と見え、地内は初めスフケサワと呼ばれ、そこに流れるヲヒラ川が大平に転じたものと思われる、とある。「ヲヒラ」はアイヌ語の地形地名「o-pira: (川) 口にある崖」があてられる。遺跡の南側にある段丘崖を指すと考えられる。

大平遺跡は、JR木古内駅から北東へ約2km離れたところに位置する。大平川と孫七川に挟まれた海岸段丘上に立地している。調査範囲は海岸線からは約0.2km入っていて、標高は8～12mほどの平坦地にある。遺跡の指定範囲はおおよそ40,000m²である。地質図によると、遺跡は礫・砂及び泥で形成された中位段丘堆積物の上に立地している（図Ⅱ-2）。遺跡からは南西側に松前半島の燈明岳、岩部岳、大千軒岳など、北東側には函館山や渡島丸山などが見え、天気の良い時は南東側に青森県の下北半島を望むことが出来る。

2 周辺の遺跡

木古内町内の遺跡は、海岸線に沿った段丘上に集中することが知られている。平成28年度末現在、木古内町内で周知されている遺跡は61か所である（図Ⅱ-3）。このうち、これまでに調査あるいは一部調査の行われた遺跡は31遺跡である（表Ⅲ-1）。近年、緊急発掘調査が増えており、農道整備事業で9遺跡、砂利採取事業で2遺跡、北海道新幹線建設事業で6遺跡、高規格道路建設事業で12遺跡の調査が行われている。大平遺跡の周辺に所在する遺跡は、大平2遺跡（21）、大平3遺跡（22）、大平4遺跡（29）、蛇内遺跡（8）、蛇内2遺跡（19）、蛇内3遺跡（20）、札苺遺跡（4）、札苺2遺跡（30）、木古内遺跡（3）、木古内2遺跡（28）がある。北海道新幹線建設関係で調査が行われた遺跡は、本遺跡のほか、木古内町市街地側に木古内遺跡・木古内2遺跡・新道4遺跡（27）、北斗市側に大平4遺跡・蛇内2遺跡である。（ ）は登録番号。上記のうち調査された遺跡について概略を記す。

木古内遺跡（3）：平成22・23年度に北海道新幹線建設に伴う発掘調査が行われた。調査面積は12,020m²である。主に縄文早期後半・前期後半・後期前葉・擦文文化期の遺構・遺物が確認されてい

る。遺構は、竪穴住居跡31軒、土坑152基などのほか、擦文文化期とみられる溝状遺構1か所がみつまっている（北埋調報304）。擦文文化期の竪穴住居跡を木古内町で初めて確認している。

札内遺跡（4）：昭和46～48年度に学術調査353㎡（北海道開拓記念館1976）、昭和48年度に国道拡幅に伴う調査789㎡（木古内町教育委員会1974）、昭和60年度に津軽海峡線建設工事に伴う調査1,753㎡（北埋調報34）が行われている。主に縄文晩期前葉～中葉の遺構・遺物が確認されており、竪穴住居跡2軒、土坑64基などがみつまっている。

大平遺跡（7）：平成21～23年度に北海道新幹線建設に伴う発掘調査が行われた。調査面積は4,786㎡である。主に縄文前期後半・晩期中葉・擦文文化期の遺構・遺物を確認している。平成21年度に調査を行った範囲については、報告書（北埋調報280）が刊行されている。平成22・23年度に調査を行った範囲は、平成27年度に遺構編（北埋調報321）を刊行し、本報告が盛土遺構・包含層編となる。

高規格道路建設事業では、平成25年度に調査が行われた。本報告範囲の津軽海峡線を挟んだ海側にあたる。調査面積は1,700㎡である。主に縄文後期後葉・晩期前葉・中葉の遺構・遺物が確認されている。遺構は、土坑8基、小ピット2基、焼土4か所である（「調査年報」25）。平成28年度に報告書が刊行される（北埋調報329）。

蛇内遺跡（8）：平成12年度に広域営農団地農道整備に伴い1,200㎡の発掘調査が行われた。縄文前期・中期の遺構・遺物が確認されている。遺構は竪穴住居跡8軒、土坑39基、捨て場遺構などが確認されている（木古内町教育委員会1997）。

蛇内2遺跡（19）：平成21～23年度に北海道新幹線建設に伴う発掘調査が行われた。調査面積は11,357㎡である。縄文早期後半・前期・中期後半・後期前葉の遺構・遺物が確認されている。遺構は、竪穴住居跡15軒、土坑87基、フラスコ状土坑9基が確認されている（北埋調報281・292）。

新道4遺跡（27）：昭和59～61年度に津軽海峡線建設、平成25年度に北海道新幹線建設に伴う発掘調査が行われた。調査面積は15,778㎡である。旧石器時代、縄文早期～晩期の遺構・遺物を確認している。竪穴住居跡64軒、土坑381基などのほか、後期前葉の盛土遺構がみつまっている（北埋調報33・43・52・320）。

木古内2遺跡（28）：平成22・23年度に北海道新幹線建設に伴う発掘調査が行われた。調査面積は1,280㎡である。主に縄文前期後半・後期前葉の遺構・遺物が確認されている。遺構は、縄文前期後半の竪穴式住居跡6軒、剥片集中1か所がみつまっている（北埋調報278・293）。

大平4遺跡（29）：平成21・22年度に北海道新幹線建設に伴う発掘調査が行われた。調査面積は3,183㎡である。縄文早期後半・前期後半・晩期中葉の遺構・遺物を確認している。遺構は、竪穴住居跡2軒、土坑28基、剥片集中14か所が確認されている（北埋調報280・292）。

高規格道路建設事業では、平成24～26年度に調査が行われた。調査面積は15,593㎡である。遺構は、竪穴住居跡12軒、土坑22基、Tピット4基、焼土31か所、剥片集中15か所が確認されている（「調査年報」25・26・27）。平成28年度に報告書が刊行される（北埋調報331）。

（酒井）

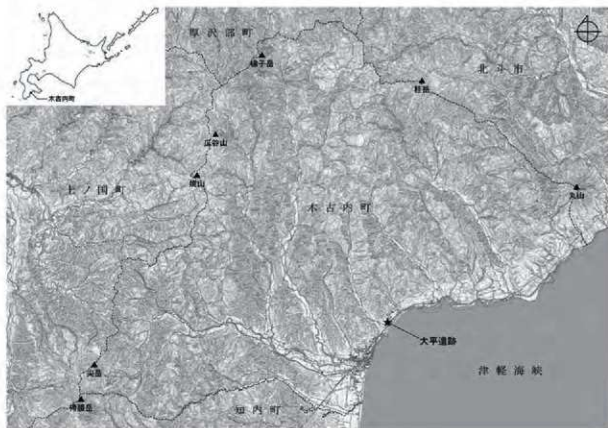


図 1-1 遺跡の位置と木古内町の地形 (60万分の1) (平成18年国土地理院発行の数値地図25000「面数」を加工して使用)

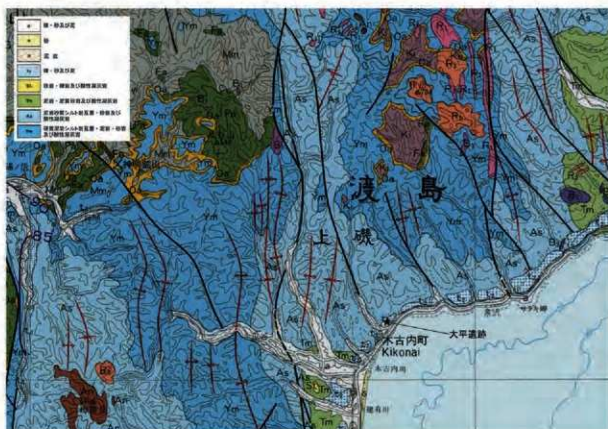
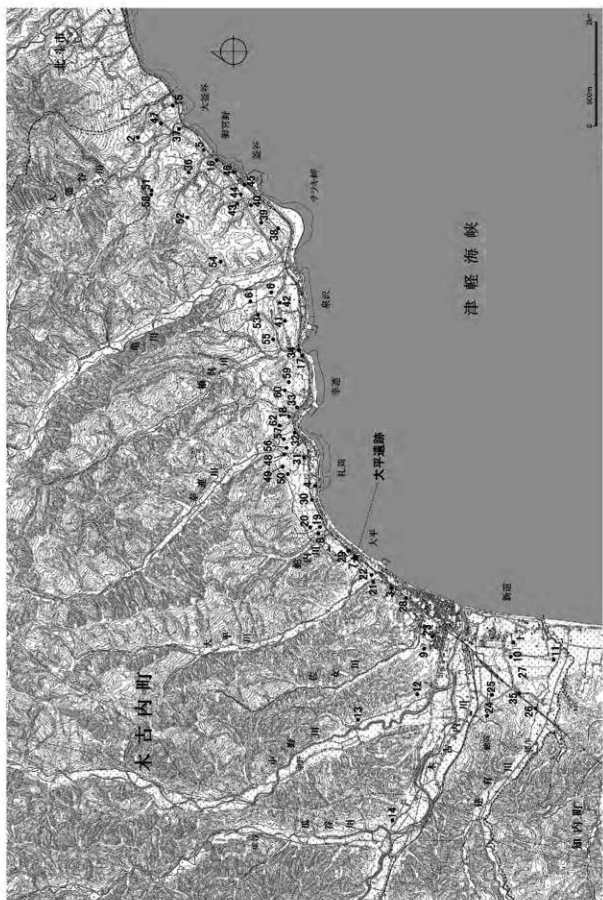


図 2-2 木古内町の地質図 (60万分の1) (昭和59年通産省資源工業技術院地質調査所発行の1:200,000地質図「面数及び渡島半島」を加工して使用)

表Ⅱ-1 木古内町の遺跡一覧

登録番号	遺跡名	種別	主な時期	調査歴(報告年)
B-05-01	新道遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-02	大釜谷遺跡	遺物包含地	縄文(中期・後期)	
B-05-03	木古内遺跡	集落跡	縄文(前期・中期)・弥文	2010・2011 道埋文(2013) 1971・1972 北海道開拓記念館(1976) 1973 町教委(1974) 1983 道埋文(1986) 1991～1993 町教委(1999)
B-05-04	札幌遺跡	集落跡	縄文(晩期)・近世	
B-05-05	釜谷遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)・弥文	
B-05-06	泉沢遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-07	太平遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)・弥文	2009～2011・2013 道埋文(2011・2016・2017本書・2017)
B-05-08	蛇内遺跡	集落跡	縄文(前期～後期)	2000 町教委(2004)
B-05-09	新栄町遺跡	遺物包含地	縄文(晩期・晩期)	
B-05-10	新道3遺跡	集落跡	縄文(中期・後期)	1996 町教委(1997)
B-05-11	新道2遺跡	集落跡	縄文(前期)	1997～2002 町教委(1999・2004)
B-05-12	中野A遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-13	中野B遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-14	瓜谷遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-15	大釜谷2遺跡	遺物包含地	縄文(前期・中期)	
B-05-16	釜谷2遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-17	橋良遺跡	遺物包含地	縄文・続縄文(前半期)	
B-05-18	幸連遺跡	遺物包含地	縄文(中期・後期)	
B-05-19	蛇内2遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)	2009～2011 道埋文(2011・2012)
B-05-20	蛇内3遺跡	遺物包含地	縄文(晩期・晩期)	
B-05-21	太平2遺跡	遺物包含地	縄文(晩期・晩期)	
B-05-22	太平3遺跡	遺物包含地	縄文(中期)	
B-05-23	高校高台遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-24	鶴岡遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-25	鶴岡2遺跡	遺物包含地	縄文(前期～後期)・続縄文	1988・1989 町教委(1989・1990)
B-05-26	壁川遺跡	遺物包含地	縄文(早期～後期)	1984 道埋文(1986)
B-05-27	新道4遺跡	集落跡	旧石器・縄文(早期～晩期)・続縄文	1984～1986・2013 道埋文(1986・1987・1988・2015)
B-05-28	木古内2遺跡	集落跡	縄文(前期)	2010・2011 道埋文(2011・2012)
B-05-29	太平4遺跡	集落跡	縄文(早期～中期・晩期)	2009・2010・2012～2014 道埋文(2011・2012・2017)
B-05-30	札幌2遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-31	札幌3遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-32	札幌4遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-33	幸連2遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-34	橋良2遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-35	壁川2遺跡	集落跡	縄文(前～晩期)	1985・1986 道埋文(1987)
B-05-36	釜谷3遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	
B-05-37	釜谷4遺跡	遺物包含地	旧石器・縄文(早期～後期)	1990 町教委(1991)
B-05-38	亀川遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	
B-05-39	亀川2遺跡	遺物包含地	縄文(中期～晩期)	1995 町教委(1998)
B-05-40	亀川3遺跡	集落跡	縄文(早期～後期)	1995 町教委(1998)
B-05-41	泉沢2遺跡	集落跡	縄文(前期～晩期)・弥文	1998～2001 町教委(2003・2004)
B-05-42	泉沢3遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	1996 町教委(1998)
B-05-43	亀川4遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-44	釜谷5遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)	1993 町教委(1995)
B-05-45	釜谷6遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-46	釜谷7遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-47	大釜谷3遺跡	集落跡	縄文(前期～晩期)	2001 町教委(2003)
B-05-48	札幌5遺跡	遺物包含地	縄文(早期・前期・後期)	2011 道埋文(2012)
B-05-49	札幌6遺跡	集落跡	縄文(中期・後期)	2011 道埋文(2013)
B-05-50	札幌7遺跡	集落跡	縄文(中期・後期・晩期)	2013～2016 道埋文
B-05-51	釜谷8遺跡	遺物包含地	縄文(早期・中期・後期)	2011・2012 道埋文(2013)
B-05-52	釜谷9遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-53	泉沢4遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-54	亀川5遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	2014 道埋文(2017)
B-05-55	泉沢5遺跡	集落跡	縄文(中期・後期)	2014 道埋文(2017)
B-05-56	札幌8遺跡	集落跡	旧石器・縄文(前期)	2014 道埋文
B-05-57	札幌9遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-58	釜谷10遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	2016 道埋文
B-05-59	幸連3遺跡	遺物包含地	縄文(中期)	2015 道埋文
B-05-60	幸連4遺跡	遺物包含地	縄文(前期後半・中期後半～後期前)	2015・2016 道埋文
B-05-61	泉沢6遺跡	遺物包含地	縄文(早期後半)	2015・2016 道埋文
B-05-62	幸連5遺跡	集落跡	縄文(中期)	2016 道埋文

町教委:木古内町教育委員会, 道埋文:北海道埋蔵文化財センター



図II-3 木古内町内の通路

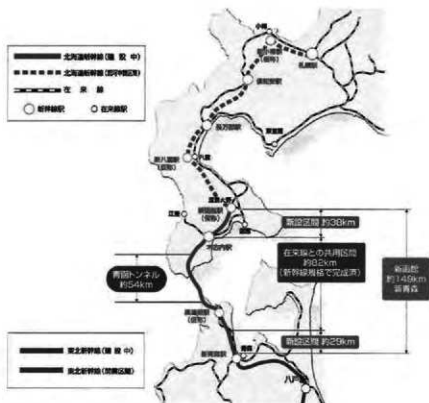


図 I-4 北海道新幹線概要図

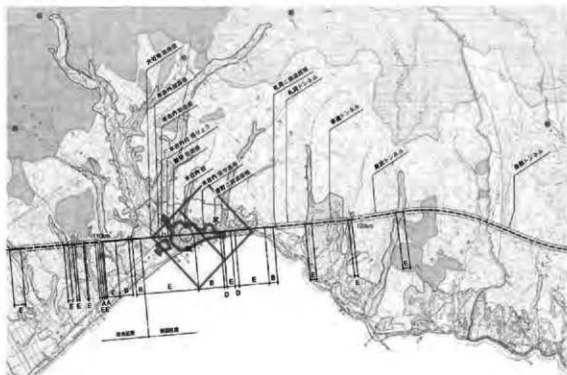


図 I-5 北海道新幹線木古内町環境図

III 調査の方法

1 調査範囲

(1) 調査区の設定と座標値

平成21年度調査の際に用いた調査区を踏襲して調査区の設定を行っている。

平成21年度調査の横ラインは、北海道新幹線のセンターラインを方格設定の基線とし、基線をMラインとして山側をLライン、海側をNラインとして順次5mごとにアルファベットを用いて平行にラインを設定していた。縦ラインは、方格設定の原点として115k300m（調査方格名称M40）を使用し、木古内駅側へ向かってアラビア数字で5mごとに基線に対して直角になるようにラインを設定していた。方格の間隔は5mとした。方格を区画する線にはアルファベット（北東-南西方向）とアラビア数字（北西-南東方向）を与え、調査区（グリッド）の名称は方格の北西角で交差する2つの線名を合わせて読む（例：M90）。さらに、5m方格を2.5m四方に分割して、反時計回りに西角からa・b・c・dと呼ぶ小調査区（小グリッド）を設置し、調査の便宜を図った。

平成22・23年度の調査区は平成21年度の調査区を木古内駅側に延長して設定した。調査範囲の方格設定に際し、横ラインはそのまま使用し、縦ラインは0よりも少なくなってしまうことから0の前を99とし、以降木古内駅側に向かって98、97、96…として設定した。

基線上の2点の平面直角座標は第X I系で、以下のとおりである。

基線上 M0杭：115 k 100m X=-256493.998 Y=16464.971

北緯41度41分26.55157秒 東経140度26分52.06337秒

基線上 M90杭：115 k 050m X=-256532.385 Y=16432.933

北緯41度41分25.30961秒 東経140度26分50.67402秒

この平面直角座標は「世界測地系」に基づいた「測地成果2000」の座標である。

2 土工

(1) 掘削

掘削作業には主に移植ゴテ、ねじり鎌を使用した。遺構・遺物の検出状況に応じて、竹べら・竹串を使用して遺構・遺物を傷つけないように配慮して掘削した。精査・清掃の際には笊筥、ブラシなどを併用した。移植ゴテでは掘ることが困難な場所や、遺構・遺物の見られない範囲、攪乱などではスコップを併用した。

遺構は乾燥や降雨による流水によって崩壊しやすいため、ジョウロや噴霧器による適度な散水などの乾燥や降雨への対策をとりながら調査を進めた。また、黒色腐植土は水分を含まず滑りやすくなるため、排土場に来る道や通路に歩み板や麻袋を敷いて転倒防止に努めた。今回の調査は線路に隣接するため、風による遺物袋などの飛散には十分な注意をはらって行った。

(2) 埋め戻し

調査終了後に建設工事が行われることから、埋め戻しは行っていない。

3 測量と記録

(1) 測量・図化

5m×5m方眼の交点に打設した方格杭を平面測量の基準とした。20mごとに打設した基準杭にはそれぞれの杭に打たれた釘の標高を記入し、この標高を水準測量の基準とした。水準測量にはオート

レベルと1mm目盛のアルミ製スタッフを用いて、基準杭の標高と測量対象の比高を直接観察した。平面測量は測量杭を基準として手測りによって行った。

遺構・遺物の出土状況等の実測図は、B3版セクションフィルムに基本的に1/20縮尺で記録した。遺物出土状況等の詳細図については1/10縮尺を用い、図版にはそれぞれスケールを付した。(酒井)

(2) 現場での撮影

a 撮影方法

発掘現場での撮影は6×7インチ判と35mm判カメラを使用した。また、写真整理用としてデジタルカメラを使用した。基本的にモノクロ、カラーリバーサルとも2コマを露出で撮影し、1セットとした。撮影の際は撮影方向、出土位置など出来るだけ多くの情報を入れることに留意した。

b 撮影機材

撮影機材・フィルムは下記を使用した。

カメラ：Mamiya RZ67PRO II (6×7インチ判)、ニコンF3 (35mm判)、

カシオE X-Z2000・E X-Z80・E X-H30 (デジタルカメラ)

フィルム：コダックT-Max100 (6×7判モノクロ)、フジフィルムネオパン100アクロス (6×7判カラーリバーサル)、フジフィルムプロビア100F (35mm判カラーリバーサル)

c 撮影データ

発掘現場での撮影データ(カットNo、撮影日、被写体、出土位置、層位、撮影方向、フィルム種類)を野帳に記入し、デジタルカメラの画像と照合して写真台帳を作成した。(立川)

4 整理の方法

(1) 一次整理作業

遺跡内より出土した土器・石器等は、野外作業と並行して現地で水洗・乾燥を行った。水洗はボンブブラシや歯ブラシなどを使用して、遺物に付着した土を洗い落とした。乾燥は新聞紙等を敷いた乾燥かごに遺物を入れて、屋外もしくは屋内において行った。室内では除湿機などを用いて乾燥を促した。水洗・乾燥の終了した遺物は、収集の単位ごとに分類して遺物名と点数を決定し、それぞれに遺物番号を与えた後に遺物台帳に登録した。

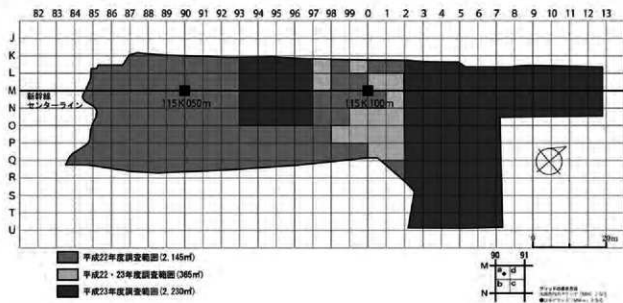
遺物台帳は、土器・土製品と石器等に分けて作成している。B5判の様式を印刷して手作業で記入し、遺構・包含層を分けて全遺物を登録した台帳を作成した。台帳には遺構またはグリッド名のほか、遺物番号・取上日・層位・遺物名・分類・材質(石器等)・点数その他を記入した。台帳登録の終わった遺物は、台帳と同一の内容を記入した遺物カードと共に遺物番号ごとにチェック付ポリ袋に納めた。遺物カードは土器等と石器等で色を分けている。土器を「水色」石器等を「ピンク色」とした。

注記は手書きによって行った。注記対象は、土器片が微細なものを除く大多数、石器等が礫・礫片を除く狭義の石器である。注記できなかった遺物は、遺物番号ごとに「未注記」と記入したポリ袋に納め、注記済みのものと同封した。注記は、遺跡名の略号、遺構番号またはグリッド名、遺物番号、出土層位の順に記した。遺跡の略号は「オ」とした。遺構名にはアルファベットと数字の間に「-」を入れ、グリッド名には入れていない。

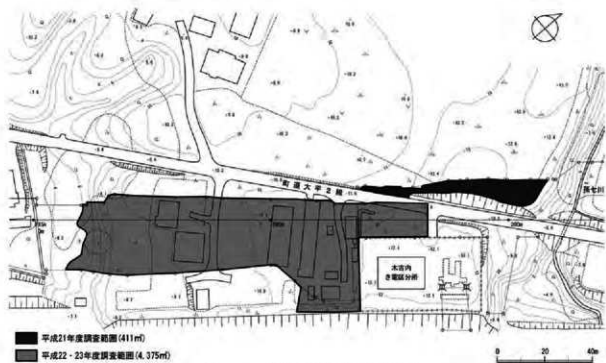
注記例 遺構：オ、H-1.2、床面 包含層：オ、M90.3、II

遺物は、現地調査終了後に北海道埋蔵文化財センター(以後センター)へ搬送した。

なお、遺物台帳は手作業で紙へ記入したものを基にパソコン上で表計算ソフト(Microsoft Excel)に入力し管理している。整理作業の進捗により遺物の分類等に変更があった場合には、手書きの台帳



図Ⅲ-1 グリッド設定図・年度別調査範囲



図Ⅲ-2 発掘調査範囲と周辺の地形

とExcelのデータを同時に修正した。

(2) 二次整理作業

図面等

遺構や遺物出土状況の原図は訂正などの作業を行った。訂正や変更があった場合はその箇所が確認できるように原図に書き込んでいる。その後、原図から1mm方眼の方眼紙に鉛筆で素図を作成している。素図をスキャナーで取り込み、パソコン上で描画ソフト(Adobe Illustrator CS6)により補正・加工して版下を作成した。(酒井)

土器の整理

土器については、地区ごとに分類の見直しと細分類を行いながら、接合作業を中心に整理を進めた。作業に当たっては遺構と包含層の接合、同一個体の破片を把握することに努めた。接合作業の結果は、分類・出土地点・遺物番号・点数・同一個体破片の有無などを接合台帳に記入した。接合関係が認められた個体は、接合の程度により立体復元、土器拓本、未掲載に分け、個体ごとに適宜判断し図化を行った。未接合の破片資料のうち、文様構成・器形のおよむ口縁部・胴部・底部については、土器拓本を作成した。立体復元は、遺物台帳と破片の照合を行って復元台帳の作成→再接合→破片接着→樹脂充填の順序をとった。立体復元と拓本断面については人手による原寸実測を行い、2/3縮尺素図をもとに墨入れを行った。墨入れ図をスキャナーで取り込み、パソコン上で描画ソフト(Adobe Illustrator CS6)により補正・加工して版下を作成した。接合・復元作業と並行して、集計表・分布図を作成した。(熊谷)

石器等の整理

石器については、分類の見直しを行いながら、破損品の接合作業を行った。遺構・包含層ごとに完形品を中心に人手による原寸実測を行い、剥片石器・磨製石器・石製品は原寸で、礫石器は2/3(一部1/2)縮尺素図をもとに墨入れを行った。墨入れ図をスキャナーで取り込み、パソコン上で描画ソフト(Adobe Illustrator CS6)により補正・加工して版下を作成した。これらの作業と並行して集計表・分布図の作成を行った。(酒井)

写真

a スタジオ撮影

撮影方法：光源はストロボを使用している。土器片や石器などの俯瞰撮影は、DP3メリルを用いてトヨ無影撮影台を使用して撮影した。復元土器の立面撮影は、トヨビュー 45GXを用いて蛍光剤が少ないスーパーホワイトの背景紙を撮影台に垂らして行った。モノクロ、カラーリバーサルともに同露出で2コマ撮影し、1セットとした。

撮影機材：スタンド：トヨウェイトスタンド

カメラ：酒井マシントール社 トヨビュー 45GXおよびシグマ社DP3メリル

レンズ：ニコン社 ニッコールAM ED210 f 5.6

ストロボ：コメット社 CS-2400T II、CBb-24X、CL25H、CLX-25miniH

フィルム：フジフィルム ネオパン100アクロス(モノクロフィルム)、フジクロームプロビア100F(カラーリバーサルフィルム)

b 現像

フィルム現像：モノクロフィルムは自動現像機(ILFORD ILFOLAB FP40)を使用して、自家処理を行っている。

デジタル処理：デジタルカメラ撮影のRAWデータはシグマプロフォトでTIFFに変換し、アドビフォトショップCS6で調整した。フィルム撮影のものはリバーサルフィルムのものをスキャナーハッセルブラッドフレックスタイトX5でデジタル化し、アドビフォトショップCS6で調整した。調整した画像から写真図版を作成した。

c 保管・管理

フィルムは1コマずつ番号をつけ、フィルム種類ごとの連番で管理している。フィルムに触れる時は手袋を着用し、油分からの変化・劣化・カビの発生を防いでいる。同露出で撮影した2コマのうち1コマはオリジナルフィルムとして使用していない。使用頻度や貸し出し依頼の多い写真は、デュープフィルムの作成やスキャニングによるデータ化で対応している。写真アルバムはすべての調査・整理作業が終了した後、常温・定湿の特別収蔵庫に保管される。(中山)

5 保管

今回の報告に関する出土遺物については、調査年度・遺跡名・遺物名・分類・収納番号等を記したラベルを貼ったコンテナに収納し、収納台帳を作成した。遺物は収納台帳と共に木古内町へ返却される予定である。図面等はすべてA2判図面ファイルに調査年度・遺跡名を付け収納している。図面等や写真フィルム等は、道立北海道埋蔵文化財センターにて保管される。(酒井)

6 遺跡の土層

平成21年度調査の土層を踏襲している。平成22・23年度調査範囲では図1-2の位置に土層確認用のトレンチを入れた。トレンチは遺跡のMライン（北東-南西方向）と88・91・98ライン（北西-南東方向）の4本を入れている。それぞれ、トレンチA（Mライン）、トレンチB（98ライン）、トレンチC（88ライン）、トレンチD（91ライン）とした。トレンチAは遺跡全体の土層状況を把握するために設定した。平成22年度調査範囲の84～86ラインは崖面のため、平成23年度調査範囲の2ライン以降は調査工程の関係上メインセクションを設定していない。トレンチBは盛土遺構の土層確認のために設定した。トレンチC・Dについては調査前に大きな凹みとして確認できたことから、凹みに入れるように設定した。トレンチCではH-13・16・19、トレンチDではH-9・17・18・20・21・34を確認した。図Ⅲ-3は遺跡全体の土層模式図と調査範囲南西のM86ライン付近の崖面において確認された基盤層までの土層を示したものである。図Ⅲ-4はM96区の盛土遺構詳細土層図である。図Ⅲ-5はトレンチAのメインセクション土層図である。以下に各層の詳細を記した。

I層：表土・耕作土など

II層：腐植土層：黒色シルト質土。縄文時代早期～晩期、擦文文化期の遺物を包含している。ところによっては、駒ヶ岳d降下火山灰（Ko-d、1640年降灰）、白頭山-苦小牧火山灰（B-Tm、10世紀前半降灰）が斑状に確認できる。大きく3層に分層され、上層は黒褐色土層で火山灰まで、中層は黒色～黒褐色土層で火山灰の下～盛土遺構の上までで縄文前期後半～晩期・擦文文化期、下層は黒色土層で盛土遺構の下～III層までで縄文早期～前期後半に分けられる。

盛土遺構：II中層と下層の層間に形成されている。黒色土と黄褐色土が層状に堆積し、遺物が非常に多く含まれる。炭化物や焼土粒、黄褐色土粒が含まれる部分が見られる。大まかに盛土土層・中層・下層・最下層に分層される。M96区付近では8層に分層され、図Ⅲ-4のような土層の堆積をしている。盛土上層（1・2層）、盛土中層（3～5層）、盛土下層（6・7層）、

盛土最下層（8層）となる。層間に焼土や遺物・炭化物が多く検出され、遺物の少ない間層がみられる。

Ⅲ層：漸移層：褐色～暗褐色土。Ⅱ層とⅣ層の漸移層。

Ⅳ層：ローム質土層：黄褐色～褐色ローム質土。下部にはチャート、ホルンフェルス、泥岩、頁岩、凝灰岩などの亜円礫を含むローム質土がある。

Ⅴ層：浅黄色粘土：小亜円礫（～50mm）を含む

Ⅵ層：にぶい黄砂：小亜円礫（～50mm）を含む間層が数層確認できる。

Ⅶ層：砂礫層：砂や小亜円礫（～50mm）が堆積する通水層。

Ⅷ層：明赤褐色粘土と浅黄橙色粘土の互層

図Ⅲ-6は調査範囲の状況図である。調査範囲南西端は大平川へ落ち込む崖面となっている。86～93ラインには盛土や遺構掘上土が広がる範囲がある。94～4ラインには盛土遺構が広がっている。調査範囲東側は、もともと東から西へ向かってなだらかに下る小高い地形を平坦に削平されており、東側に向かうにつれて削平が強まり、砂礫が含まれる層（Ⅴ～Ⅵ層）がみられるようになる。盛土遺構と砂礫のみられる削平範囲の間にはⅣ層上面までを削平された範囲が広がり、竪穴住居跡やフラスコ状ピットのような掘り込みのある遺構が検出されている。（酒井）

7 遺物の分類

(1) 土器

土器は縄文時代早期に属するものをⅠ群とし、以下前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群とした。続縄文時代のものはⅥ群、擦文文化期のものはⅦ群である。また、A・B類に二分したものはA類が前半、B類が後半を意味する。同様にA・B・C類に三分したものはA類が前葉、B類が中葉、C類が後葉を意味する。さらに細分を必要とする場合は、アラビア数字の枝番号を付した。

Ⅰ群 縄文時代早期に属する土器群

A類 貝殻・沈線文系土器群および条痕文系平底土器群

B類 縄文、撚糸文、絡糸体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などの付された縄文系平底土器群

B-1類 東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式に相当するもの

B-2類 コックロ式に相当するもの

B-3類 中茶路式に相当するもの

B-4類 東釧路Ⅳ式に相当するもの

Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群

A類 縄文の施された丸底・尖底の土器群

B類 円筒土器下層式土器群

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群

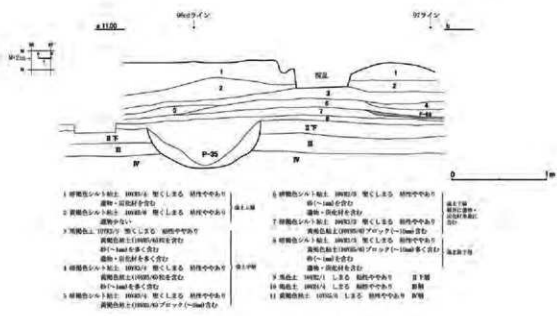
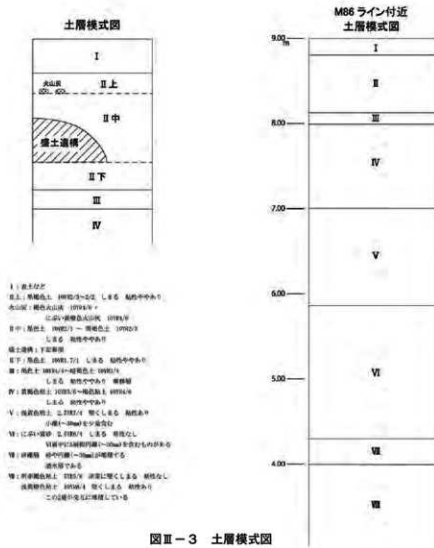
A類 円筒土器上層 a 式・b 式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するもの

B類 榎林式、大安在 B 式、ノダップⅡ式などに相当するもの

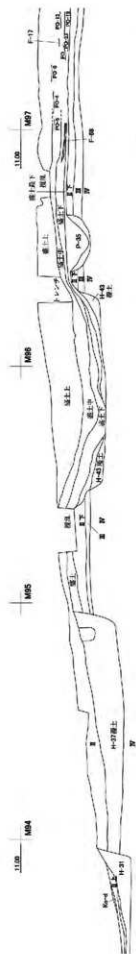
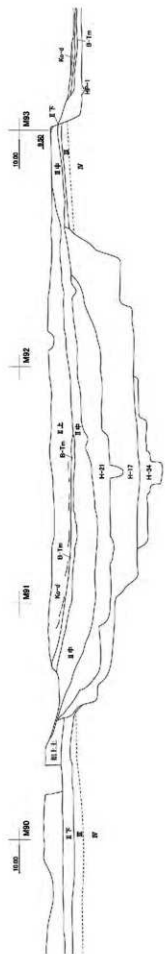
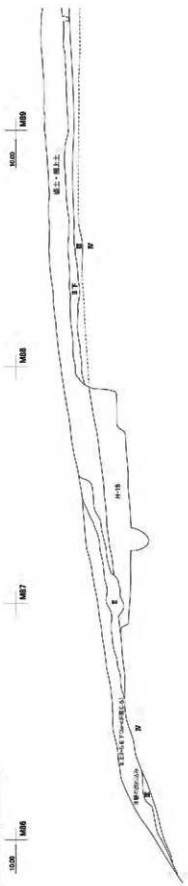
Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群

A類 天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するもの

B類 ウサクマイ C 式、手稲式、ホッケマ式に相当するもの



Mラインメインセクション (Aトレンチ)



図III-5 Mラインメインセクション (Aトレンチ)

C類 堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当するもの

V群 縄文時代晩期に属する土器群

A類 大洞B式、大洞B-C式とこれに並行する在地の土器群

B類 大洞C1式、大洞C2式とこれに並行する在地の土器群

C類 大洞A式、大洞A'式とこれに並行する在地の土器群

VI群 続縄文時代に属する土器群

VII群 擦文文化期に属する土器群 (熊谷)

(2) 石器等

石器は下記の分類を使用した。点数には破片を含む。

剥片石器群：石鏃、石槍、ナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、両面調整石器、楔形石器、
Rフレイク、Uフレイク、剥片

礫石器群：石斧、石のみ、たたき石、凹み石、すり石（北海道式石冠、扁平打製石器を含む）、石鋸、
砥石、台石、石皿、石錘、礫器・石核、加工痕のある礫、礫・礫片

土製品：有孔土製円板、耳栓、擦切土器片、焼成粘土塊など

石製品：異形石器、玦状耳飾り、垂飾、軽石製石製品、線刻礫、石刀、石棒、有孔礫など

(酒井)

IV 焼土・剥片集中・礫集中と出土遺物、盛土遺構

竪穴住居跡、土坑、フラスコ状ピット、Tピット、柱穴状ピットについては、「大平遺跡（2）」（北埋調報321）において遺構編として掲載している。ここでは、焼土・剥片集中・礫集中の遺構と出土遺物、盛土遺構について掲載する。盛土遺構の出土遺物についてはV章で掲載する。

1 焼土（図IV-1～11、表IV-1～4、図版2・103）

（1）概要

焼土は93か所を検出した。盛土遺構中から検出されたものが56か所、竪穴住居跡や土坑の覆土から検出されたもの5か所、包含層から検出されたものは32か所である。地床炉とみられるその場で焼成されたものは40か所、焼土の廃棄場所とみられるものが53か所である。形成時期は盛土遺構中から検出されたものは盛土遺構の形成時期である縄文時代前期後半～中期初頭と考えられる。遺物は土器275点、石器等3,258点、合計3,533点が出土した。各遺構の詳細に関しては、表IV-1に検出位置・層位・規模・形状・時期・特徴、表IV-2に遺構別出土遺物、表IV-3に掲載遺物を記載しているので参照していただきたい。F-18・45・65・93は欠番である。

焼土について検出土壌のフローテーションを行い、炭化物・焼骨片を検出している。一部についてパレオ・ラゴに同定を依頼した。炭化物については同定の結果、オニグルミ・クリ・ニフトコ・キハダ・ヒエ属といったものが検出されている。詳細については「大平遺跡（2）」（北埋調報321）に掲載済みである。焼骨片の検出された焼土は26か所である。同定の結果、サメ類・アイナメ・カワハギ・サバなどの魚類、ヒグマ・シカ・アシカといった哺乳類が検出されている。詳細についてはVI章で記載している。

（酒井）

（2）出土遺物

土器：1・2はF-3出土のⅡ群B-4類土器。同一個体で、結束第2種の羽状縄文で文様帯下端が区画され、文様帯の上下に沈線が施され、中央に小波状の縄線文が加えられている。体部は自縄自巻である。3・4はF-59出土のⅡ群B-3類土器の体部破片。3は単軸絡条体第4類の回転文が、4は多軸絡条体に回転文が施されている。5はF-60出土のⅡ群B-5類土器の口縁部破片。口唇に縄の圧痕が加えられ、無文地の文様帯には2本一組の縄線文が加えられている。6～8はF-69出土のⅡ群B-3類土器。6・7は直前段反燃りの縄文が施された底部破片。8は縄線が3本認められた頭部破片、地文は不明である。9はF-74出土のⅢ群A類土器。斜行縄文が施された体部破片である。10はF-84出土のⅡ群B-3類土器。複節の斜行縄文が施された体部破片である。

（熊谷）

2 剥片集中（図IV-12～49、表IV-1～6、図版3・103・122～136）

（1）概要

剥片集中は121か所を検出した。盛土遺構から98か所、竪穴住居跡の凹みから11か所、包含層から12か所である。主に頁岩の剥片石器・剥片がまとまって検出され、多いところではFC-53のように10,000点を超える点数が出土しているところもある。大型剥片のほかスクレイパーや両面調整石器・礫器・石核などが出土した。微細な剥片も確認できたことから、基本的に出土範囲を実測した後、土ごと取り上げて水洗し、遺物を検出している。剥片集中全体では土器586点、土製品2点、石器202,610点、石製品1点、合計203,199点の遺物が出土している。同一遺構内から同一頁岩とみられ

る両面調整石器・礫器・石核・剥片などを確認できたことから接合作業を行ったところ、多数の接合資料を得ることができた。接合作業の結果、確認できる範囲で拳大～人頭大の礫を利用していることが分かった。接合資料の中には、接合点数が400点を超えるもの、重さが2,875gあるもの、長さ15～25cmほどの尖頭器状の両面調整石器を作出したとみられる内部空洞のあるものなどが確認できる。

各遺構の位置・層位・規模・遺物点数・形状・時期については表Ⅳ-1、遺構別出土遺物については表Ⅳ-2、出土掲載遺物については表Ⅳ-3、接合資料については表Ⅳ-4に記載しているので参照願いたい。FC-1は平成22年度報告（北埋調報280）で報告済み、FC-16・18・28・76・79・80・123・128・130～133は欠番である。（酒井）

(2) 出土遺物（図Ⅳ-12～47、表Ⅳ-2～4、図版103・122～136）

土器（図Ⅳ-19、表Ⅳ-1～6、図版103）

1・2はFC-2出土のⅡ群B-4類土器。1は縄線文が加えられた口縁部破片。2は単軸絡条体の回転文が施された体部破片。3はFC-9出土のⅡ群B-3類土器の口縁部破片。口頸部には不整綾絡文が施されている。4はFC-10出土のⅡ群B-3類土器の体部破片。直前段反摺りの縄文が施されている。5はFC-19出土。単軸絡条体の回転文が施されたⅡ群B-4類土器の体部破片である。6はFC-23出土のⅡ群B-4類土器の口頸部破片。文様帯には3本の組紐状の縄線が認められる。7はFC-30出土のV群C類土器の小型の浅鉢。小突起をもつものである。口唇部に突起を作り出してから器面に縦位の縄文を施したのち、短沈線と長い沈線を組み合わせてB突起列を作出して口頸部文様帯下端を区画している。口頸部文様帯には突起に伸びる1本の沈線が、区画帯下位の体部文様帯には2本の沈線が加えられている。8・9はFC-35出土のⅡ群B-3類土器。8は底部、器面・底面には複節の斜行縄文が施されている。9は体部破片で単軸絡条体の回転文が施されている。10はFC-55出土のⅡ群B-3類土器。文様帯に貝殻痕文が施されている。11・12はFC-79出土のⅡ群B-3類土器。いずれも単軸絡条体の回転文が施されている。11には口頸部文様帯下端を区画する2本の縄線文が認められる。13はFC-86出土。直前段反摺りの縄文が施されたⅡ群B-3類土器の体部破片。14・15はFC-90出土。いずれもⅡ群B-3類土器。14は菱目状に結束羽状縄文が施された口頸部破片。15は太目の単軸絡条体の回転文が施されている。16はFC-92出土。単軸絡条体の回転文が施されたⅡ群B-4類土器の体部破片。17はFC-101出土。縄文が施されたⅡ群B-3類土器の口頸部破片。18～23はFC-108出土のⅡ群B-3類土器。18～22は縄文が施された口縁部破片。20は羽状に、21は複節の縄文が、22には2本の縄線が加えられている。23は単軸絡条体の回転文が施された体部破片。24はFC-117出土。直前段反摺りの縄文が施されたⅡ群B-3類土器の体部破片。25はFC-127出土。太目の単軸絡条体の回転文が施されたⅡ群B-4類土器の体部破片。26はFC-130出土。単軸絡条体の回転文が施されたⅡ群B-4類土器の体部破片。（熊谷）

石器（図Ⅳ-20～49、表Ⅳ-2・3・5・6、図版122～136）

1～3はFC-4出土のもの。1は石槍。つまみ状の基部があるもの。2はつまみ付ナイフ。縦型で片面加工のもの。つまみ部と下部端に切り出し状の刃部を作出している。両側縁には微細な剥離がみられる。3はスクレイパー。縦長剥片の右側縁に外彎する刃部が設けられたもの。腹面には使用痕とみられる光沢がかすかに確認できる。

4・5はFC-6出土のもの。4・5は両面調整石器。4は両面調整で尖頭器状の木葉形に加工されているもの。5は垂円形に加工されているもの。

6～10はFC-7出土のもの。6は石槍。尖頭部上半を折損している。7～10は両面調整石器。粗い調整で不定形のもの。

11・12はFC-8出土のもの。11・12は両面調整石器。11は両面調整で楕円形の形状に加工されたもの。12は両面調整で紡錘形の柳葉形状に加工されたもの。

13はFC-9出土のもの。13は石製品。つまみ付ナイフのミニチュアである。縦型剥片の腹面周縁を加工している。

14・15はFC-10出土のもの。14・15は両面調整石器。14は大型剥片の周縁を両面加工して台形状にしている。上～右側縁に原石面が残存する。接合作業によって、剥片1点が接合した。15は大型剥片の周縁を両面加工して垂円形状にしている。

16・17はFC-12出土のもの。16・17は両面調整石器。16は短冊形になっているもの。17は紡錘形で木葉形に加工途中で破損したと考えられる。接合作業によって、剥片4点と接合した。

18はFC-15出土のもの。18はスクレイパー。原石面の残存する縦長剥片の側縁に直線的な刃部を設けたもの。下端にも若干の加工をして直線的な刃部を設けている。腹面に使用痕とみられる光沢が確認できる。

19・20はFC-19出土のもの。19は石鏃。円基のもの。20は両面調整石器。木葉形の形状をしている。接合作業によって、剥片1点が接合した。

21はFC-21出土のもの。21は礫器・石核。礫を両面から打ち欠いてV字状の刃部を作出している。刃部には使用痕とみられる剥離がみられる。一部原石面が残存する。

22はFC-29出土のもの。22は両面調整石器。上半部を欠損している。紡錘形で柳葉形の形状をしていると考えられる。接合作業によって剥片1点が接合した。

23はFC-32出土のもの。23はスクレイパー。縦長剥片の両側縁に外彎する刃部を作出している。

24はFC-33出土のもの。24は両面調整石器。上半部を折損しているが、木葉形に加工されていたと考えられる。接合作業によって剥片2点が接合した。

25・26はFC-44出土のもの。25・26はスクレイパー。25は剥片の側縁に外彎する刃部を作出したものの。26は剥片の下端部に刃部を作出したものの。接合作業によって剥片12点と接合した。

27・28はFC-45出土のもの。27は両面調整石器。拳大の扁平な楕円礫を周縁両面から打ち欠いて、楕円形の形状に加工している。接合作業によって剥片1点と接合した。28は礫器・石核。剥片の両面を打ち欠いてV字状の刃部を作出している。

29～31はFC-47出土のもの。29・30はスクレイパー。29は剥片の側縁に直線状の刃部と袂りを作成したものの。30は縦長剥片の側縁に直線的な刃部を作出したものの。腹面に使用痕とみられる光沢が確認できる。31は両面調整石器。楕円形に加工したものの。

32～36はFC-48出土のもの。32は石鏃。円基のもの。先端部の加工がされていないので、未成品と考えられる。33はスクレイパー。剥片の側縁に直線的な刃部を作出したものの。34・35は両面調整石器。34は円形に加工したものの。接合によって剥片74点と接合した（図IV-35-7）。35は尖頭器状で木葉形に加工されたものの。折損しており、接合している。接合作業によって、両面調整石器1点、剥片349点と接合した（図IV-38・39-8）。36は礫器・石核。拳大の楕円礫の長軸下端を加工してV字状の刃部を作出したものの。下端部は直線上で微細な剥離がみられる。接合作業によって、剥片24点と接合した（図IV-35-6）。

37・38はFC-49出土のもの。37はつまみ付ナイフ。下半部を折損している。剥片の周縁両面を加工してつまみ部と刃部を作出している。38は両面調整石器。木葉形に加工している途中で廃棄されたと考えられる。接合作業によって、剥片2点と接合した。

39・40はFC-50出土のもの。39は両面調整石器。尖頭器状で木葉形の形状に加工したものの。長さ

23.7cmでかなり大型のものである。中ほどで折れている。折損後、若干の加工をした痕跡があるが、そのまま廃棄されたとみられる。炭化物とみられる付着物が確認できる。接合作業によって、剥片273点と接合した(図IV-37-9)。40は礫器・石核。掌大の礫の両面を打ち欠いてV字状の刃部を作出したもの。接合作業によって、Rフレイク1点、剥片50点と接合した(図IV-38-10)。

41・42はFC-52出土のもの。41は両面調整石器。上半部が折損している。木葉形の形状をしているものと考えられる。42はUフレイク。剥片の周縁に微細な剥離がみられる。

43・44はFC-53出土のもの。43は両面調整石器。尖頭器状で柳葉形に加工されたもの。中ほどで折れており、製作途中で折損したものを剥片とともに廃棄したと考えられる。接合作業によってRフレイク3点、Uフレイク1点、剥片412点と接合した(図IV-40-11)。44はスクレイパー。大型剥片の下側縁を加工してV字状の刃部を作出している。接合作業によって剥片23点と接合した(図IV-39-12)。

45はFC-55出土のもの。45は両面調整石器。尖頭器状で木葉形の形状に加工したもの。接合作業によってRフレイク1点、剥片64点と接合している(図IV-42-16)。

46・47はFC-56出土のもの。46はたたき石。垂角礫の角に敲打痕のあるもの。泥岩製。47は礫器・石核。楕円形で扁平な石核の周縁に粗い加工でV字状の刃部を作出している。接合作業によってスクレイパー1点、剥片45点と接合した(図IV-43-19)。

48はFC-60出土のもの。48は礫器・石核。拳大の礫を打ち欠いて下端部をV字状に加工している。接合作業によって、剥片2点と接合した。

49はFC-62出土のもの。49は両面調整石器。上半部は折損している。紡錘形の形状をしていたと考えられる。接合作業によって、剥片92点と接合した(図IV-44-22)。製作途中で折れたために剥片とともに遺棄されたと考えられる。

50はFC-84出土のもの。50は両面調整石器。垂円形で断面が三角形状である。接合作業によって剥片18点と接合した。

51はFC-85出土のもの。51は両面調整石器。紡錘形で原石面が一部残存する。

52～59はFC-86出土のもの。52～55は両面調整石器。52～54は尖頭器状で木葉形の形状をしたもの。54は整形途中で3点に破損したため、剥片とともに遺棄されたと考えられる。55は五角形の形状をしたもの。56～59は礫器・石核。接合作業によって、52は剥片14点(図IV-45-24)、53は剥片4点、54は剥片12点(図IV-45-26)、56は剥片14点、57は剥片7点(図IV-45-27)、59は剥片2点と接合した。

60～64はFC-88出土のもの。60は石織。円基のもの。61・62はスクレイパー。61は原石面の残存する縦長剥片の側縁に直線的な刃部を設けたもの。62は64の両面調整石器から剥離した剥片の一部に刃部を設けたもの。63・64は両面調整石器。63は尖頭器状で木葉形のもの。4点に折損しており、整形途中で破損したことから遺棄されたと考えられる。64は62が接合したもので、楕円形のものである。接合作業によって、63は剥片7点と接合した。64は剥片20点と接合した(図IV-46-28)。

65はFC-91出土のもの。65は石織。尖基で柳葉形をしている。両尖端部を欠損している。頁岩製。

66はFC-93出土のもの。66は礫器・石核。拳大の垂角礫を打ち欠いて三角柱状に加工している。下端部には鋸歯状の刃部が設けられている。頁岩製。

67～70はFC-94出土のもの。67はたたき石。扁平な楕円礫の両端部に敲打痕がみられる。平坦面にすり痕とみられる光沢と黒色の付着物が確認できる。68～70は礫器・石核。拳大の垂円礫の一部周縁を打ち欠いてV字状に加工している。接合作業によって68は剥片13点、69は剥片12点、70は剥片

75点(図IV-47-31)と接合した。

71はFC-98出土のもの。71はスクレイパー。剥片の側縁に直線状の刃部を作出したもの。

72はFC-99出土のもの。72はスクレイパー。縦長剥片の側縁に弱く内彎する刃部を作出している。

73・74はFC-101出土のもの。73はつまみ付ナイフ。縦型剥片の周縁を加工してつまみ部と刃部を作出している。下端部は両面加工している。右側縁は欠損している。74はスクレイパー。剥片の一部に浅い抉り状の刃部を設けている。

75はFC-103出土のもの。75は両面調整石器。紡錘形で柳葉形をしているもの。

76・77はFC-105出土のもの。76はスクレイパー。剥片の周縁を加工して刃部を設けたもの。腹背両面に使用痕とみられる光沢が確認できる。77は両面調整石器。

78はFC-109出土のもの。78はRフレイク。縦長剥片の側縁に加工がみられるもの。

79はFC-111出土のもの。79はスクレイパー。下端部に直線的な刃部が設けられたもの。刃部は磨滅している。

80はFC-117出土のもの。80は礫器・石核。拳大の垂角礫の下端が腹背両面から打ち欠いてV字状になっているもの。接合作業によって剥片14点と接合した(図IV-47-32)。

81・82はFC-120出土のもの。81・82はスクレイパー。81は剥片の左側縁を加工して刃部を設けている。腹面右側には使用痕とみられる光沢が確認できる。82は大型剥片の下側縁を加工して刃部を作出している。上端部には原石面が残存する。接合作業によって剥片69点と接合した(図IV-48-34)。

83はFC-122出土のもの。83はスクレイパー。縦長剥片の側縁に直線状の刃部が作出されている。上半を欠損している。腹面左側には使用痕とみられる光沢が確認できる。

84はFC-125出土のもの。84は両面調整石器。紡錘形をしており、3点が接合している。頁岩製。

85・86はFC-127出土のもの。85は尖基の石鏃。先端部を欠損している。黒曜石製。86は両面調整石器。上半を欠損しているが、柳葉形の形状をしていたと考えられる。

接合資料：接合資料1・2はFC-2出土のもの。接合資料1はRフレイク1点、剥片43点、M99区出土の石核1点が接合している。接合資料2はRフレイク1点、剥片35点、M99区出土の剥片2点が接合している。接合資料1と2の2つの接合資料は同一母岩のものとみられるが、接合はできなかった。おおよそ、人頭大の垂角礫を利用していることが分かった。

接合資料3はFC-3出土のもの。剥片167点が接合している。接合の結果、扁平な人頭大の垂角礫を利用したことが分かった。接合後の内部空洞の状況から、長さ20cm、幅5cmほどの尖頭器状のものを作出したと考えられる。

接合資料4・5はFC-6出土のもの。接合資料4はRフレイク1点、剥片60点が接合したものの。接合作業の結果、手大の楕円礫を利用していることが分かった。短軸方向で大きく割りとして平坦な打面を作り出し、それから加工を開始している。内部空洞の状況から、長さ8cm、幅5cmほどの尖頭器状のものを作出したとみられる。接合資料5は剥片155点が接合したものの。接合作業の結果、人頭大の垂角礫を利用していることが分かった。内部空洞の状況から、長さ15cm、幅7cmほどの尖頭器状のものを作出したとみられる。

接合資料6～8はFC-48出土のもの。接合資料6は図IV-24-36と剥片24点が接合したものの。接合作業の結果、拳大の楕円礫を利用していることが分かった。接合資料7は図IV-24-34と剥片74点が接合したものの。接合作業の結果、拳大の扁平な垂角礫を利用していることが分かった。接合資料8は図IV-24-35と両面調整石器1点、剥片349点が接合したものの。接合作業の結果、人頭大の垂角礫を利用していることが分かった。大きく2つに分割したのち、それぞれ剥離作業を行っている。①の

塊では図Ⅳ-24-35を作出している。②の塊からは、内部の空洞の状況から長さ13cm、幅5cmほどの尖頭器状のものが作出されている。

接合資料9・10はFC-50出土のもの。接合資料9は図Ⅳ-26-39と剥片273点が接合したものの。接合作業の結果、人頭大より一回り大きな扁平な楕円礫を利用していることが分かった。周縁から原石面を剥離するところから始め、剥離面を打面として次々と剥離作業を行っていることが確認できる。最終的に大型の尖頭器状の両面調整器を作出している。接合資料10は図Ⅳ-26-40とRフレイク1点、剥片50点が接合したものの。接合作業の結果、人頭大の角礫を利用していることが分かった。内部空間をみても両面調整器のようなものを作出した形跡は見られない。

接合資料11～15はFC-53出土のもの。接合資料11は図Ⅳ-27-43とRフレイク3点、剥片408点、M99区盛土出土のUフレイク1点、剥片4点と接合したものの。接合作業の結果、人頭大の亜角礫を利用していることが分かった。礫は厚さ4cmほどの層状になっており、節理面で5つの塊に分けられる。②の塊を用いて43の尖頭器状の両面調整器を作出している。また、③の塊では、内部空洞の状況から、別に長さ13cm、幅5cmほどの尖頭器状のものが1点作出されたと考えられる。④の塊からは直径10cmほどの円形状のものが作出されたと考えられる空洞がある。接合資料12は図Ⅳ-27-44と剥片22点、M99区盛土出土の剥片1点が接合したものの。接合資料11と12は同一母岩と考えられるが、接合はできなかった。接合資料13は石核1点、剥片25点が接合したものの。接合資料14は、剥片25点が接合したものの。手大の楕円礫を用いている。接合後の内部空洞の状況から、長さ15cm、幅4cmほどの尖頭器状のものを作出したと考えられる。接合資料15は剥片22点、M99区盛土出土の剥片1点が接合したものの。手大の亜角礫を用いている。接合後の内部空洞の状況から、長さ12cm、幅6cmほどの尖頭器状のものを作出したと考えられる。

接合資料16～18はFC-55出土のもの。接合資料16は図Ⅳ-26-45とRフレイク1点、剥片64点が接合したものの。接合の結果、掌大の亜角礫を利用していることが分かった。45の両面調整器と一緒にあったことから、図Ⅳ-26-45は加工途中で何らかの理由により遺棄されたものと考えられる。接合資料17は剥片93点が接合したものの。接合の結果、扁平な掌大の亜角礫を利用していることが分かった。内部空洞の状況から、長さ15cm、幅5cmほどの尖頭器状のものを作出していたと考えられる。接合資料18は剥片22点とM99区盛土出土の剥片3点が接合したものの。接合作業の結果、原石部分の一部を剥離した状況が確認され、手大の扁平な亜円礫を利用していたと考えられる。内部空洞の様子から長さ15cmほどの尖頭器状のものを作出したと考えられる。

接合資料19～21はFC-56出土のもの。接合資料19は図Ⅳ-27-47とスクレイパー1点、剥片45点が接合したものの。接合作業の結果、手大の角礫を利用していることが分かった。接合資料20は両面調整器2点、Rフレイク1点、剥片36点が接合したものの。接合作業の結果、一回り大きな両面調整器から加工中に節理面などで破損したものと考えられる。接合資料21は剥片88点が接合したものの。接合作業の結果、内部空洞の様子から尖頭器状のものが作出されたと考えられる。接合資料19～21は同一母岩と考えられ、接合資料21の内部空洞には、接合しなかったが接合資料20が入っていた可能性がある。

接合資料22・23はFC-62出土のもの。接合資料22は図Ⅳ-28-49と剥片92点が接合したものの。接合の結果、手大の扁平な三角錐状の亜角礫を利用していることが分かった。図Ⅳ-28-49や内部空洞の形状から、素材礫の形状を利用して長さ15cm、幅5cmほどの尖頭器状の両面調整器を作出しようとしていたと考えられる。接合資料23は剥片16点とL97区出土の礫器・石核が接合したものの。接合の結果、拳大の亜角礫を利用していることが分かった。

接合資料24～27はFC-86出土のもの。接合資料24は図IV-29-52に剥片14点が接合したものの。接合資料25は石核1点、Rフレイク1点、剥片16点が接合したものの。接合資料24と25は同一母岩とみられる。接合作業の結果、手大の楕円礫を利用していることが分かった。粗く打ち割って大型剥片に加工を加えている。接合資料26は図IV-29-54に剥片1点とFC-21出土の剥片11点が接合したものの。接合した剥片は、図IV-29-54の加工中に出たものである。接合作業の結果、手大の扁平な礫を利用していると考えられる。接合資料27は図IV-29-57に剥片6点とFC-21出土の剥片1点が接合したものの。接合作業の結果、大きさはわからないが角礫を利用していることが分かった。

接合資料28～30はFC-88出土のもの。接合資料28は図IV-30-62・64と剥片20点が接合したものの。原石面の剥離作業の行程が観察できる。接合資料29は石核1点、Rフレイク3点、剥片70点と接合したものの。接合作業の結果、人頭大の亜円礫を利用していることが分かった。およそ半分は割り取ったのち、剥離面を打面として原石面の剥離作業を行っている。接合資料30は礫器・石核1点、剥片22点が接合したものの。接合作業の結果、掌大の扁平な亜楕円礫を利用していることが分かった。楕円形の両面調整石器を製作する途中で遺棄されたと考えられる。

接合資料31はFC-94出土のもの。接合資料31は図IV-31-70と剥片75点が接合したものの。接合作業の結果、拳大の扁平な亜角礫を利用していることが分かった。原石面や剥離面を打面として剥離作業を行い、最終的に図IV-31-70を残している。

接合資料32・33はFC-117出土のもの。接合資料32は図IV-31-80と剥片14点が接合したものの。接合作業の結果、拳大の亜角礫の周縁を打ち欠いて逆三角形にし、下端がV字状の礫器・石核を作り出している。節理面が多くみられる。接合資料33は剥片27点が接合したものの。接合作業の結果、長さ15cmほどの扁平な楕円礫を使用していることが分かった。原石面を大きく剥離して断面逆三角形の礫器・石核が作り出されている様子が確認できる。

接合資料34・35はFC-120出土のもの。接合資料34は図IV-32-82と剥片69点が接合したものの。接合作業の結果、長さ20cm以上の扁平な楕円礫を利用していることが想定された。原石面を大きく剥離したのち、剥離面を打面として剥離を続けて行い、図IV-32-82を作出している。下端部に刃部を設けてスクレイパーとしている。接合資料35は剥片102点が接合したものの。接合作業の結果、長さ30cmほどの扁平礫を利用していることが分かった。原石面を剥離した後、それを打面として続けて剥離を行い、最終的に長さ20cm以上、幅約6cm、厚さ約3cmの両面調整石器を作出している。両面調整石器の部分は空洞になっており、両面調整石器自体は別の場所に運ばれたと考えられる。

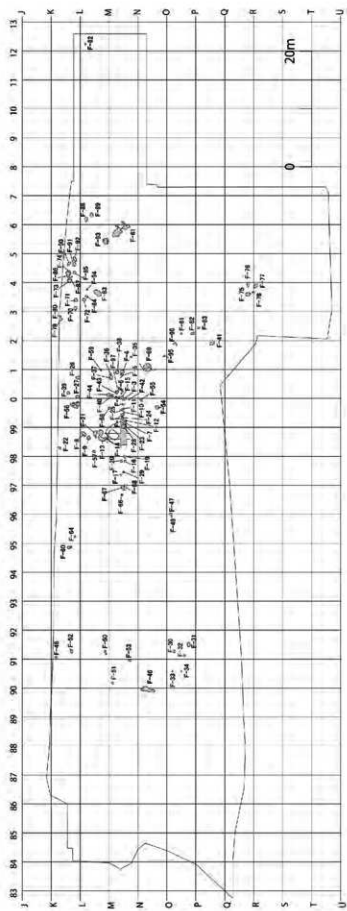
3 礫集中 (図IV-12・17・18・32、表IV-1～3・5)

(1) 概要

礫集中は2か所を検出した。盛土遺構から礫・礫片がやや密集して検出されている。S-1は倒立土器(O1区PO-4)に近接して小礫や剥片が96点出土している。小礫は頁岩・泥岩・チャート・ホルンフェルスなどで、遺物の重量は1.92kgになる。S-2はやや広い範囲に凹み石や剥片、長さ2～10cmの扁平礫や亜円礫が出土している。遺物の重量は7.07kgになる。遺物に統一性はみられない。

(2) 出土遺物

石器：1はS-2出土の凹み石。扁平礫の平坦面に断面半円状の凹みが設けられているもの。腹面上部・側縁上部には敲打痕がみられる。下端は両面から打ち欠いてV字状になっている。中央部は塊り状に凹んでおり、磨滅痕がみられる。泥岩製。(酒井)



图IV-1 地土位置图



091



F-33



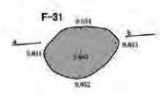
F-30



F-34



F-32



F-31

091

F-30
 標準断面寸法(単位) 2.79x4
 φ100の標準断面寸法(単位) 2.79x4
 標準断面寸法(単位) 2.79x4
 標準断面寸法(単位) 2.79x4



1 標準断面寸法(単位) 2.79x4
 2 標準断面寸法(単位) 2.79x4
 標準断面寸法(単位) 2.79x4

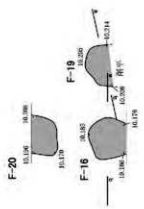
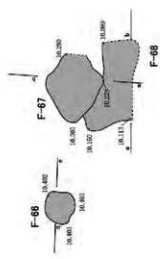
F-32
 標準断面寸法(単位) 2.79x4
 φ100の標準断面寸法(単位) 2.79x4
 標準断面寸法(単位) 2.79x4
 標準断面寸法(単位) 2.79x4

F-33
 標準断面寸法(単位) 2.79x4
 φ100の標準断面寸法(単位) 2.79x4
 標準断面寸法(単位) 2.79x4
 標準断面寸法(単位) 2.79x4

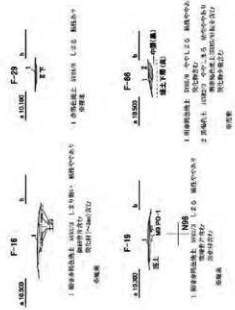
F-34
 標準断面寸法(単位) 2.79x4
 φ100の標準断面寸法(単位) 2.79x4
 標準断面寸法(単位) 2.79x4
 標準断面寸法(単位) 2.79x4



図N-3 F-30~34



F-17・20
遺跡遺構



図IV-4 F-16・17・19・20・29・66～68



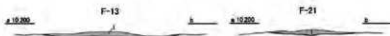
F-22

平均高: 10.013 最低: 10.000
 平均水深: 0.70m 最低水深: 0.60m 以上
 備考: 1
 沖地としての用途が認められるにない。しかし、地帯からの影響・感度を考慮する。



1 断面高: 10.011 断面中: 断面中
 0.70m 以上 断面中
 断面下に感度は認められるにない。

1 断面高: 10.011 断面中: 断面中
 0.70m 以上 断面中
 断面下に感度は認められるにない。



1 断面高: 10.011 断面中: 断面中
 0.70m 以上 断面中
 断面下に感度は認められるにない。

1 断面高: 10.011 断面中: 断面中
 0.70m 以上 断面中
 断面下に感度は認められるにない。

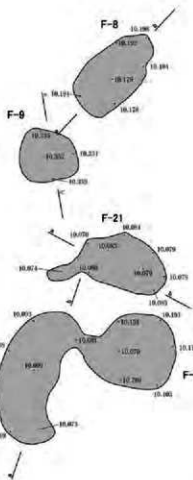
L98

L99



F-57

1 断面高: 10.262 断面中: 断面中
 断面下に感度は認められるにない。
 断面中: 10.262
 断面高: 10.269

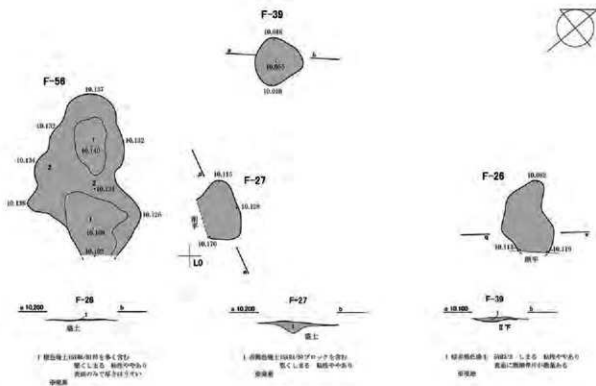


M98

M99



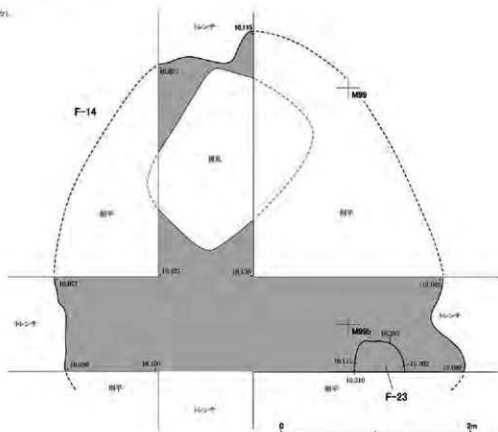
図IV-5 F-8・9・13・21・22・57



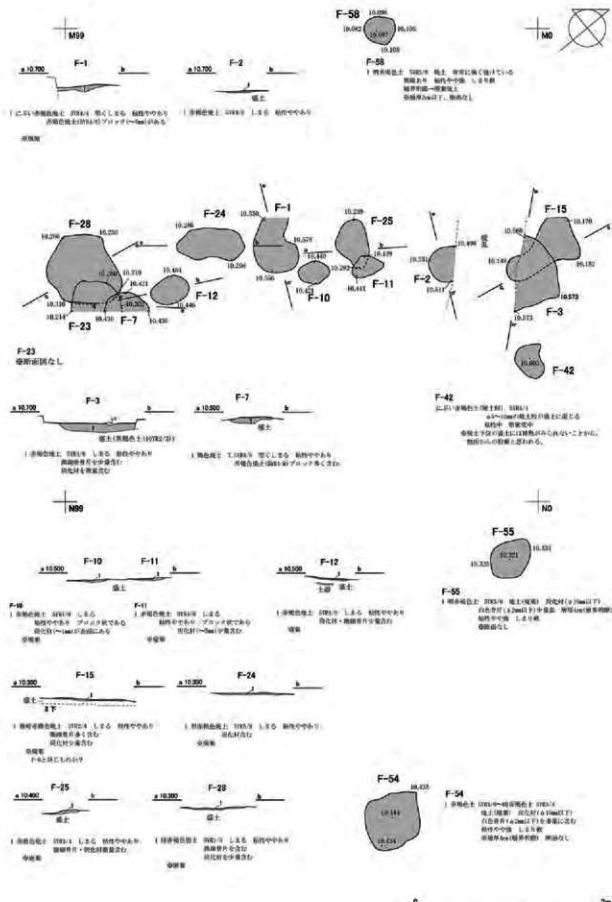
F-56

- 1 埋裏焼土 0.02mにわたる埋裏焼土 0.02m。磁土、黒磁片(0.06m以下)、赤褐色層(0.20m以下)を多数含む。磁片あり、しまり層。
- 2 埋裏焼土 0.02mにわたる埋裏焼土 0.02m。赤褐色層(0.06m以下)を多数含む。磁片あり、しまり層。埋裏焼土・埋裏焼土・埋裏焼土・埋裏焼土(0.02m以下)層が認められる。

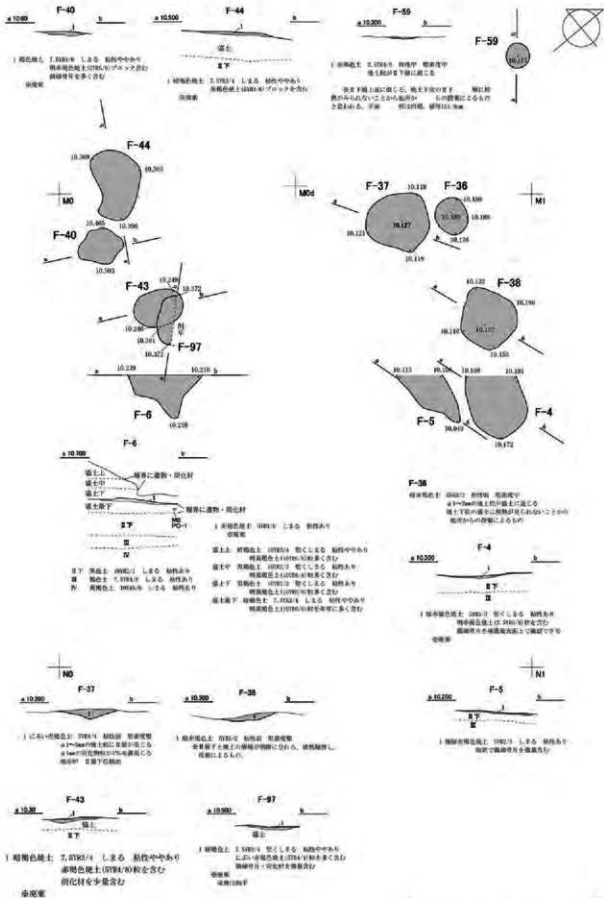
↑ M98



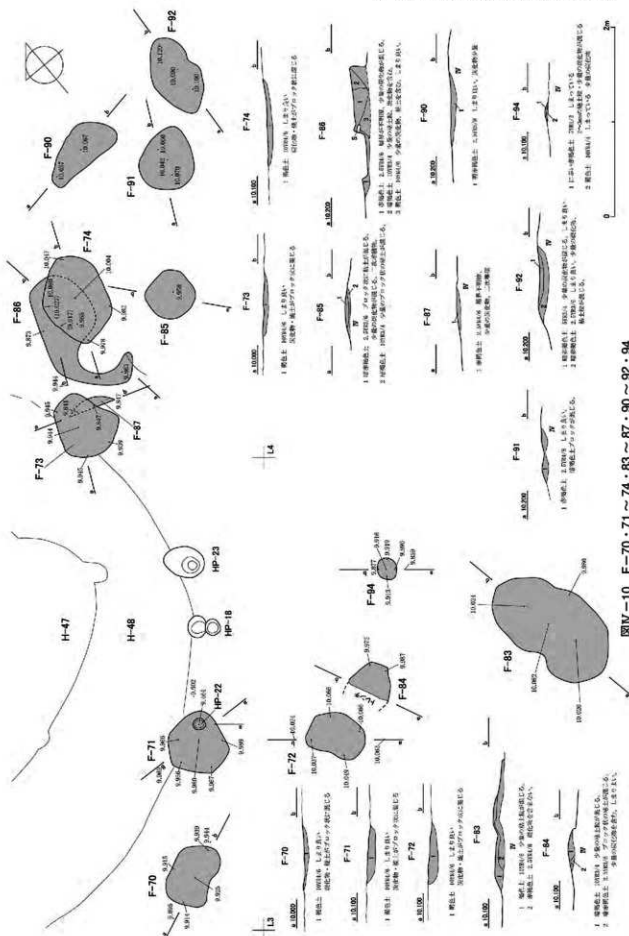
図IV-6 F-14・23・26・27・39・56



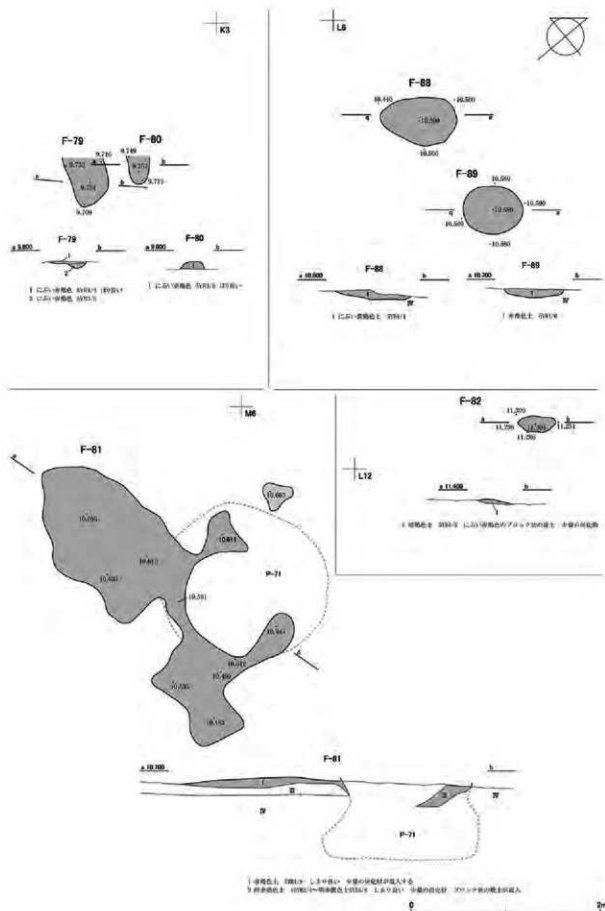
図IV-7 F-1~3・7・10~12・15・23~25・28・42・54・55・58



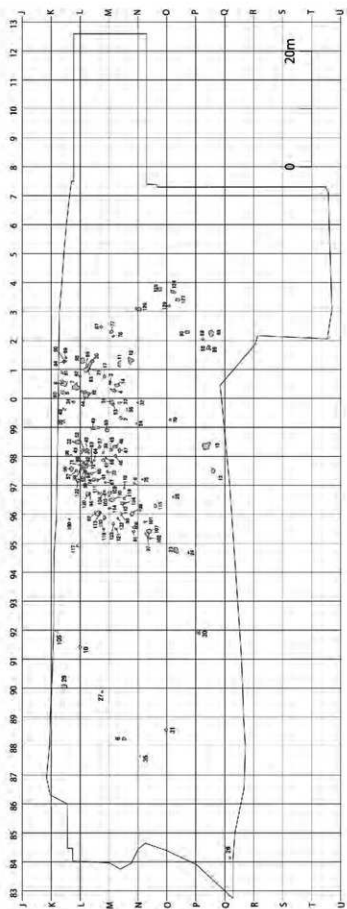
図IV-8 F-4~6・36~38・40・43・44・59・97



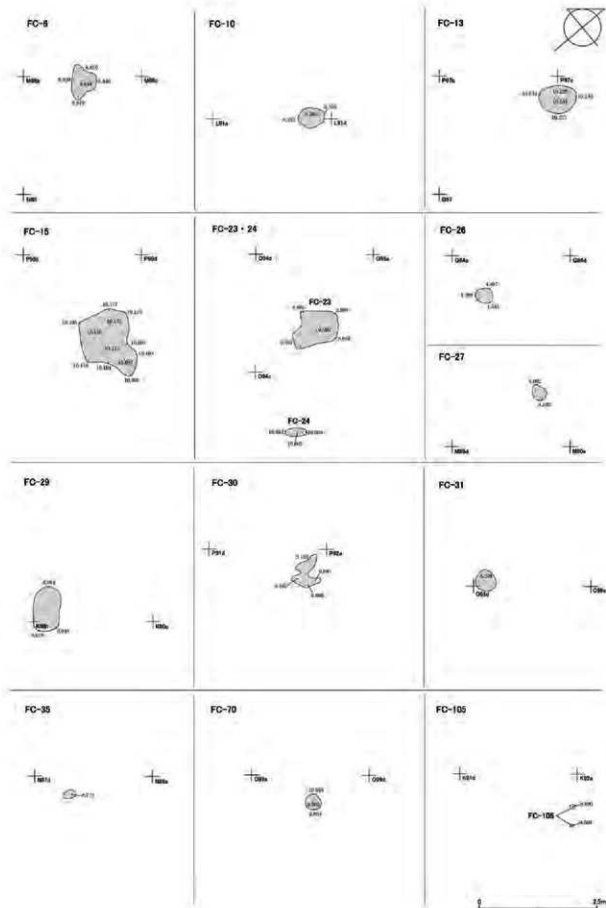
図IV-10 F-70・71～74・83～87・90～92・94



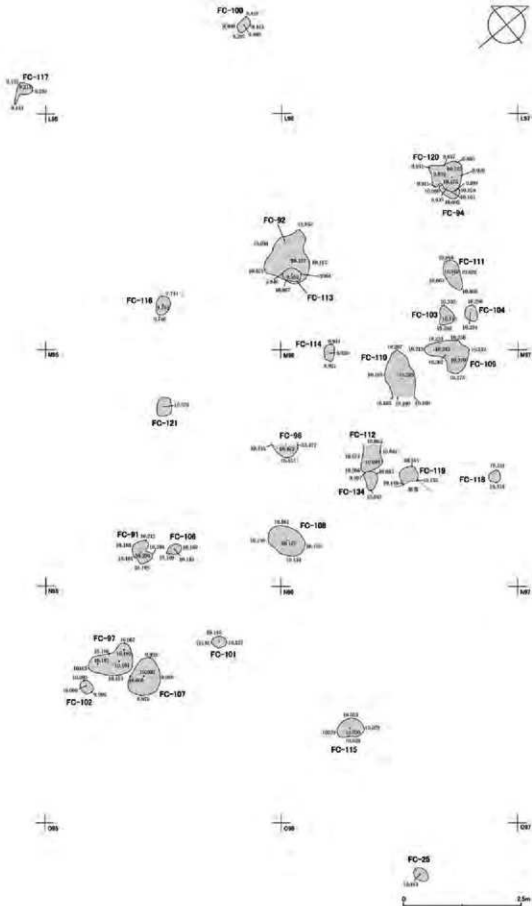
图IV-11 F-79~82·88·89



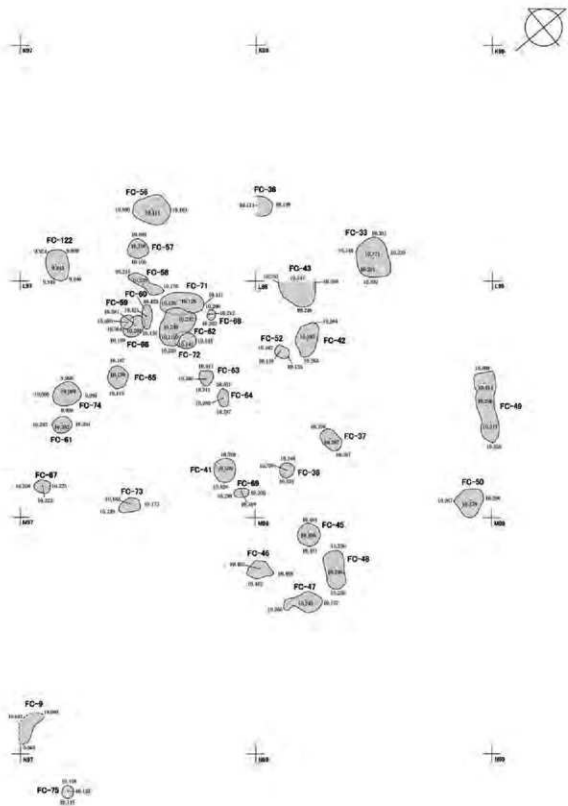
図IV-12 剥片集中位置図



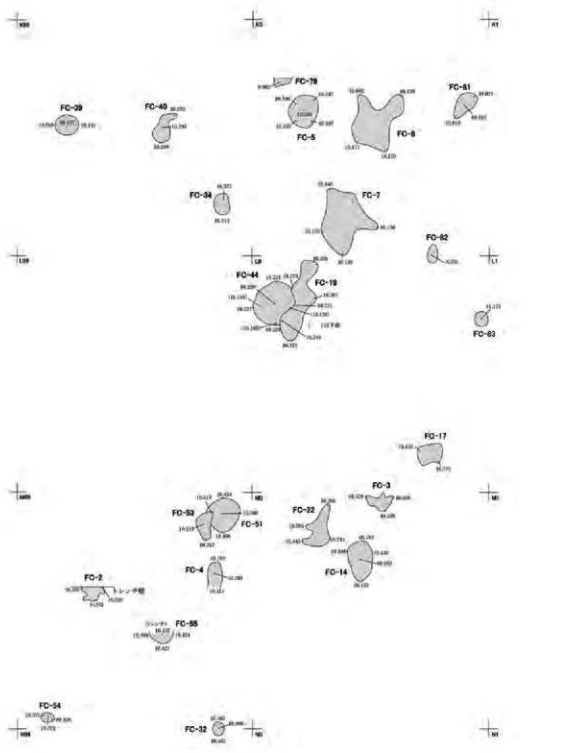
图IV-13 FC-6 · 10 · 13 · 15 · 23 · 24 · 26 · 27 · 29 ~ 31 · 35 · 70 · 105



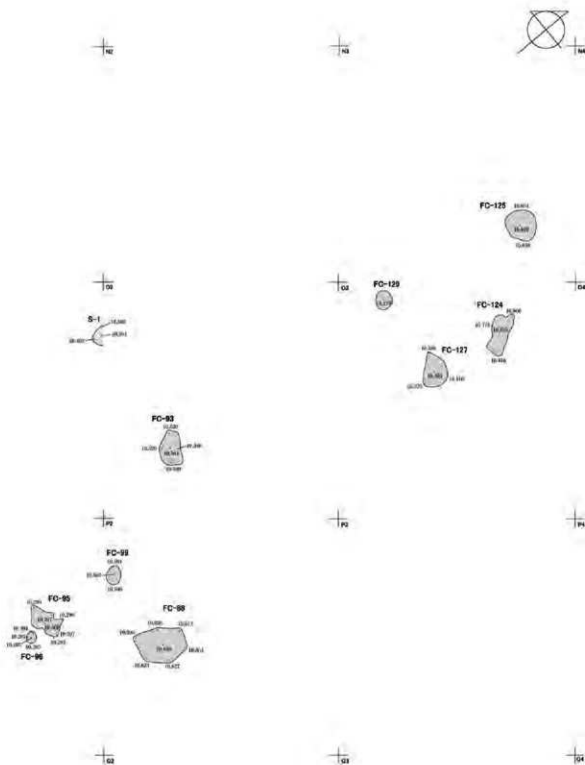
図IV-14 FC K ~ N95・96区



図IV-15 FC K ~ N97・98区



図IV-16 FC K~M99~0区



図IV-18 FC・S-1 N~P1~3区

烧土

F-3



F-59



F-60



F-69



F-74



F-84



0 10cm

0 10cm

剥片集中

FC-2



FC-9



FC-10



FC-19



FC-23



FC-55



FC-30



FC-79



FC-35



0 10cm

FC-86



FC-90



FC-92



FC-101



FC-106



FC-109



FC-110



FC-117

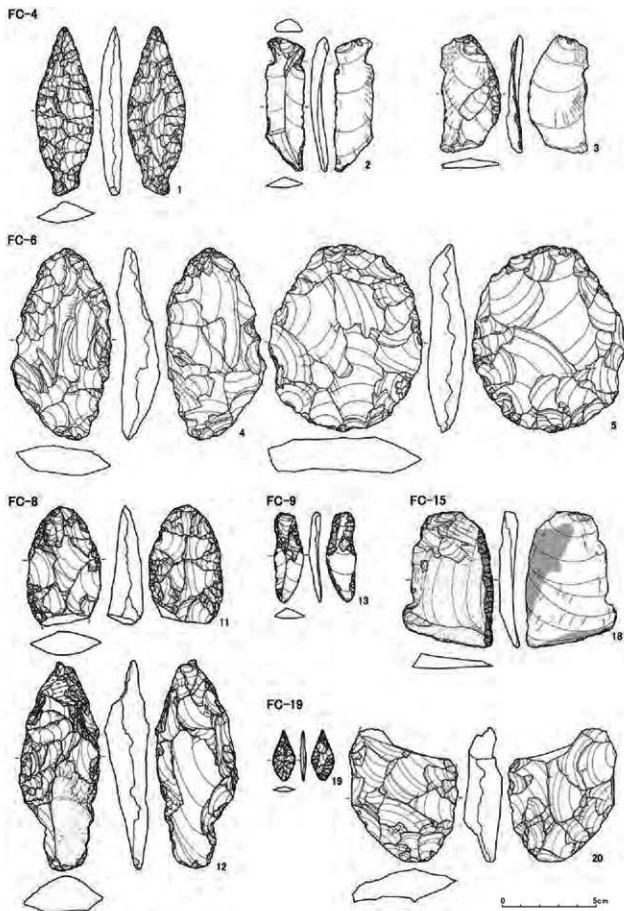


FC-127

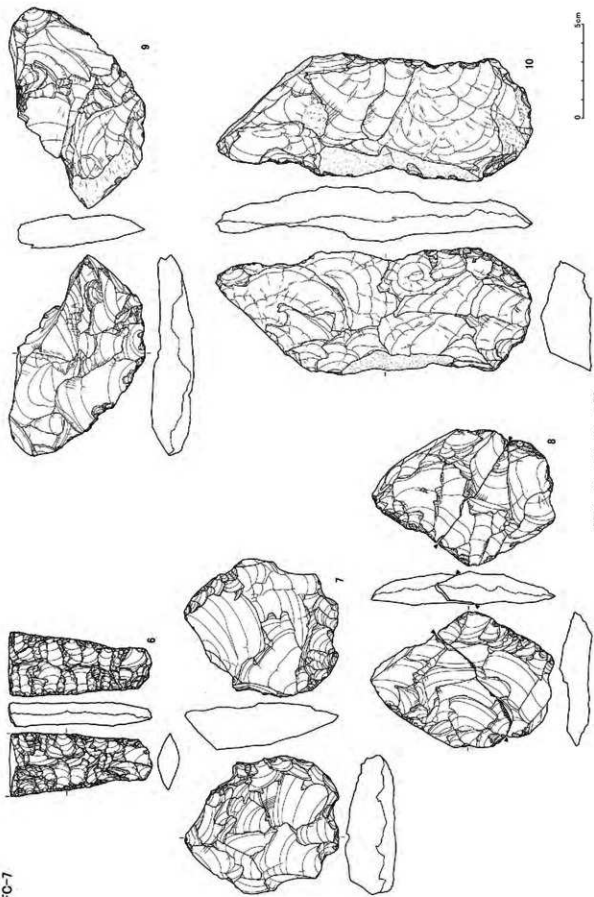


0 10cm

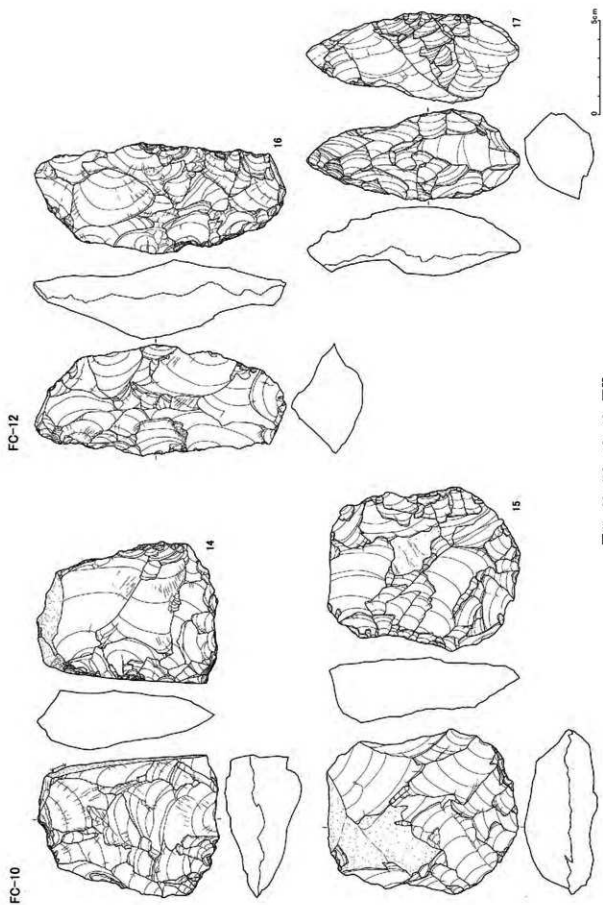
图IV-19 F·FC 土器



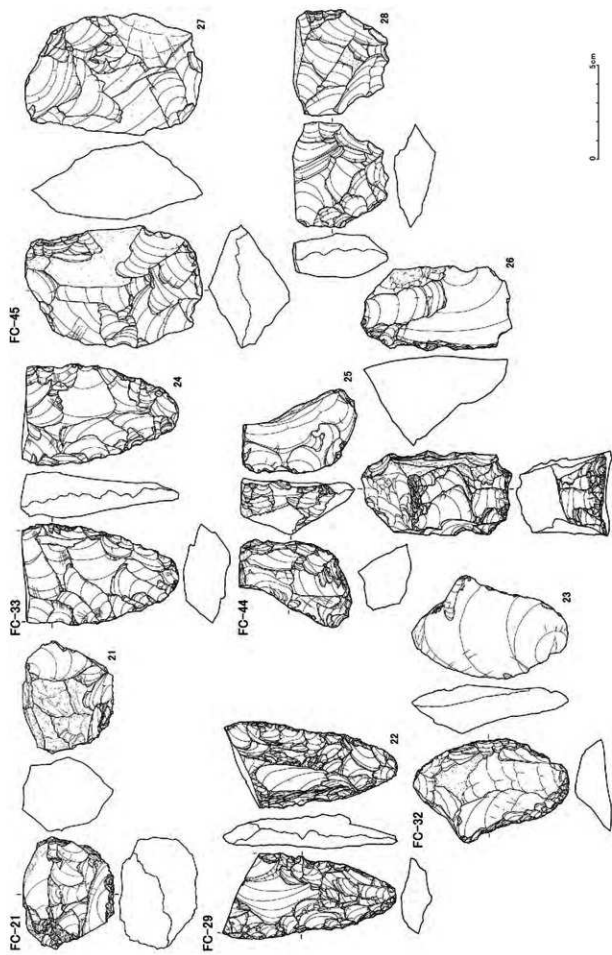
図IV-20 FC-4・6・8・9・15・19 石器



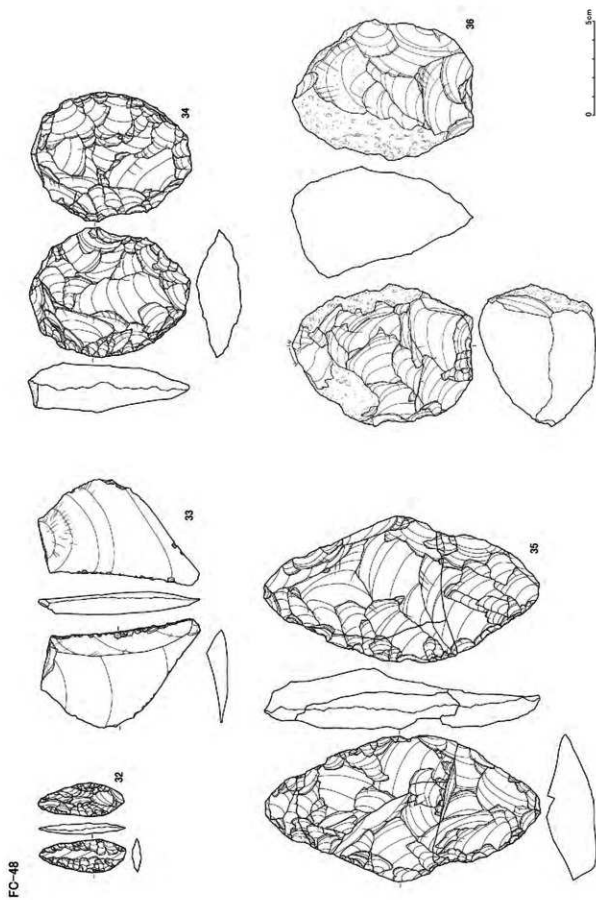
圖IV-21 FC-7 石器



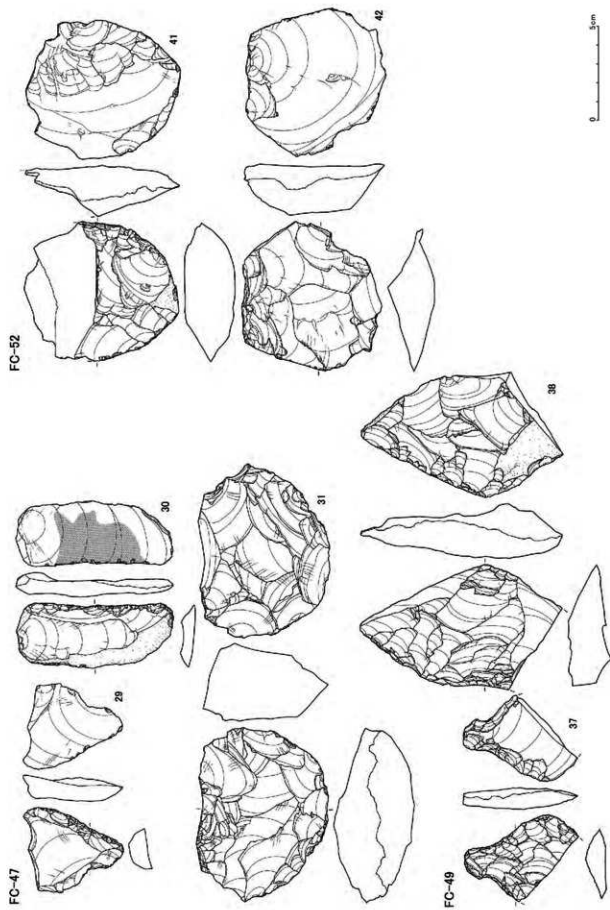
图IV-22 FC-10・12 石器



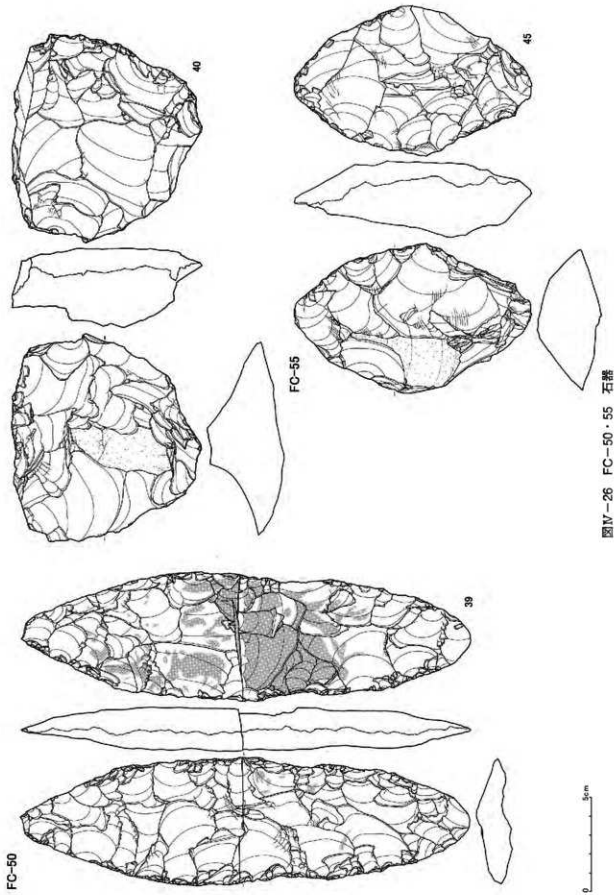
圖IV-23 FC-21·29·32·33·44·45 石器

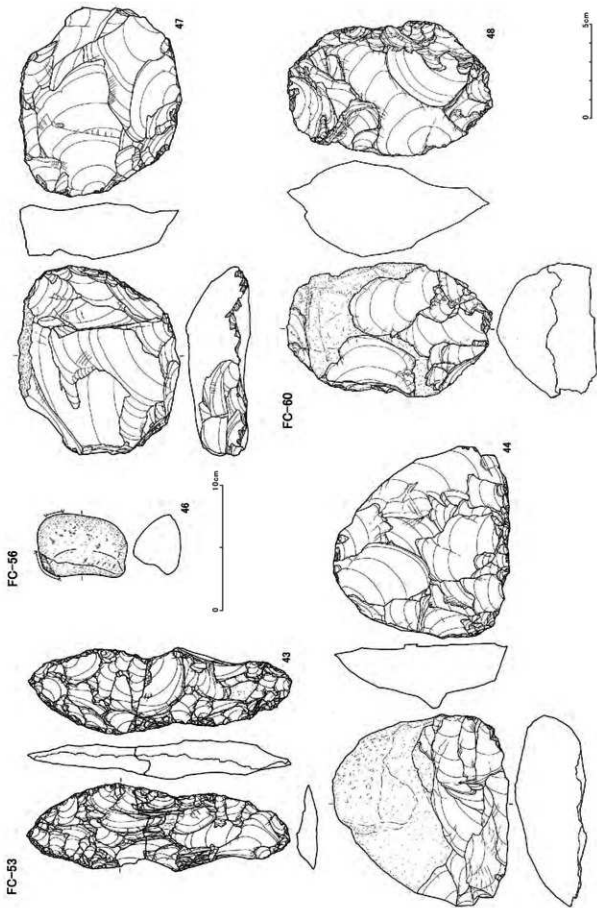


图IV-24 FC-48 石器

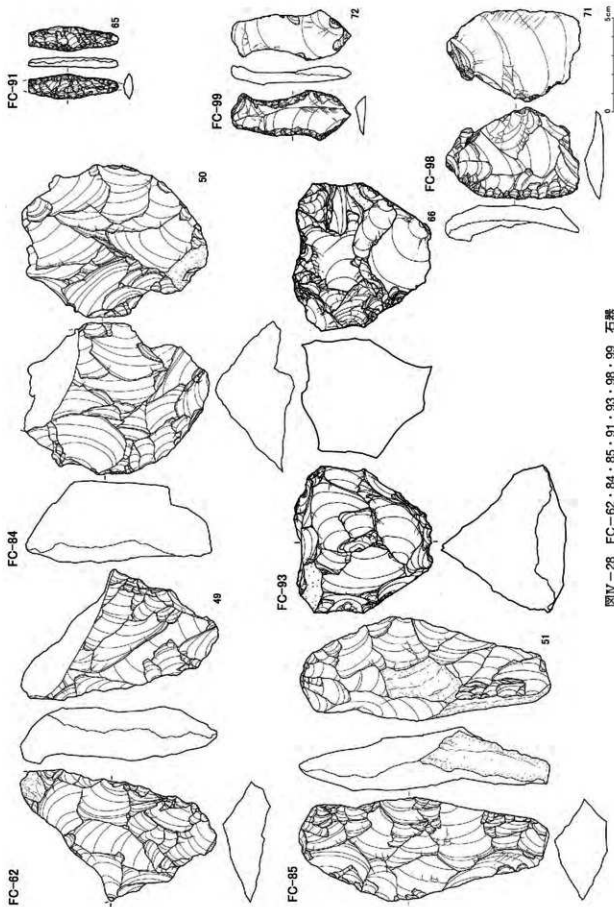


圖IV-25 FC-47·49·52 石器

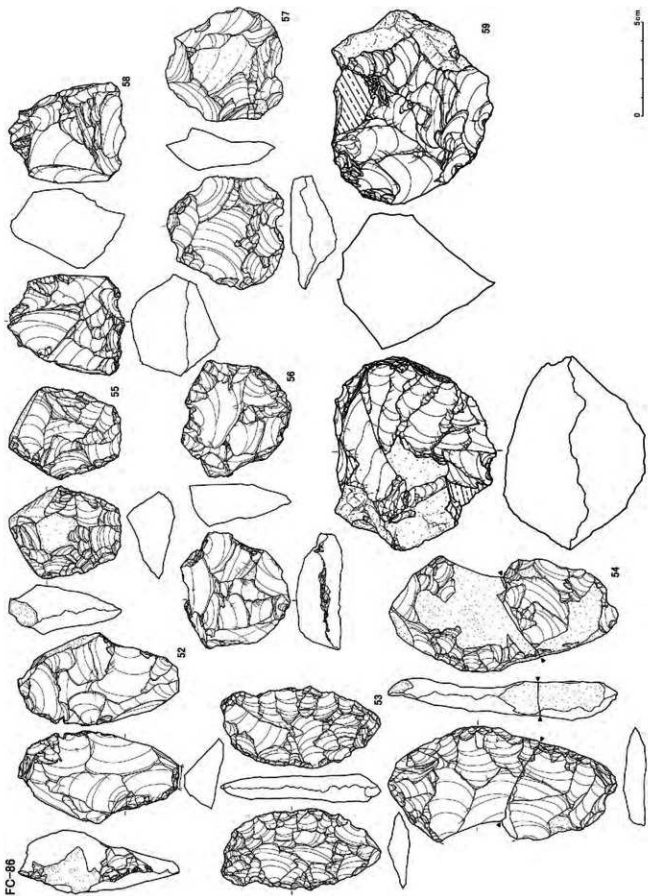




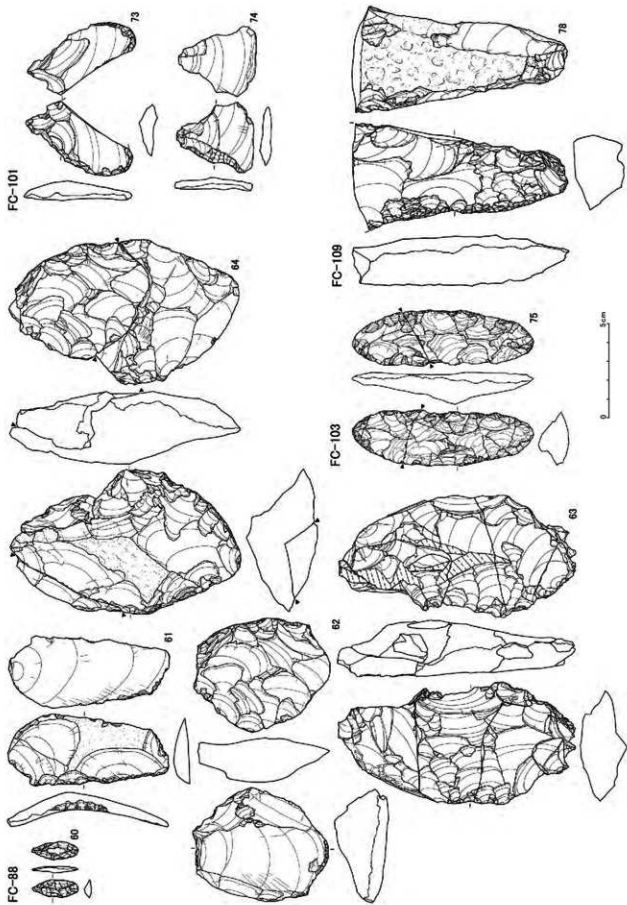
图IV-27 FC-53·56·60 石器



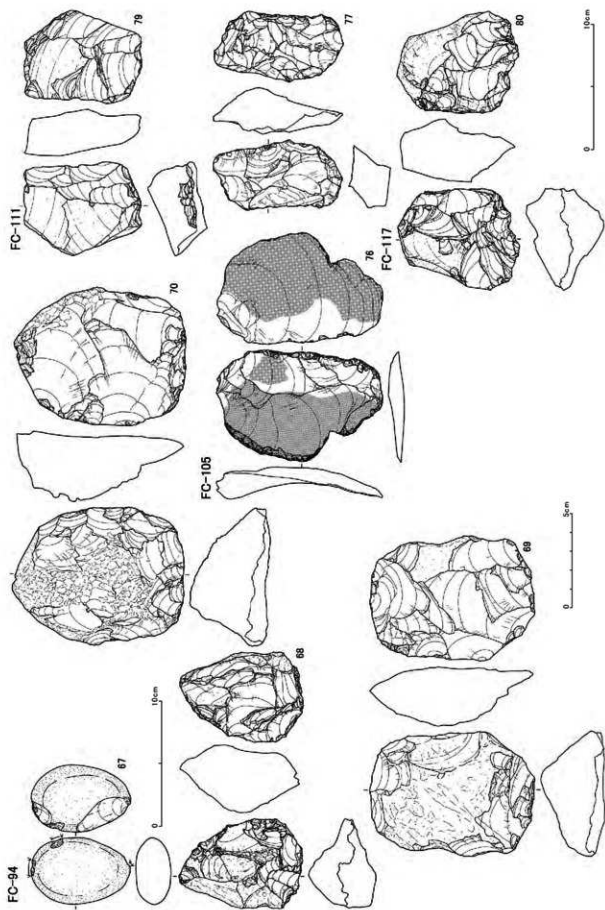
图IV-28 FC-82・84・85・91・93・98・99 石器



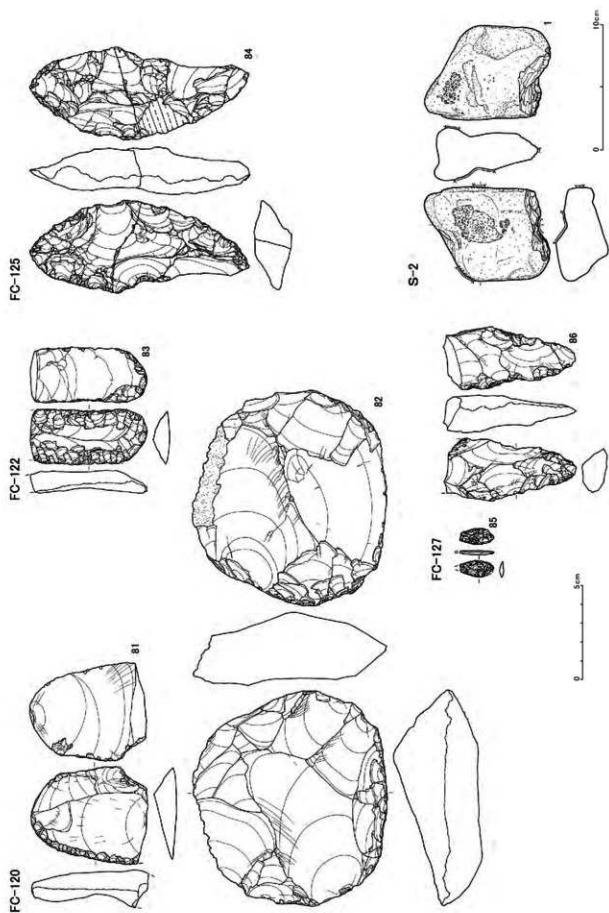
圖IV-29 FC-86 石器



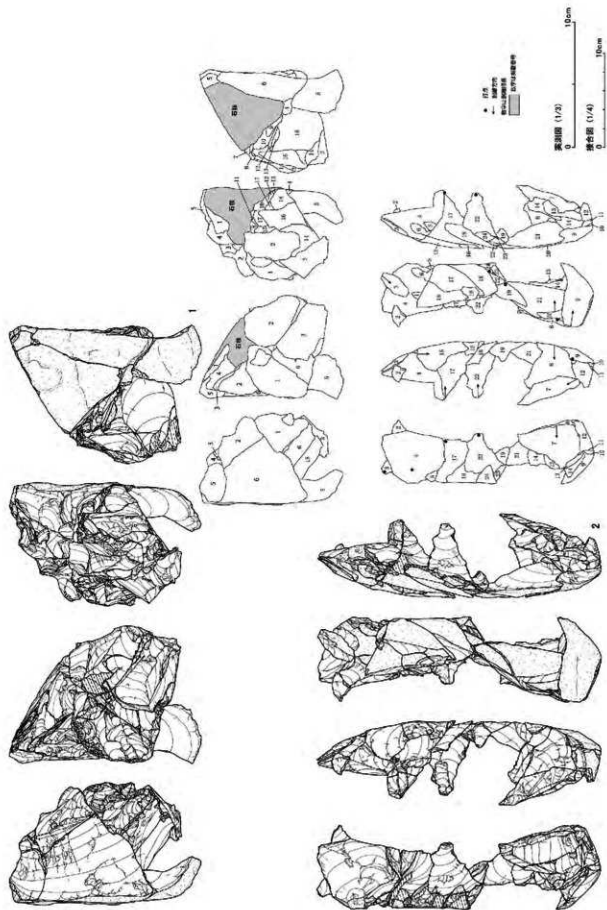
图IV-30 FC-88·101·103·109 石器



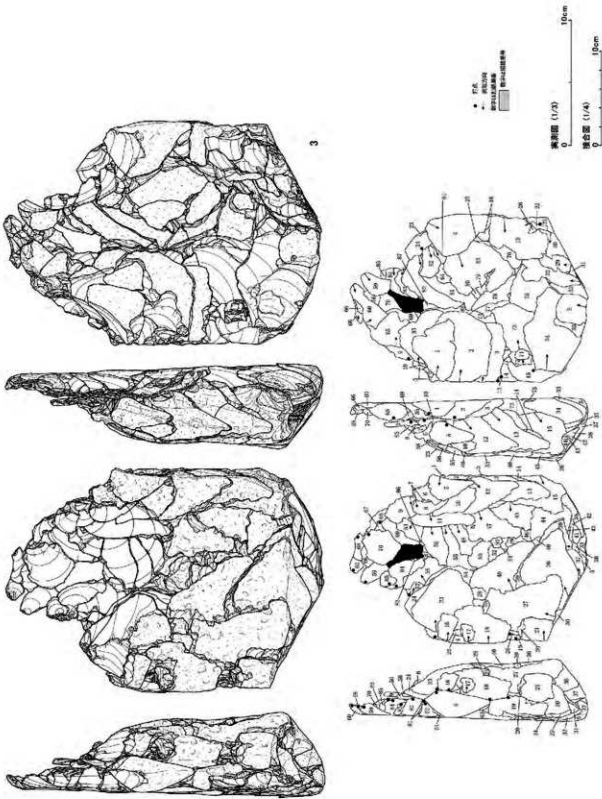
图IV-31 FC-94·105·111·117 石器



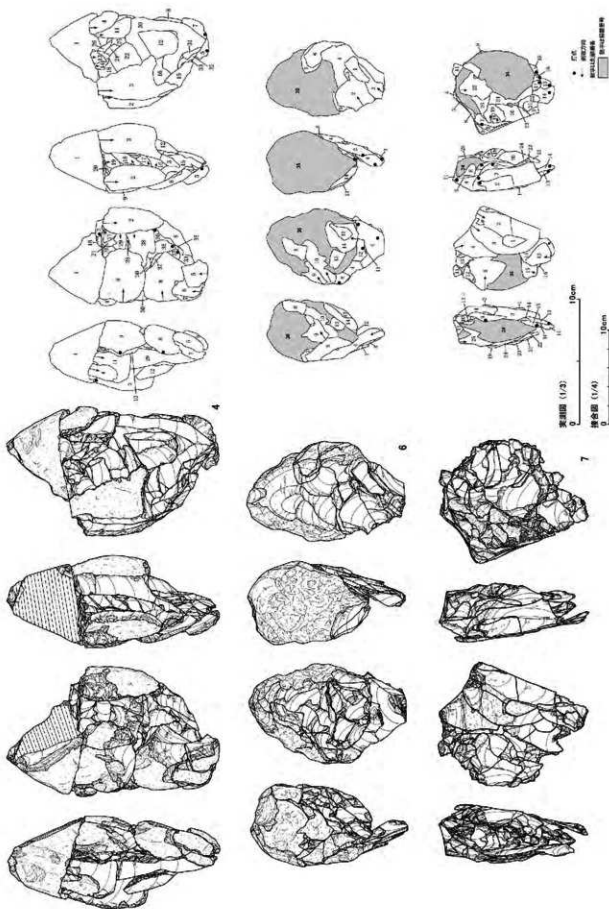
图IV-32 FC-120・122・125・127・S-2石器



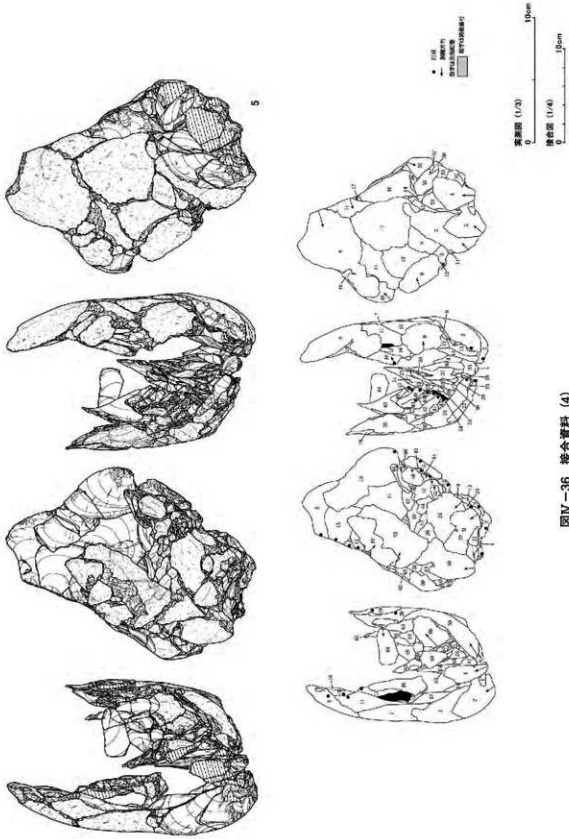
图IV-33 综合资料 (1)



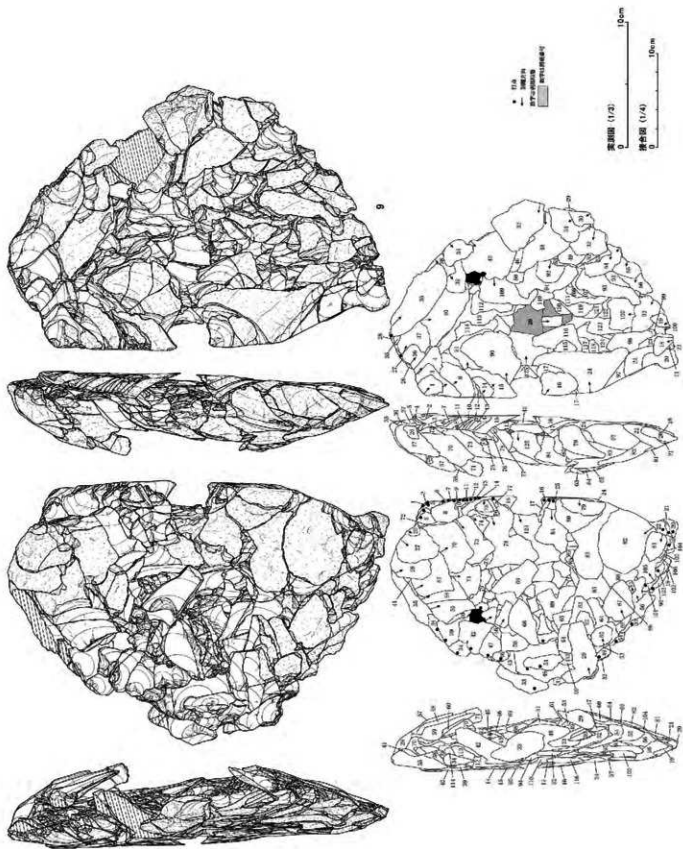
図IV-34 接合資料 (2)



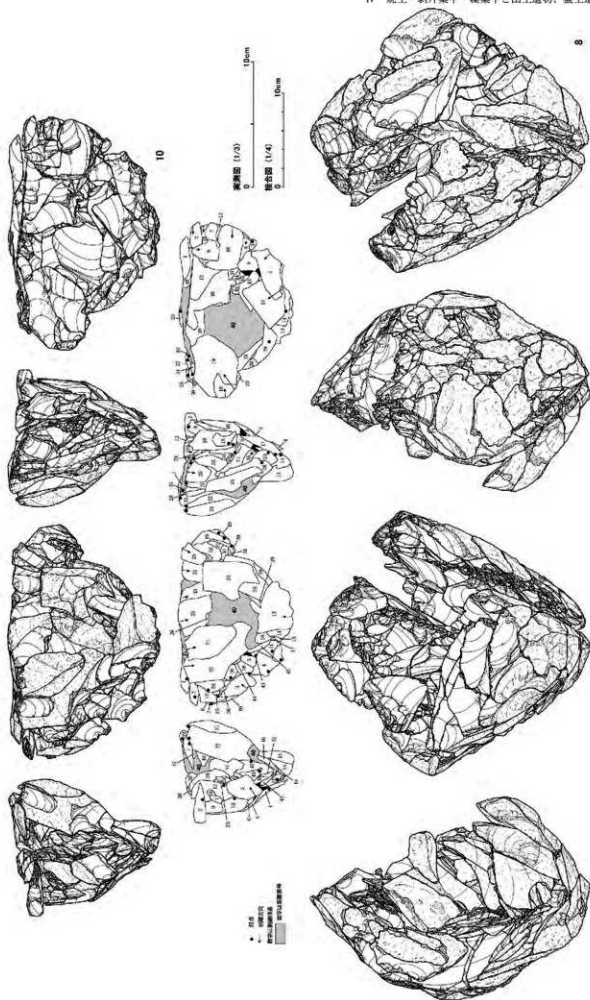
图IV-35 复合真料 (3)



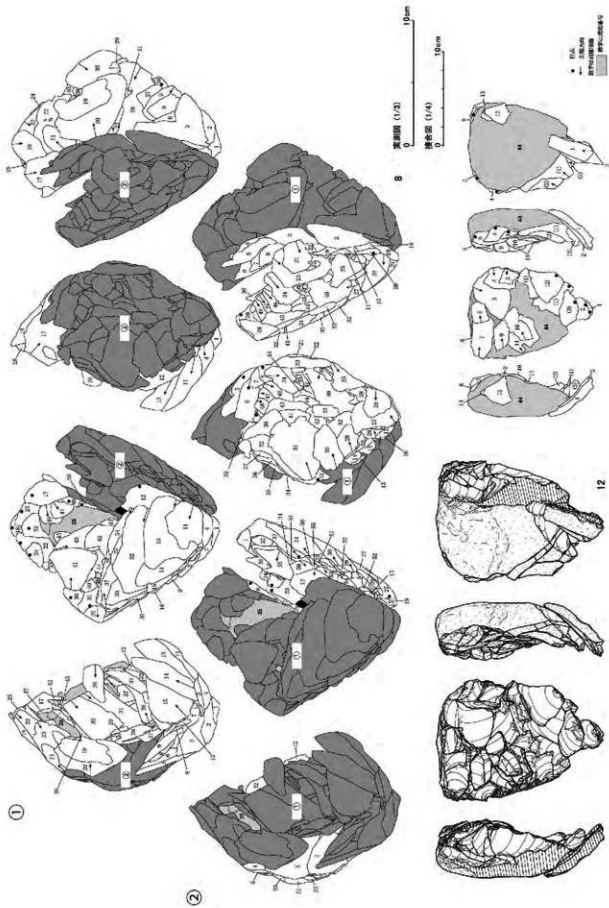
図IV-36 接合資料 (4)



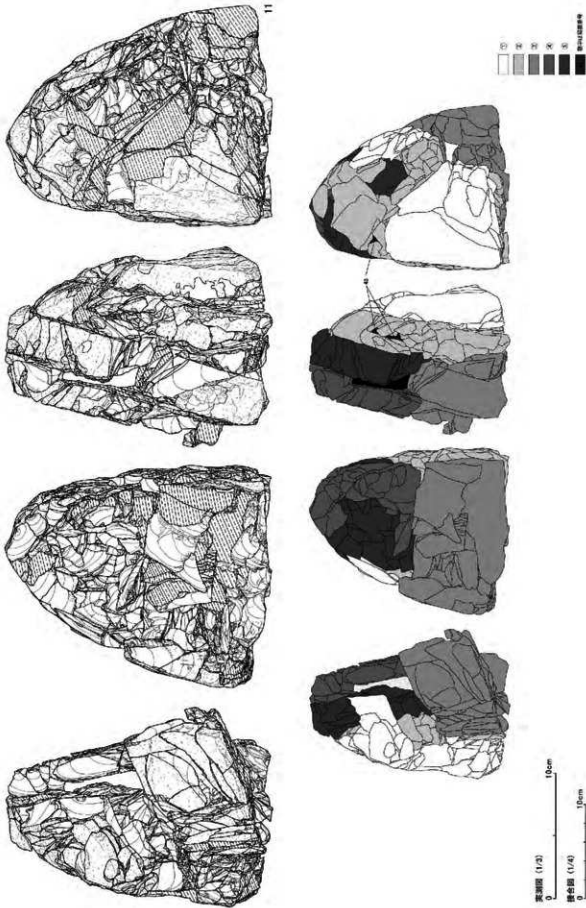
図IV-37 複合資料 (5)



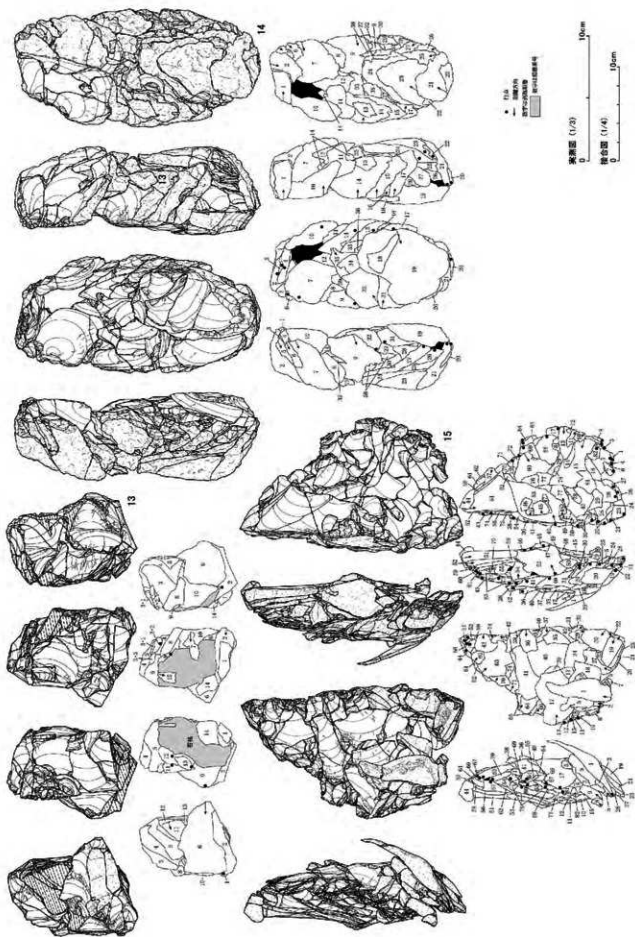
図IV-38 接合資料(6)



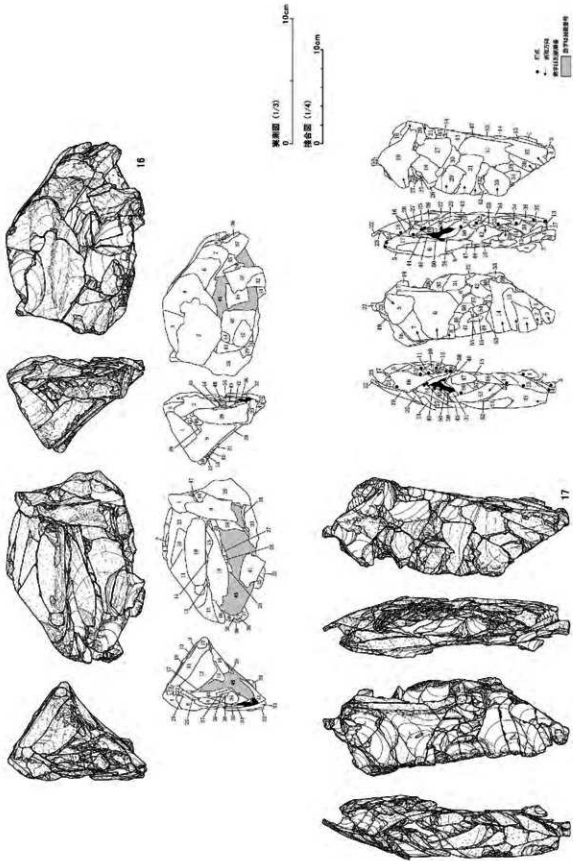
图IV-39 复合真料 (7)



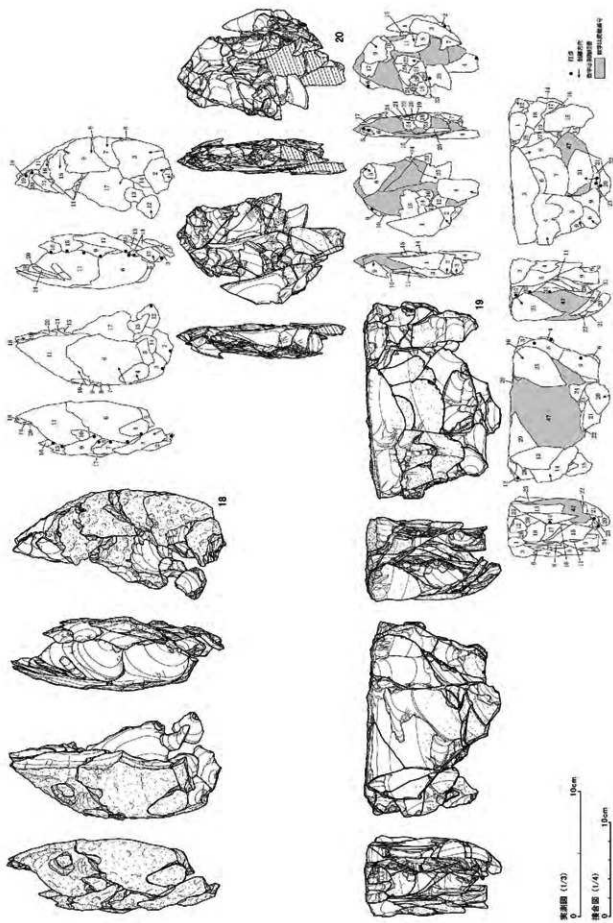
図IV-40 接合資料 (8)



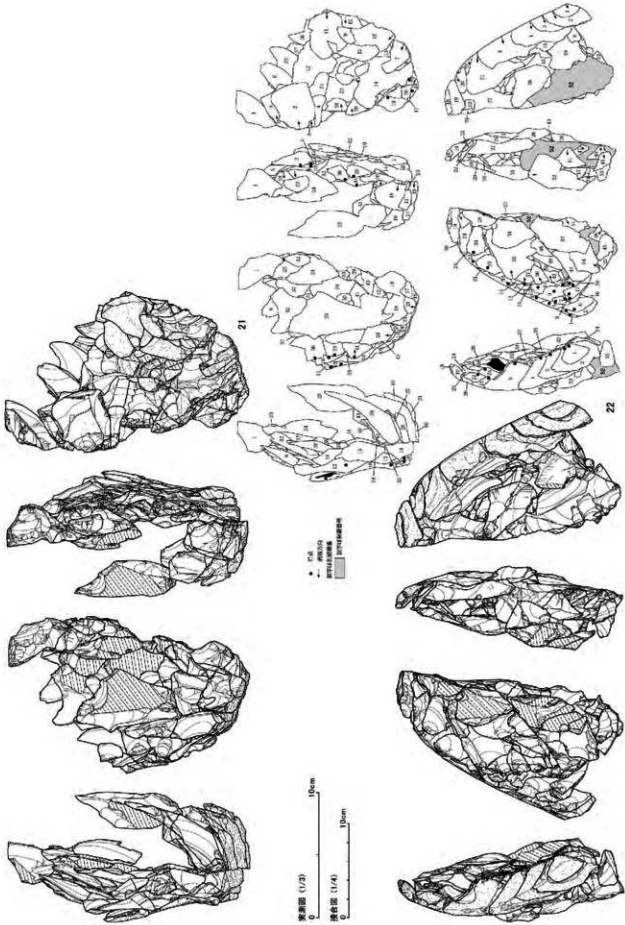
図IV-41 複合資料 (9)



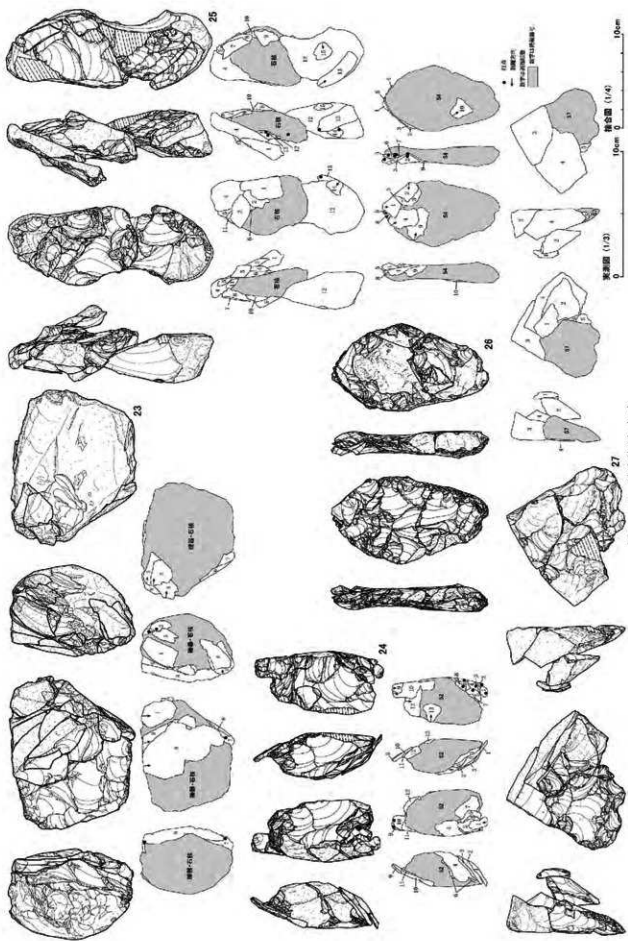
図IV-42 掘合資料 (10)



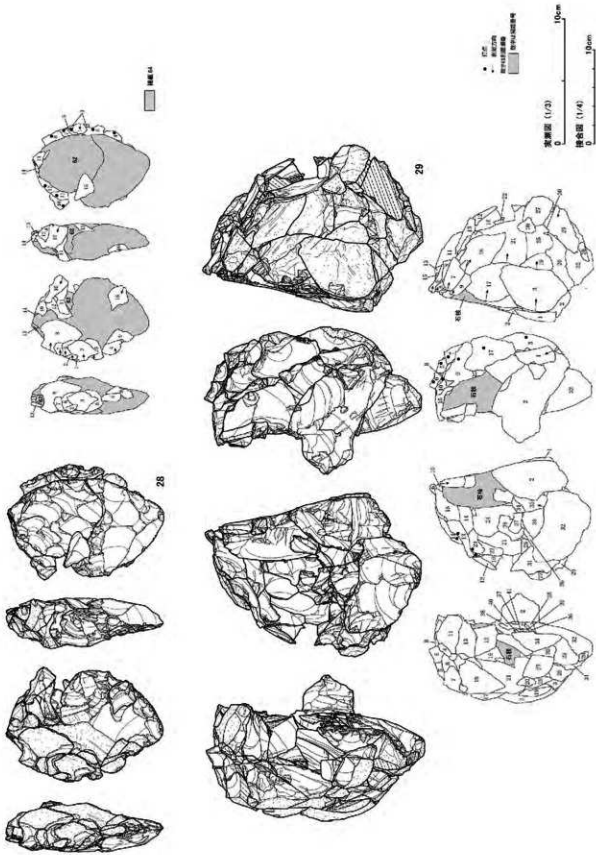
図Ⅳ-43 接合資料 (11)



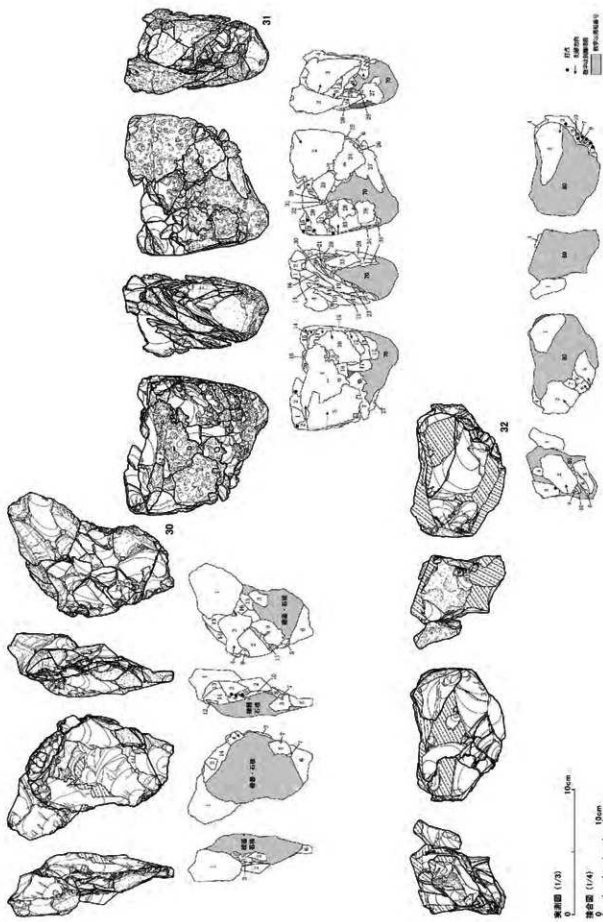
図IV-44 接合資料 (12)



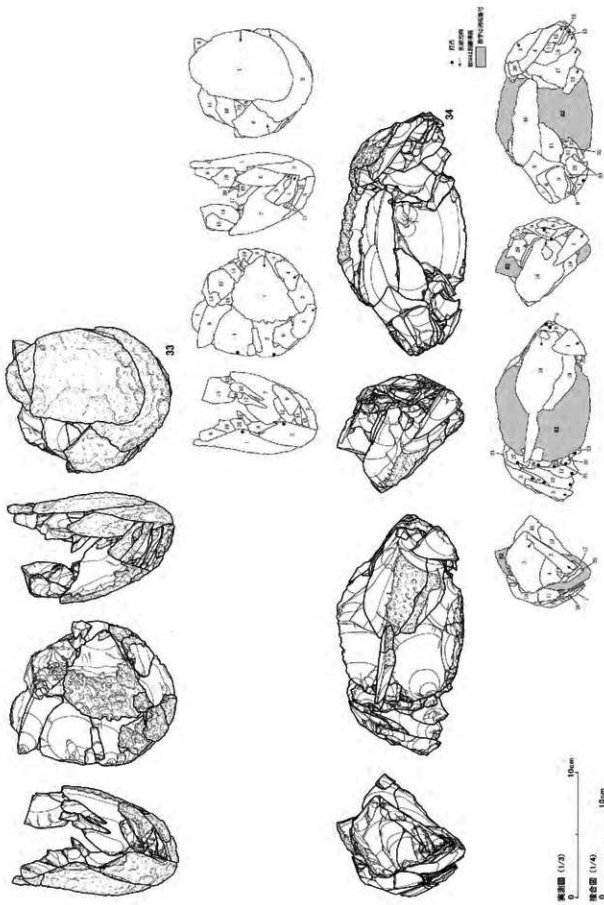
圖IV-45 複合資料 (13)



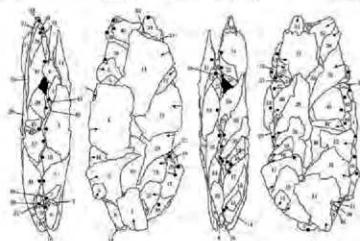
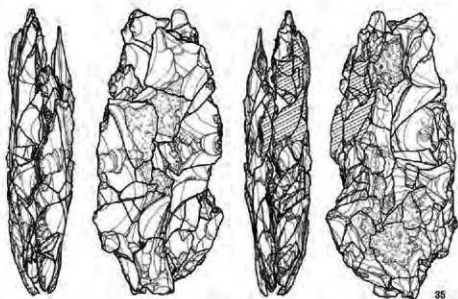
図IV-46 接合資料 (14)



図IV-47 複合資料 (15)



図IV-48 接合資料 (16)



● 刀口
 ○ 刀背
 ■ 刀身
 □ 刀柄

家美園 (1/2)
 0 10cm

清合園 (1/4)
 0 10cm

圖IV-49 接合資料 (17)

4 盛土遺構 (図Ⅳ-50～100 図版4～10)

(1) 盛土遺構の検出と調査 (図Ⅳ-50～53)

平成20年11月に範囲確認調査を実施した。しかし、試掘範囲に、使用中の「人家」「豚舎」「倉庫」「車庫」などの構造物や使用中の侵入路等があり8か所を試掘するにとどまった。この試掘で、盛土を確認したものの、調査の実施計画を策定するにはデータが少なかった。そのため、平成21年度の調査開始と共に、盛土遺構の「範囲」「層厚」「遺物量」等のデータを得るために、トレンチ調査を実施した。

トレンチ調査は、重機による攪乱層(1層)の除去後から開始され、上面の清掃作業・精査を実施し、盛土範囲を平面的に把握することに努めた。上面の精査の結果、盛土遺構範囲を確認し、調査区を横断するAトレンチ(北東-南西方向:Mライン+2m・M86～M4間)。調査区を縦断するBトレンチ(北西-南東方向98ライン+3m)、Cトレンチ(北西-南東方向88ライン+2m)、Dトレンチ(北西-南東方向91ライン+3m)を設定し、トレンチ調査を開始した(図Ⅳ-53)。

その結果、AトレンチではM86～91で掘上土・盛土層を、M94～M3ラインの盛土層を確認した。BトレンチではK98～O98ラインで厚さ50cmほどの盛土層を確認した。C・Dトレンチでは盛土、掘上土と共に大型の住居跡の落ち込みを確認した。

(2) 盛土層 (図Ⅲ-4～6・図Ⅳ-50～53)

盛土層は、基本土層のⅡ層中に認められた(図Ⅲ-4)。基本土層のⅡ層は、Ko-d(駒ヶ岳降下火山灰:1640年降下)・火山灰B-t m(白頭山-苦小牧火山灰:10世紀前半降下)層によって大きく2層に分層され、火山灰B-t m層の上部をⅡ上層、下位をⅡ下層と呼称した。

盛土層はⅡ下層に介入し、火山灰～盛土層をⅡ中層、盛土より下位をⅡ下層と呼称した。

盛土は、Ⅱ層+Ⅲ層+Ⅳ層(黄褐色粘質土)からなり、多量の焼土粒・炭化物・遺物が混じる。

盛土層の最下面からはⅡ群B-1類土器～Ⅱ群B-3類土器が、最上部からはⅡ群B-5類土器・Ⅲ群A類土器が出土、Ⅱ中層からはⅢ群B類土器～Ⅶ群C類土器・Ⅶ群土器が出土した。また、焼土(F)・剥片集中(FC)のほとんどは、盛土層から検出された(図Ⅲ-52)。

Aトレンチの土層断面は図Ⅲ-5に、Bトレンチの土層断面図は図Ⅳ-53に示した。

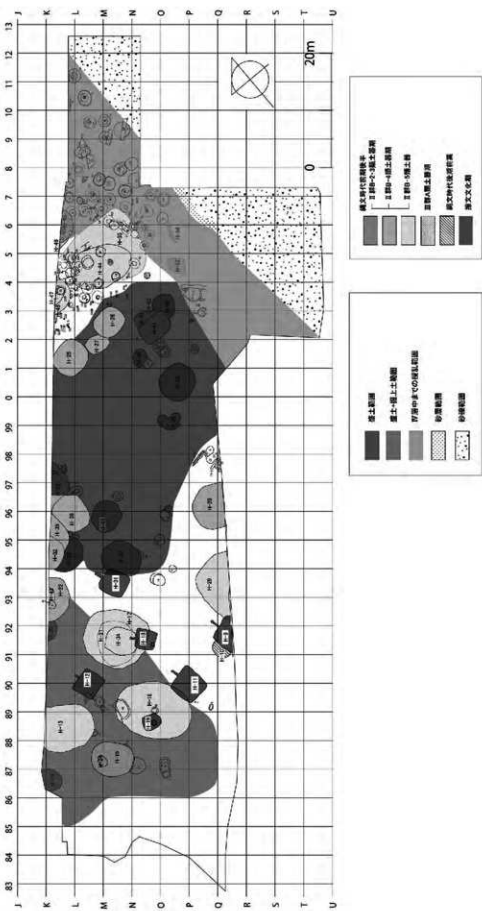
(3) 分布範囲 (図Ⅲ-5・6・図Ⅳ-53)

盛土層は94～4ライン間に認められ、Aトレンチ(Mラインメインセクション)でM3とM4区間で盛土の末端が確認されている。

しかし、2～13ラインの東側はⅡ層～Ⅵ層の砂礫層まで及ぶ削平が加えられ、焼土が検出されていることから、O～Uラインの1～5ライン付近まで盛土が及んでいた可能性がある。

86～93ラインまでの範囲に調査者によって盛土や掘上土とされた範囲がある。その周辺からⅡ群B-3類土器期の住居跡2軒(H-14・20)が検出され、Ⅱ群B-3類土器がK87・90・91区等からまとまって出土し、遺物分布においてもやや密な分布が認められている。このような遺物の出土状況から、「盛土+掘上土」として扱った。盛土が覆土から確認されている住居跡には2通りあり、H-14・20・24・30・36・37・43・49などの人為的な廃棄、H-25・26・27・28・29等に認められる流れ込みによる自然堆積のものが、前者には多量の遺物が伴って検出されている。

Bトレンチの土層断面図と98区列から出土したPO土器の垂直分布図を重ね合わせたものが図Ⅳ-53である。Ⅱ群B-2類土器・Ⅱ群B-3類土器(緑線)はほぼⅡ下層上面～盛土の下部から出土し、分布は山側の調査区際から海側の調査区O98区の手前まで分布している。Ⅱ群B-4類土器(赤線)は盛土中位から出土し、調査区M98区～N98区周辺まで分布している。Ⅱ群B-2類土器・Ⅱ群B-3類土器(緑線)に比べ、4mほど山側に後退し、海側の斜面に多く廃棄されていることがわか



図IV-50 竪穴住居跡・土坑位置図・盛土遺構・埋土遺構位置図

る。Ⅱ群B-5類(青線)土器は、盛土中位から盛土上位にかけて出土している。調査区L98区～P98区周辺まで分布している。分布範囲は山側に5m、海側はⅡ群B-4類土器の分布よりさらに10mほど拡大し、N98～P98区に形成された盛土の斜面部分から多く出土している。

Bトレンチの土層断面図と98区列のP O土器の垂直分布図を重ね合わせた結果、土層断面とP Oの出土位置が概ね符合することが認められている。

(4) 盛土層の形成 (図IV-54～57)

盛土の形成は3段階に分けられる。

第1段階：Ⅱ群B-1～3類土器期

盛土出土のⅡ群B-2・3類土器の集中は、M・N96～99区(第1段階の盛土1)、K86・87区(第1段階の盛土2)の2か所認められる。第1段階の盛土1の周辺には同期のH-24・30・33・36・37・43・49、P-37・38が、第1段階の盛土2の周辺にはH-14・20が隣接して位置する。また、第1段階期の住居跡には、同期の土器が覆土から多量に出土したもののH-24・30・36・43・49、P-37・38、覆土から同期の土器が出土しなかったものにはH-33・37がある。この覆土の違いは第1段階の盛土形成時期の違いを示すものと考えられる。

第1段階の古段階は、H-43とH-23・30の間、K～O97～1区周辺に形成され、この状況は分類・調査区別分布図(図IV-57)のⅡ群B-1・2類土器の分布がこの範囲に集中することと合致する。盛土形成の萌芽期はこの時期に求められる。この時期の遺構としてH-24・30・36・43・49、P-37・38が考えられる。

第1段階の新段階は、H-24・30・36・43・49、P-37・38の廃絶後、盛土範囲は、廃棄された住居跡の窪みに多量のⅡ群B-2・3類土器が投棄され、H-49位置する西側とH-24・30・36・43、P-37・38等が分布する海側(北東側)に拡大した様子が窺える。しかし、この段階ではこれらの窪みは完全に埋まりきらず、次の段階でも投棄の場所として用いられている。この段階の盛土末端部は、第2段階のⅡ群B-4類土器期の住居跡の検出範囲の西側に認められる。この時期の遺構として覆土から同期の土器が出土しなかったH-33・37が考えられ、これらによって新たに盛土形成が進んだと考えられる。

第2段階：Ⅱ群B-4類土器期

Ⅱ群B-4類土器期のH-22・25・26・27・28・29・32・35・38・39などが検出されている。

第2段階の盛土の範囲は、盛土層出土のⅡ群B-4類土器の集中によって知ることができる。Ⅱ群B-4類土器の集中は、M・N96～99区(第2段階の盛土1)、K89～91区(第2段階の盛土2)の2か所認められる。Ⅱ群B-4類土器期の住居跡は第1段階の盛土1の縁辺部に沿って構築されている。盛土は、第1段階の新段階のH-24・30・36・43・49、P-37・38の窪みには投棄され続けられ、新たにⅡ群B-3類土器期のH-37やⅡ群B-4類土器期の古段階に位置付けられる土器が出土したH-25・26の覆土にはⅡ群B-4類土器期の土器が廃棄されている。覆土に盛土の人為的投棄が認められない山側の当該期の住居跡H-32・35・38・39などから盛土が供給され、さらに東側に拡張が進んだものと考えられる。

第3段階：Ⅱ群B-5類土器期

Ⅱ群B-5類土器期のH-13・15・16・17・44などが検出されている。

第3段階の盛土の範囲は、盛土層出土のⅡ群B-5類土器の集中によって知ることができる(図IV-57)。Ⅱ群B-5類土器は調査区全域に分布する。Ⅱ群B-5類土器の集中は、M～O96～99区(第3段階の盛土1)、K88～90区(第3段階の盛土2)の2か所認められる。

同期の住居跡は東西2か所に分散し、分布する。西側は、大平川の河岸段丘の縁辺部に、東側は前段階の住居跡H-25・26・27に隣接しながらもその窪みを避け、第2段階の盛土1の縁辺部に沿った位置に、H-44・47・48・55が構築されている。第3段階の盛土1の上面から同期の土器が正立・倒立の状態出土している。Ⅱ群B-5類土器の分類・調査区別分布図(図Ⅳ-57)を見ると、削平範囲を示した図Ⅳ-50と重ね合わせるとその分布が調査区北東側の削平範囲にも及んでいた可能性があり、Ⅱ群B-5類土器期の盛土範囲はもっと海側に分布していたと思われる。

しかし、後続するⅢ群A類土器期には盛土周辺に同期の遺構が構築されることはなく、盛土形成が終息する

(5) 遺物の出土状況(図Ⅳ-54～100)

盛土と掘上土から984,566点出土し、土器834,871点、石器は149,695点である(図Ⅳ-54～57)。土器は各時期のものが出土し、主体はⅡ群B類土器である。Ⅱ群B類土器にはⅡ群B-1類土器からⅡ群B-5類土器があり、土器群毎に分布の違いが認められる。

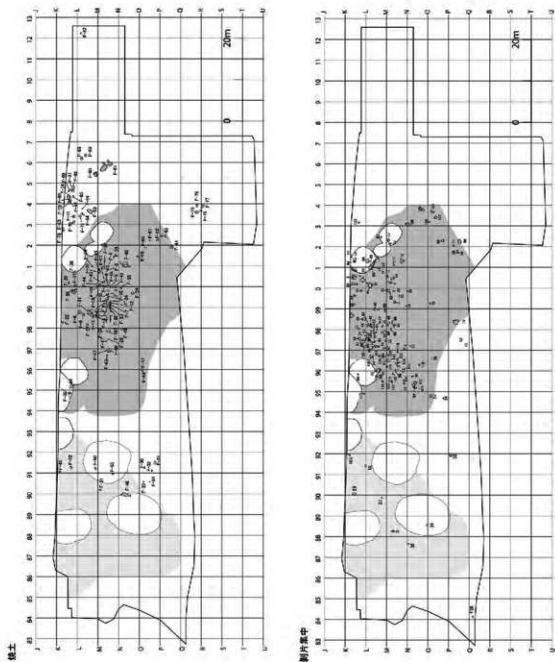
盛土からは多くの一括土器が得られた。これらの土器は調査区毎に「PO番号」を付け、位置図・出土レベルを記録して取り上げた。その総数は約800個体で、M96～M99区・N96～N99区に集中し、M・N97区からは100個体以上が取り上げられた。これらについては出土状況図を作成し、復原土器と共に出土状況を示した(図Ⅳ-64～78)。また調査区一括で取り上げられ、復原できた土器についてもPOとの接合関係の確認し、接合・復原を実施した。これらの復原について「調査区別土器出土位置図」として示してある(図Ⅳ-79～100)。なお、復原土器が多い調査区については細分別(Ⅱ群B-1類・Ⅱ群B-2類)や体部文様帯別(1a・2a・2d等)等に分けて図示している。

PO土器の復原できた土器については、「分布範囲」で前述したBトレンチの土層断面図と98区別のPO土器の垂直分布図を重ね合わせた図が概ね出土層位・分布の傾向を示し、有効であることが確認されたため、Ⅱ群B-1類土器からⅡ群B-5類土器の出土レベル・出土位置の違いを明確にするために他の調査区においても行った。95～99ラインを山側から海側に向かって北東方向からの見通し図と、N95～99区を海側からの見通し図をレベルがわかる垂直分布図をライン毎に作成した(図Ⅳ-58～63)。その結果、Ⅱ群B-2・3類土器は盛土下位～Ⅱ下層、Ⅱ群B-4類土器は盛土中位、Ⅱ群B-5類土器は盛土上部～盛土上面から出土する傾向が認められた。出土分布は、Ⅱ群B-2・3類土器は調査区中央部に中心をもちながら山側に、Ⅱ群B-4類土器は調査区中央部に中心をもちながらもやや東側に拡大する傾向が窺えた。Ⅱ群B-5類土器は調査区中央から海側から多く出土し、さらに東側に分布範囲を拡大している。

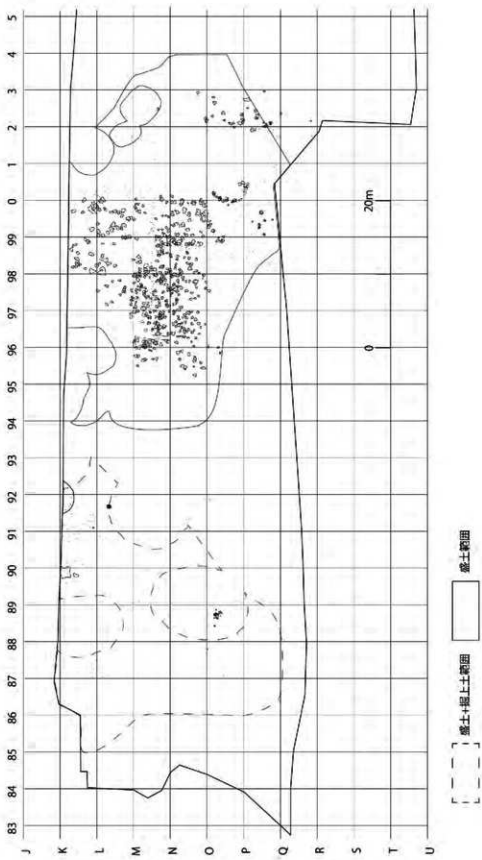
Ⅱ群B-4類土器・Ⅱ群B-5類土器は、盛土の中央の平坦部分より海側の斜面部分に廃棄し、徐々に海側に拡大した様子が窺える図録1や図版8の盛土の堆積状況と符合する。

なお、Ⅱ群B-2・3類土器はH-24・30・36・49、P-37・38の覆土中に廃棄が認められ、盛土中から多量の復原土器が得られている。このことからⅡ群B-2・3類土器の分布はN・O99～4区まで濃密な分布が及んでいたものと考えられる。

なお、遺構覆土、盛土中から検出された焼土・剥片集中の土壌についてフローテーションを実施した。その結果、炭化種実・焼骨片が得られ、同定を行った。焼骨片については、エイ・サメ類・サケ属・サバ類などの魚類、シカ・ヒグマなどの陸獣、アシカ科などの海獣、鳥類に同定され、利用されていたことが分かった(Ⅵ章-1参照)。炭化種実については報告済である。(熊谷)

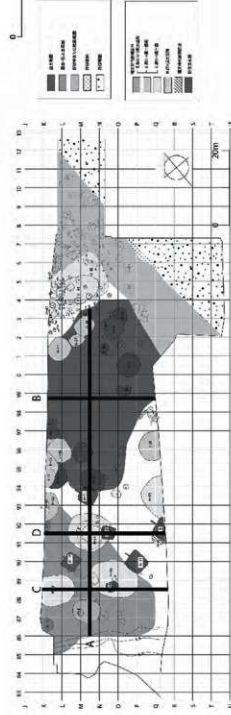


图IV-51 烧土・剥片集中七盛土遺構範圍图

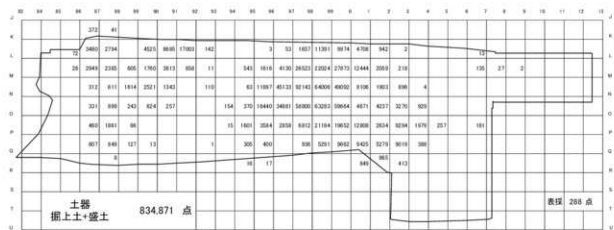
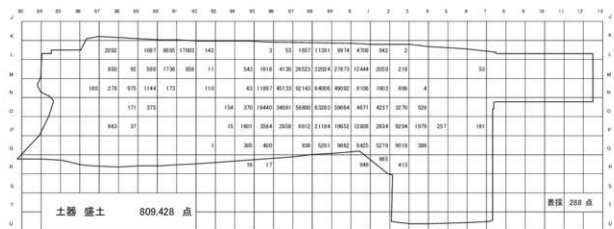
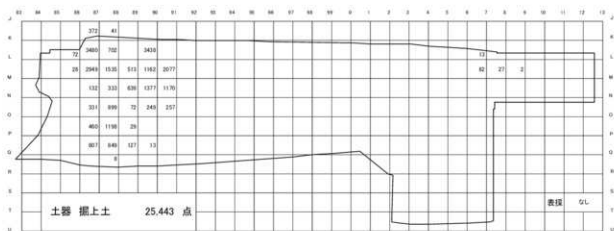


圖IV—52 POと盛土遺構範圍図

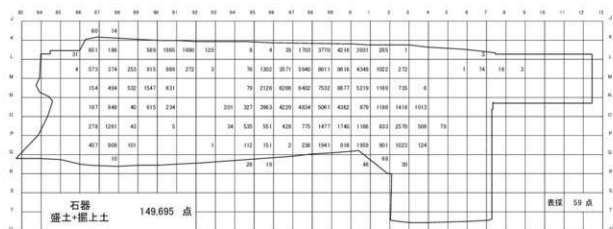
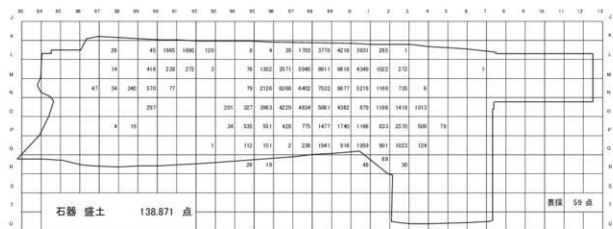
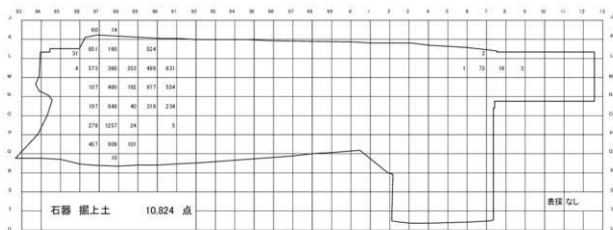
98ライン (Bトレンチ) メインセクション



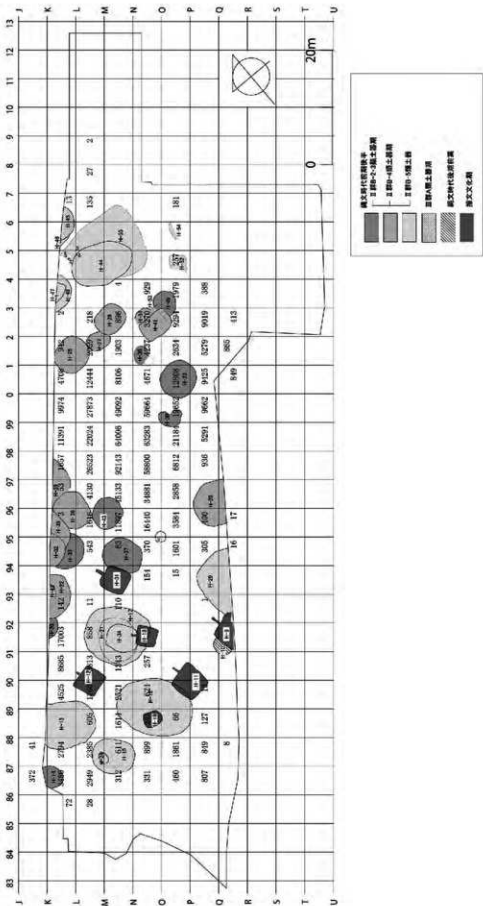
図IV-53 98ライン (Bトレンチ) メインセクション図



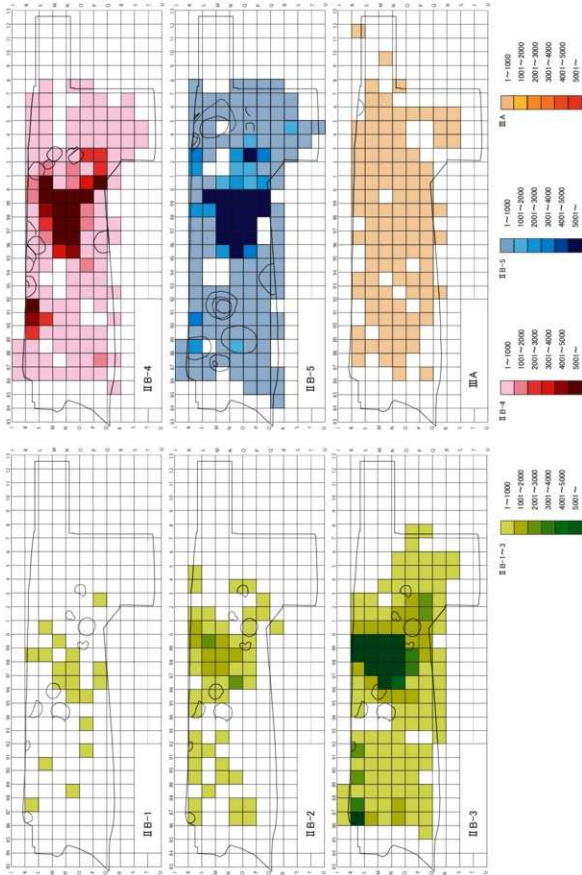
図N-54 盛土・掘上土出土土器の分布



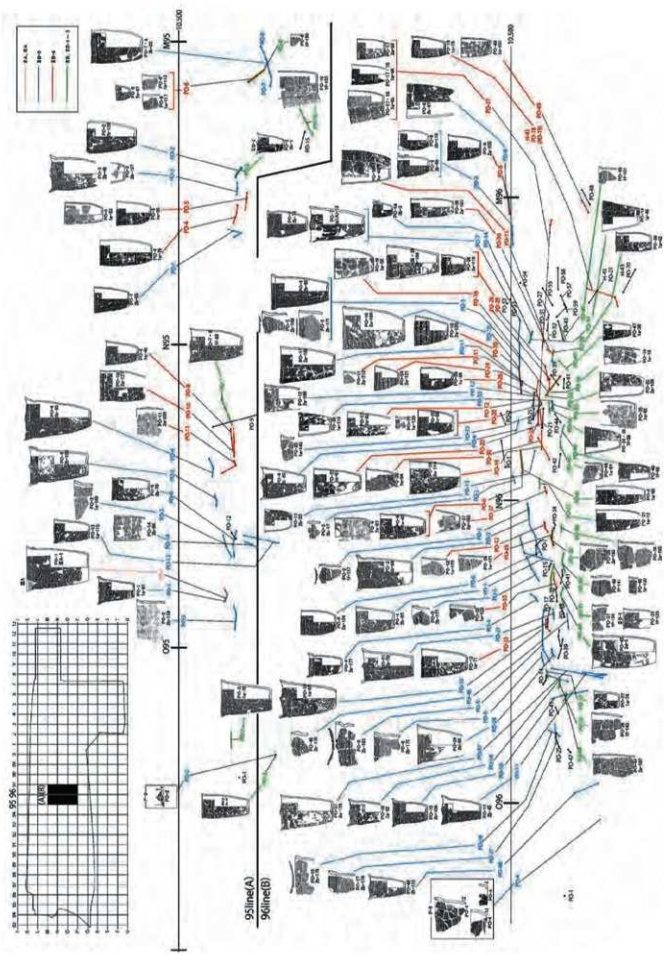
図N-55 盛土・掘上土出土石器の分布



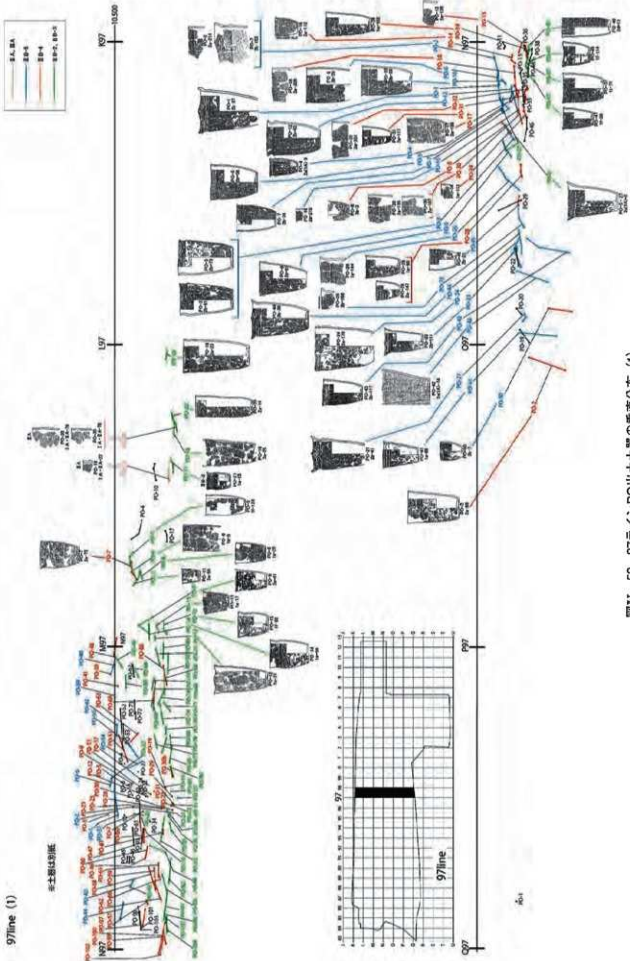
図IV-56 埴土・掘上出土器の分布



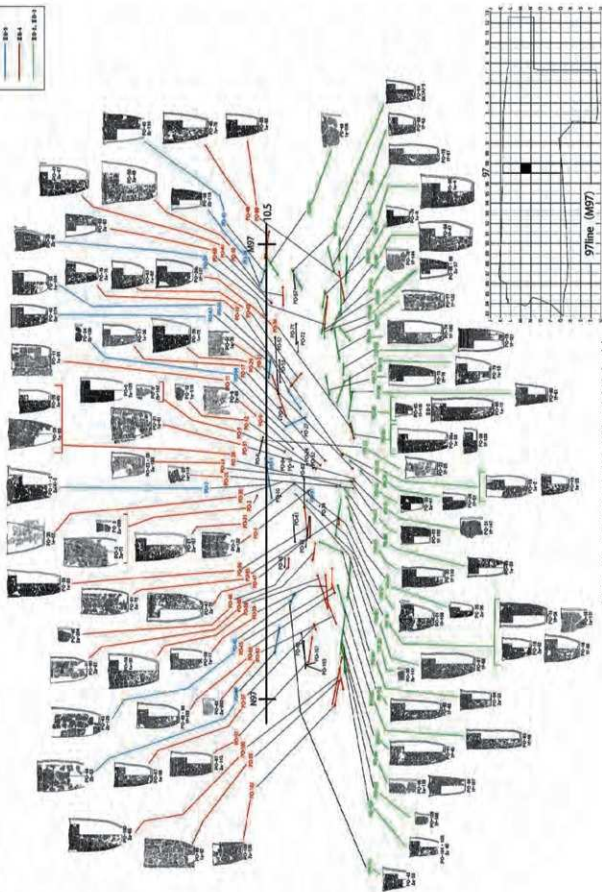
図IV-57 盛土・掘土出土土器の分類別出土点数分布



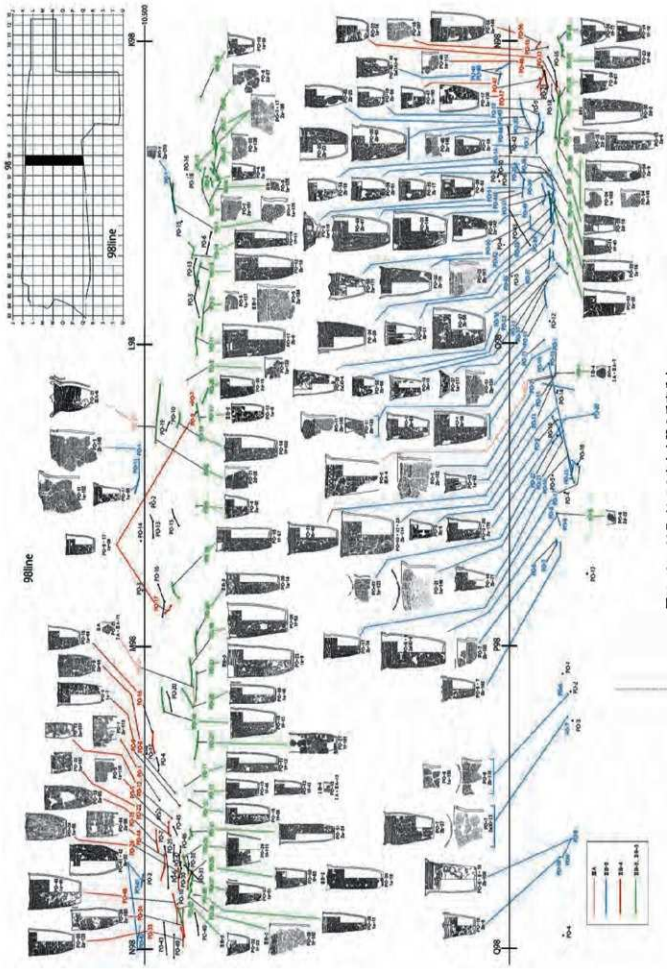
図IV-58 95・96ラインPO出土土器の垂直分布



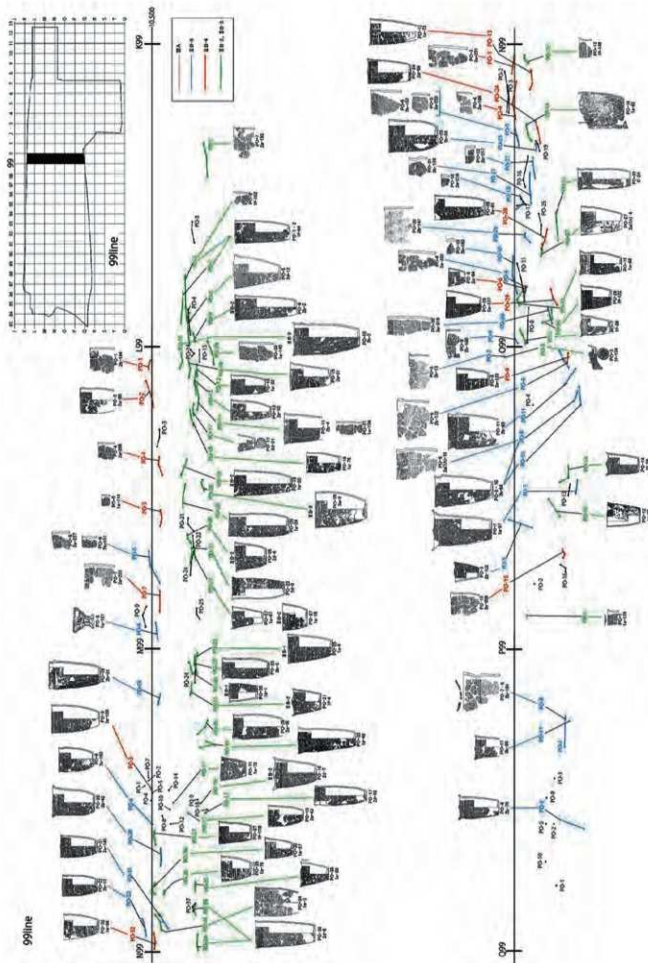
図IV-59 97ラインPO出土土器の垂直分布 (1)



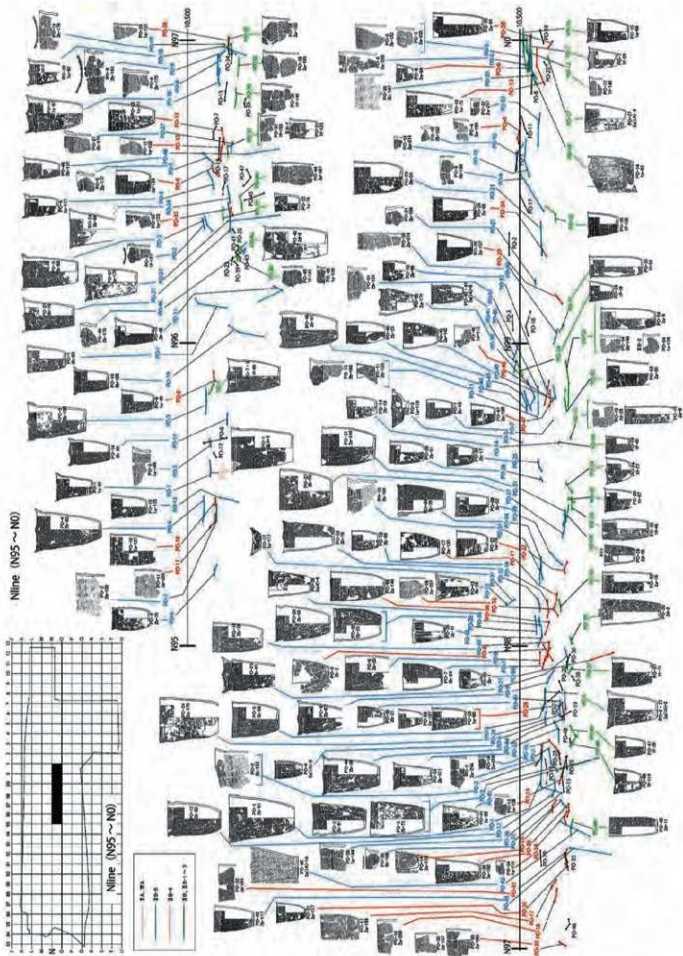
図IV-60 97ラインPO出土器の通直分布 (2)



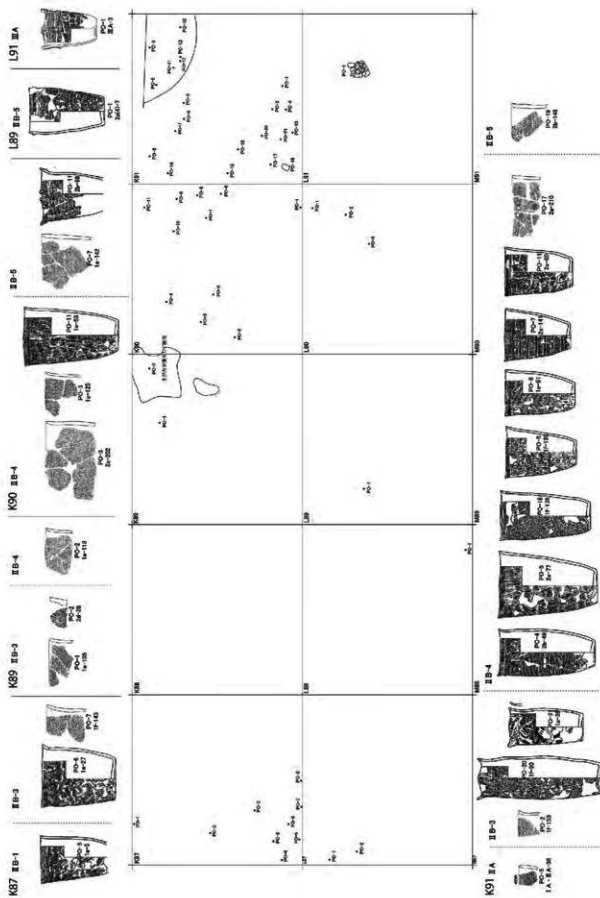
図IV-61 98ラインPO出土土器の垂直分布



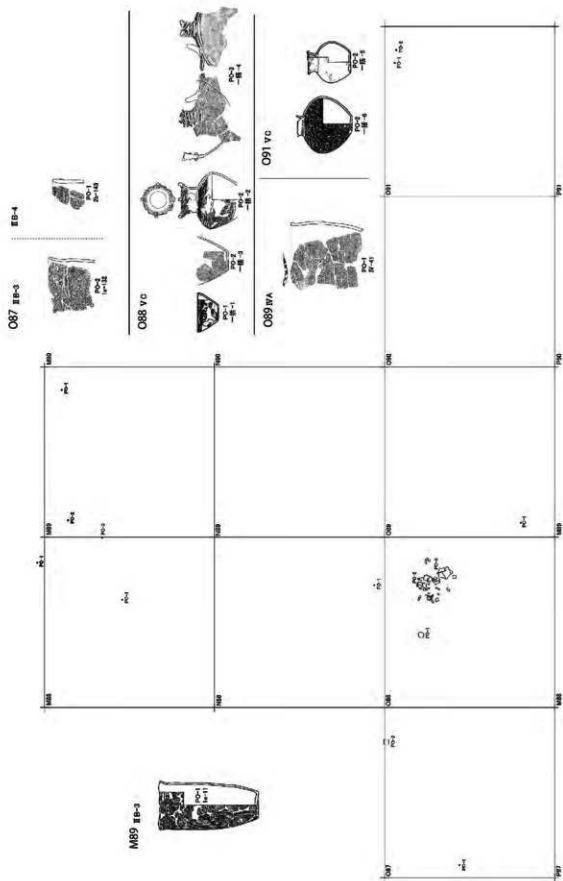
図IV-62 99ラインPO出土器の垂直分布



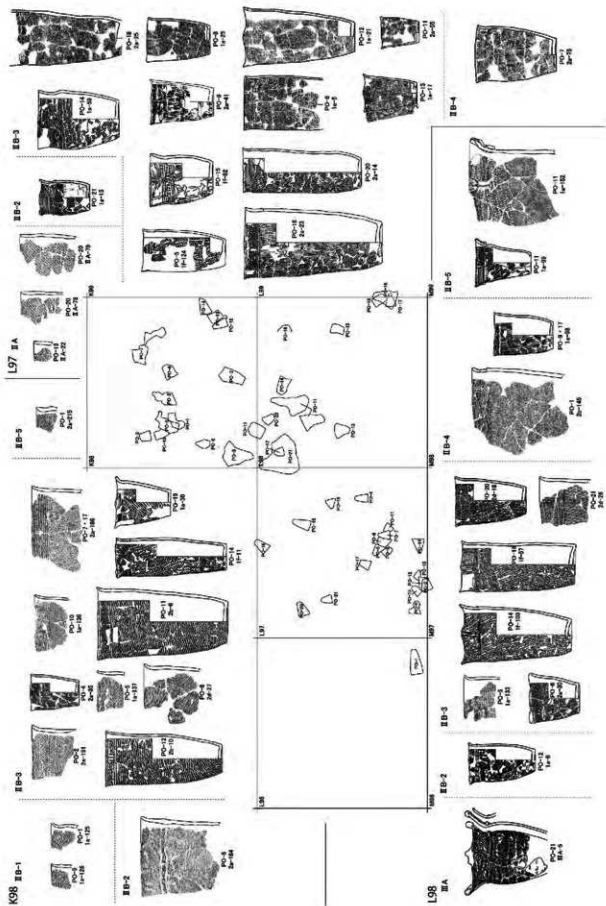
図Ⅳ-63 N95～N0ラインPO出土土器の重分布



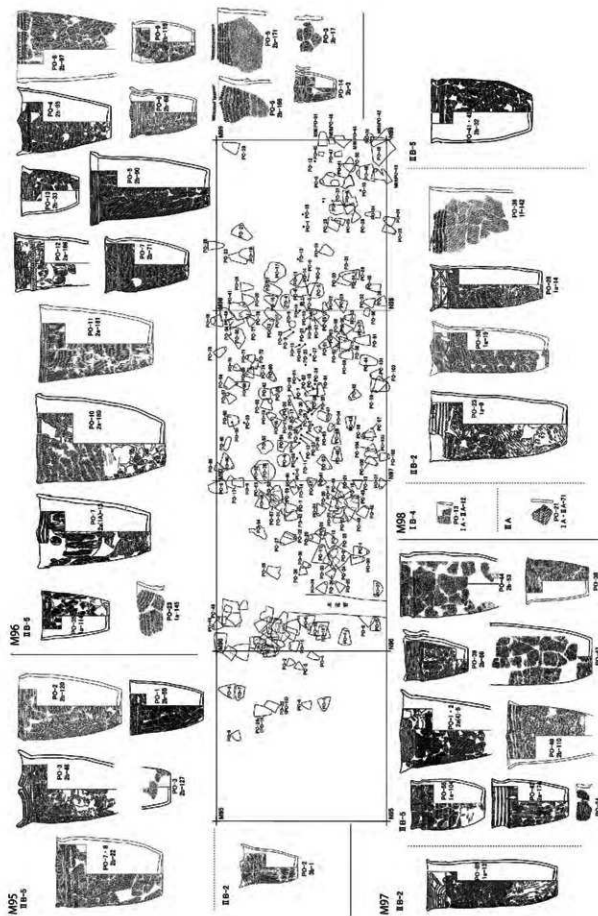
図IV-64 POの土耕出土位置図 K・L87～91区 IA・IIA・IIB-1・3～5 (1a・1e・1f・2a・2a(4)・2b・2d)



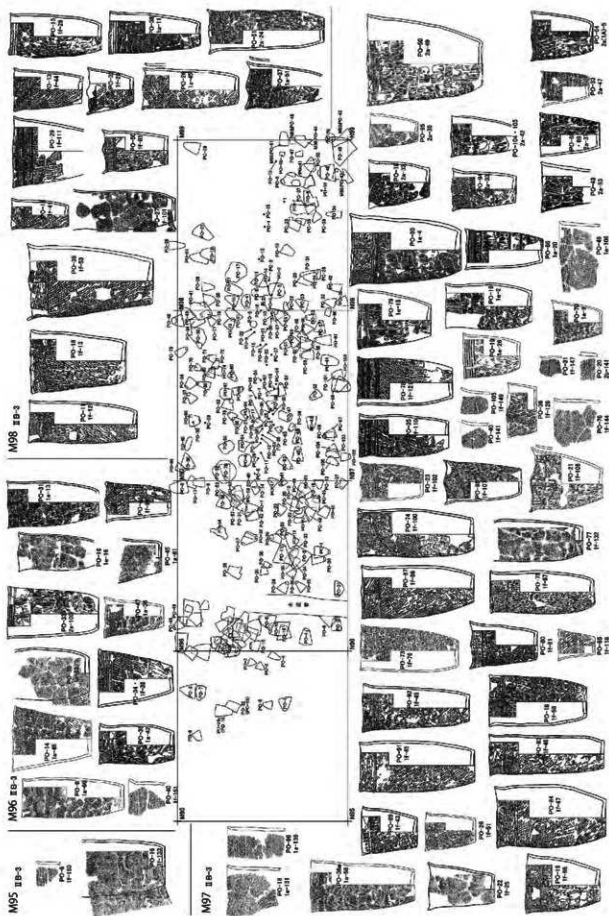
図IV-65 POの土器出土位置図 M・N88・89・O87～91区 II B-3・4 (1a・1e・2b)・M・VC



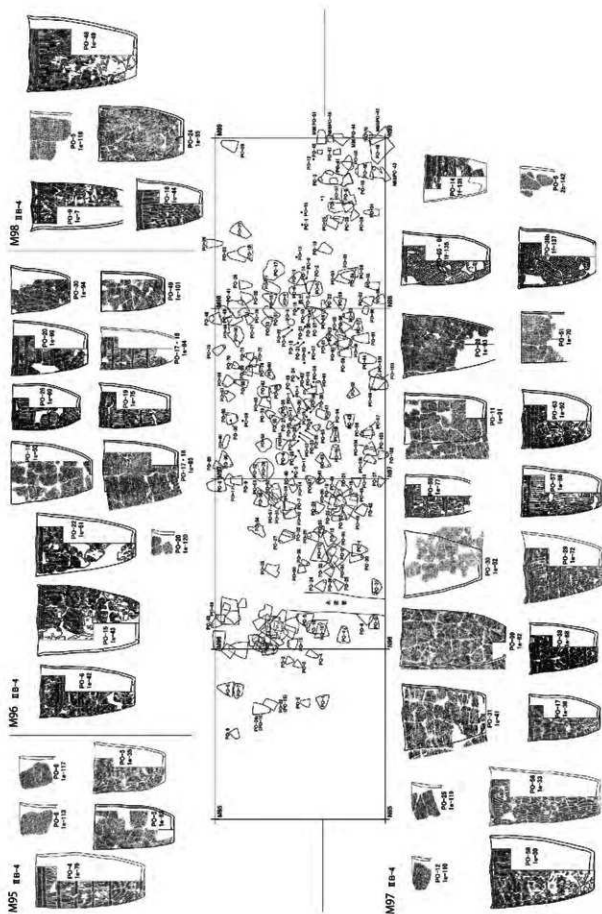
図IV-66 POの土跡出土位置図 K98・L96～98区 I・IIA・IIA・IB-1～5



図IV-67 POの土器出土位置図 M95～98区 I・IA・IB-2・5

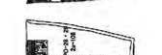


図IV-68 POの土籍出土位置図 M95～98区 IB-3

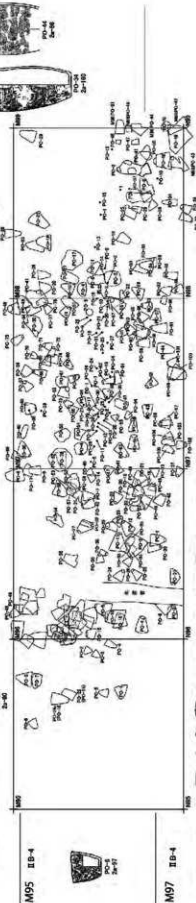


図IV-69 POの土層出土位置図 M95～98区 II B-4 (1a・2b・1f・1e)

M96 IB-4



M98 IB-4



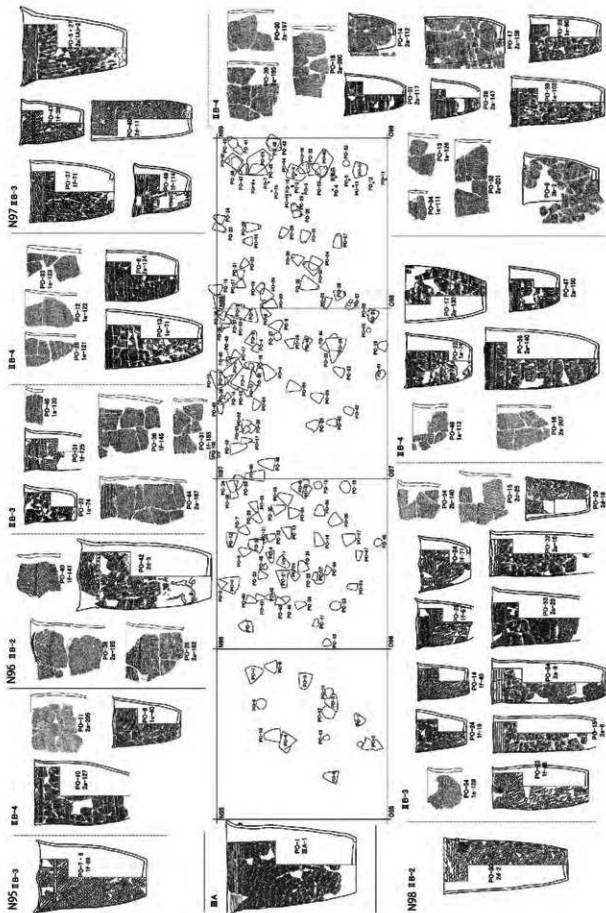
M95 IB-4



M97 IB-4

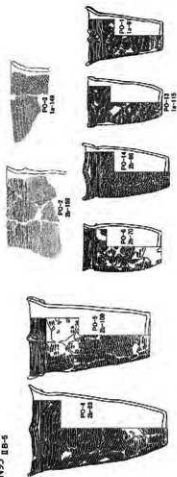


図IV-70 POの土器出土位置図 M95～98区 IB-4 (2a・2a1A)

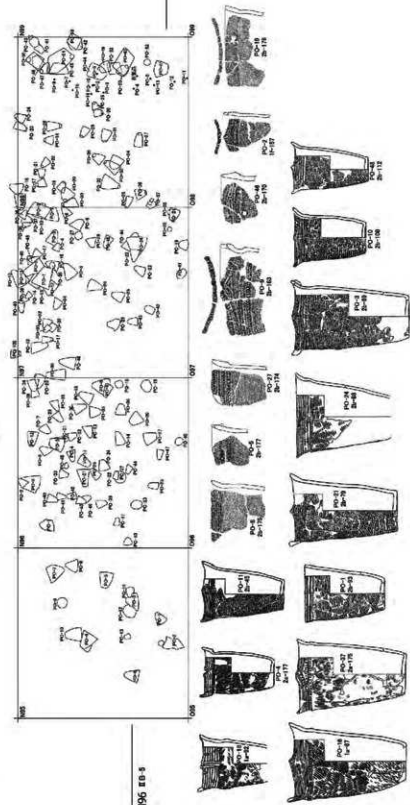


図IV-71 POの土器出土位置図 N95～98区 IB・IB-2～4・IA

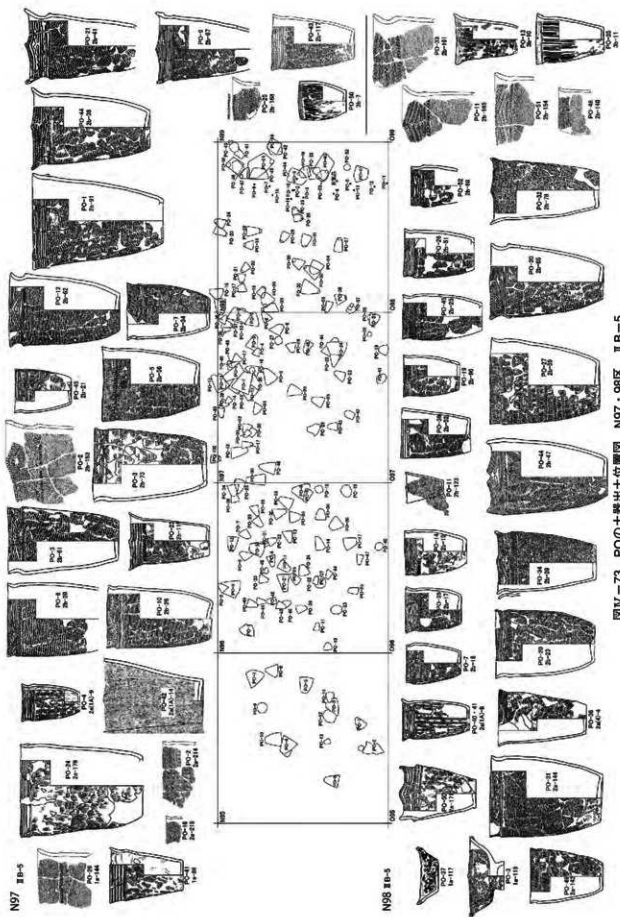
N95 EB-5



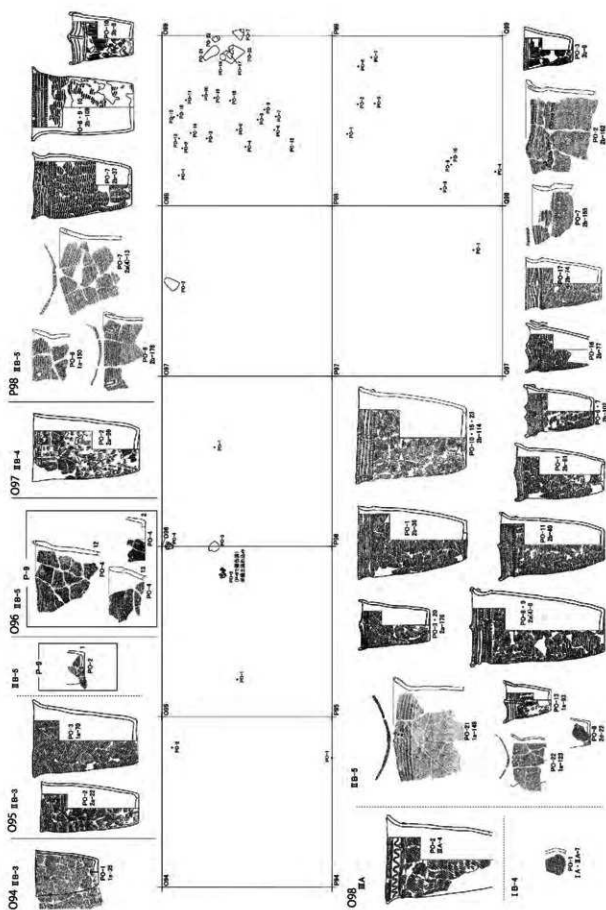
N96 EB-5



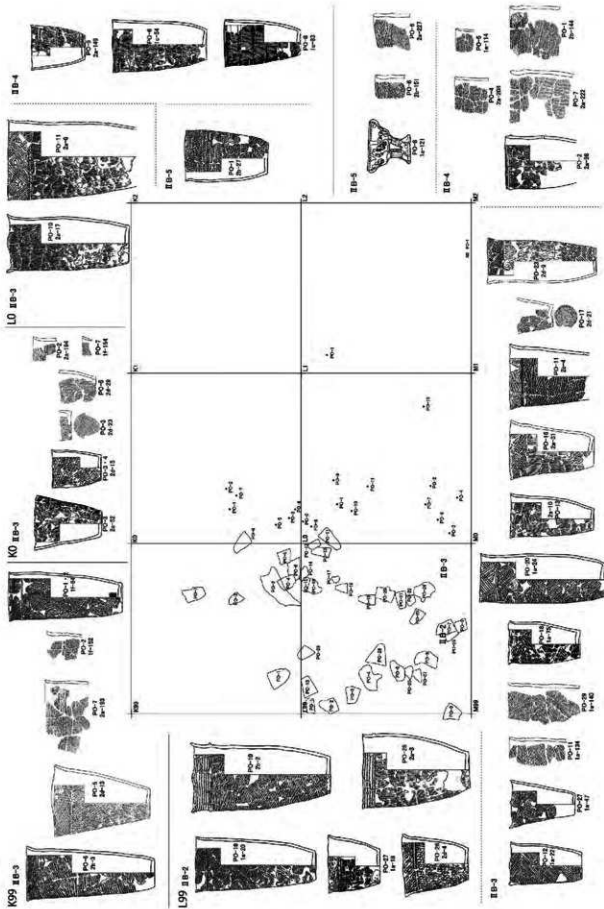
図IV-72 POの土器出土位置図 N95・96区 IB-5



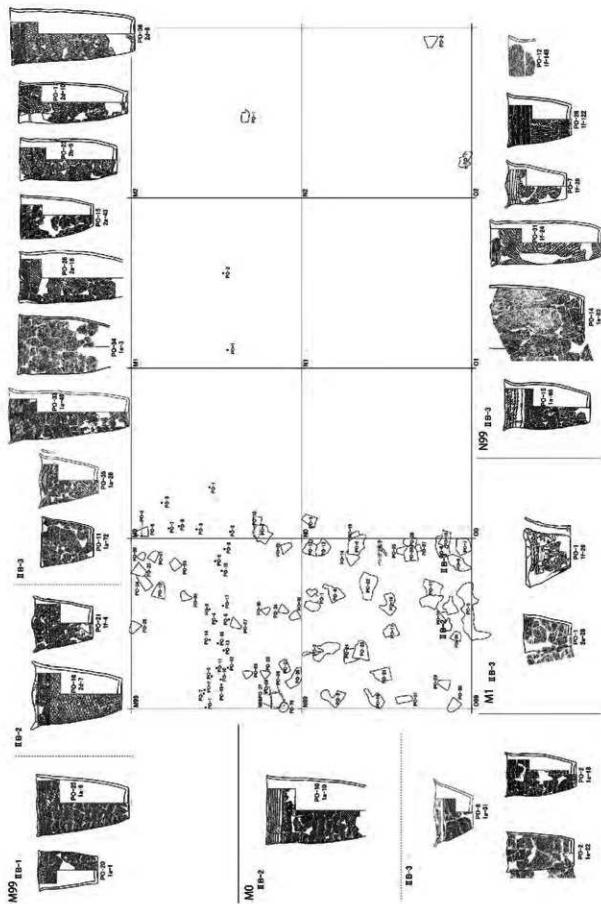
図IV-73 POの土器出土位置図 N97・98B区 IB-5



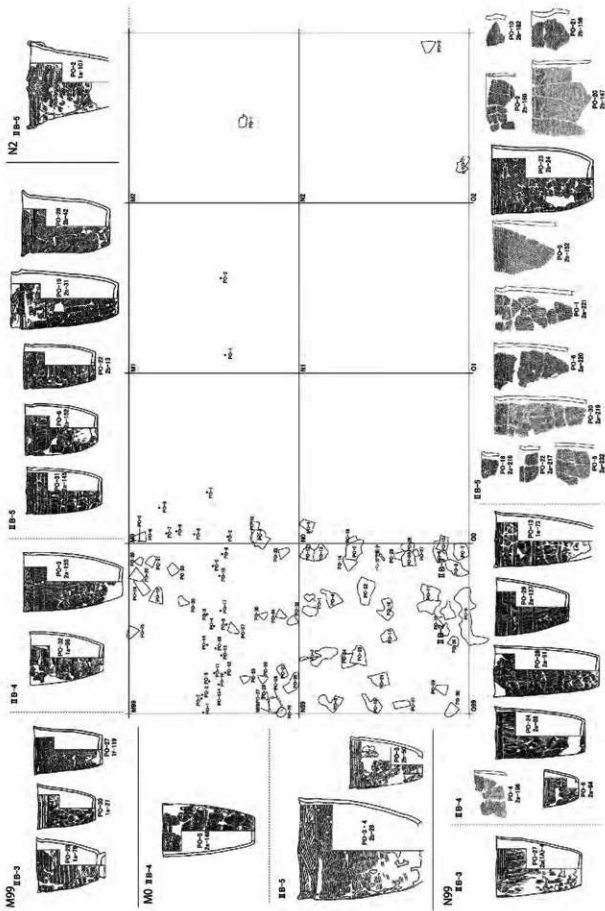
図IV-74 POOの土器出土位置図 O94～98・P97・98区 I・IB-3～5・ⅢA



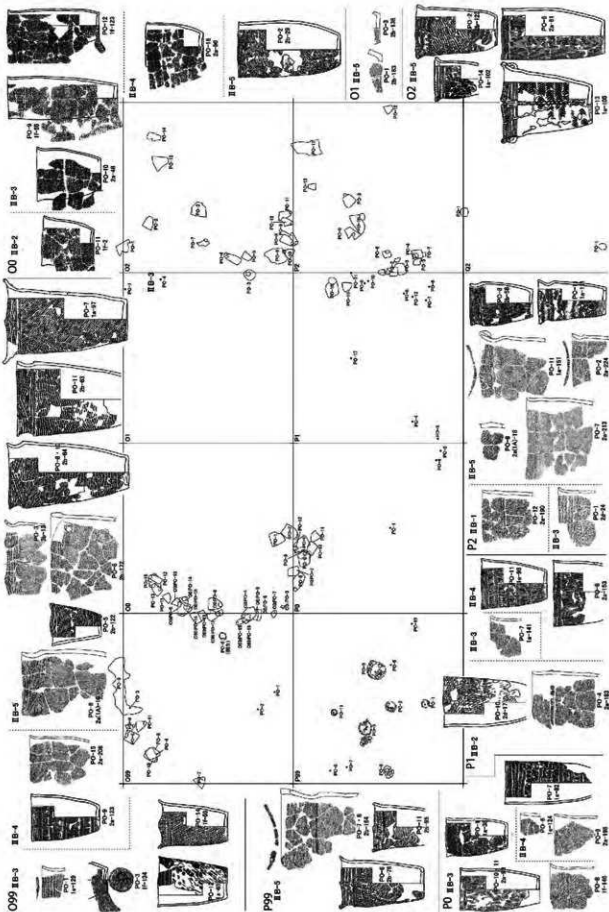
図IV-75 POの土器出土位置図 K・L99～1区 II B-2～5



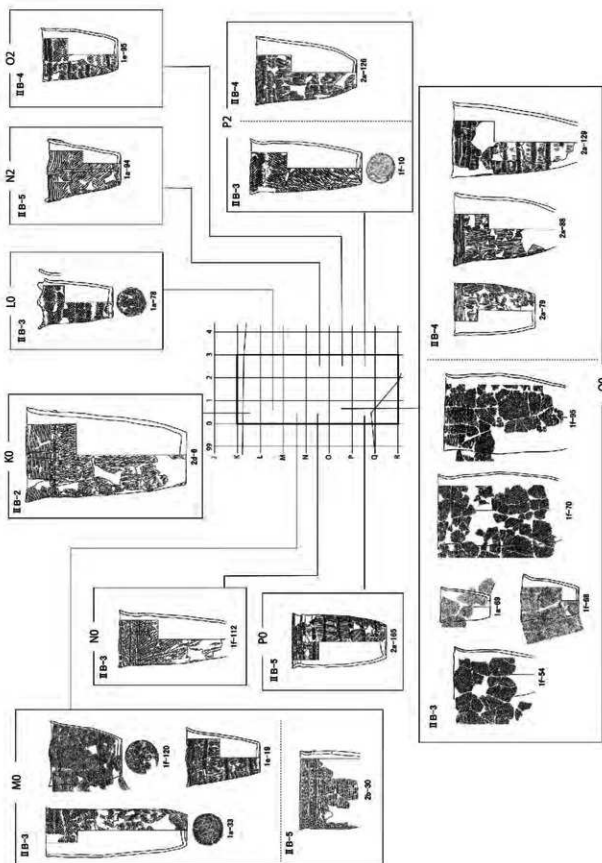
図IV-76 POの土器出土位置図 M・N99～2区 II B-1～3



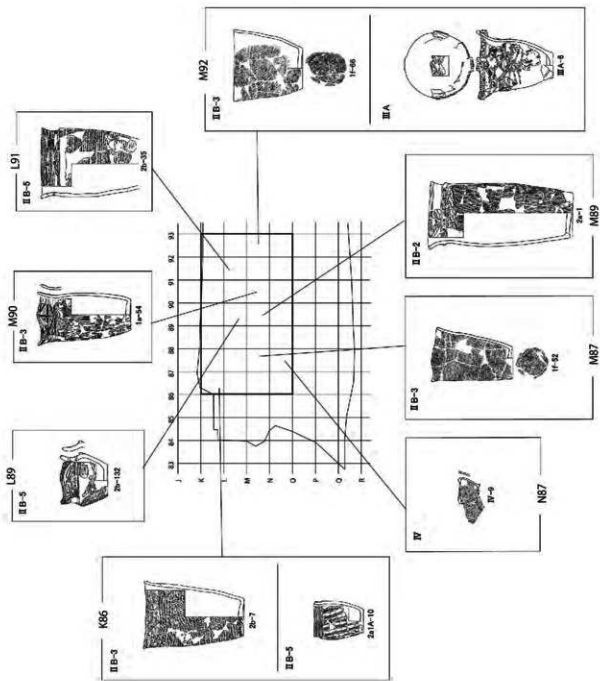
図IV-77 POO土器出土位置図 M・N99～2区 EB-3～5



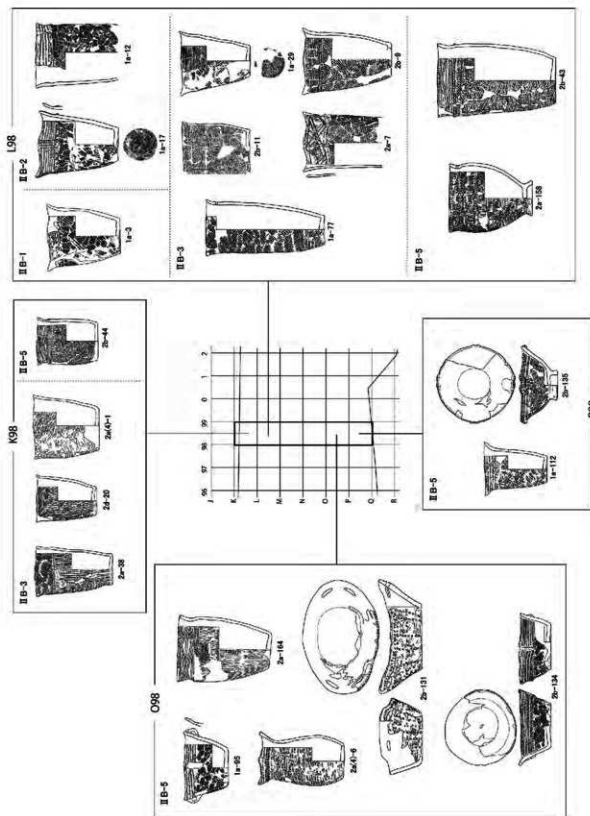
図IV-78 PO0土器出土位置図 O・P99~2・Q2区 IIIA・IB-2~5



図IV-79 調査区別土器出土位置図 K～Q0～Q2区



图IV—80 调查区列土器出土位置图 K~N86~92区



图IV-82 调查区列土器出土位置图 K·L·O·P98区

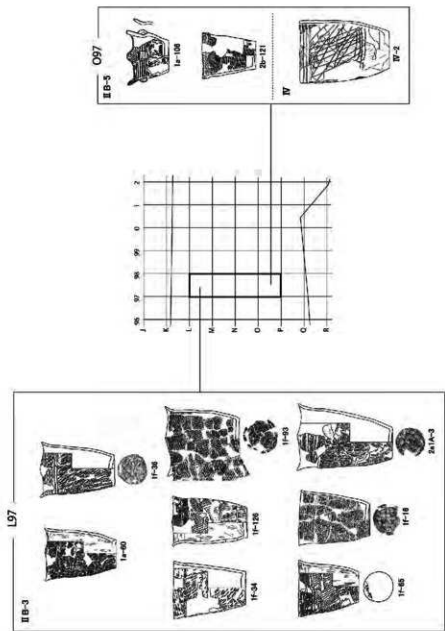
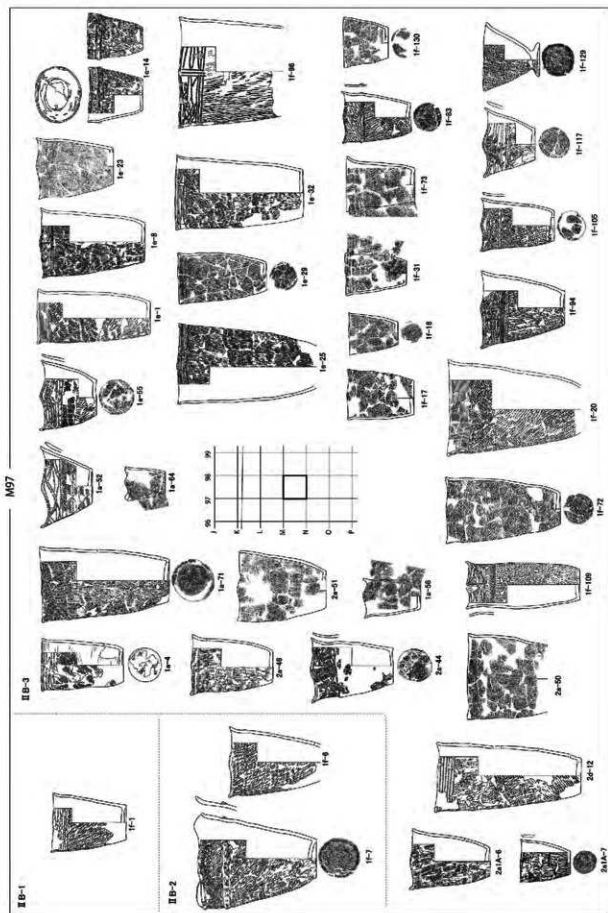


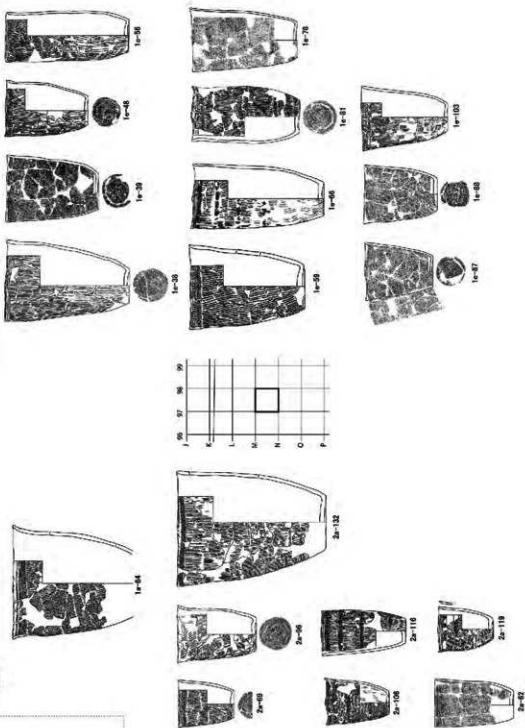
图 IV-84 调查区列土路出土位置图 L·O97区



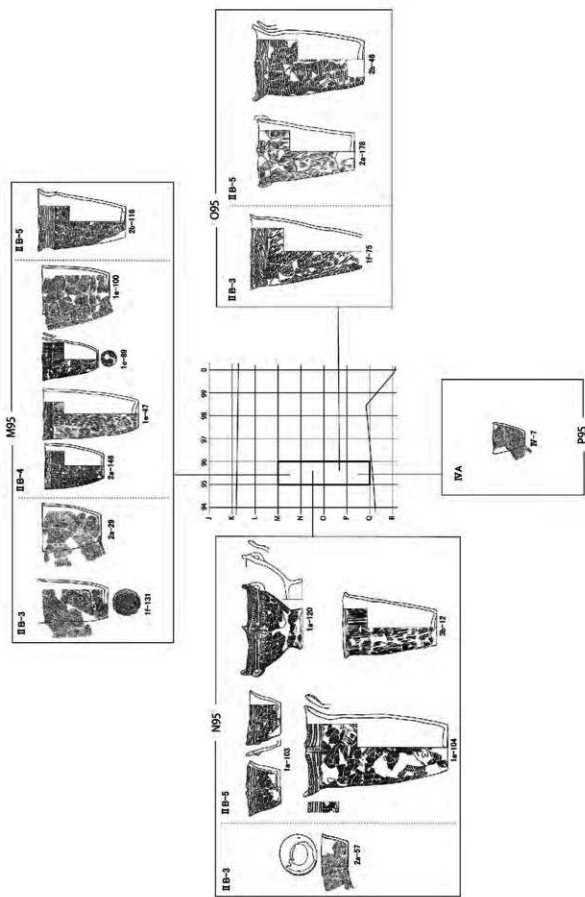
图IV-85 調査区別土器出土位置图 M97区 IB-1~3

II B-4

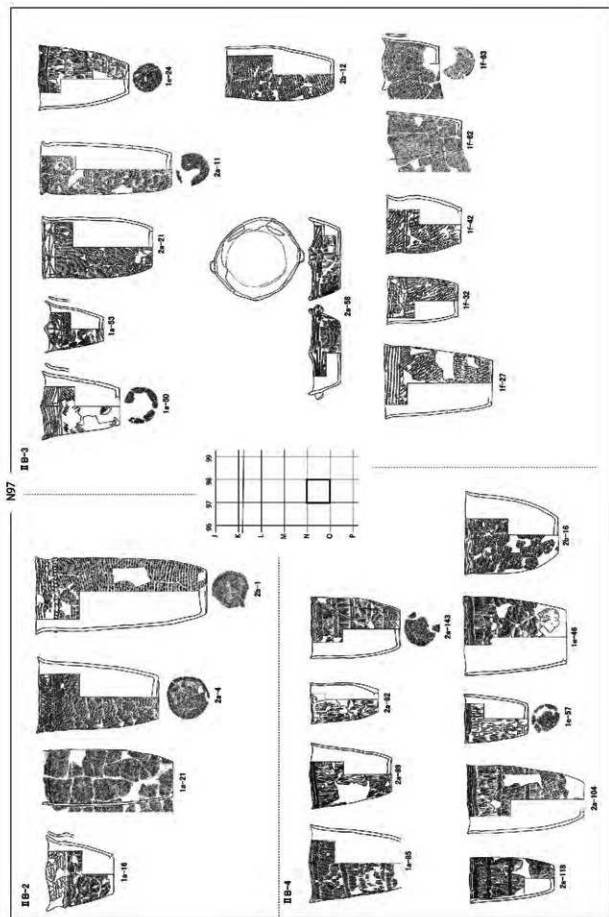
II B-5



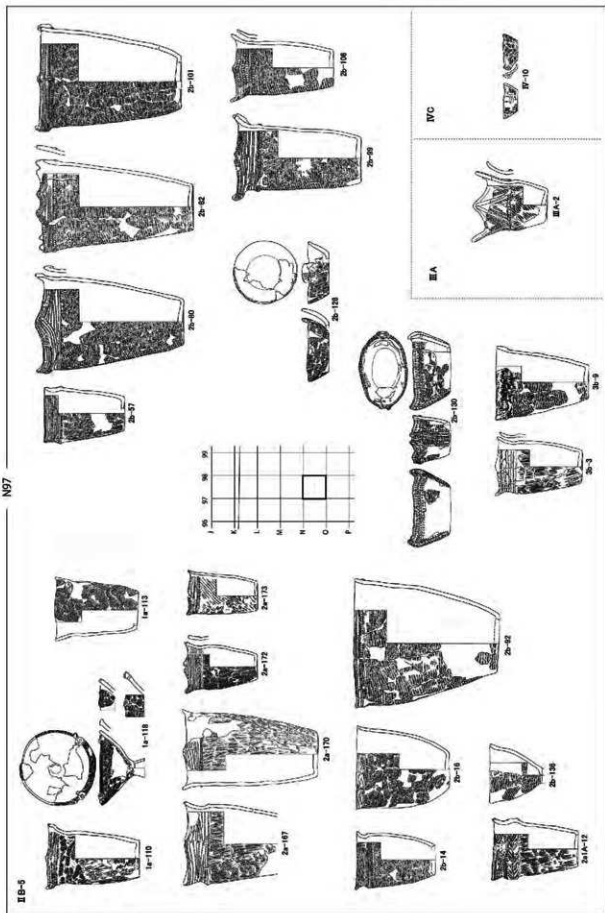
图IV-86 调查区别土器出土位置图 M97区 II B-4·5



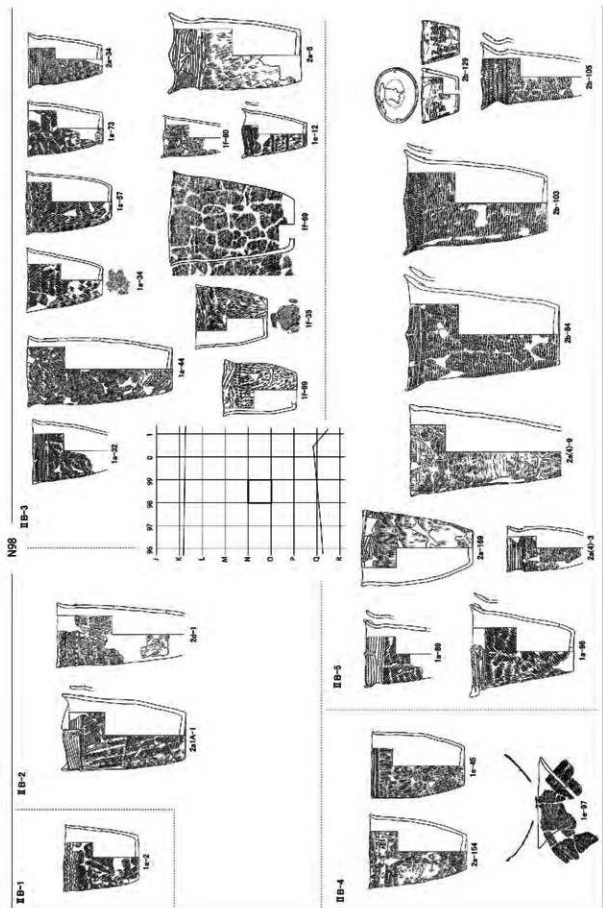
图IV-88 调查区别土器出土位置图 M ~ P95区



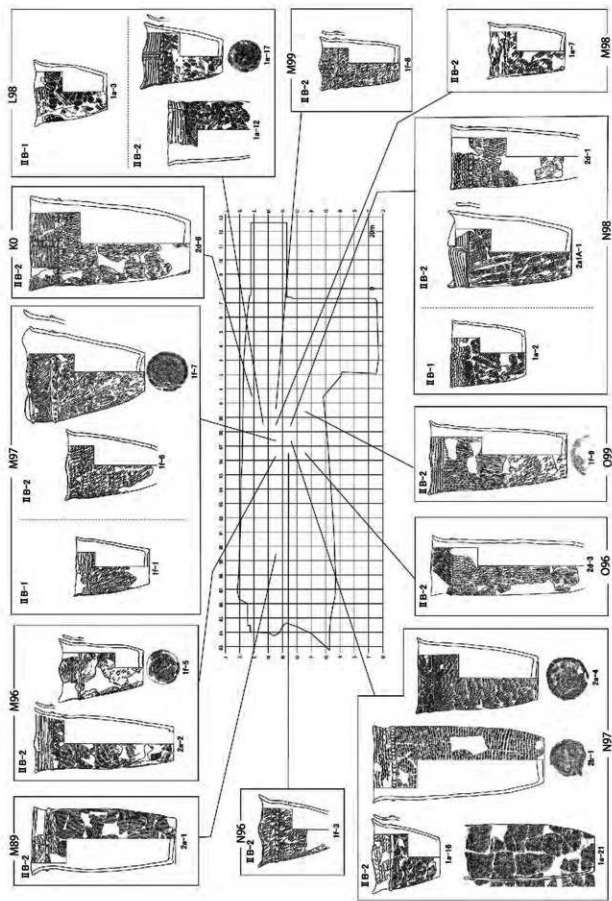
图IV-89 調査区別土器出土位置図 N97区 IB-2~4



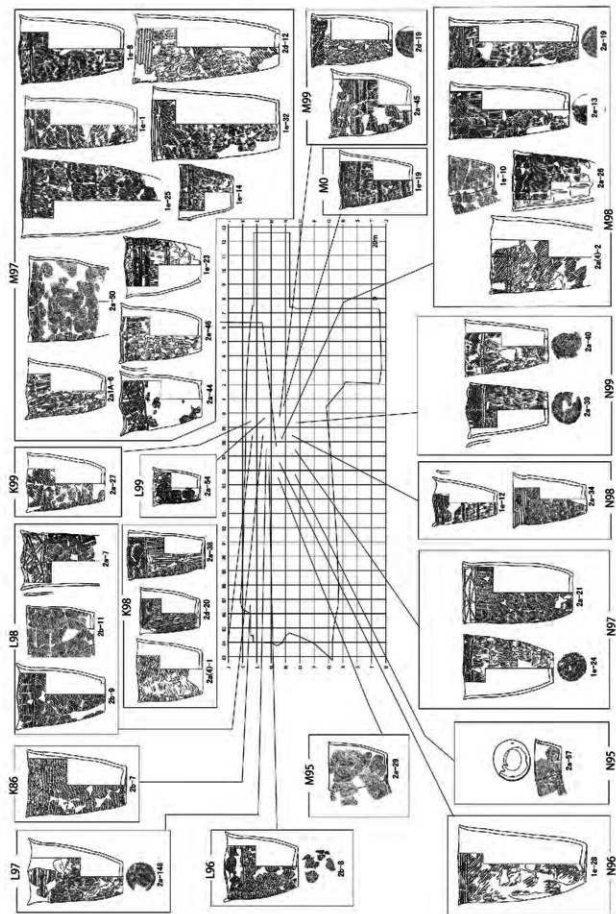
图IV-90 調查區別土器出土位置圖 N97区 ⅠB-5・ⅠA・Ⅳ



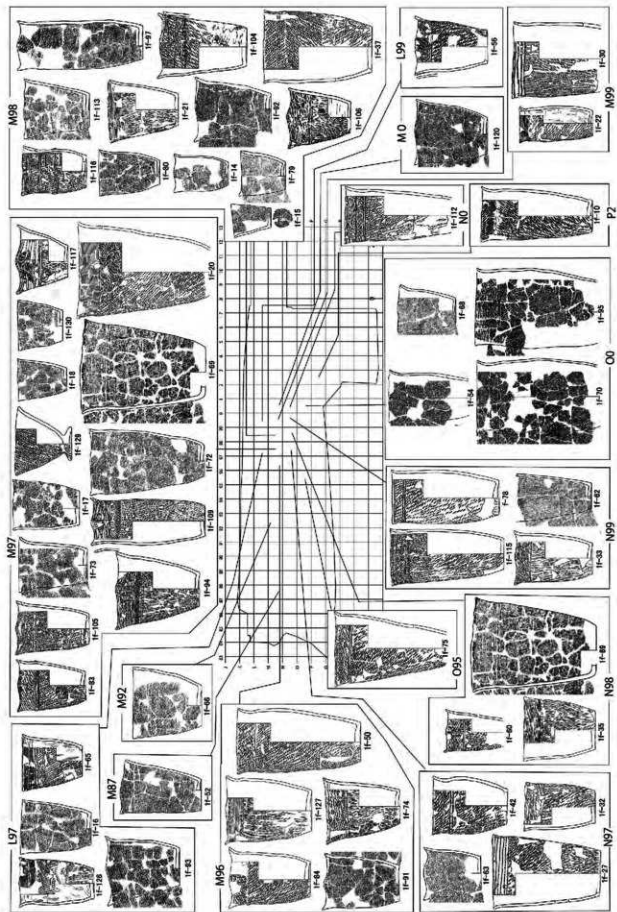
IV-91 調査区別土器出土位置図 N98区 II B-1~5



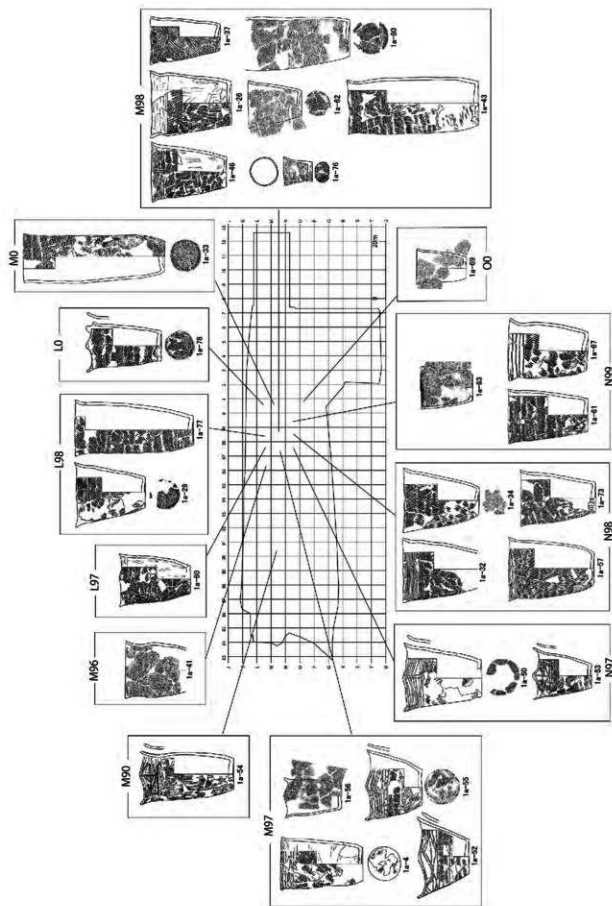
图IV-92 分期列土器出土位置图 IB-1·2



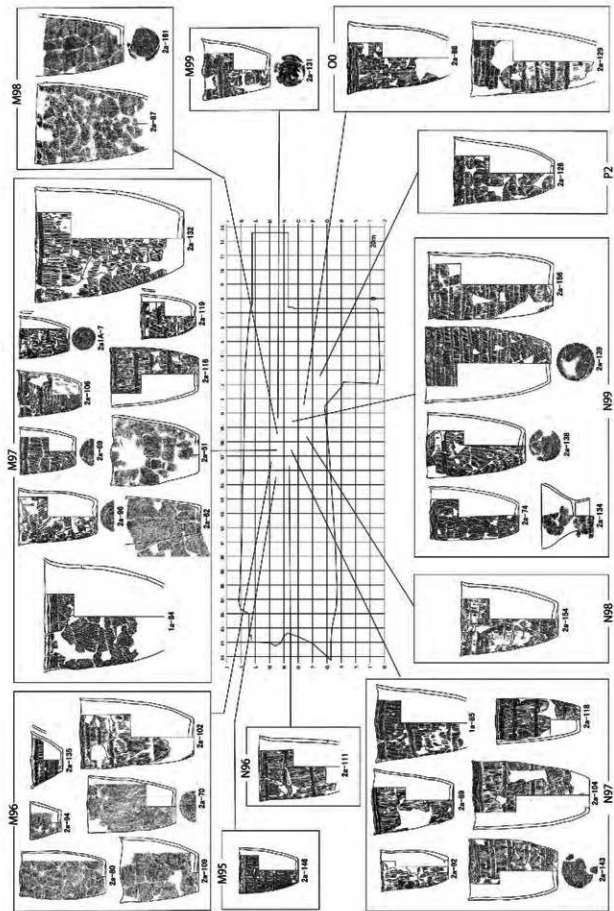
図IV-93 分類別土器出土位置図 II B-3 (2a・2b・1e・2a1A・2a(4)・2d)



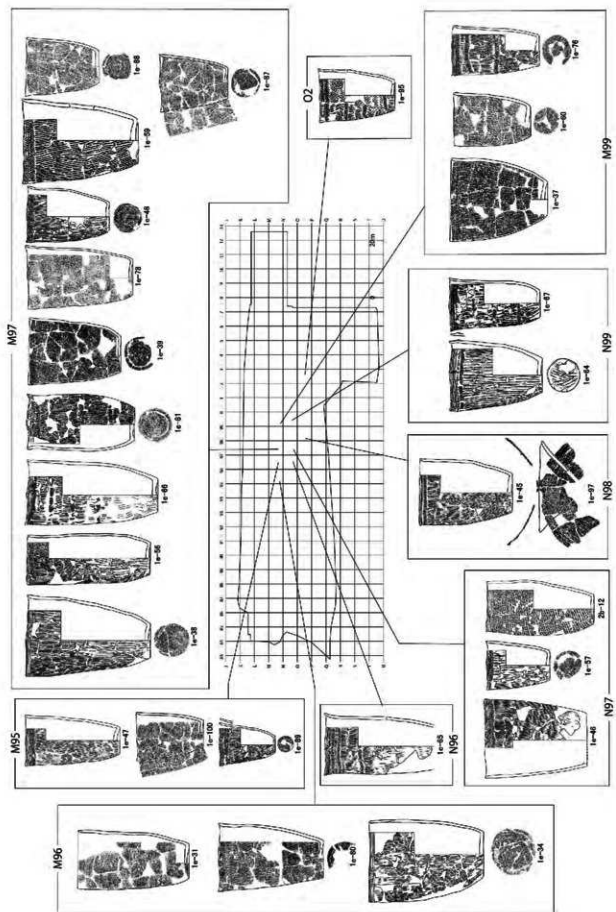
图IV-94 分期别土器出土位置图 IB-3 (1f)



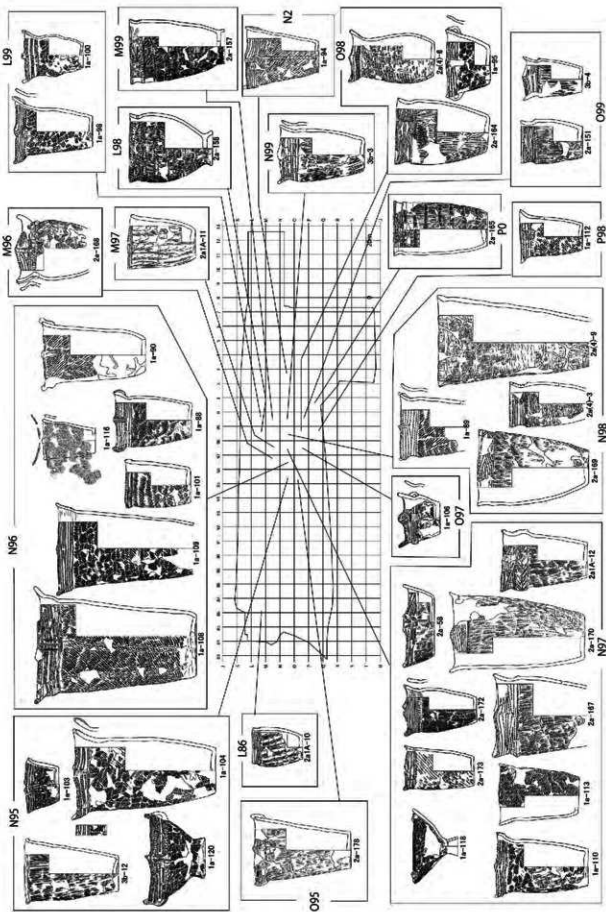
図IV-95 分類別土器出土位置図 II B-3 (1a)



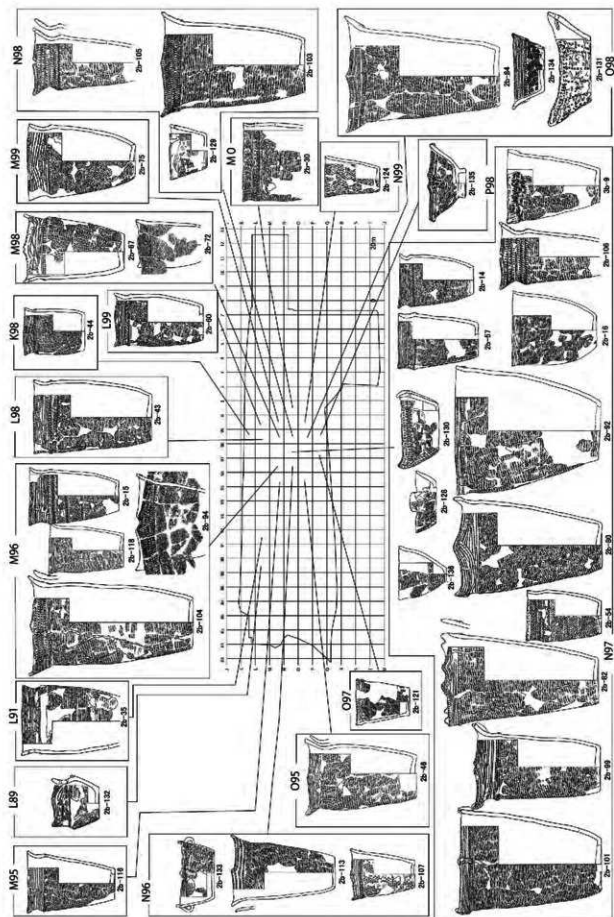
圖IV-96 分類別土器出土位置圖 IB-4 (1a · 2a · 2a1A)



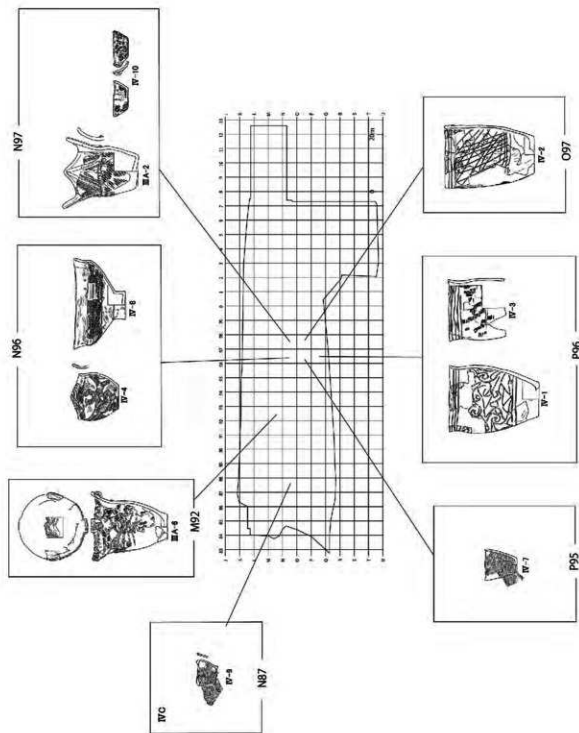
図IV-97 分類別土器出土位置図 II B-4 (1e・2b)



圖IV-98 分類別土器出土位置圖 IB-5 (1a · 2a · 2a1A · 2a (4) · 3b)



图IV-99 分期別土器出土位置图 I B-5 (2b・3b)



图IV-100 分類別土器出土位置図 ⅢA・Ⅳ

表IV-1 遺構規模一覧(焼土・炭化物集中)

遺構種別	遺構名	調査区	層位	面積(m ²)		形状	時期 (縄文時代)	特徴	2011年～14年		調査号	図面番号
				構造面					調査区	調査号		
				長軸	短軸							
焼土	F-1	M69	盛土上層	0.50	0.46	不整形	前期後半	焼成済	◎	2011年調査区 2012年調査区	焼土-7	
	F-2	M69	盛土上層	0.36	0.27	平行形	前期後半	焼成済	◎	2011年調査区 2012年調査区	焼土-7	
	F-3	M69	盛土上層	0.80	0.52	不整形	前期後半	焼成済	◎	2011年調査区 2012年調査区	焼土-7	焼土2
	F-4	M6	盛土層下層	0.60	0.39	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-6	
	F-5	M6	盛土層下層	0.22	0.36	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-6	焼土2
	F-6	M6	盛土層下層	0.78	0.60	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-6	
	F-7	M69	盛土上層	0.35	0.20	平行形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-7	
	F-8	L88	盛土中層	0.01	0.56	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-5	
	F-9	L88	盛土中層	0.04	0.56	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-5	焼土2
	F-10	M69	盛土上層	0.22	0.24	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-7	焼土2
	F-11	M69	盛土中層	0.24	0.24	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-7	
	F-12	M69	盛土中層	0.41	0.27	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-7	
	F-13	L88	盛土層下層	2.02	1.39	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区 2011年調査区 2012年調査区	焼土-5	
	F-14	L-M69-99	盛土層下層	0.22	0.30	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-6	
	F-15	M69-9	盛土層下層	0.01	0.22	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-7	
	F-16	M67	盛土層下層	0.14	0.20	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-4	
	F-17	M67	盛土層下層	0.20	0.22	平行形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-5	
	F-19	M67-100	盛土層下層	0.43	0.20	平行形	前期後半	焼成済	◎	F-4	焼土-4	
	F-20	M67	盛土層下層	0.40	0.20	平行形	前期後半	焼成済	◎	F-4	焼土-4	
	F-21	L88	盛土下層	0.03	0.38	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-5	焼土2
	F-22	K28	盛土中層	0.02	0.25	1/2以上欠損	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-3	焼土2
	F-23	M69	盛土中層	0.14	0.22	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-5	
	F-24	M69	盛土下層	0.12	0.23	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-7	
	F-25	M69	盛土下層	0.22	0.34	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-7	
	F-26	K3	盛土層下層	10.26	0.32	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-6	
	F-27	K3	盛土層下層	0.42	0.40	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-6	
	F-28	M69-99	盛土層下層	0.01	0.66	平行形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-7	
	F-29	M67	盛土層下層	0.31	0.22	横列形	前期後半	焼成済	◎	M67-100調査区	焼土-4	
	F-30	O61	盛土層	0.46	0.27	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-3	
	F-31	O61	盛土層	0.78	0.32	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-3	
	F-32	O61	盛土層	0.27	0.21	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-3	
	F-33	O66	盛土層	0.28	0.24	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-4	
	F-34	O60	盛土層	0.22	0.17	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-9	
	F-35	M1	盛土下層	0.22	0.22	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-9	
	F-36	M6	盛土下層	0.28	0.24	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-6	
	F-37	M6	盛土層	0.66	0.42	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-6	
	F-38	M6	盛土層下層	0.68	0.42	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-6	
	F-39	K3	盛土層下層	0.12	0.20	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-6	
	F-40	M6	盛土中層	0.20	0.39	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-6	
	F-41	F1	盛土中層	0.41	0.22	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-9	
	F-42	M69-9	盛土層	0.27	0.21	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-7	
	F-43	M6	盛土層下層	0.22	0.20	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-7	
	F-44	L-M69	盛土層下層	0.72	0.28	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-2	
	F-45	O66	盛土層	2.28	0.42	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-2	
	F-47	O65-06	盛土層下層	0.14	0.14	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-2	焼土2
	F-48	K31	盛土中層	0.20	0.28	横列形	前期後半	焼成済	◎	遺構1(2009-11)	焼土-2	
	F-49	O60	盛土層下層	0.28	0.16	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-2	
	F-50	L81	1/2以上盛土中層	0.41	0.27	長横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-2	
	F-51	M66	盛土中層	0.42	0.26	平行	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-2	
	F-52	K31	盛土中層	0.14	0.20	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-2	
	F-53	M66	1/2以上盛土中層	0.21	0.22	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-2	
	F-54	N99	盛土中層	0.72	0.61	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区 2011年調査区 2012年調査区	焼土-7	
	F-55	N99	盛土中層	0.24	0.20	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-7	
	F-56	K39	盛土層下層	1.71	1.15	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区 2011年調査区 2012年調査区	焼土-6	焼土2
	F-57	L88	盛土中層	0.21	0.22	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-5	
	F-58	L-M69	盛土層下層	0.22	0.20	横列形	前期後半	焼成済	◎	L88調査区 M69-100調査区	焼土-7	
	F-59	L8	盛土層	0.26	0.16	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-6	
	F-60	K34	1/2以上盛土上層	0.72	0.48	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-9	
	F-61	K3	盛土中層	0.25	0.26	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-9	
	F-62	K3	盛土層下層	0.40	0.42	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-9	
	F-63	F2	盛土層下層	0.42	0.21	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-9	
	F-64	K36	F-64層下層	0.27	0.24	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-2	
	F-65	M66	盛土中層	0.22	0.22	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-4	
	F-67	M66	盛土層下層	0.22	0.42	長横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-4	
	F-68	M66-97	盛土下層	16.67	16.24	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-4	
	F-69	N1-8	1/2以上盛土中層	1.42	1.40	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-9	
	F-70	K3	盛土層	0.78	0.48	長横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-9	
	F-71	K3	盛土層	0.42	0.64	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-10	
	F-72	L2	盛土層	0.42	0.40	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-10	
	F-73	K31	盛土層	0.42	0.42	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-10	
	F-74	K31	盛土層	0.40	0.42	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-10	
	F-75	S2	盛土層	0.50	0.62	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-9	
	F-76	S2	盛土層	0.78	0.41	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-9	
	F-77	K2	盛土層	0.78	0.30	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-9	
	F-78	Q-12	盛土層	0.48	0.22	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-9	
	F-79	K2	盛土層	10.22	0.44	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-11	
	F-80	K2	盛土層	0.20	0.21	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-11	
	F-81	M5-6	盛土層	2.39	1.06	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-11	
	F-82	K12	盛土層	0.38	0.17	横列形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-11	
	F-83	L2	盛土層	1.42	0.78	不整形	前期後半	焼成済	◎	F-4調査区	焼土-10	

表Ⅱ-1 遺構規模一覧(焼土・炭化物集中)

遺構種類	遺構名	調査区	層位	規模(m)		形状	時期 (縄文時代)	特徴	3D-Scan		備考	図番号	図面番号	
				楕円型					遺物点数	備考				遺物名
				長軸	短軸									
焼土	FC-1	L3	層~IV層	0.49	0.22	不整形	前期後半	焼土中				図20-18		
	FC-2	E4	層~IV層	0.33	0.31	楕円形	前期後半	焼土中				図20-19		
	FC-3	K3	層~IV層	1.40	0.61	不整形	前期後半	焼土中				図20-10		
	FC-4	K3	層~IV層	0.33	0.33	正方形	前期後半	焼土中				図20-10		
	FC-5	K3	層~IV層	0.33	0.33	正方形	前期後半	焼土中				図20-10		
	FC-6	L6	層~IV層	0.41	0.32	楕円形	前期後半	焼土中				図20-11		
	FC-6	L6	層~IV層	0.63	0.49	楕円形	前期後半	焼土中				図20-11		
	FC-9	E4	層~IV層	0.35	0.30	不整形	前期後半	焼土中				図20-19		
	FC-9	K3	層~IV層	0.48	0.30	不整形	前期後半	焼土中				図20-10		
	FC-9	K3	層~IV層	0.38	0.31	不整形	前期後半	焼土中				図20-10		
	FC-9	L3	層~IV層	0.33	0.30	円形	前期後半	焼土中				図20-10		
	FC-9	N3	表層	0.40	0.35	正方形	前期後半	焼土中			FC-9a-焼土	図20-9		
	FC-9	O1	表土層	0.75	0.24	不整形	前期後半	厚層焼土				図20-9		
	FC-9	M9	表土層	0.34	0.30	不整形	前期後半	厚層焼土				図20-9		

F-10-10-01-9-01-2-01

表Ⅱ-1 遺構規模一覧(割片集中・礫集中)

遺構種類	遺構名	調査区	層位	規模(m)		遺物点数	形状	時期 (縄文時代)	備考	図番号	図面番号	
				楕円型								
				長軸	短軸							
割片集中	FC-2	M9	表土層	0.47	0.20	2,522	不整形	前期後半			図20-16	図20-3
	FC-3	M9+6	表土層	0.50	0.30	2,309	不整形	前期後半			図20-16	図20-3
	FC-4	M9	表土層	10.52	0.32	6,100	楕円形	前期後半	F-11, FC-5, 30000-0-0-0-0		図20-16	
	FC-5	K3	層~IV層	0.30	0.30	6,793	正方形	前期後半			図20-16	
	FC-6	M9	層~IV層	0.26	0.32	1,386	不整形	前期後半			図20-13	
	FC-7	K3	表土層	1.30	1.14	25	不整形	前期後半			図20-16	
	FC-8	K3	表土層	1.36	0.80	809	不整形	前期後半			図20-16	
	FC-9	M9	表土層	0.75	0.31	290	楕円形	前期後半			図20-13	
	FC-10	K-121	表土層	0.20	0.43	409	楕円形	前期後半			図20-13	
	FC-11	M1	表土層	1.04	0.40	1,308	不整形	前期後半			図20-17	
	FC-12	M1	表土層下層	1.20	0.50	279	不整形	前期後半			図20-17	
	FC-13	P99	層~IV層	0.79	0.61	1,383	楕円形	前期後半			図20-13	
	FC-14	M9	表土層	0.67	0.53	2,908	不整形	前期後半			図20-16	
	FC-15	P99	表土層	1.49	1.32	621	不整形	前期後半			図20-13	
	FC-17	L6	表土層	0.54	0.38	1,386	楕円形	前期後半			図20-16	
	FC-19	L6	表土層	1.75	0.47	2,521	不整形	前期後半			図20-16	
	FC-20	L3	表土層	0.28	0.30	208	楕円形	前期後半			図20-13	
	FC-21	L1	表土層	1.17	0.28	2,074	不整形	前期後半			図20-17	
	FC-22	K3	表土層	0.93	0.48	1,355	不整形	前期後半			図20-16	
	FC-23	O95	表土層下層	1.08	0.76	2,027	不整形	前期後半			図20-13	
	FC-24	O95	表土層下層	0.46	0.17	228	楕円形	前期後半			図20-13	
	FC-25	O96	表土層下層	0.24	0.25	98	楕円形	前期後半			図20-14	
	FC-26	Q84	層~IV層	0.27	0.32	305	正方形	前期後半			図20-13	
	FC-27	L89	表土層下層	0.37	0.30	480	正方形	前期後半			図20-13	
	FC-29	K30	表土層下層	0.95	0.57	3,081	楕円形	前期後半			図20-13	
	FC-30	P91	層~IV層	0.71	0.62	277	不整形	前期後半			図20-13	図20-3
	FC-31	N-288	層~IV層	0.44	0.43	1,752	円形	前期後半			図20-13	
	FC-32	M-500	表土層	0.29	0.25	776	円形	前期後半	M9000-0-0-0-0		図20-16	
	FC-33	K98	表土層	0.64	0.70	894	正方形	前期後半			図20-13	
	FC-34	K99	表土層	0.65	0.33	616	楕円形	前期後半			図20-16	
	FC-35	N87	層~IV層	0.28	0.18	333	楕円形	前期後半			図20-13	
	FC-36	K97-98	表土層	0.30	0.24	382	正方形	前期後半			図20-13	
	FC-37	L88	表土層	0.51	0.34	749	楕円形	前期後半			図20-13	
	FC-38	L88	表土層	0.25	0.31	120	楕円形	前期後半			図20-13	
	FC-39	K99	表土層	0.49	0.43	1,274	楕円形	前期後半			図20-16	
	FC-40	K99	表土層	0.50	0.36	478	不整形	前期後半			図20-16	
	FC-41	L97	表土層	0.51	0.40	1,889	楕円形	前期後半			図20-14	
	FC-42	L88	表土層	0.77	0.45	1,352	不整形	前期後半	FC-42a-焼土		図20-13	
	FC-43	L88	表土層	10.50	0.79	603	不整形	前期後半	FC-43a-焼土		図20-13	
	FC-44	L98	表土層	0.99	0.92	5,478	円形	前期後半			図20-16	
	FC-45	M98	表土層	0.49	0.49	740	円形	前期後半	FC-45a-焼土		図20-13	
	FC-46	M97+98	表土層	0.20	0.48	824	不整形	前期後半	FC-46a-焼土		図20-13	
	FC-47	M98	表土層	0.67	0.45	1,122	不整形	前期後半	FC-47a-焼土		図20-13	
	FC-48	M98	表土層	0.81	0.43	1,308	楕円形	前期後半	FC-48a-焼土		図20-13	
	FC-49	L98-99	表土層	1.51	0.46	808	楕円形	前期後半			図20-13	
	FC-50	L88	表土層	0.63	0.41	6,671	不整形	前期後半			図20-13	
	FC-51	M99	表土層	0.72	0.71	642	円形	前期後半			図20-16	
	FC-52	L98	表土層	0.31	0.25	53	正方形	前期後半			図20-13	
FC-53	M99	表土層	0.62	0.31	11,217	不整形	前期後半	FC-53a-焼土		図20-16		
FC-54	M99	表土層	0.30	0.21	368	正方形	前期後半	FC-54a-焼土		図20-16		
FC-55	M99	表土層	10.21	0.40	848	不整形	前期後半	FC-55a-焼土		図20-16		
FC-56	N37	表土層	0.79	0.63	5,036	楕円形	前期後半	FC-56a-焼土		図20-13		
FC-57	N37	表土層	0.43	0.41	37	楕円形	前期後半	FC-57a-焼土		図20-13		
FC-58	K-197	表土層	0.81	0.20	393	不整形	前期後半			図20-13		
FC-59	L97	表土層	0.51	0.36	868	円形	前期後半			図20-13		
FC-60	L97	表土層	0.54	0.22	293	楕円形	前期後半			図20-13		
FC-61	L97	表土層	0.67	0.35	250	円形	前期後半			図20-13		
FC-62	L97	表土層	0.87	0.66	892	不整形	前期後半	FC-62a-焼土		図20-13		
FC-63	L97	表土層	0.25	0.30	395	正方形	前期後半			図20-13		
FC-64	L97	表土層	0.30	0.24	89	楕円形	前期後半			図20-13		
FC-65	L97	表土層	0.40	0.44	1,714	円形	前期後半			図20-13		
FC-66	L97	表土層	0.54	0.36	480	楕円形	前期後半	FC-66a-焼土		図20-13		
FC-67	L97	表土層	0.50	0.38	518	正方形	前期後半			図20-13		
FC-68	L97	表土層	0.23	0.17	19	正方形	前期後半			図20-13		

表IV-1 遺構規模一覧(刻片集中・礫集中)

遺構種類	遺構名	調査区	階位	面積(m ²)		遺物点数 (点)	形状	時期 (縄文時代)	備考	図面番号	図説番号
				積出箇所	脇筋						
刻片集中	FC-09	1-97	盛土中層	0.23	0.14	210	横内形	新石器中		図IV-13	
	FC-20	099	盛土下層	0.34	0.33	1,630	横内形	新石器中	付-099(刻片・焼土・礫土)	図IV-13	
	FC-21	1-97	盛土下層	0.93	0.46	632	横内形	新石器中	FC-049(7)	図IV-13	
	FC-22	1-97	盛土下層	0.46	0.35	184	横内形	新石器中	FC-049(7)	図IV-13	
	FC-23	1-97	盛土下層	0.42	0.31	543	横内形	新石器中		図IV-13	
	FC-24	1-97	盛土下層	0.66	0.49	2,027	臺内形	新石器中		図IV-13	
	FC-25	592	盛土下層	0.27	0.24	45	円形	新石器中		図IV-13	
	FC-27	542	盛土下層	0.66	0.49	474	不整形	新石器中	FC-78(6)部	図IV-17	
	FC-28	542	盛土下層	0.36	0.28	42	不整形	新石器中	FC-77(6)部	図IV-17	
	FC-29	80	盛土下層	0.28	0.16	310	不整形	新石器中		図IV-16	
	FC-81	80	盛土最下層	0.68	0.37	2,384	不整形	新石器中		図IV-16	
	FC-82	8<1.0	盛土最下層	0.49	0.22	481	横内形	新石器中		図IV-16	
	FC-83	1.0	盛土下層	0.21	0.27	308	ほぼ円形	新石器中		図IV-16	
	FC-84	81	H-30層土中層	0.24	0.22	602	方形	新石器後	付-084(刻片・焼土・礫土) 付-084(刻片・焼土・礫土)	図IV-17	
	FC-85	1.1	H-30層土中層	0.96	0.86	2,562	ほぼ円形	新石器後	付-085(刻片・焼土・礫土)	図IV-17	
	FC-86	10<1	H-30層土中層	2.16	0.73	6,497	不整形	新石器後	付-086(刻片・焼土・礫土)	図IV-17	
	FC-87	1.2	H-30層土中層	0.47	0.44	175	ほぼ円形	新石器後	付-087(刻片・焼土・礫土)	図IV-17	
	FC-88	92	盛土中層	1.12	0.74	3,824	六角形(2辺1.0m)	新石器後		図IV-18	
	FC-89	81	H-30層土中層	0.34	0.26	85	不整形	新石器後	付-089(刻片・焼土・礫土) 付-089(刻片・焼土・礫土)	図IV-17	
	FC-90	81	H-30層土中層	0.62	0.47	206	不整形	新石器後	付-090(刻片・焼土・礫土) 付-090(刻片・焼土・礫土)	図IV-17	
	FC-91	M95	盛土下層	0.46	0.40	1,820	不整形	新石器後		図IV-11	
	FC-92	1-90-96	盛土下層	1.09	0.62	4,267	不整形	新石器後		図IV-11	図説3
	FC-93	02	盛土下層	0.72	0.43	7,084	不整形	新石器後		図IV-11	
	FC-94	1-96	盛土中層	0.67	0.36	988	不整形	新石器後		図IV-11	
	FC-95	91	盛土下層	0.83	0.48	479	不整形	新石器後		図IV-11	
	FC-96	91	盛土下層	0.26	0.20	482	円形	新石器後		図IV-11	
	FC-97	593	盛土中層	0.96	0.61	372	不整形	新石器後		図IV-11	
	FC-98	M9<96	盛土中層	0.202	0.24	1,215	不整形	新石器後		図IV-11	
	FC-99	92	盛土下層	0.41	0.32	1,811	横内形	新石器後		図IV-11	
	FC-100	K95	H-30層土中層	0.32	0.26	146	幾何形に近い	新石器後		図IV-11	
	FC-101	593	盛土下層	0.21	0.23	4,217	横内形	新石器後		図IV-11	
	FC-102	593	盛土下層	0.20	0.24	225	円形	新石器後		図IV-11	
	FC-103	1-96	盛土中層	0.41	0.34	2,022	不整形	新石器後		図IV-11	図説3
	FC-104	1-96	盛土中層	0.25	0.28	211	臺内形	新石器後		図IV-11	
	FC-105	K91	H-30層土中層	0.11	0.10	12	円形	新石器後		図IV-11	
	FC-106	M95	盛土下層	0.24	0.21	294	横内形	新石器後		図IV-11	
	FC-107	593	盛土下層	0.60	0.62	2,413	臺内形	新石器後		図IV-11	
	FC-108	M9<96	盛土下層	0.82	0.58	2,493	横内形	新石器後		図IV-11	
	FC-109	1<M96	盛土下層	0.94	0.71	409	不整形	新石器後		図IV-11	図説3
	FC-110	M96	盛土下層	11.00	0.63	1,843	不整形	新石器後		図IV-11	
FC-111	1-96	盛土下層	0.67	0.33	142	横内形	新石器後		図IV-11		
FC-112	M96	盛土下層	10.50	0.43	75	不整形	新石器後		図IV-11		
FC-113	1-96	盛土下層	0.28	0.28	422	横内形	新石器後		図IV-11		
FC-114	1<M96	盛土下層	0.26	0.22	2,062	横内形	新石器後	付-114(刻片・焼土・礫土)	図IV-11		
FC-115	596	盛土最下層	0.68	0.39	334	横内形	新石器後		図IV-11		
FC-116	1-95	盛土下層	0.41	0.20	2,522	横内形	新石器後	付-116(刻片・焼土・礫土)	図IV-11		
FC-117	K94	H-30層土中層	0.50	0.32	3,892	不整形	新石器後		図IV-11		
FC-118	M96	盛土中層	0.22	0.24	463	臺内形	新石器後		図IV-11		
FC-119	M96	盛土下層	0.48	0.33	4,098	円形	新石器後		図IV-11		
FC-120	1-96	盛土下層	0.73	0.44	2,564	不整形	新石器後	付-093(3)	図IV-11	図説3	
FC-121	M93	盛土下層	0.49	0.30	1,644	幾何形に近い	新石器後		図IV-11		
FC-122	K97	盛土最下層	0.67	0.48	2,641	横内形	新石器後		図IV-11		
FC-124	03	盛土下層	0.94	0.40	212	不整形	新石器後		図IV-11		
FC-125	52	盛土下層	0.70	0.63	4,002	円形	新石器後		図IV-11		
FC-126	M<N3	盛土下層	1.83	0.52	763	(2.17x1.6)m	新石器後		図IV-17		
FC-127	03	H-30層土中層	0.70	0.43	325	不整形	新石器中層	付-127(刻片・焼土・礫土) 付-127(刻片・焼土・礫土)	図IV-17		
FC-129	03	H-30層土中層	0.10	0.34	30	横内形	前期~中期	付-129(刻片・焼土・礫土)	図IV-18		
FC-134	M96	盛土中層	0.40	0.28	632	横内形	新石器後		図IV-11		
礫集中	FC-1	O-1<2	盛土	0.43	0.22	96	不整形	新石器後		図IV-18	
	FC-2	81	盛土下層	1.12	0.41	36	不整形	新石器後		図IV-17	

FC-11は調査区外、FC-10+10+20+30+40+125+120+130+133(欠番)

表Ⅳ-2 焼土・割片集中・礫集中出土遺物一覧

焼土					
遺構名	層位又は 付属遺構名	遺物名	分類	石材	点数
F-3	焼土	土器 目取付(5周)			29
		割片(右器) 割片		青磁	205
		小計			234
F-5	焼土	割片(右器) 割片		青磁	234
		小計			1
		総計			1
F-6	焼土	割片(右器) 割片		青磁	2
		小計			2
		総計			2
F-7	焼土	割片(右器) 割片		青磁	104
		小計			104
		総計			104
F-8	焼土	割片(右器) 割片		青磁	104
		小計			104
		総計			104
F-9	焼土	割片(右器) 割片		青磁	104
		小計			104
		総計			104
F-12	焼土	割片(右器) 割片		青磁	18
		小計			18
		総計			18
F-13	焼土	割片(右器) 割片		青磁	21
		小計			21
		総計			21
F-15	焼土	割片(右器) 割片		青磁	81
		小計			81
		総計			81
F-16	焼土	割片(右器) 割片		青磁	1
		割片(右器) 割片		青磁	65
		小計			66
F-18	焼土	割片(右器) 割片		青磁	66
		石鏡		青磁	1
		割片(右器) 割片		青磁	69
F-19	焼土	割片(右器) 割片		青磁	3
		割片(右器) 割片		青磁	81
		小計			84
F-21	焼土	割片(右器) 割片		青磁	41
		割片(右器) 割片		青磁	41
		小計			82
F-22	焼土	割片(右器) 割片		青磁	17
		割片(右器) 割片		青磁	17
		小計			34
F-24	焼土	割片(右器) 割片		青磁	6
		割片(右器) 割片		青磁	6
		小計			12
F-26	焼土	割片(右器) 割片		青磁	25
		割片(右器) 割片		青磁	25
		小計			50
F-40	焼土	割片(右器) 割片		青磁	17
		割片(右器) 割片		青磁	17
		小計			34
F-41	焼土	割片(右器) 割片		青磁	17
		割片(右器) 割片		青磁	16
		小計			33
F-56	焼土	割片(右器) 割片		青磁	16
		割片(右器) 割片		青磁	81
		小計			97
F-59	焼土	土器 目取付(5周)			13
		土製品 焼成粘土塊			1
		小計			14
F-60	焼土	土器 目取付(5周)			14
		土製品 焼成粘土塊			1
		割片(右器) 割片		青磁	1
F-67	焼土	割片(右器) 割片		青磁	2
		割片(右器) 割片		青磁	2
		小計			4
F-68	焼土	割片(右器) 割片		青磁	2
		割片(右器) 割片		青磁	2
		小計			4
F-69	焼土	割片(右器) 割片		青磁	2
		割片(右器) 割片		青磁	2
		小計			4
焼土合計					
3553					

割片集中					
遺構名	層位又は 付属遺構名	遺物名	分類	石材	点数
F-2	焼土	土器 目取付(5周)			277
		割片(右器) 石鏡		青磁	1
		割片(右器) 割片		青磁	75
F-3	焼土	割片(右器) 割片		青磁	2
		磨石器 磨		磨石	2
		小計			263
F-4	焼土	割片(右器) 割片		青磁	883
		小計			883
		総計			1186
F-70	焼土	割片(右器) 割片		青磁	81
		小計			81
		総計			81
F-71	焼土	割片(右器) 割片		青磁	26
		小計			26
		総計			26
F-72	焼土	割片(右器) 割片		青磁	5
		磨石器 磨		磨石	1
		小計			6
F-73	焼土	割片(右器) 割片		青磁	6
		小計			6
		総計			6
F-74	焼土	割片(右器) 割片		青磁	30
		小計			30
		総計			30
F-74	焼土	土器 目取付(5周)			1
		割片(右器) 割片		青磁	17
		小計			18
F-81	焼土	割片(右器) 割片		青磁	1
		割片(右器) 割片		青磁	71
		小計			72
F-83	焼土	土器 目取付(5周)			72
		小計			72
		総計			72
F-84	焼土	土器 目取付(5周)			1
		小計			1
		総計			1
F-86	焼土	土器 目取付(5周)			1
		割片(右器) 割片		青磁	7
		磨石器 粘土系石 磨石		磨石	1
F-91	焼土	土器 目取付(5周)			2
		小計			2
		総計			2
F-93	焼土	土器 目取付(5周)			1
		小計			1
		総計			1
F-94	焼土	土器 目取付(5周)			1
		割片(右器) 割片		青磁	18
		小計			19
F-94	焼土	土器 目取付(5周)			19
		磨石器 磨		磨石	1
		小計			20
F-94	焼土	磨石器 磨		磨石	1
		小計			1
		総計			1
割片集中合計					
3533					

割片集中					
遺構名	層位又は 付属遺構名	遺物名	分類	石材	点数
F-2	焼土	土器 目取付(5周)			12
		割片(右器) 割片		青磁	2
		割片(右器) 割片		青磁	2,118
F-3	焼土	土器 目取付(5周)			2,132
		小計			2,132
		総計			2,132
F-3	焼土	割片(右器) 割片		青磁	2,309
		磨石器 磨		磨石	2
		小計			2,311
F-4	焼土	土器 目取付(5周)			2,309
		小計			2,309
		総計			2,309
F-4	焼土	土器 目取付(5周)			1
		石鏡		青磁	1
		石鏡		青磁	1
F-4	焼土	土器 目取付(5周)			1
		つらみ付ナイフ		青磁	1
		小計			2
F-4	焼土	土器 目取付(5周)			6
		割片(右器) 割片		青磁	2
		小計			8
F-4	焼土	土器 目取付(5周)			2
		割片(右器) 割片		青磁	2
		小計			4
F-4	焼土	土器 目取付(5周)			8,160
		小計			8,160
		総計			8,160

表IV-2 焼土・割片集中・礫集中出土遺物一覧

遺構名	調査又は 付属遺構名	遺物名	分類	石材	点数	遺構名	調査又は 付属遺構名	遺物名	分類	石材	点数
FO-3	Ⅱ中層	土器	Ⅱ群中-4類		67	FO-30	Ⅱ土上層	割片石器	割片	青石	302
		割片石器	割片	青石	3			割片石器	割片	小-計	305
		割片	青石	6,722	割片			青石	309		
		焼石器	焼片	安山岩	1			土器	Ⅱ群中-4類		3
		小-計		6,793	割片石器			割片	青石	3	
		総-計			6,793						
FO-4	Ⅱ中層	土器	Ⅱ群中層		33	FO-21	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中-4類		3
		割片石器	割片	青石	3			割片石器	割片	青石	3
		割片	青石	1,160	割片			青石	3,067		
		焼石器	焼片	安山岩	1			割片	小-計	3,070	
		小-計		1,194	割片			小-計	3,073		
		総-計			1,194						
FO-7	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中層		2	FO-32	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中-4類		1
		割片石器	割片	青石	3			割片石器	割片	青石	1,334
		割片	青石	1,160	割片			小-計	1,335		
		焼石器	焼片	安山岩	1			小-計		1,335	
		小-計		1,186	小-計				1,335		
		総-計			1,186						
FO-6	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中層		2	FO-23	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中-4類		2
		割片石器	割片	青石	3			割片石器	割片	小-計	2,672
		割片	青石	1,160	割片			小-計	2,675		
		焼石器	焼片	安山岩	1			小-計		2,675	
		小-計		1,186	小-計				2,675		
		総-計			1,186						
FO-8	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中層		2	FO-24	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中-4類		2
		割片石器	割片	青石	3			割片石器	割片	青石	3
		割片	青石	1,160	割片			小-計	3		
		焼石器	焼片	安山岩	1			小-計		3	
		小-計		1,186	小-計				3		
		総-計			1,186						
FO-9	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中層		2	FO-25	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中-4類		13
		割片石器	割片	青石	3			割片石器	割片	青石	13
		割片	青石	1,160	小-計				13		
		焼石器	焼片	安山岩	1			小-計		13	
		小-計		1,186	小-計				13		
		総-計			1,186						
FO-10	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中層		2	FO-26	Ⅱ中層	土器	Ⅱ群中-4類		1
		割片石器	割片	青石	3			割片石器	割片	青石	1
		割片	青石	1,160	割片			青石	347		
		焼石器	焼片	安山岩	1			焼石器	焼片	青石	3
		小-計		1,186	小-計				351		
		総-計			1,186						
FO-11	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中層		2	FO-27	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中-4類		13
		割片石器	割片	青石	3			割片石器	割片	青石	14
		割片	青石	1,160	小-計				14		
		焼石器	焼片	安山岩	1			小-計		14	
		小-計		1,186	小-計				14		
		総-計			1,186						
FO-12	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中層		13	FO-29	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中-4類		13
		割片石器	割片	青石	3			割片石器	割片	青石	1
		割片	青石	680	割片石器			割片	青石	1	
		焼石器	焼片	安山岩	1			割片石器	割片	青石	1
		小-計		694	割片石器			割片	青石	1	
		総-計			694						
FO-13	Ⅱ中層	土器	Ⅱ群中層		13	FO-30	Ⅱ中層	土器	V群中層		6
		割片石器	割片	青石	3			割片石器	割片	青石	1
		割片	青石	1,160	割片石器			割片	青石	1	
		焼石器	焼片	安山岩	1			焼石器	焼片	青石	1
		小-計		1,186	小-計				3		
		総-計			1,186						
FO-14	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中層		6	FO-31	Ⅱ中層	土器	Ⅱ群中-4類		1,192
		割片石器	割片	青石	3			割片石器	割片	青石	1,192
		割片	青石	1,160	小-計				1,192		
		焼石器	焼片	安山岩	1			小-計		1,192	
		小-計		1,186	小-計				1,192		
		総-計			1,186						
FO-15	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中層		6	FO-32	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中-4類		1
		割片石器	割片	青石	3			割片石器	割片	青石	1
		割片	青石	1,160	割片石器			割片	青石	1	
		焼石器	焼片	安山岩	1			割片石器	割片	青石	1
		小-計		1,186	小-計				3		
		総-計			1,186						
FO-17	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中層		6	FO-33	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中層		1
		割片石器	割片	青石	3			割片石器	割片	青石	1
		割片	青石	1,160	小-計				2		
		焼石器	焼片	安山岩	1			小-計		2	
		小-計		1,186	小-計				2		
		総-計			1,186						
FO-18	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中層		1	FO-34	Ⅱ土上層	土器	Ⅱ群中層		1
		割片石器	割片	青石	3			割片石器	割片	青石	1
		割片	青石	1,160	小-計				2		
		焼石器	焼片	安山岩	1			小-計		2	
		小-計		1,186	小-計				2		
		総-計			1,186						

表Ⅳ-2 焼土・割片集中・礫集中出土遺物一覧

遺構名	層位又は 付属遺構名	遺物名	分類	石材	点数	遺構名	層位又は 付属遺構名	遺物名	分類	石材	点数							
FC-37	塚土上層	土器	目形砕片		1	FC-61	塚土上層	割片石器	割片		642							
			ナイフ		1					小計		642						
			磨石		1					総計		642						
		割片石器	スライスバー		割片			1	FC-62	塚土下層	割片石器	礫山調整石器		割片	1			
			礫山調整石器		割片			1					ヒアフレイク		割片	3		
			割片		割片			741					割片		割片	3		
			小計		小計			743					小計		小計	53		
		総計		総計				744				総計		総計		53		
		FC-38	塚土上層	割片石器	割片						135	FC-63	塚土下層	土器	目形砕片		1	
					小計						135					スライスバー		割片
総計					135		礫山調整石器				割片				1			
FC-39	塚土中層	土器	目形砕片		1	割片石器	ヒアフレイク				割片	1						
			割片		1,233			ヒアフレイク				割片	1					
		割片		割片	1,233			石珠		割片	1							
		小計		小計			1,234		小計		小計		3					
FC-40	塚土中層	割片石器	割片		477	FC-64	塚土中層	割片石器	割片		割片	958						
			小計		478					小計		小計		958				
			総計		478					総計		総計		958				
FC-41	塚土上層	土器	目形砕片		1	FC-65	塚土中層	土器	目形砕片		1							
			割片		1,899					礫山調整石器		割片	1					
		割片		割片	1,899				割片石器	礫山調整石器		割片	1					
		小計		小計				1,899		割片		割片	1					
FC-42	塚土中層	土器	目形砕片		1	FC-66	塚土下層	土器	目形砕片		1							
			割片		1,351					礫山調整石器		割片	3					
		割片		割片	1,351				ヒアフレイク		割片	3						
		小計		小計				1,352		ヒアフレイク		割片	1					
FC-43	塚土中層	割片石器	割片		683	割片石器	ヒアフレイク		割片	1								
			小計		683			磨石		割片	1							
		総計		683			礫山調整石器		割片	1								
		総計		683			磨石		割片	1								
FC-44	塚土中層	土器	目形砕片		26	FC-67	塚土下層	割片石器	割片		割片	37						
			石珠		1					小計		小計		37				
		割片石器	スライスバー		割片			1	FC-68	塚土中層	割片石器	礫山調整石器		割片	1			
			ヒアフレイク		割片			1					割片		割片	284		
			ヒアフレイク		割片			1				小計		小計		284		
			磨石		割片			1				総計		総計		284		
		礫石	割片		割片			1			FC-69	塚土上層	割片石器	ヒアフレイク		割片	1	
			割片		割片			5,419							割片		割片	465
			磨石		磨石			1						小計		小計		465
			小計		小計								5,420		総計		総計	
FC-45	塚土上層	土器	目形砕片		1	FC-70	塚土上層	土器			目形砕片		1					
			礫山調整石器		割片						1		礫山調整石器		割片	1		
		割片石器	ヒアフレイク		割片			1		割片		割片	284					
			ヒアフレイク		割片			1		小計		小計		284				
			磨石		割片			1		総計		総計		284				
			磨石		磨石			1		総計		総計		284				
		礫石	割片		割片			736		小計		小計		740				
			小計		小計				740		総計		総計		740			
			総計		740				FC-46	塚土上層	土器	目形砕片		1				
			5,420		5,420				割片				割片	3				
FC-46	塚土上層	土器	目形砕片		1	FC-71	塚土上層	割片石器	割片		割片	924						
			礫山調整石器		割片				1		小計		小計		924			
		割片石器	ヒアフレイク		割片			1		総計		総計		924				
			ヒアフレイク		割片			1		FC-47	塚土中層	土器	目形砕片		1			
			磨石		磨石			1		礫山調整石器				割片	1			
			磨石		磨石			1		スライスバー			割片	1				
		小計		小計				1,438		割片			割片	1				
		FC-48	塚土中層	土器	目形砕片				1,432	FC-48	塚土中層	土器	目形砕片		1,432			
					石珠				1					礫山調整石器		割片	1	
				割片石器	礫山調整石器				割片			1		割片		割片	589	
ヒアフレイク					割片	1		磨石				磨石	1					
ヒアフレイク					割片	1		小計				小計		590				
磨石					磨石	1		総計				総計		590				
礫石	割片				割片	7,072		FC-49	塚土中層			土器	目形砕片		1			
	磨石				磨石	1		ヒアフレイク						割片	1			
	磨石				磨石	1		ヒアフレイク					割片	1				
	小計				小計		7,074					小計		小計		484		
FC-49	塚土中層	土器	目形砕片		2,950	FC-49	塚土中層	土器	目形砕片		1							
			石珠		1					礫山調整石器		割片	1					
		割片石器	礫山調整石器		割片			1		ヒアフレイク		割片	1					
			ヒアフレイク		割片			1		ヒアフレイク		割片	1					
			ヒアフレイク		割片			1		小計		小計		484				
			小計		小計				484		総計		総計		484			
		FC-50	塚土中層	土器	目形砕片				4	FC-50	塚土中層	土器	目形砕片		1			
					礫山調整石器				割片				1		礫山調整石器		割片	1
				割片石器	ヒアフレイク				割片			1		割片		割片	1	
					ヒアフレイク				割片			1		磨石		磨石	1	
磨石					磨石	1		小計				小計		448				
小計					小計		5,862		総計				総計		448			
礫石	割片				割片	6,871		FC-47	塚土中層			割片石器	割片		割片	519		
	小計				小計		6,871						小計		小計		519	
	総計				6,871		6,871		総計				総計		519			

表IV-2 焼土・割片集中・礫集中出土遺物一覧

遺構名	層位又は 位置・遺構名	遺物名	分類	石材	数量	遺構名	層位又は 位置・遺構名	遺物名	分類	石材	数量		
FC-68	焼土中層	割片右器	割片	青磁	19	FC-98	H-25 焼土上層	土器	目形中-4期		6		
					19						陶山調整右器	青磁	1
FC-69	焼土中層	土器	目形中-4期		19	割片右器					2		
					209						灰アレンク	青磁	2
					210						陶器-石椀	青磁	2
FC-70	焼土下層	土器	目形中-4期		210	礫石右器	成・焼片				4		
					1						チャーム	1	
					1						磁石	1	
					1,640						砂岩	1	
					1,640						小計	3,164	
					1,640						総計	3	
FC-71	焼土下層	割片右器	割片	青磁	1	H-25 焼土中層	土器	目形中-3期			7		
					632						陶山調整右器	青磁	1
					632						小計	1	
FC-72	焼土下層	割片右器	割片	青磁	1	割片右器					1		
					163						灰アレンク	青磁	1
					164						小計	1	
FC-73	焼土下層	割片右器	割片	青磁	161	H-25 焼土中層	土器	目形中-3期			173		
					913						小計	173	
					913						総計	173	
FC-74	焼土下層	土器	目形中-3期		4	FC-99	H-25 焼土中層	割片右器	石椀	青磁	43		
					2,972						小計	43	
					2,977						総計	43	
					2,977						総計	43	
FC-75	焼土下層	割片右器	割片	青磁	43	FC-99	H-25 焼土中層	土器	目形中-3期		4		
					43						小計	4	
					43						総計	4	
FC-77	H中層下	土器	目形中-3期		4	FC-99	H-25 焼土中層	割片右器	割片	青磁	392		
					472						小計	396	
					471						総計	396	
FC-78	H中層下	土器	目形中-4期		4	FC-91	焼土下層	土器	目形中-3期		1		
					45						小計	1	
					45						総計	1	
FC-79	焼土下層	土器	目形中-3期		1	FC-92	焼土下層	土器	目形中-4期		105		
					480						小計	105	
					480						総計	105	
FC-81	焼土最下層	割片右器	割片	青磁	1	FC-92	焼土下層	割片右器	陶山調整右器	青磁	1		
					2,969						小計	1,947	
					2,969						総計	1,947	
					2,969						総計	1,947	
FC-82	焼土最下層	割片右器	割片	青磁	181	FC-93	焼土下層	割片右器	陶山調整右器	青磁	1		
					491						小計	1,907	
					491						総計	1,907	
FC-83	焼土下層	割片右器	割片	青磁	358	FC-93	焼土下層	割片右器	陶山調整右器	青磁	1		
					358						小計	7,457	
					358						総計	7,461	
FC-84	H-25 焼土中層	割片右器	割片	青磁	1	FC-94	焼土中層	割片右器	陶器-石椀	青磁	2,961		
					1						小計	2,961	
					1						総計	2,961	
					288						小計	2,961	
					667						総計	2,961	
FC-85	H-25 焼土上層	割片右器	割片	青磁	1	FC-95	H下層	割片右器	割片	青磁	473		
					1						小計	473	
					1						総計	473	
					288						小計	473	
					667						総計	473	
FC-86	焼土中層	土器	目形中-3期		1	FC-96	H下層	土器	目形中-3期		1		
					1						小計	1	
					1						総計	1	
					288						小計	1	
					667						総計	1	
FC-87	焼土中層	割片右器	割片	青磁	572	FC-97	焼土中層	割片右器	割片	青磁	572		
					572						小計	572	
					572						総計	572	
					572						小計	572	
					572						総計	572	
FC-88	焼土中層	土器	目形中-3期		1	FC-98	焼土中層	割片右器	スライムバー	青磁	1		
					1						小計	1	
					1						総計	1	
					2,911						小計	1,911	
					2,911						総計	1,911	
FC-89	焼土下層	割片右器	割片	青磁	1,911	FC-99	焼土下層	割片右器	スライムバー	青磁	1		
					1,911						小計	1,911	
					1,911						総計	1,911	
					1,911						小計	1,911	
					1,911						総計	1,911	
FC-100	H-25 焼土中層	土器	目形中-3期		147	H-25 焼土中層	土器	目形中-3期			147		
					148						小計	148	
					148						総計	148	
					148						小計	148	
					148						総計	148	

表IV-2 焼土・割片集中・礫集中出土遺物一覧

遺構名	層位又は 土層区分	遺物名	分期	石材	点数
FO-101	焼土下層	土器	Ⅱ群中-5期		1
			つばみ付ナイフ	青銅	1
		割片石器	スクレイパー	青銅	1
			削片	青銅	3
			割片	青銅	1,307
	総計				1,317
FO-102	焼土下層	割片石器	割片	青銅	323
			小計		323
		総計			323
FO-103	焼土中層	土器	Ⅱ群中-4期		1
		割片石器	割片	青銅	539
			小計		539
		焼土下層	両面調整石器	青銅	1
			割片石器	スクレイパー	青銅
		削片	青銅	1,424	
	小計			1,424	
	総計				2,973
FO-104	焼土中層	割片石器	割片	青銅	311
			小計		311
		総計			311
FO-105	計-9 焼土3層中	両面調整石器	青銅	1	
		割片石器	スクレイパー	青銅	1
			削片	青銅	1
			礫石器	礫	6
			礫	小計	13
	総計			13	
FO-106	焼土下層	土器	Ⅱ群中-4期		1
		割片石器	割片	青銅	293
			小計		293
		総計			293
FO-107	焼土下層	土器	Ⅱ群中-5期		1
		割片石器	両面調整石器	青銅	1
			小計		1,413
			割片	青銅	1,413
			総計		
FO-108	焼土下層	土器	Ⅱ群中-5期		41
		割片石器	割片	青銅	1,452
			小計		1,493
		総計			1,493
FO-109	焼土下層	土器	Ⅱ群中-5期		3
		割片石器	スクレイパー	青銅	1
			削片	青銅	1
			割片	青銅	804
			小計		609
	総計			609	
FO-110	焼土下層	割片石器	割片	青銅	1,843
			小計		1,843
		総計			1,843
FO-111	焼土下層	土器	Ⅱ群中-4期		1
		割片石器	両面調整石器	青銅	1
			スクレイパー	青銅	1
			削片	青銅	1
			割片	青銅	126
	小計			142	
	総計			142	
FO-112	焼土下層	割片石器	割片	青銅	75
			小計		75
		総計			75
FO-113	焼土下層	土器	Ⅱ群中-3期		1
		割片石器	削片	青銅	630
			小計		631
		総計			631
FO-114	焼土下層	土器	Ⅱ群中-3期		1
		割片石器	割片	青銅	1,967
			小計		1,968
		総計			1,968
FO-115	焼土最下層	土器	Ⅱ群中-3期		1
		割片石器	割片	青銅	324
			小計		324
		総計			324
FO-116	焼土下層	割片石器	割片	青銅	1,525
			小計		1,525
		総計			1,525
FO-117	計-9 焼土1層中	土器	Ⅱ群中-3期		1
		割片石器	スクレイパー	青銅	1
			石核	青銅	1
			割片	青銅	1,986
			小計		1,991
	総計			1,991	
FO-118	焼土中層	土器	Ⅱ群中-3期		1
		割片石器	割片	青銅	463
			小計		463
		総計			463
FO-119	焼土下層	土器	Ⅱ群中-4期		3
		割片石器	割片	青銅	1,997
			小計		2,000
		総計			2,000
FO-120	計-9 焼土下層	土器	Ⅱ群中-3期		1
		割片石器	両面調整石器	青銅	1
			スクレイパー	青銅	1
			削片	青銅	4
			割片	青銅	1,971
	小計			1,981	
	総計			1,981	
FO-121	焼土下層	土器	Ⅱ群中-4期		1
		割片石器	割片	青銅	1,634
			小計		1,634
	総計			1,634	
FO-122	焼土最下層	土器	Ⅱ群中-4期		1
		割片石器	スクレイパー	青銅	1
			削片	青銅	1
			小計		1,641
			総計		
FO-124	焼土下層	土器			1
		割片石器	割片	青銅	1
			小計		1,113
		総計			1,113
FO-125	焼土下層	石核			1
		割片石器	両面調整石器	青銅	1
			スクレイパー	青銅	1
			削片	青銅	1
			小計		1,641
	総計			1,641	
FO-126	焼土下層	土器	Ⅱ群中-4期		1
		割片石器	割片	青銅	241
			小計		242
		総計			242
FO-127	計-9 焼土中層	土器	Ⅱ群中-3期		1
		割片石器	両面調整石器	青銅	1
			スクレイパー	青銅	1
			割片	青銅	302
			礫石器	礫石-礫片	青銅
		空山石	1		
	小計			305	
	総計			305	
FO-129	計-9 焼土中層	割片石器	177型ナイフ	青銅	1
			割片	青銅	1
			小計		2
	総計			2	
FO-134	焼土下層	割片石器	割片	青銅	632
			小計		632
		総計			632
割片集中合計 203,199					
礫集中					
B-1	焼土	割片石器	割片	青銅	1
			青銅	1	
			礫	5	
			青銅	11	
			礫片石	11	
B-2	焼土下層	割片石器	割片	青銅	1
			両面調整石器	青銅	1
			スクレイパー	青銅	1
			礫	1	
			小計		1
	総計			1	
B-2	焼土下層	割片石器	割片	青銅	1
			両面調整石器	青銅	1
			スクレイパー	青銅	1
			礫	1	
			小計		1
	総計			1	
礫集中合計 131					

表IV-5 剣片集中掲載石器一覽

図番	遺物名	遺物番号	層位	分類	種別	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	採取場所	発掘方法	検出層	備考
図IV-20-1	FC-4	8	盛土	片断	片断	4.03	2.00	1.25	20.23	焼土	図IV122	20		
図IV-20-2	FC-4	26	盛土	→土器片(コブ)	破片(土器)	7.00	2.25	1.25	42.63	焼土	図IV122	20		
図IV-20-3	FC-4	9	盛土	→土器片(コブ)	片断	4.20	2.25	0.90	22.84	焼土	図IV122	20		
図IV-20-4	FC-6	3	盛土	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	10.10	5.30	2.30	61.16	焼土	図IV127	20		
図IV-20-5	FC-6	3	盛土	→焼土層(石部)	→片断(石部)	8.63	6.13	2.10	171.22	焼土	図IV127	20		
図IV-20-6	FC-7	1	盛土	→土器片	→片断	7.20	5.10	1.90	122.82	焼土	図IV127	20		
図IV-20-7	FC-7	11	盛土	→焼土層(石部)	→片断(石部)	6.13	7.13	2.10	129.84	焼土	図IV127	20		
図IV-20-8	FC-7	2	盛土	→焼土層(石部)	→片断(石部)	9.00	7.13	1.67	105.20	焼土	図IV127	20		
図IV-20-8	FC-7	3	盛土	→焼土層(石部)	→片断(石部)	7.20	10.70	1.90	111.36	焼土	図IV127	20		
図IV-20-9	FC-7	10	盛土	→焼土層(石部)	→片断(石部)	17.20	6.63	2.60	136.38	焼土	図IV127	20		
図IV-20-11	FC-8	3	盛土	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	4.20	3.00	1.70	38.60	焼土	図IV127	20		
図IV-20-12	FC-8	3	盛土	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	11.00	4.20	2.30	59.92	焼土	図IV127	20		
図IV-20-13	FC-9	5	盛土	→片断	→土器片(土器)	4.70	1.60	0.90	21.21	焼土	図IV127	20		
図IV-20-14	FC-10	3	盛土	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	9.20	7.20	2.00	280.21	焼土	図IV127	20	2 160.89	
図IV-20-15	FC-10	8	盛土	→焼土層(石部)	→片断(石部)	20.20	6.40	3.40	227.83	焼土	図IV127	20		
図IV-20-16	FC-12	5	盛土(中層)	→焼土層(石部)	→片断(石部)	11.23	5.43	2.55	216.60	焼土	図IV127	20		
図IV-20-17	FC-12	6	盛土(中層)	→焼土層(石部)	→片断(石部)	11.23	5.93	2.70	180.25	焼土	図IV127	20	0.136.92	
図IV-20-18	FC-13	1	盛土(中層)	→スリット	→片断	7.20	4.60	1.15	26.22	焼土	図IV127	20		
図IV-20-19	FC-19	7	盛土	→片断	→片断	2.67	1.23	0.33	9.64	焼土	図IV127	20		
図IV-20-20	FC-19	11	盛土	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	7.20	5.70	2.04	47.26	焼土	図IV127	20	2 46.27	
図IV-20-21	FC-21	7	盛土	→土器片	→片断	4.80	3.60	2.00	123.96	焼土	図IV127	20		
図IV-20-22	FC-29	1	盛土	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	9.20	4.60	1.60	53.60	焼土	図IV127	20	2 54.80	
図IV-20-23	FC-32	2	盛土(上層)	→スリット	→片断	6.23	5.53	2.62	77.09	焼土	図IV127	20		
図IV-20-24	FC-33	1	盛土(上層)	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	8.23	5.20	2.40	103.22	焼土	図IV127	20	2 124.26	
図IV-20-23	FC-44	6	盛土(中層)	→スリット	→片断	6.63	4.63	1.63	64.67	焼土	図IV127	20		
図IV-20-26	FC-44	6	盛土(中層)	→スリット	→片断	7.00	5.20	1.50	161.13	焼土	図IV127	20	12 171.89	
図IV-20-27	FC-45	6	盛土(中層)	→焼土層(石部)	→片断(石部)	6.63	6.50	1.60	200.71	焼土	図IV127	20	3 112.23	
図IV-20-28	FC-45	6	盛土(中層)	→土器片	→片断	3.10	5.63	2.40	64.70	焼土	図IV127	20		
図IV-20-29	FC-47	3	盛土(中層)	→スリット	→片断	5.20	4.57	1.17	39.06	焼土	図IV127	20		
図IV-20-30	FC-47	3	盛土(中層)	→スリット	→片断	6.23	5.17	1.20	28.26	焼土	図IV127	20		
図IV-20-41	FC-41	4	盛土(中層)	→焼土層(石部)	→片断(石部)	6.20	5.23	1.10	129.11	焼土	図IV127	20		
図IV-20-42	FC-42	2	盛土(中層)	→土器片	→片断	4.22	2.63	0.70	5.36	焼土	図IV127	20		
図IV-20-43	FC-48	8	盛土(中層)	→スリット	→片断	6.42	5.60	1.30	38.42	焼土	図IV127	20		
図IV-20-44	FC-48	8	盛土(中層)	→焼土層(石部)	→片断(石部)	8.62	6.60	2.71	143.57	焼土	図IV127	20	10 109.90 図IV-20-7	
図IV-20-45	FC-48	5	盛土(中層)	→土器片(土器)	→土器片(土器)	11.60	7.74	2.10	224.70	焼土	図IV127	20	10 163.69 図IV-20-30	
図IV-20-46	FC-48	5	盛土(中層)	→土器片(土器)	→片断(土器)	9.63	7.20	0.92	129.84	焼土	図IV127	20	10 93.83 図IV-20-4	
図IV-20-47	FC-48	5	盛土(中層)	→土器片(土器)	→片断(土器)	6.23	4.62	1.20	22.60	焼土	図IV127	20		
図IV-20-48	FC-49	3	盛土(中層)	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	10.63	6.72	2.00	119.94	焼土	図IV127	20	2 161.76	
図IV-20-49	FC-50	2	盛土	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	12.20	6.60	2.30	136.38	焼土	図IV124	274	147.20 図IV-19-7 図IV127	
図IV-20-50	FC-50	2	盛土	→土器片	→片断(石部)	10.00	11.00	3.20	240.00	焼土	図IV124	274	894.80 図IV-20-18	
図IV-20-51	FC-52	1	盛土(上層)	→焼土層(石部)	→片断(石部)	6.20	7.23	1.20	126.12	焼土	図IV124	274		
図IV-20-52	FC-52	2	盛土(上層)	→土器片	→片断	6.00	7.23	1.27	126.24	焼土	図IV124	274		
図IV-20-53	FC-53	3	盛土(上層)	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	12.00	4.60	1.60	101.13	焼土	図IV124	274	627 247.50 図IV-20-11	
図IV-20-54	FC-53	3	盛土(上層)	→スリット	→片断	6.23	10.20	2.45	120.13	焼土	図IV124	274	20 160.60 図IV-20-12	
図IV-20-55	FC-55	3	盛土(上層)	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	12.53	6.60	1.55	227.66	焼土	図IV124	274	66 601.50 図IV-13-18	
図IV-20-56	FC-56	9-9	盛土(中層)	→土器片	→片断	7.17	5.50	3.00	171.00	焼土	図IV124	274		
図IV-20-57	FC-56	3	盛土(中層)	→土器片	→片断	8.23	10.60	3.42	127.26	焼土	図IV124	274	67 610.50 図IV-19	
図IV-20-58	FC-60	1	盛土	→土器片	→片断	10.00	7.10	3.00	173.82	焼土	図IV124	274	3 270.17	
図IV-20-59	FC-62	2	盛土	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	20.20	6.20	2.17	136.20	焼土	図IV124	274	63 528.50 図IV-41-22	
図IV-20-60	FC-64	2	盛土	→焼土層(石部)	→片断(石部)	9.76	6.11	1.60	100.17	焼土	図IV124	274	19 100.10	
図IV-20-61	FC-81	2	盛土	→焼土層(石部)	→片断(石部)	11.23	5.97	2.30	171.66	焼土	図IV124	274		
図IV-20-62	FC-86	9	盛土	→焼土層(石部)	→片断(石部)	8.20	4.90	2.30	103.20	焼土	図IV124	274	10 128.50 図IV-15-16 図IV127	
図IV-20-63	FC-88	30	盛土	→焼土層(石部)	→片断(石部)	8.63	4.30	1.60	69.00	焼土	図IV124	274	5 60.00	
図IV-20-64	FC-98	10-13	盛土	→焼土層(石部)	→片断(石部)	12.67	6.20	2.15	126.00	焼土	図IV124	274	10 160.50 図IV-20-16 図IV127	
図IV-20-65	FC-98	11	盛土	→焼土層(石部)	→土器片	3.00	4.00	2.00	61.52	焼土	図IV124	274		
図IV-20-66	FC-98	11	盛土	→土器片	→片断	5.61	6.10	2.42	60.00	焼土	図IV124	274	10 104.00	
図IV-20-67	FC-98	16	盛土	→土器片	→片断(石部)	6.20	6.10	2.60	73.50	焼土	図IV124	274	6 100.00 図IV-17-7 図IV127	
図IV-20-68	FC-98	6	盛土	→土器片	→片断	6.20	5.90	3.00	123.23	焼土	図IV124	274		
図IV-20-69	FC-98	7	盛土	→土器片	→片断	6.20	11.60	7.50	146.20	焼土	図IV124	274	3 710.50	
図IV-20-68	FC-98	8	盛土(下層)	→土器片	→片断	6.20	1.20	0.83	6.60	焼土	図IV125	125		
図IV-20-61	FC-88	2	盛土(中層)	→スリット	→片断	6.20	3.60	1.63	20.84	焼土	図IV125	125		
図IV-20-62	FC-88	8	盛土(中層)	→スリット	→片断	7.22	6.44	2.42	100.00	焼土	図IV125	125		
図IV-20-63	FC-88	9-11	盛土(中層)	→焼土層(石部)	→片断(石部)	11.00	6.44	2.00	207.53	焼土	図IV125	125	6 207.53	
図IV-20-64	FC-88	10-10	盛土(中層)	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	12.19	7.67	3.63	283.19	焼土	図IV125	125	22 225.26 図IV-20-18	
図IV-20-65	FC-91	4	盛土(上層)	→土器片	→片断	4.23	1.27	0.65	2.84	焼土	図IV125	125		
図IV-20-66	FC-93	3	盛土(下層)	→土器片	→片断	6.20	6.70	2.00	142.60	焼土	図IV125	125		
図IV-20-67	FC-94	6-2	盛土(中層)	→土器片	→片断	6.00	5.20	2.00	121.20	焼土	図IV125	125	2 164.20	
図IV-20-68	FC-94	2	盛土(中層)	→土器片	→片断	7.20	9.70	3.70	200.33	焼土	図IV125	125	14 234.48	
図IV-20-69	FC-94	2	盛土(中層)	→土器片	→片断	6.70	6.63	3.14	191.25	焼土	図IV125	125	13 238.62	
図IV-20-70	FC-94	2	盛土(中層)	→土器片	→片断	9.11	7.20	2.15	200.18	焼土	図IV125	125	16 310.50 図IV-47-12	
図IV-20-71	FC-96	2	盛土(中層)	→スリット	→片断	7.20	4.60	2.00	36.20	焼土	図IV125	125		
図IV-20-72	FC-98	1	盛土(下層)	→スリット	→片断	6.23	3.70	1.60	6.14	焼土	図IV125	125		
図IV-20-73	FC-100	2	盛土(下層)	→土器片(土器)	→土器片(土器)	6.73	2.90	1.13	32.65	焼土	図IV125	125		
図IV-20-74	FC-101	6	盛土(上層)	→スリット	→片断	4.12	3.71	0.76	7.60	焼土	図IV125	125		
図IV-20-75	FC-101	2	盛土(上層)	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	6.00	5.67	1.75	37.00	焼土	図IV125	125		
図IV-20-76	FC-108	5	盛土	→スリット	→片断	6.63	5.63	2.76	67.14	焼土	図IV125	125		
図IV-20-77	FC-108	1	盛土	→焼土層(石部)	→片断(石部)	6.20	2.60	1.20	47.20	焼土	図IV125	125		
図IV-20-78	FC-108	2	盛土(下層)	→土器片	→片断	11.20	5.60	2.10	89.40	焼土	図IV126	126		
図IV-20-79	FC-111	2	盛土(上層)	→スリット	→片断	6.20	5.00	2.05	61.63	焼土	図IV126	126		
図IV-20-80	FC-112	2	盛土(下層)	→土器片	→片断	9.60	6.60	1.90	130.18	焼土	図IV126	126	10 126.13 図IV-17-12	
図IV-20-81	FC-120	8	盛土(中層)	→スリット	→片断	6.23	5.20	2.00	60.61	焼土	図IV126	126		
図IV-20-82	FC-120	2	盛土(中層)	→土器片	→片断	10.23	11.42	3.95	126.20	焼土	図IV126	126	10 612.00 図IV-20-16	
図IV-20-83	FC-122	1	盛土(中層)	→スリット	→片断	6.20	5.01	2.11	22.26	焼土	図IV126	126		
図IV-20-84	FC-123	1	盛土(中層)	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	11.60	5.40	2.20	163.60	焼土	図IV126	126		
図IV-20-85	FC-127	1	盛土	→土器片	→片断	6.23	6.60	2.03	61.11	焼土	図IV126	126		
図IV-20-86	FC-127	2	盛土	→焼土層(石部)	→土器片(土器)	7.00	2.25	2.00	36.63	焼土	図IV126	126		
図IV-20-87	B-2	3	盛土(中層)	→土器片	→土器片(土器)	9.00	7.40	2.50	200.94	焼土	図IV126	126		

表N-6 切片集中接合資料一覧

図番	図名	図位	図番	図番	分 種	組数	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(kg)	材 質	図番	備 考
図N-20-1	FC-2	基本	4	1	スクリュー		15.20	10.50	3.70	99.00	真鍮	図製126	
		基本	2	3		790.00							
		基本	2	3									
		基本	6	3									
図N-20-2	M50	基本	10	1	スクリュー		22.40	6.60	6.70	120.00	真鍮	図製127	
		基本	10	1		15.00							
		基本	2	18									
		基本	2	4									
図N-20-3	FC-2	基本	2	13	スクリュー		25.10	17.60	8.00	2,106.00	真鍮	図製128	
		基本	2	13									
		基本	2	13									
		基本	11	1									
図N-20-4	FC-9	不備	6	-1	スクリュー		16.80	10.20	7.30	13.00	真鍮	図製129	
		不備	2	20		506.41							
		不備	2	13									
		不備	2	13									
図N-20-5	FC-8	不備	2	13	スクリュー	図製-24-26	17.20	6.60	6.30	1,848.00	真鍮	図製127	
		基本	2	13		606.00							
		基本	8	-24		23				143.57			
		基本	6	-1		33				2,633.04			
図N-20-7	FC-68	基本	6	-1	両面調整右器	図製-24-24	11.80	9.70	4.30	167.33	真鍮	図製127	
		基本	6	-1									
		基本	6	-1									
		基本	7	-1		351				2,548.91			
図N-20-9-8	FC-68	基本	6	-1	両面調整右器	図製-24-25	21.90	20.70	16.10	254.35	真鍮	図製128	
		基本	6	-1									
		基本	6	-1									
		基本	6	-1		351				2,633.04			
図N-22-9	FC-50	基本	6	-1	両面調整右器	図製-26-26	30.00	28.30	6.70	256.50	真鍮	図製130	
		基本	6	-1									
		基本	6	-1									
		基本	6	-1		274				2,699.00			
図N-26-10	FC-50	基本	2	1	両面調整右器	図製-26-40	12.60	18.50	10.60	300.00	真鍮	図製129	
		基本	2	1									
		基本	2	1									
		基本	2	1		32				2,872.00			
図N-40-11	FC-53	基本	2	1	両面調整右器	図製-27-43	21.10	17.50	15.60	310.13	真鍮	図製132	
		基本	2	1									
		基本	2	1									
		基本	2	1									
図N-40-11	M10	基本	20	1	スクリュー		21.10	17.50	15.60	40.71	真鍮	図製132	
		基本	20	1									
		基本	10	1									
		基本	11	404		2,080.26							
図N-39-12	FC-53	基本	2	1	スクリュー		13.20	9.50	4.60	210.53	真鍮	図製127	
		基本	2	1									
		基本	2	1									
		基本	2	1		34				284.00			
図N-41-14	FC-53	基本	11	25	右器		10.20	7.30	7.60	137.11	真鍮	図製130	
		基本	11	25		136.95							
		基本	11	25									
		基本	11	25									
図N-41-14	M50	基本	11	25	スクリュー		19.40	9.60	7.00	968.50	真鍮	図製131	
		基本	11	25									
		基本	11	25									
		基本	11	25									
図N-41-15	FC-53	基本	11	13	スクリュー		17.00	10.00	7.20	436.00	真鍮	図製131	
		基本	11	13									
		基本	11	13									
		基本	11	13									
図N-42-16	FC-56	基本	13	1	両面調整右器	図製-28-45	10.90	15.10	7.80	297.00	真鍮	図製131	
		基本	13	1									
		基本	13	1									
		基本	13	1		66				2,510.00			
図N-42-17	FC-55	基本	4	22	スクリュー		19.60	7.80	5.10	291.00	真鍮	図製133	
		基本	4	22									
		基本	4	22									
		基本	4	22									
図N-42-18	FC-55	基本	4	22	スクリュー		16.70	8.60	3.90	240.00	真鍮	図製131	
		基本	4	22									
		基本	4	22									
		基本	4	22									
図N-42-19	FC-56	基本	2	1	両面調整右器	図製-27-47	13.10	10.70	6.40	216.99	真鍮	図製132	
		基本	2	1									
		基本	2	1									
		基本	2	1		47				4,415.00			
図N-42-20	FC-56	基本	2	1	両面調整右器		13.10	9.80	7.80	43.45	真鍮	図製133	
		基本	2	1									
		基本	2	1									
		基本	2	1		30				2,317.00			
図N-44-21	FC-62	基本	4	20	両面調整右器	図製-28-48	17.00	11.80	6.30	466.28	真鍮	図製134	
		基本	4	20									
		基本	4	20									
		基本	4	20									
図N-44-22	FC-62	基本	4	18	スクリュー		9.90	12.50	7.20	116.00	真鍮	図製133	
		基本	4	18									
		基本	4	18									
		基本	4	18									
図N-45-24	FC-68	H-25 標準上	19	1	両面調整右器	図製-29-32	10.10	5.00	3.75	162.50	真鍮	図製134	
		H-25 標準中	26	8									
		H-25 標準下	26	8									
		H-25 標準上	26	8									
図N-45-25	FC-68	H-25 標準上	21	1	右器		16.10	6.30	8.10	132.50	真鍮	図製134	
		H-25 標準中	30	11									
		H-25 標準下	30	11									
		H-25 標準上	30	11									
図N-45-26	FC-68	H-25 標準上	21	1	両面調整右器	図製-29-54	12.30	6.80	2.20	136.00	真鍮	図製134	
		H-25 標準中	30	11									
		H-25 標準下	30	11									
		H-25 標準上	30	11									
図N-45-27	FC-71	基本	4	11	スクリュー		9.30	11.80	5.30	26.30	真鍮	図製135	
		基本	4	11									
		基本	4	11									
		基本	4	11									
図N-46-28	FC-68	H-25 標準上	19	1	両面調整右器	図製-30-62	12.30	9.65	4.00	203.79	真鍮	図製135	
		H-25 標準中	26	8									
		H-25 標準下	26	8									
		H-25 標準上	26	8									
図N-46-29	FC-68	基本	6	-1	右器		17.10	12.90	11.60	116.96	真鍮	図製135	
		基本	6	-1									
		基本	6	-1									
		基本	6	-1		31				4,415.00			
図N-47-30	FC-68	基本	15	1	スクリュー		13.10	9.65	5.10	93.99	真鍮	図製135	
		基本	15	1									
		基本	15	1									
		基本	15	1		23				2,548.91			
図N-47-31	FC-68	基本	14	22	スクリュー	図製-31-30	11.30	13.15	6.80	368.19	真鍮	図製136	
		基本	14	22									
		基本	14	22									
		基本	14	22									
図N-47-32	FC-117	H-25 標準上	3	1	両面調整右器	図製-31-60	7.30	10.50	7.20	56.18	真鍮	図製136	
		H-25 標準中	3	1									
		H-25 標準下	3	1									
		H-25 標準上	3	1									
図N-48-33	FC-120	H-25 標準上	3	1	スクリュー	図製-32-62	10.00	19.00	9.70	638.86	真鍮	図製132	
		H-25 標準中	3	1									
		H-25 標準下	3	1									
		H-25 標準上	3	1									
図N-49-35	FC-126	H-25 標準上	3	1	スクリュー		22.30	19.30	5.40	533.30	真鍮	図製136	
		H-25 標準中	3	1									
		H-25 標準下	3	1									
		H-25 標準上	3	1									

V 盛土遺構と包含層出土の遺物

土器 (図IV-54・57～100・図V-1～159・図V-208～211/表V-1・2/図版11～121)

1 概要

土器は、973,810点出土した。内訳はⅠ群A類土器10点、Ⅰ群B-3類土器7点、Ⅰ群B-4類土器229点、Ⅱ群A類土器270点、Ⅱ群B類土器949,814点、Ⅲ群A類土器6,664点、Ⅲ群B-1類土器28点、Ⅳ群A類土器4,145点、Ⅳ群B類土器77点、Ⅳ群C類土器34点、Ⅴ群C類土器9,974点、Ⅶ群土器945点である。この他、有孔土製円板113点・擦切土器片7点・焼成粘土塊642点・土製品12点・陶器・陶磁器8点がある。各土器群の特徴・分布は以下の通りである。

なお、土器・土製品等に関して、盛土遺構出土土器と包含層出土土器を一括して扱った。

Ⅰ群A類土器は85～88ラインの河岸段丘の縁辺部から住吉町式が出土した。縁辺部に立地するH-15の覆土からも1点出土している。

Ⅰ群B-3類土器は、微隆起線と縄の圧痕文が加えられたものが85・86ラインの河岸段丘の縁辺部から出土した。O87区からは5点出土、またN87・88区から検出されたP-23から3点出土した。

Ⅰ群B-4類土器は、羽状の燃糸文・綾絡文・ニシンタイプの魚骨回転文等が施されたものなどが86～91ラインの縁辺部、96～98ラインから少量出土した。またH-13・15・16・17、P-13などから出土、縁辺部に立地する住居跡・土坑等からも出土している。

Ⅱ群A類土器は、羽状縄文・菱目状の縄文・ループ文・コンパス文・連続刺突文が施されたものが、縁辺部の86～92ライン、調査区中央の94～1ラインの2か所のまとまりが認められ、M96区から31点得られている。H-28 (204点)、H-35 (133点)、P-22 (7点) からまとまって出土し、他にH-14・16・23・25などからも出土している。

Ⅱ群B類土器は、文様構成からⅡ群B類土器・Ⅱ群B-1類土器～Ⅱ群B-5類土器に細分した。円筒土器下層a式に相当するⅡ群B-1類土器、円筒土器下層b式に相当するⅡ群B-2類土器、円筒土器下層c式に相当するⅡ群B-3類土器、円筒土器下層d1式に相当するⅡ群B-4類土器、円筒土器下層d2式に相当するⅡ群B-5類土器が出土した。しかし、中間的要素をもつものが多く認められ、明確に細分できなかった。

その内訳は、Ⅱ群B類土器197,877点、Ⅱ群B-1類土器2,595点、Ⅱ群B-2類土器22,391点、Ⅱ群B-3類土器207,606点、Ⅱ群B-4類土器240,111点、Ⅱ群B-5類土器280,065点である。

体部には、縄文(1a)、単軸絡条体第4類の回転文(2a(4))、単軸絡条体第1類の回転文(2a)、直前段反燃りの縄文(1f)・多軸絡条体の回転文(2b)、自縄自巻の縄文(1e)、単軸絡条体第5類と第6類の回転文(2d)等が認められた。

Ⅲ群A類土器は、調査区全体から出土し、96～99ラインの盛土部分、また、N88区、M3区からも多く出土した。円筒土器上層a式～サイベⅦ式が出土した。

Ⅲ群B-1類土器は、調査区から散在的に出土した。榎林式が出土したが掲載できなかった。

Ⅳ群A類土器には、余市系土器・トリサキ式・大津式が出土した。調査区全体から出土しているが、盛土範囲を避けるように分布し、K88区の様な例外もあるがN・Oラインより南側から多く出土する傾向が窺えた。Q91区から同期の住居跡が検出されている。

Ⅳ群B類土器はN96区の盛土上面から出土した手稲式である。

Ⅳ群C類土器は少量散在的に出土した。口唇部は肥厚し、断面形が切り出し状のものが出土。また

小型の把手付土器が出土している。

V群C類土器は、河岸段丘の縁辺部から調査区中央の盛土を避ける様に、調査区南側に分布し、N・O88・89区、M～Q91・99区からまとまって出土した。出土資料は、工字文・変形工字文（「四字文」・「変形四字文」）が施され、器種には浅鉢・台付浅鉢・深鉢・壺が認められ、器種組成が認められる一括資料である。H-9・11・18・19・21等の覆土や覆土上面の窪みから出土している。

Ⅶ群土器は、94ラインより以西から出土した。口頸部下端に肩をもち、口縁部は外反するもので、8世紀中葉の頃の住居跡6軒が検出され、その周辺から出土している。土器片は掲載しなかった。

2 出土遺物 (図V-1-159)

盛土・包含層から縄文時代早期（Ⅰ群土器）・前期（Ⅱ群土器）・中期（Ⅲ群土器）・後期（Ⅳ群土器）・晩期（Ⅴ群土器）、弥文文化期（Ⅶ群土器）の土器が出土した。

今回の調査で最も多く出土したⅡ群B類土器の記載にあたっては、口頸部文様帯の文様構成・口頸部文様帯の区画方法と体部縄文との関係を知るために、体部地文によって大別を加えた後、器形・口頸部文様帯・口頸部区画帯等の文様構成等から、文様構成が明確に判断できる復原土器を中心にⅡ群B類土器をⅡ群B-1類土器～Ⅱ群B-5類土器に細別を加えている。体部地文には、縄文（1a）、単軸絡条体第4類の回転文（2a(4)）、単軸絡条体第1類の回転文（2a）、直前段反摺りの縄文（1f）、多軸絡条体の回転文（2b）、自縄自巻の縄文（1e）、単軸絡条体第5・6類の回転文（2d）等が認められた。記載にあたっては体部文様毎の変遷を明確にするために体部縄文毎に記載した。

また、V群土器については、これまで北海道で類例のない資料のため、出土状況・分布図等を加え別項を設けて記載した。

1) Ⅰ群土器 (図V-1-1-16)

Ⅰ群A類土器 (1～3)

Ⅰ群A類土器は調査区西側から散在的に出土している。1～3は物見台式で、同一個体の可能性がある。1・2は口縁部破片。口縁部の断面形は角形で、外傾する。口唇部には貝殻の圧痕文が加えられている。無文地の器面には沈線と貝殻の圧痕文で文様が描かれ、部分的に細い刺突文が加えられている。3は胴部破片。胎土は砂粒が多く、粗い。内面に位はササラ状工具による擦痕が認められる。

Ⅰ群B-3類土器 (4～7)

4～6は微隆起線が認められるもので、いずれも体部破片である。4・5は横位の微隆起線間に縄の圧痕が加えられている。6は縦位の微隆起線も加えられ、これらのは横位の縄の圧痕文が加えられている。7は胴部破片で結節羽状縄文が施され、縄文間に微隆起を作り出している。

Ⅰ群B-4類土器 (8～17)

8～13は口縁部破片、14～17は胴部破片である。8・10は同一個体である。口縁部に7～8本の綾絡文が施され、下位には綾絡文と自縄自巻の原体による羽状の縄文が施されている。9は丸底の小型土器である。器面には綾絡文が施されている。11は口縁部には自縄自巻の原体による羽状の縄文が、その下位にニシントタイプの魚骨回転文が施されている。11は自縄自巻の原体による羽状の縄文とニシントタイプの魚骨回転文が施されている。12は竹管状工具外面による刺突が口唇及び口縁に施され、下位に綾絡文が認められる。13は角形の工具による連続刺突が口唇外面及び口縁に施され、下位に自縄自巻の原体による羽状の縄文が認められる。14は自縄自巻の原体による羽状の縄文が施されている。15・16は同一個体、綾絡文と自縄自巻の原体による羽状の縄文が施されている。17は綾絡文と自縄自巻の原体による羽状の縄文が施されている。

2) Ⅱ群A類土器 (図V-1・2-18～80)

18～22は体部に羽状縄文が施された口縁部破片。60～64は胴部破片である。19・21・63・64は菱目状の文様構成が作出されている。23～28は体部にループ文が施された口縁部破片、65～72は胴部破片である。29～32は体部にコンパス文が加えられた口縁部破片、48・49は胴部破片である。33～38は口縁部文様帯に連続刺突文で円形・鋸歯状・波状等の文様が作出された口縁部破片で、50～59は胴部破片である。39～42は口縁部破片で、口縁部に連続刺突文のみが認められるものである。前述のいずれかの口縁部破片の可能性ある。73～77は底部破片である。いずれも器面及び底面にも押引文が加えられている。78・79は同一個体、斜行縄文が施された口縁部破片である。胎土の多量の繊維を含む。80は無文の小型の尖底土器である。

3) II群B類土器

II群B類土器(1a)

体部に縄文(1a)が施されたもの(図V-3-20-1～153)

II群B-1類土器(図V-3-1～3・5・6・124～126)

1 バケツ型で、口頸部文様帯に不整綾絡文が施されたもの(1～3・124～126)

1は緩やかな波状口縁である。文様帯下端は縄線で区画され、無文地の文様帯には不整綾絡文が施されている。2は緩やかな波状口縁で、口頸部文様帯には付加条の不整綾絡文が施されている。3は4か所の波頂部をもつ波状口縁である。無文地の文様帯には付加条の不整綾絡文が施されている。底面には貝殻条痕文が認められる。124～126は破片資料で、口縁部に不整綾絡文が施されたもので、124・125は体部上半にくびれをもつ器形である。124の内面には条痕が認められる。

2 口縁部に3～4本の縄線が加えられているもの(5・6)

5は平縁で無文地に3本の縄線が加えられたもの。体部上半は斜行縄文、下半は付加条の縄文が施されている。6は緩やかな波状口縁である。器面に斜行縄文を施した後、3本の縄線が加えられている。

II群B-2類土器(図V-3-6-7～10・12～21・図V-20-127)

1 口頸部下端が貼付帯で区画されているもの(7～10・12～21・127)

口頸部文様帯に縄文が施されているもの(7・8・127)

7の口頸部文様帯下端は貼付帯と綾絡文で区画されている。文様帯には横走気味の斜行縄文が施されている。8は体部上半がくびれる器形である。口頸部文様帯は指頭圧痕が加えられた貼付帯で区画され、文様帯や貝殻条痕が認められる体部には不規則な斜行縄文が施されている。127は破片資料。文様帯は刺突が加えられた貼付帯で区画され、文様帯・体部には同一原体で斜行縄文が施されている。

無文地の口頸部文様帯に縄線・単軸絡条体の押圧文が加えられているもの(9・10・12)

9・10は無文地の口頸部文様帯には縄線が加えられているもの。12は単軸絡条体の圧痕文が施されたもの。9の体部上半が斜行縄文、下半は直前段反攪りによる縄文が施されている。

口頸部文様帯に縄線で作出された文様構成をもつもの(13・15～21)

13の文様帯にはモール状の曲線を組み合わせて菱目状の文様を作出している。15は鋸歯状の縄線文が施されている。16は文様構成が不明瞭で、波頂部を頂点とする鋸歯状の縄線文に、綾絡文が重ねて施文されているものと思われる。17は波状口縁である。口頸部文様帯の下端は円形刺突文が加えられた貼付帯と貼付帯直下に加えられた縄線で区画され、無文地の文様帯には横環する縄線文と波頂部から垂下する4本の縄線文が施されている。18の口頸部文様帯下端は円形刺突文が加えられた貼付帯と貼付帯直下に加えられた縄線文で区画され、文様帯には単軸絡条体の第5類の回転文(格子目)が加えられている。19は筒形である。波状口縁で、幅広の口頸部文様帯は外反する。文様帯下端は刺突が

加えられた貼付帯で区画され、文様帯には貝殻条痕文が施されている。体部は複節の斜行縄文である。

20の文様帯は縄線が加えられた貼付帯で区画され、文様帯には単軸絡条体第2類による燃糸文が施されたものである。本遺跡では単軸絡条体第2類による燃糸文が施された資料は非常に少ない。21は口縁部を欠失する。文様帯下端は円形刺突文が加えられた貼付帯で区画されている。文様帯には単節の斜行縄文が施されている。体部は複節の斜行縄文である。

2 口頭部文様帯の下端が貼付帯で区画され、上端は縄線で区画されているもの (14)

14の文様帯下端は貼付帯と縄線で区画され、上端は縄線で区画し、波頂部及び波頂部間から垂下する縄線が加えられ、無文地の文様帯には菱目状の縄線文が作出されている。

Ⅱ群B-3類土器 (図V-3・4-4・11・図V-6~14-22~83・図V-20・21-128~141)

1 明瞭な口頭部区画帯をもたないもの (4・11・25~31・33~43・128~132)

口頭部文様帯に縄線文が加えられたもの (4・11・43・128~132)

4はバケツ型、11・43は筒形のものである。4・11は平縁で、口頭部に無文地の口頭部文様帯に縄線文が加えられている。4の体部は複節の斜行縄文、11は単節の斜行縄文である。43は器面に斜行縄文が施され、口頭部に縄線が加えられたものである。体部上半は斜行縄文、下半には自縄自巻の原体による縄文が縦走気味に施文されている。128~132は破片資料である。128~130は縄線が施されているもの。128・129は無文地上に縄線が施されたもので、128は7本、129は6本の縄線が加えられている。130は斜行縄文上に4本の縄線が加えられている。131は文様帯に単軸絡条体の回転文が施されたもの。132は口縁に単軸絡条体の第4種の回転文、体部には付加条の縄文が施されている。

口縁部に貝殻条痕文やナデ調整で無文帯が作出されているもの (25~31・133)。

31の浅鉢を除き、いずれもバケツ型である。25~27は平縁で、体部に複節の斜行縄文が施されている。26の口頭部文様帯にはナデ調整で無文帯が作出されている。体部には複節の縄文が縦走気味に施文されている。27の体部上半には斜行縄文、下半には直前段反撚りの縄文が施されている。28~31は波状口縁のものである。28の体部上半は斜行縄文、下半には直前段反撚りの縄文が施されている。29の体部には撚り方向が異なる斜行縄文が施されている。30の体部は複節の斜行縄文である。31は鉢形で、幅広の口頭部文様帯の上下に貝殻条痕文が施され、中位に無文帯が作出されている。133は破片資料。文様帯に貝殻条痕が施され、体部は横走気味の縄文である。

口頭部文様帯に斜行縄文・結束羽状縄文等の縄文が施されたもの (33~42)

33~36は文様帯に結束羽状縄文が施されているもの。33は2段の羽状縄文が施されたもので、体部上半には付加条の縄文、下半には単軸絡条体の回転文が施され、底部付近で単軸絡条体の回転文が重なり合い、菱目状の燃糸文が作出されている。34~36は幅広の羽状縄文が施されたもので、34は単節と付加条の縄による羽状縄文が施文されている。35は原体の上下を逆転し、菱目状の文様構成を作出している。37~41は斜行縄文ないし不規則な縄文が施されたものである。40は体部が横走気味の縄文に対し、文様帯は斜行縄文気味に縄文が施されている。42は直前段反撚りによる縄文が施されたもの。体部には縦走気味の縄文が施されている。

2 文様帯下端が縄線・刺突文等で区画されているもの (22・24・32・44・45・122・134・135)

22は口頭部下端を1本の縄線で区画している。口頭部文様帯・体部に付加条の斜行縄文が施されたもの。口縁部は緩やかな波状口縁である。24は口頭部下端を3本の縄線で区画し、無文地の文様帯には鋸歯状の入れ子の縄線文が施されている。32は口頭部文様帯下端を2本の縄線で区画し、文様帯には貝殻条痕文が施されている。44は横からの刺突文で文様帯下端を区画したもの。45は縄線で口頭部文様帯が区画され、文様帯には直前段反撚りの縄文、体部には複節の斜行縄文が施されている。122

は破片資料。文様帯は2本の縄線で区画され、文様帯には単軸絡条体第5類の回転文が施されている。

134・135は破片資料。134の文様帯は2本の縄線で区画され、文様帯と体部には同一原体で斜行縄文が施されている。135の文様帯には単軸絡条体第6類の回転文が施されている。

文様帯下端が縄線・刺突文等で区画され、縦位の縄線文が加えられているもの(23・46・47・138)

23は器面上半に付加条の縄文が施され、口縁に横環及び垂下する縄線が加えられている。体部下半は複節の斜行縄文である。46は波状口縁である。器面に複節の斜行縄文が施され、口頭部文様帯下端を2本の縄線で区画し、文様帯の地文上に弧線状の縄線文が加えられている。47は口頭部文様帯下端を2本の縄線で区画され、縦位の3本の縄線が加えられている。文様帯には直前段反摺りによる縄文が施されている。138は破片資料。文様帯の下端は2本の縄線で区画され、文様帯には貝殻条痕が施され、垂下する縄線が加えられたもの。

3 文様帯上下端が縄線・単軸絡条体の圧痕文で区画されているもの(48・55・56・136・137・139)

48は緩やかな波状口縁になる可能性がある。口頭部には直前段反摺りの原体による縄文が施され、文様帯下端は2本の縄線、上端は1本の縄線で区画され、文様帯には2本一組の弧線状の縄線文が加えられている。55は鉢形、波状口縁である。口頭部文様帯は間に「C」字状の縄の圧痕文が加えられた2本の縄線文で区画されている。文様帯には直前段反摺りの地文が認められ、文様帯には波頂部に沿って山形の縄線文が施されている。区画帯直下には結束羽状縄文が2段加えられ、体部は直前段反摺りによる縄文である。56は波状口縁である。口頭部文様帯は縄線で区画されている。無文地の文様帯には波頂部に沿って山形の縄線文が施されている。

136・137・139は破片資料。いずれも縄線で区画されている。136は文様帯に単軸絡条体第4類の回転文が、137は不整絞絡文的な文様が施されている。139は文様帯に不整絞絡文が施され、文様帯中央に横環する縄線が加えられている。

4 文様帯上下端が縄線・単軸絡条体の圧痕文で区画され、縦位の縄線文等が加えられているもの(49～54・57・58)

幅広の口頭部文様帯のもの(49～54)と幅の狭い文様帯のもの(57・58)に分けられる。

幅広の口頭部文様帯をもつもの(49～54)

49は筒形で、緩やかな波頂部をもつ波状口縁である。口頭部文様帯の上下は縄線で区画され、文様帯には単軸絡条体第6類による網目状の襷系文が施され、波頂部から垂下する3本一組の縄線文が加えられている。体部は複節の斜行縄文である。50はバケツ型である。波状口縁で、口頭部文様帯の上下は縄線で区画されている。無文地の文様帯には波頂部に沿って山形の縄線文が施され、波頂部から垂下する2本一組の縄線が加えられている。体部は合摺りの斜行縄文である。51は波状口縁で、器面に斜行縄文が施されている。口頭部の上下に水平な縄線が加えられ文様帯を区画、波頂部から垂下する3本一組の縄線が加えられている。52は浅鉢型の器形である。体部下半に結束羽状縄文を施した後、無文地の文様帯を単軸絡条体の圧痕文で区画し、文様帯中央から体部下半にかけて4本の横環する圧痕文施し、波頂部と波頂部間を正位・逆位のモール状の圧痕文で結び、4単位の菱目状の文様を作出している。53・54は器形・施工具が異なるものの同様の文様構成をもつものである。53は単軸絡条体の圧痕文、54は組紐状の縄線で施文している。53はバケツ型、波状口縁で4か所の波頂部をもつ。器面に複節の斜行縄文を施した後、文様帯には単軸絡条体の圧痕文が施文されている。文様帯下端は2本の単軸絡条体の圧痕文間に横位の短沈線が加えられた区画文で、上端は波頂部に沿って単軸絡条体の圧痕文で区画されている。文様帯には波頂部から垂下する圧痕文・横環・斜位の単軸絡条体の圧痕文を組み合わせて、菱目状ないし重層する三角状の文様構成を作出している。54は直前段反摺りの地

文上に組紐状の縄線と同様の文様構成が作出されている。

幅の狭い文様帯をもつもの (57・58)

57の口縁は平縁である。口頭部文様帯の上下を縄線で区画し、無文地の文様帯には山形ないし鋸歯状の縄線文が加えられている。体部は縦走気味の縄文である。58の器形は筒形で、口縁は平縁である。口頭部文様帯の上下を単軸絡条体の圧痕文で区画し、下端には結束羽状縄文が加えられている。文様帯は斜行縄文を地文とし、横環・垂下する単軸絡条体の圧痕文が加えられている。体部は複節の縦位の縄文である。この文様帯下端の結束羽状縄文は、後続するⅡ群B-3類の新しい段階の口縁部への結束羽状縄文の多用・文様帯下端の区画文として多用される前段階を示すものと考えられる。

5 口縁部～頸部に縄線や2～3本一組の組紐状の縄線文が施されたもの (59～64・67・68)

59・61は組紐状の縄線文が施されたもの。59は幅広の口頭部文様帯に結束羽状縄文・単軸絡条体の回転文を交互に施した後、組紐状の縄線文が4本加えられている。61は体部上半に結束羽状縄文を施した後、3本一組の組紐状の縄線を3本加えている。60・62～64・67・68は縄線文が施されたもので、64は口唇直下に1本、63は2本、60は4本加えられている。62の体部上半にはやや間隔が広いが、あたかも2本一組の縄線が3段加えられている。なお、縄線文は斜行縄文の地文上に、組紐状のものは体部上半の結束羽状縄文上に施される傾向が窺え、時期差を示す可能性がある。

67・68は無文地の口頭部に縄線文が加えられたもので、先述した4・11とは器形が異なることからここで扱った。また、Ⅱ群B-5類土器にも同様な文様構成のものがあるが、それらの口唇には縄の圧痕が加えられているものが多く、これらには口唇に縄の圧痕文が加えられていないことからここで扱った。67は平縁で、幅広の口頭部は外反する。口頭部には4～6本の縄線が加えられている。68の器形は体部上半でくびれをもつ器形である。口縁は緩やかな波状口縁である。幅広の口頭部文様帯の上下には区画文の様な2本の縄線文が施され、中央に2列の絡絡文が加えられている。文様帯には斜行縄文が認められる。体部上半には斜行縄文、下半は直前段反りの縄文が施されている。

6 口縁部～体部上半に結束羽状縄文が施されたもの (65・66・69)

65は4か所の緩やかな波頂部をもつ波状口縁である。口縁部には3～4段の羽状縄文が施されている。体部には縦位施文の斜行縄文が施されている。66の器形は筒形である。口縁部は平縁である。体部上半に結束羽状縄文が施され、体部は斜行縄文である。69は小型土器である。

7 縄文のみのもの (70～83・140・141)

斜行ないし縦走気味の縄文が施されたもの (70～76・140)

70は平縁で、口唇部断面形は角形で、口唇に複節の縄文が加えられている。体部上半に僅かに張り出しが認められ、幅広の口頭部文様帯の様態を作り出している。体部には複節の斜行縄文が施されている。71・72は縦走気味の複節の縄文が施されたものである。71は体部上半に僅かに張り出しが認められ、幅広の口頭部文様帯の様態を作り出している。口唇部にはナデ調整が加えられている。

72は平縁で、器形はバケツ型である。73は平縁である。器面には単節の斜行縄文が施されている。

74・75は器面に不規則な縄文が施されたものである。74は平縁である。器壁は厚く、重い。75は緩やかな5か所の波頂部をもつ波状口縁である。胎土に多量の繊維を含み、海綿骨針も認められる。

76は小形土器。底面は楕円形で、上面観は円形である。器面には複節の斜行縄文が施されている。

140は破片資料。器面に斜行縄文が施されている。

羽状縄文が施されたもの (77～79・141)

77は筒形である。口縁部は平縁である。底部付近に斜行縄文が認められる。78は3か所の波頂部を

もつ波状口縁である。体部には結束羽状縄文が施され、部分的に菱目状の文様構成が作出されている。胎土に多量の繊維を含み、海綿骨針も認められた。このことから本類に含めた。Ⅲ群A類の可能性もある。79は台付の深鉢である。平縁で、口縁部にくびれをもつ。器面には結束羽状縄文が施され、台部分は無文である。Ⅱ群B-4類の可能性ある。141は破片資料。体部は結束羽状縄文である。

体部から底部(80~83)

80の体部上半には単軸絡条体の回転文・複節の斜行縄文、下半には曲線状の単軸絡条体第5類の回転文が施されている。81は斜行縄文と直前段反摺りの縄文、82は斜行縄文が施されたものである。83は複節の縄文が縦走気味に施されたものである。

Ⅱ群B-4類土器(図V-14-84・85)

84の口頭部文様帯の下端は結束羽状縄文で区画され、幅の狭い無文地の文様帯には組紐状の縄線文が2本加えられている。体部は複節の縄文が縦走気味に施されている。85は緩やかな波状口縁で、口頭部文様帯下端は結束羽状縄文で区画され、幅の狭い無文地の文様帯には組紐状の縄線文が2本施され、波頂部から垂下する組紐状の縄線文が加えられている。体部にも結束羽状縄文が加えられている。

Ⅱ群B-5類土器(図V-14~21-86~121・123・142~153)

1 文様帯下端が肩状の器形をもち、口頭部文様帯の幅が広く、強く外反する器形のもの(86・144)

86は口頭部文様帯下端が半載竹管状工具内面の刺突文(押し文)で区画されているものである。平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯下端は段をもち、肩状である。無文地の口頭部には複節の2本一組の縄線が5本加えられている。144は破片資料。無文地の口頭部には2本一組の縄線が5~6本加えられている。

2 口頭部文様帯下端が半載竹管状工具内面の刺突文で区画されているもの(87・145)

87・145はいずれも口頭部文様帯下端が刺突文が加えられた貼付帯で区画されたもの。87は波状口縁で、波頂部は片流れ状である。口唇には縄の圧痕が加えられている。無文地の文様帯上部はわずかに外反し、波頂部に沿って12本ほど縄線文が加えられている。体部上半は斜行縄文、下半は直前段反摺りの縄文である。145の文様帯には波頂部に沿って単軸絡条体の圧痕文と縄線文が施されている。

3 幅広い口頭部文様帯に棒状やボタン状等の貼り付けが施されているもの(89~92・94・95)

a 口頭部文様帯に縄文が施されたもの(90)

90は筒形である。口唇から口頭部中途にかけて縄線が加えられた貼り付けが施され、口縁部に4か所の突起を作出している。体部は複節の斜行縄文である。

b 無文地の幅広い口頭部文様帯に縄線文が加えられているもの(88・89・91・92)

「複合的な文様帯をもつもの」である。88は波状口縁で、口唇には縄の圧痕文が加えられている。口頭部文様帯は、上半が肥厚・張り出し、波頂部から縄線が加えられた貼付帯が垂下する。肥厚帯下位にも縄線文が加えられている。89は口縁部上部が外反するものである。口縁部上部が外反部分に縦位の貼付帯が加えられ、口縁部に片流れの小突起を作出している。口唇には半載竹管状工具内面の刺突文が加えられている。91は2個一組の小突起をもつ波状口縁で、口頭部は大きく外反する。口唇には縄文が施されている。無文地の口頭部には縄線が施され、小突起間から垂下する2本の縄線と口頭部中途に縄線が加えられたボタン状の貼り付けが施されている。92は波状口縁で、4か所の波頂部をもつ波状口縁である。口唇から内面にかけて縄文が施されている。波頂部から口頭部下端まで垂下する3本の縄線が施され、さらに波頂部に隣接し、垂下する貼り付けが加えられ、波頂部に2個一組の小突起を作出している。同様な突起は94にも認められる。後出する2個一組の小突起の出自との関連が想定できる。

c 口頸部に波頂部直下から口頸部下位まで貼付帯が施されているもの (94・95)

94は比較的幅の狭い口頸部文様帯をもつものである。文様帯には口縁に沿って縄線文を施文した後、波頂部から垂下する縄線が加えられた貼付帯が施されている。文様帯下位にはドーナツ状の貼り付けが加えられている。体部上半は付加条の斜行縄文、下半は複節の斜行縄文で、ドーナツ状の貼り付けの下位から垂下する2本の縄線文が加えられている。95は鉢形で、4か所の小突起をもつ。無文地の口頸部には4本の縄線が施されている。そして、小突起直下から文様帯直下にかけて橋状把手が加えられている。これらの口頸部に施文されている縄線は1本のものが多く、後述する幅の狭い口頸部文様帯をもつものは2本一組の縄線がほとんどで、違いが認められる。また、Ⅱ群B-3類土器の59・61やⅡ群B-4類土器の84・85に認められる組紐状の縄線は認められない。

4 波頂部から垂下する縄線は体部中位のまで及ぶもの (93)

93は4か所のやや片流れの波頂部をもつ波状口縁である。口唇には縄の圧痕が加えられている。波頂部下位はやや肥厚する。無文地の口頸部には縄線文が施され、波頂部から垂下する2本の縄線が体部中位まで及んでいる。

5 幅の狭い口頸部文様帯をもつもの (96～99・104)

a 口頸部の貼り付けが口頸部文様帯の中位に加えられているもの (96・97)

96は緩やかな波状口縁で、口唇部に縄の圧痕が加えられている。波頂部から口頸部中程に垂下する「逆T」字状の貼り付けが加えられ、口頸部を上下2段に分割し、2本一組の縄線が、上半は2本、下半には1本施されている。口頸部文様帯直下には縄端を回転したループ文が認められる。97は、緩やかな波状口縁で、口唇部に縄の圧痕が加えられている。波頂部には圧痕文が加えられ、2個一組の小突起からなる。口頸部は無文地である。波頂部下位の口頸部中程に「一」字状の縄の圧痕が加えられた貼り付けが施されている。貼り付けを中心に折り曲げた縄線の「U」字状の縄端を向い合せに施文して波頂部を頂点とする菱目状の文様構成を作出している。体部は複節の斜行縄文である。

b 縦位の貼り付けが口頸部文様帯に施されているもの (98・99・104)

98は、4か所の片流れ状の波頂部をもつ波状口縁で、口唇には縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯は肥厚気味で、下端は刺突文で区画されている。無文地の文様帯には3本の縄線文が施され、波頂部から斜位に垂下する貼り付けが加えられている。99は平縁で、口唇部に縄の圧痕が加えられている。体部上半に段をもち、吹浦式に類似する器形である。口頸部にはナデ調整が加えられ、無文地で、下端に段をもつ。口頸部下端に「一」状の短い貼り付けが4か所施され、口縁部から先述の貼り付けに向かって「V」字状の貼り付けが加えられている。その後、文様帯と貼り付け間に2本一組の縄線文が3本加えられている。体部には単節の斜行縄文が施されている。104は2個一組の波頂部をもつ波状口縁である。口唇には縄の圧痕が加えられている。波頂部からは縄線文が加えられた貼付帯が垂下する。無文地の口頸部文様帯には2本一組の縄線文が2～3本施され、貼付帯下位の文様帯下端にも2本一組の縄線が1本加えられている。体部は斜行縄文で、部分的に櫛歯状工具による条痕が認められる。

6 無文地の口頸部文様帯に縄線文・単軸絡条体圧痕文のみが施されたもの (100・102・112・119・146)

100・102は無文地の口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されたものである。100は貼り付けにより4か所の突起が作出されている。口唇には縄の圧痕が加えられている。体部中位で膨らみをもち、吹浦式に類似した器形で、口縁部は大きく外反する。無文地の口頸部文様帯は幅広で、2本一組の縄線文が3本施されている。体部は斜行縄文である。102は底部を欠失する。平縁である。口唇部には

刻目が加えられている。口頸部は外反し、無文地の文様帯には2本一組の縄線文が3本施されている。体部は縦走気味の縄文である。112は平縁で、口唇に縄の圧痕文が加えられている。口頸部文様帯下端を縄の短い圧痕文で区画し、付加条の縄による縄線文を4本施した後、重ねて軽い貝殻条痕が加えられている。119は台付である。口縁部は4か所の緩やかな波頂部をもつ波状口縁である。口縁部の断面形は丸く、口唇には縄線文が加えられている。口縁部は単軸絡条体の圧痕文と綾絡文が施されている。体部及び台部分には無節の斜行縄文を施した後、波頂部下位及び波頂部間の体部には垂下する2本一組の綾絡文が加えられている。

146は破片資料。口縁部が肥厚する。波状口縁で、波頂部には押圧が加えられ小突起が作出されている。外反する口頸部文様帯には、波頂部に沿って縄線が加えられている。

7 口縁部肥厚帯に縄線が施されたもの (101・142・143)

101は平縁で、口縁部の断面形は切り出し状である。口唇には縄の圧痕文が加えられている。幅の狭い肥厚帯には2本一組の縄線文が、体部には斜行縄文が施されている。

142・143は破片資料。いずれも口縁部の断面形は切り出し状。142の肥厚帯下端には縄線がめぐり、肥厚帯上には組紐状の縄線が施されている。体部は結束第2種の羽状縄文である。143は口唇と肥厚帯下端に刻み加えられている。肥厚帯には2本一組の縄線が加えられている。体部は斜行縄文である。

8 幅の狭い口頸部文様帯が張り出したもの (108～110・148～151)

a 口頸部に単軸絡条体の圧痕文が施されたもの (108)

108は波状口縁で、台形状の幅広の口縁部突起が施されている。口唇部は肥厚気味である。口頸部文様帯は膨れ、吹浦式の器形の影響が認められる。口頸部文様帯の下端は2本一組の単軸絡条体の圧痕文で区画され、横環・斜位の2本一組の単軸絡条体の圧痕文が認められる。文様構成は不明である。さらに波頂部から垂下する2本一組の単軸絡条体の圧痕文が3本加えられている。体部は斜行縄文で、波頂部下位及び波頂部間には垂下する2本一組の綾絡文が加えられている。

b 口縁部が内面より張り出し、あたかも肥厚帯状の口縁部を作り出したもの (109・110・148～151)

109・110の口縁部は緩やかな波状口縁で、口唇には単軸絡条体の圧痕文が加えられている。肥厚帯状の口唇部には単軸絡条体の圧痕文が施され、その直下にも同様の単軸絡条体の圧痕文が加えられている。110の体部上半には斜行縄文、下半には単軸絡条体の回転文が施されている。

148～151は破片資料。肥厚帯上に単軸絡条体の圧痕文が施されたものである。148の口縁部には貼り付けによって小突起が作出され、縦位の貼り付けが加えられている。口唇には縄の圧痕が加えられている。149の肥厚帯直下にも圧痕文が加えられている。体部は羽状縄文である。150は肥厚帯に縄線が施されたものである。151は波状口縁で、波頂部下位に縄の圧痕が加えられた縦位の貼り付けが施されている。肥厚帯下端には半截竹管状工具内面の刺突文が加えられている。肥厚帯上には2本一組の縄線が施され、肥厚帯直下にも縄線が加えられている。

9 口頸部文様帯中位から文様帯下位・直下が施されているもの (103)

103は鉢形土器である。波頂部は1か所で、2個一組の小突起からなる。口唇には縄の圧痕が加えられている。口頸部は無文地である。波頂部下位の口頸部中程から文様帯直下にボタン状の貼り付けを施した後、文様帯・貼り付け上に2本一組の縄線文が加えられている。体部は斜行縄文で、波頂部下位及び周囲に縦位の2本一組の綾絡文が加えられている。類例はP-60出土の土器に認められる。この資料の口頸部文様帯には文様帯上下端に横環する2本一組の粗い縄線が施され、縄線間に縦位の

粗い短縄文が施されているものである。この文様構成は円筒土器上層 a 式に認められるものであるが、調整・文様構成が複雑であること、共伴した土器が円筒土器上層 a 式より古い段階の要素が窺えることからⅡ群 B-5 類土器として扱った。

10 波頂部から口頸部文様帯下端にかけての橋状把手が施されたもの (105 ~ 107・120・121・147)

105・107は体部上半に段をもち、吹浦式土器にとの関連が想定できる器形である。

105の波頂部は2個一組の小突起からなる。口唇には縄の圧痕文が加えられている。口頸部文様帯下端は区画されず、文様帯下位に膨らみをもつ器形である。無文地の文様帯には、波頂部直下に橋状把手を施した後、2本一組の縄線を5本加えられている。体部は結束羽状縄文で、橋状把手の下位の体部には、垂下する2本一組の綾絡文が加えられている。107は体部下半を欠失する。波頂部は2個一組の大きな突起からなる。口唇には縄の圧痕文が加えられている。口頸部文様帯下端と体部上半に僅かに段をもつ器形である。波頂部直下に橋状把手を施した後、無文地の文様帯には組紐状の縄線を3本加えている。体部上半は斜行縄文で、文様帯直下にはループ状の縄端が認められる。体部下半には結節の斜行縄文や横走気味の縄文が施されている。106は小型の鉢形土器。器形は体部上半で大きくくびれ、外反して立ち上がる。4か所の波頂部をもつ波状口縁である。口唇には縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は区画されず、無文地の文様帯には、波頂部直下に橋状把手を施した後、波頂部には入れ子の「V」字状の縄線が、口頸部には2本一組の縄線が3本加えられている。体部は結束羽状縄文である。橋状把手下位の体部及び波頂部間の体部には2本一組の綾絡文が加えられている。

120・121は台付土器である。120は片流れの波頂部を4か所もつ波状口縁である。口唇部には半載竹管状工具内面の連続刺突文が加えられている。波頂部直下に橋状把手を加えた後、口頸部文様帯の上下を組紐状の縄線文と半載竹管状工具内面の連続刺突文で区画し、文様帯には組紐状の縄線文が2本加えられている。そして、口頸部文様帯下端の区画文の下位に綾絡文が加えられている。体部は斜行縄文である。121は平縁になるものと考えられる。なお、橋状把手は出土していないが、明瞭な剥離痕が認められたことからここで扱った。口縁部に4か所の橋状把手を施した後、口縁に2段の刺突文が加えられている。体部には縦位の羽状縄文が施されている。下半は4本の脚からなり、ドーナツ状の底部に連結されている。147は浅鉢の破片資料。108に類似した台形状の突起をもつものと思われる。台形状の突起の口唇には縄の圧痕、外面には2本一組の縄線が2列加えられている。口縁部には穿孔と橋状把手が施されている。体部は斜行縄文である。

11 外反する幅広の口頸部文様帯に貼付帯が施されているもの (152・153)

152・153は破片資料である。152は波状口縁で、波頂部には口縁部文様帯下端まで及ぶフォーク状の貼り付けが施されている。文様帯には2本一組の縄線と半載竹管状工具内面による刺突と刺突が加えられた貼付帯が施されている。体部に斜行縄文施文後、文様帯下位に刺突文列が加えられている。153は波状口縁で、文様帯下位は貼付帯で区画され、波頂部に沿ってドーナツ状の貼り付けと三角形に貼り付けが加えられている。文様帯には2本一組の縄線と鋸歯状の縄線文が施されている。

12 縄文のみのもの (111・113 ~ 118・123)

111は平縁である。口唇部に縄の圧痕文が加えられている。器形は、体部上半で強くくびれ、口縁部は外反する。口縁部～体部上半と体部下半では燃り方向の異なる斜行縄文が施されている。113・115は口縁部に肥厚帯をもつものである。113は緩やかな波頂部をもつ波状口縁である。口縁部肥厚帯は幅広で、器面には無節の斜行縄文が施され、部分的にループ状の縄端の回転文が認められる。115は平縁で、口縁部の断面形は切り出し状である。幅の狭い肥厚帯上及び体部上半には斜行縄文が、体

部下半には単軸絡条体の回転文が施されている。114の口縁部は斜位に、体部は縦位に縄文が施されたものである。116は口唇部を肥厚させることによって口縁部に小突起が作出されたものである。口唇部・器面には斜行縄文が施されている。117は浅鉢形である。上面観は楕円形で、長軸の2か所に幅広の波頂部が作り出されている。波頂部下位には2か所の並列した穿孔が加えられている。穿孔には明瞭なスレは認められなかった。体部には不規則な斜行縄文が施されている。底部は僅かに上げ底気味である。118は台付で、台部分を欠失する。口縁部の断面形は角形で縄文が加えられている。口唇部は幅広の部分と幅の狭い部分がある。幅広部分は1か所と考えられ、幅広部分と幅の狭い部分の境界には小突起とドーナツ状の貼り付けが加えられている。そして小突起とドーナツ状の貼り付けの下位には1か所の穿孔が加えられている。体部は斜行縄文である。

123は破片資料。4か所の波頂部をもつもので、波頂部は2個一組の小突起からなる。体部上半がくびれる器形で、器面には斜行縄文が施されている。

Ⅱ群B類土器(2a)

体部に単軸絡糸文の回転文(2a)が施されたもの(図V-23~53-1~232)

Ⅱ群B類土器(2a)とⅡ群B類土器(1e:自縄自巻の縄文が施されたもの)の細分・事実記載を行うに際し、一見、両者が共通した文様構成をもつこと、また、微妙な違いが認められることからほぼ同じ細分基準を用いて行った。本文において、当該遺物が無い場合でもその項目を残し、記載している。たとえば、Ⅱ群B類土器(2a)に細分に該当する遺物が無く、記載がない場合、Ⅱ群B類土器(1e:自縄自巻の縄文が施されたもの)には当該遺物があることを示している。

なお、一部、各細分に独自に追加しているものもある。

Ⅱ群B-2類土器(図V-23-1~4・図V-50-182~185)

1は3か所の緩やかな波頂部をもつ波状口縁である。口頭部文様区画帯を上下にもつものである。下端は指頭の圧痕が加えられた太い貼付帯で、上端は沈線で区画されている。文様帯内と区画帯直下に不整綾絡文が加えられている。体部には太い単軸絡条体の回転文が施され、体部中位にも不整綾絡文が加えられている。器壁は厚い。2は縄の圧痕文が加えられた貼付帯で無文地の口頭部文様帯下端が区画されたもので、文様帯には縄線文が加えられている。体部には斜位に施文されている。3は貼付帯で無文地の口頭部文様帯が区画されたもので、文様帯及び貼付帯上に縄線文が加えられている。底面にも縄文が施されている。4は縄線が加えられた貼付帯で口頭部文様帯下端を、上端を縄線で区画したもので、文様帯及び肥厚帯直下に斜行縄文が施されている。底面には単軸絡条体の回転文が加えられている。

182~185は口縁部の破片資料。いずれも口頭部文様帯の下端が貼付帯で区画されたものである。

182の貼付帯下位には斜行縄文、文様帯には不整綾絡文が施されている。183の貼付帯には刻みが加えられ、文様帯には斜行縄文が施されている。184の肥厚帯・文様帯には単軸絡条体の回転文が施されている。185の口頭部文様帯下端は縄線が加えられた貼付帯で区画され、文様帯内の上下端は沈線で区画され、文様帯内には単軸絡条体の回転文を施文後、入れ子の鋸歯状の縄線文が加えられている。

Ⅱ群B-3類土器(図V-24~31・38-5~58・100・図V-50・51-186~194・図V-53-231)

1 口頭部文様帯の区画文として貼付帯が施されているもの(5~7)

5は幅広の口頭部文様帯下端を横方向からの円形刺突文が加えられた貼付帯で区画している。口縁部は4か所の波頂部をもつ波状口縁である。無文地の文様帯には入れ子の鋸歯状の縄線文が施されている。6は底部を欠失する。幅広の口頭部文様帯下端は、円形刺突文が加えられた低い貼付帯で区

画されている。無文地の文様帯には横位に連結する入れ子の菱目状（「横8」の字状）の縄線文が施されている。また、肥厚帯直下には2本の綾絡文が加えられている。7は体部下半を欠失する。口縁は4か所の波頂部をもつ波状口縁である。貼付帯で区画された幅広の口頭部文様帯には単軸絡条体の回転文を施した後、2本一組の単軸絡条体の圧痕文で、菱目状の文様構成を作出している。この文様構成は直前段反摺りを体部縄文とする（1f）のⅡ群B-3類土器の資料（図V-72-100～109）、縄文を地文とする（1a）の資料（図V-10-52～54）などに認められる。

2 口頭部文様帯を区画する区画帯をもたないもの（8～14・26～36・41・186～188）

a 無文地の口頭部に縄線文・組紐状の縄線が施されているもの（8・9・34・186～188）

8は底部を欠失する。筒形の器形である。9の体部は単軸絡条体の回転文・単軸絡条体第6類の回転文・付加条の斜行縄文の3種類が組み合わされて施文されている。34はバケツ型で、口頭部文様帯下端に段をもつ器形である。無文地の口頭部文様帯は大きく外反し、縄線文が加えられている。8・9とは異なった器形で、新しい可能性がある。

186～188は口縁部の破片資料。無文地の文様帯に縄線が施されている。186の文様帯直下には縦位に、体部は斜位に施されている。187の文様帯直下には斜行縄文が認められる。188の文様帯には鋸歯状の縄線が加えられている。

b 口頭部に縄文や単軸絡条体回転文などが施され、口頭部文様帯が作出されているもの（10～13・26～33・41）

10～13は筒形、26～33・41はバケツ型である。10は口頭部に斜行縄文・結節羽状縄文が施されたもの。11は口頭部下端に肩（段）をもつ器形で、狭い口頭部は強くくびれる。口頭部には複節の斜行縄文が施されている。26～29は口縁部に斜行縄文が施されたもの。12・13・30は結束羽状縄文の原体の上下の位置を変えることで、菱目状の文様構成を作り出しているもの。12の体部は単軸絡条体の回転文と単軸絡条体第5類の原体の回転文が組み合わされて施文されている。31・32は、口頭部に付加条の縄文が施されたもの。31の体部は単軸絡条体の回転文と単軸絡条体第6類の回転文が組み合わされて施文されている。文様要素の組み合わせは9に類似する。33は直前段反摺りの原体による縄文が施されたもの。41は、口頭部に3段の結束羽状縄文を施して口頭部文様帯を作出し、口縁部（波頂部）から垂下する3本の縄線文が加えられたものである。体部には結束羽状縄文が中位と下位に加えられ、さらに縦位の2本の綾絡文が加えられている。

c 口頭部文様帯に自縄自巻の原体による縄文が施されたもの

d 口頭部に貝殻条痕文が施され口頭部文様帯が作出されたもの（14・35・36）

14は筒形。幅の狭い口頭部文様帯に貝殻条痕文が施されたもの。35・36はバケツ型のものである。

e 文様帯の地文上に縄線・組紐状の縄線文・単軸絡条体の圧痕文が加えられたもの

3 口頭部文様帯を区画する区画帯をもつもの（15～25・37～40・42～51・58・100・189～194・231）

a 口頭部文様帯下端が1～2本の縄線文・単軸絡条体の圧痕文等で区画されたもの（15～20・37～40・189・194）

15～20は筒形、37～40はバケツ型のものである。37・38には口頭部文様帯下端が1本の縄線文で区画されたもので、37の文様帯には直前段反摺りの縄文が、38には斜行縄文が施されている。15～20・39・40は口頭部下端が2本の縄線で区画されているもの。15・16の文様帯には綾絡文が、17・39は結束羽状縄文の原体を上下逆転させて菱目状の文様構成を作り出しているもの。18・19・40は斜行縄文が施されているものである。19の体部には単軸絡条体の回転文逆転と単軸絡条体第6類の回転文

が、20は単軸絡糸体の回転文と単軸絡糸体第5類の回転文とが組み合わされて施文されている。

189・194は口縁部の破片資料。189の文様帯に斜行縄文が施されている。194の文様帯には貝殻条痕が施されている。

b 口頸部文様帯下端が1～2本の縄線文・単軸絡糸体の圧痕文等で区画され、文様帯には口縁部から斜位や垂下する縄線文・単軸絡糸体などの圧痕文・刺突文が加えられたもの(190)

190は口縁部破片。文様帯下端を2本の縄線で区画し、斜行縄文を施した後、文様帯中央に横環する半截竹管状工具内面による沈線が2本加えられている。

c 幅広い口頸部文様帯の上下端が1～2本の縄線文・単軸絡糸体の圧痕文等で区画され、文様帯には口縁部から斜位や垂下する縄線文・単軸絡糸体などの圧痕文・刺突文が加えられたもの(21・22・24・44・45・193)。

21・22・24は筒形、44・45はバケツ型である。21は平縁である。無文地の口頸部文様帯は上下端とも単軸絡糸体の圧痕文で区画され、さらに斜行・横位の単軸絡糸体の圧痕文が加えられ、菱目ないし重層の三角文が作出されている。体部の単軸絡糸体の回転文は太く、粗い。22は平縁である。口頸部文様帯は上端1本、下端4本の縄線で区画され、文様帯に斜行縄文を施した後、2本の一組の縄線で鋸歯状の文様構成を作出している。体部の単軸絡糸体の回転文は密に施文されている。体部上半には横位の燃糸文も認められる。24は4か所の波頂部をもつ波状口縁である。口頸部文様帯は上端1本、下端2本の単軸絡糸体の圧痕文で区画され、波頂部から垂下する3本の単軸絡糸体の圧痕文が加えられている。無文地の文様帯には6～7本の絞絡文が加えられている。体部は区画帯直下及び底部付近に斜行縄文が加えられている。44は4か所の波頂部をもつ波状口縁である。幅広い口頸部文様帯は上下端とも単軸絡糸体の圧痕文で区画されている。文様帯には斜行縄文が施された後、斜位や波頂部から垂下する3本の単軸絡糸体の圧痕文が加えられ、菱目・三角状の文様構成を作り出している。45は4か所の波頂部をもつ波状口縁である。幅広い口頸部文様帯は上下端とも縄線で区画されている。文様帯には縦位の単軸絡糸体の回転文を施した後、斜位や波頂部から垂下する組紐状の縄線で、菱目・三角状の文様構成を作り出している。

193は口縁部破片。平縁である。文様帯は磨滅が著しく不明瞭であるが斜位気味の単軸絡糸体の回転文や結束羽状縄文が施されているように思われる。文様帯は、上端2本、下端3本の縄線で区画され、垂下する3本一組の縄線が加えられている。

d 口頸部文様帯の上下端が1～2本の縄線文・単軸絡糸体の圧痕文・組紐状の縄線文等で区画されたもの(23・25・42・43・191・192・231)

23・25は筒形、42・43はバケツ型。23は平縁の大型土器である。口頸部文様帯上端は1本、下端は2本の縄線で区画されている。文様帯には結束羽状縄文の原体を上下を変えて施文している。25は口縁部を欠失する。口頸部文様帯下端は2本の縄線で区画され、文様帯には斜行縄文が施されてものである。体部には斜行縄文と不規則で密な単軸絡糸体の回転文が組み合わされて施文されている。42は緩やかな波状口縁である。口頸部文様帯の上下が1本の縄線で区画され、文様帯内には単軸絡糸体の回転文が施されている。なお、体部は自縄自巻の原体による縄文の可能性もある。43は平縁である。口頸部文様帯は上端1本、下端3本の縄線で区画され、文様帯には縄文が加えられている。

191・192は口縁部破片。191の文様帯には菱目状の縄文が、192には斜行縄文が施されている。231は口縁部の破片資料。器面に単軸絡糸体の回転文を施した後、口頸部上端を沈線で区画し、文様帯には鋸歯状の沈線文が加えられている。

e やや幅の狭い口頸部文様帯の上下端が1～2本の縄線文や組紐状の縄線文等で区画されたもの

(46～48)

46は小波状口縁である。器面に単軸絡条体の回転文を施した後、口頭部文様帯の上下を2本の縄線で区画し、文様帯の中央部にも同様の縄線文が加えられている。47は口頭部文様帯に結束羽状縄文を施した後、文様帯の上下を組紐状の縄線文で区画している。体部上半に複節の単軸絡条体の回転文、底部付近に自縄自巻による縄文を施した後、結束羽状縄文が加えられている。48の口頭部文様帯には、直前段反摺りの原体による縄文を施した後、文様帯上下をやや間隔の広い組紐状の縄線文で区画し、文様帯の中央に1本の組紐状の縄線文が加えられている。

f 幅の狭い口頭部文様帯の上下端が1～2本の縄線文や組紐状の縄線文・綾絡文等で区画されたもの (49～51・58・100)

49・50は4か所の緩やかな波頂部をもつ波状口縁である。口頭部文様帯に結束羽状縄文を加えた後、上下を組紐状の縄線文で区画している。50の文様帯下端にはさらに結束羽状縄文が加えられている。51は4か所の緩やかな波頂部をもつ波状口縁である。口頭部文様帯は菱目状に結束羽状縄文を加えた後、上端を組紐状の縄線文で、下端は2列の綾絡文で区画している。体部は単軸絡条体第1A類の原体の回転文の可能性がある。100は平縁で、口頭部文様帯は結束羽状縄文を加えた後、上下を1本の組紐状の縄線文で区画されている。体部には結束羽状縄文が加えられている。

58は浅鉢である。4か所の波頂部をもつ波状口縁である。口頭部には横位の橋状把手が2か所に施されている。

4 口頭部文様帯をもたないもの (52～57)

52～57はいずれも器面に単軸絡条体回転文が施されたものである。52・53は底部から開き気味に立ち上がる器形である。Ⅱ群B-2類土器の可能性が高い。54～56は底部からほぼ垂直に立ち上がり、体部上半にくびれをもつものである。56は貝殻による器面調整を器面全面に施した後、単軸絡条体の回転文が縦位に加えられている。57は浅鉢形の小型土器で、口縁部に焼成前に外面からの一対の穿孔が加えられている。

Ⅱ群B-4類土器 (図V-32～46・51・52-59～99・101～141・143・146～150・153～156・159～163・195～212)

1 結束羽状縄文・結束第2種・綾絡文による口頭部文様帯区画帯をもつもの (59～72・101～135・137～140・143・146・147・159・162・197・199～200・202・203・207～209)

結束羽状縄文・結束第2種・綾絡文による口頭部文様帯区画帯をもつものである。

a：結束羽状縄文，b：結束第2種，c：綾絡文と大別し、さらに、文様帯内の文様要素・体部の文様構成で細分を加えている。

1 a 口頭部文様帯の下端が結束羽状縄文で区画されているもの (59～72・101～135・162・197・199～200・202・203)

a 1 体部が単軸絡条体の回転文のみのもの (59～71・197・199・200)

① **口頭部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの** (59・60・62・63・65・66)

59は平縁である。口頭部文様帯がやや幅広く、無文地の文様帯には組紐状の縄線文が3本施されている。文様帯が幅広くであることからⅡ群B-3類土器に含まれるべきものか。60は幅の狭い文様帯に、組紐状の縄線文間に2本一組の縄線文を挟みが密に組み合わせられて施文されている。このため、一見3本一組の組紐状の縄線文が2本施されているように見える。62は組紐状の縄線文が2本施されている。63は3本の組紐状の縄線文が密に施されたもので、真ん中の方向を変えることで、3本一組の組紐状の縄線文が2本施されているように見える。65は3本一組の組紐状の縄線文が施されたもの。66

は組紐状の縄線文と2本一組の縄線文が組み合わされて施文され、3本一組の組紐状の縄線文と1本の縄線文の組み合わせのような文様効果を作り出している。

② 口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの(61・64)

61の文様帯には2本一組の縄線文が2本施文されている。64は縄線文が4本施文されたもの。

③ 口頸部文様帯に縄線文が施されているもの(67～71・197・199・200)

67・71は幅の狭い文様帯に3本の縄線文が加えられたものである。67は緩やかな波状口縁、71は平縁である。68～70は幅の狭い文様帯に2本の縄線文が加えられたものである。68・70は緩やかな波状口縁、69は平縁である。

197・199・200は口縁部の破片資料。197は文様帯内の上下を縄線で区画し、文様帯には菱目状の文様構成を作出し、さらに口縁部から垂下する2本一組の縄線文が加えられている。文様構成は195に類似する。199の口頸部文様帯は結束羽状縄文と斜線で短い縄の圧痕文が組み合わされたものである。無文地の文様帯に横環する4本の縄線文を施し、更に口縁部から垂下する2本の縄線文が加えられている。

200は緩やかな波状口縁で、文様帯の縄線文は波頂部に沿って施文され、波頂部下位に山形の文様構成を作出している。

a2 体部中程まで結束羽状縄文が加えられているもの(101～107・112～115・119・122・202・203)

① 口頸部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの(101～105・107・112・113・202)

101～103・112・113は口頸部文様帯に2本の組紐状の縄線文が施されたもの。101は平縁で、体部上半に結束羽状縄文が加えられているもの。102・103は緩やかな波状口縁である。112は口頸部に下端に組紐状の縄線文と結束羽状縄文が施され、文様帯には結束羽状縄文が施されている。また、結束羽状縄文は体部下半まで加えられている。113は2本の組紐状の縄線文ないし、撚り方向が異なる縄線文が3～4本施文されている。

104・105・107は口頸部文様帯に3本の組紐状の縄線文が施されたもの。104は緩やかな波状口縁である。口頸部文様帯には波状口縁に沿って3本の組紐状の縄線文が加えられている。体部中位まで結束羽状縄文が施されている。底部付近は複節の斜行縄文が認められる。105は波頂部下位に短い組紐状の縄線文が加えられ、山形の文様構成を作り出している。107は波頂部下位に縄端を折り曲げ部分を向い合せに配置し菱目状の文様構成を作出している。

202は口縁部の破片資料。202は2本一組の組紐状の縄線文が3本施されたものである。

② 口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの(106)

106は口頸部文様帯に2本の2本一組の縄線文と2列の綾絡文が施されている。波状口縁で、体部下半まで結束羽状縄文が加えられている。

③ 口頸部文様帯に縄線文が施されているもの(114・115・119・122・203)

114は緩やかな波状口縁、文様帯には2本の縄線文が、115の文様帯には4本の縄線文が加えられている。119は小型土器。緩やかな波状口縁である。文様帯には縄線文が2本施され、波頂部下位に「上向きの弧線」が加えられ、曲線的な菱目状の文様構成を作り出している。122は体部下半を欠失する。緩やかな波状口縁で、文様帯には4本の縄線文が加えられている。

203は口縁部破片。文様帯には2本の縄線文が認められる。

a3 体部下半まで結束羽状縄文が施されているもの(108～110・116～118・120～123・162)

① 口頸部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの(108・109)

108の文様帯には3本、109は1本加えられている。109の波頂部下位には上向きの「弧線」が加え

られ、曲線的な菱目状の文様構成を作出している。

② 口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの (110・162)

110は2本一組の縄線が2本施されたものである。162は波状口縁である。口頸部文様帯下端は結束の斜行縄文で区画され、文様帯には3本の2本一組の縄線文が加えられている。結束羽状縄文が底部付近まで加えられている。

③ 口頸部文様帯に縄線文が施されているもの (116～118・120～123)

116は平縁で、幅の狭い文様帯には3本の縄線文が加えられている。117・118は緩やかな波状口縁で、口唇に縄の圧痕文が加えられている。117は4本、118は2本の縄線文が文様帯に加えられている。体部には3段の結束羽状縄文が加えられている。120・121の口縁部はやや開く器形で、文様帯には3本の縄線文が、体部には5～6段の結束羽状縄文が加えられている。123はやや幅広の口頸部文様帯で、文様帯には矢羽状の縄線文が施されている。体部には4段の結束羽状縄文が加えられている。

1 b 口頸部文様帯の下端が結束第2種で区画されているもの (137～140・143・146・147・159・207～209)

b 1 体部が単軸絡条体の回転文のみのもの (208)

① 口頸部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの

② 口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの (208)

208は破片資料。口縁部の破片資料で、文様帯には2本一組の縄線が加えられている。

③ 口頸部文様帯に縄線文が施されているもの

b 2 体部中程まで結束第2種が加えられているもの (137・138・209)

① 口頸部文様帯に組紐状の縄線が施されているもの (137)

137は平縁で、幅の狭い文様帯には組紐状の縄線が2本施されている。結束第2種の羽状縄文は体部上半まで加えられている。

② 口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの (209)

209は口縁部の破片資料。文様帯には2本一組の縄線が加えられている。

③ 口頸部文様帯に縄線文が施されているもの (138・207)

138は緩やかな波状気味の口縁である。文様帯の下端は2本の結束第2種による羽状縄文で区画され、文様帯には3本の縄線が施されている。結束第2種の羽状縄文は体部上部に1本加えられている。207は口縁部の破片資料。文様帯にやや間隔を置いて2本の縄線が施されている。

b 3 体部下半まで結束第2種が施されているもの (139・140・143・146・147・159)

① 口頸部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの

② 口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの

③ 口頸部文様帯に縄線文が施されているもの (139・140・143・146・147・159)

139・140は緩やかな波状口縁である。文様帯には波頂部に沿って縄線文が山形・波状に施文されている。143は緩やかな波状口縁である。口唇に縄の圧痕が加えられている。文様帯内の上下は2本一組の縄線で区画され、文様帯には波頂部を頂点とする山形を縄線で作出、斜位の縄線を加えている。146は平縁である。無文地の文様帯には重層した三角ないし菱目状の文様構成を作り出している。147は平縁である。口唇に縄の圧痕文が加えられている。文様帯には3本の縄線が加えられている。159は緩やかな波状口縁で、幅の狭い文様帯には3本の縄線が施されている。

体部2 a のⅡ群B-4類において結束第2種が用いられた資料が多く認められた。

これに比べ同様の文様構成をもつ体部1 e では資料が少なく、大きな違いが認められる。

1c 口頸部文様帯の下端が綾絡文で区画されているもの(148~150)

c1 体部が単軸絡条体の回転文のみのもの

- ① 口頸部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの
- ② 口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの
- ③ 口頸部文様帯に縄線文が施されているもの

c2 体部中程まで綾絡文が加えられているもの

- ① 口頸部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの
- ② 口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの
- ③ 口頸部文様帯に縄線文が施されているもの

c3 体部下半まで綾絡文が施されているもの(148~150)

- ① 口頸部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの
- ② 口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの
- ③ 口頸部文様帯に縄線文が施されているもの(148~150)

148は平縁である。文様帯内は上下を縄線文で区画し、5~6本一組の縄線で、山形ないし鋸歯状の文様構成を作出している。149は緩やかな波状口縁である。文様帯上端は1本の縄線で、下端は3本一組の縄線と綾絡文で区画されている。文様帯の文様構成は波頂部下位には横走気味の縄線が、他には矢羽状の縄線文が施されている。体部には貝殻条痕文上に単軸絡条体の回転文が施され、中位及び底部付近に綾絡文が加えられている。150は平縁ないし緩やかな波状口縁である。文様帯の上端は2本一組の縄線で、下端は1本の縄線と2列の綾絡文で区画されている。文様帯を2本一組の縄線で2分し、上下に方向の異なる斜位の短い縄線を加え矢羽状の文様構成を作出している。体部には2本一組の単軸絡条体の回転文が施され、2本一組の綾絡文が底部付近まで施文されている。

2 貼付帯による口頸部文様区画帯をもつもの(72・87・98・99・124~128・141・153~156・211・212)

貼付帯のみのもの・結束羽状縄文・結束第2種・綾絡文と組み合わせられているものがある。

a: 貼付帯のみのもの, b: 結束羽状縄文, c: 結束第2種, d: 綾絡文と呼称し記載する。

2a 貼付帯のみのもの(87・98・99・211・212)

87は底部を欠失する。口頸部文様帯の下端は縄線文が加えられた貼付帯で区画されている。無文地の文様帯には3~4本の縄線文が加えられている。体部の縹糸文は軸への巻き付けが粗雑である。98は体部下半を欠失する。口唇に縄の圧痕が認められる。無文地の幅の狭い文様帯には折り曲げられた縄線の横「U」字状の縄端が認められる2本一組の縄線が2段施されている。99は無文地の幅の狭い文様帯には2本一組の縄線が2本施されている。

破片資料(211・212)

211・212は口縁部の破片資料である。文様帯下端は、刺突が加えられた貼付帯と結束羽状縄文で区画している。211の波頂部下位の文様帯には縄線文で山形の文様が作り出されている。212は縄線文が加えられている。

2b 貼付帯と結束羽状縄文が組み合わせられているもの(72・124~128)

72は平縁である。口頸部文様帯下端は刺突文が加えられた貼付帯と結束羽状縄文によって区画されている。文様帯には縄線文が加えられている。体部は単軸絡条体の回転文のみである。124は、無文地の文様帯には、縄線文で菱目状の文様構成を作出、緩やかな波状口縁の波頂部から垂下する2本一組の縄線文が加えられている。体部には4段の結束羽状縄文が加えられ、体部下半まで及んでいる。125は

底部を欠失する。口縁は緩やかな波状口縁である。無文地の文様帯には波頂部を頂点とする横位の入れ子の菱目状の文様構成が作出されている。体部には結束羽状縄文と2列の綾絡文が組み合わされて施文され、体部中位の結束羽状縄文は上下を綾絡文で挟まれている。これらは体部下半まで及んでいる。この組み合わせは、本遺跡出土資料でも少ない。126は波状口縁である。文様帯には波頂部を頂点とする入れ子の山形の文様構成を作出している。体部上部に結束羽状縄文が1本加えられている。127は底部を欠失する。平縁である。文様帯は縄線で上下が区画され、中央にも縄線が加えられ、上下に山形ないし矢羽根状の縄線文が加えられている。体部下半に結束羽状縄文が3段加えられている。128は平縁である。口頭部文様帯の上下を2本一組の縄線で区画し、「く」字状の縄線文が向きを変えて施文され、菱目状・「X」字状の文様構成を作出している。体部の結束羽状縄文は体部下半まで及んでいる。

2c 貼付帯と結束第2種が組み合わされているもの (141・153～156)

141は平縁である。口頭部文様帯の下端は貼り付け上に施文された結束第2種による羽状縄文によって区画されている。文様帯には文様帯上部の波状ないし山形の重層する縄線と下位の横環する縄線で三角状の文様構成を作り出している。体部には結束第2種による羽状縄文が加えられている。153は体部下半を欠失する。緩やかな波状口縁である。文様区画帯は横位の刺突文が加えられた貼付帯と結束第2種による羽状縄文で区画されている。文様帯には縄線文が波頂部を頂点として三角形・山形に施文され、波頂部から垂下する2本の縄線が施され、波頂部下位の縄線上に刺突文が加えられている。155は平縁である。文様帯は横位からの刺突文と結束第2種による羽状縄文で区画されている。文様帯内の上下は縄線で区画され、「く」字状の縄線文が加えられ、部分的に向きを変え菱目状の文様構成を作り出している。体部上半に結束第2種の羽状縄文が加えられている。156は平縁である。無文地の文様帯内の上下は1本の縄線で区画され、文様帯内には3本一組の縄線で、横位の連続する菱形文が作出されている。結束第2種の羽状縄文は体部下半まで及んでいる。

なお、154は貼付帯が認められないものであるが刺突文が加えられていることからここで扱った。緩やかな波状口縁である。文様区画帯は横位の刺突文と結束第2種による羽状縄文で区画されている。文様帯には縄線文が波頂部を頂点とする三角形・山形に施文され、波頂部から垂下する2本の縄線が加えられている。結束第2種の羽状縄文は体部下半まで及んでいる。

2d 貼付帯と綾絡文が組み合わされているもの

3 口頭部文様区画帯をもたないもの (74～86・88～94・198・210・201)

波状口縁に沿って縄線・組紐状の縄線などが施されたもの、波状・鋸歯状・矢羽状に施されたもの、波頂部下位に菱目状・山形の文様構成が作出されたものなどが認められる。

3a 文様帯に組紐状の縄線が加えられているもの (74・75・80・88～90)

74・80は緩やかな波状口縁である。74は4本、80は2本の組紐状の縄線文が口頭部文様帯に施されている。75は体部上半にくびれをもつ器形で、口頭部には5本の組紐状の縄線が施されている。88は平縁で、口唇に縄文が施されている。口頭部文様帯には1本の縄線と3本一組の組紐状の縄線が交互に施されている。89は体部上部が開く器形で、口縁は緩やかな波状口縁である。無文地の文様帯には3本一組の組紐状の縄線が2段施されている。90は平縁で、文様帯には横位に単軸絡条体の回転文を施した後、3本一組の組紐状の縄線文が4～5段加えられている。

3b 文様帯に2本一組の縄線が加えられているもの (76・78・81・198)

76は緩やかな波状口縁である。口頭部には山形ないし鋸歯状の縄線文が2本一組の縄線で施文されている。78は緩やかな波状口縁で、2本一組の縄線文で波頂部直下に薄い(低い)三角ないし菱形の

文様構成を作出している。81の口縁部には2本一組の縄線が3本施されている。

破片資料(198)

198は口縁部の破片資料である。貼り付けによって緩やかな波状口縁が作出されている。文様帯には2本一組の縄線が3本施されている。体部は単軸絡条体の回転文である。

3c 文様帯に縄線が加えられているもの(77・79・82～86・91・92・195・196・201・210)

77・79は緩やかな波状口縁で、波頂部直下に1本ないし2本一組の縄線文で薄い(低い)三角ないし菱形の文様構成を作出している。82は筒形、平縁である。口縁部には3本の複節の縄線が施されている。83・84はいずれも平縁で、バケツ型である。84は小型土器で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯はやや幅広く、83は3本の複節の縄線、84は4本の単節の縄線は施されている。85は緩やかな波状口縁である。器面に単軸絡条体の回転文を施した後、波状口縁に沿って単軸絡条体の圧痕文が施され、波頂部直下の圧痕文上に刺突が加えられている。なお、体部縄文については自縄自巻の原体の回転文の可能性もある。86は器面に単軸絡条体の回転文を施した後、口縁に4本の縄線文が加えられている。91は筒形で、口縁部は波状口縁である。口頭部は幅が狭い。波状口縁に沿って口頭部文様帯に縄線が山形に施文され、口頭部下端に横環する縄線が加えられ、波頂部下位に入れ子の三角状の文様構成を作り上げている。92は平縁である。口縁直下に1本の太い縄線文が加えられたもの。195は口縁部破片。文様帯は単軸絡条体の回転文を地文とし、上下が細い縄線で区画され、文様帯内には入れ子の菱目状の文様構成を作出している。196は文様帯の上下を縄線で区画し、文様帯中央に横環する縄線を加え、上下に「く」字状の縄線文が加えられている。Ⅱ群B-5類土器の可能性はある。201は3本の縄線が文様帯に施されたもので、体部には結束羽状縄文が加えられている。210は文様帯に6本の縄線が施されている。体部には単軸絡条体の回転文を施した後、貝殻条痕が加えられている。

3d 文様帯に単軸絡条体の回転文が施されたもの(93・94)

93・94は単軸絡条体の同一原体の方向を変えて施文したものである。93は無節の単軸絡条体の原体を、口頭部は横位に、体部は縦位に施文している。

4 口頭部文様帯をもたないもの(95～97・129～135・160)

4a 器面に単軸絡条体の回転文のみのもの(95～97)

95～97は文様帯をもたないもの。器面に単軸絡条体の回転文が施されたもので、95・96の口唇部にはナデ調整が加えられ無文帯が作出されている。96は単節と複節の原体が用いられている。97は燃糸文としたが自縄自巻の可能性はある。

4b 結束羽状縄文が多用されたもの(129～135・205・206)

132は口縁部のみに結束羽状縄文が施されたもの。緩やかな波状口縁である。129～131・133～135は体部下半まで結束羽状縄文が施されたものである。131の結束羽状縄文は無節である。134は台付浅鉢。135は浅鉢である。

205・206は口縁部破片。205は体部にも結束羽状縄文が多用されたもの。206は口縁部に結束羽状縄文が施されたもので、体部は単軸絡条体の回転文である。

4c 器面に単軸絡条体の回転文と結束第2種による羽状縄文が施されたもの(160)

160は波状口縁である。口唇部に縄の圧痕が加えられている。器面には縦位の単軸絡条体の回転文を施した後、結束第2種の回転文を加えている。

4d 文様帯に結束第2種の回転文のみが施されたもの

5 口頭部文様帯の文様構成が不明なもの(73・136・161・163)

73は波状口縁である。口頭部文様帯は著しく摩滅し、文様構成は不明である。胎土に多量の砂粒を含む。なお、体部の縄文には単軸絡条体の回転文と自縄自巻の回転文が施されている。136は磨滅が著しく口頭部の文様帯が不鮮明である。幅広い口頭部文様帯の上端には2本一組の縄線が2段認められる。下端は綾絡文状の文様構成が見られるが詳細は不明である。文様帯内は不明である。胎土の粒子が細かく、多量の高綿骨針を含む。Ⅱ群B-3類の可能性もある。161は結束第2種の羽状縄文が体部下半まで及んでいる。163は単軸絡条体第1A類の原体の回転文である。本来図V-78・79で扱うべき資料である。細い原体による単軸絡条体第1A類の原体の回転文施文後、結束第2種の斜行縄文が加えられている。

Ⅱ群B-5類土器 (図V-44～48・142・144・145・151・152・157・158・164～181、図V-52・53-213～230・232)

Ⅱ群B-5類土器は大きく、Ⅱ群B-4類土器の影響が認められる文様帯下端に肩状の形状をもつもの、文様帯下端に貼り付けが施されたものや口縁部が張り出し、肥厚し文様帯を作り出したものに分けられる。

1 文様帯下端が肩状の器形をもつもの (142・144・145・151・157・158・164～167・169・171・173～175・213～230・232)

a 口頭部文様帯下端が結束羽状縄文で区画されたもの (164・165・223)

164の口頭部はやや幅広である。無文地の文様帯には横環する縄線2本が加えられ、それぞれに方向の異なる斜位の短縄線が加えられ、矢羽状の文様構成を作出している。165は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。下端及び体部には結束羽状縄文で加えられている。口頭部文様帯はくびれをもつ。文様帯には縄線文で2本一組ないし4本一組の縄線で、モール状ないし波状の縄線文を文様帯の上下に施文し、菱目状ないし重層する三角状の文様構成を作り出している。体部の結束羽状縄文は体部上半まで加えられている。また部分的に貝殻条痕が認められる。なお、本類については、口頭部下端の肩状の形状から新しく位置付けられそうな多軸絡本体を地文とするグループの文様構成に類似する。223は破片資料。文様帯下端は結束羽状縄文で区画され、文様帯には3～4段の結束第2種による羽状縄文が施され、2本一組の縄線が交差して加えられている。

b 口頭部文様帯の下端が結束第2種による縄文で区画されたもの (142・144・145・151・157・158)

b1 口頭部文様帯の下端に結束第2種による縄文が施されたもの (142・144・145・151・158・216～222・232)

142は平縁である。口頭部文様帯はくびれ、下端は肩状である。文様帯内の上下端は2本一組の縄線と区画され、文様帯には、縄線で三角状・鋸歯状の文様構成を作出し、空隙に斜位の縄線を加えている。体部の結束第2種の羽状縄文は体部下半まで及んでいる。144は大型土器。平縁。口唇に縄の圧痕文が加えられている。口頭部文様帯の上端は1本の縄線、下端は3本一組の縄線と結束第2種の羽状縄文で区画されている。文様帯には4つの4本一組のモール状の縄線文が加えられ、モール状の縄線の接続部分に山形の文様構成を作出している。下位にも3本一組の縄線が加えられている。山形の頂部分の下位に「V」字状の縄線を加え小さな菱目をつくりだし、その左右の空隙には小波状の縄線を、上部の空隙には斜位の縄線を加えている。結束第2種の羽状縄文は体部下半まで及んでいる。145は波状口縁である。口唇に縄の圧痕文が加えられている。文様帯内の上端は1本、下端は2本一組の縄線と区画されている。波頂部に沿って2本一組のモール状の縄線文が加えられ、モール状の縄線の接続部分は山形を作出している。山形の頂部分の下位に「V」・「X」・「く」字状の縄線を加え小

さな菱目・三角状の文様構成を作出している。空隙には斜位の短縄線を加えている。結束第2種の羽状縄文は体部下半まで及んでいる。151は小型土器。口頸部文様帯の下端が肩状で、結束第2種による縄文と縄の圧痕文が加えられている。文様帯には、2本一組の縄線で、口縁の円周を二分する大きなモール状の縄線文が上部に施され、モール状の縄線の接続部分に山形の文様構成を作出し、横位の縄線文が4本加えられている。モール部分の上下には斜位の縄線文が加えられている。

158は平縁である。底部は台付である。口頸部文様帯はくびれ、下端は肩状である。文様帯の上下は1本の縄線で区画され、下端には結束第2種による斜行縄文が加えられている。文様帯には、縄線で菱目状・三角状の文様構成を作出し、縄線間に刺突列が加えられている。菱目部分の中央には横長の穿孔が加えられている。結束第2種の斜行縄文は体部下半まで及んでいる。

216～222は口縁部破片。220・221・222の口唇部には縄の圧痕が加えられている。216は無文地の文様帯に「く」字状ないし菱目状の縄線文が施され、刺突が2段加えられている。217の文様帯は上下2本の縄線で区画され、文様帯には2本一組の縄線で、山形ないし鋸歯状の縄線文が施されている。218は縄線で山形ないし鋸歯状の縄線文が施されたもの。219は、無文地の文様帯に5本の縄線が施され、下から2と3本目間に斜位の縄線が加えられている。体部は単軸絡条体の回転文のみである。220の無文地の文様帯は上下2本ずつの縄線で区画され、文様帯には3本一組の縄線で山形を作出し、空隙に波状の縄線や横位の縄線などが加えられている。体部には2本一組の単軸絡条体の回転文が施され、結束第2種による回転文が加えられている。232は同様の体部破片である。221・222の文様帯は菱目状の文様構成をもつものと思われる。体部には結束第2種による回転文が加えられている。

b2 口頸部文様帯の下端に刺突文と結束第2種による縄文が施されたもの(157・214・215)

157は平縁である。底部は台付である。口頸部文様帯はくびれ、下端は肩状である。文様帯の上端は刺突文、下端は刺突文と結束第2種による羽状縄文で区画されている。文様帯には、縄線で菱目状・三角状の文様構成を作出し、菱目状の頂部から垂下する2列の刺突列が加えられている。結束第2種の羽状縄文は体部下半まで及んでいる。

214・215は破片資料。214は平縁で、無文地の文様帯には2本一組の鋸歯状(山形)に「く」字状や「ノ」が加えられ菱目状ないし山形の文様構成が作出されている。体部には結束第2種の回転文が加えられている。215の口唇には縄の圧痕が加えられている。文様帯の文様は、214と同様の文様構成をもつものと考えられる。

c 口頸部文様帯の下端が綾絡文で区画されたもの(152)

152は平縁である。口唇に縄の圧痕が加えられている。文様帯上端は2本一組の縄線、下端は肩状の段をもち、2本一組の縄線と綾絡文で区画されている。文様帯内を2本一組の縄線で上下に二分し、上下に同一方向の斜位の短い縄線を加え、連続した平行四辺形を作り出している。体部には単軸絡条体の回転文を施した後、綾絡文が底部付近まで加えられている。

d 口頸部文様帯の下端に縄線が施されたもの(167・169)

167・169の口頸部文様帯の下端は肩状を呈する。167は体部下半を欠失する。波状口縁で、波頂部に圧痕が加えられ、2個一組の突起を作出している。文様帯下端の肩部分には縄線が加えられている。169は緩やかな波状口縁になるものと考えられる。

e 口頸部文様帯の下端に刺突文が加えられたもの(171・174・213)

171は波状口縁で、口唇・肩部分に縄の圧痕が加えられている。下端の肩部分下位には横環する2列の刺突文が加えられている。174は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は肩状で、下端には刺突文が施されている。

213は破片資料。緩やかな波状口縁で・波頂部下位を頂点とした山形の文様構成を作出している。体部には結束第2種の回転文が加えられている。

f 口頸部文様帯の下端に縄の圧痕文が加えられているもの (224・227)

224・227は口縁部破片。224は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。文様帯の上下を2本一組の縄線で区画し、文様帯には3本一組の縄線で鋸歯状の文様を描き、部分的に斜行の縄線を加えている。227は口縁部破片で、波状口縁である。文様帯下端には肩状の器形で、斜位の縄の圧痕が加えられている。文様帯には波頂部を頂点とする入れ子の菱目状の文様構成が作出されている。

2 口頸部文様帯の下端に貼り付けによって区画されているもの (166・168・170・172)

166・168・170・172は、文様帯下端が刺突・縄の圧痕が加えられた貼付帯で区画されているものである。166は体部下半を欠失する。平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。無文地の文様帯にはやや曲線的な縄線で菱目状ないし波状の文様構成が作出されている。168は波状口縁である。器形は頭部で大きくくびれ、体部は丸みをもつ。波頂部及び口唇に刻みが加えられている。口頸部文様帯の下端は刻みが加えられた貼付帯で区画され、波頂部から垂下する貼付帯も加えられている。区画帯の貼付帯下位には入れ子状の鋸歯状の沈線文が加えられている。文様帯には波頂部から垂下した貼付帯を挟み、波頂部を頂点とする菱目状の縄線文が施されている。大木系土器ないし北陸系土器群の様相が窺える。170は波状口縁である。波頂部に圧痕が加えられ2個一組の突起を作出している。文様帯下端の貼付帯には爪形文が加えられている。文様帯には3～4本の縄線で入れ子状の三角状の文様構成が作出されている。172は波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。波頂部は2個一組の突起からなる。文様帯下端は貼付帯で区画され、貼付帯には刺突文が施され、貼付帯下位には細い棒状の工具による刺突文列が加えられている。

3 口縁部に幅の狭い肥厚帯状の文様帯を作出したもの (176・177・226・228・229)

a 口縁部に幅の狭い肥厚帯状の文様帯を作出したもの (176・177・226・228・229)

176は波状口縁で、波頂部に圧痕が加えられて2個一組の突起を作出している。口唇部は半載竹管状工具内面の刺突文が加えられている。文様帯下端は強く押し付け段差を作出し、肥厚帯状の口頸部文様帯を作出している。文様帯には波状口縁に沿って縄線文が施され、山形の文様構成を作出している。177は波状口縁で、小さな波頂部に圧痕が加えられ2個一組の突起を作出している。口唇部は半載竹管状工具内面の刺突文が加えられている。文様帯下端は強く押し付け段差を作り出し、さらに下端に貼り付けによって明確な肥厚帯を作出している。肥厚帯下端には半載竹管状工具内面の刺突文列が加えられている。無文地の文様帯には波状口縁に沿って縄線文が施され、山形の文様構成を作出している。肥厚帯直下にも縄線が加えられている。

226・228・229は破片資料。226は波状口縁である。波頂部を欠失する。肥厚帯上下を縄線で区画し、波頂部を頂点とする山形(三角形)の文様構成を作り出している。体部には無節の単軸絡条体の回転文が施されている。228・229は「複合する文様帯」をもつもので、多軸絡条体(2b)にみられる「複合する文様帯」(図V-118-86・87など)に類似する。228は波状口縁で、口唇に単軸絡条体の圧痕が加えられている。口唇の断面形は切り出し状で、肥厚部に上位の文様帯を作出し、単軸絡条体の圧痕文が加えられている。下位の文様帯には単軸絡条体の圧痕文が加えられた4～3cmの楕円形の貼り付けが3か所に施され、単軸絡条体の圧痕文が加えられている。体部は無節の単軸絡条体の回転文である。229は2個一組の波頂部をもつ波状口縁で、口唇に単軸絡条体の圧痕文が加えられている。肥厚帯は明瞭ではないが、波頂部直下にはボタン状の貼り付け、肥厚帯には単軸絡条体の圧痕文と半載竹管状工具による刺突文が交互に施されている。肥厚帯下位には単軸絡条体の圧痕文が加えられてい

る。肥厚帯直下の内面は鈎状の張り出しが加えられている。

b 口縁部に文様帯を作成し、縦位の貼付帯が加えられているもの(178)

178は口縁部から垂下する短い貼付帯が施され、4か所の山形の小突起が作出され、口唇部には縄の圧痕が加えられている。貼付帯・口縁部には2本一組の縄線文が横位に2~3本加えられている。

c 口縁部の断面形が三角形のもの(179~181・225・230)

いずれれもやや大型である。平縁で、口唇には縄の圧痕文が施されている。肥厚帯の下端に、179は刺突文、180・181は縄の圧痕文が加えられている。肥厚帯上には複節の縄線文が加えられている。

225・230は破片資料。225の口縁部の断面形は切り出し状で、口唇・肥厚帯下端には縄の圧痕文が加えられている。肥厚帯上と肥厚帯直下には2本の縄線が加えられている。230は小型土器。口唇部には縄の圧痕文が加えられている。肥厚帯には2本の縄線が加えられている。

d 幅の狭い口頭部文様帯の下端が刺突文で区画されているもの(173・175)

173は波状口縁で、波頂部に圧痕が加えられ2個一組の突起を作出している。文様帯下端は刺突文で区画されている。体部上半には単軸絡条体の回転文が斜位に、下半には斜行縄文が施されている。なお、上半部については付加条の縄文の可能性もある。175は片流れの波頂部の波状口縁で、口唇に半截竹管状工具内面の刺突文が加えられている。文様帯下端は内面からの押圧によって肩部分を作り上げている。文様帯には2本の縄線と半截竹管状工具内面の刺突文が加えられている。

II群B類土器(2d)

体部に単軸絡条体第5類と単軸絡条体第6類の回転文(2d)が施されたもの(図V-54~58-1~29・図V-81-1・2・図V-82-11)

II群B-2類土器(図V-54・55-1~7)

1~7は口頭部文様帯が貼付帯で区画され、体部に単軸絡条体第5類の回転文が施されたものである。1~3・5・6は筒形、4・7はバケツ型である。1・2は口頭部文様帯に不整縄線文が施されているもの。1の口頭部文様帯は円形刺突文が加えられた貼付帯で区画され、貼付帯直下には横環する沈線文が加えられている。2の口頭部文様帯は縦位の縄の圧痕文が加えられた貼付帯で区画されている。体部には部分的に斜行縄文が、上げ底の底面に貝殻条痕が認められる。3は爪形文が加えられた貼付帯で口頭部文様帯が区画され、文様帯には斜行縄文が施されている。4は細い貼付帯で口頭部文様帯が区画されたもので、貼付帯の上下に横環する縄線文が加えられている。文様帯は直前段反摺りの縄文である。底面には複節の縄文が認められる。5の口頭部文様帯は半截竹管状工具内面による刺突文が加えられた貼付帯で区画され、文様帯には単軸絡条体第5類の回転文が方向を変えて横位に施されている。底面に縄文が認められる。6は縄線が加えられた細い貼付帯で口頭部文様帯が区画されたもので、貼付帯の上下に横環する爪形文が加えられている。文様帯・口唇には単軸絡条体第1類の回転文が施され、文様帯には2本の垂下する沈線文が加えられている。7は波状口縁。口頭部文様帯の下端を刻目文が加えられた貼付帯で、上端を縄線文で区画したものである。下端の貼付帯の上下に横環する縄線文が加えられている。体部は横施文の単軸絡条体第5類の回転文である。文様帯には無節の斜行縄文が、底面には縄文が施されている。

II群B-3類土器(図V-56~58-8~29・図V-81-1・2・図V-82-11)

口頭部文様区画帯をもたないもの(12~20・25・27)

12は筒形。緩やかな波状口縁である。無文地の文様帯には6本の複節の縄線文が施されている。体部上半に単軸絡条体第5類の回転文が、下半には斜行縄文が施されている。13~17はいずれもバケ

ツ型である。口頸部文様帯と体部に施文方向を変えて単軸絡条体第5類の回転文が施されたもので、文様帯は横位に、体部は縦位に施文されている。文様帯下端は単軸絡条体第5類の施文原体の端部によって区画的な効果を出している。底面には13・15が縄文、16は貝殻条痕文が認められる。

18・19は口頸部文様帯に縄文が施されているもの。18は無節の結束羽状縄文を組み合わせ菱目状の文様構成を出している。19の口頸部文様帯には斜行縄文が施され、体部には無節の単軸絡条体第5類の回転文と単節の斜行縄文が施されている。底面には縄文が認められる。20の体部は単軸絡条体第6類の回転文で、口頸部文様帯には貝殻条痕文が施されている。

25・27は破片資料。25の文様構成は13～17に類似する。27の文様帯には貝殻条痕文が、体部は単軸絡条体第5類の回転文である。

口頸部文様区画帯をもつもの（8～11・24・26）

8～11は口頸部文様帯の下端が縄線文・沈線文等で区画されているものである。8の口頸部文様帯は、円形刺突文が加えられた2本の単軸絡条体の圧痕文で区画され、文様帯には斜行する付加条の縄文が施され、部分的に貝殻条痕が残る。上げ底の底面には縄文が認められる。9の口頸部文様帯は、円形刺突文が加えられた2本の沈線で区画され、文様帯には斜行縄文が施されている。体部上部には単軸絡条体第5類の回転文が、下位には斜行縄文が施されている。底面には縄文が認められる。10の口頸部文様帯は縄線で区画され、文様帯には斜行縄文が施されている。11の口頸部文様帯は、3本の縄線文で区画され、文様帯には単軸絡条体第5類の回転文が横位に施されている。底面には縄文が認められる。

24・26は破片資料。24の口頸部文様帯の下端は縄線で区画され、文様帯には不整綾絡文が、体部は単軸絡条体第5類の回転文である。26の口頸部文様帯は上端2本、下端3本の縄線で区画され、波頂部から垂下する3本の縄線文が加えられている。口頸部文様帯には縄文が認められ、体部には単軸絡条体第5類の回転文が施されている。

底部破片（21～23・28・29）

21～23は体部下半から底部、28・29は底部破片。いずれも単軸絡条体第5類の回転文である。

単軸絡条体第5類の回転によって曲線的な網目状の點然文が施されたもの（図V-81-1・2・図V-82-11）

1はバケツ型の器形である。口縁部は緩やかな波状口縁である。底面に僅かに縄文が認められる。2は底部が欠失する。口縁部は緩やかな波状気味である。口頸部文様帯の上端は沈線、下端は2本の縄線で区画され、垂下する2本の沈線が加えられている。口頸部には付加縄文が施されている。体部の上部には単軸絡条体第5類の回転によって曲線的な網目状の縄文が、中位には付加縄文が、下半には複節の斜行縄文が施されている。

11は口縁部の破片資料。口縁部の断面形が切り出し状で、幅広の肥厚帯をもつ。器面には単軸絡条体第5類の回転によって曲線的な網目状の縄文が施されている。

Ⅱ群B類土器（1f）

体部に直前段反燃りの縄文（1f）が施されているもの（図V-59～77-1～157）

Ⅱ群B-1類土器（図V-59-1・図V-77-140）

1は平縁で、バケツ型のものである。底面は上げ底。口頸部には不整綾絡文が施されている。体部には直前段反燃りの縄文が密に施されている。140は破片資料で1に類似する。

Ⅱ群B-2類土器（図V-59-2～9・図V-64-45・図V-77-141）

口頸部文様帯下端が貼付帯で区画されているもの(2~9・45・141)

2は口縁部が開くバケツ型で、頸部下端に段をもつ。器面には直前段反摺りの斜行縄文が施されている。3・5の口頸部文様帯下端は半截竹管状工具内面による刺突文が加えられた貼付帯で区画されている。4は口頸部文様帯下端の貼付帯に縄の圧痕文が加えられたもの、6・8は口頸部文様区画帯下端の貼付帯を貼り付け後に、体部縄文が施文されている。8はさらに波頂部から垂下する3本の縄線文が加えられている。7は口頸部文様帯下端に刺突文が加えられた貼付帯で、上端は波頂部に沿って縄線文で区画されている。9は筒形である。口縁部は4か所の波頂部をもつ波状口縁。文様帯下端は上下に横環する縄線文が加えられている貼付帯で区画され、無文地の文様帯には横環する4本の複節の縄線が加えられている。体部は直前段反摺りによる縄文が、体部上半は縦位に、下半は斜位に施されている。45の口頸部文様帯下端は上下に絡条体圧痕文が加えられた低い貼付帯で区画されている。器形は筒形で、体部中央部に膨らみをもつものである。

141は破片資料。口頸部文様帯下端は縄線が加えられた貼付帯で区画され、波頂部から垂下する3本一組の縄線文が加えられている。縄線文・単軸絡条体圧痕文との違いが認められるものの51~60の文様構成が類似する。

なお、81・83~84、104等にも文様帯下端を区画する貼付帯が認められるが、これらの口頸部文様帯の文様構成が明確で、それぞれ帰属すべき文様構成が認められることから本類に含めなかった。

Ⅱ群B-3類土器(図V-60~75-10~134・図V-77-142~156)**1 口頸部文様帯を区画する区画帯をもたないもの(10~31・130・142・155)****1a 口頸部文様帯に縄文が施されているもの(10~19・155)**

10・11は口頸部に斜行縄文が、体部には直前段反摺りの縄文が施されたものである。12~18は口頸部、体部とも直前段反摺りの縄文が方向を変えて施文されているもの。16の体部上部は直前段反摺りによる縄文、下半は複節の斜行縄文である。なお、12・13については口頸部下端が張り出し、張り出し部分にはナデ調整が認められるが、意識的なものか、偶発的なものが不明なためここで扱った。19は口頸部に結束羽状縄文を施した後、体部に直前段反摺りの縄文が重ねて施文されている。器形はバケツ型である。130は小型土器。口縁部・底面に結束羽状縄文が施されている。

155は口縁部破片。口頸部、体部とも直前段反摺りの縄文が方向を変えて施文されている。

1b 口頸部文様帯に不整絞絡文が施されているもの(26)

26は底部が矩形の小型土器。上面幅は矩形気味の楕円形である。4か所の波頂部をもつ波状口縁である。体部には直前段反摺りの縄文が施され、一部、施文方向を変え菱目状の文様構成を作出している。無文地のくびれをもつ口頸部文様帯には無節の原体による不整絞絡文が施されている。

1c 口頸部文様帯に貝殻条痕文が施されたもの(21~25)

21・23・25は器形がバケツ型のもので、21は平縁、23・25は波状口縁で、21は4か所、25は3か所の波頂部をもつ。22・24は筒形のもの。いずれも口頸部文様帯は幅が狭く、大きく外反する。

1d 無文地の口頸部文様帯に縄線・単軸絡条体圧痕文等が施されているもの(27~31・142)

27はバケツ型で、体部上半は直前段反摺りの縄文が、下半には単軸絡条体第5類の回転文によって菱目状の文様構成が作出されている。28は筒形で、幅の狭い口頸部文様帯に3本の縄線文が施されている。口縁部は2~3か所の緩やかな波頂部をもつものである。29は4か所の波頂部をもつ波状口縁である。幅広の口頸部には6本の縄線が加えられている。30は体部下半を欠失する。無文地の口頸部文様帯には2本一組の縄線が4本加えられている。31は文様帯に3本の縄線が加えられたもの。

142は口縁部破片で、無文地の文様帯に4本の縄線文が施されている。

2 口頸部文様帯が区画文によって区画されているもの (20・32～127・143～152)

2a 口頸部文様帯の下端が区画文で区画されているもの (20・32～50・144)

a1 口頸部文様帯下端が1本ないし1列の単軸絡条体の圧痕文・縄線文・刺突文等で区画されたもの (20・32～35・144)

20は大型のバケツ型である。底部を欠失する。平縁で、口頸部文様帯は外反し、僅かにくびれる。口頸部文様帯下端は横位の円形刺突文で区画されている。体部は器面に直前段反燃りによる縄文を施した後、体部中位に複節の斜行縄文が重ねて施文されている。32は単軸絡条体の圧痕文で文様帯下端が区画されたもの、3か所の波頂部をもつ。33は縄線で区画されたもの。34は縄の圧痕文で、35は円形刺突文で区画されたものである。35の口頸部には部分的に貝殻条痕文が認められる。

144は破片資料。文様帯は太い縄線で区画され、口頸部には横走気味の直前段反燃りの縄文が施されている。

a2 口頸部文様帯下端が2本の単軸絡条体の圧痕文・縄線文で区画されたもの (36～44・46～50・143)

口縁部に不整絨絨文が施されたもの (36)

36は4か所の波頂部をもつ小型土器で、底面には貝殻条痕が認められる。

口頸部文様帯に直前段反燃りの縄文が施されたもの (37～44・46～50・143)

37～41・46～49は2本の縄線で口頸部文様帯下端が区画されているもの。37～41はバケツ型、46～49は筒形ないし体部中央部に膨らみをもつものである。42～44・50は2本の単軸絡条体圧痕文で口頸部文様帯下端が区画されているもの。42～44はバケツ型、50は筒形ないし体部中央部に膨らみをもつものである。

143は口縁部の破片資料。口頸部は横走気味、体部は縦走気味に施文されている。

a3 口頸部文様帯の下端が区画文で区画され、口縁部から垂下する縄線・単軸絡条体等が加えられているもの (51～62・145)

縄線文で口頸部下端が区画され、波頂部から垂下する2～3本の縄線文が施されているもの (51～54・57～62・145)

51～53は口頸部に直前段反燃りの縄文が施されたものである。51は垂下する2本の縄線に円形刺突文が加えられている。52は3本の垂下する縄線が加えられている。53は大型土器である。145は破片資料。3本の垂下する縄線が加えられている。54は口頸部文様帯に結束羽状縄文で菱目状の文様構成を作出しているものである。口頸部下端の区画文の縄線間や垂下する縄線間に円形刺突文が加えられている。58は垂下する縄線が4本、59は3本、60は3本加えられているものである。57は筒形である。無文地の口頸部文様帯には10本の縄線が施され、緩やかな波頂部から垂下する6本の縄線が加えられている。複節の斜行縄文が口頸部文様帯直下に部分的に認められる。61は筒形で、幅の狭い口頸部文様区画帯・縦位の区画帯は単軸絡条体の圧痕文で施されている。口頸部は外反し、文様帯には貝殻条痕と斜行縄文が加えられている。62は口縁部を欠失する。単軸絡条体の圧痕文の口頸部文様区画帯・縦位の区画帯が認められたことからここで扱った。

145は口縁部破片。文様帯下端は2本の縄線で区画され、口縁部から3本の縄線が垂下している。

沈線が口頸部下端の区画文や波頂部から垂下する区画文に用いられているもの (55・56)

55は口頸部・体部とも直前段反燃りによる縄文が方向を変えて施文されたもので、体部中央部に貝殻条痕文が認められる。56は口頸部下端が1本の縄線で区画され、4か所の波頂部から2本の垂下する沈線が加えられているもの。

a 4 口頸部文様帯の上端が区画文で区画されているもの (63)

63は小型土器である。4か所の波頂部をもつ波状口縁である。器面には直前段反燃りの縄文が施され、波頂部に沿って縄線文が加えられている。

a 5 口頸部文様帯の上下が縄線文や単軸絡条体の圧痕文等の区画文で区画されているもの (64～80・147・148)**口頸部文様帯に結束羽状縄文・結束斜行縄文が施されているもの (64～70)**

64・66・67・69は、口頸部文様帯に結束羽状縄文で菱目状の文様構成を作出しているものである。64は上下1本の縄線で区画されたもの。口頸部文様帯直下に複節の斜行縄文が、底部付近には付加条の縄文が施されている。66・67・69は上端1本、下端2本の縄線で区画されたものである。65・68・70は口頸部文様帯に結束羽状縄文が施され、口頸部文様帯中央部に横環する縄線文が加えられているものである。65・70は上端1本、下端2本の縄線で区画された文様帯に1本の縄線文が加えられている。68は上下1本の縄線で区画された文様帯に1本の縄線文が加えられている。

口頸部文様帯に直前段反燃りが施されているもの (71～80・147・148)

71～75・79・80は縄線文で区画されているものである。71・72は口頸部文様帯の上下を2本一組の縄線で、73は1本の縄線で、74・80は上端1本、下端2本の縄線で、75は上端2本、下端3本の縄線で区画している。79は文様帯の上端2本、下端1本の縄線で区画されている。

76・77は単軸絡条体の押圧によって区画されているものである。いずれも上端1本、下端2本の単軸絡条体の押圧で文様帯が区画されている。78は組紐状の縄線で区画されているものである。文様帯は上端1本、下端2本の組紐状の縄線で文様帯が区画されている。

147・148は口縁部破片。147は下端2本、上端1本の縄線で区画されている。148は文様帯上下とも1本の組紐状の縄線で区画されている。

a 6 口頸部文様帯の上下が区画文で区画され、口縁部から垂下する縄線・単軸絡条体等が加えられているもの (81～88・94～104・106～109・146・152)**文様帯下端部が貼り付けによって区画されているもの (81・83・84)**

81の口頸部文様帯下端は刺突文が加えられた貼付帯と上下に単軸絡条体の圧痕文が加えられた区画帯で区画されている。波状口縁に沿って1本の単軸絡条体圧痕文が施され、波頂部から垂下する3本の単軸絡条体圧痕文が加えられている。口頸部は横位に、体部には縦走気味の直前段反燃りの縄文が施されている。83の口頸部文様帯下端は貼付帯とその上下に縄線文が加えられた貼付帯で区画されている。波状口縁である。口縁部には方向の異なる直前段反燃りによる縄文が部分的に認められ、波頂部に沿って2本の縄線が施され、波頂部から垂下する3本の縄線文が加えられている。体部には僅かに貝殻条痕文が認められる。84は貼り付けによって口頸部文様帯下端に肩状の形状を作り出したものである。波状口縁で、波頂部に沿って1本の縄線文が加えられ、波頂部から垂下する2本の縄線が加えられている。

区画文として縄線と円形刺突文が用いられているもの (82)

82は文様帯下端部が縄線文・綾絡文・円形刺突文が組み合わされた幅広の区画帯で区画されているもの。平縁で、口縁部に沿って1本の縄線が加えられ、2本の垂下する縄線文が加えられている。

区画文として縄線文・単軸絡条体の圧痕文が用いられているもの (85～94・146・152)

85・86は上下の区画文・縦位の区画文はいずれも3本の縄線で施文されている。87は上下の区画文は2本の縄線、縦位の区画文は3本である。88の文様帯上端は2本、下端は3本の縄線で区画され、縦位の区画文は3本である。89の文様帯上端は1本、下端は2本の縄線で区画され、波頂部から垂下

する5本の縄線が加えられている。

146・152は破片資料。146は口縁部破片。文様帯は単軸絡条体の圧痕文で区画され、下端は2本、上端は1本である。波頂部から2本の単軸絡条体の圧痕文が垂下している。152は頸部破片、口縁部を欠失しているがここで扱った。2本の縄線による区画文が認められる。90～92は上下2本の縄線で文様帯を区画し、波頂部から垂下する2本の縄線との交点に円形刺突文が加えられたもの。94の口頭部文様帯の上端は2本の縄線で区画され、下端は2本の縄線、結束羽状縄文・綾絡文で区画され、波頂部から垂下する3本の縄線が加えられている。93は区画文として単軸絡条体の圧痕文が用いられているものである。文様帯上端は1本、下端は2本の圧痕文で区画され、波頂部から垂下する3本の単軸絡条体の圧痕文が加えられている。

区画文として縄線文が用いられ、口頭部文様帯に1～3本一組の鋸歯状ないし山形の縄線文が加えられているもの（95～99）

95は無文地の口頭部文様帯に横環する縄線文を加えた後、3本の鋸歯状の縄線文が加えられている。96は口頭部文様帯の上端は1本の縄線、下端は3本の縄線文で区画され、波頂部から垂下する2本の縄線が加えられている。口頭部の文様構成が不明瞭だが、鋸歯状ないし菱目状に縄線文が加えられている。97は波状口縁である。無文地の口頭部文様帯には波頂部から垂下する縄線が加えられ、波頂部を頂点とする入れ子の鋸歯状（山形）の縄線文が施され、横環する縄線文が加えられている。98は無文地の文様帯に横環する5～6本の縄線が施され、波頂部から垂下する1本の縄線とこれを頂点とする3本一組の鋸歯状の縄線文が施されている。99の口頭部文様帯下端は2列の横環する円形刺突文で区画されている。文様構成が不明瞭で、無文地の文様帯には縄線で、山形ないし曲線的な波形が描かれている。1dに含まれる可能性がある。

a7 口頭部文様帯の上下が区画文で区画され、文様帯に縄線・単軸絡条体の圧痕文・粗紐状の縄線文などで菱目状・重層する三角形などの文様構成が作出されているもの。（100～109・149）

縄線文で文様が描かれているもの（100～102）

100は口頭部文様帯の上下を2本一組の縄線で区画し、口縁から垂下する3本の縄線と口頭部を中央部に横環する1本の縄線と垂下する区画帯間に2本一組の縄線で「X」字状の縄線を加え菱目状ないし三角形の文様構成を作出している。101は口縁部を欠失する。口頭部文様帯下端の3本の縄線、2本の垂下する縄線、口頭部中央部を横環する縄線が認められる。102は100に類似するが「X」字状の縄線に代わり波頂部間に入れ子の弧線を上下に加え、波頂部下位に菱目状の文様構成を作出している。

単軸絡条体の圧痕文で描かれているもの（103～106）

103は単軸絡条体の圧痕文と半截竹管状工具内面の沈線を組み合わせて文様構成を作り出しているものである。垂下する2本の沈線は半截竹管状工具内面によるもので、下端の区画帯の交点に円形刺突文が加えられている。104の口頭部文様帯下端は刺突文が加えられた貼付帯と単軸絡条体の圧痕文で区画されている。文様構成からⅡ群B-3類土器とした。105は波頂部から垂下する区画文をもたないものである。波頂部を頂点とする菱目状の文様構成を作出後、口頭部文様帯中央部の横環する単軸絡条体の圧痕文を加え、菱目・重層する三角形の文様構成を作出している。106は文様帯に重層する菱目状の文様構成を作出し、交点には2個一組の円形刺突文が加えられている。

粗紐状の縄線文で描かれているもの（107～109・149）

107は波頂部下位に菱目状の文様構成を作出している。108は口頭部文様帯の下端を横位の刺突列で区画し、口頭部文様帯内の菱目状の文様の交点には円形刺突文が加えられている。109は口頭部下端

を2本の組紐状の縄線文、上端を1本の組紐状の縄線文で区画し、波頂部から垂下する1本の組紐状の縄線が施され、波頂間に2段の「X」字状の組紐状の縄線文が加えられ、菱目状・直層の三角形形状の文様構成を作出している。体部上半には結束羽状縄文が加えられている。

149は破片資料。文様帯に「X」字状のような文様構成が作出されている。

a 8 直前段反撚りによる縄文を地文とし、口頭部文様帯に1～3本の縄線文・組紐状の縄線の側面圧痕文・貝殻条痕文等で口頭部に幅広の文様帯が作出されているもの(110～127・130・150・151)

前述の100～109の幅広の口頭部文様帯を上下に分割する縄線文・単軸絡条体の圧痕文が多用されるが、組紐のような2本一組の縄線・組紐状の縄線が出現・多用される傾向が認められる。本類にはさらに多用され、結束羽状縄文との組合せも多く認められるようになり、後続するⅡ群B-4類土器の古段階と考えられる単軸絡条体の回転文(2a)や自縄自巻の縄文(1e)の土器群との関連が想定される。

1～3本の組紐状の縄線文や2本一組の縄線文が用いられ幅広の口頭部文様帯を作出しているもの(110～112・115・116)

110～112は、1～3本の組紐状の縄線文が用いられたもの。110は筒形で、体部上半がくびれ、幅広の口頭部文様帯が作出されている。文様帯には2本の組紐状の縄線文が3段加えられている。111は底部を欠失する。口頭部文様帯下端は3本の組紐状の縄線文で区画され、文様帯には2本の組紐状の縄線文が2段加えられている。112はやや開き気味の筒形である。口頭部文様帯下端は2本の組紐状の縄線文で区画され、文様帯には1本の組紐状の縄線文が2段加えられている。

115・116は2本一組の縄線文が用いられ幅広の口頭部文様帯を作出しているもの。115は筒形である。口頭部文様帯は2本一組の縄線文が5段加えられている。116は小形土器で体部上半大きくくびれ、幅広の口頭部文様帯をもつ。文様帯下端は貼り付けによって肩状の形状が作り出されている。文様帯には2本一組の縄線文が、2本ずつ2段、2本一組の縄線文が1本加えられている。

条の間隔がある2本一組の縄線を用い幅広の口頭部文様帯を作出しているもの(113・114・117)

1本の縄線や単軸絡条体圧痕文が組紐条の縄線や2本一組の縄線に移行する直前形態ないし、省略形と考えここで扱った。

113は口頭部文様帯の上下を条の間隔のある2本一組の縄線文で区画し、文様帯中央に横環する1本の縄線を加えている。文様構成は65・70に類似するが、文様帯の地文が直前段反撚りによる縄文であることからここで扱った。114は3か所の波頂部をもつ波状口縁で、バケツ型である。口頭部文様帯下端は条の間隔のある2本一組の縄線文で区画され、文様帯中央にも同様な縄線文が加えられている。117は大きく開く器形で、4か所の大きな波頂部をもつ。口頭部文様帯には不規則な縄文が施されている。文様帯下端は3本の縄線文で、上端には波頂部に沿って条間隔のある2本の縄線が加えられている。文様帯内には条間隔のある2本一組の縄線文が2列と1本の縄線が加えられている。

条痕文で幅広の口頭部文様帯を区画しているもの(118)

118は小型土器。緩やかな波状口縁。体部中央と波状口縁に沿って貝殻条痕文で口頭部文様帯を区画している。区画文が貝殻条痕と本類と異なるが文様構成が類似することからここで扱った。

口縁部に結束羽状縄文を施した後、2本一組の組紐状の縄線文で口頭部文様帯の上下を区画し、幅の狭い口頭部文様帯を作出しているもの(119～121・150・151)。

119は平縁である。文様帯の結束羽状縄文は菱目状を構成している。120は、口縁部に結束羽状縄文を施した後、口頭部文様帯下端を3本の組紐状の縄線文で、上端を2本で区画している。121は横位の直前段反撚りによる縄文を地文とする文様帯に、結束羽状縄文をやや間隔をあげ3段施した後、文様帯

の上下を組紐状の縄線文で区画している。

150・151は破片資料。151は口縁部に結束羽状縄文を施した後、文様帯の上下端を2本一組の縄線文で区画し、文様帯内にも同様の施文具で縄線を加えている。150は文様帯の上下端を組紐状の縄線文と結束羽状縄文で区画し、幅の狭い文様帯には組紐状の縄線文が加えられている。Ⅱ群B-3類土器の新しい段階のものと考えられる。

2本一組の縄線文で口頭部文様帯が区画されているもの (125・127)

125は体部下半を欠失する。口頭部は幅広く緩やかにくびれる。口頭部文様帯には2本一組の縄線文と結束羽状縄文と2本一組の縄線文が交互に施文されている。127は緩やかな波状口縁である。口頭部文様帯下端は肩状の器形で、口頭部はくびれ、外反する。肩部分・文様帯上端には2本の縄線文が加えられている。文様帯には貝殻条痕文が施されている。

結束羽状縄文で口頭部文様帯が区画されているもの (126)

126は波状口縁である。体部上半はくびれる。幅の狭い口頭部文様帯の上下は結束羽状縄文で区画されている。文様帯には貝殻条痕を施した後、2本の縄線文が加えられている。

組紐状の縄線文と刺突文で区画されているもの (124)

124の口頭部文様帯下端は半截竹管状工具外面の刺突文と組紐状の縄線文で、上端は組紐状の縄線文で区画されている。文様帯内には2本一組の縄線文と組紐状の縄線文が加えられている。

3 文様帯区画文をたず口縁部に結束羽状縄文が施されたもの (122・123)

122は121の文様構成に類似し、口頭部文様帯の区画文の有無の違いである。123は筒形で、口頭部に細かな結束羽状縄文が施文方向を変えて3段施文されている。

4 口頭部文様帯をもたないもの (128・129・153・154・156)

128は浅鉢形土器である。上面観はやや楕円形で、長軸方向に2か所の穿孔が認められる。129は台付である。底部は強くくびれ、底部部分から大きく開きながら立ち上がる。

153・154・156は口縁部破片。153・154は斜位、156は縦走する直前段反振りの縄文が施されたもの。

体部・底部破片 (131～134)

いずれも直前段反振りが施されたもので、131・132は細い筒形、133はやや太めの筒形である。134は底部破片、底部から開き気味に立ち上がる器形で、底面は縄文が加えられ、強い上げ底である。

Ⅱ群B-4類土器 (図V-76-135～139)

135～139は口頭部文様帯の幅が狭いものである。135～137は平縁ないし緩やかな波状口縁で、口頭部文様帯には、135・136は組紐状の縄線が、137には2本一組の縄線文が2本加えられている。138は平縁である。幅の狭い口頭部文様帯には、組紐状の縄線が2本施されている。体部上半には密に、下半には間隔をもって結束羽状縄文が加えられている。139は緩やかな波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯には3本の縄線文が施され、体部には2本一組の縄線文が3段加えられている。

Ⅱ群B-5類土器 (図V-77-157)

口縁部に肥厚帯をもち、脂厚帯の下端に半截竹管状工具内面の刺突文が加えられたもの (157)

157は口縁部破片。波状口縁で口唇に縄の圧痕が加えられている。文様帯には波状口縁に沿って縄線が施され、下端は横環する縄線で区画され、波頂部を頂点とする山形の文様構成を作出している。

Ⅱ群B類土器 (2a 1A)

体部に単輪結条体第1A類の回転文が施されたもの (図V-78～80-1～18)

Ⅱ群B-2類土器 (図V-78-1)

1は口頸部文様帯下端に縄線が加えられた低い貼付帯によって区画されているものである。貼付帯の上下に縄線が加えられている。器形は底部と口縁部の径の差が小さく、寸胴で、やや太めの筒形である。口縁部には片流れの大きな波頂部をもつ突起が4か所作出されている。無文地の文様帯には、波頂部に沿って縄線文が加えられている。体部が2 a 1 Aであること、方流れの波頂部をもつことから本来Ⅱ群B-5類に含まれるものと考えられる。

Ⅱ群B-3類土器 (図V-78-2~7)

2は大きく外反する4か所の緩やかな波頂部をもつものである。波頂部には押圧が加えられている。口頸部文様帯はやや肥厚する。文様帯区画帯はない。文様帯は幅広である。波頂部下位には波頂部を頂点とする三角形ないし鋸歯状の文様構成を縄線文で作出し、波頂部間には横位の縄線文が加えられている。なお、波頂部に圧痕が加えられていること、口唇に縄の圧痕が加えられていることなどから、Ⅱ群B-5類に帰属すべきものと考えている。3は体部上半がくびれ、幅広の文様帯をもつ器形である。口縁は、4か所の波頂部をもつ。幅広の口頸部文様帯の下端は押し文で区画され、文様帯には結束羽状縄文と組紐状の縄線文が交互に3段施文されている。類似は1 fの100~121に認められる。4は平縁で、幅の広い口頸部文様帯には横位の3本一組の縄線や縦位の2~3本一組の縄線が施されている。5・7は口縁部に結束羽状縄文が施されたものである。5の口頸部文様帯下端には2段の綾絡文が加えられ、波頂部下位の体部には縦位の結束羽状縄文が加えられている。7は横位の結束羽状縄文が3段ほど加えられている。6の口頸部には直前段反燃りの縄文が加えられている。なお、3~7はⅡ群B-3類土器の新しい段階で、7はⅡ群B-4類土器の可能性があり、2はⅡ群B-5類土器の新しい段階のものである。

Ⅱ群B-5類土器 (図V-79・80-8~18)

8~11は体部に綾形状の燃糸文が施されたものである。8~10・15~18は口頸部文様帯下端が肩状の形状をもつもので、肩部分には8・9は縄の圧痕、10・16は半載竹管状工具外面ないし棒状工具による刺突文が加えられている。8の口頸部文様帯は2本一組の縄線に上下2段に区画され、それぞれに山形を施文し、菱目状の文様構成を作出している。9の文様帯には2本一組の縄線が5本、下位には波状の縄線文が加えられている。10の文様帯は幅が狭く、横環する5本の縄線と縦位の縄線が加えられている。11は区画帯をもたないもの。平縁で、口唇には縄の圧痕文が加えられている。口唇直下には複節の縄線が2本加えられている。12は体部上半に膨らみをもつ器形である。平縁である。口唇には縄の圧痕文が、口唇外面には2個一組の粘土の貼瘤が加えられている。体部上半は上部のくびれ部と張り出し部に分けられる。くびれ部の下端は円形刺突文で区画され、無文地の文様帯には組紐状の縄線と菱目状の文様構成を作出し、刺突列が加えられている。下位の張り出し部は横環する1本の縄線に上下2段に区画され、傾きの異なる斜位の圧痕文を加えて羽状の文様構成を作出している。張り出し部直下にはナゲ調整が加えられている。13は口縁部に肥厚帯をもつもの。4か所の緩やかな波頂部をもつ。肥厚帯の上下端は縄の圧痕文で区画され、無文地に2本一組の縄線文が3列加えられている。体部上半は単軸絡条体第1 A類の回転文、下半は多軸絡条体の回転文が施されている。14は体部である。

15~18は破片資料。15の文様帯には、縄の「折り曲げ」の横「U」字状部分を組み合わせて、波頂部下位を頂点とする菱目状の文様構成を作り出している。菱目状の中央には穿孔が施され、縄線間には菱目状に沿って刺突文が加えられている。16は口頸部破片で、肩部分には刺突文が加えられたものである。波状口縁で、口唇には縄の圧痕が加えられている。文様帯には、縄線で三角状・山形の文

様構成を作出し、空隙に斜位の縄線を加えている。17は口頸部破片で、口頸部には貝殻条痕文が施されている。18は頸部の破片資料。口頸部文様帯下端が肩状部分に結束の結束第2種の回転文が加えられている。頸部には縄線文が山形に施文されている。

Ⅱ群B類土器 (2a(4))

体部に単軸絡条体第4類の回転文 (2a(4)) が施されたもの (図V-81・82-3~10・12・13)

Ⅱ群B-5類土器 (3~9・10・12・13)

3はⅡ群B-5類土器の古段階、4~9・10・12・13はⅡ群B-5類土器の新段階。

3は口頸部文様帯下端が肩状の形状をもつもの。口唇には縄の圧痕、肩部分には半截竹管状工具内面の刺突文が加えられている。無文地の口頸部には2本一組の縄線文が6段施され、筥状工具の先端による横長の楕円形の刺突文が縦位に5段加えられている。このような刺突文は体部に多軸絡条体の回転文が施されたもの (2b:図V-106-30・34・35・38や体部単軸絡条体第1A類の回転文のもの (2a1A:15)) にも認められている。

4・5はやや開き気味の器形で、4の文様区画帯は上端が縄の圧痕文、下端がへら状工具の押し文によって区画されている。文様帯には2本一組の縄線文が3段ほど施されている。5は体部下半を欠失する。口縁部は開くバケツ状の器形である。口縁部は緩やかな波状である。口唇には縄の圧痕文、文様帯下端には縄の圧痕が加えられた貼付帯が施されている。無文地の口縁部には山形ないし菱目状に縄線文が加えられている。体部上半は単軸絡条体第4類の回転文による縄文、下半は多軸絡条体の回転文である。6・7は口縁部に刺突文は加えられた貼付帯を施し、肥厚帯を作出したものである。6は下膨れの袋状の器形で、口唇部に圧痕が加えられた波状口縁である。口唇・肥厚帯上の文様帯・貼付帯直下に単軸絡条体の圧痕文が加えられている。7は平縁。口唇に縄の圧痕文、肥厚帯上には縄線文が加えられている。肥厚帯直下にはナデ調整が加えられ、無文帯を作出している。6・7は肥厚帯直下の単軸絡条体の圧痕文・無文帯と文様要素の違いが認められるもののいずれも口頸部に「複合的な文様帯をもつもの」である。

8は口頸部文様帯が多段 (複合的) のもので「複合的な文様帯をもつもの」である。平縁に粘土紐が加えられた小突起をもつ口縁である。口頸部文様帯・文様帯下端は半截竹管状工具内面の刺突文で区画されている。無文地の2段の文様帯には2本一組の縄線文が加えられ、口縁部の小突起直下には縄線・刺突文が加えられたボタン状の貼り付けが加えられている。体部は5と同様に体部上半は単軸絡条体第4類の回転文による縄文、下半は多軸絡条体の回転文である。

9・10は、器面に単軸絡条体第4類の回転文が縦位に施されたもの。9は平縁。口縁部の断面形は三角形で、やや肥厚気味である。口縁部には外側からの強いナデ調整を加え回帯を作り出し、口縁部を肥厚帯状に作り上げている。10は折り返さないし貼り付けによって肥厚帯を作出したもので、肥厚帯上は横位に、体部は縦位に単軸絡条体第4類の回転文を施文している。

12・13は破片資料。12・13は口縁部内面から外側に押し出し、肥厚帯の様な張り出し作出した口縁部破片。類例は図V-17・18-107~111 (1a) や図V-123・124-108・111 (2b) などに見られる成形方法である。いずれも波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。12は波頂部から垂下する貼り付けが施されている。肥厚帯の下端には単軸絡条体の圧痕が加えられ、無文地の肥厚帯上には5本の単軸絡条体の圧痕文が施されている。13は2本一組の縄線が肥厚帯上に3本、肥厚帯直下に1本加えられている。

II群B類土器(1e)

体部に自縄自巻による縄文(1e)が施されたもの(図V-83~101-1~126)

体部に自縄自巻による縄文が施されたもの(1e)について、2a(体部に単軸絡条体の回転文が施されたもの)で先述したように、同様の器形・文様構成をもつことからほぼ同じ細分を用いて実施した。

II群B-3類土器(図V-83~88-1~29・32・図V-101-105~108)**1 口頸部文様帯の区画文として貼付帯が施されているもの(14・108)**

14は上面観が楕円形である。口頸部文様帯は上端を組紐状、下端は円形刺突文や横方向からの刺突文が加えられた貼付帯で区画され、貼付帯の上下に2本一組の縄線が加えられている。文様帯には、体部と同様の自縄自巻による縄文が施され、文様帯には垂下する2本の2本一組の縄線と円形刺突文が加えられている。

108は破片資料。文様帯下端は太い刺突文が加えられた貼付帯と結束羽状縄文で区画されている。文様帯には組紐状の縄線と菱目状の文様構成を作出している。II群B-4類土器の可能性がある。

2 口頸部文様帯を区画する区画帯をもたないもの(1・2・5・10・26~29)**2a 無文地の口頸部に縄線・組紐状の縄線が施されているもの(26~29)**

いずれも体部上半が開くバケツ型の器形である。口縁は平縁である。無文地の文様帯に、26は5本、27は4本の組紐状の縄線が施されている。28・29はやや細長い器形である。口縁部は緩やかな波状である。文様帯には28は4本、29は3本の組紐状の縄線が施されている。

2b 口頸部に縄文や単軸絡条体回転文などが施され、口頸部文様帯が作出されているもの(2・10)

2は単軸絡条体第6A類の回転文が口頸部文様帯に施されている。体部下半が下膨れの器形である。今回、調査では単軸絡み状体第6A類が施された資料が極めて少ない。10は小型土器である。緩やかな波状口縁で、口頸部には斜位に、体部は縦位に自縄自巻の縄文が施されている。

2c 口頸部文様帯に自縄自巻の原体による縄文が施されたもの**2d 口頸部に貝殻条痕文が施された口頸部文様帯が作出されたもの(1)**

1は筒形の器形で、口縁は平縁である。体部下半にも貝殻条痕文が認められる。

2e 文様帯の地文上に縄線・組紐状の縄線・単軸絡条体の圧痕文が加えられたもの(5)

5の体部上半には自縄自巻の縄文、下半には直前段反燃りの縄文が施されている。文様帯には組紐状の縄線が3本加えられている。

3 口頸部文様帯を区画する区画帯をもつもの(3・4・7~9・11・12・15~23・32・105~107)**3a 口頸部文様帯下端が1~2本一組の縄線・単軸絡条体の圧痕文等で区画されたもの**

3b 幅広い口頸部文様帯の上下端が1~2本一組の縄線・単軸絡条体の圧痕文等で区画され、文様帯には口縁部から斜位や垂下する縄線・単軸絡条体などの圧痕文・刺突文が加えられたもの(4)

4は、口頸部文様帯は組紐状の縄線で区画され、上端は1本、下端は2本の縄線と結束羽状縄文・2段の綾絡文と組み合わせられている。文様帯は直前段反燃りの縄文を地文とし、縦位の2本一組の組紐状の縄線が加えられている。体部・底面には複節の自縄自巻の縄文が施されている。

3c 口頸部文様帯の上下端が1~2本一組の縄線・単軸絡条体の圧痕文・組紐状の縄線文等で区画されたもの(3)

3は底部を欠失する。口頭部文様帯は2条の縄線で区画され、文様帯内は自縄自巻の縄文が施されている。体部上部は自縄自巻の縄文、下位は直前段反摺りの縄文が施されている。

3d やや幅の狭い口頭部文様帯の上下端が1～2本一組の縄線文や組紐状の縄線文等で区画されたもの（7～9・11・12・15～23・32・105～107）

口頭部文様帯の区画文は、7～9・11・12・15～23が2本一組の縄線文や組紐状の縄線文、35は1本の縄線文である。

口頭部文様帯の地文が自縄自巻の縄文のもの（7～9・11・12）、地文が結束羽状縄文のもの（15～20・22・23）、結束羽状縄文と綾格文が施されたもの（21）がある。

7～9・11・12は地文が自縄自巻の縄文のものである。7・8は2本一組の縄線で区画されたものである。口頭部文様帯には自縄自巻の縄文が施されている。9は組紐状の縄線によって区画されたものである。波頂部下位の文様帯には組紐状の縄線で波頂部を頂点とする三角状の文様構成が作出され、更に波頂部から垂下する2本の組紐状の縄線文が加えられている。11は筒形で、5か所の緩やかな波頂部をもつ波状口縁である。文様帯には自縄自巻の縄文が施され、文様帯は上端1本、下端3本の組紐状の縄線で区画され、下端の組紐状の縄線内には半截竹管状工具内面の刺突文と直下に2条の綾格文が加えられている。12の口頭部文様帯は2本一組の組紐状の縄線で区画され、波頂部下位の縄線上と波頂部間の文様帯内に円形刺突文が加えられている。体部には自縄自巻の縄文が縦位に施され、体部の中央部～底部に3段の結束羽状縄文が加えられている。

15・16・18～20・22・23は文様帯の地文が結束羽状縄文のもの。15・16は口頭部文様帯の上下が2本の組紐状の縄線で区画されている。17は結束羽状縄文で区画された狭い文様帯に2本の組紐状の縄線が加えられている。18～23は口頭部文様帯が2～3本の組紐状の縄線で区画され、体部には自縄自巻の縄文を施した後、3～5本の結束羽状縄文が加えられているものである。18の文様帯は上端3本、下端5本の組紐状の縄線で区画され、波頂部から垂下する3本の組紐状の縄線と円形刺突文が加えられている。また、波頂部下位の体部には垂下する結束羽状縄文が加えられている。22の文様帯の上端は粗い2本の組紐状の縄線、下端は1本の縄線で区画され、体部には部分的に結束羽状縄文が加えられている。23の文様帯は上端1本、下端2本の組紐状の縄線で区画されている。

21は文様帯に結束羽状縄文と綾格文が施されたものである。口頭部文様帯の上端は2本の組紐状の縄線、下端は上下を組紐状の縄線で区画された綾格文が施され、その下位に刺突文が加えられている。文様帯上部には結束羽状縄文が施されている。体部は結束羽状縄文である。

32は平縁。文様帯の上端は2本、下端を1本の縄線で区画し、無文地の文様帯には曲線・鋸歯状の縄線で菱目状の文様構成を作出し、菱目の頂部から垂下する2本の縄線が加えられている。32の類似は少ないが青森県山崎遺跡・東通村石持遺跡などでまとまって出土している。

105は波状口縁で、文様帯の上下は縄線文で区画され、下端には斜行縄文（結束羽状縄文？）が加えられている。文様帯は波頂部を頂点に菱目状の文様構成が作出され、波頂部及び波頂部間に垂下する2本の縄線が加えられている。106・107は同一個体である。波状口縁である。文様帯下端はやや長めの横からの刺突文（短沈線）で区画されている。文様帯には波頂部に沿って組紐状の縄線文が加えられ、波頂部下位は三角形ないし山形の文様構成が作出されている。107の波頂部から垂下する2本の組紐状の縄線が加えられている。

これらは、I f 81・82の新しい段階のものと考えられる。そして、新たに結束羽状縄文が加わり、後続するII群B-4類への移行期の様相がうかがえる資料である。

3e 幅の狭い口頭部文様帯の上下端が1～2本の縄線文や組紐状の縄線文・綾格文等で区画された

もの (24・25)

いずれも組紐状の縄線文で区画されたものである。先述の3dに比べ文様帯幅がやや狭いものである。いずれも綾絡文が用いられている。24の口頭部文様帯の上下端は1本の組紐状の縄線で区画され、文様帯内には結束羽状縄文、綾絡文が組み合わされて施文されている。体部上半に2本一組の綾絡文が2列加えられている。25は文様帯に綾絡文が施されたもの。底部を欠失する。緩やかな波状口縁で、口頭部文様帯は上下2本の組紐状の縄線で区画され、文様帯には2列の綾絡文が加えられている。

4 口頭部文様帯をもたないもの

5 体部破片 (6)

6は体部下半の資料。器面には自縄自巻の縄文が施されている。

II群B-4類土器 (図V-87~100・30・31・33~103・図V-101-109~126)

1 結束羽状縄文・結束第2種・綾絡文による口頭部文様区画帯をもつもの (43~63・65~85・98~100・101・112~126)

口頭部文様下端の区画帯として結束羽状縄文・結束第2種・綾絡文が認められる。区画文の違いが器形・口頭部文様構成の違いを示す傾向が窺えた。このことから文様帯内の文様要素・体部の文様要素を明確にするために、a:結束羽状縄文、b:結束第2種、c:綾絡文に細分して記述する。

1a 口頭部文様帯下端が結束羽状縄文(a)で区画されているもの (13・43~63・97・113・114・118~121)

a1 体部が自縄自巻の縄文のみのもの (43~63・113・114・119~121)

① 口頭部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの (43~45・119~121)

43・44は緩やかな波状口縁で、無文地の文様帯に2本の組紐状の縄線が加えられている。45は平縁で、無文地の文様帯に1本の組紐状の縄線が加えられている。

119~121は破片資料。119・120の文様帯には2本の縄線、121は3~4本の縄線が施されている。

② 口頭部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの

③ 口頭部文様帯に縄線文が施されているもの (46~63・97・113・114・118)

46は緩やかな波状口縁である。文様帯には波頂部を頂点とする山形ないし鋸歯状に縄線文が施され、山形の中に弧状の縄線文が加えられ入れ子状の文様構成を作出している。47は緩やかな波状口縁で、波頂部に沿って縄線が加えられ、波頂部下位に山形の文様構成を作出している。48は文様帯に、折り曲げた縄の「U」字状の「折り曲げ部分」を連続的に押捺している。49・50は4本、51~55は3本、56~63は2本の縄線が文様帯に施されたものである。56は3か所の緩やかな波頂部をもつ波状口縁である。57の口唇には縄の圧痕が加えられている。97は台付である。台付部分を欠失する。器面に自縄自巻の縄文を施した後、体部中位に結束羽状縄文で文様帯を区画、文様帯には3~4本の縄線文が加えられている。

113・114・118は口縁部の破片。113・118は3本、114は4本の縄線が加えられている。

④ 口頭部文様帯に自縄自巻の縄文が施されているもの (13)

13は4か所の緩やかな波頂部をもつ波状口縁である。結束羽状縄文で区画された文様帯には横走する自縄自巻による縄文が施されている。

a2 体部中程まで結束羽状縄文が加えられているもの (65・66・71・72・80)

① 口頭部文様帯に組紐状の縄線が施されているもの (65・71・72)

65は体部下半を欠失する。口縁部の組紐状の縄線が口頭部下端の結束羽状縄文との間隔が認められ、やや異なる印象が認められる。71・72は、文様帯に3本の組紐状の縄線が施されているものである。

② 口頭部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの (66・80)

66は緩やかな波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。80は3本の縄線文が施されたものである。緩やかな波状口縁である。結束羽状縄文上に3本の縄線文が加えられている。結束羽状縄文は体部下半まで加えられている。

③ 口頭部文様帯に縄線文が施されているもの

a 3 体部下半まで結束羽状縄文が施されているもの (67～70・73～79・81～85・112・115～117・122)

① 口頭部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの (67～70・73～75・122)

67・68は緩やかな波状口縁である。68の底面には自縄自巻の縄文が加えられている。69は平縁で、口唇部に縄の圧痕が加えられている。73は体部下半を欠失する。体部下半まで結束羽状縄文が加えられている。74は文様帯に4本の組紐状の縄線が施されているものである。体部下半まで結束羽状縄文が加えられている。75は文様帯に1本の組紐状の縄線と1本の縄線が組み合わせられ施文されているものである。緩やかな波状口縁である。結束羽状縄文が体部下半まで加えられている。70は文様帯に3本の組紐状の縄線が施されたもの。

122は口縁部破片。文様帯に3～4本の組紐状の縄線文が施されている。

② 口頭部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの (76～79)

76は緩やかな波状口縁で、底面・底部付近に斜行縄文が施されている。77・78は緩やかな波状口縁である。77の体部には2段の結束羽状縄文が加えられている。79は平縁である。文様帯には2本一組の縄線と1本の縄線が組み合わせられ施文されているものである。縄線は、同一の撚り方向である。

③ 口頭部文様帯に縄線文が施されているもの (81～85・112・115～117)

81は口縁部の組紐状の縄線と口頭部下端の結束羽状縄文との間隔が広く、やや異なった印象が認められる。口頭部文様帯はわずかに幅広で、縄線で文様帯には山形ないし歯歯状の文様構成が作出されている。体部下半まで結束羽状縄文が加えられている。82～85は2本の縄線文が施されたものである。82・83は平縁、84・85は緩やかな波状口縁である。82～84は体部下半まで、85は体部中位まで結束羽状縄文が加えられている。

115・116・117は口縁部破片。無文地の文様帯に2本の縄線が加えられている。115・116の下端は結束羽状縄文で区画され、文様帯には2本の縄線が加えられている。体部下半部まで結束羽状縄文が重ねて施文されている。117の文様帯は無文地でやや間隔が広い。文様帯には縄線が2本加えられている。112はやや幅広の文様帯をもつものである。文様帯は結束羽状縄文と横からの刺突で区画され、文様帯には縄線で多段の「く」字状の文様構成が作出されている。体部は結束羽状縄文である。

b 1 口頭部文様帯の下端が結束第2種 (b) で区画されているもの (98・99・123・124)

b 1 体部が単輪絡本体の回転文のみのもの

① 口頭部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの

② 口頭部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの

③ 口頭部文様帯に縄線文が施されているもの

b 2 体部中程まで結束第2種が加えられているもの

① 口頭部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの

② 口頭部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの

③ 口頭部文様帯に縄線文が施されているもの (99)

99は平縁である。文様帯には3本の縄線が加えられている。

b3 体部下半まで結束第2種が施されているものである

- ① 口頸部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの
- ② 口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの
- ③ 口頸部文様帯に縄線文が施されているもの (98・123・124)

98は平縁である。文様帯には縄線文が4本加えられている。

123・124は破片資料である。123は文様帯に縄線文3本加えられている。体部にも結束第2種による縄線文が認められる。124は文様帯に2本一組の縄線文が2本施されている。体部にも結束第2種による縄線文が認められる。

体部1eのII群B-4類において、結束第2種が用いられている資料は極めて少量である。

1c 口頸部文様帯の下端が綾絡文で区画されているもの (100・101・126)**c1 体部が単輪絡本体の回転文のみのもの**

- ① 口頸部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの
- ② 口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの
- ③ 口頸部文様帯に縄線文が施されているもの (126)

126は口縁部破片。文様帯下端は綾絡文で区画され、文様帯には3本の縄線文が加えられている。

c2 体部中程まで綾絡文が加えられているもの

- ① 口頸部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの
- ② 口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの
- ③ 口頸部文様帯に縄線文が施されているもの

c3 体部下半まで綾絡文が施されているものである

- ① 口頸部文様帯に組紐状の縄線文が施されているもの
- ② 口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されているもの
- ③ 口頸部文様帯に縄線文が施されているもの (100・101・125)

100は文様帯下端を無節の綾絡文で区画されたものである。文様帯には縄線文が加えられている。体部～底部にも同様の綾絡文が加えられている。101の文様帯下端は2本一組の綾絡文と結束羽状縄文で区画され、文様帯には2本の組紐状の縄線文が加えられている。体部にも2本一組の綾絡文が加えられている。

125は口縁部破片。波状口縁である。文様帯下端は結束羽状縄文と2列の綾絡文(?)で区画されている。体部には結束羽状縄文が加えられている。

2 貼付帯による口頸部文様区画帯をもつもの (64・102・109～111)

a:貼付帯のみのもの、b:結束羽状縄文、c:結束第2種、d:綾絡文と組み合わせられているもの。

2a 貼付帯のみのもの (110)

110は口縁部破片。文様帯は円形刺突文が加えられた貼付帯で区画され、文様帯には組紐状の縄線文が加えられている。

2b 貼付帯と結束羽状縄文が組み合わせられているもの (64・109・111)

64は緩やかな波状口縁。口頸部下端には結束羽状縄文を施した後、刺突が加えられた貼付帯を施している。無文地の文様帯には4本の縄線文が加えられ、波頂部から垂下する刺突列と縄線文が加えられている。体部・底面は自縄自巻の縄文である。

109・111は破片資料。109の文様帯は上端を縄線文、下端は円形刺突文が加えられた貼付帯で区画されている。文様帯及び貼付帯直下に結束羽状縄文が加えられている。胎土はきめが細かい。111は

円形刺突文が加えられた貼付帯で区画され、文様帯には縄線(?)が施され、下端には結束羽状縄文が加えられている。

2 c 貼付帯と結束第2種が組み合わされているもの

2 d 貼付帯と綾絡文組み合わされているもの

2 e 貼付帯と原体不明の縄線と組み合わされているもの (102)

102は緩やかな波状口縁である。無文地で幅の狭い文様帯下端は刺突が加えられた貼付帯と異条縄文ないし付加条の原体(?)の圧痕文と直前段反摺りの圧痕文で区画され、文様帯には3本の縄線文が施されている。体部から底部にも同様の圧痕文が加えられている。

3 口頸部文様区画帯をもたないもの (30・31・33～42・134)

3 a 文様帯に組紐状の縄線が加えられているもの (30・31)

30は緩やかな波状口縁である。口縁部に無文帯を作り出し、上端は波状口縁に沿って組紐状の縄線を施し、下端にも組紐状の縄線を加え、波頂部下位に菱目状の文様構成を作り出し、さらに波頂部から垂下する組紐状の縄線を加えている。31は口縁部に、組紐状の縄線が3本施されたものである。体部は自縄自巻による縄文である。

3 b 文様帯に2本一組の縄線が加えられているもの

3 c 文様帯に縄線が加えられているもの (33～42)

33～41は体部が自縄自巻の縄文のみのものである。33～35・37は縄線が4本のもので、36は複節の縄線が3～5本のもので、38・39は3本のもので、40は2本のものである。38・40の口唇には縄文が加えられている。41は波状口縁で、文様帯上部には波頂部に沿って3～4本が施され、下位には横環する3～4本の縄線が加えられ、波頂部直下に山形の文様構成を作り出している。42は波頂部下位に山形の文様構成を作り出している。体部には結束羽状縄文が加えられている。

3 d 文様帯に単軸絡条体の回転文が施されたもの

3 e 文様帯に結束第2種の回転文のみが施されたもの (103)

103は平縁で、器形はバケツ型である。口縁部に3段の結束第2種の羽状縄文が施されている。

4 口頸部文様帯をもたないもの (86～96)

4 a 器面が単軸絡本体の回転文のみのももの

4 b 結束羽状縄文が多用されたもの (86～96)

86～89・92～96は口縁部に2段の結束羽状縄文が施されたものである。86～89は体部が自縄自巻の縄文のみのものである。体部には、92・93は文様帯下位に1本、94～96は体部～底部付近まで3～4本の結束羽状縄文が加えられている。なお、96の文様帯には横位からの刺突列が加えられている。90・91は口縁部に1段の結束羽状縄文が施されたものである。いずれも、体部は自縄自巻の縄文のみのものである。

同様の文様構成は単軸絡条体の回転文(2a)を体部縄文とするものにも認められる(図V-42-129～135)。口縁部の結束羽状縄文は、体部2aでは単帯で、体部1eでは複帯(2段)のものが多く、違いが認められた。

同様の文様構成は単軸絡条体の回転文(2a)を体部縄文とするものにも認められる。

4 c 器面に単軸絡本体の回転文と結束第2種による羽状縄文が施されたもの

4 d 文様帯に結束第2種の回転文のみが施されたもの

5 口頸部文様帯の文様構成が不明なもの

Ⅱ群B-5類土器 (図V-100-104)

- 1 口頸部文様帯の下端に貼り付けによって区画されているもの
- 2 口頸部文様帯の下端が肩状のもの(104)
- 2a 無文地の幅広の口頸部文様帯に縄線文で菱目状の文様構成が作出されているもの
- 2b 文様帯に2本一組の縄線で山形(三角形)の文様構成を作出されているもの(104)

104は平縁である。口頸部文様帯の下端は貼り付けによって肩状に成形され、刺突文と結束第2種の羽状縄文によって、上端は2本の縄線で区画されている。文様帯には山形ないし鋸歯状に縄線文が施され、円形刺突文と垂下する縄線文が加えられている。結束羽状縄文が体部下半まで加えられている。

- 2c 無文地の文様帯に2本一組の縄線文が横環して施されたもの
- 2d 口縁部に幅の狭い肥厚帯状の文様帯が作出したもの
- 2e 口縁部に文様帯を作出し、縦位の貼付帯が加えられているもの
- 2f 口縁部に断面三角形の口縁部がめぐる断面形をもつもの

Ⅱ群B類土器(2b)

体部に多軸絡条体の回転文(2b)が施されたもの(図V-102~132-1~183)

Ⅱ群B-2類土器(図V-102-1・2)

口頸部文様帯下端が貼付帯で区画されているもの(1・2)

1は笊状工具による刺突が加えられた貼付帯で口頸部文様帯下端が区画され、無文地の文様帯には不連続縄文ないし網目状の単軸絡条体の回転文が施されている。2は緩やかな波状口縁である。口頸部文様帯の下端は貼付帯によって区画され、無文地の文様帯には、波頂部に沿って7本の縄線文が加えられている。

Ⅱ群B-3類土器(図V-102・103-3~11・図V-129-139~141)

口頸部文様帯の下端が区画されているもの(4・5・139~141)

4は体部下半を欠失する。口頸部文様帯下端は2本の沈線と沈線間に円形刺突文が加えられた区画帯で区画されている。文様帯には単軸絡条体第5類の回転文で菱目状の文様が施されている。5は筒形の器形である。口頸部下端は肩状の器形で、意識的に「肩」を作出したものか、口頸部文様を施した原原体の端あたり、偶然に作り出されたものか不明である。下端には単軸絡条体第5類の原体の端部の回転文ないし縄線文が認められる。体部には部分的に貝殻条痕文が認められる。139の文様帯には単軸絡条体の回転文が縦位に施文されている。140の口頸部下端は2本の縄線で区画され、文様帯は斜行縄文である。

141は胴部破片。文様帯は菱目状の縄文と思われる。

口頸部文様帯の下端が区画され、口縁部から垂下する区画文が加えられているもの(3)

3は筒形で、平縁である。口頸部文様帯の下端は2本の縄線文で区画され、口頸部文様帯に単軸絡条体の回転文が施され、垂下する2本の縄線文が加えられている。

口頸部文様帯の上下が縄線文で区画されているもの(6~9)

6は大型の筒形土器である。口頸部文様帯は、上端1本、下端2本の縄線文で区画されている。文様帯内には結束羽状縄文で菱目状の文様構成が作出されている。7の口頸部文様帯は、上下1本ずつの縄線文で区画されている。文様帯内に単軸絡条体の回転文が施され、文様帯中央部に横環する縄線文が施され、鋸歯状の縄線文が加えられている。8は波状口縁で口頸部文様帯は上下1本の縄線で区画され、文様帯には単軸絡条体の回転文が施されている。波頂部下位には単軸絡条体の圧痕文が認め

られるが、意識的なものかどうか不明なためここで扱った。9の文様帯は、下端を2本の単軸絡条体の圧痕文で、上端を2列の綾絡文で区画され、文様帯には単軸絡条体第2類の回転文と思われる捺糸文が施されている。

口頭部文様帯の上下が縄線文で区画され、口縁部から垂下する区画文が加えられているもの (10)

10の口頭部文様帯は、上端1本、下端2本の縄線文で区画されている。無文地の文様帯内には2本の綾絡文を施した後、垂下する3~4本の縄線文が加えられている。

口頭部区画帯をもたないもの (11)

11は、口頭部文様帯に斜行縄文が施されたものである。

Ⅱ群B-4類土器 (図V-103・104・111-12・16・49、図V-129-142・143)

Ⅱ群B-4類土器は大きく、口頭部文様帯が狭いもの(12)、口頭部文様帯が比較的幅広のもの(16・19)の2つに分けられる。

a 口頭部文様区画帯をもたないもの (12・142)

12は筒形で、体部上半がすぼまり、最大径は体部下半から中位にある。口頭部文様帯は幅が狭い。無文地に4本の縄線文が加えられている。

142は破片資料。口縁部に結束第2種が2段施されているものである。

b 口頭部文様帯下端が結束第2種による羽状縄文で区画されたもの (16)

b 1 口頭部文様帯に「く」字状・「Z」字状の縄線文が加えられているもの (16)

16は、平縁で、口頭部が開く器形である。無文地の口頭部文様帯の下端は結束第2種で区画され、文様帯の上下を縄線文で区画し、2段の「く」字状の縄線文が加えられている。

c 口頭部文様帯下端に刺突が加えられた貼付帯と結束第2種による羽状縄文で区画されたもの (49)

49は比較的幅の狭い口頭部文様帯もつもの。口頭部下端は刺突が加えられた貼付帯で区画され、文様帯内の上下は縄線文で区画され、上位には4本の縄線、下位には小波状の縄線文が施されている。

d 口頭部文様帯下端に刺突が加えられた貼付帯と結束羽状縄文で区画されたもの (143)

143は破片資料。文様帯には4本の縄線文が加えられている。

Ⅱ群B-5類土器 (図V-104~132-13~15・17~48・50~138・144~183)

1 文様帯下端が肩状の器形をもち、口頭部の外反が弱いもの (13~15・17~36・43・44・47・50~55・57~61・66~75・96・115~119・121~124・144~152・154~157・159・161・169・175)

1 a 口頭部文様帯下端に結束羽状縄文で区画されたもの (13~15・150・151)

いずれも口頭部文様帯下端に貼付帯が施され、肩状の形態を作り出している。口頭部はくびれる。

1 a 1 口頭部文様帯に「く」字状、ないし「Z」字状・鋸歯状の縄線文が加えられているもの。(13)

13の無文地のやや幅広の文様帯は縄線文で区画され、斜位・「く」字状の縄線文が加えられている。口頭部はくびれが弱い。体部には結束羽状縄文が加えられている。

1 a 2 口頭部文様帯に山形の縄線文が施されたもの (14・150)

14は口頭部文様帯が大きくくびれ、文様帯には3本一組の曲線的な縄線文で大きな山形の文様構成が作出され、斜位・「く」字状の縄線文が加えられている。口唇には縄の圧痕文が認められる。体部は多軸絡条体の回転文のみである。

150は口縁破片。体部は不明である。無文地の文様帯には曲線的な縄線文が施されている。

1 a 3 口頭部文様帯に波状の縄線文が施されたもの (15)

15は幅の広い口頭部文様帯をもつものである。口唇部には縄の圧痕文が加えられている。文様帯下端

は縄の圧痕が加えられた貼付帯と結束羽状縄文で区画されている。体部上半に結束羽状縄文が3本加えられている。くびれをもつ口頭部文様帯は2本一組の縄線文で3段に分けられ、縄線間には緩やかな波状の縄線と横走する縄線が加えられている。

1 a 4 口頭部文様帯に矢羽状の文様が施されたもの(151)

151は口縁部破片。口頭部文様帯は2本一組の縄線文で上下を区画し、中央に横環する縄線と向きの異なる斜位の縄線を加え、矢羽状の文様構成を作出している。

1 b 口頭部文様帯の下端に結束第2種による縄文が施されたもの(17～27・29～31・33～36・43・44・47・50～54・144～149・152・154・155)

1 b 1 口頭部文様帯に「く」字状、ないし「Z」字状・鋸歯状の縄線文が加えられているもの(17～21)

17は無文地の幅広の口頭部文様帯をもつもので、無文地の文様帯には2段の「く」字状の縄線文が加えられている。18・19は口頭部文様帯が横環する1～2本一組の縄線で区画され、文様帯には「く」字状の縄線文が加えられているものである。18は文様帯に横環する2本の縄線を加え3段に区画し、上段には斜位、中段・下段には「く」字状の縄線が加えられている。19の口頭部下端には結束第2種の縄文と共に結束羽状縄文が部分的に加えられている。20は口頭部文様帯の上下を2本一組の縄線で区画し、文様帯には「く」字状の縄線文が加えられているものである。21は2本一組の縄線で文様帯上下が区画され、文様帯を2段に分割する横位の2本一組の縄線が加えられ、2段の文様帯には鋸歯状の縄線文が加えられている。

1 b 2 口頭部文様帯に山形の縄線文が施されたもの(22～27・29・30・43・44・154)

① 口頭部文様帯に縄線で山形の縄線文が施されたもの(22～24・43・44・154)

22～24は口頭部文様帯に縄線で山形の縄線文が施されたもの。22は4か所の緩やかな波頂部をもつ波状口縁である。波頂部を頂点とし、縄線で山形文が作出されている。口頭部の肩部分には2段の結束第2種による羽状縄文が加えられている。23・24はいずれも平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頭部にやや太めの縄線で山形の文様構成を作出しているものである。23の口頭部はくびれが強い。24は口頭部に貼付帯が施されたもので、口頭部は幅が狭く、くびれが弱い。古い段階のものと考えられる。43は平縁で、口唇には縄の圧痕文が加えられている。口頭部文様帯下端は半截竹管状工具内面の刺突文が加えられた貼付帯で区画されている。貼付帯下端には2段の結束第2種の羽状縄文が施されている。口頭部文様帯には2本一組の縄線で波頂部下位を頂点とする山形状の構成を作出し、横位の縄線文、短縄線、斜位の縄線文が加えられている。44は平縁。口唇に縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯下端は刺突が加えられた貼付帯で区画されている。貼付帯直下に3本の縄線と結束第2種の羽状縄文が施されている。

154は口縁部の破片資料。平縁で口唇に縄の圧痕文が加えられている。文様帯下端は2本一組の縄線と結束第2種で区画されている。文様帯には2本一組の縄線で山形の文様構成を作出している。

② 口頭部文様帯に「く」字状や斜位の縄線と組み合わせられた山形の縄線文が施されたもの(25～27・29・30・47・146・147)

25～27・29・30は2～3本一組の縄線で山形の文様構成を作り出したもので、縄線間に「く」字状や斜位の縄線が加えられ、複雑な文様構成を作り出している。25・26の文様構成は18・19に類似し、これらの波頂部下位の文様構成を引き上げたような文様構成である。いずれも緩やかな波状口縁である。口頭部は2本一組の縄線文で区画され、中央部にも2本一組の縄線が加えられ文様帯が上下に分割されている。文様帯には「く」字状や斜位の縄線が加えられ、波頂部下位にはあらたに「X」字状

ない背中合わせの「く」字状の文様構成が出現している。25の体部上半に1段、27の体部上半に5段の結束第2種による羽状縄文が加えられている。27・29・30は波頂部下位の三角形の頂点をさらに引き上げたような文様構成に変化している。口頭部文様帯の「く」字状の縄線文が認められなくなり、文様帯下位の2本一組の縄線文は、区画帯から口頭部文様の一部に変化し、波頂部下位に斜線を組み合わせた「X」字状の文様構成を作り出している。27の口頭部下端には横位に刺突文が加えられている。29は平緑である。文様帯には2～3本一組の縄線文で山形文が作出されている。30は口頭部文様帯下端に刺突文が加えられた貼付帯と結束第2種の羽状縄文で区画したものである。さらに三角状の頂点から垂下する縦位の刺突文も加えられている。146は、刺突文が加えられた貼付帯で区画され、文様帯に縄線文が施され波頂部から垂下する刺突文が加えられている。47は大きな波頂部をもつ波状口縁で、波頂部は大きな2個一組の突起からなる。無文地の口頭部は内湾し、口頭部文様帯下端は結束第2種の羽状縄文で区画されている。147は口縁部の破片資料。体部の結束第2種の羽状縄文は上半のみに施されている。

③ 口頭部文様帯に菱目状の文様構成を作出しているもの (31・33～36・145・155)

31・33は波頂部下位ないし口頭部に粗い菱目状の文様構成を作り出しているものである。31の体部中央に1本の結束第2種の羽状縄文がめぐり、34・35は30に類似する文様構成をもつ。30に比べ波頂部下位の文様構成が三角形から菱形に近い構成をもつ。いずれも緩やかな波状口縁で、無文地の文様帯には縄線文で菱目状の文様構成が作出されている。波頂部下位の文様帯には縦位に穿孔が加えられている。34の体部上半に1本の結束第2種の羽状縄文が、35は2列一組の結束第2種の羽状縄文がめぐり、36は平緑で、口頭部文様帯はくびれる。無文地の文様帯には2～3本一組の弧線状の縄線文を組み合わせ菱目ないし楕円状の文様構成を作出しているものである。文様帯下端には貼り付けによって肩状の器形を作り出している。体部上半には結束第2種の羽状縄文が2段加えられている。145は口縁部破片。文様帯下端は刺突文・結束第2種によって区画されている。文様帯には菱目状の文様構成を作出し、菱目の頂点に縦位の縄線文と2か所の穿孔が加えられている。155は口縁部破片。155の文様帯下端は、撚り戻しが認められる綾絡文で区画されている。

1 b 3 口頭部文様帯に横環する縄線文が加えられているもの (50・51・53・54・144・148・149・152)

50は平緑ないし緩やかな波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯下端は肩状で、縄の圧痕が加えられている。51は平緑で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯下端は肩状である。53は平緑で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯下端は肩状で、縄の圧痕が加えられている。54はやや趣を異にするものである。平緑で、口唇に縄の圧痕が加えられている。幅広い口頭部文様帯下端は肩状で、口頭部文様帯には縄の圧痕が加えられている。文様帯には5段の結束第2種の斜行縄文が施されている。

144・148・149・152は口縁部破片。144の文様帯下端は刺突文・結束第2種によって区画されている。148・149・152の文様帯は結束第2種によって区画され、149の結束第2種は体部上半まで及んでいる。

1 c 口頭部文様帯下端に結節の回転文で区画されたもの (28・32・52・55・156・157)

1 c 1 口頭部文様帯に山形の文様構成を作出しているもの (28)

28は大型土器である。波状口縁で口唇に縄の圧痕が加えられている。波頂部下位に2本一組の縄線文で山形の文様構成を作出している。文様帯下端は2列の結節の回転文で区画している。

1 c 2 口頭部文様帯に菱目状の文様構成を作出しているもの (32・156)

32は口頭部文様帯に菱目状の文様構成を作出しているもので、貼り付けによって口頭部下端に肩状の形状を作り出し、肩部分には縄の圧痕文が、下位に結節の回転文が加えられている。体部は複節の多軸絡条体の回転文である。156は口縁部破片。肩部分には縄の圧痕と2列の結節の回転文が加えられている。

1c3 口頭部文様帯に横環する縄線文が加えられているもの(52・55・157)

52・55はいずれもバケツ型である。52は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯下端は、1本の結節の回転文で区画され、文様帯には縄線文が加えられている。55は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。幅の狭い口頭部文様帯下端は2本の結節の回転文で区画され、文様帯には3本の縄線が加えられている。55については、区画文として結節の回転文が用いられていることから本類で扱った。器壁が薄く、文様帯下端が肩状の器形をもたないこと、文様帯の縄線が細いことなどからⅡ群B-4類土器の可能性がある。157は破片資料。無文地に2本一組の縄線が施されている。

1d 口頭部文様帯下端の羽状縄文・結束第2種の羽状縄文・綾絡文がないもの(57~61)

1d1 口頭部下端に刺突文が加えられているもの(57)

57は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯下端は、刺突が加えられた貼付帯で区画され、文様帯は2本一組の単軸絡条体圧痕文で上下2段に区画され、各段には2~3本一組の単軸絡条体圧痕文で鋸歯状の文様構成を作出し、さらに横位の単軸絡条体圧痕文を加えている。

1d2 口頭部下端に縄線が加えられているもの(58~60・96・115・159)

① 口頭部文様帯に「く」字状の文様構成を作出しているもの(58・59)

58は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯の上下は1本の縄線と区画され、文様帯は2本一組の縄線と上下2段に区画され、各段には2本一組の縄線と山形ないし鋸歯状の文様構成を作出し、さらに2本一組の「V」・「逆V」字状の縄線が加えられている。59は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯の上下は縄線と区画され、無文地の文様帯には「く」字状ないし菱目状の縄線文が加えられている。

② 口頭部文様帯に2本一組の縄線と「C」字状の縄の圧痕文が加えられているもの(96)

96は平縁で、口唇に縄の圧痕文が加えられている。文様帯には2本一組の縄線と「C」字状の縄の圧痕文が加えられている。下端付近に爪の痕跡が認められるが施文時の偶発的なものと考えられる。

③ 口頭部文様帯に波状の縄の圧痕文が加えられているもの(159)

159は口縁部破片。平縁で、口唇に縄の圧痕文が加えられている。文様帯下端は肩状の器形と3本の縄線と区画されている。文様帯内の上下は縄線と区画され、中央に縄線が加えられ上下2段に分割され、波状の縄線の波長をずらし、2度重ねて施文されている。

④ 口頭部文様帯が不明のもの(60・115)

60は口頭部文様帯の文様構成が不明なものでわずかに残る縄線から菱目状になるものと考えられる。115の口頭部の摩滅が著しいもので、文様帯には縄線文の一部が認められる。

1d3 口頭部下端に縄線と縄の圧痕が加えられているもの(61・66)

① 口頭部文様帯に山形の文様構成を作出しているもの(61)

61は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯下端には縄の圧痕と縄線文が加えられている。文様帯は2~3本一組の縄線と入れ子の山形文が描かれ、さらに横位の縄線文を加え、空隙には斜位の短縄線が加えられている。

② 口頭部文様帯に波状の縄線文が施されたもの(66)

66は3か所の頂部をもつ波状口縁である。口唇に縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯下端は

繩の圧痕文が加えられた貼付帯で区画され、貼付帯の上下に繩線が加えられている。文様帯の文様構成はやや不明瞭である。文様帯中央部に4～5本一組の波状の繩線文が施され、その上下に逆の入れ子の弧線状の繩線を加えている。底部付近と上部の一部に単軸絡条体第4類の回転文が施されている。

1 d 4 口頸部下端に繩の圧痕が加えられているもの (67・68)

67は波頂部に刻み加えられた波頂部をもつ波状口縁である。口唇にも刻み加えられている。口頸部文様帯下端は繩の圧痕文が加えられた貼付帯で区画されている。文様帯には波頂部に沿って繩線文が施され、波頂部下位に「V」字状の繩線を加え、小さな菱目状の文様構成を作出している。68は平縁で、口唇に繩の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は肩状で、繩の圧痕文が加えられている。文様帯の上下は1本の繩線で区画され、文様帯を上下2段に分割する2本一組の繩線が加えられ、上下の文様帯には2本一組の繩線で鋸歯状の文様構成を作出している。

1 d 5 口頸部下端に単軸絡条体の圧痕が加えられているもの (69)

① 菱目状ないし山形の文様構成を作り出しているもの (69)

69は3か所の頂部をもつ波状口縁である。口唇に単軸絡条体の圧痕文が加えられている。口頸部文様帯下端は単軸絡条体の圧痕文が加えられた貼付帯で区画されている。文様帯には単軸絡条体圧痕文が施され、菱目状ないし山形の文様構成を作り出している。

1 d 6 口頸部下端に刺突文が加えられているもの (70・73・116・117・161～168)

① 両端が尖る楕円形の文様構成を作り出しているもの (70)

70平縁で、口唇に繩の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は肩状で、半截竹管状工具内面の刺突が加えられた貼付帯が施されている。文様帯は上下2本の繩線で区画され、文様帯を2本一組の繩線で大きなモール状の繩線が天地逆に重ねて加えられ、両端が尖る楕円形の文様構成を作り出し、楕円内にも繩線が加えられている。

② 菱目状ないし山形の文様構成を作り出しているもの (73・161～163・165・166・168)

73は平縁で、口唇に繩の圧痕が加えられている。口頸部文様帯の上下は2本一組の繩線で区画され、下端には刺突文が加えられている。文様帯には2～3本一組の繩線で菱目状ないし三角状の繩線が施文されている。

161～163は、口縁部破片。波状口縁で、口唇に繩の圧痕が加えられている。161の文様帯は2本一組の繩線で3段に分割され、斜位・「く」字状の繩線を組み合わせ菱目状の文様構成を作出している。162の口唇部は肥厚し、切り出し状で、肥厚帯には2本の繩線が加えられている。文様帯には繩線が加えられている。163の波頂部には押圧が加えられ2個一組の小突起からなる。165・166の文様帯には、繩線の「折り曲げ」部分の横「U」字状の繩線を組み合わせ山形の文様構成を作り出している。166の波頂部は2個一組の小突起からなる。168の口頸部下端は、爪形文が加えられた区画帯で区画されている。文様帯には2本一組の繩線文が施されている。

③ 横走る繩線が施されているもの (116・117・164・167)

116・117は、いずれも平縁で、口唇には繩の圧痕文が加えられている。文様帯下端は、116は半截竹管状工具内面の刺突、刺突文が施されている。117は完形である。文様帯の1か所に2本一組の縦位の繩線が加えられている。

164・167は破片資料。164は波状口縁に沿って2本一組の繩線が8本ほど施文されている。平縁で、口唇に単軸絡条体の圧痕が加えられている。無文地の文様帯には繩線と半截竹管状工具内面による刺突文が施文されている。

1 d 7 口頸部文様帯下端に繩の圧痕文が加えられているもの (74・75)

① 菱目状の文様構成を作り出しているもの(74)

74は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は貼付によって肩状の器形が作り出されている。貼り付けには縄の圧痕文が加えられている。文様帯の上下は組紐状の縄線で区画され、文様帯は組紐状の縄線が入れ子の菱目状に施文されている。

② 山形の文様構成を作り出しているもの(75)

75は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は肩状で、縄の圧痕文が加えられている。文様帯の上下は1本の縄線で区画され、文様帯は縄線が入れ子の山形に施文されている。

1 e 口頸部文様帯の区画文をもたないもの(71・72・118・119・122～124・169・175)

71は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は区画文をもたず、口頸部と体部の文様要素を変えることで文様帯を表現している。文様帯は2段からなり、入れ子の大きなモール状の縄線を施し、下位の三角状の部分には横位の縄線を加えている。72は波状口縁である。文様帯下端はわずかに隆起する肩状である。口縁に沿ってモール状の沈線が施され、波頂部下位に縄線で菱目状の文様構成を作り出している。118・119・175は、いずれも平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口縁部には、118は2本一組の縄線文、119は3本の縄線が地文に加えられている。175は口縁部破片。撚り方向が異なる縄線を交互に4本押し、2本の組紐状の様な文様効果を演出している。

122は波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口縁には波状口縁に沿って、縄線の「折り曲げ」部分の横「U」字状の縄端を組み合わせて山形の文様構成を作り出している。123は緩やかな波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口唇直下には2本の縄線が施されている。124は平縁で、多輪糸束体の回転文を、口縁部と体部に施文方向を変えて施文したものである。

169は口縁部破片。口頸部文様帯の下端はわずかに肩状である。文様帯には2本一組の縄線と半截竹管状工具内面の刺突列が交互に施されている。

2 文様帯下端が肩状の器形をもち、口頸部文様帯幅が広く、強く外反する器形のもの(62～65・105・182)

62～64は同様の文様構成をもつものである。

2 a 1 口頸部文様帯下端に刺突文が加えられた貼付帯で区画されているもの(62・105)

62は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は肩状の器形である。文様帯には2本一組の縄線が入れ子の山形文が描かれ、さらに横位の2本一組の縄線文が加えられている。

105は底部が欠失する。波状口縁で、波頂部には刻みが加えられ、波頂部は2個一組の小突起からなる。文様帯は幅が広く、大きく外反する。文様帯には2本一組の縄線文と半截竹管状工具内面の刺突文が交互にされている。

2 a 2 口頸部文様帯下端が縄の圧痕文が加えられた貼付帯で区画されているもの(63・64・65・182)

63・64は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は肩状の器形である。文様帯には2本一組の縄線が入れ子の山形文が描かれ、さらに横位の2本一組の縄線文が加えられている。

64の縄線文は縄の「折り曲げ」部分の横「U」字状の縄端を組み合わせて文様構成を作り出している。65は極めて緩やかな波状口縁である。口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は肩状で、縄の圧痕が加えられた貼付帯が施されている。文様帯の上下は2～3本一組の縄線で区画され、波頂部を結ぶ2～3本のモール状の縄線文で波頂部下位に菱目状の文様構成を作り出している。波頂部下位の菱目状部分の中央に原体の「折り曲げ」部分の横「U」字状の縄端をもつ縄線を加えている。さらに口頸部上部の空隙に斜位の短縄文を加えている。

182は頭部の破片資料。肩部分に縄線が、無文地の文様帯には縄線が加えられている。

3 文様帯下端が肩状の器形が弱く、口頸部文様帯幅が広く、強く外反する器形のもの (37～42・76・77)

① 口頸部文様帯の下端が縄の圧痕文が加えられた貼付帯と結束第2種で区画されているもの (37・39)

37は波状口縁で、波頂部には刻み加えられ、波頂部は2個一組の小突起からなる。口頸部文様帯下端には縄の圧痕が加えられ、上下に縄線が加えられた貼り付けによって区画されている。文様帯には波頂部下位を頂点とする菱目状の文様が縄の「折り曲げ」部分の横「U」字状の縄端を組み合わせ作り出している。39は波状口縁で、波頂部には刻み加えられ、波頂部は2個一組の小突起からなる。口頸部文様帯下端には縄の圧痕が加えられ、上下に縄線が加えられた貼り付けによって区画されている。文様帯には波頂部下位を頂点とする山形状の文様が縄の「折り曲げ」部分の横「U」字状の縄端を組み合わせ作り出し、横位の縄線文、斜位の縄線文が加えられている。

② 口頸部文様帯の下端が縄の圧痕文が加えられた貼付帯と綾絡文で区画されているもの (41)

41は片流れの波頂部をもつ波状口縁である。口唇部には縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯は幅広く、下端は縄の圧痕が加えられた貼付帯で区画されている。文様帯には、2本一組の縄線が2本ずつ3段施され、上下2段に分割している。上位の縄線は波状口縁に沿って山形に、下位と中位の縄線は横環状に施されている。上下の文様帯には小波状の縄線文や縄の「折り曲げ」部分の横「U」字状の縄端の圧痕文が加えられている。

③ 口頸部文様帯の下端が縄の刺突文が加えられた貼付帯と綾絡文で区画されているもの (38・40)

38は「複合的な文様帯をもつもの」である。やや片流れ気味の波頂部をもつ波状口縁である。口唇部には縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は刺突文が加えられた貼付帯で区画され、文様帯には、波頂部下位を頂点とする菱目状の文様構成が縄の「折り曲げ」部分の横「U」字状の縄端の圧痕文を組み合わせ作り出している。口唇部直下および文様帯中位にも横位の刺突列が施され、さらに波頂部から垂下する楕円形の刺突列が加えられている。40は片流れの波頂部をもつ波状口縁である。口唇部には縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は刺突文が加えられた貼付帯で区画され、文様帯には、やや平行状であるが波頂部下位を頂点とする山形の文様が、縄の「折り曲げ」部分の横「U」字状の縄端を組み合わせ作り出している。文様帯上部の縄線間には横位の刺突列が、中位には部分的に波状の縄線文が加えられている。

④ 口頸部文様帯の下端が貼付帯と綾絡文で区画されているもの (42)

42は平線ないし極めて緩やかな波状口縁である。口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は断面三角の貼付帯で区画されている。文様帯の上下は1・2本の縄線で区画され、3本一組の縄線で山形ないし鋸歯状の縄線文が施されている。肥厚帯直下には綾絡文が2列施され、体部にも同様の2本一組の綾絡文が認められる。

⑤ 口頸部文様帯の下端が縄の圧痕が加えられた貼付帯で区画されているもの (76・77)

76は片流れの波頂部をもつ波状口縁である。口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯の下端は縄の圧痕が加えられた貼付帯で区画されている。波頂部下位の文様帯には、縄の「折り曲げ」部分の横「U」字状の縄端の圧痕文を組み合わせ横位の文様構成を作り出している。77は大きな波頂部をもつ波状口縁である。口縁部は肥厚し、外反する。波頂部は大きな2個一組の突起からなる。口頸部文様帯下端は肩状で、縄の圧痕が加えられた貼付帯が施されている。波頂部下位の文様帯には、縄の「折り曲げ」部分の横「U」字状の縄端の圧痕文が波頂部に沿って山形に施され、三角状の文様構

成を作り出し、下位には横環する縄線が加えられている。

4 文様帯下端が肩状の器形をもちもたず、口頸部が強く外反する器形のもの (45・46・48・78・80・86～95・97～99・101～104・106～114・125・170～174・176・178・179)

4a 口頸部文様帯の下端が綾絡文で区画されているもの (45・46・48)

45・46・48はいずれも波状口縁で、文様帯には2本一組の縄線で山形に施文されている。45の波頂部には押圧が加えられ2個一組のやや片流れ気味の小突起が作出されている。口縁部は肥厚し、口唇には縄の圧痕が加えられている。肥厚帯直下には斜行縄文が加えられ、「複合的な文様帯をもつもの」との関連が認められる。体部にも3列の縦位の綾絡文が施されている。46・48は体部上半がくびれる器形である。口唇には、46は単軸絡条体の圧痕が、48は縄の圧痕が加えられている。48の波頂部は2個一組の小突起からなる。

4b 口頸部に「複合的な文様帯をもつもの」が認められるもの (78・80・86～90・94・99・102・111～113・171・177・178)

① **口頸部文様帯の下端に区画文をもたないもの** (78・80・178)

78は波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯の上部は波状口縁に沿って波状の縄線文が施され、口頸部下端は2本の縄線で区画され、波頂部下位の三角部分には横位の縄線が加えられている。80は波状口縁である。幅の狭い肥厚帯が波状口縁に沿ってめぐり、口唇には縄の圧痕、外面には3～4本の縄線文が施されている。肥厚帯下位にも文様帯をもち、上部は波状口縁に沿って3本の縄線が施され、下位の三角部分には横位の縄線で、三角状の文様構成を作り出している。

178は口縁部の破片資料。波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。波頂部下位に「J」字状の貼付帯が加えられている。文様帯の上下には横位の縄線が加えられている。

② **口頸部文様帯の下端が縄の圧痕文で区画されているもの** (86～88・177)

86は波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯の下端は、縄の圧痕文が加えられた肩状の器形で区画されている。文様帯は縄の圧痕文が加えられた貼り付けで上下2段に分割されている。上部は外反し、無文地に2本一組の縄線文が山形に施されている。下位は大きくくびれる器形で、無文地に2本一組の縄線文が2本施されている。87は体部下半を欠失する。波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯の下端は、縄の圧痕文が加えられた肩状の器形で区画されている。文様帯は縄の圧痕文が加えられた貼り付けで上下2段に分割されている。上部は幅が狭い、無文地に2本一組の縄線文が廻り、波頂部下位の三角部分にも短い縄線が加えられている。下位は大きくくびれる器形で、無文地に7本の縄線文が施されている。88は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯の下部は、やや張り出し段をもつ器形で吹浦式との関連が想定される。下端には「C」字状の縄の圧痕文が加えられている。文様帯上部は外反し、無文地の文様帯は2本一組の縄線であられ「C」字状の縄の圧痕文で上下2段に分割されている。上・下部には1～4本の2本一組の縄線が横環する。

177は口縁部の破片資料。口縁部が貼り付けによって肥厚し、断面形は切り出し状である。文様帯は2本一組の縄線と半截竹管状工具内面の刺突文が加えられ肥厚帯で上下2段に分割されている。

③ **口頸部文様帯の下端が刺突文で区画文されているもの** (79・89・94・99・100・102・153・158・160)

79は波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部下端は半截竹管状工具内面の刺突列で区画されている。波頂部下位の口頸部文様帯には組紐状の縄線で山形の文様構成を作り出している。89は波状口縁で、波頂部に腕状工具による押圧が、口唇には縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯

の下端は半載竹管状工具内面の刺突文で区画されている。口縁部は僅かに肥厚し、肥厚帯の下端には縄の圧痕文が加えられている。肥厚帯上には2本一組の縄線と半載竹管状工具内面の刺突文を施した後、刺突文・縄の圧痕文が加えられたボタン状の貼り付けが加えられている。肥厚帯の下位には2本一組の縄線が肥厚帯に沿って山形に加えられている。

94は波状口縁で、波頂部は2個一組と1個のものが交互に施されている。口唇には縄の圧痕文が加えられている。口頭部文様帯の下端は、やや張り出し、段をもつ器形で、下端には半載竹管状工具内面の刺突文が加えている。文様帯は外反しする。無文地の文様帯は2本一組の縄線と半載竹管状工具による刺突文が交互に施文されている。99は波状口縁で、波頂部は2個の突起からなる。口唇には半載竹管状工具内面の刺突文が加えられている。口頭部文様帯下端は半載竹管状工具内面の刺突文が加えられた貼付帯で区画されている。口頭部文様帯は肥厚し、外反する上部とくびれの強い下半からなる。上部には棒状の貼付帯を施した後、2本一組の縄線文が加えられている。100は、片流れの波頂部をもつ波状口縁である。口頭部文様帯は肥厚し、下端に段をもつ。口頭部文様帯には波頂部から文様帯下端まで垂下する貼付帯と文様帯を上下2分する横位の貼付帯が施されている。縦位の肥厚帯には縦位の縄線文が、横位の貼付帯には爪形文が加えられている。口頭部文様帯には2本一組の縄線が加えられている。肥厚帯下位にも2本一組の縄線文が加えられている。102は、2個一組の波頂部を4か所もつ波状口縁である。口唇にはミガキ調整が加えられ、断面形は角形である。幅広の口頭部の下端は円形の刺突列で区画されている。口頭部上部の波頂部下位には縄の圧痕文が加えられたドーナツ状の貼り付けが加えられ、文様帯には縄線文・縄の短い圧痕文が交互に施文され菱目状の文様構成を作出している。下位のくびれ部も同様に縄線文・縄の短い圧痕文が交互に施文されている。

153・158は口縁部の破片資料。153は波状口縁で、口唇には縄の圧痕文が加えられている。口頭部文様帯の上部は、半載竹管状工具内面の刺突で上下に区画され、「複合的な文様帯」を作出している。上位の文様帯には2本一組の縄線が区画されている。下位の文様帯には楕円形の押圧が3か所加えられ、2本一組の縄線と菱目状の文様構成を作出し、部分的に半載竹管状工具内面の刺突文が加えられている。158の文様帯下端は刺突文と綾絡文で区画されている。文様帯は下半で大きくくびれをもつ。上半には肥厚し、波頂部から刺突文が加えられた縦位の薄い貼付帯が施こされている。文様帯には組紐状の縄線と半載竹管状工具内面の刺突文が交互に施文されている。

160は口縁部破片。波状口縁で、口唇には縄の圧痕文が加えられている。波頂部から文様帯中位に垂下する縦位の貼り付けが施された後、無文地の文様帯に2本一組の縄線が加えられている。

5 口頭部文様帯が肥厚するもの (56・81～85・90～93・95・97・98・101・103・104・106～114・120・121・125・171～174・176・179)

① **肥厚帯直下に綾絡文が加えられているもの** (56)

56は平縁で、肥厚帯には単軸絡条体の回転文が施され、部分的に縦位の単軸絡条体の圧痕文が加えられている。肥厚帯の上下端に半載竹管状工具内面による刺突列が加えられている。

② **肥厚帯直下にも文様を加えられているもの** (90・111～113・121・170・171)

90は平縁である。口縁の断面形は切り出し状で、口唇に縄の圧痕文が加えられている。肥厚帯には2本一組の縄線が3本施されている。また、肥厚帯直下にも2本一組の縄線が加えられている。111は片流れの波頂部をもつ波状口縁である。口唇には縄の圧痕文が加えられている。肥厚帯下端は内面から押し出し段差を作出している。文様帯には片流れの波頂部に沿って2本一組の縄線が加えられている。肥厚帯直下にはループ文が加えられている。112は片流れ気味の波頂部をもつ波状口縁である。口唇には2本一組の縄の圧痕文が加えられている。肥厚帯下端は内面から押し出し段差を僅かに作出

している。文様帯には2本一組の縄線が3本横環する。肥厚帯直下には同様の施文具で3本の縄線文が加えられている。113は片流れの波頂部をもつ波状口縁である。口唇には縄の圧痕文が加えられている。肥厚帯下端は内面から押し出し段差を作出している。文様帯には片流れの波頂部に沿って2本一組の縄線が3本加えられている。肥厚帯直下には斜行縄文が施されている。121の口縁部と肥厚帯直下には単軸絡条体第5種の原体の押圧文が施されている。

170・171は口縁部破片。170は波状口縁で、頂部に圧痕が加えられ、小突起を作出している。肥厚帯には縄線と縄線の「折り曲げ」部分の横「U」字状の縄端を組み合わせて横位の文様構成を作出している。肥厚帯直下には、縄の圧痕が加えられている。171は、口唇に単軸絡条体の圧痕文が、肥厚帯上には横環する4本の単軸絡条体の圧痕文と2本の縦位の単軸絡条体の圧痕文が施され、肥厚帯直下にも1本の単軸絡条体の圧痕文が加えられている。

③ 肥厚する口頭部文様帯の下端に縄の圧痕が加えられたもの(82・95・97・101・114・174)

82は3か所の波頂部をもつものである。波頂部は大きな突起の2個一組からなる。口唇に縄の圧痕が加えられている。肥厚する口頭部文様帯の下端は縄の圧痕が加えられた貼付帯で作出されている。文様帯の上部は波状口縁に沿って2本一組の波状の縄線が施され、下位には横位の縄線が加えられている。95は片流れの波頂部をもつ波状口縁である。口唇に縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯の下端は縄の圧痕が加えられた貼付帯で区画されている。文様帯には2本一組の縄線と半載竹管状工具内面の刺突文が交互に施されている。直下には2本一組の縄線が加えられている。97は平縁である。口唇に縄の圧痕が加えられている。肥厚帯(口頭部文様帯)の下端には縄の圧痕文が加えられている。肥厚帯には竹管状工具の円形刺突文と2本一組の縄線が加えられている。101は小突起をもつ口縁で、小突起は肥厚帯を垂下する貼り付けによって作出されている。肥厚帯には組紐状の縄線がわずかに菱目状に施されている。肥厚帯直下にも組紐状の縄線が加えられている。114は平縁である。口唇に縄の圧痕が加えられている。肥厚帯(口頭部文様帯)の下端には縄の圧痕文が加えられている。肥厚帯には2本一組の縄線が3～4本施文され、3本の縦位の縄線が加えられている。体部は単節の多軸絡条体の回転文である。174は口縁部破片。口縁部内面から口縁部を押し出し段を作出しているものである。口唇には刺突文が加えられている。

④ 肥厚する口頭部文様帯の下端に刺突文が加えられたもの(83・85・91・92・103・104・106～110・125・173)

83は波状口縁である。口縁部には肥厚帯がめぐる。口唇には単軸絡条体の圧痕文が加えられている。肥厚帯下端には半載竹管状工具内面の押印文が加えられている。文様帯の上部は波状口縁に沿って2本一組の縄線が山形に施されている。85は波状口縁である。口唇には縄の圧痕文が加えられている。肥厚帯下端を区画する半載竹管状工具内面の押印文の直下にさらに2本一組の縄線文が加えられている。文様帯には波状口縁に沿って2本一組の縄線が山形に施されている。91は平縁である。口唇に縄の圧痕が加えられている。幅広い肥厚帯(口頭部文様帯)の下端と肥厚帯直下に半載竹管状工具内面の押印文が加えられている。無文地の文様帯には9本の縄線が加えられている。92は平縁の大型土器である。口縁部断面形は角形で、口唇には単軸絡条体の圧痕文が加えられている。肥厚帯下端には刻目が施されている。無文地の肥厚帯には2本一組の縄線文が2本加えられている。肥厚帯直下にナデ調整が加えられている。103・104・106はいずれも波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。文様帯に2本一組の縄線と半載竹管状工具内面の刺突文が交互に施文されたものである。103の縄線は波状口縁に沿って、104は口縁に横位に施文されている。107は波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。文様帯下端は刻みが加えられた貼付帯で区画され、文様帯には縄線が加えられている。

108は波状口縁である。口唇には繩の圧痕文が加えられている。肥厚帯下端は内面から押し出し段を作出している。文様帯には2本一組の縄線が菱目状に施され、波頂部から垂下する2本一組の縄線が加えられている。肥厚帯直下にはナデ調整が施されている。109は平縁で、口唇には繩の圧痕文が加えられている。肥厚帯下端は内面から押し出し僅かに段を作出している。文様帯には2本一組の縄線が4本施されている。110の肥厚帯下端は内面から押し出しが明確ではないがここで扱った。3か所の片流れの波頂部をもつ波状口縁である。口唇に半載竹管状工具内面の刺突文が加えられている。口頭部文様帯の下端は、半載竹管状工具の刺突列の下位に2本一組の縄線が加えられている。文様帯には2本一組の縄線が斜位に施されている。125は平縁で、口唇と口頭部下端に半載竹管状工具内面の押し引文が加えられている。口頭部には斜行縄文、体部上部には多軸絡条体の回転文、下位には斜行縄文が施されている。173は口縁部破片。口縁部内面から口縁部を押し出ししているものである。口唇には刺突文が加えられている。肥厚帯上には縄線文が施されている。

⑤ 口頭部文様帯の下端に繩の圧痕文と刺突文が加えられたもの (84)

84は波状口縁で、口唇に半載竹管状工具内面の押し引文が加えられている。口縁部下端には繩の圧痕文と半載竹管状工具内面の刺突文が加えられている。文様帯には2本一組の縄線で波頂部を頂点とする三角形（山形）の文様構成を作出している。

⑥ 肥厚帯のみのもの (81・93・98・120・172・176・179)

81は波状口縁で、波頂部は小さな2個一組の小突起からなる。口唇には繩の圧痕が加えられている。幅の狭い肥厚帯が波状口縁に沿ってめぐり、4本の縄線文が施されている。波頂部下位の肥厚帯直下にはナデ調整が加えられている。93は平縁で、口縁部断面形は角形である。口唇には繩の圧痕文が加えられている。無文地の肥厚帯には2本一組の縄線文が加えられている。肥厚帯直下にナデ調整が加えられている。98は波状口縁で、波頂部は2個一組の小突起からなる。口唇には繩の圧痕が加えられている。肥厚帯上には円形刺突文が不規則に加えられている。120は頭部上部が「く」字状に内屈するものである。平縁である。無文地の文様帯には横環する5本の縄線と3本の縦位の縄線が加えられている。

172・176・179は口縁部の破片資料。172は平縁である。口唇に繩の圧痕文が、肥厚帯上には横環する縄線文が施されている。176の口唇には繩の圧痕が加えられ、文様帯上には縄線が施されている。179は口唇部・器面に多軸絡条体の回転文が施されたものである。

6 浅鉢形・台付等 (128～137・180・181)

6a 浅鉢形土器 (128～134・180・181)

多軸絡条体の回転文のみのもの (128・129・180・181)

128の上面観は円形で、1か所に台形状の大型突起が作出されている。口唇にも多軸絡条体の回転文が施され、断面形は外傾斜である。器面には縦施文の多軸絡条体の回転文が施されている。129の上面観は卵形で、長軸方向に成形時の穿孔が認められる。器面には横施文の多軸絡条体の回転文が施されている。

180・181は口縁部の破片資料。180は波状口縁で波頂部下位に焼成前に口唇に繩の圧痕と穿孔が加えられている。181は小型土器の口縁部破片。口唇に半載竹管状工具内面の刺突文が加えられている。焼成前の穿孔が認められる。

口頭部文様帯をもつもの (132～134)

132は文様帯下端が肩状の器形のものである。波状口縁で、口唇に繩の圧痕が加えられている。文様帯下端には繩の圧痕が加えられている。文様帯の上下は2本一組の縄線で区画され、波頂部下位に

は楕円形の穿孔が上下2か所に加えられている。無文地の文様帯には繩の「折り曲げ」部分の横「U」字状の繩端の圧痕文を組み合わせて横位の文様構成を作出している。133の口縁部には4か所の小突起が施されている。口唇には繩の圧痕が加えられている。文様帯下端は半載竹管状工具の刺突文で区画されている。文様帯には組紐状の繩線が3本施されている。小突起下位の区画文から体部にかけて縦位の橋状把手が貼り付けられている。体部には多軸絡条体の回転文が施され、一部に綾絡文が認められる。134の上面観は円形に近い卵形になるものと思われる。口縁部は平縁で、先端部の1か所に指頭による押圧が加えられ2個一組の緩やかな突起が作出されている。突起間から文様区画帯まで垂下する縦位の貼り付けが加えられている。口唇及び口頸部文様帯下端には半載竹管状工具内面による刺突文が加えられている。無文地の文様帯には2本一組の繩線が4本施文されている。

舟形のもの(130・131)

130の上面観は長円形である。側面観は、長軸の両端が高い。長軸の両端には、口縁部内面から貼り付け、底部まで及ぶ貼付帯が2列施され長軸側の両端に2個一組の突起が作出されている。側縁にも貼付帯が加えられている。口唇・口縁部・貼付帯等に半載竹管状工具内面の刺突文が加えられている。側縁の器面には横施文の多軸絡条体の回転文が施されている。131の上面観は長円形である。側面観は、長軸の両端が高い。長軸の両端には、楕円形の透かし彫りが「ハ」字状に施されている。器面には横施文の多軸絡条体の回転文を施した後、口唇・口縁部・側縁部などに半載竹管状工具内面の刺突文が加えられている。

6b 台付土器(135～137)

135は4か所の2個一組の緩やかな突起が作出されている。口唇には繩の圧痕が加えられている。文様帯区画帯をもたず、文様帯には2本一組の繩線が2本施文されている。突起下位に文様帯を跨ぐように橋状把手や粘土帯が貼り付けられている。136は台部分が欠失する。平縁である。器面に横位に多軸絡条体の回転文が施されるものである。137は底部破片である。体部に多軸絡条体の回転文が施され、縦位の綾絡文が加えられている。台部分に穿孔が加えられている。

7 底部破片(126・127・138・183)

126は口縁部を欠失する。口頸部下端は刺突が加えられた貼付帯で区画されている。127・138・183は底部破片である。

Ⅱ群B類土器(3b)

体部に条痕文(3b)が施されているもの(図V-133・134-1～17)

Ⅱ群B-2類土器(図V-133-1)

口頸部文様帯の下端が貼付帯で区画されているもの(1)

1は、口頸部文様帯下端に円形刺突文が加えられた低い貼付帯によって区画されているものである。貼付帯直上には1本の繩線文が部分的に認められる。小型土器である。口縁は、4か所の波頂部をもつものである。波頂部は山形のものと同流れ形状のものが交互に作り出されている。

Ⅱ群B-4類土器(図V-133-2)

口頸部文様帯の下端が結束羽状繩文で区画されたもの(2)

2は、幅の狭い文様帯には組紐状の繩線文が3本加えられている。体部下半に横位の貝殻条痕文を施した後、体部に縦位に条痕文が加えられている。

Ⅱ群B-5類土器(図V-133・134-3～17)

口頸部文様帯下端が肩状の形状をもつもの(3～5・13・14・17)

3は波状口縁で、口唇には刺突文が加えられている。幅広の文様帯には8本の2本一組の連結した縄線が施されている。4は緩やかな波頂部をもつ波状口縁である。波頂部には押捺が加えられている。口唇には縄の圧痕文が加えられている。文様帯下端は円形刺突文が加えられている。文様帯には波頂部下位には橋状把手が施され、波頂部を頂点に2本一組の縄線文が菱目状に加えられている。5は小型土器である。4か所の片流れの波頂部をもつ波状口縁である。口唇には半截竹管状工具内面の刺突列が加えられている。文様帯下端には貼り付けが加えられ、肩状の形状を作出した後、半截竹管状工具内面の刺突文が加えられている。無文地の文様帯には2本一組の縄線文が加えられている。13は波状口縁で、口唇には縄の圧痕文が加えられている。口頭部の肩部分には縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯には 折り曲げた縄線の「U」字状の「折り曲げ部分」を向い合せに施文して波頂部を頂点とする山形の文様構成を作出している。14・17は破片資料。14は口唇・口頭部文様帯下端の肩状部分に縄の圧痕が加えられている。文様帯には縄線と斜位の短い縄の圧痕が加えられている。17の肩部分には刻目が加えられ、口頭部文様帯には櫛歯状工具による条痕が加えられている。

文様帯区画帯をもたないもの(6・7・15)

いずれも平縁で、口唇には縄の圧痕文が加えられている。口唇直下には複節の縄線が2本加えられている。6は体部に横位の貝殻条痕文を施した後、縦位に条痕文が加えられている。7の体部下半には単軸絡条体の回転文が施されている。15は口縁部の破片資料。口唇には縄の圧痕文が加えられている。口唇直下には複節の縄線が3本加えられ、下位に条痕と単軸絡条体の回転文が施されている。

口縁部に幅広の肥厚帯状の文様帯をもつもの(8～11・16)

8は波状口縁で、波頂部は片流れ、口唇には刻目が加えられている。肥厚帯には波頂部から垂下する2本一組の縄線と波頂部に沿って2本の縄線文が加えられている。肥厚帯直下にはナデ調整が加えられ2本の縄線が加えられている。底部付近の器面には斜行縄文が認められる。9は平縁で、口唇に単軸絡条体の圧痕文が加えられている。肥厚帯から肥厚帯下位まで、櫛歯状工具による条痕が加えられている。体部には多軸絡条体の回転文が施されている。10は底部が欠失する。平縁である。粗雑な作りのもので、口縁から体部上半に粗いナデ調整を加えた後、条痕文が加えられている。体部下半は多軸絡条体の回転文が施されている。11の肥厚帯上は無文である。体部上半に2本一組の条痕(縄線)が施されている。16は浅鉢である。口唇に縄の圧痕が加えられている。肥厚帯上には2本一組の縄線が3本加えられ、縦位の橋状把手が加えられている。

口縁部が折り返されているもの(12)

12は平縁である。口縁部にはナデ調整が加えられている。器面全体に櫛歯状工具による条痕が施されている。

Ⅲ群A類土器(図V-135・136-1～11)

1は平縁の大型土器である。口唇には縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯の下端は縄の圧痕が加えられた貼付帯で区画されている。貼付帯には部分的に粘土紐が重ねて貼り付けられている。無文地の文様帯には2本一組の縄線が5本施されている。2は大きな4か所の波頂部をもつ波状口縁である。文様帯下端は体部上半のくびれ部やや上の貼付帯で区画し、文様帯を作出している。波頂部には鋸歯状(山形)に貼り付けが施され、2本一組の縄線が貼り付けに沿って加えられている。3は、2個一組の小突起からなる4か所の波頂部をもつ波状口縁である。口唇には縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯下端には縄の圧痕が加えられ貼付帯がめぐり、波頂部直下と区画帯上にボタン状の貼り付けが施され、波頂部から垂下する「C」・「逆C」字状の貼り付けが加えられている。無文地の

文様帯には3本一組の縄線と単軸絡条体の圧痕文が施されている。体部は結束の斜行縄文である。4は平縁の大型土器である。口唇には縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯の下端は縄の圧痕が加えられた貼付帯で区画されている。無文地の文様帯内には3本一組の組紐状の縄線が上下が区画され、中央にも同様な縄線が小波状の縄線文が加えられている。5は波状口縁で、波頂部は貼り付けによって作り出された大小2個の突起からなる。口唇には縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯下端には縄の圧痕が加えられた貼付帯がめぐり、その直下に、さらに2本一組の縄線が2列加えられている。無文地の文様帯には、波頂部から区画帯に垂下する「逆C」字状の貼り付けが加えられている。貼り付け間には2本一組の縄線が向きの異なる「ワラビ」状の文様構成を作出している。体部は結束羽状縄文である。6は台形状の突起が施された波状口縁である。口縁部の断面形は切り出し状である。突起部から口縁部には橋状把手が加えられている。器面には結束羽状縄文が施されている。文様帯は幅が広く、体部下半まで及び、地文上にモール状の細い粘土紐で文様が描かれている。口縁部には鋸歯状の粘土紐の貼り付けが加えられている。

7～11は破片資料である。7は波状口縁である。口頭部文様帯の下端は1本の縄の圧痕が加えられた貼付帯で区画されている。波頂部下位の文様帯にはボタン状の貼り付けと「J」・「逆J」字状の貼り付けが施されている。そして、無文地の波頂部下位は縦位に、文様帯には横位に2本一組の縄線文が4～5本加えられている。体部は斜行縄文である。8は波状口縁である。波頂部を欠失する。口唇には2本一組の縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯下端には縄の圧痕が加えられた貼付帯がめぐり、その直下に縄端による「C」字状の圧痕文が加えられている。波頂部から2本一組の縄の圧痕が加えられたドーナツ状の貼り付けが3段施されている。文様帯中央部には2本一組の縄の圧痕が加えられたボタン状の貼り付けが横環している。そして、文様帯上部には2本一組の縄線が鋸歯状に施され、下位には2本一組の縄線が横環している。体部は結束羽状縄文である。9は波状口縁であるが波頂部を欠失する。5に類似した大小の突起をもったものと考えられる。口唇には縄の圧痕が加えられている。口頭部文様帯下端には縄の圧痕が加えられた貼付帯がめぐり、その直下に、数列の綾絡文が加えられている。文様帯には2本一組の縄線文と短い縄の圧痕文が加えられている。体部は結束羽状縄文である。10は頂部が大きく窪む突起をもつ波頂部である。窪みは長軸2.5cm、短軸2.0、深さ1.5cmである。突起部の側面には縄線の圧痕がめぐる。突起下端には弧線状の縄線が2本施されている。口唇上に縄線の圧痕が加えられている。口縁部の断面形は外傾斜の切り出し状で、口唇に沿って3～4本の縄線文が加えられている。波頂部から垂下する貼り付けを施した後、器面・貼り付け上には斜行縄文を施している。

11は破片資料である。H-13の覆土から出土したものである。胎土分析試料(試料番号:N0.T-98)である。分析の関係で遺構編(北埋調報321)に掲載できなかったためここで掲載する。器面には半截竹管状工具内面による沈線文で「ワラビ」状の文様が描かれている。特徴は、器壁は厚く、胎土に砂粒を多く含み、ザラサラである。海綿骨針は含まない。繊維は少ない。胎土分析の結果、他の資料とは異質系として分類された。分析一覽では北陰系土器としたが、その後、大木系土器ではないかとの見地も得ている。

Ⅳ群土器 (図V-137～139-1～53)

Ⅳ群A類土器 (図V-137-1～7・図V-138・139-11～48)

口縁部に折り返しなし貼付による肥厚帯をもち、「タガ」状の貼付帯をもつもの(11～22・27～31)

11は肥厚帯と体部が同時施文されたものである。12～14はLRの原体で、体部は縦位に、肥厚帯上は横位に施文され、羽状の文様構成を作出している。15～18はRLの原体で、体部は縦位に、肥厚帯上は横位に施文し、羽状の文様構成を作出している。18の体部には横位に施文された斜行縄文も認められる。19～21は肥厚帯上に縄線文が加えられているものである。19は肥厚帯上に2本の縄線が加えられている。体部には撚り方向が異なる原体を縦位に施文し、羽状の文様構成を作り出している。20・28・30は同一個体。縄線が加えられた貼付帯が施されている。20は肥厚帯上が横位に、体部が縦位にLRの原体で斜行縄文が加えられ、口縁部肥厚帯上・体部貼付帯上に縄線文が加えられている。28・30は縄線が加えられた貼付帯が施されている。21は折り返し口縁部で、肥厚帯上に粘土紐を縦位に加え、小突起が作り出されたものである。肥厚帯には縄線文が加えられ、小突起部分の内面には縦位の縄の圧痕が加えられている。体部には横走気味の縄文が施されている。22の肥厚帯上には円形刺突文が加えられ、体部はLRの縄文が施されている。27～31は胴部破片である。27の肥厚帯は薄く、貼付帯上に器面と異なる方向の縄文が加えられ、羽状の文様構成が作り出されている。29は幅広い貼付帯が施されているもの。29は貼付帯上・地文ともLRの縦施文である。31は「ドーナツ」状の貼付帯が施されたもの。

口縁に肥厚帯をもたないもの（6・7・23～26）

6は攪乱層から出土した。口縁部は平縁である。器面全体に縦位の結節の斜行縄文を施した後、体部上半に横環する4列の結節の斜行縄文を加えている。胎土に砂粒を多く含む。Ⅱ群B類土器の可能性はある。

7は無文の小型土器。口縁部は緩やかな波状口縁である。23は地文の施文方向（縦施文・横施文）を変えることで羽状の縄文が作出されているものである。口縁部断面形が角形である。口縁部下端に貼付帯が認められる。Ⅱ群B類土器の可能性もある。24・25は不整の羽状縄文が施されたものである。口縁部の断面形は丸味をもちやや尖る。26は器面に斜行～横走気味の縄文が施されたものである。

口縁部に折り返しなし貼り付け等による無文地の肥厚帯をもち、口縁部に「8」字状や環状等の貼り付けが多用され、細い沈線文が主要な文様要素のもの（1～3・32～41）

1は平縁である。口縁部は僅かに肥厚する。肥厚帯及び肥厚帯直下に横環する沈線が加えられ、体部文様帯の上端を区画している。体部文様帯下端は4本の沈線で区画され、文様帯には菱目状の沈線文が加えられている。2は平縁で、体部上半でわずかにくびれる器形である。体部文様帯は、口頭部は3本の沈線、下端は2本の沈線で区画されている。文様帯には横位に展開する曲線的な沈線文が加えられている。3は体部下半が欠失する。体部上半でわずかにくびれる。無文地の口頭部には横環する沈線文が4本加えられている。体部には横走気味の縄文が施されている。32は無文土器で、口唇に2段の折り返しが認められる。33は口縁部を沈線で区画し、貼付帯のような文様構成を作出し、貼り付けによって作り出された小突起部分外面には環状の貼り付けが、突起頂部には刺突文が加えられている。34は「8」字状の貼り付けが加えられた波頂部をもつものである。波頂部先端は指頭による押捺が加えられ、円形で、くぼみをもつ。口縁部には横走する沈線と弧状の沈線が組み合わせられて施文されている。35・36は波頂部から垂下する「J」字状の沈線文が施されたものである。35のくびれ部にはドーナツ状の貼付帯が加えられている。36の波頂部先端が欠失しているため貼り付けの有無は不明である。37は体部上端を沈線で区画し、体部上半に菱目状の沈線文が施されたものである。38～41は無文地の体部上半に3本一組の沈線で曲線的な文様が施文されたものである。38は折り返し口縁で、波状になるものと思われる。39・40は浅鉢ないし台付である。40の口縁は折り返し口縁である。41の波頂部には指頭の圧痕が加えられている。

体部に太い沈線文や太い沈線で区画された磨消文風の文様が施されたもの(4・5・42~48)

4は小型土器である。2か所の波頂部をもつ。波頂部内外にはモール状に粘土紐の貼り付けが加えられている。無文地の文様帯には太い沈線で「スパナー」・「クランク」状の磨消文(区画文)が施され、区画内には条痕が加えられている。5は体部下半の資料である。沈線で区画された斜行縄文地の文様帯に波状の沈線文が加えられている。42~48は口縁部破片。47は体部破片である。42は緩やかな波頂部をもつ器形で、波頂部には指頭による押圧が加えられ小波状を呈する。器面には横走する縄文上に、曲線的な沈線文が加えられている。43の口唇部には刻目が加えられている。器面は無文地で、口頭に横環する沈線と「スパナー」状等の沈線文が加えられている。44の波頂部の内外にはモール状の粘土紐の貼り付けが施され、貼り付け部分には斜行縄文が加えられている。無文地の器面には「スパナー」状・「入組的な沈線文」が施されている。45は3本一組の沈線で区画された、無文地の体部文様帯には3本一組の沈線が鋸歯状に描かれている。46は緩やかな波状口縁で、口縁部は無文帯で、体部文様帯には「乙」字状の沈線文が施されている。47の無文地の文様帯には、入れ子の弧線文を組み合わせて施文している。48の口縁部は緩やかな波状口縁になるものと考えられる。折り返し口縁は無文で、断面形は切り出し状である。無文地の体部には太い沈線で「クランク」状に区画され、区画内に条痕文・擦痕文が加えられた磨消文風の文様構成を作出している。

IV群B類土器(図V-137-8・図V-139-49~51)

8はN96区の盛土上部のⅡ中層から比較的まとまって出土した。一見、台付の器形である。しかし、底部付近は平面から垂直に立ち上がり、底部から4cm程の部分で大きく開き、口縁部付近で垂直に立ち上がる。平縁で、口縁部及び体部下半は無文で、丁寧なナデ調整が加えられている。口縁部の断面形は角形で、器壁は薄い。肩部分から体部上半にかけて斜行縄文を地文とし、横環する7本の沈線と沈線間を結ぶ弧状の沈線文が加えられている。49は口縁部が無文帯で、体部上半に斜行縄文を地文とする幅広の縄文帯に横環する6本の沈線が施され、沈線間を結ぶ弧状の沈線文が加えられ、弧状間に磨り消しを加えている。50は胴部破片。体部には斜行縄文が施され、横環する沈線が施され、沈線間を結ぶ弧状の沈線文が加えられている。51は器面に無節の斜行縄文が施された口縁部破片である。口唇部・口唇部直下に丁寧なナデ調整が加えられ、口縁部に幅の狭い無文帯を作り出している。

IV群C類土器(図V-137-9・10・図V-139-52・53)

9・10は小型土器。9は底部を欠失する。3か所の波頂部をもつ。波頂部は外側からの押圧が加えられ2個一組の小突起からなる。器面には原体は不明だが、細かな斜行縄文らしき縄文が施されている。10は完形品である。浅鉢形で、1か所に橋状把手が付けられている。体部には斜行縄文が施されている。Ⅱ群B類土器の可能性もある。52・53は口縁部破片である。口縁部の断面形は、内面が肥厚する切り出し状である。52は斜行縄文、53は細かな羽状縄文が器面に施文されている。

V群土器 (図V-140～159)

V群C類土器 (図V-140～159)

V群C類土器は調査区西側から多く出土し、縄文時代前期末葉(Ⅱ群B-5類土器期)のH-16と擦文文化期のH-19の覆土の落ち込みから多く出土した。また、M・N・O88・89区からも多く出土し、多くの復原土器が得られた。

文様構成には横位連続工字文・入組文・工字文・変形工字文がある。変形工字文には所謂「四字文」と「匹字文」の中に隆線が認められる「変形四字文」がある。

V群C類土器は器形・文様構成から大きく2つに分けられる。

I群土器：文様帯が、口頸部文様帯と体部文様帯に分かれ、横位連続工字文が施されたもので、口縁部には2頭の幅広の突起をもつ。包含層の掲載遺物、図V-148-1・2・図V-148-11～13・図V-150-53・54がこれに該当する。

II群土器：口頸部文様帯と体部文様帯が合体ないし口頸部文様帯が体部文様帯に吸収されてしまったもので、横位連続工字文・工字文・変形工字文が施されたもの。I群土器に類似し、口頸部文様帯と体部文様帯が認められるもので、出土状況から前者と分離できなかったもので、前述の1・2・11～13・53・54を除いたものである。

記載にあたっては、一括出土のもの、多くの復原土器が得られたM・N・O88・89区については個別に図版を作成した。その他の調査区出土の資料については一括して包含層として記載した。

一括土器1 (図V-140・図V-141-1～4)

H-16の覆土上部の落ち込みから出土した。この集中の範囲はN・O88・89区である。特にO88区のⅡ中層からは鉢形土器(PO-1)、壺形土器(PO-2)と浅鉢形土器(PO-3)・底部破片(PO-2)が出土し、図化して取り上げた(図V-140)。

検出状況：PO-1・PO-2・PO-3はH-16の覆土の落ち込み部分に堆積した黒色土(Ⅱ層)中のB-Tm層の下部から出土した。出土層位はⅡ中層である。

PO-1(図V-141-1)1は小型の鉢形土器。口縁は平縁になるものと思われる。口縁部には横環する沈線が3本施文されている。体部はLRの斜行縄文である。平底で、底面は極めて薄い。

PO-2(図V-141-2)2は壺形土器である。底部を欠失する。口頸部下端はA突起が施された区画帯で区画される。口頸部はやや開き気味に立ち上がる。口縁部に4か所の刻目が加えられたB突起が施されている。口縁部は突起を中心に4分割され、その中央に指頭による圧痕が加えられ、更に突起部内面から口唇に向かって沈線文が加えられ、突起間に口唇に沈線が加えられた2個一組の山形突起が作り出されている。口縁部内面には沈線文が横環し、沈線上部に円形刺突文が加えられた貼瘤が施されている。口縁部外面の突起下部には大きな楕円形の貼り付けを施し、その貼り付けの中央に横位の短沈線文が加えられ、大きなB突起の様なものを作り出している。この貼り付けは在地系と考えられる浅鉢・深鉢などの他器種にも認められ、特徴的な文様要素である。体部には縄文を施文後、口頸部下端から肩部分にかけて文様帯を作出している。文様帯は2段からなる。文様帯には横位の「C」字状、「逆C」字状を向い合せに組み合わせて一単位の入組文を作り出している。文様帯は上段には6単位、下段には4単位施文している(図VII-1-29 模式図2)。

3(PO-2)は鉢形土器の体部下半である。平底である。器面にはLRの斜行縄文が施されている。

4(PO-3)は浅鉢である。大型の「Y」字状突起部分と「V」字状の突起をもつ大型破片である。「Y」字状突起の先端部分が欠失する。「Y」字状突起部分は他の資料と異なり「刺股」状に左右に「Y」字状となる。類例には(図V-152-97)がある。突起部には沈線や刺突が加えられた貼付帯がめぐ

る。突起部下端に短沈線が加えられた長楕円形の大きな「B」字状突起の様な貼り付けが施されている。内面では横環する沈線上に同様の貼り付けが認められる。その下位に沈線が加えられている。「V」字状の突起の下端には弧状の沈線が加えられている。口頸部にめぐる沈線は6本で、突起下位の上から3本目の沈線には、B突起が加えられ、口頸部文様帯と体部文様帯を区画している。

一括土器2 (図V-140・図V-141-5・6)

調査区O91区のⅡ層中の調査中に、O92区杭付近で、2個体の正立した壺形土器を確認した。出土地点は、先述したV群C類土器の集中地点より東側10mに位置する。この周辺からも浅鉢・台付等の復原土器が得られている。同期の遺物集中地点であった可能性がある。これらを伴う遺構を確認するために半載し、包含層Ⅳ層まで掘り下げを実施した。いずれもⅡ層中から底部が検出され、掘り込み・遺構の底面は確認できなかった。西側をPO-1、東側をPO-2として取り上げた。

5 (PO-1:図V-141-5)は無文の完形の壺形土器である。口縁部は間隔を置き指頭の圧痕を加え、8か所の台形状の波頂部を持つ波口縁を作り出している。口唇部の指頭の圧痕が加えられた低い部分はそのままで、台形状の波頂部の口唇に沈線文が加えられている。

6 (PO-2:図V-141-6)は口縁部を欠失する。口頸部は無文で横位の調整が認められる。器形は口頸部下端に僅かに段をもつ。底部は口径と同様か僅かに大きくなるものと思われる。体部は、小さな底部から大きく開く。最大径は体部中位に認められる。体部には縦走気味の縄文が施されている。

O88区出土の土器 (図V-142・図V-143～145-1～20)

O88区から出土したものを示す。先述した一括土器1もO88区から出土である。同区から出土し、復原された土器を図V-142に示してある。

浅鉢 (1～3・8～14)

大形の「Y」字状と「V」字状の突起をもつもの (1～3・10・11)

1は6か所の突起をもつものである。「y」字状突起1か所、「V」字状突起5か所である。「V」字状突起のうち「Y」字状突起に対向する突起は他より大きく作出され、内面の沈線の加え方も異なり、横位の「弧線」突起から「y」字状に描かれ、さらに隣接する「V」字状突起の沈線に連結している(図V-156参照)。「Y」字状突起の両側面には逆「Z」字状ないし逆「そ」字状の沈線文が加えられている。下位には横環する4～5本の沈線と刻み目が加えられた隆帯がめぐる。そして下端の内外には「オバケのQ太郎の唇」状の長楕円形の貼り付けが加えられている。体部にはR L縄文を施した後、口縁部に横環する7本の沈線が加えられ、「Y」・「V」字状の突起下位の4本目の沈線にはB突起が加えられ口頸部文様帯と体部文様帯を区画している。体部下端(底部付近)にも3本の沈線がめぐる。2は体部下半(底部)を欠失する。文様構成は1に類似する。口頸部にめぐる沈線は6本で、突起下位の上から3本目の沈線には、B突起が加えられ口頸部文様帯と体部文様帯を区画している。3は大型の「V」字状突起と小さな「V」字状突起部分、10・11は小さな「V」字状突起部分である。3・10は横環する沈線が5本で、突起下位の上から3本目の沈線には、B突起が加えられている。11は横環する沈線が4本で、「V」字状の小突起を下端に沈線が1本加えられている。突起下位のA突起が加えられていない。

「V」字状の小突起をもつもの (12～14)

12は口縁部に貼り付けによって「V」字状の小突起を作出したもので、口縁部には3本の横環する沈線が加えられている。内面にも1本の沈線がめぐり、突起部分には短沈線が加えられている。13・14は「V」字状の小突起の下端に、沈線が加えられているもので、口縁部外面の沈線は、13は3本、

14は4本である。いずれも内面に1本の沈線がめぐり、突起部分には短沈線が加えられている。器形の大小の違いによる文様構成の違いとも考えられるが、11は1～3・10の省略形、12～14は11がさらに一層省略が進んだもののようにも思える。

器面にナデ調整が加えられた文様帯に変形1字文が施されたもの(8・9)

8は小波状口縁で、文様帯には「変形四字文」が施されている。9は文様帯に「四字文」が施されたものである。

鉢形(15～18)

口縁部に5～6本の沈線が加えられ、上から3本目にB突起列が施された区画帯をもつもの(15・16)

いずれも口縁部破片である。15・16は平縁になるものと考えられる。15は口縁部に6本の沈線が加えられ、上から3本目にB突起列が施され、口頭部文様帯と体部文様帯を区画している。16は口縁部に5本の沈線が加えられ、上から3本目にB突起列が加えられている。補修孔が認められる。

口縁部に5～6本の沈線が加えられたもの(17)

17はLRの地文上に5本の沈線が加えられているもの。突起は認められない。

縄文のみのもの(18)

18は口縁破片である。貼り付けによって2か所の山形の小突起を作出している。器面にはLRの縄文が施されている。

変形土器(4～7・19・20)

4～7は小型の壺形土器である。4は、体部下半を欠失する。口頭部上端から口縁部肥厚帯にかけて段が作り出されている。口縁部内面に沈線が加えられ、外面は外側に張り出す。さらに外面の4か所に粘土層が加えられ、粘土部分を頂点として、頂点間を結ぶ沈線が加えられ、方形気味の上面観を作り出している。口頭部・体部は無文である。口縁部・体部に赤色顔料の付着が認められた。5は体部下半を欠失する。無文土器。最大径は体部中央部に認められる。口頭部は外反気味に開く。6は高さ8cm程、口径3cmほどの無文のである。薄手で、胎土には砂粒を多く含み、極めて脆弱である。7はH-19の報告の資料(北埋321 図IV-62-4)に同調査区出土資料が接合したため再掲した。口頭部・体部下半を欠失する。器面には丁寧なナデ調整が加えられている。

19・20は頸部～肩部分の破片資料である。19は無文の開き気味に立ち上がる口頭部で、下端にはB突起が認められる。20は口頭部下端から肩部分で、口頭部下端にはB突起が認められ、肩部分には横位連続工字文が加えられている。

O89区出土の土器(図V-142・図V-146-21～37)

浅鉢(26～35)

器面にナデ調整が加えられた文様帯に変形工字文が施されたもの(26～31)

26～29は変形工字文が施されたもの。いわゆる「四字文」である。26は隆線を挟み正位置と逆位置の2段の「四字文」が施されている。27・28は正位置の「四字文」、29は逆位置の「四字文」が施されたものである。30は「変形四字文」と呼称される変形工字文が施されたもの。31は口縁部に4本の沈線がめぐるものである。

縄文を地文とするもの(32)

32の体部はLRの斜行縄文である。文様帯には正位に「四字文」が施されたもので、下位に2本の隆線が作出されている。

大形の「Y」字状と「V」字状の突起をもつもの(33)

33は、「V」字状の突起部分である。LRの縄文を地文とし、「V」字状の突起下端に弧線状の沈線が加えられている。口縁部には5本の沈線が加えられ、突起下位の上から3本目の沈線には、B突起が加えられている。内面及び突起部に沈線が加えられ、横環する沈線の左側に2本の部分が認められる。ことから2本の部分に隣接して大形の突起があったことを示している。

口唇部に貼り付けによる2個一組の小突起が施されたもの (34・35)

小突起は、山形に貼り付けられ、頂部は円形で、圧痕が加えられている。大型突起をもつものと同様に小突起下位には2個一組の小突起間を結ぶ弧状の沈線が加えられている。口縁の沈線は、34は6本、35は5本認められる。突起下位のいずれも上から4本目の沈線にはB突起が施され、口頸部文様帯と体部文様帯を区画している。35のように沈線が5本の場合、上から3本目にB突起が加えられるという規則性が図V-146-33・図V-147-43・48～52などで認められており、本来は6本の沈線のものと考えられ、同一個体の可能性がある。なお、34・35を浅鉢としたが、鉢・深鉢の可能性もある。深鉢 (21・22・36)

口縁部に5～6本の沈線が加えられ、上から3本目にB突起が加えられているもの (21・22)

21は体部下半を欠失する。口縁には1か所のみ粘土瘤を貼り付け小さな2個一組のB突起を作出している。器面にLRの縦走気味の縄文を施した後、口縁突起下位に2個の粘土瘤 (B突起) が貼り付けられ、粘土瘤間を結ぶ短い沈線が加えられている。口頸部文様帯には4本の沈線が施され、下端には5cm間隔程にA突起帯が廻り、口縁部文様帯と体部文様帯を区画している。区画帯のA突起帯の下位の体部文様帯には3本の沈線が加えられている。22は小型土器。口頸部の幅に対し、体部が浅く、きわめて特徴的な器形の鉢形土器である。底部を欠失する。底部は極めて小さいもののように思われる。口縁は平縁である。幅広の口頸部は無文で、口頸部上端には2本の、下端には1本の沈線が施されている。体部は浅鉢様な器形である。薄手で、胎土には砂粒を多く含み、極めて脆弱である。

口縁部破片 (36)

36は縄文のみが施された口縁部破片である。口唇には指頭による圧痕が加えられ、口縁部は僅かに小波状である。口縁部に強いナデ調整を加え、無文の凹帯を作出した後、LRの縄文が施されている。包含層からも数点出土している。N89区図V-147-49・包含層図V-151-83・84に類似する。

壺形土器 (23・37)

23は体部下半を欠失する。口唇部に指頭圧痕が加えられ小波状である。口頸部には区画帯をもち、頸部に5本の沈線が施文されている。胎土には砂粒を多く含み、極めて脆弱である。37は無文の口頸部破片。口唇部に指頭圧痕を加えた後、波頂部を結ぶ沈線を加えて、連続したA突起を作出しているものである。内面には1本の沈線が加えられている。

底部破片 (24・25)

24は器面にLRの縄文が施されている。浅鉢～鉢形土器の底部。25は無文の底部破片で、立ち上がり極めて緩やかなことから壺形土器の底部と思われる。

N88区出土の土器 (図V-147-38～42)

鉢形土器 (38)

38はH-19の報告の資料 (北埋321図IV-62-13・14) に同調査区出土資料が接合したため再掲した。口唇部に指頭圧痕を加えた後、波頂部間を結ぶ沈線を加えて緩やかな小波状口縁を作出している。内面に沈線が施されている。体部には横環する沈線を密に施し、波頂部下位に縦位の短斜線を3本間隔に加え、あたかも連続工字文ないし変形工字文風の文様構成を作出している。

深鉢 (39・40)

39は口縁部に6本の沈線が加えられ、上から4本目にB突起列が加えられ、口頸部文様帯と体部文様帯を区画しているもの。40はLRの地文上に5本の沈線のみが施されているものである。

変形土器 (41・42)

41は無文地の口頸部破片。口唇に指頭による圧痕が加えられ小波状を作出したもの。42は頸部破片。口頸部下端をB突起が加えられた沈線で区画し、文様帯には2段の横位連続工字文(?)と「匹字文」が施されている。

N89区 (図V-147-43~54)

浅鉢 (43・46~48・50・51)

大形の「Y」字状と「V」字状の突起をもつもの (43・50・51)

43・50・51は、口縁部に5本の沈線が加えられ、上から3本目にB突起が加えられているものである。43は「V」突起下位に弧線状の沈線が加えられているものである。50・51はないものである。

ナデ調整が加えられた文様帯に変形工字文が施されたもの (46・47)

いずれも口縁部破片である。46の口唇には沈線が加えられている。文様帯には「変形匹字文」が施され、体部には縦走気味にLRの縄文が施されている。47は口唇直下の幅の狭い文様帯に「匹字文」が施されたもの。体部には縦LRの縄文が施されている。

口縁部に5本の沈線が加えられ、上から3本目にB突起が加えられているもの (48)

48は、緩やかな2個一組の山形の波頂部が作出されている。口縁部には5本の沈線が施され、山形の波頂部下位の上から3本目にB突起が加えられている。口縁部の内湾がきついことから浅鉢としたが、口縁部に多量の炭化物が付着していることから鉢の可能性もある。

台付浅鉢 (44・45)

44は口縁部には緩やかな2個一組の突起(B突起)が施されるものである。2個一組の突起の下位には弧状の沈線が加えられている。文様帯には横位連続工字文が4単位施文されている(図VII-1-35 模式図3)。体部にはLRの縄文が施されている。胎土には砂粒を多く含み、脆弱である。緩やかな2個一組の突起(B突起)はI群土器の2頭の幅広の突起(2頭突起;台形状突起)の省略形と考えられる。45は台部分である。無文地の台部分上端には2本、下端には1本の沈線が加えられている。底部内面はナデ調整が加えられ、中央に径13mm、厚さ1mmの管状の施文工具を押し付けたような刺突文が加えられている。胎土は粒子細かく、調整は丁寧である。類例はH-29出土資料にも認められる。径32mm、厚さ2~3mmのもので、報告ではII群B-5類土器として扱った(北埋調報321 図IV-165-26)。この類例は山形県砂子田遺跡・青森県剣吉荒町遺跡などの台付に認められている。

深鉢 (49・52)

縄文のみが施されたもの (49)

49は縄文のみが施された口縁部破片である。口唇には指頭による圧痕が加えられ、口縁部は僅かに小波状である。口縁部に強いナデ調整が加え、凹帯を作出した後、LRの縄文が施されている。089区出土の図V-146-36・包含層図V151-83・84に類似する。

口縁部に5本の沈線が加えられ、上から3本目にB突起が加えられているもの (52)

52は平縁である。口縁部はやや内湾気味である。LRの縄文上に5本の沈線が施され、上から3本目にB突起が加えられている。

変形 (53・54)

53・54は口頸部から肩部分の破片資料で、同一個体である。53は口唇にA突起によって波状口縁を作り出している。口頸部は無文地で、外面3本、内面2本の沈線が加えられている。54の口頸部下端

はA突起が加えられた沈線で区画され、文様帯には正位置と逆位置の「四字文」が上下で半分ずらしで施されている(図Ⅶ-1-35 模式図6)。

包含層(図Ⅴ-148～153-1～105)

I群土器(図Ⅴ-148-1～3・11～13・図Ⅴ-150-53・54)

体部に入組文が施されたものとそれに類するもの(図Ⅴ-148-1～3・11～13・図Ⅴ-150-53・54)

1・2・3と共に他のV群C類土器と分布が異なる調査区P86区から出土している。いずれも器面には調整痕が認められ粗い。胎土には砂粒を多く含む。

台付浅鉢(1・2・11～13)

1は口縁部に2頭の幅広の突起(台形状突起)が4か所施され、その突起間に瘤状の小突起が加えられ大小8か所の突起からなる。器面にLRの縄文施文後、台形状突起の下位に弧状の沈線が施され、その下位にはB突起が加えられ、B突起の間を通り口頭部の沈線と弧線状の沈線と結合されている。瘤状の小突起下位にも瘤状の貼り付けが加えられて、B突起と瘤状の突起間を連結する沈線が加えられている。台形状突起内面には三叉状の沈線で台形状突起間を連結し、瘤状の突起には縦位の沈線が加えられている。無文地の口頭部の下端は、A突起が約4cm間隔で施文された隆帯で口頭部文様帯と体部文様帯を区画している。口頭部文様帯には3本の沈線が加えられている。体部には三叉文を組み合わせた横位連続工字文が施されている(図Ⅴ-154・図Ⅶ-1-35 模式図1)。2は口縁部に2個一組の突起(2頭の幅広の突起)が4か所施されている。器面にLRの縄文を施した後、突起下位に弧状の沈線を加え、その下位と突起間にB突起が施され、計8か所貼り付けられている。B突起間を沈線で連結している。突起内面には縦位の沈線が加えられ、口縁部内面には1本の沈線がめぐり、B突起下位の口縁部には3本の沈線が加えられている(図Ⅴ-154)。

11～13は台付浅鉢の底部～台部分の破片。11・12は台部分の下半部で、LRの縄文施文後、台中央の文様帯は2.5cm間隔でA突起の隆帯が巡り、2段に分割されている。上段には透かし彫りが認められるが文様構成は不明である。下段には11は3本、12は2本の沈線が加えられている。台部分下端には4cm間隔でB突起と沈線が施された区画帯が認められる。13は底部で外面には5本の沈線がめぐり、

浅鉢(3・53・54)

3は底部を欠失する。口縁は平縁である。口頭部文様帯下端は約3cm間隔に粘土粒を貼り付け、粘土瘤間を結ぶ短い沈線で作出されたA突起によって区画されている。文様帯には横環する2本の沈線が施され、口頭部文様帯下端の体部にはLRの斜行縄文が施された後、口頭部文様区画帯下位に2本の沈線が加えられている(図Ⅴ-155)。胎土に砂粒を含む。胎土・器面調整は1・2に類似する。

53・54は口縁部破片である。53はQ93区出土である。口縁部に2個一組の小突起が施されたものである。突起下位に弧状の沈線が加えられている。弧線の下位にはB突起が施されている。突起内面には沈線が加えられ、口縁部内面には1本の沈線がめぐり、突起下位では三角状である。54はP98区出土である。口縁部に山形の突起をもつ。突起下位に弧状の沈線が加えられている。弧線の下位にはB突起が施され、突起下位に沈線が加えられ、B突起の間を通り弧線状の沈線と結合されている。口縁部内面には1本の沈線がめぐり、突起下位では三角状である。

II群土器(図Ⅴ-148～151-4～10・14～105)

工字文・変形工字文が施されたものとそれに相当するもの(4～52・55～105)

浅鉢(4～6・17～19)

ナデ調整が加えられた文様帯に工字文・変形工字文が施されたもの(4・5・6・17)

4は器面に丁寧なナデ調整が加えられたものである。平縁で、口縁部内面に1本の沈線文が加えられている。沈線で区画された口頭部文様帯には正位置と逆位置の「四字文」が隆帯を挟んで施されている。底部下端には2本の沈線が加えられている(図V-154・図VII-1-35 模式図5)。胎土はきめが細かく精緻である。5は完形品である。口縁部は平縁。器面にナデ調整が丁寧に施され、口縁部内面に1本の沈線が加えられている。上下を沈線で区画された口縁部文様帯は幅広く、文様帯には変形工字文が施されている。底部下端に1本の沈線が廻る(図V-154・図VII-1-35 模式図7)。胎土には砂粒を含まず、極めて緻密である。6は口縁にはA突起が施され小波状口縁である。器形はボール状である。文様帯の上下は2本の沈線で区画され上下内側の沈線にはB突起状の粘土瘤が加えられている。文様帯には4単位の変形工字文が施文されている。そして変形工字文間に斜位の沈線が1本加えられている。体部には横走気味のLRの縄文が施されている(図V-155・図VII-1-35 模式図10)。17は小型土器である。波状口縁ないしB突起が加えられた口縁部である。器面にLRの斜行縄文を施文後、文様帯には変形工字文(四字文?)が施されている。底部は丸底気味である。

大形の「Y」字状と「V」字状の突起をもつもの(18・19・55～57・81)

18はH-19の報告の資料(図IV-62-7)と同調査区出土の資料で文様構成・調整・胎土が類似したことから接合関係は認められなかったが、同一個体と判断し、復原して再掲載したものの1か所の「Y」字状の突起と5か所の「V」字状の突起をもつ小型土器である。「Y」字状の突起の先端部分の側面には弧線状の沈線が加えられている。「Y」字状の突起直下には肥厚帯がめぐり縦位の刻みが増えられている。「V」字状の突起は残存していないが、「Y」字状の突起の対向部分の「V」字状の突起は他より大きいものと考えられる。器面にはLRの斜行縄文が施された後、口縁部に3本の沈線が加えられている。19は「Y」字状突起部分が欠失するもので、「Y」字状突起部分の対向する大きな「V」字状突起部分と他の「V」字状突起部分が残存する。器面にLRの斜行縄文が不規則に施文されている。「V」字状突起部分下位には弧状の沈線が加えられ、さらに下位に4本の沈線が横環する。内面には沈線が加えられ、「Y」字状部分の対向部分の大きな「V」字状突起部分と他の「V」字状突起部分では施文に違いが認められる(図V-156)。

55～57・81は口縁部の「V」字状突起部分の破片資料。いずれも口縁部に5本の沈線が加えられ、上から3本目にB突起が加えられている。55・57の「V」字状突起下位には弧状の沈線が加えられ、56には施文されていない。81は外面に沈線が施されていないもので、器面にLR斜行縄文が施されたものである。内面には2本の沈線が認められる。大型の「V」突起の付け根部分と考えられる。

「Y」字状突起(94～105)

「Y」字状突起は、浅鉢の口縁部に直交して施されるものである。多くの突起部分が出土しているが接合作業で器部分と接合した資料が少ないことから、突起部のみをここで扱った。

「Y」字状突起には、「刻みが増えられた隆帯」と「楕円形の貼り付け」の有無・位置等に違いが認められる。

94～102は、「Y」字状突起の下端の付け根部分に「刻みが増えられた隆帯」と「楕円形の貼り付け」が施されたもので、94～100は「刻みが増えられた隆帯」と「楕円形の貼り付け」が接して施されたもの、101・102は「刻みが増えられた隆帯」と「楕円形の貼り付け」の間に無文帯が増えられたものである。94・95・98～102の突起の両側面には2本一組の沈線で「Z」字状の文様構成を描いている。96は「Y」字状突起の両端部が二股になったものである。二股になった先端はさらに小さな「Y」字状に作り出されている。97は突起先端部を欠くが、浅鉢の口縁部に並行した先端部をもつもので、類

例は一括土器1でも認められている(図V-141-4)。

103は「楕円形の貼り付け」のみが突起部の根元に施されたもので、「刻みに加えられた隆帯」を欠く。突起の両側面には前者と同様に2本一組の沈線で「Z」字状の文様構成が加えられている。

104・105は「刻みに加えられた隆帯」と「楕円形の貼り付け」を欠くものである。104は横環する沈線が「Y」字状突起の中ほどまで施され、突起の両側面には斜位気味の短い沈線が加えられている。105は小型の突起である。突起の両側面には1本の沈線で「そ」字状の文様構成が施されている。

これらのうち突起下位の文様構成がわかる資料では、「楕円形の貼り付け」と口縁部の沈線間に斜位の沈線が加えられたもの(94～96・98)、突起下位の沈線にB突起・A突起の貼り付けが加えられたもの(94～97・99・104)がある。94～97・99はB突起が加えられたもので、94・95・99は上から3本目の沈線に施されたもの、96は4本目、97は2本目に加えられている。104はA突起が加えられたもので、1本目に施されている。

口唇部に貼り付けによる2個一組の小突起が施されたもの(58～61)

58～61は、台形状に貼り付けられ2個一組の小突起の一部、大形突起をもつものと同様に小突起下位には2個一組の小突起間を結ぶ弧状の沈線が加えられている。58は口縁の沈線は3本、60は4本認められ、59は不明である。58・59・61の小突起内面は押圧が加えられ、60の内面には19・56のような大形突起と同様に小突起間を結ぶ弧状の沈線が加えられている。

「V」字状の小突起をもつもの(62～66)

62・63・66は口縁部に3本の沈線が施され、突起下位に斜位の沈線が加えられている。内面にも口縁部沈線がめぐり、突起部分には短沈線が加えられている。64の口縁には5本の沈線が施され、突起間を結ぶ弧状の沈線が加えられている。65は突起下位に短い弧状の沈線が施され、波頂部に沿って「八」字状の沈線で突起間を結んでいる。

貼り瘤状の突起をもつもの(67～70)

67・68は同一個体。口縁部に瘤状の突起を張り付けた、器面にLRの縄文を施文したのち、口縁部に2本の沈線が加えられている。突起・内面にも沈線文が加えられている。69・70は円柱状の突起である。69の突起部上部に沈線がめぐり、下端には2本一組の右下がり斜位の沈線が施されている。内面には突起部を頂点とする三角形の調整が加えられている。70の突起先端には細い沈線が3本、突起内外に2本の細い沈線が加えられている。

山形の波頂部に押圧が加えられているもの(71・72)

71・72は山形の突起部である。71は突起先端に横位の圧痕が加えられている。器面にLRの縄文施文後、口頸部文様帯に4本の沈線が加えられている。72は突起先端に縦位の押圧が加えられ、口唇には沈線文が施されている。無文帯の下に2本の沈線が施されている。器面にはナデ調整が加えられた無文地である。

台付浅鉢(7～10・14～16・27～52)

7は口縁部は平縁。器面にナデ調整が丁寧に施され、口縁部内面に1本、口縁部に2本の横環する沈線が加えられている。胎土には砂粒を多く含み、極めて脆弱である。

8は器面に丁寧なナデ調整が加えられたものである。底部から台部分を欠失する。口縁部は2個一組の緩やかな山形の小突起が6か所に加えられている。口唇部には突起間を結ぶ沈線が加えられている。文様帯の上下は沈線で区画され、文様帯内には変形工字文が6単位施されている。そして、口縁部の突起下位の変形工字文間には「/」が加えられている(図V-155・図VII-1-35 模式図8)。

9は器面に丁寧なナデ調整が加えられたものである。底部～台部分を欠失する。口縁部には大きい

山形の突起と小さな2個一組の山形の小突起が交互に加えられている。文様帯は4単位で、山形の突起を基準とした文様構成である。口唇部には突起間を結ぶ沈線が加えられている。口縁部文様帯は沈線で区画され、文様帯内には変形工字文が施されている。そして口縁部の突起下位の変形工字文間には「彫り」(削り)と下端に沈線を加え、入れ子状の文様構成を作り出している。変形工字文間には「/」が加えられている(図V-154・図VII-1-35 模式図9)。

10は胎土に砂粒を多量に含み、ザラザラで極めて脆弱である。底部から台部分を欠失する。口縁部は平縁で、文様帯には「四字文」が施されている。口縁部内面に1本の沈線が加えられている。体部にはLRの縄文が施されている(図V-1-35 模式図4)。

14～16は台部分の破片資料である。いずれも無文で、15・16は小型土器である。

32～49は口縁部破片、50～52は頸部破片である。27・29・31・34・36・49はLRの縄文を地文とするもの。他は器面にナデ調整が加えられ無文地である。27～29・32は横位連続工字文が施されたもの。30・31・33～47・50～52は変形工字文が施されたものである。29・31・33は「四字文」が施されたもの。30は「四字文」と横位連続工字文が組み合わされたもの。34・35・43・46・47は「変形四字文」が施されたもの。36～42・44・45は正位置の「四字文」と「変形四字文」組み合わされているものである。48は無文地に沈線、49はLRの縄文上に沈線が施されている。いずれもわずかに沈線が切られているが文様構成は不明である。50～52は頸部破片である。50には2本の隆起線を挟み、正位置と逆位置の「四字文」が施されている。51・52は「変形四字文」が施されたものである。41の2個一組の山形突起下位の沈線に小さな粘土粒が埋め込まれ、長い沈線と短沈線の組み合わせを作出している。このような手法は青森県八幡堂遺跡に認められている。

深鉢 (20・73～85)

20は調査区O92区から出土した。体部下半を欠失する。体部上半は開きながら立ち上がる器形である。平縁で、口縁部断面形は角形である。器面にはLRの斜行縄文を施した後、口縁部に4本の横環する沈線を施し、上から2・3番目の沈線上にB突起が加えられている。

口縁部に沈線とB突起がほどこされたもの (73・75～77)

73・75～77は口縁部破片で、器面にLRの縄文施文後、口縁部に沈線が施され、いずれも上から3本目にB突起が加えられている。73の沈線はやや幅広である。76の内面には1本の沈線が加えられている。

無文帯をもつもの (74)

74は、器面にLRの縄文を施した後、口縁部に無文帯と2本の沈線が加えられている。沈線はやや幅が広い。

口縁に沈線のみが加えられているもの (78～80)

いずれも器面にLRの縄文を施した後、口縁部に沈線が加えられているもので、78・79は3本、80は4本である。78・80の内面には1本の沈線が加えられている。

縄文のみもの (82・85)

いずれも器面にLRの縄文が施されている。82は平縁である。口縁部には、わずかに縄文が認められるが、無文帯を意識したようにも思える。85は口唇に棒状の工具による押圧が加えられ小波状口縁が作出されている。

口縁部にナデ調整により無文帯が作出されているもの (83・84)

いずれも器面にLRの縄文が施され、指頭によるナデ調整で、口縁部にくびれをもつ無文帯を作出している。83は口唇に指頭の圧痕が加えられている。小波状口縁である。

壺形土器 (21～24・86～90)

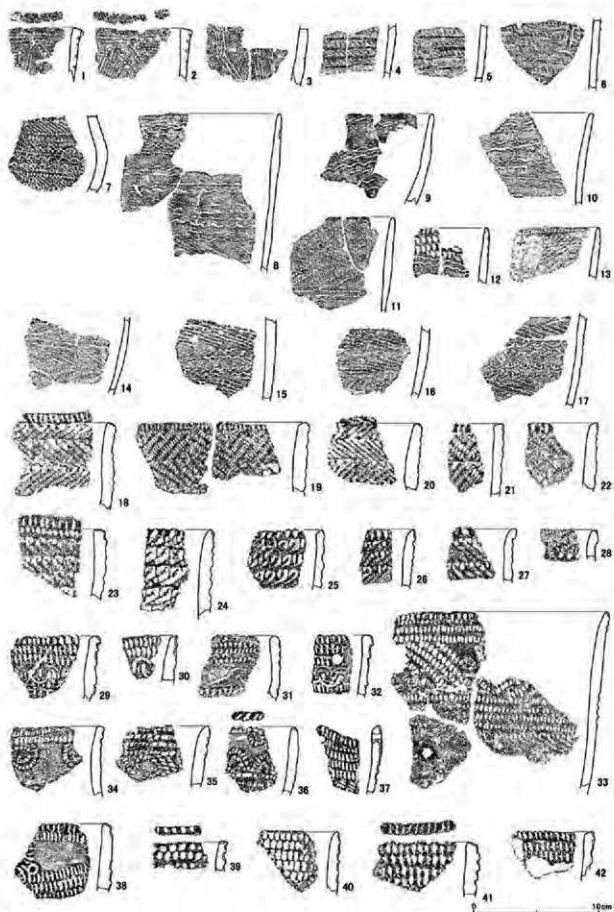
21・23・24・86～90は口頸部である。21・23・86～89は無文地のものである。21・88は波状口縁で、口唇に指頭による押捺が加えられている。21の胎土は極めて脆弱である。23は口唇に緩やかなA突起が作出されたもの。内面に1本の沈線が加えられている。86は口唇に緩やかなA突起が作出されたもの。口頸部には4本、内面に1本の沈線が加えられている。87は口唇にA突起が作出されたもの。口縁部の内外に2本の沈線が加えられている。89の口唇には棒状工具による押捺が加えられている。24は平縁で、口縁部の断面形は角形である。LRの縄文を施した後、口縁部に沈線を加え、上部に無文帯を作出している。IV群B類土器の可能性もある。90は口頸部～肩部分の破片である。口頸部下端はB突起によって区画され、肩部には縄文が施された後、沈線が加えられているが、文様構成は不明である。

底部 (25・26)

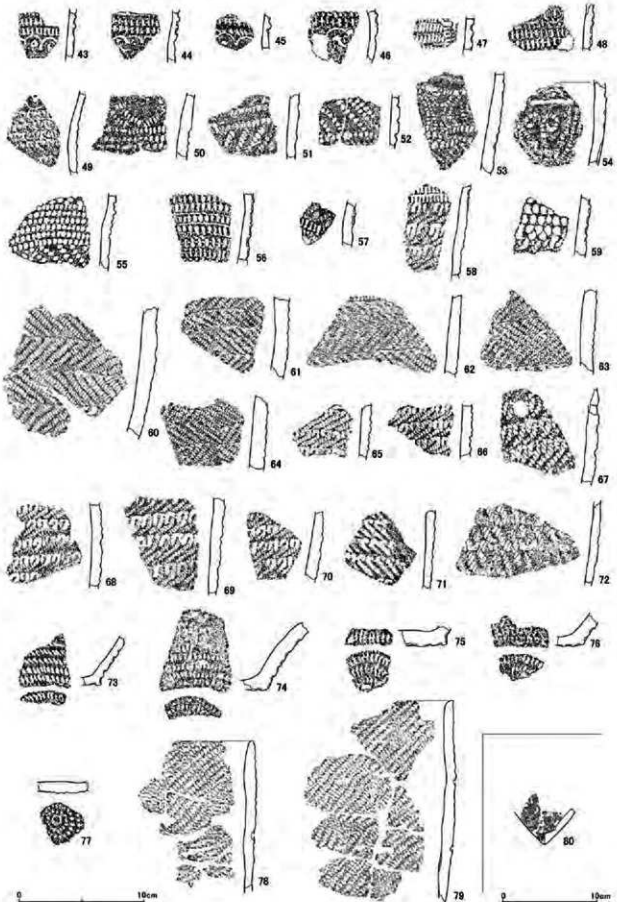
いずれもLRの縄文が施されてものである。25は大きく開きながら立ち上がる器形で浅鉢ないし壺形土器の底部の可能性もある。25は開きながら立ち上がる器形で、鉢～深鉢のものと考えられる。

その他 (91～93)

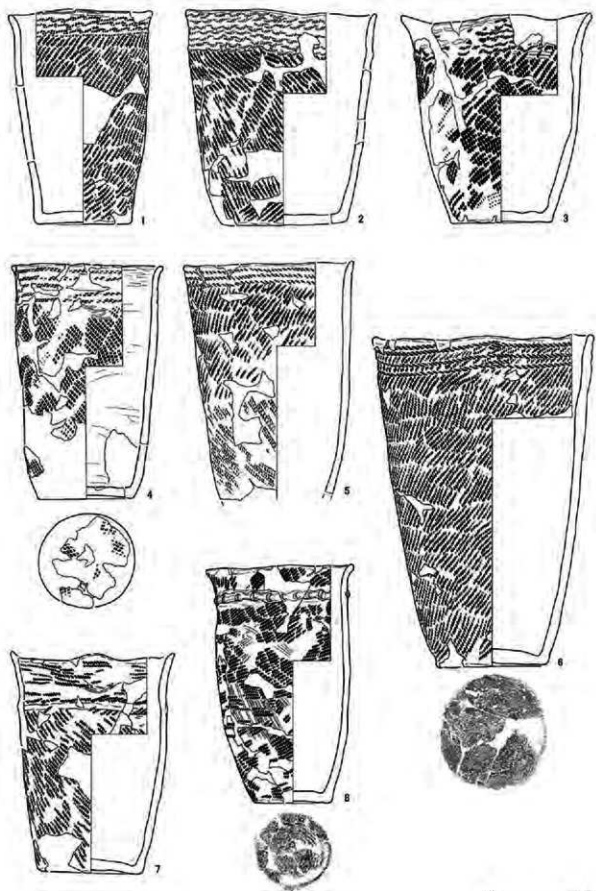
91は胴部破片。LRの縄文が施されて、摩消文が施されている。92は胴部破片。LRの縄文が施されて、文様構成は不明だが、沈線文による入組文が加えられている。93は小波状口縁で、口唇に刻みが加えられている。口縁部には先端が丸い筥状工具による爪形文が2段認められる。胎土に砂粒を多く含む。P95区II層出土である。



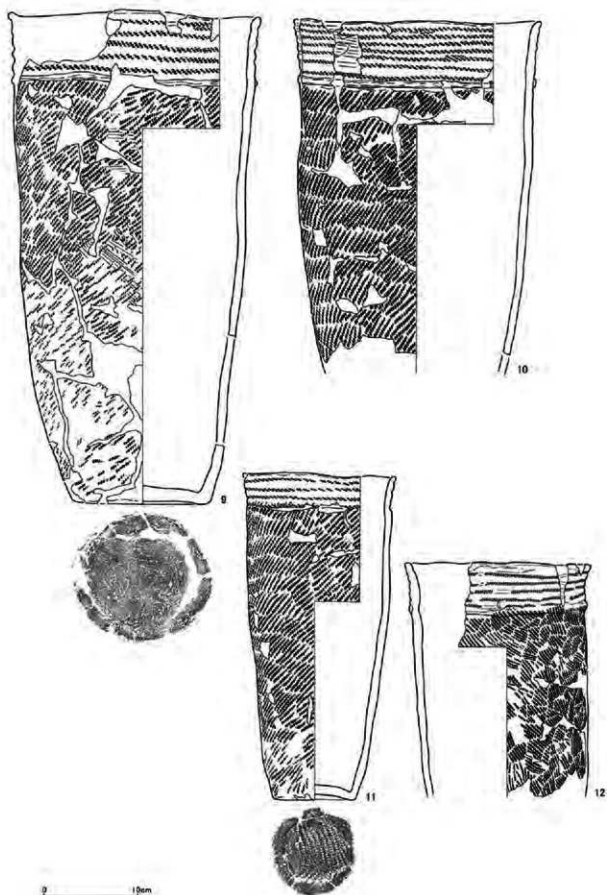
图V-1 包含层土器 I群A类·I群B类·II群A类(1)



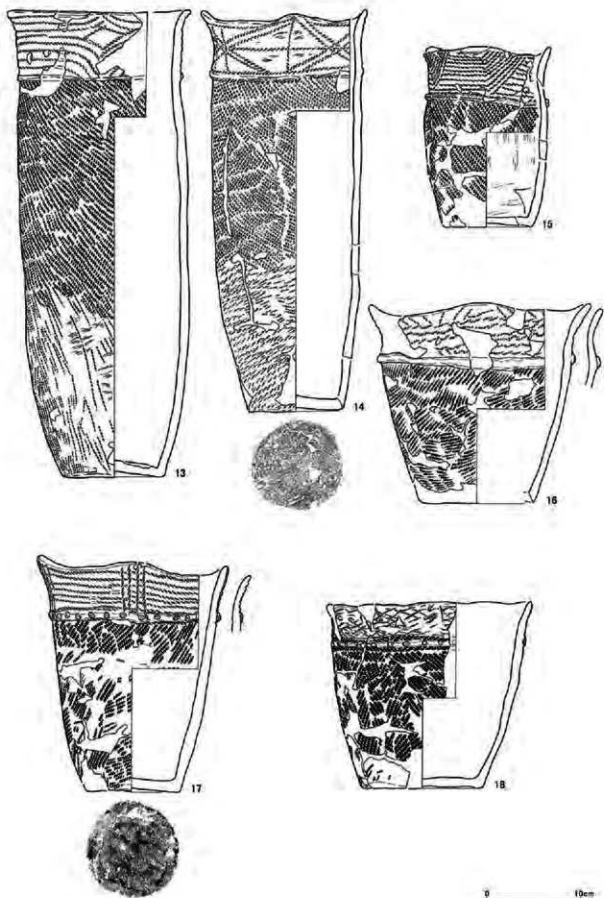
図V-2 包含層土器 II群A類 (2)



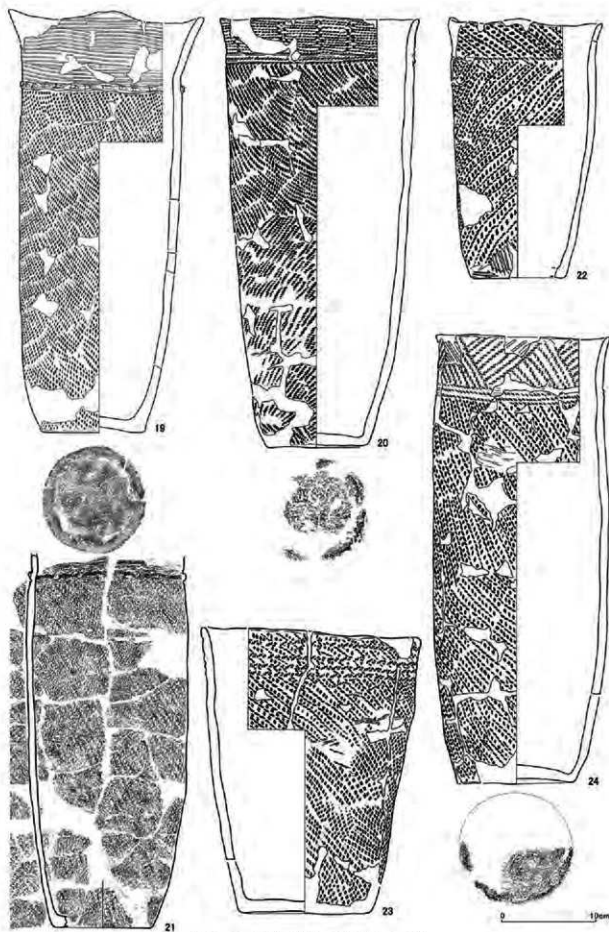
圖V-3 包含層土器 I群B類 1a (1)



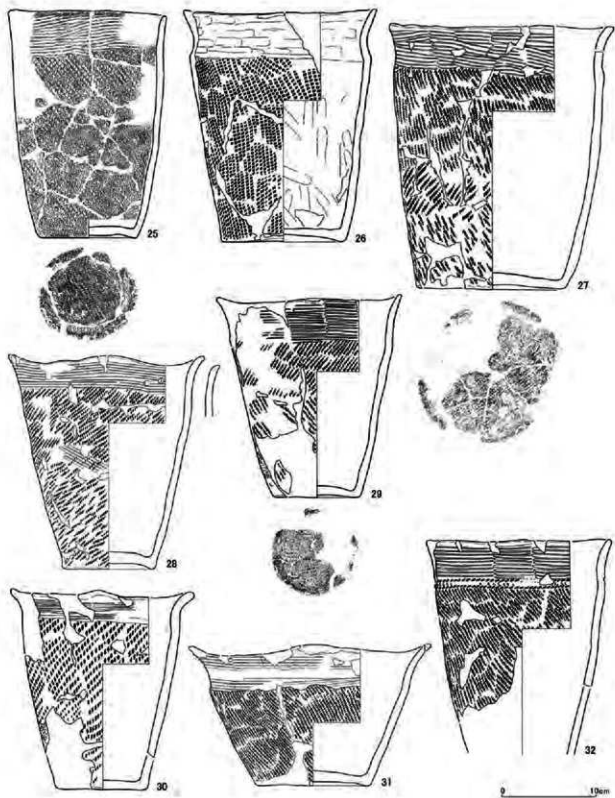
図V-4 包含層土器 II群B類 1a (2)



图V-5 包含层土器 II群B类 1a (3)



図V-6 包含層土器 I群B類 1a (4)



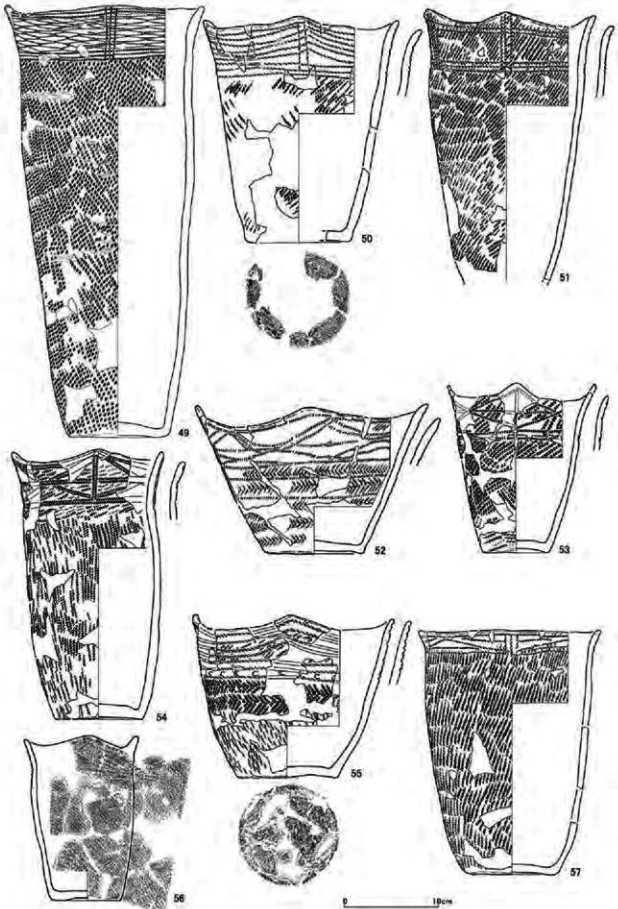
圖V-7 包含層土器 II群B類 1a (5)



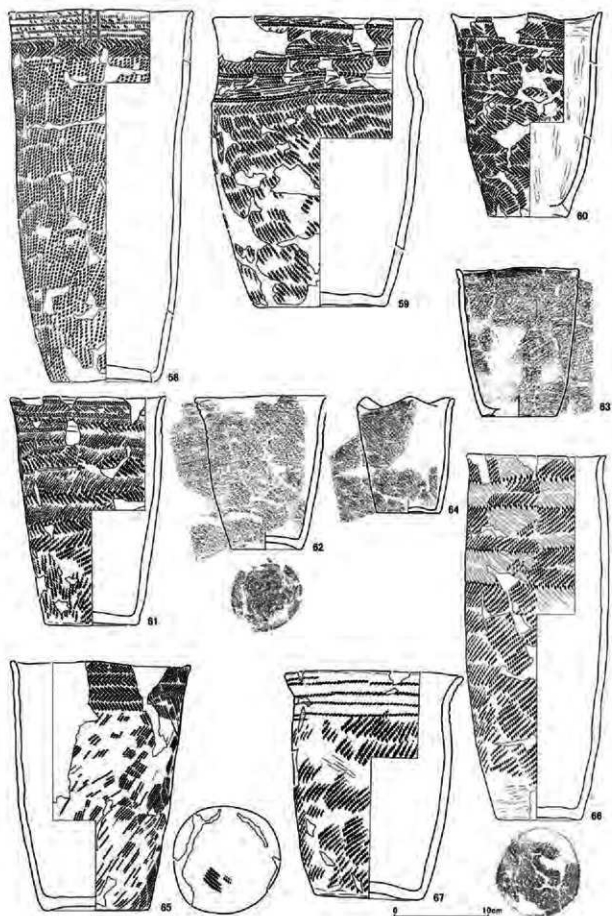
図V-8 包含層土器 II群B類 1a (6)



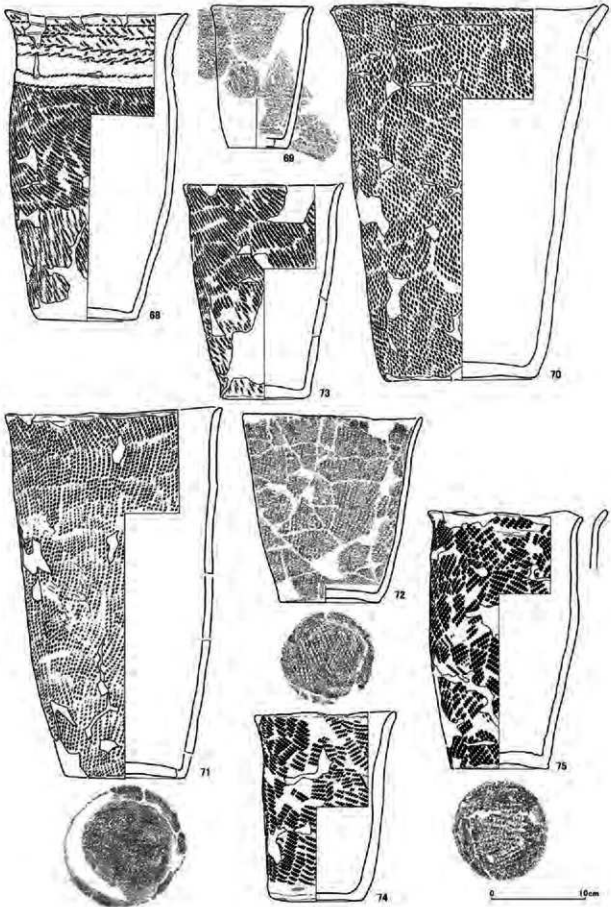
圖V-9 包含層土器 I群B類 1a (7)



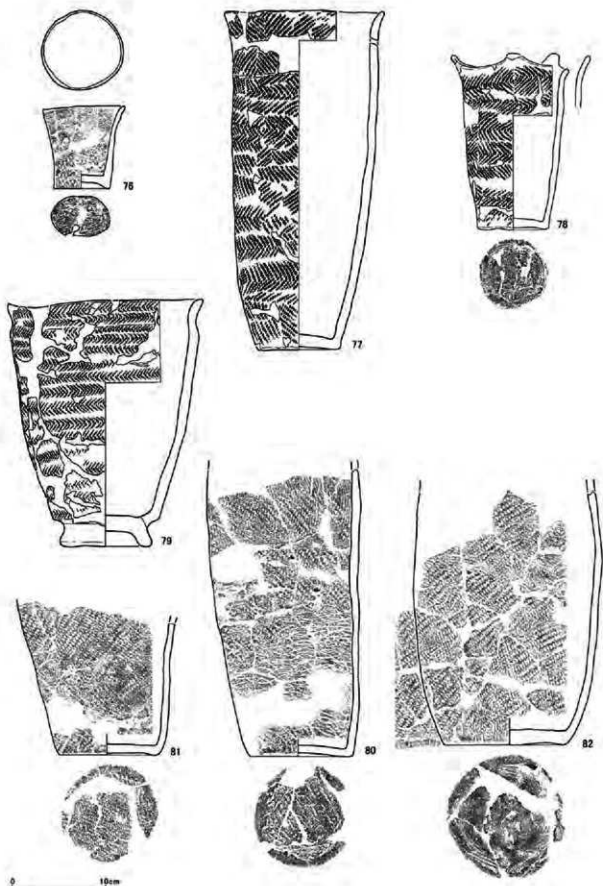
図V-10 包含層土器 II群B類 1a (8)



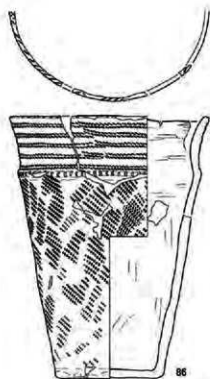
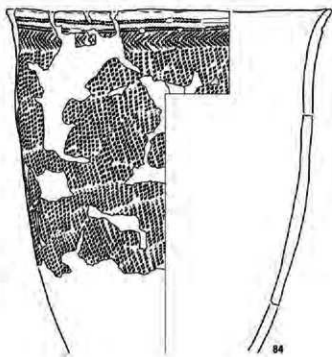
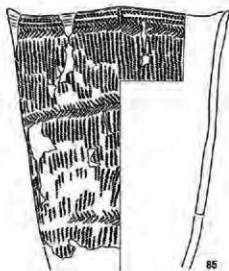
圖V-11 包含層土器 II群B類 1a(9)



図V-12 包含層土器 I群B類 1a (10)

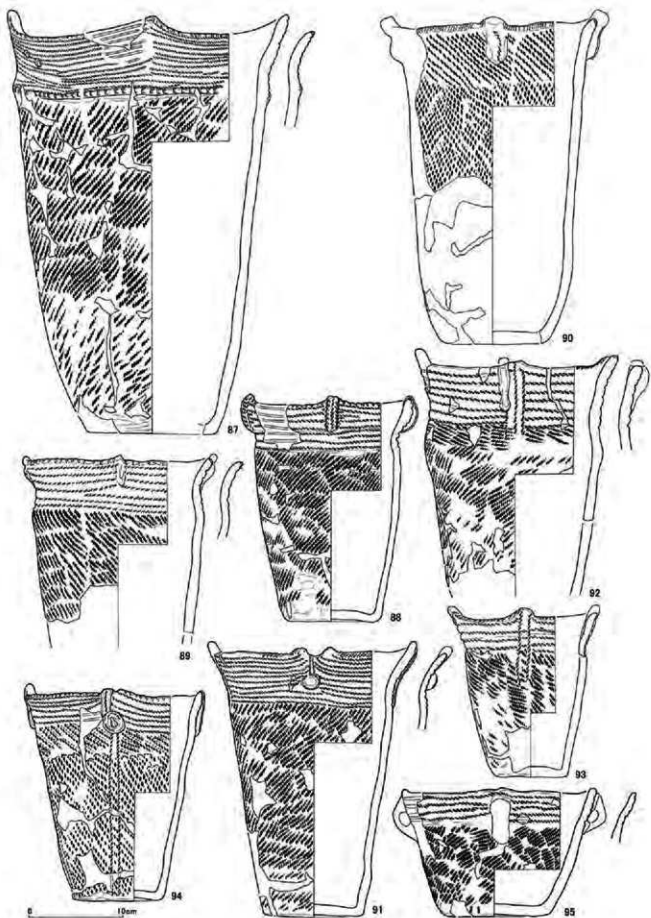


图V-13 包含层土器 I群B類 1a (11)

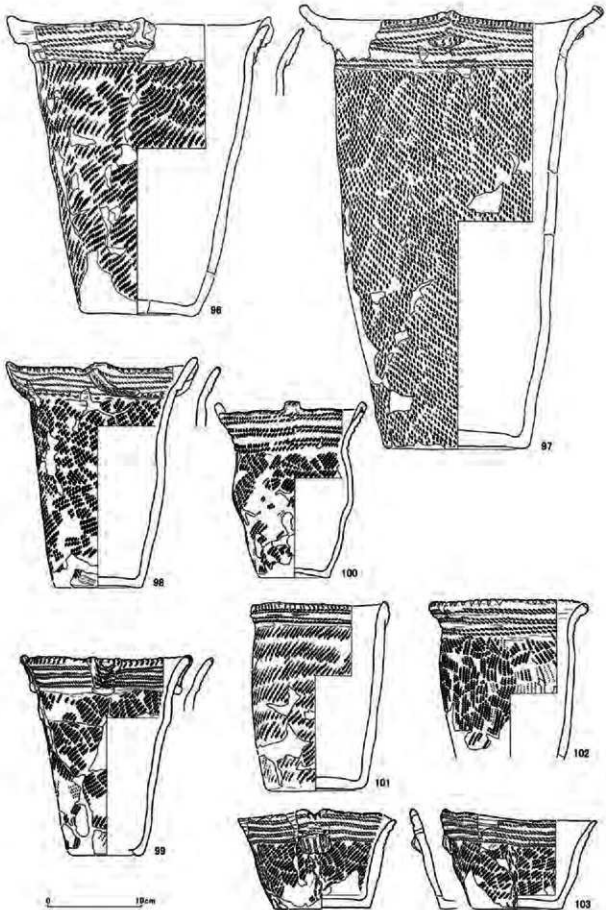


0 10cm

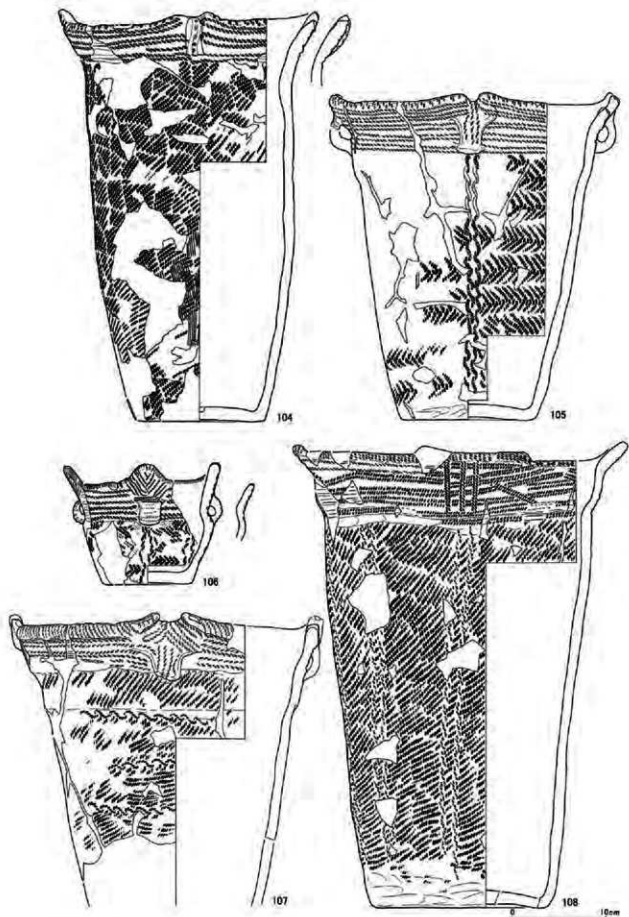
図V-14 包含層土器 I群B類 1a (12)



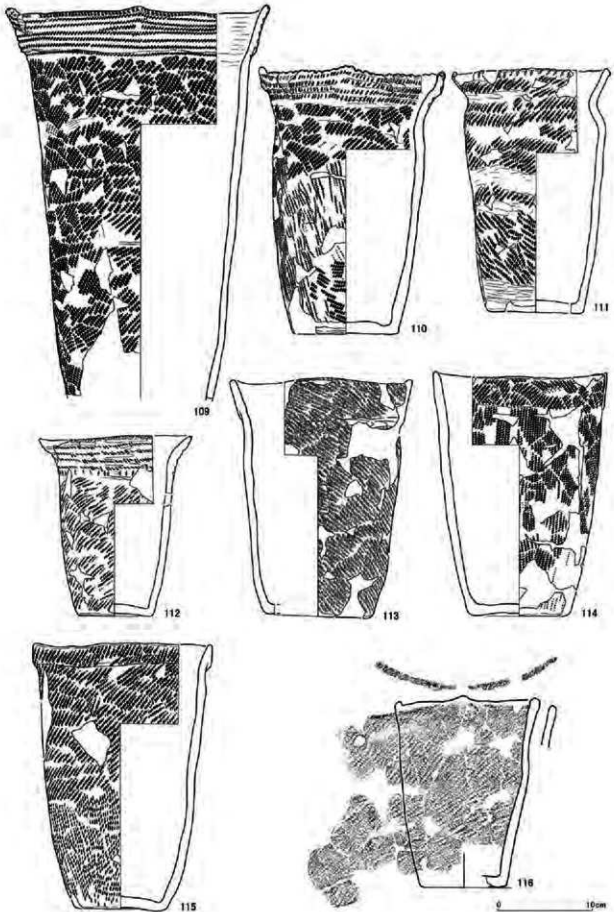
图V-15 包含层土器 I群B类 1a (13)



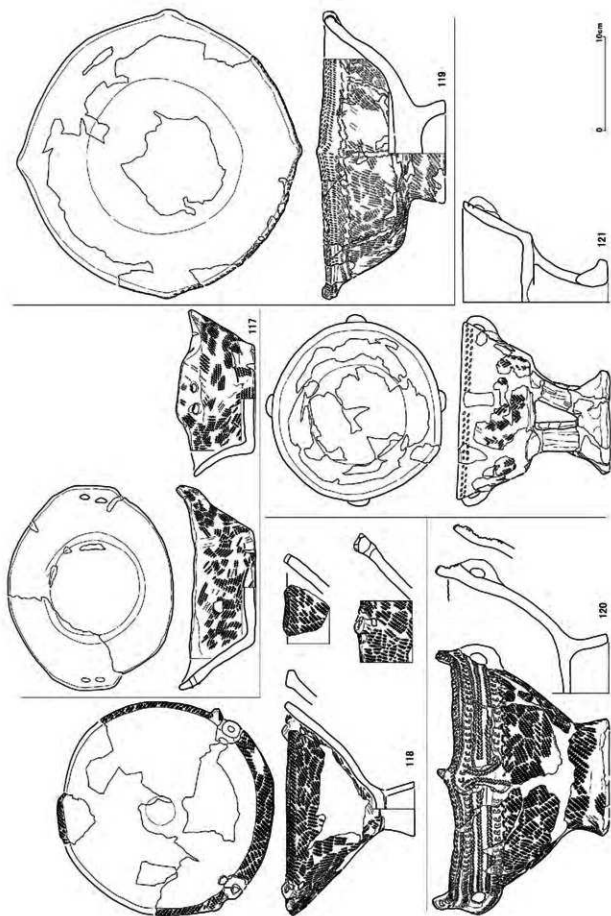
図V-16 包含層土器 I群B類 1a (14)



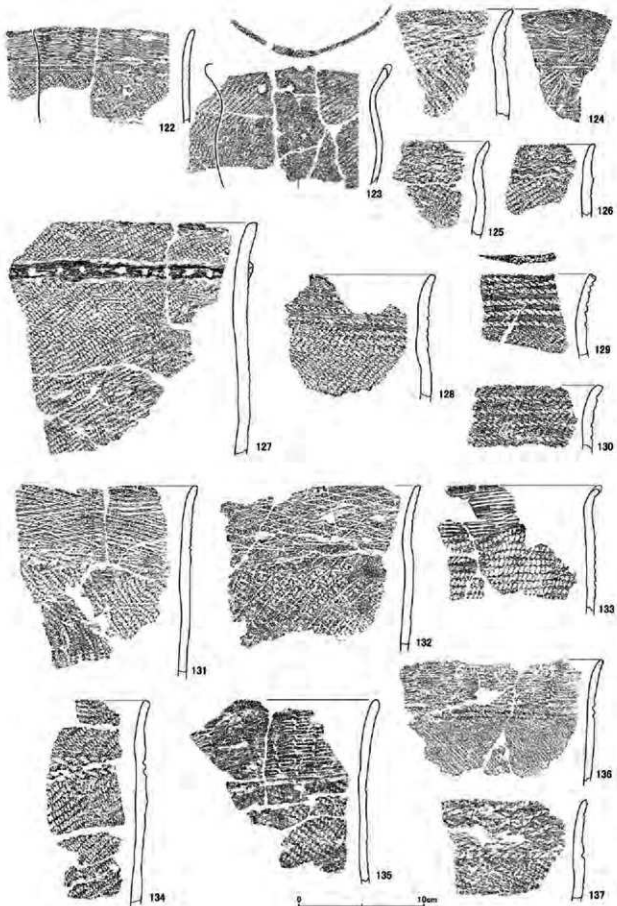
图V-17 包含层土器 I群B類 1a (15)



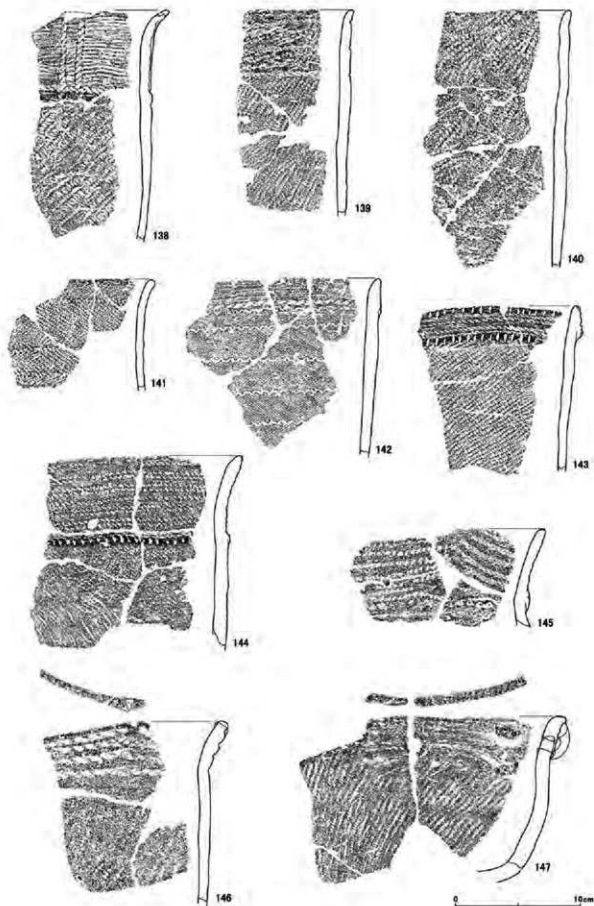
図V-18 包含層土器 I群B類 1a (16)



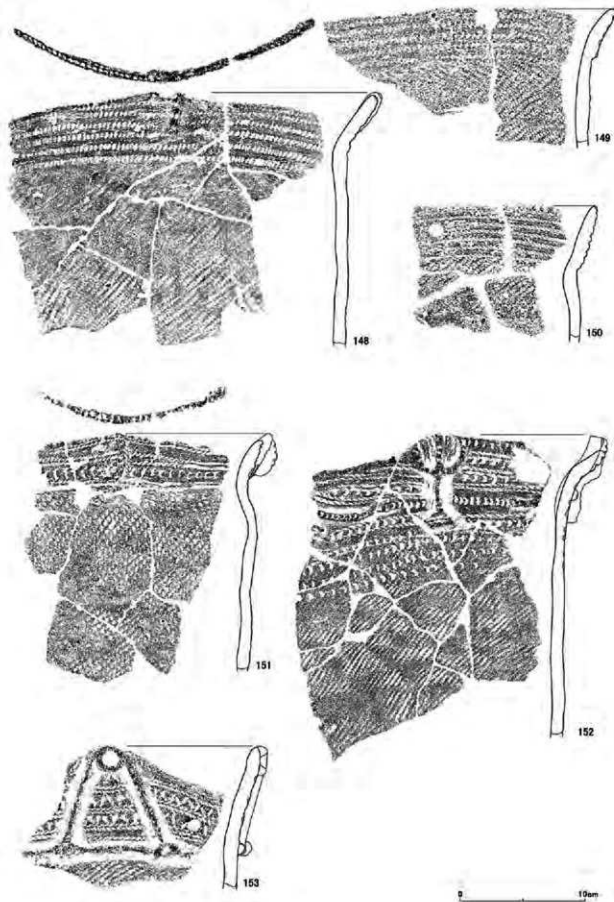
图V-19 包金陶土器 II群B類 1a (17)



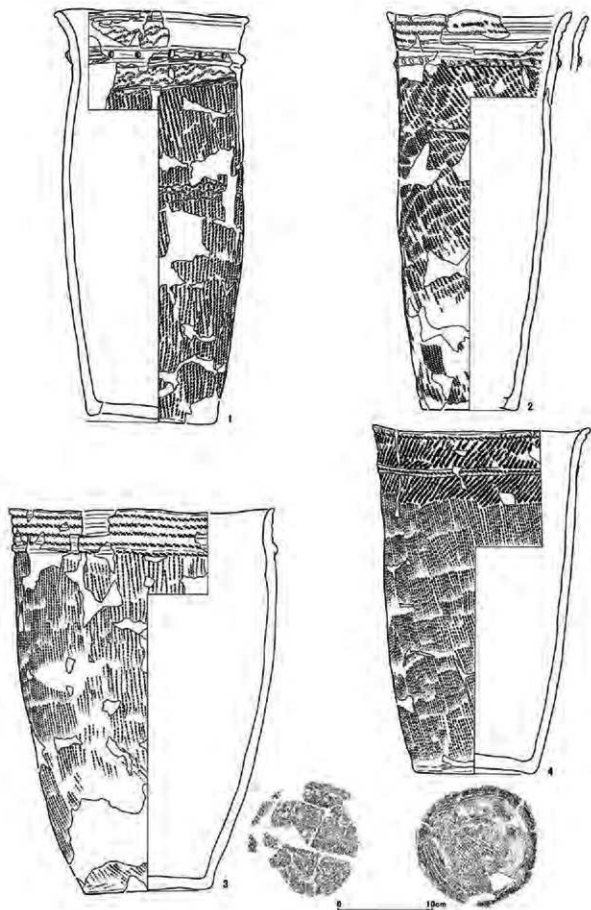
図V-20 包含層土器 I群B類 1a (18)



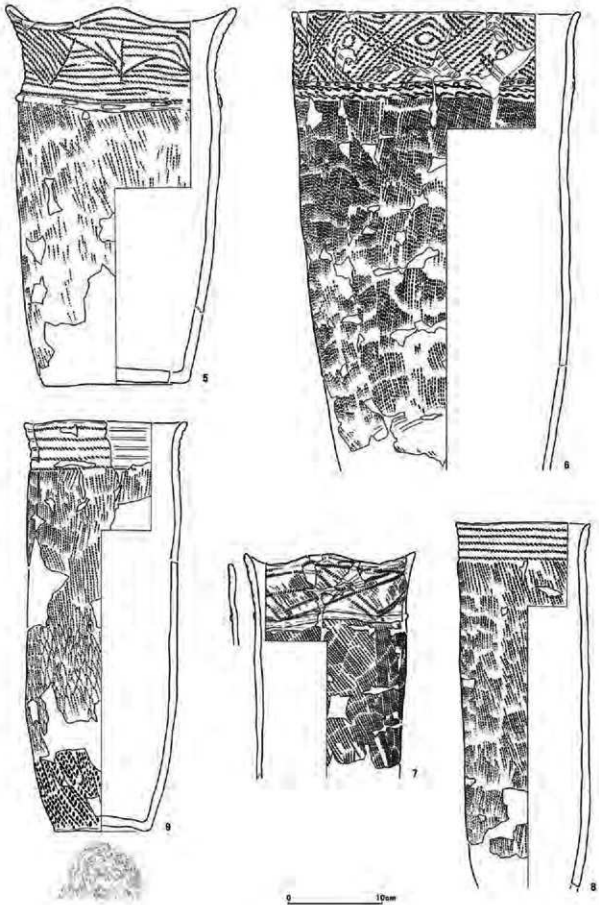
图V-21 包含层土器 I群B类 1a (19)



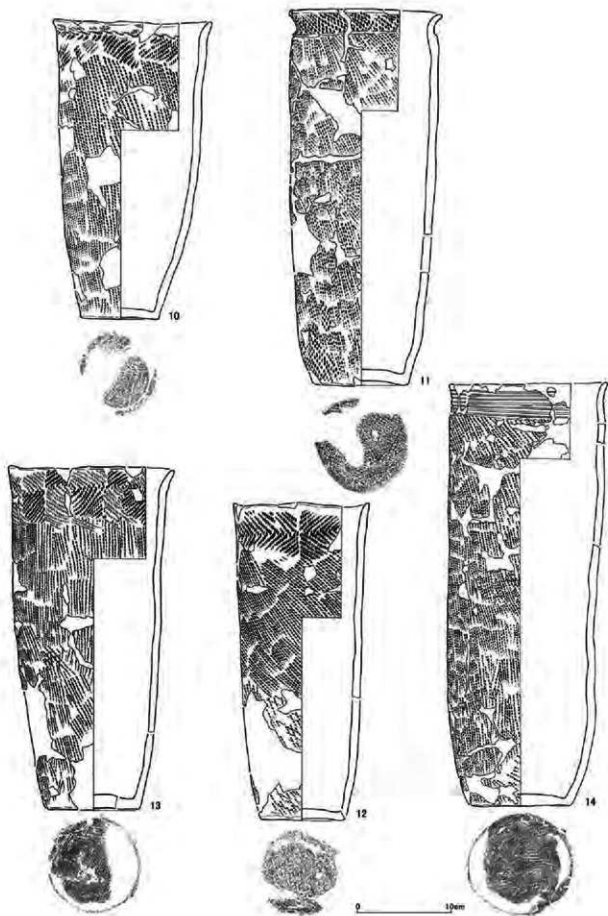
図V-22 包含層土器 I群B類 1a (20)



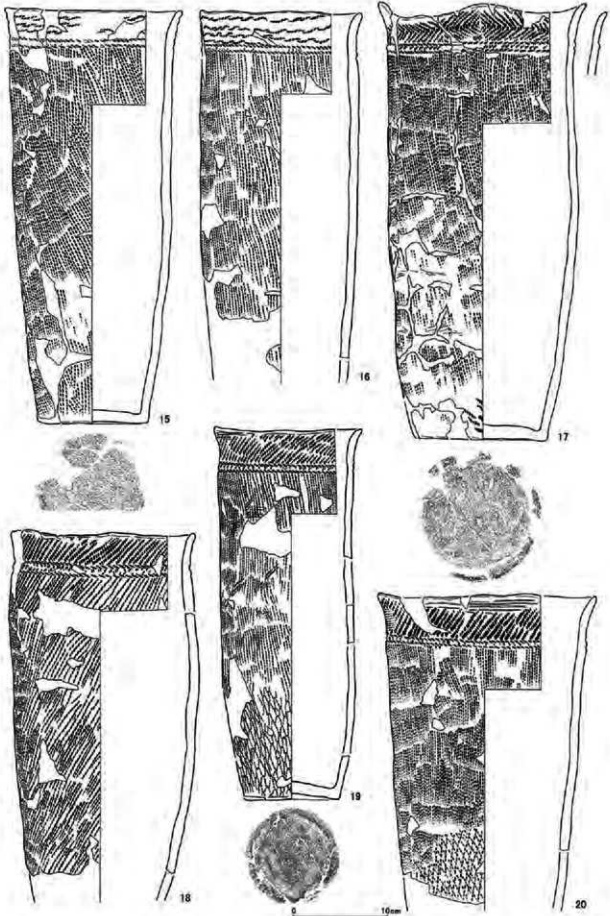
圖V-23 包含層土器 II群B類 2a (1)



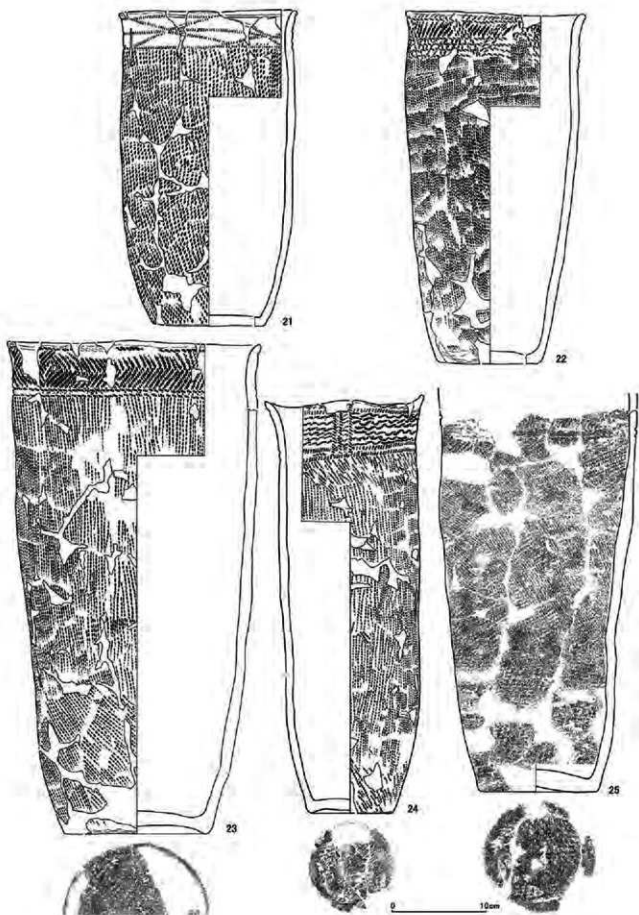
図V-24 包含層土器 II群B類 2a (2)



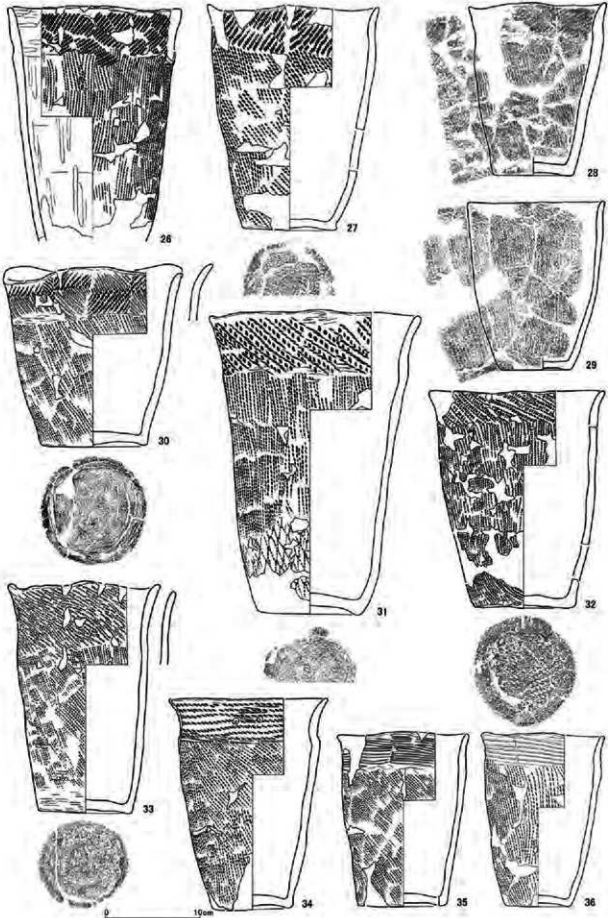
圖V-25 包含層土器 II群B類 2a (3)



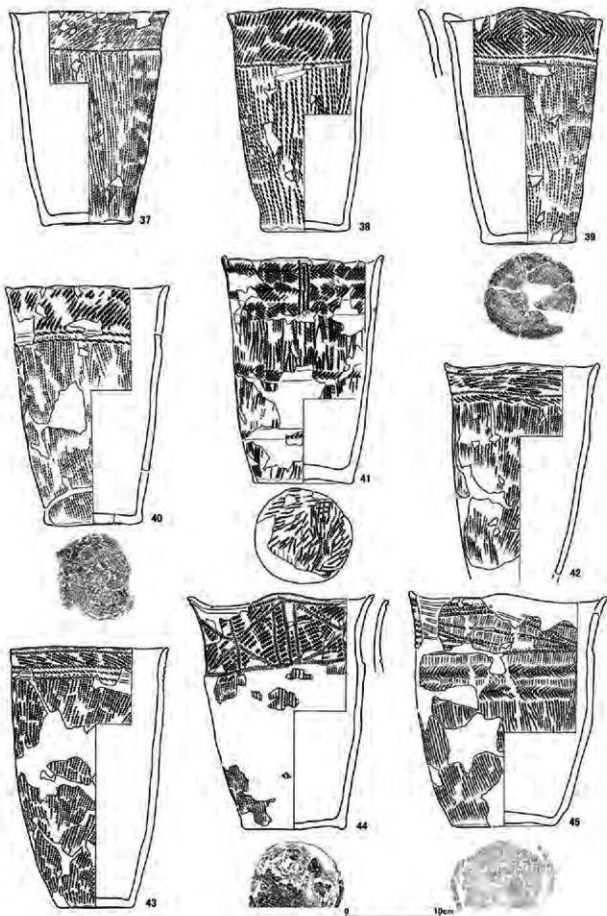
図V-26 包含層土器 II群B類 2a(4)



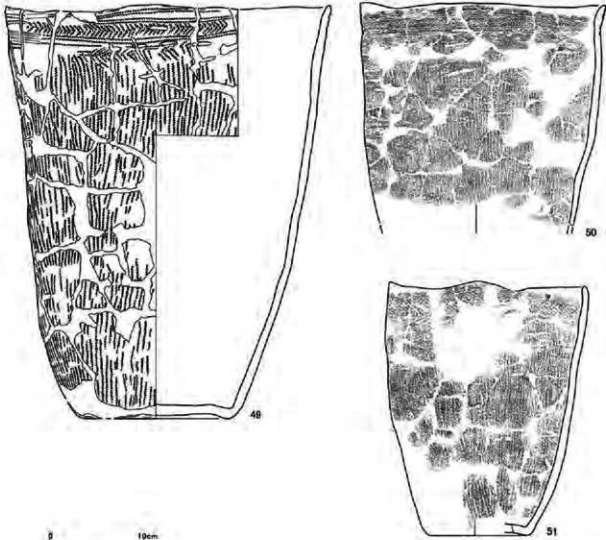
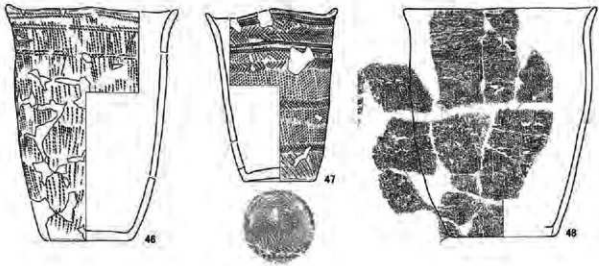
圖V-27 包含層土器 II群B類 2a (5)



図V-28 包含層土器 II群B類 2a(6)

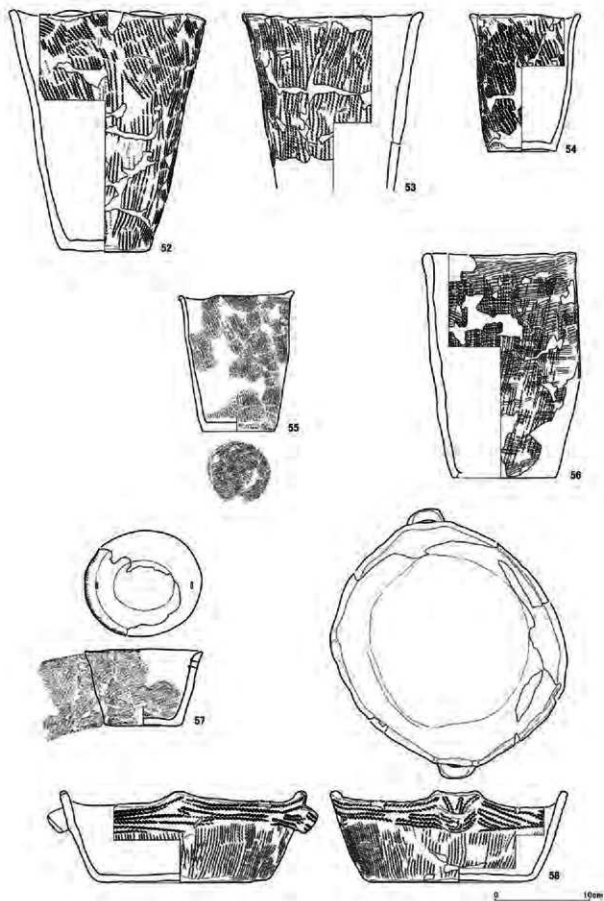


圖V-29 包含層土器 II群B類 2a (7)

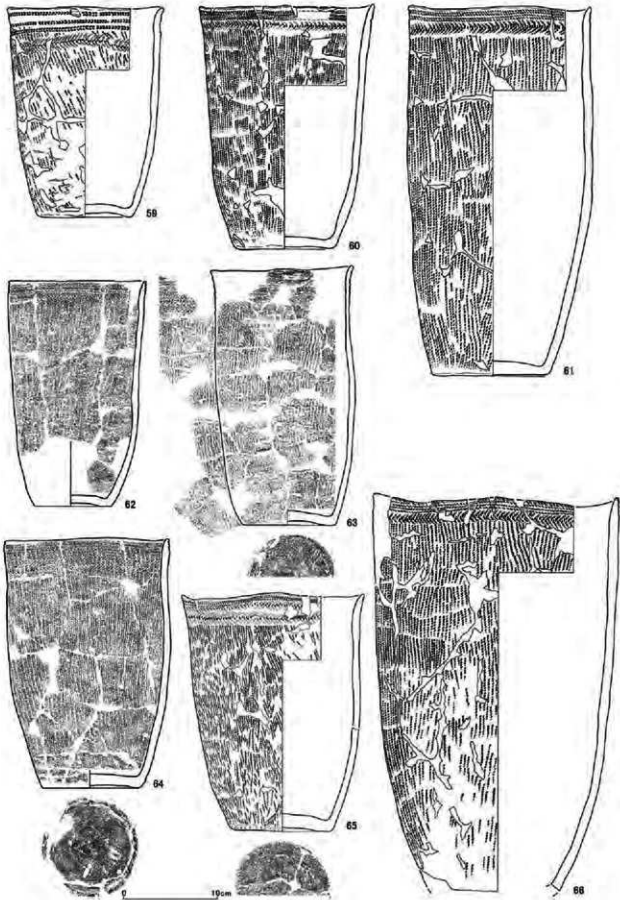


0 10cm

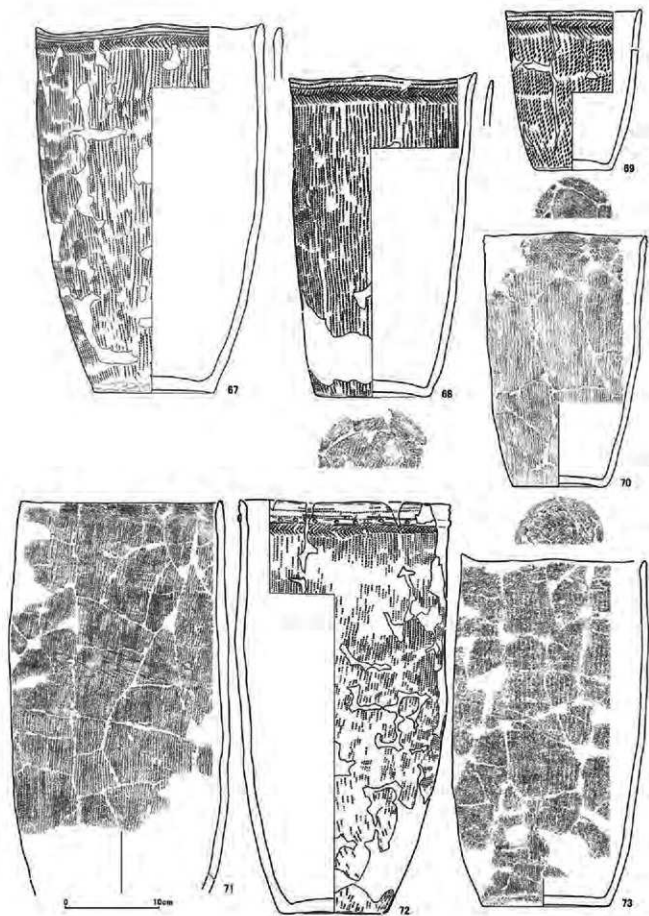
図V-30 包含層土器 I群B類 2a(8)



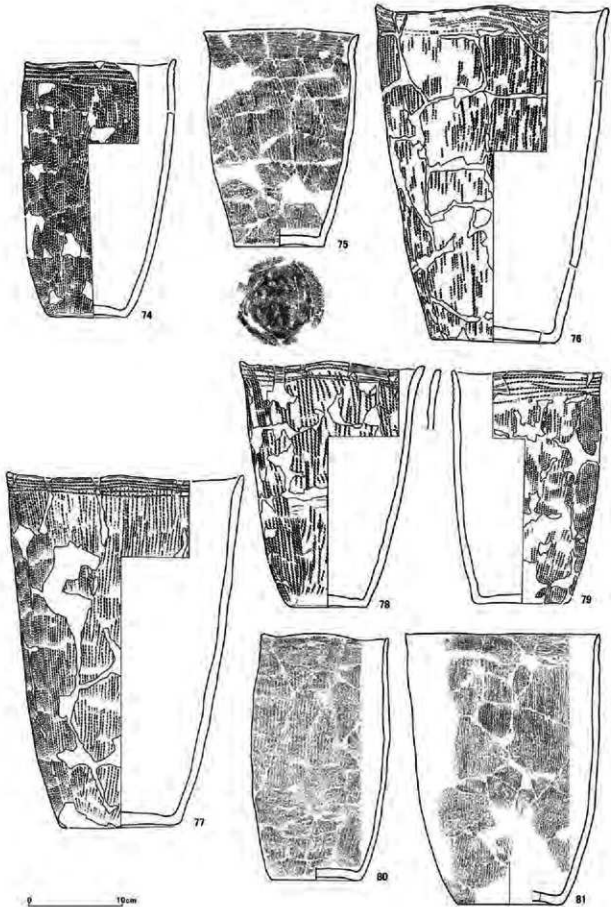
圖V-31 包含層土器 II群B類 2a (9)



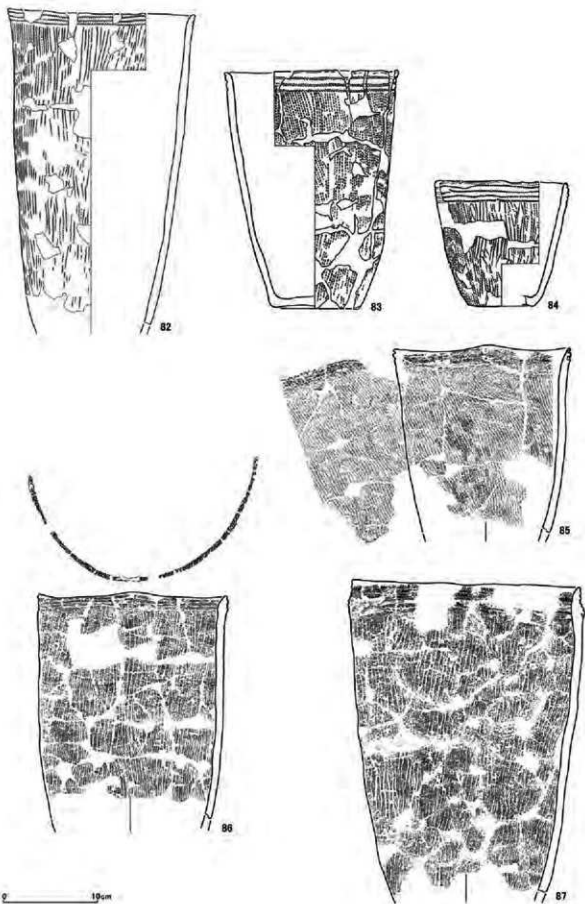
図V-32 包含層土器 I群B類 2a (10)



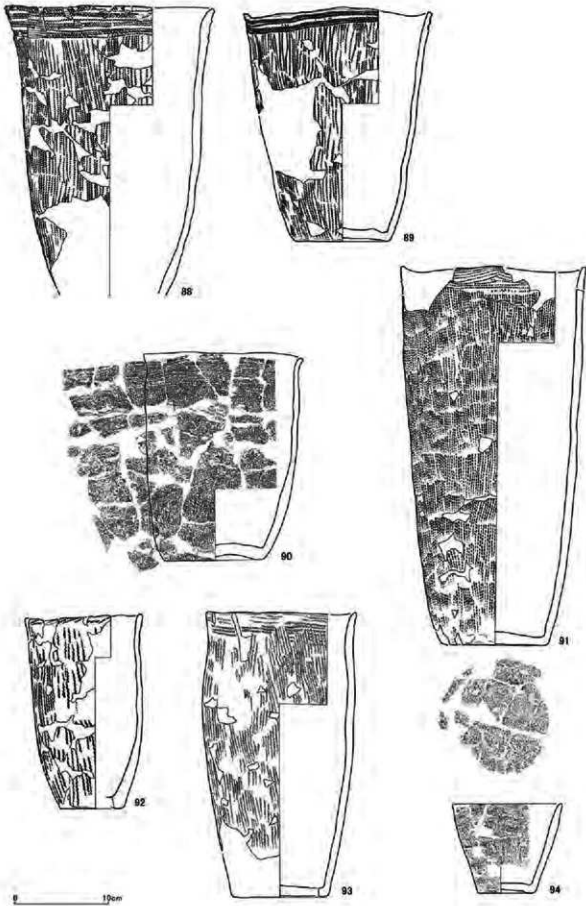
图V-33 包含层土器 I群B類 2a (11)



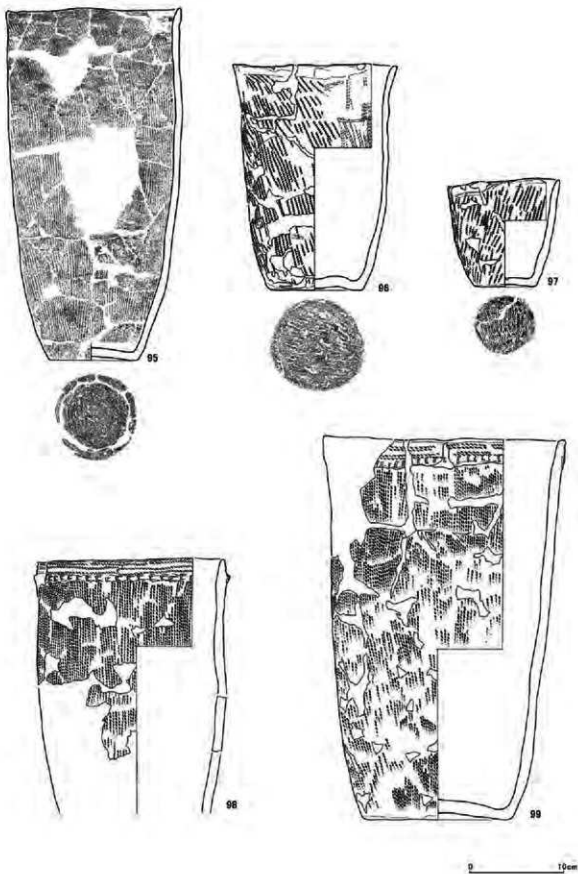
図V-34 包含層土器 I群B類 2a (12)



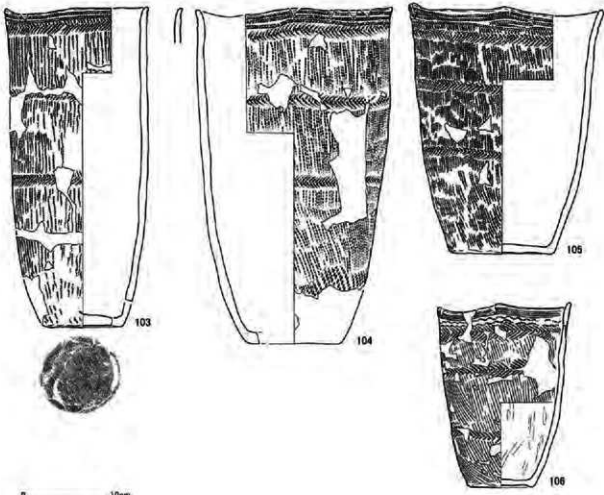
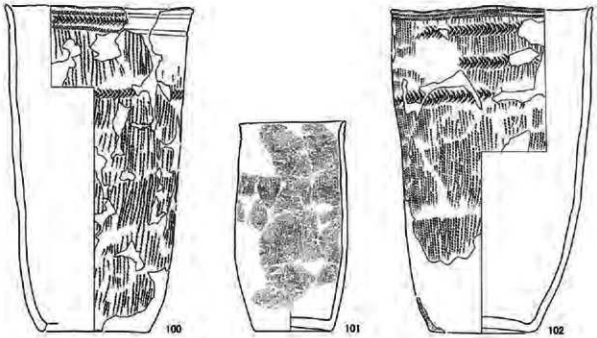
圖V-35 包含層土器 I群B類 2a (13)



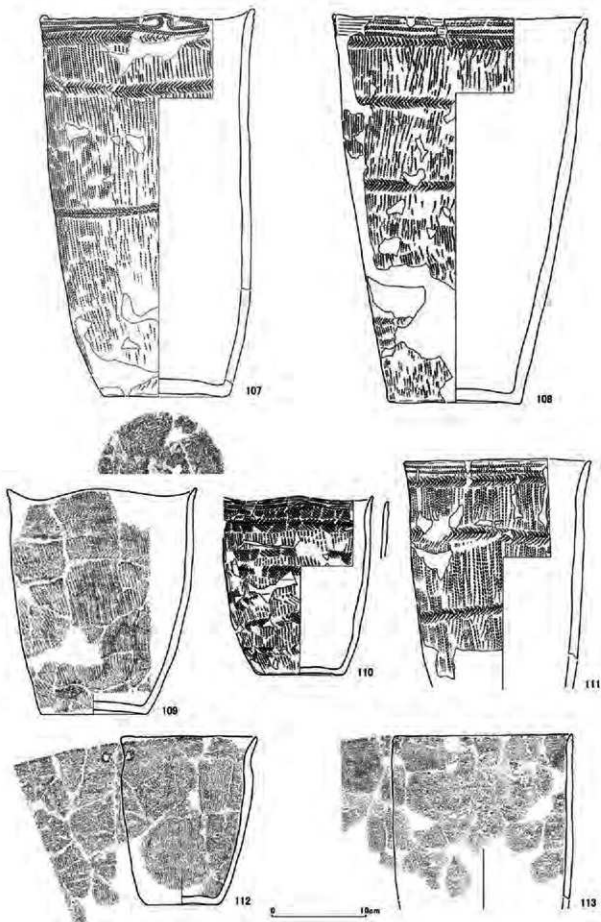
図V-36 包含層土器 I群B類 2a (14)



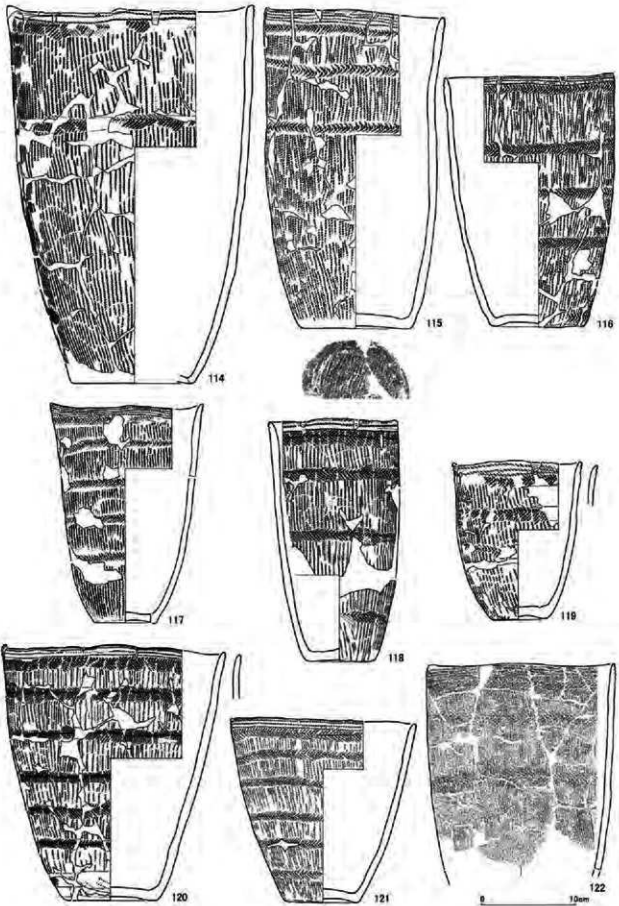
図V-37 包含層土器 I群B類 2a (15)



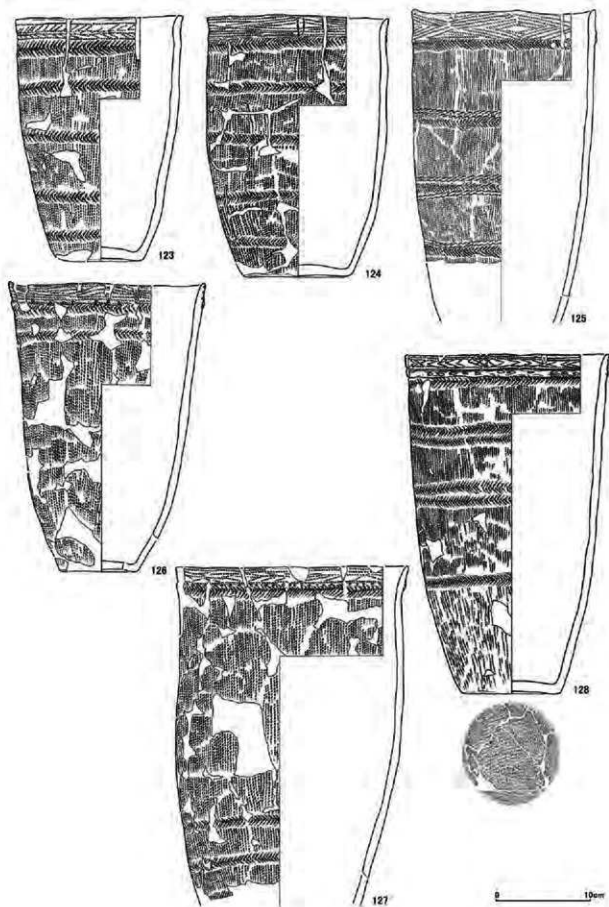
図V-38 包含層土器 I群B類 2a (16)



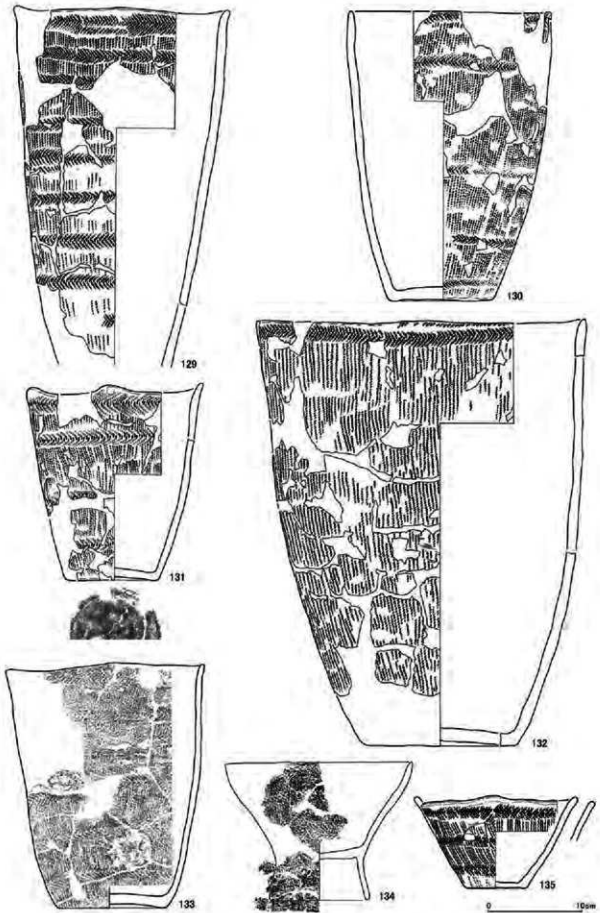
圖V-39 包含層土器 I群B類 2a (17)



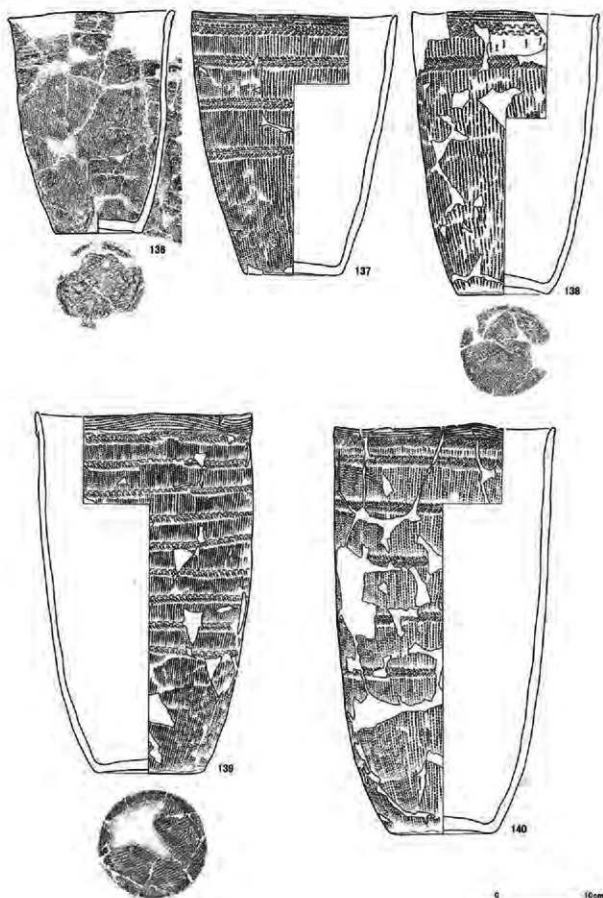
図V-40 包含層土器 I群B類 2a (18)



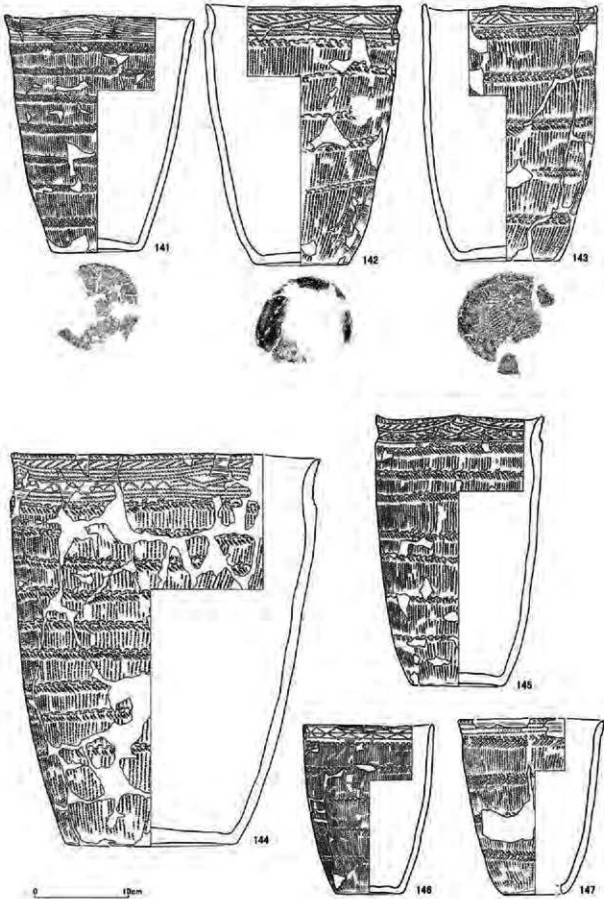
图V-41 包含层土器 I群B类 2a (19)



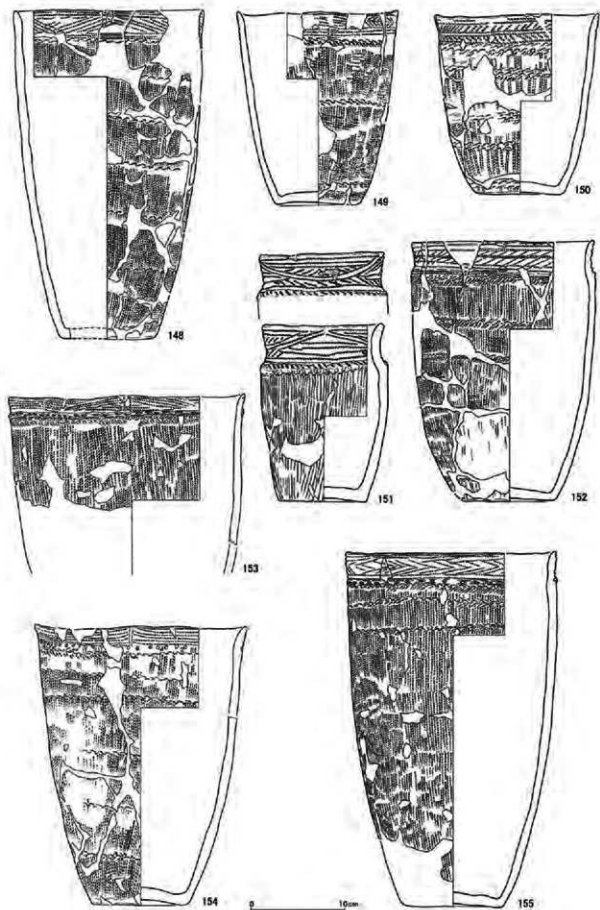
図V-42 包含層土器 I群B類 2a (20)



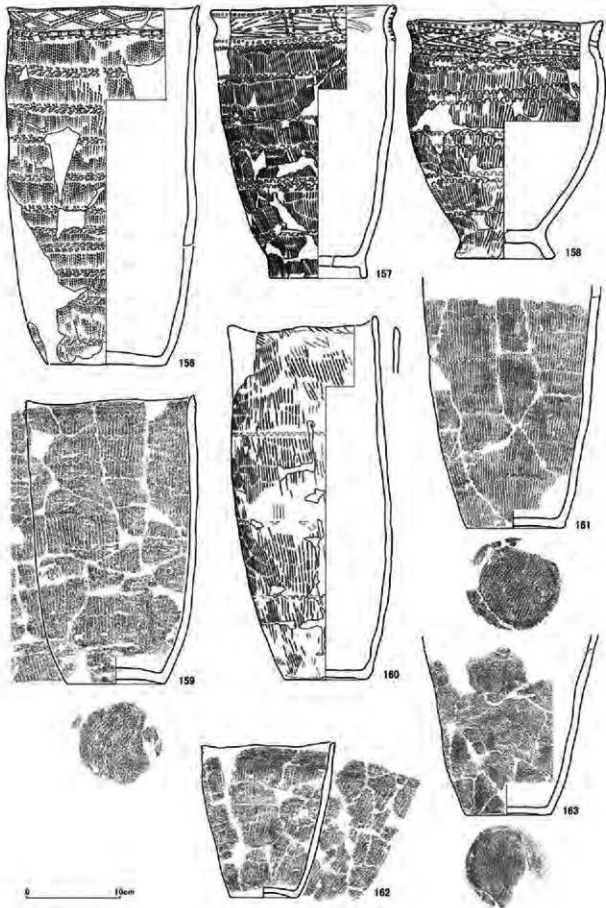
图V-43 包含层土器 I群B类 2a (21)



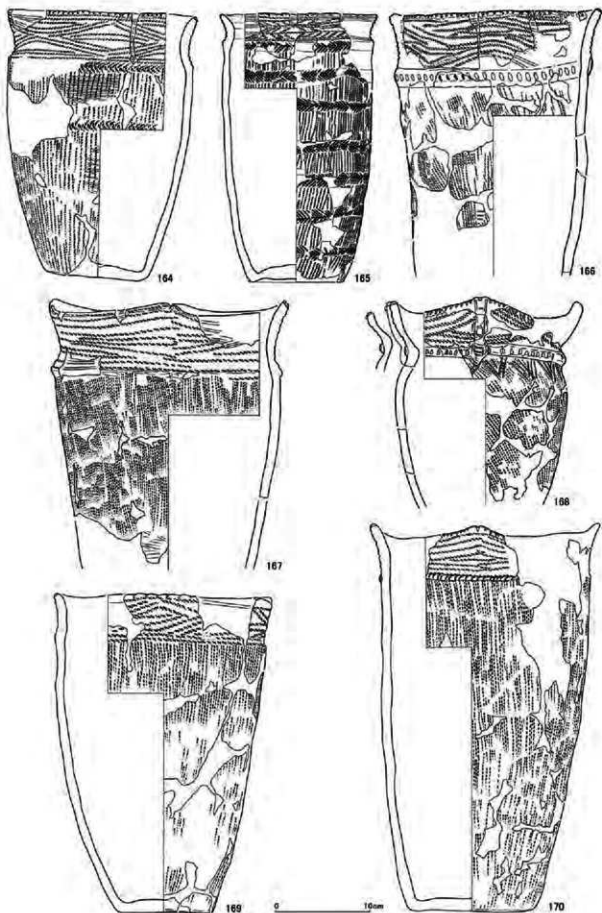
図V-44 包含層土器 I群B類 2a (22)



圖V-45 包含層土器 I群B類 2a (23)



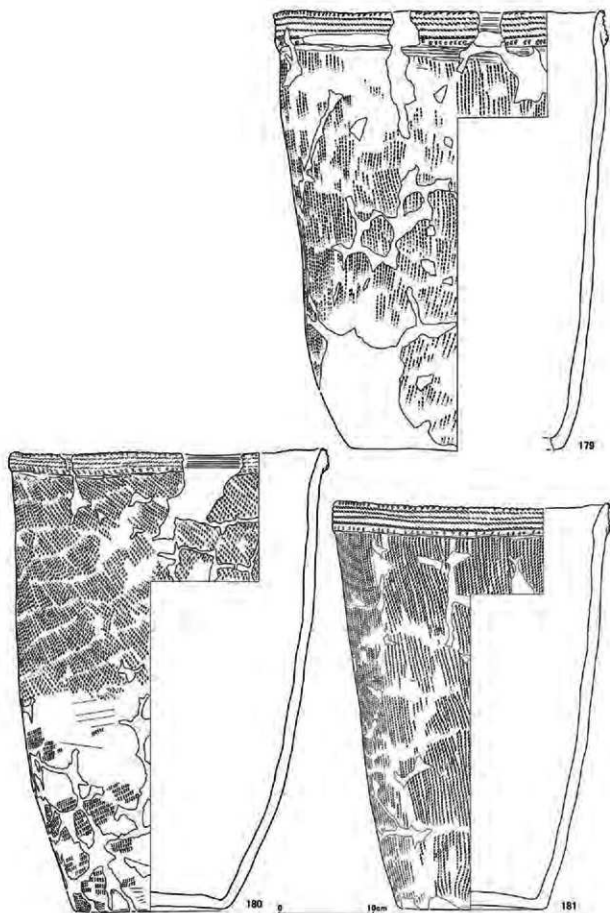
図V-46 包含層土器 I群B類 2a (24)



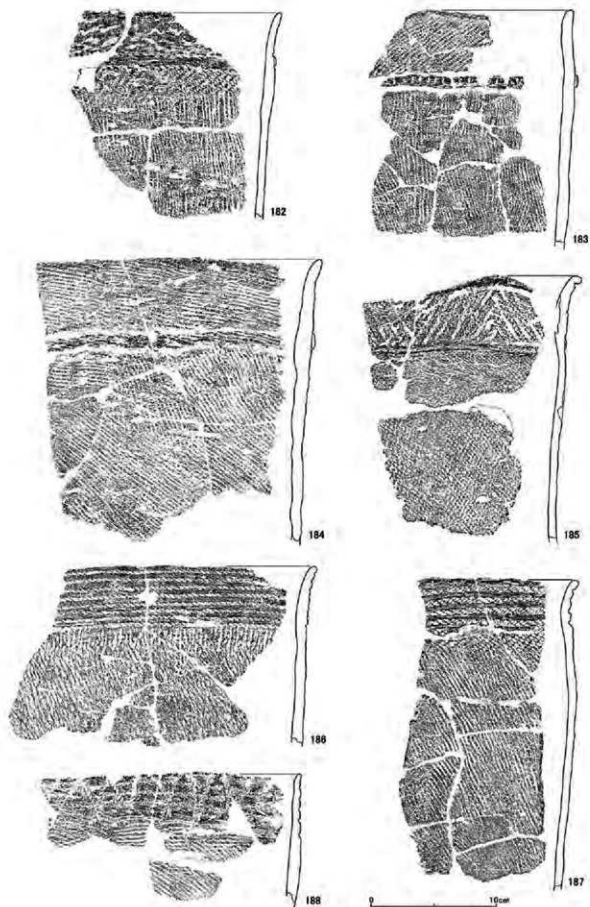
圖V-47 包含層土器 I群B類 2a (25)



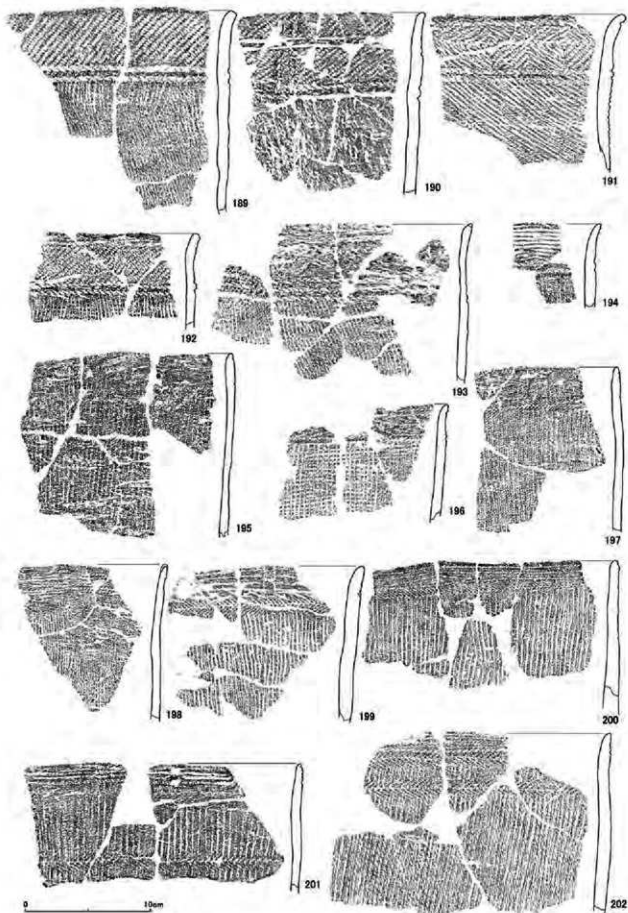
図V-48 包含層土器 I群B類 2a (26)



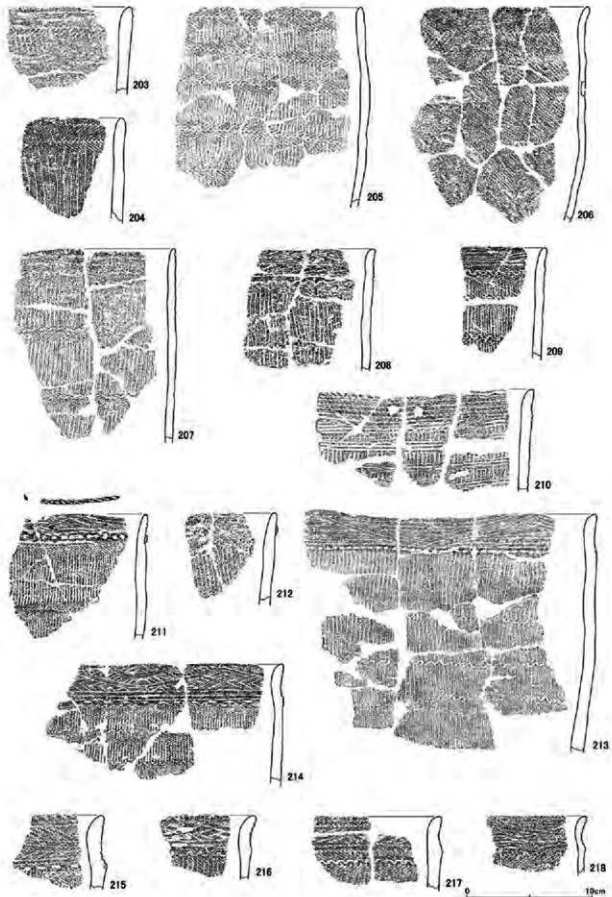
图V-49 包含层土器 I群B类 2a (27)



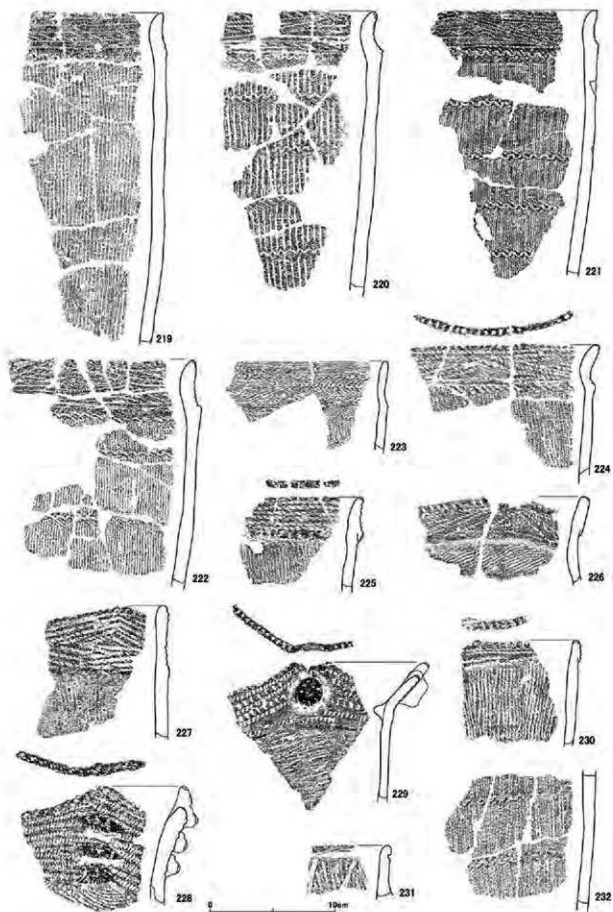
図V-50 包含層土器 I群B類 2a (28)



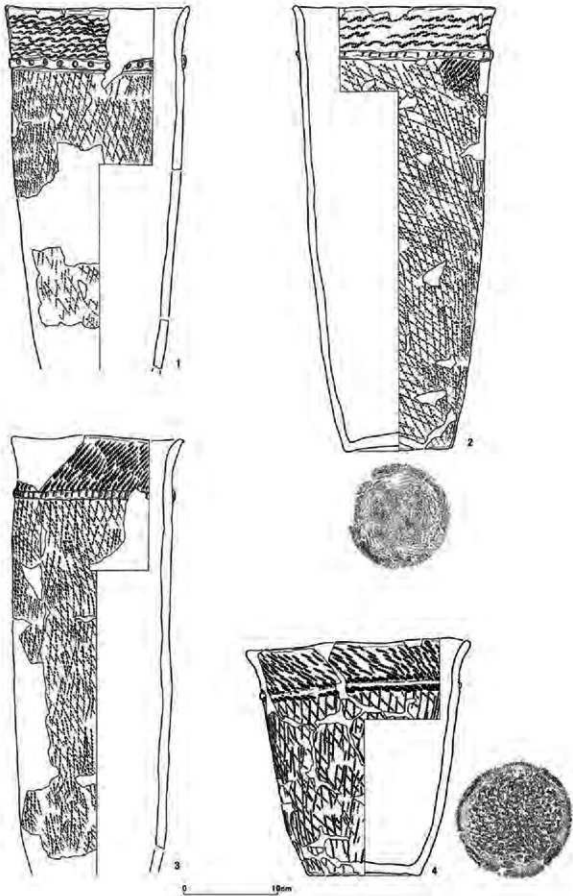
圖V-51 包含層土器 I群B類 2a (29)



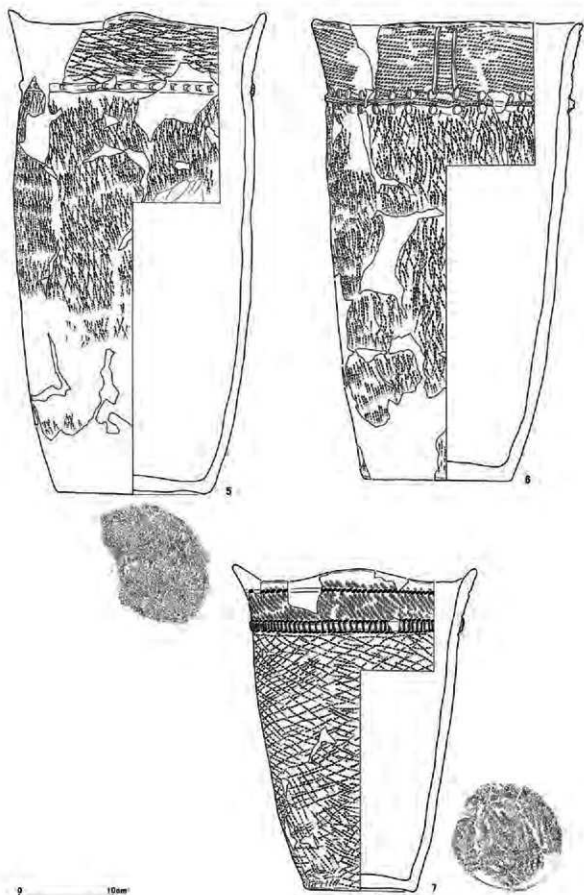
図V-52 包含層土器 I群B類 2a (30)



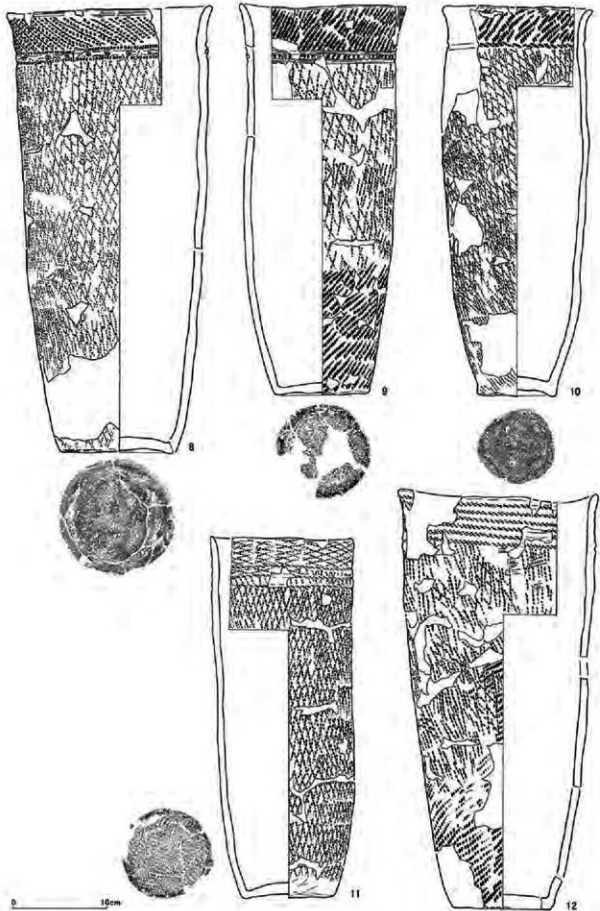
圖V-53 包含層土器 I群B類 2a (31)



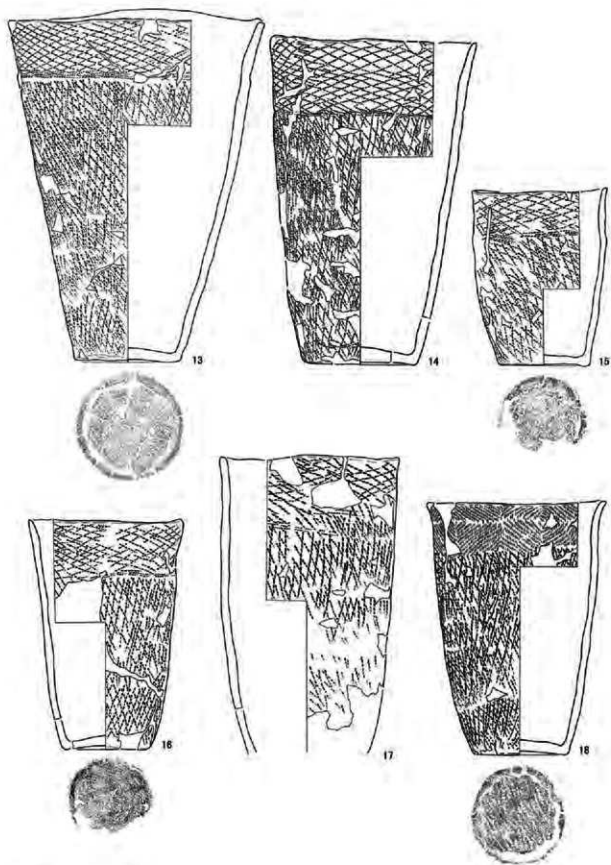
図V-54 包含層土器 I群B類 2d (1)



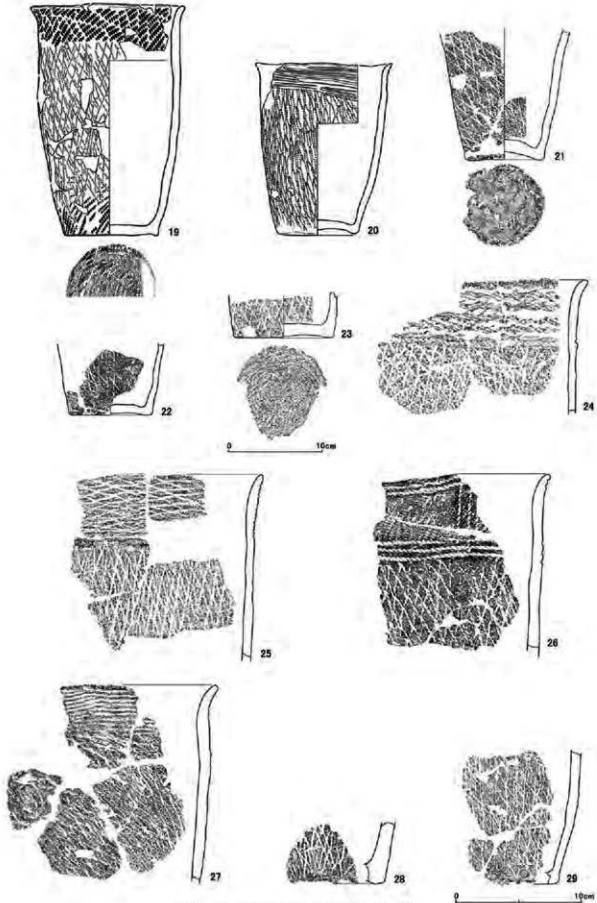
圖V-55 包含層土器 I群B類 2d (2)



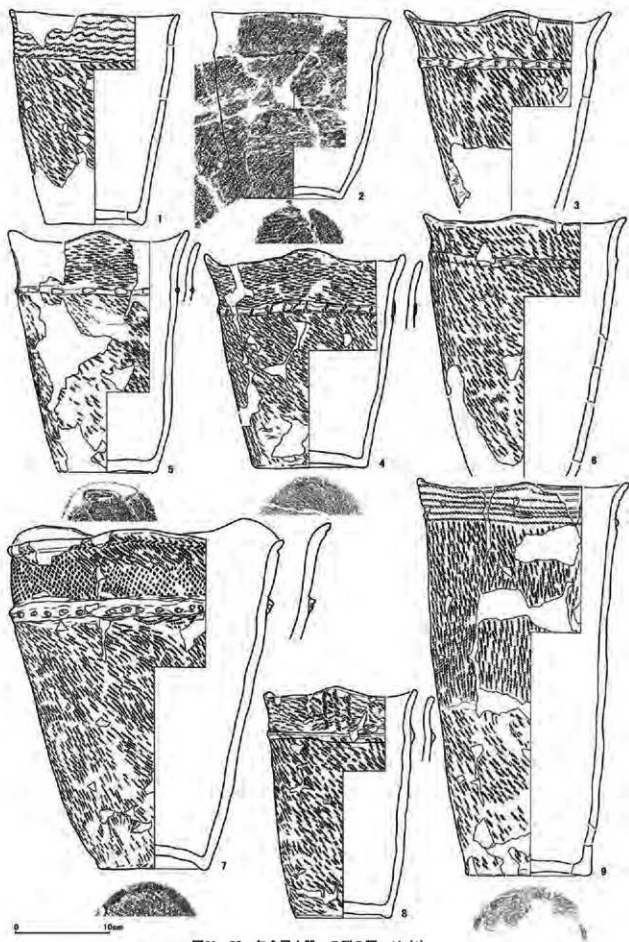
図V-56 包含層土器 II群B類 2d (3)



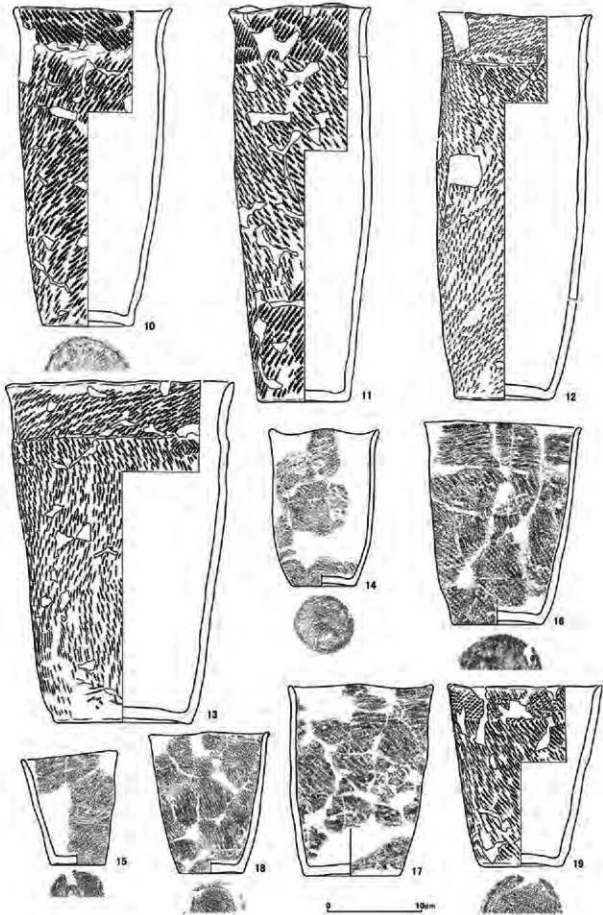
图V-57 包含层土器 II群B类 2d (4)



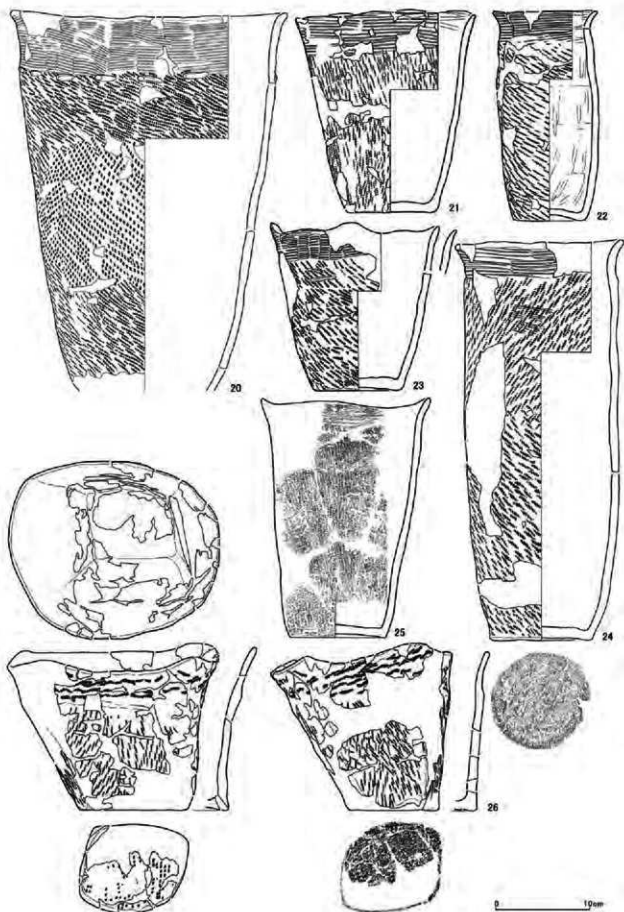
図V-58 包含層土器 II群B類 2d (5)



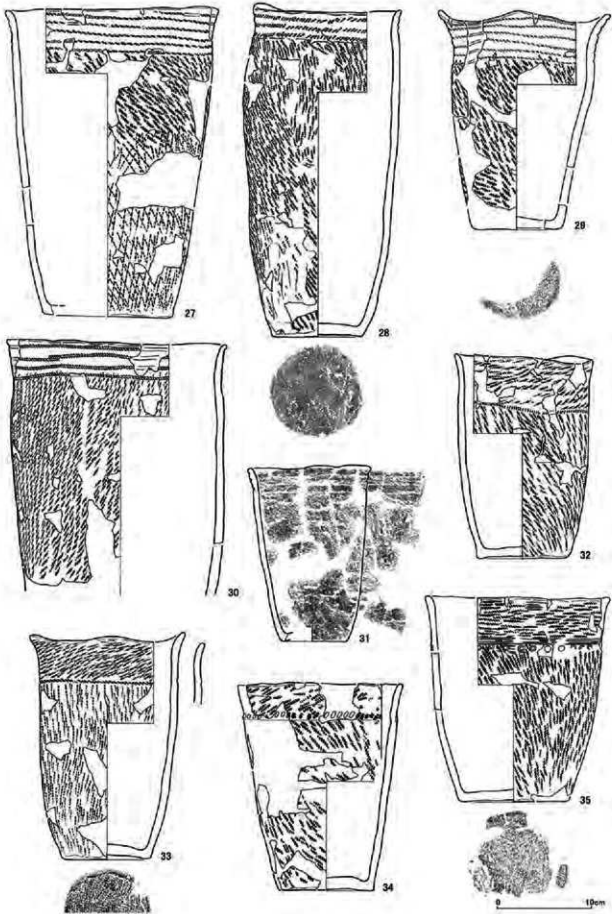
图V-59 包含层土器 II群B类 1f (1)



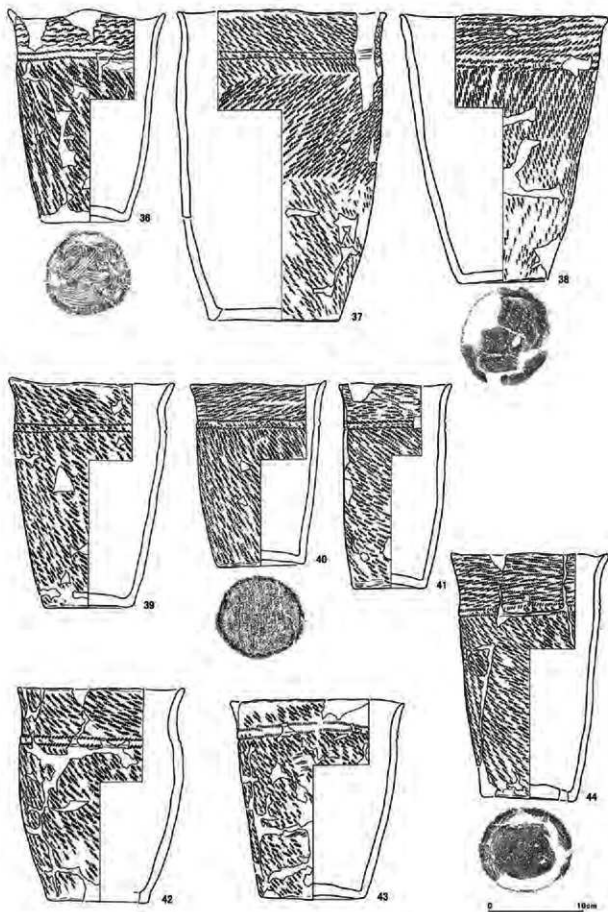
図V-60 包含層土器 II群B類 1f (2)



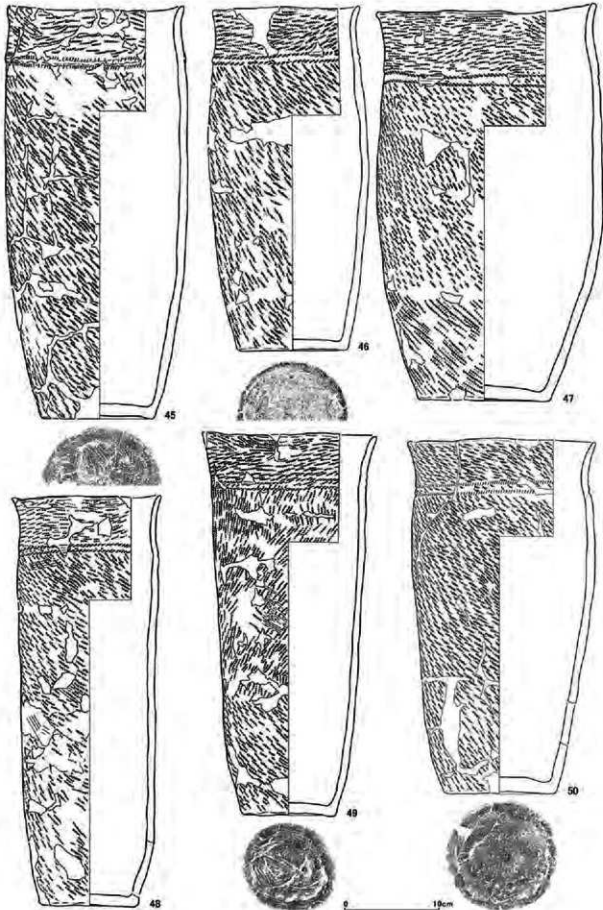
圖V-61 包含層土器 II群B類 1f (3)



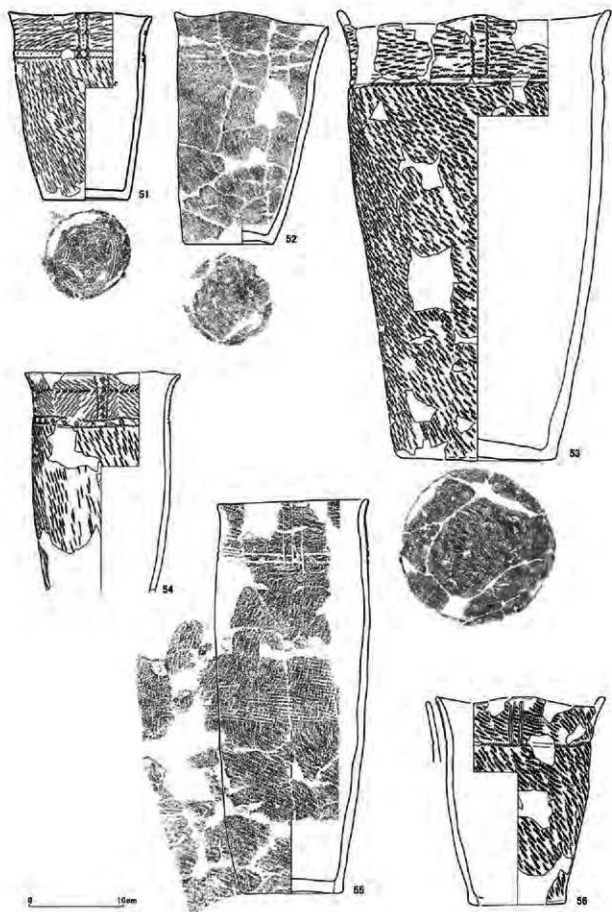
図V-62 包含層土器 II群B類 1f (4)



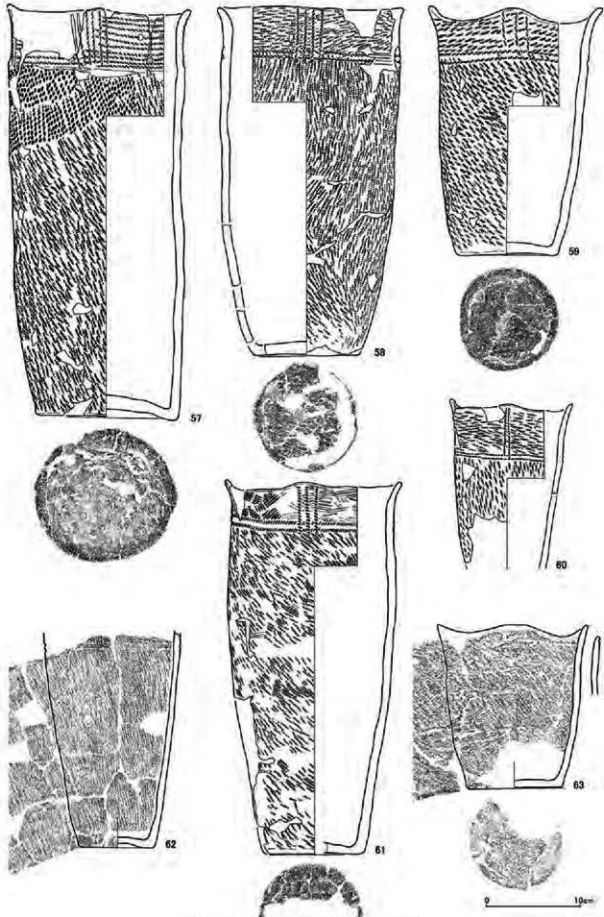
图V-63 包含层土器 II群B类 1f(5)



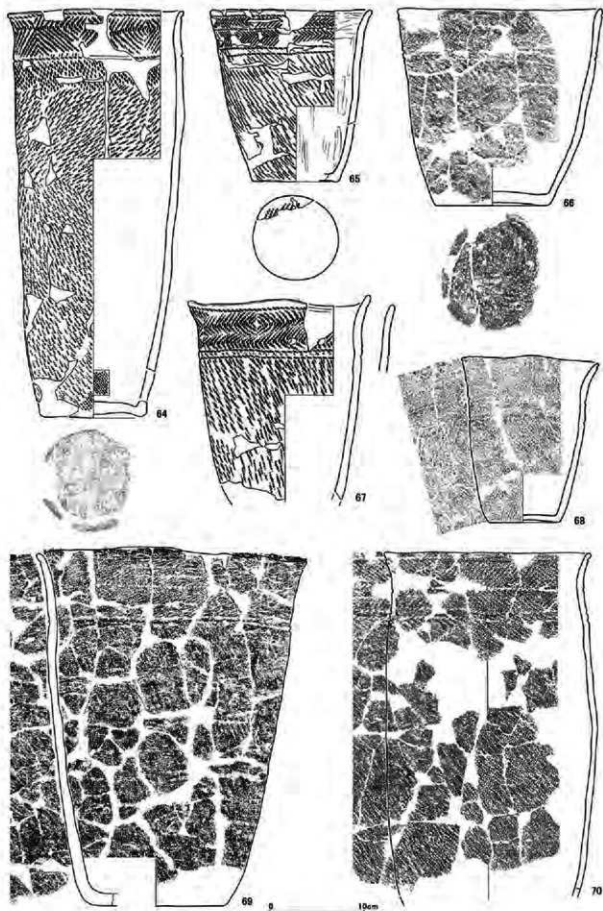
図V-64 包含層土器 II群B類 1f (6)



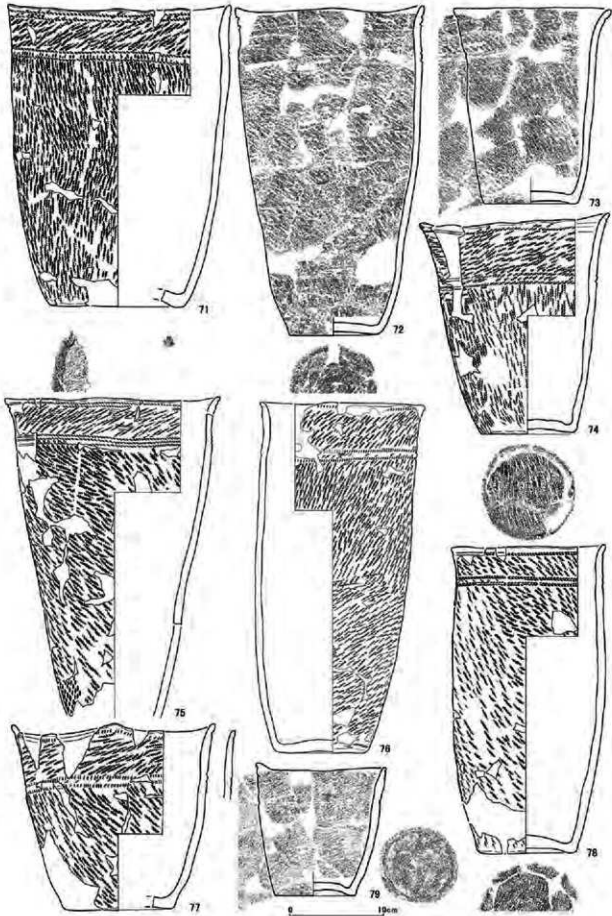
图V-65 包含层土器 II群B类 1f (7)



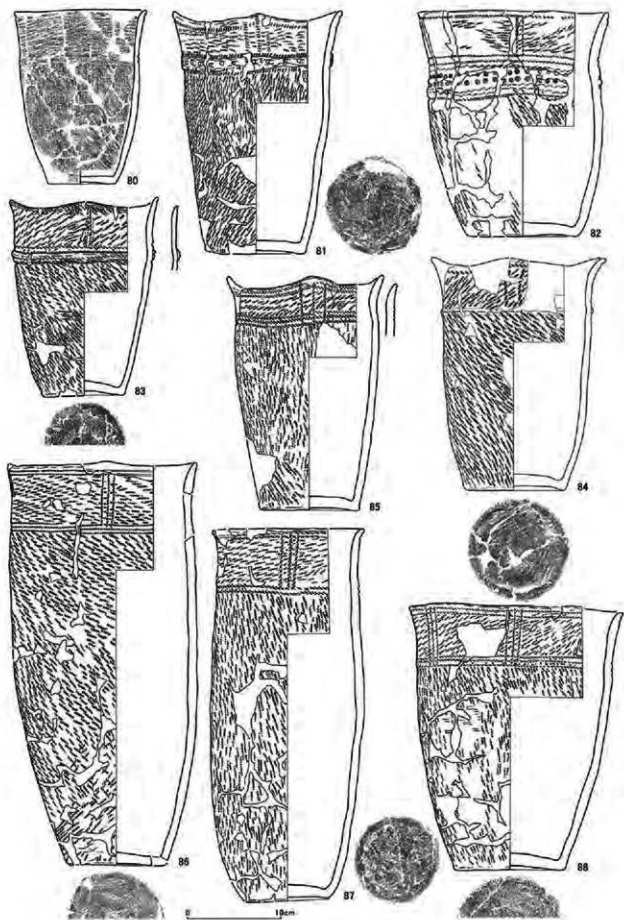
図V-66 包含層土器 II群B類 1f (8)



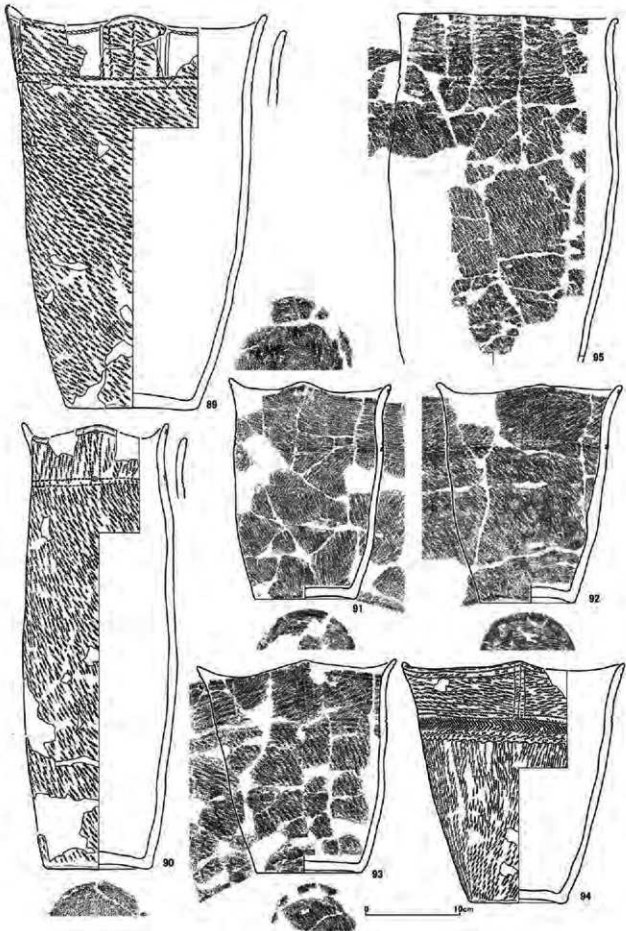
图V-67 包含层土器 II群B類 1f(9)



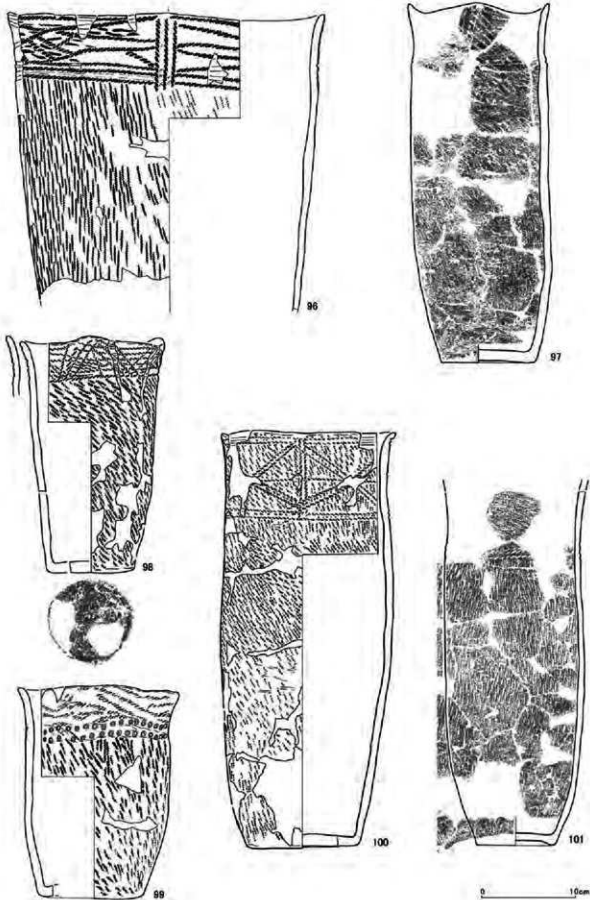
図V-68 包含層土器 II群B類 1f (10)



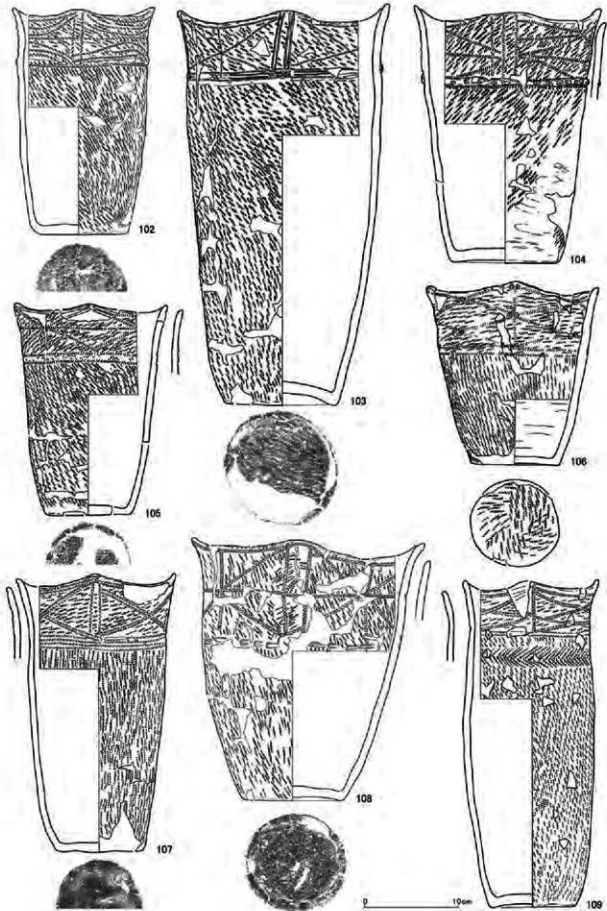
图V-69 包含层土器 II群B類 1f (11)



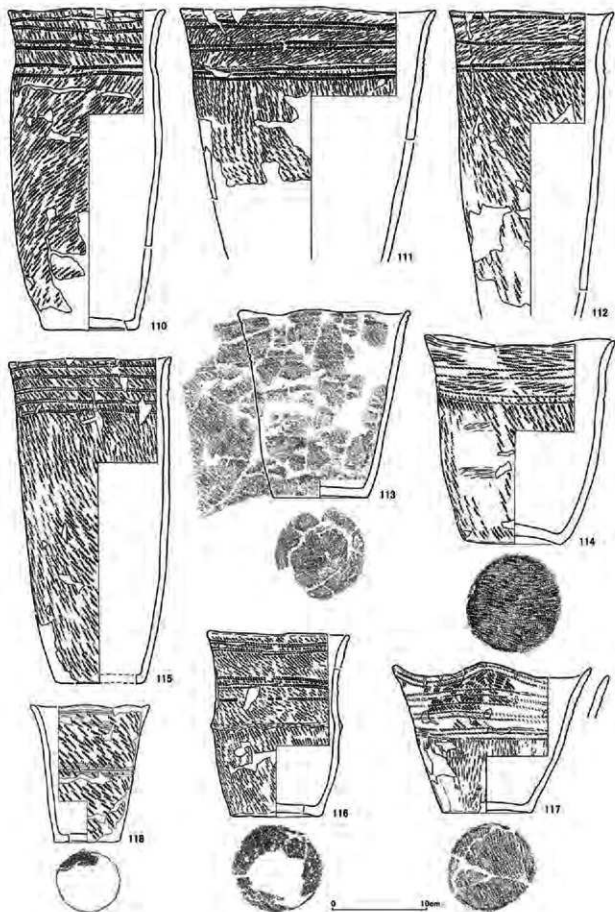
図V-70 包含層土器 II群B類 1f (12)



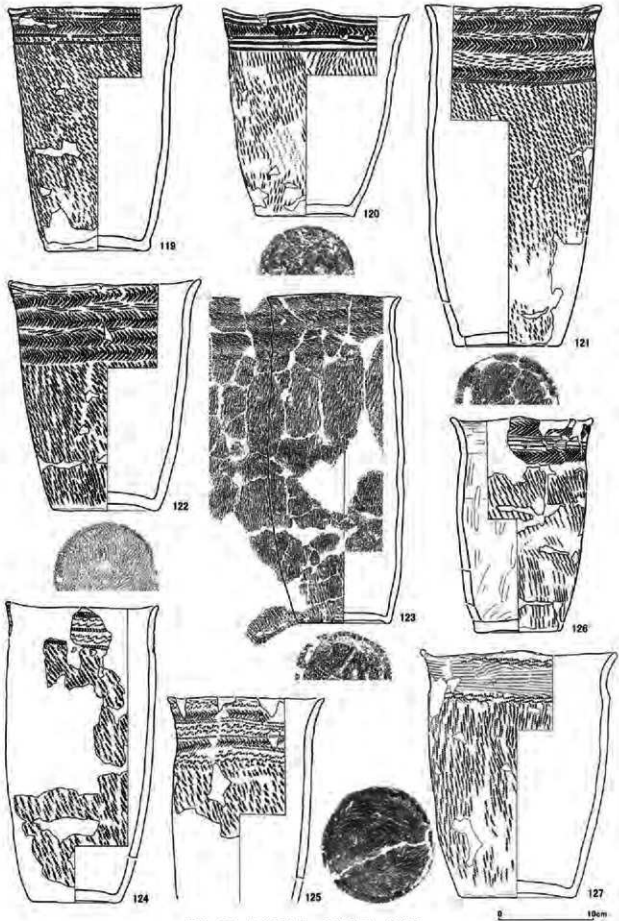
图V-71 包含层土器 II群B類 1f (13)



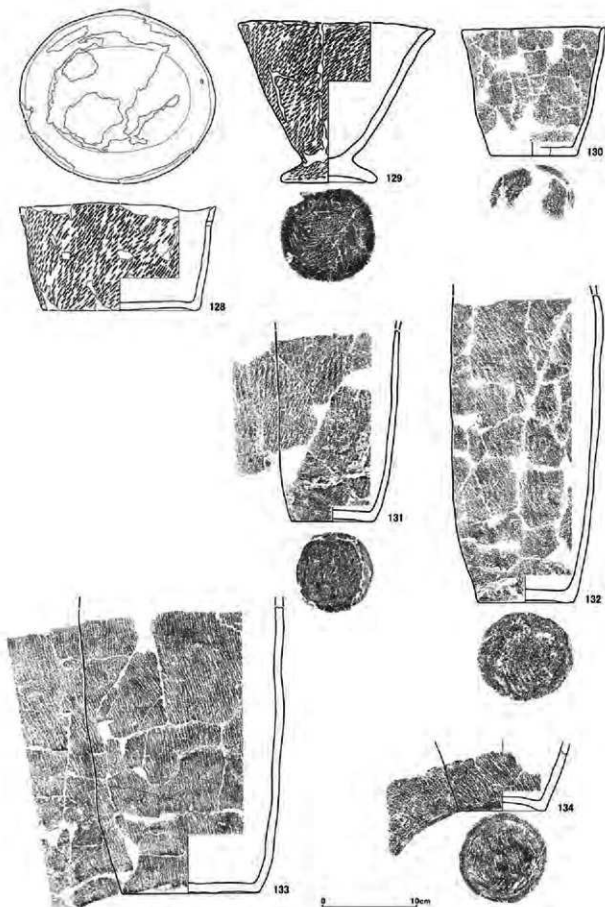
図V-72 包含層土器 II群B類 1f (14)



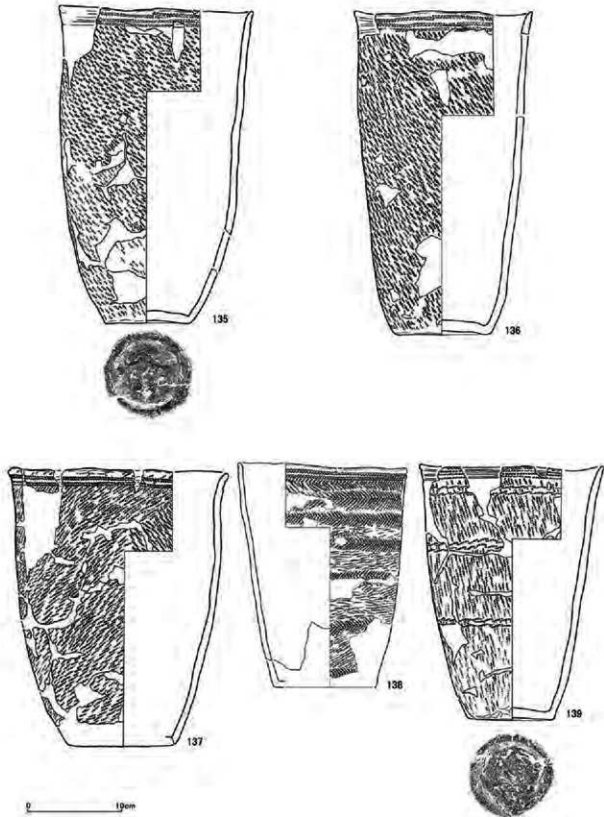
图V-73 包含层土器 II群B類 1f (15)



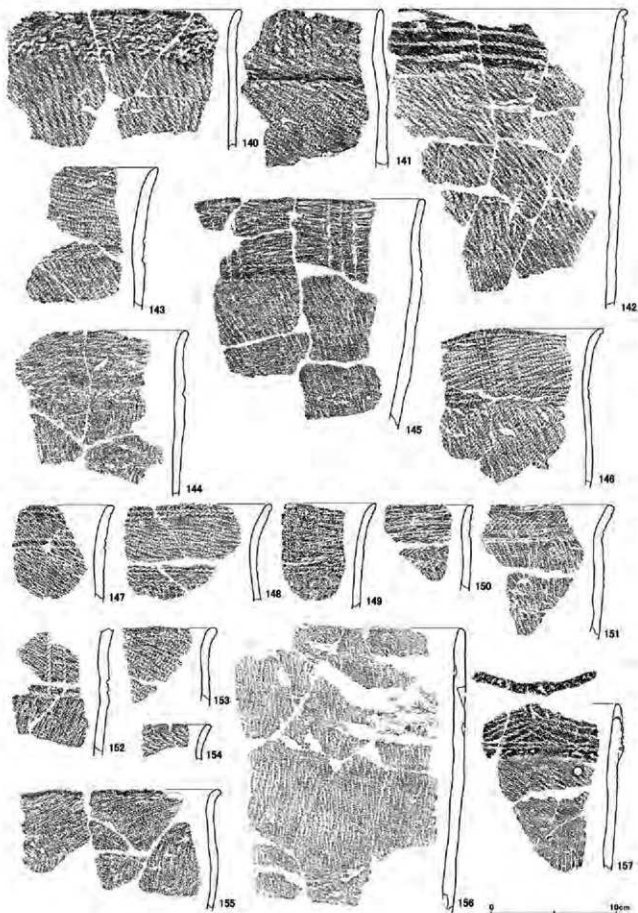
図V-74 包含層土器 II群B類 1f (16)



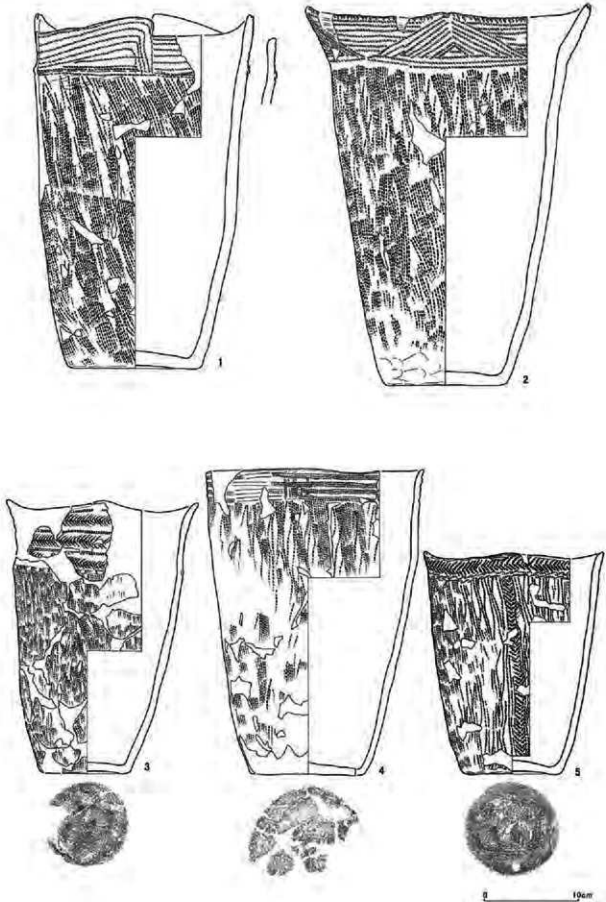
图V-75 包含层土器 II群B类 1f (17)



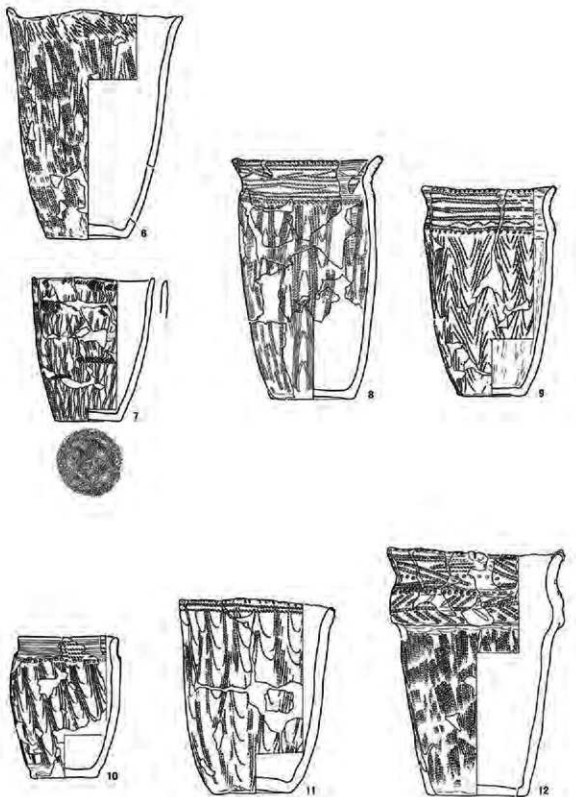
図V-76 包含層土器 II群B類 1f (18)



图V-77 包含层土器 II群B類 1f (19)

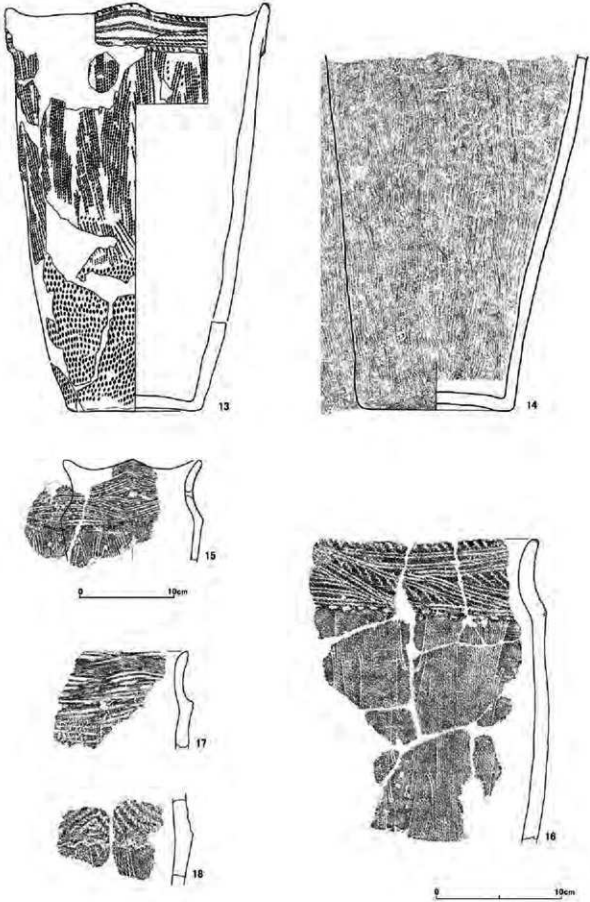


図V-78 包含層土器 I群B類 2a1A (1)

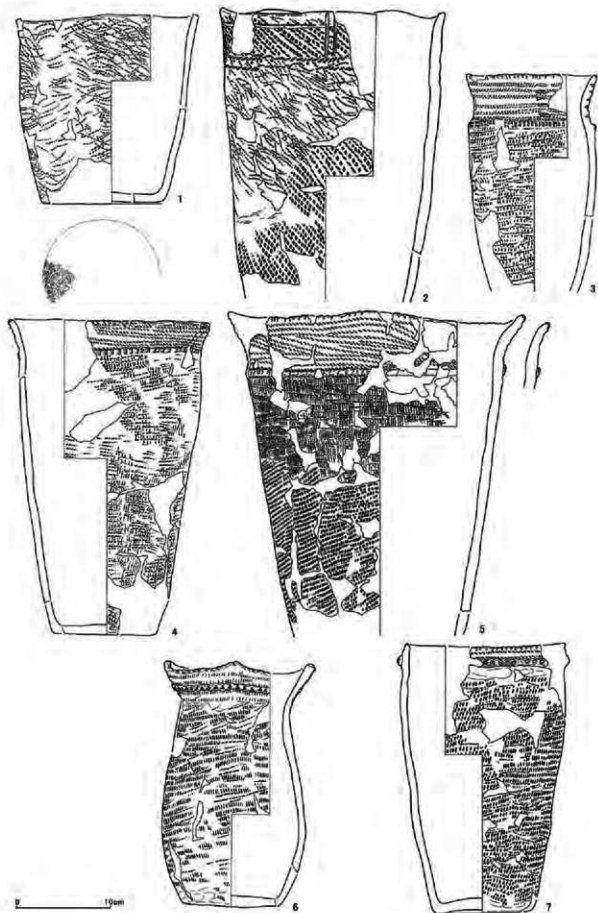


0 10cm

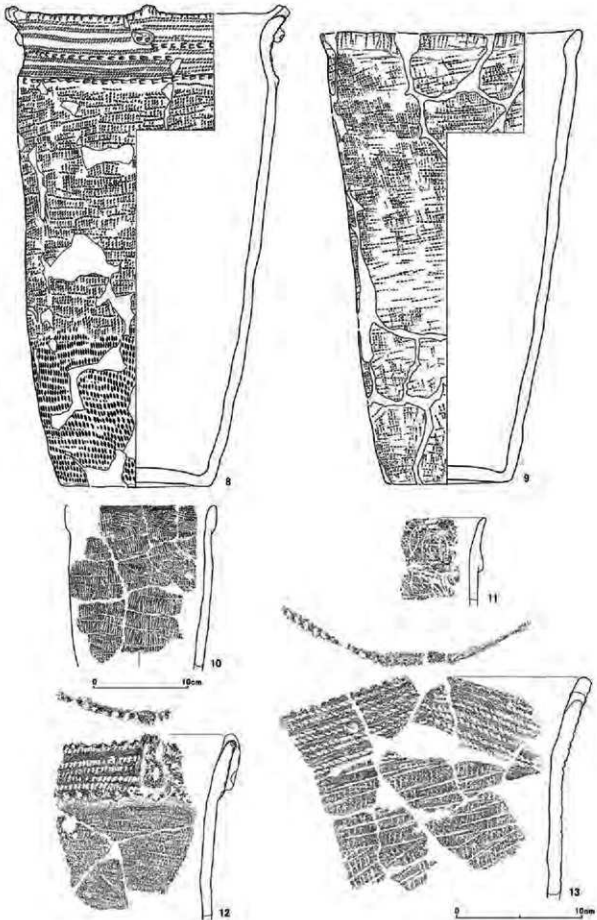
图V-79 包含层土器 I群B类 2a1A (2)



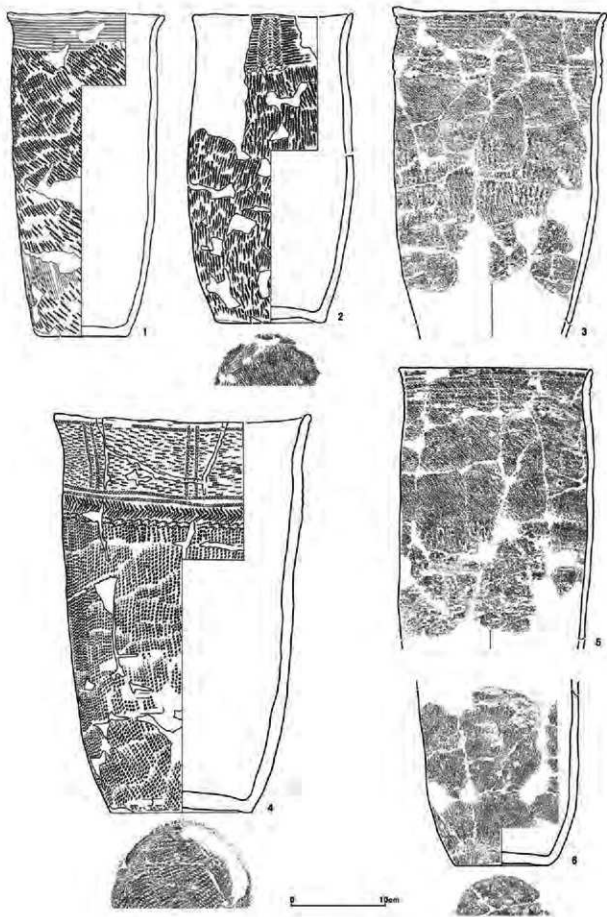
図V-80 包含層土器 I群B類 2a1A (3)



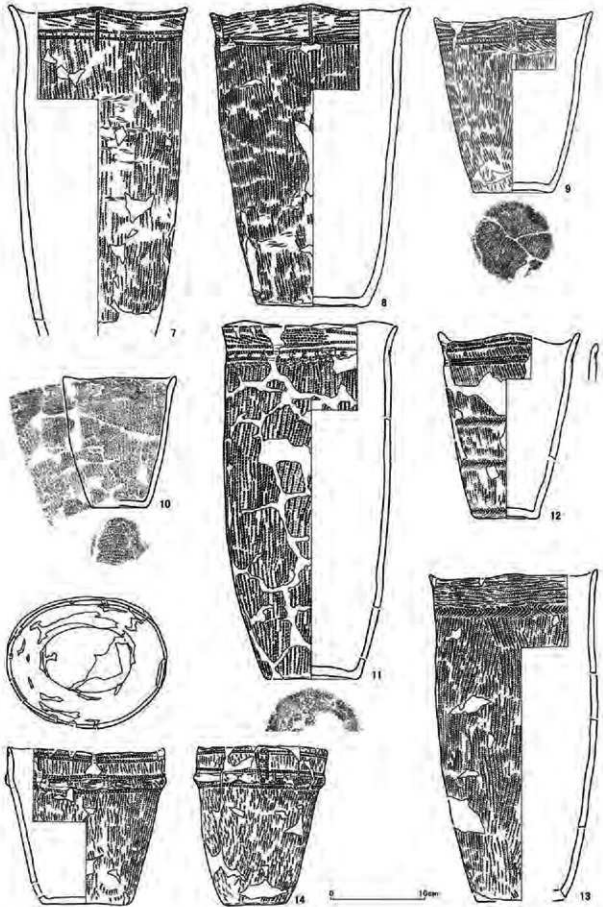
圖V-81 包含層土器 I群B類 2a(4) (1)



図V-82 包含層土器 I群B類 2a(4) (2)



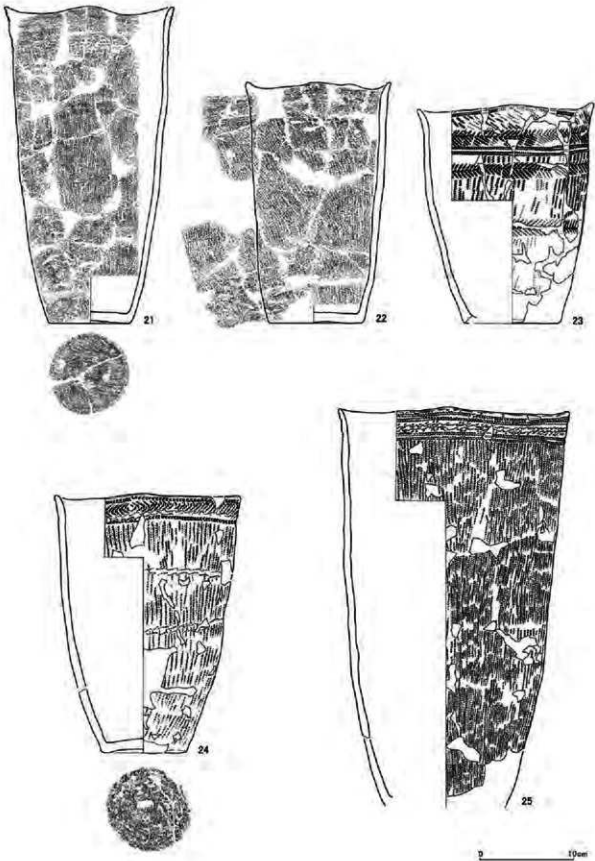
圖V-83 包含層土器 II群B類 1e (1)



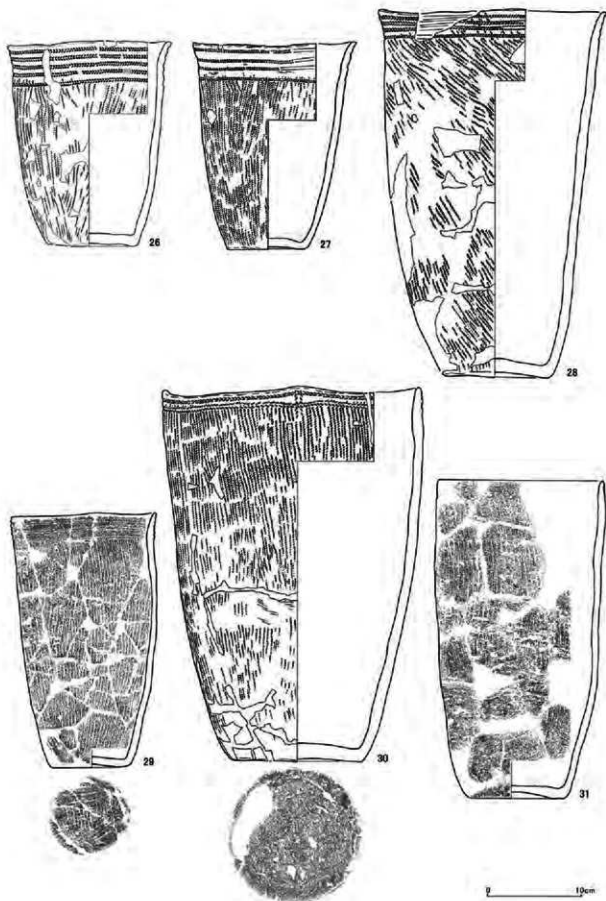
図V-84 包含層土器 I群B類 1e (2)



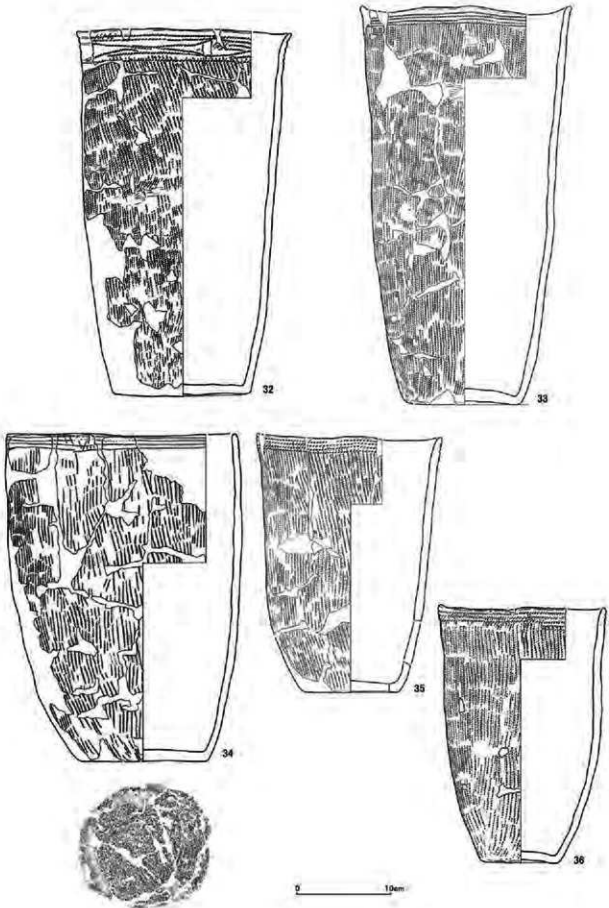
圖V-85 包含層土器 II群B類 1e (3)



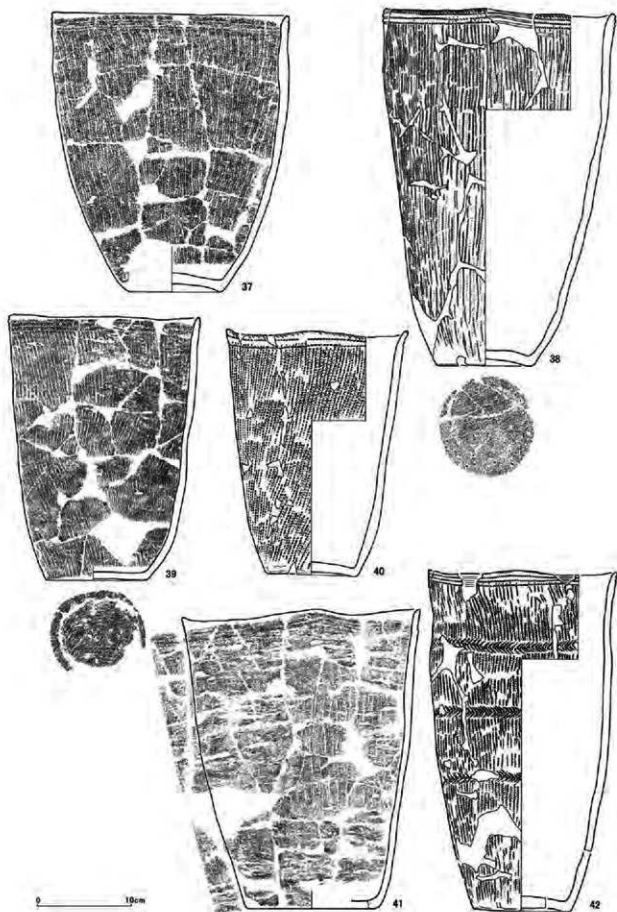
図V-86 包含層土器 II群B類 1e (4)



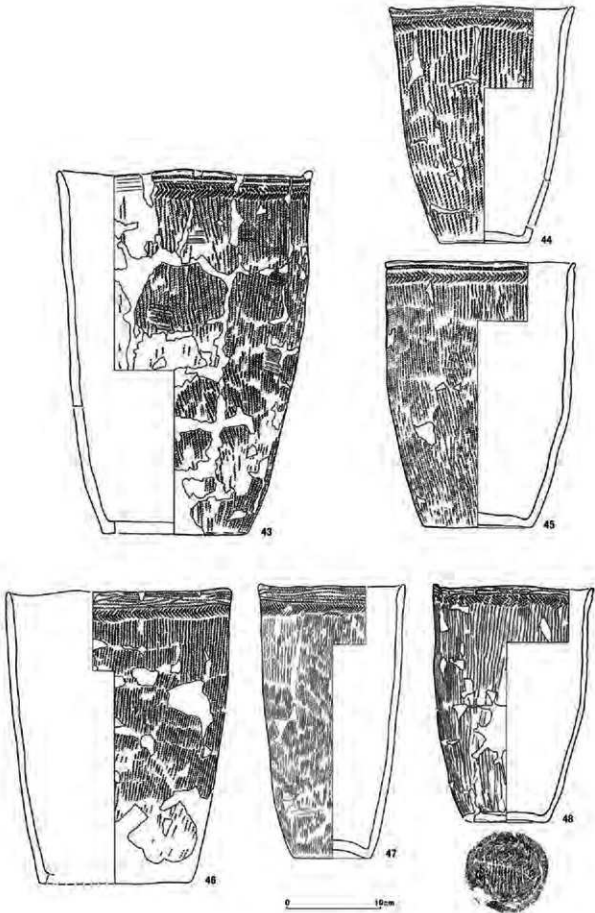
圖V-87 包含層土器 II群B類 1e (5)



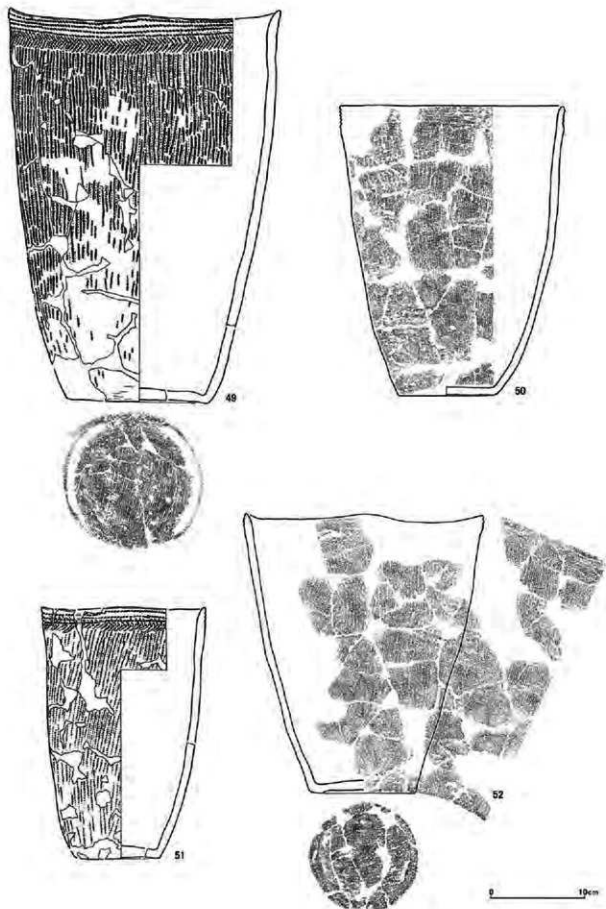
図V-88 包含層土器 II群B類 1e (6)



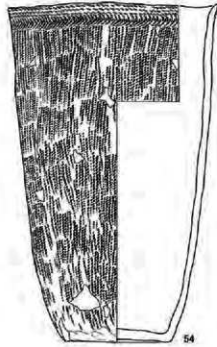
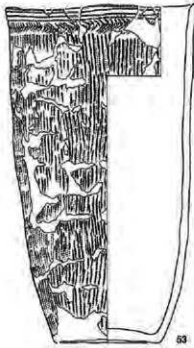
圖V-89 包含層土器 II群B類 1e (7)



図V-90 包含層土器 II群B類 1e (8)

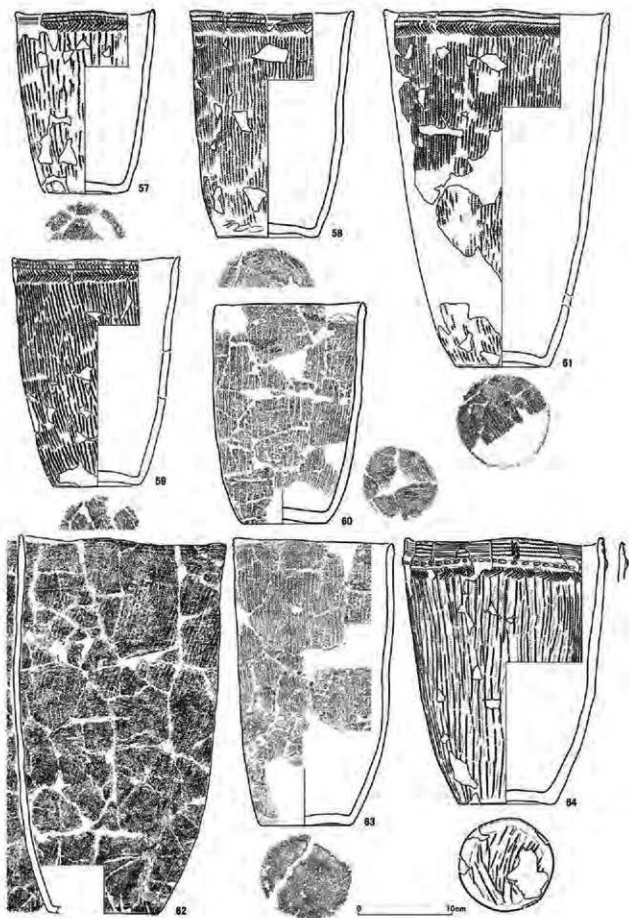


圖V-91 包含層土器 II群B類 1e (9)

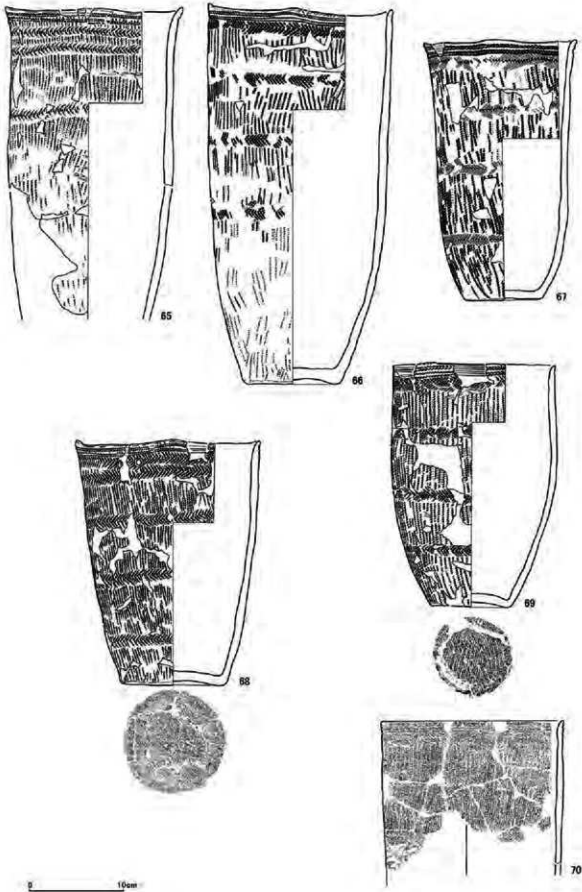


0 10cm

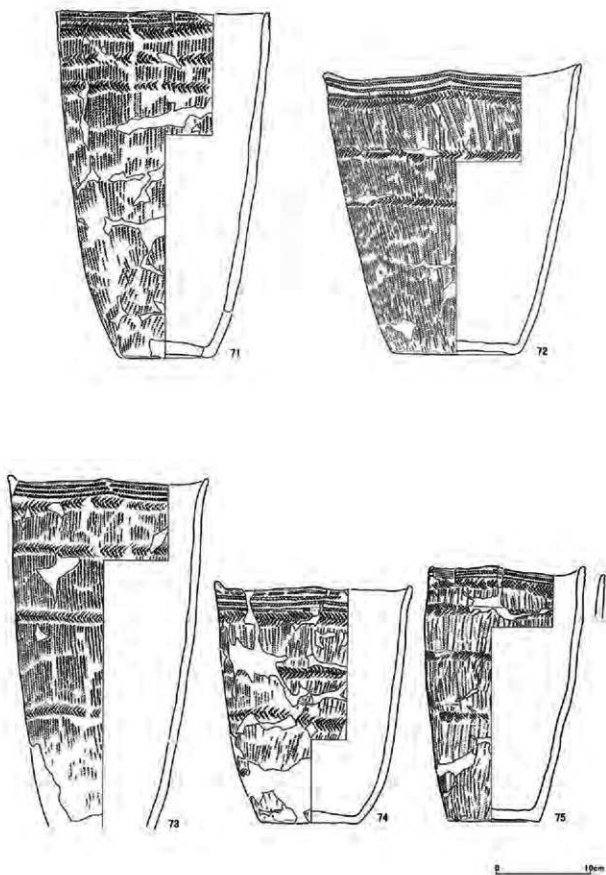
図V-92 包含層土器 I群B類 1e (10)



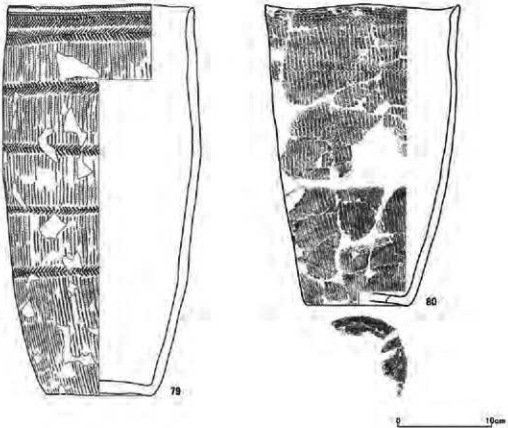
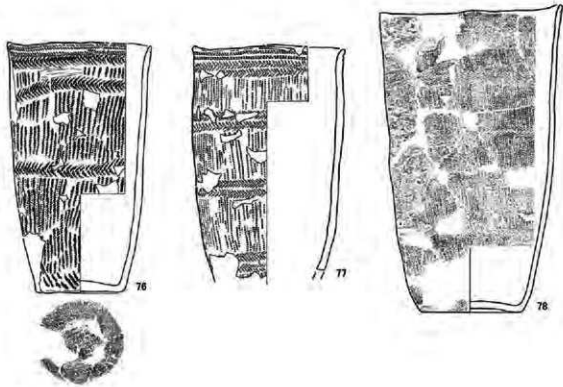
图V-93 包含层土器 I群B類 1e (11)



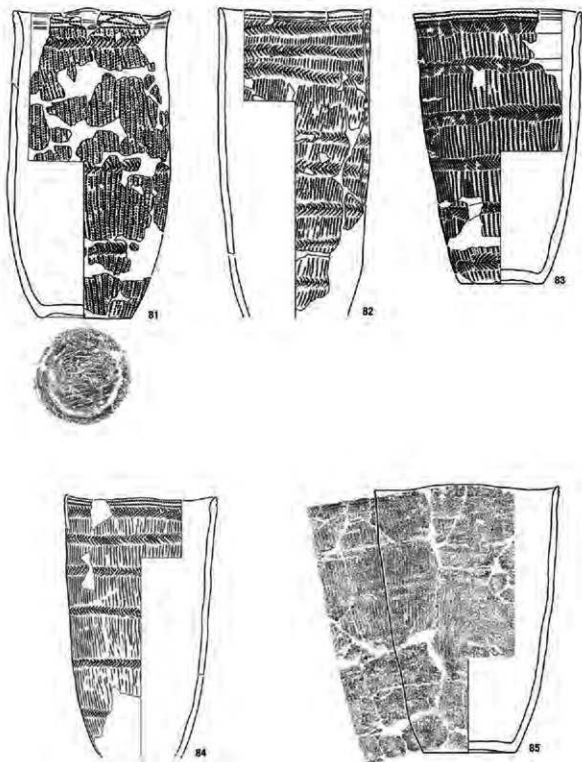
図V-94 包含層土器 I群B類 1e (12)



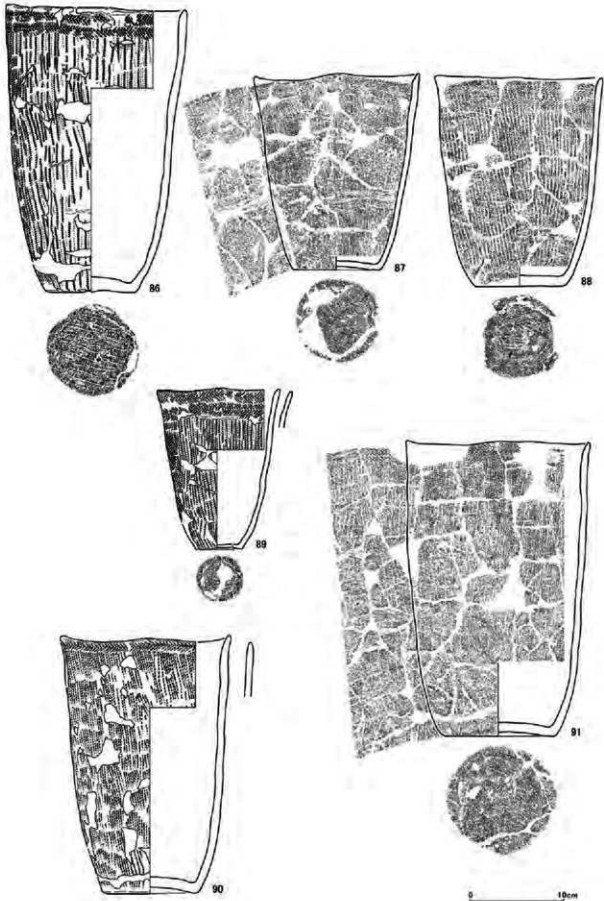
图V-95 包含层土器 I群B类 1e (13)



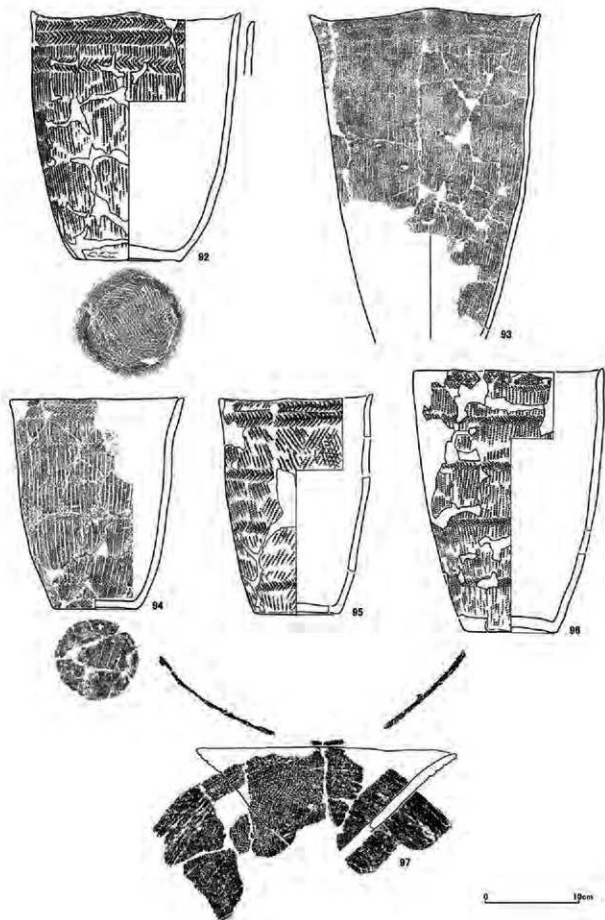
図V-96 包含層土器 I群B類 1e (14)



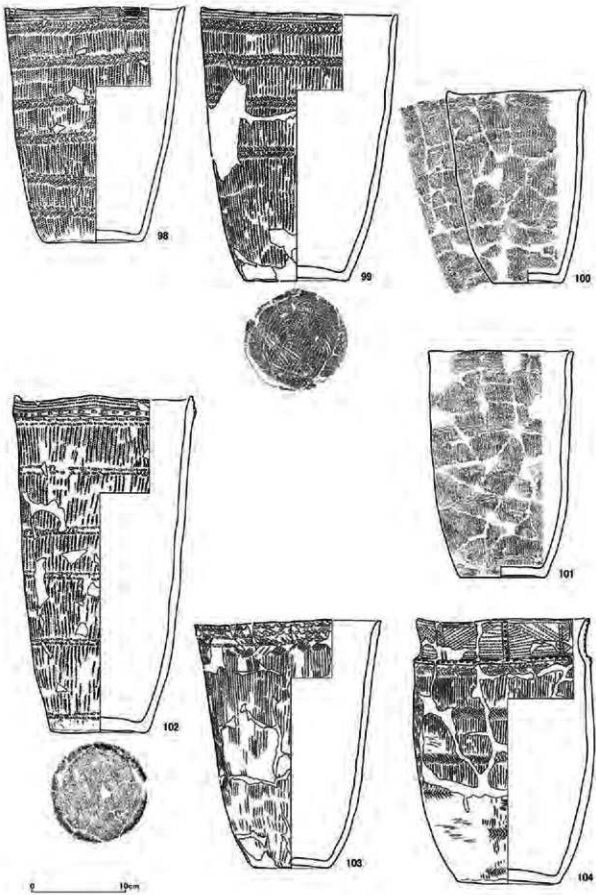
图V-97 包含层土器 I群B類 1e (15)



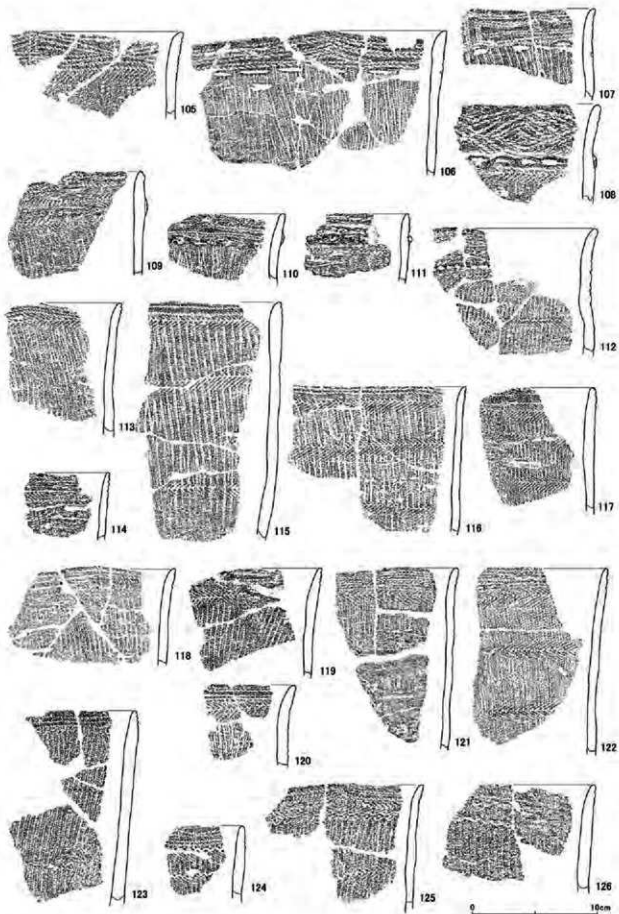
図V-98 包含層土器 I群B類 1e (16)



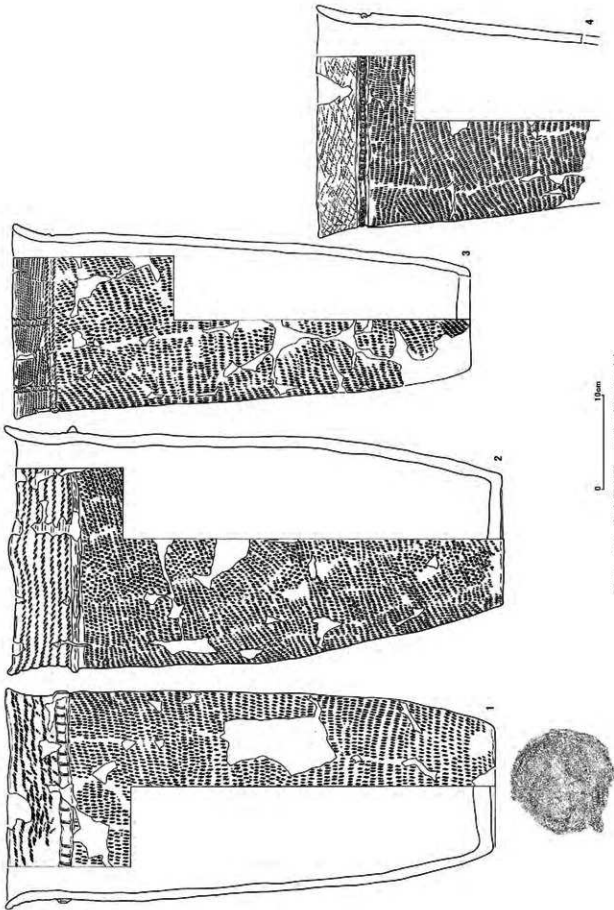
图V-99 包含层土器 I群B类 1e (17)



図V-100 包含層土器 II群B類 1e (18)

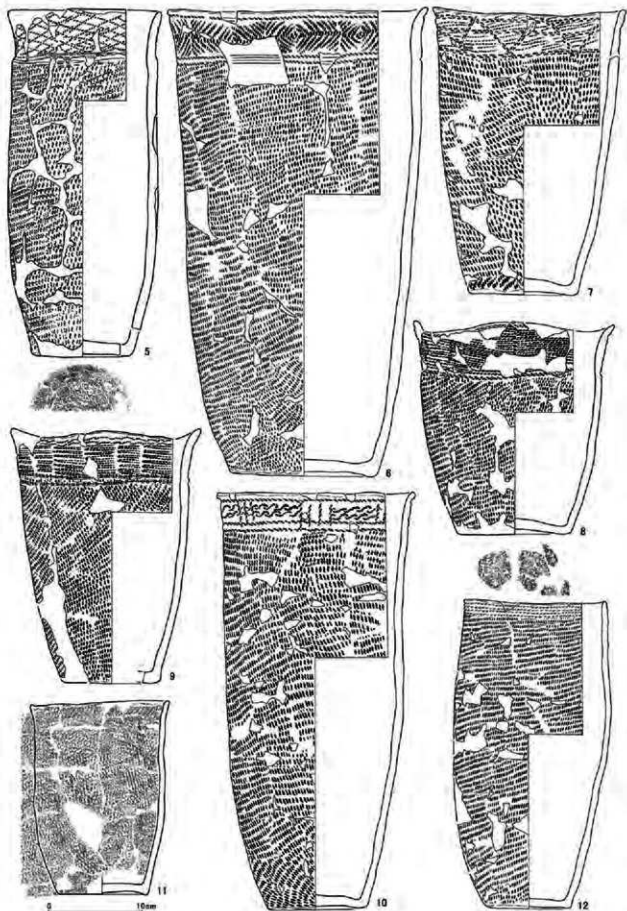


圖V-101 包含層土器 II群B類 1e (19)

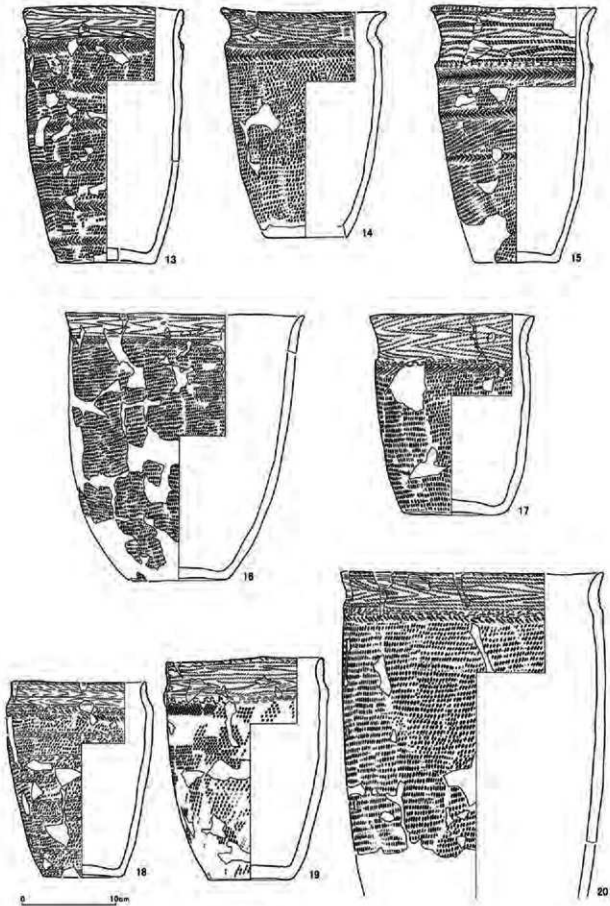


図V-102 包含層土器 I群B類 2b (1)

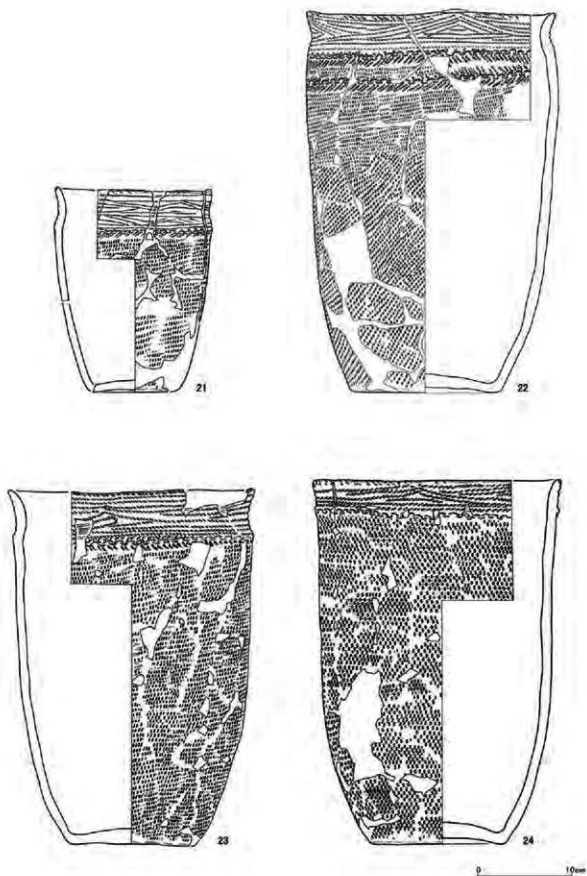
0 10cm



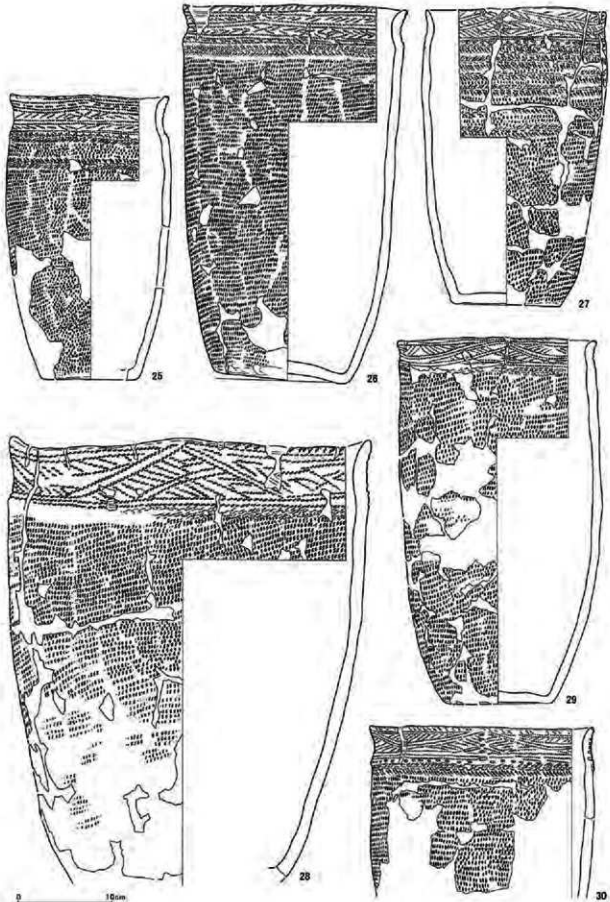
图V-103 包含层土器 I群B類 2b(2)



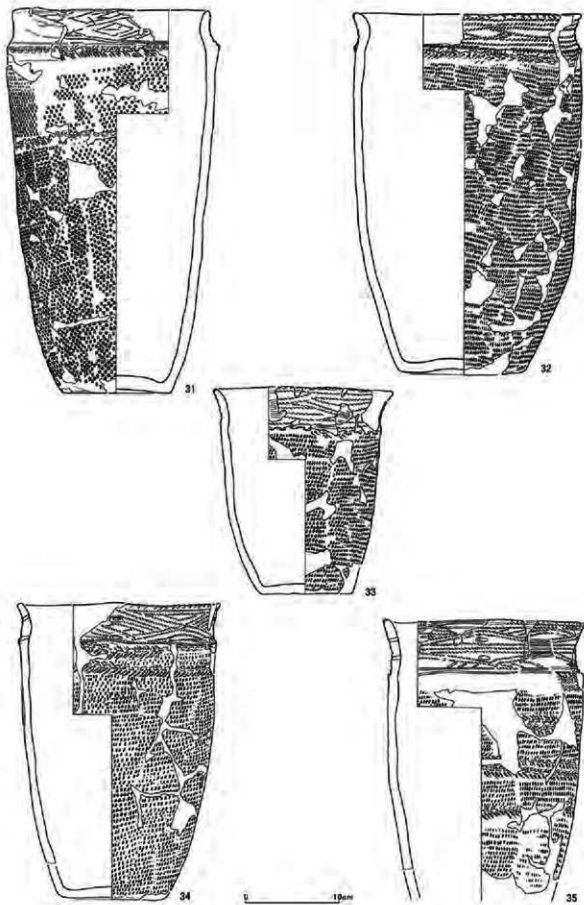
図V-104 包含層土器 I群B類 2b (3)



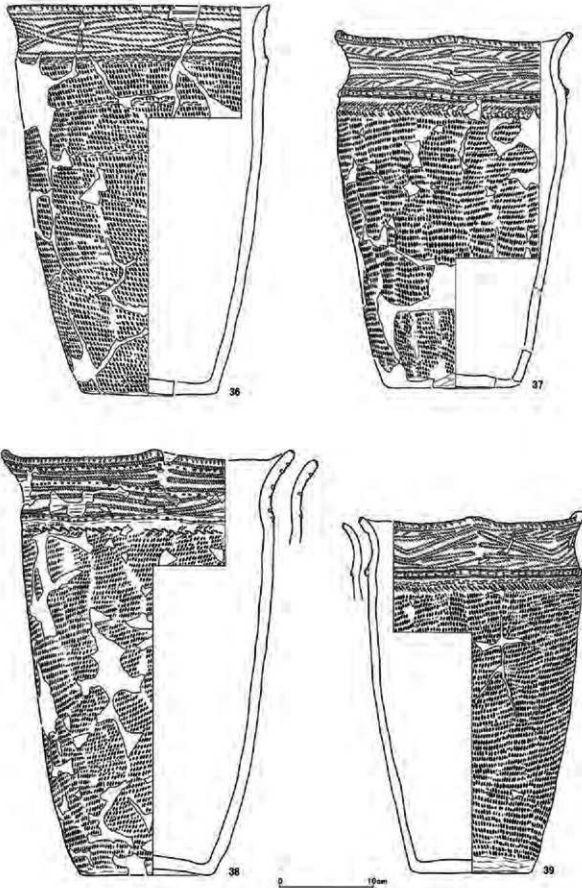
图V-105 包含层土器 I群B類 2b(4)



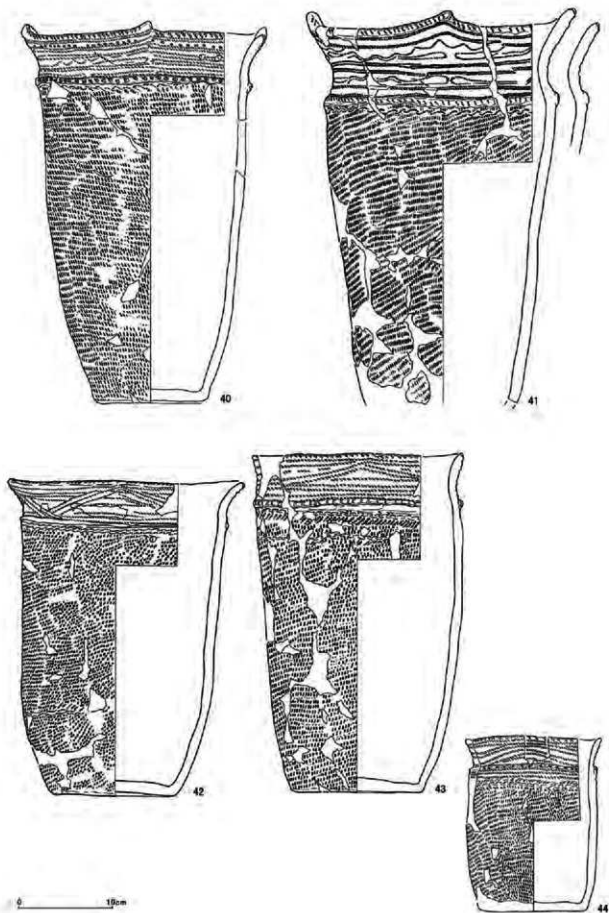
図V-106 包含層土器 I群B類 2b(5)



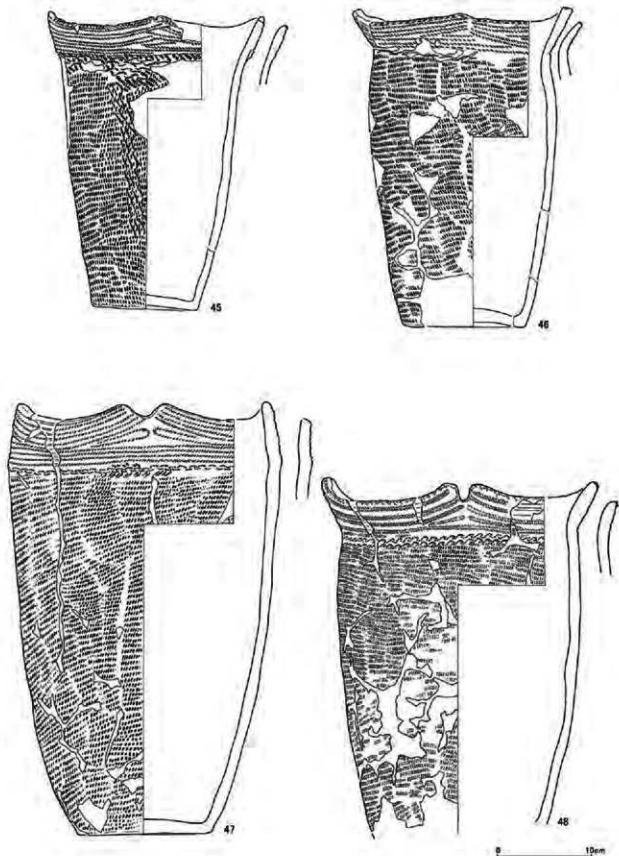
图V-107 包含层土器 I群B类 2b(6)



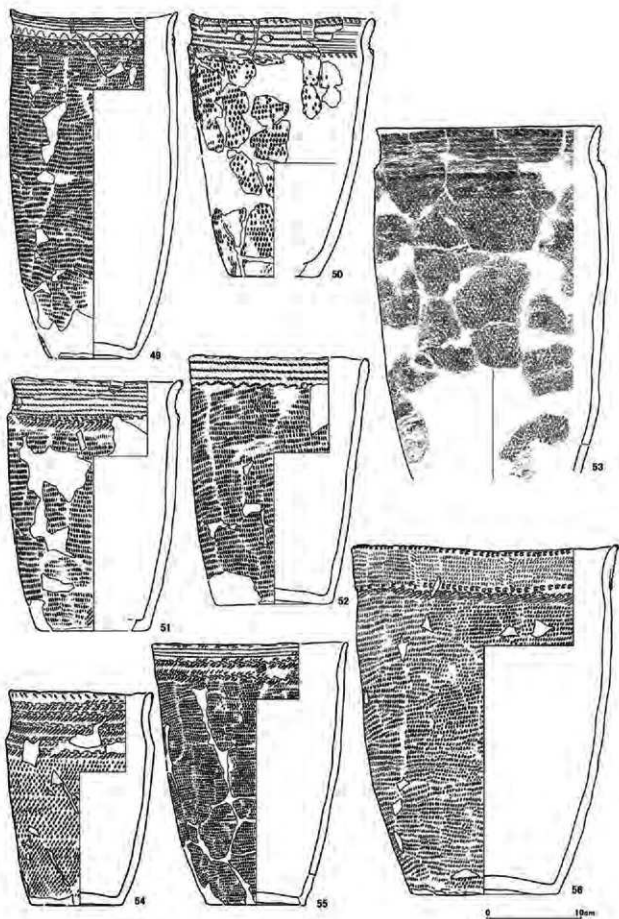
図V-108 包含層土器 I群B類 2b (7)



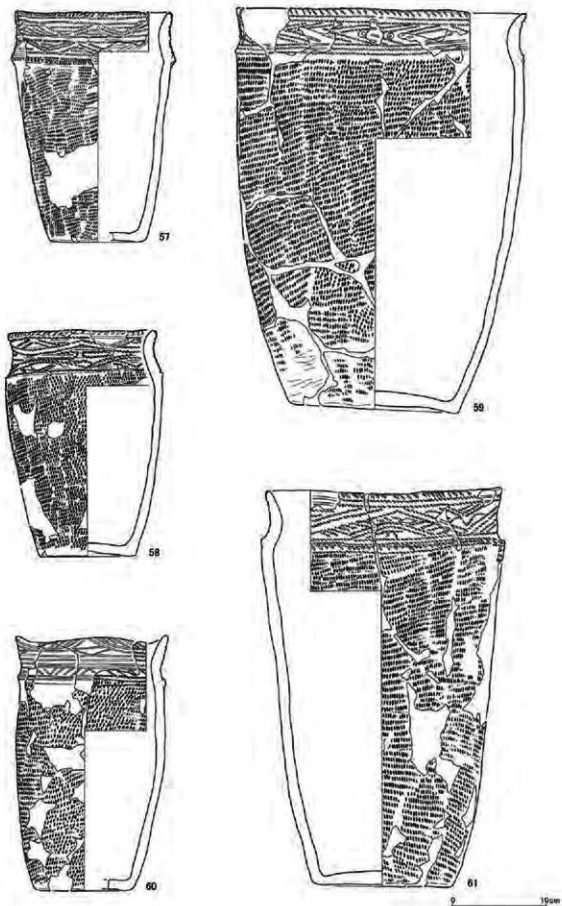
图V-109 包含层土器 I群B类 2b(8)



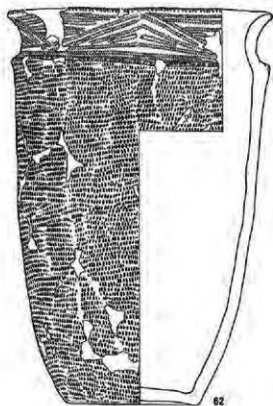
図V-110 包含層土器 I群B類 2b (9)



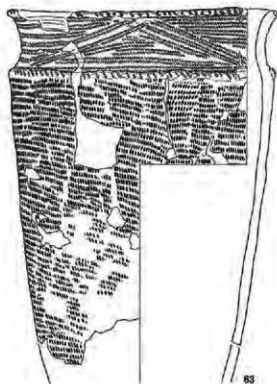
图V-111 包含层土器 I群B类 2b (10)



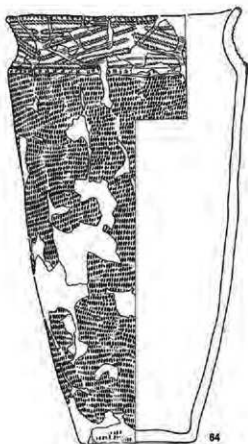
図V-112 包含層土器 II群B類 2b (11)



62



63



64



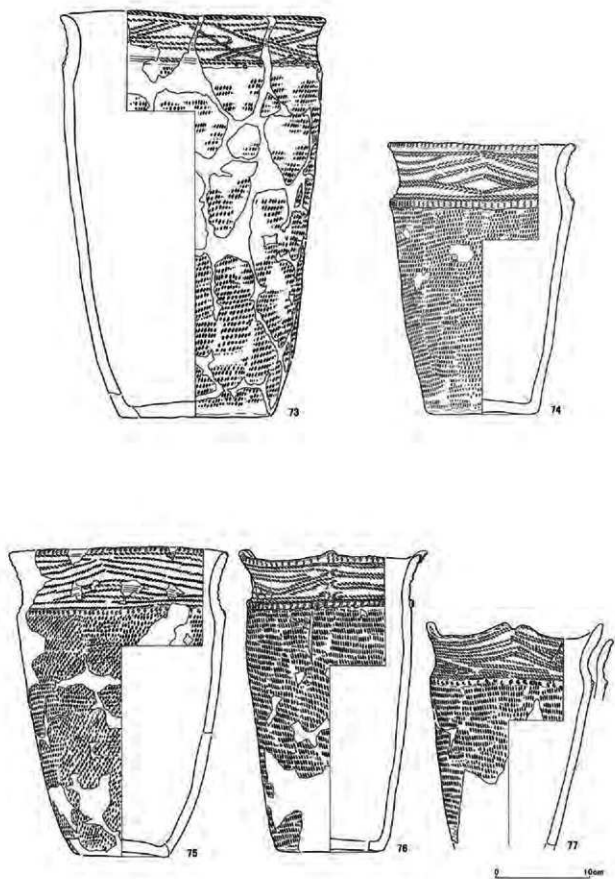
65

0 10cm

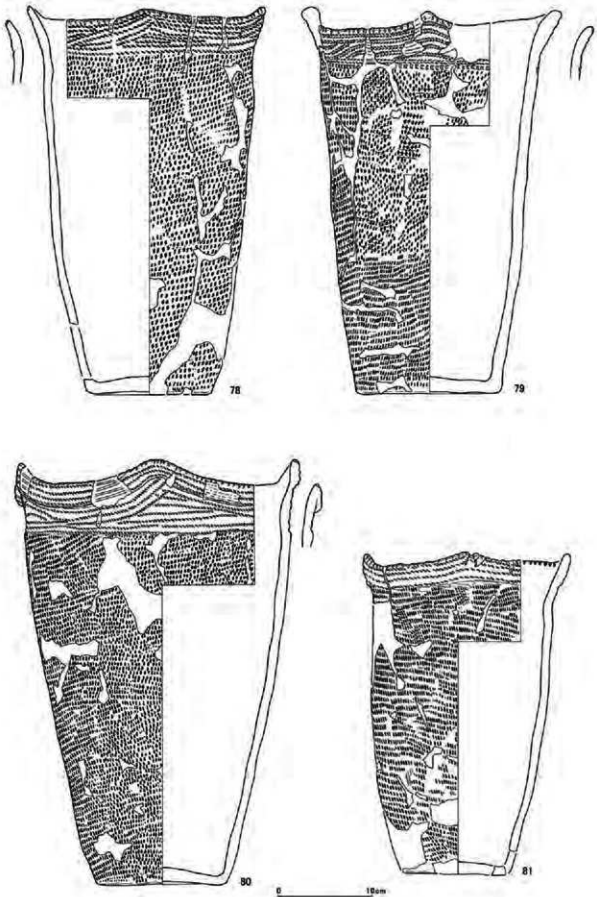
图V-113 包含层土器 I群B類 2b (12)



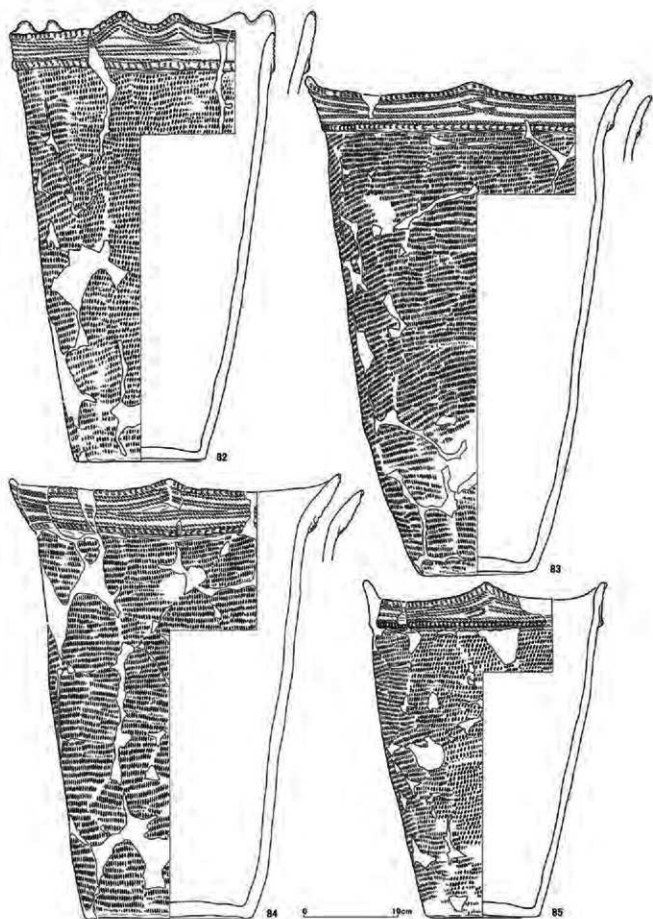
図V-114 包含層土器 II群B類 2b (13)



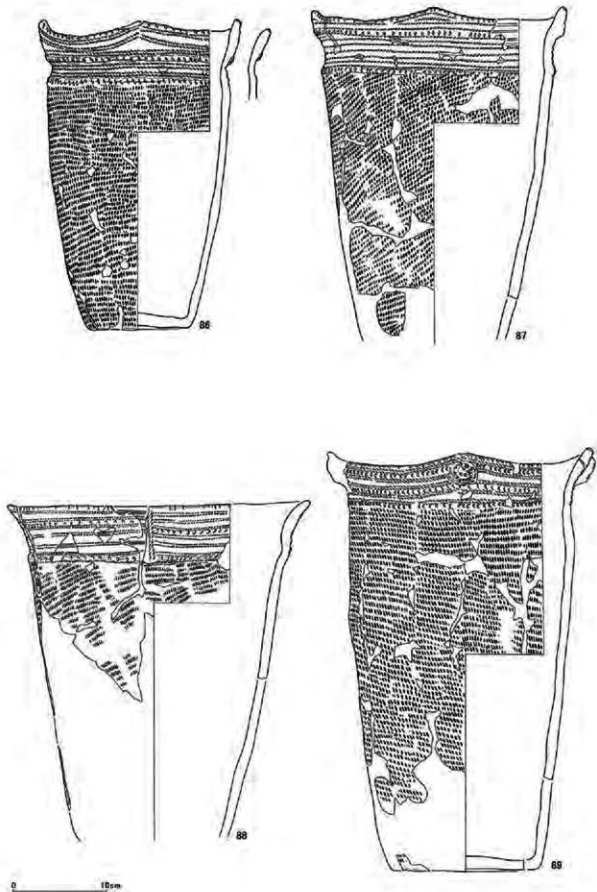
图V-115 包含层土器 I群B类 2b (14)



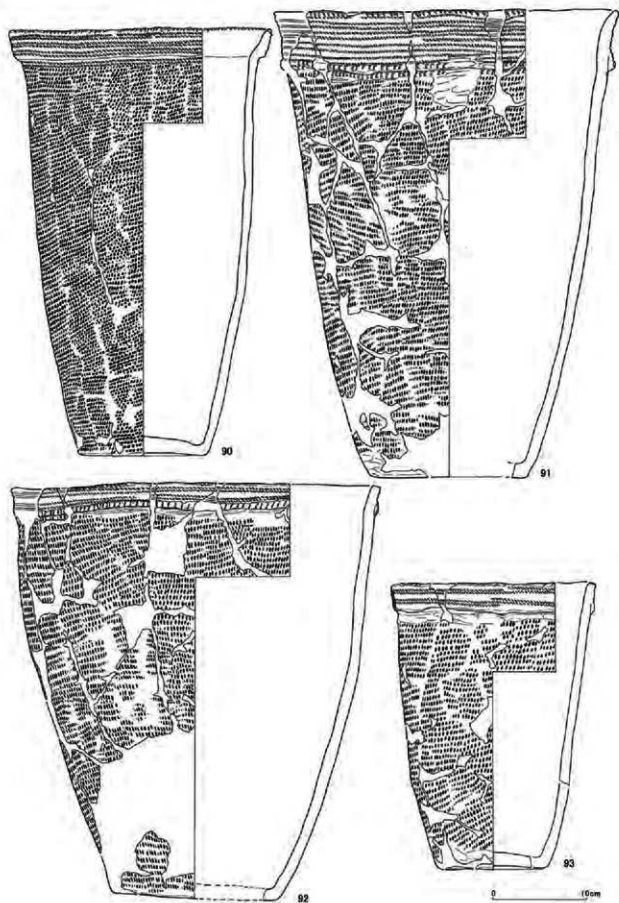
図V-116 包含層土器 II群B類 2b (15)



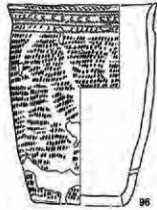
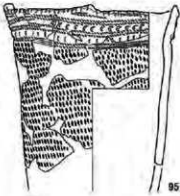
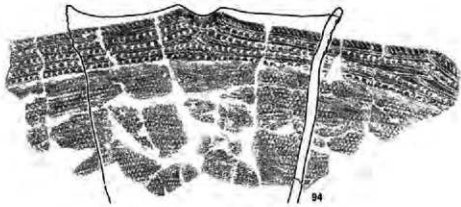
图V-117 包含陶土器 I群B類 2b (16)



図V-118 包含層土器 II群B類 2b (17)



图V-119 包含层土器 II群B類 2b (18)



0 10cm

図V-120 包含層土器 II群B類 2b (19)

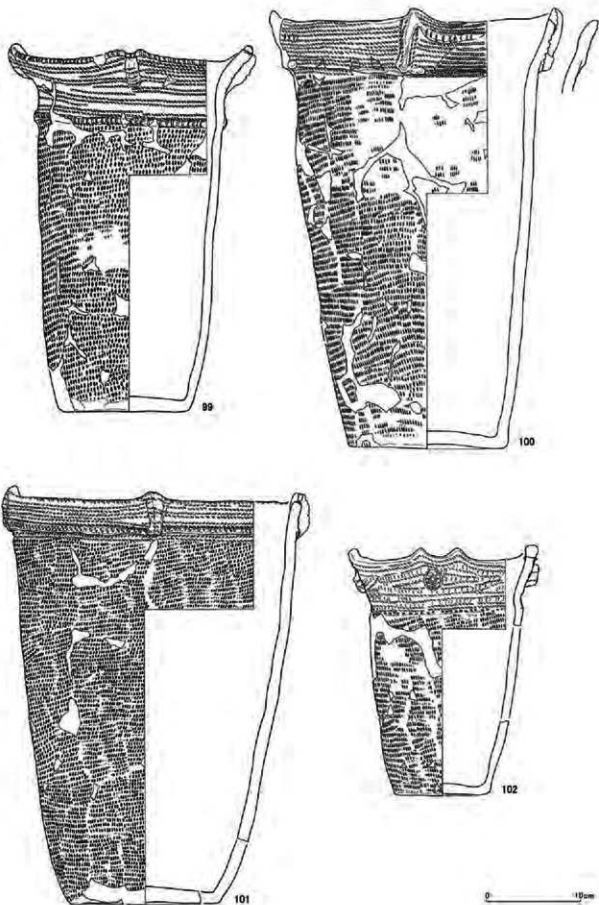
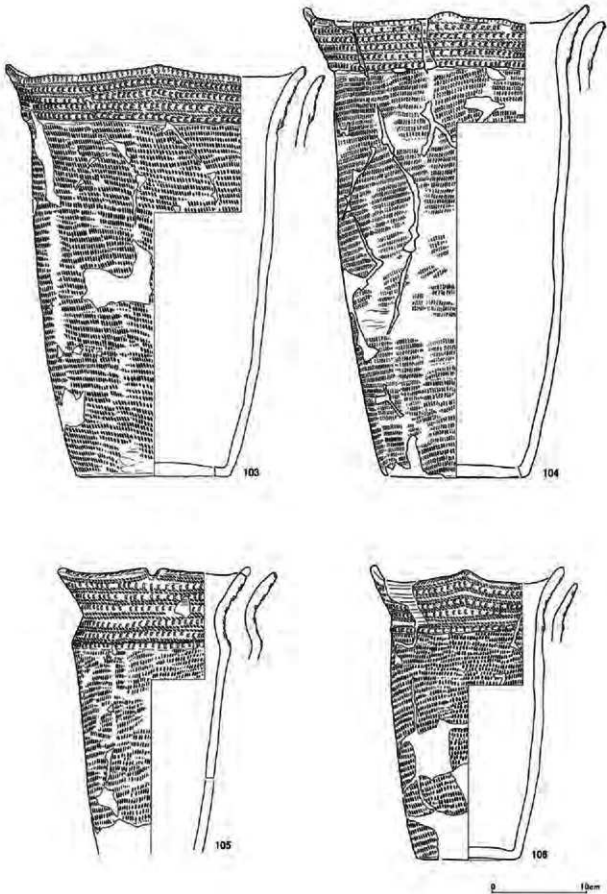
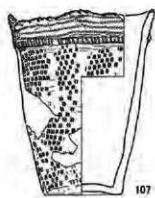


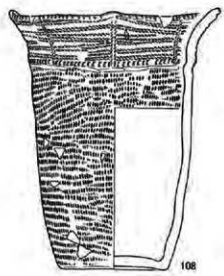
图 V-121 包含层土器 II 群 B 类 2b (20)



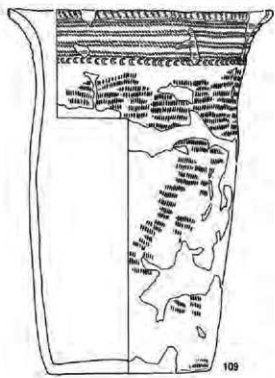
図V-122 包含層土器 II群B類 2b (21)



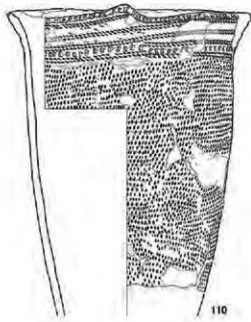
107



108



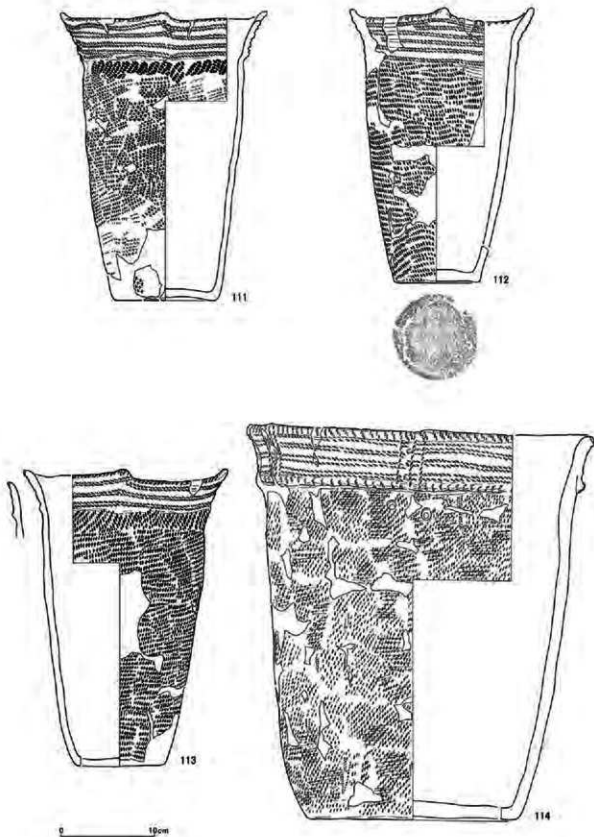
109



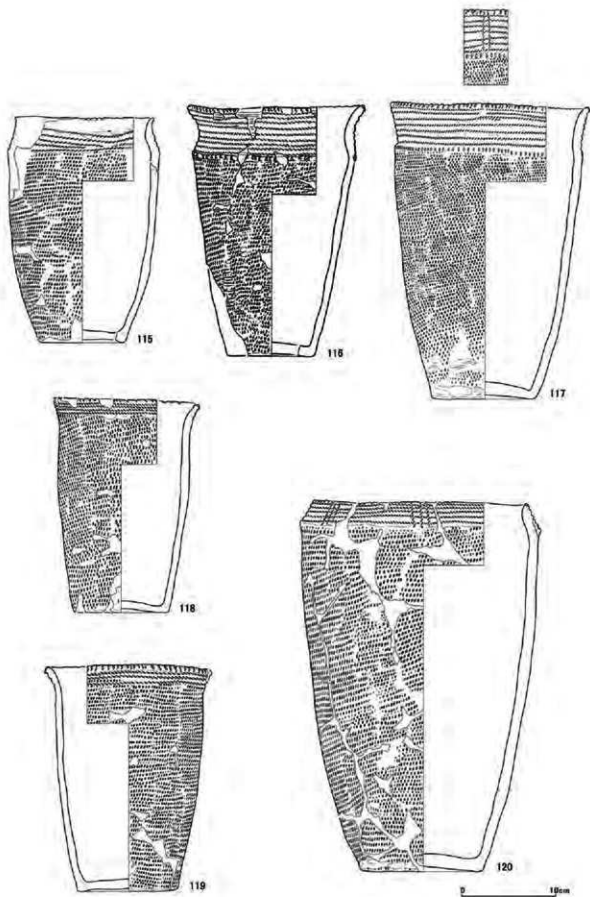
110



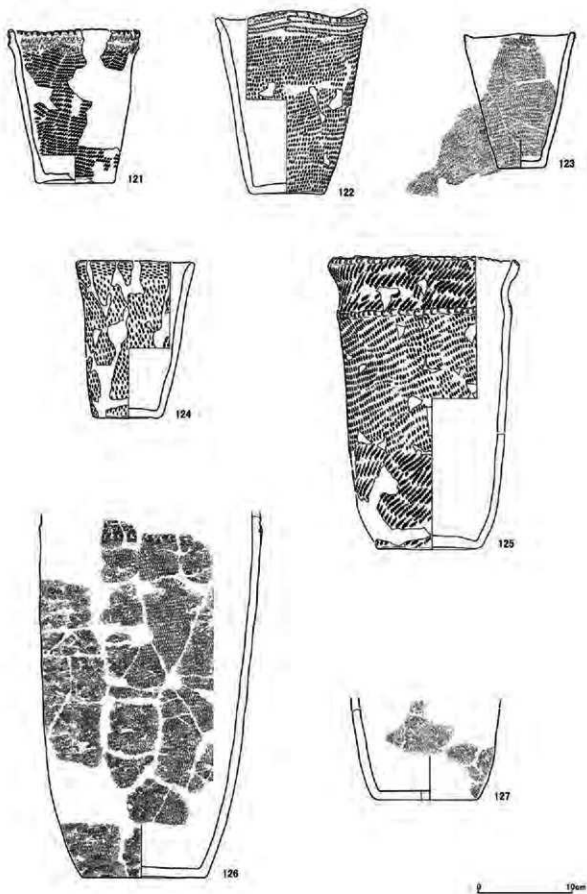
图V-123 包含层土器 II群B類 2b (22)



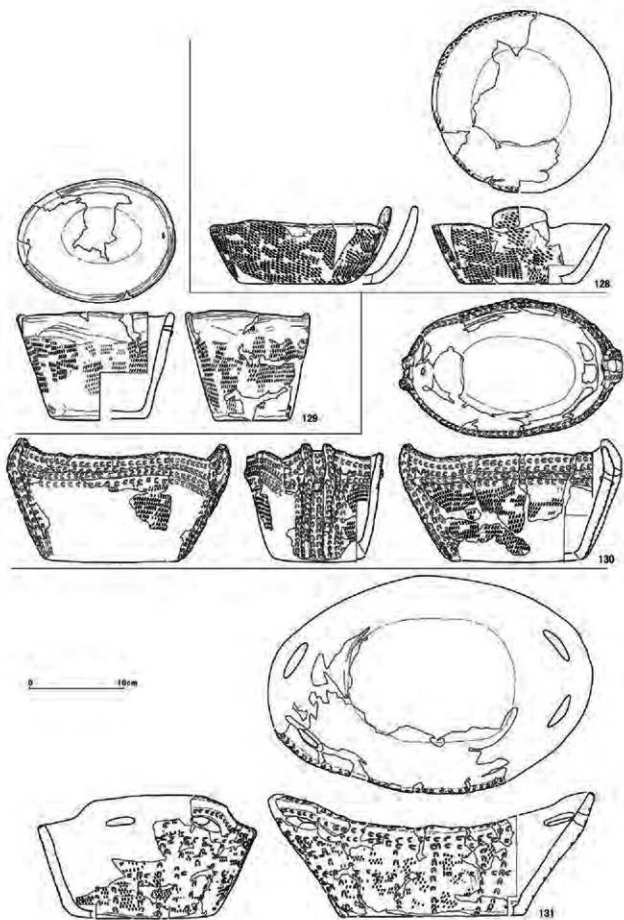
図V-124 包含層土器 II群B類 2b (23)



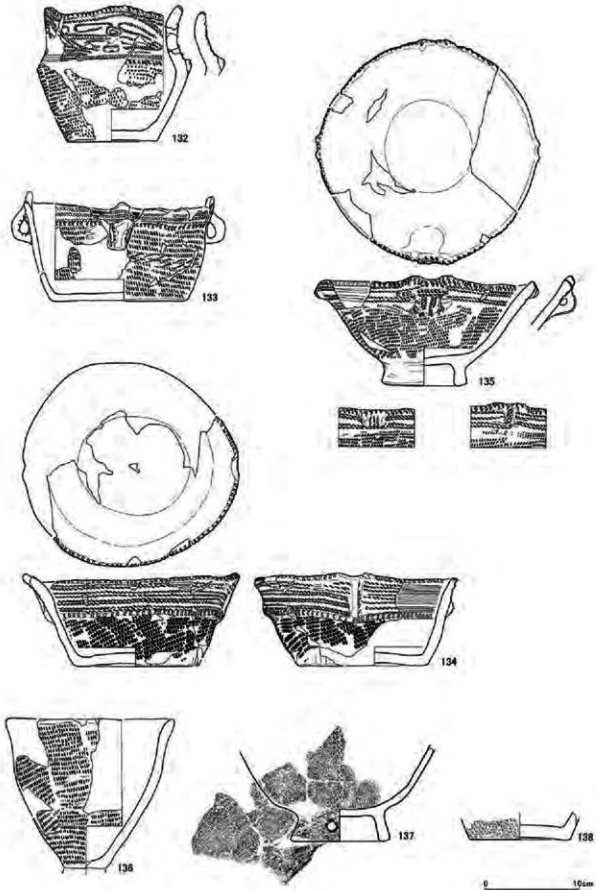
图V-125 包含层土器 II群B类 2b (24)



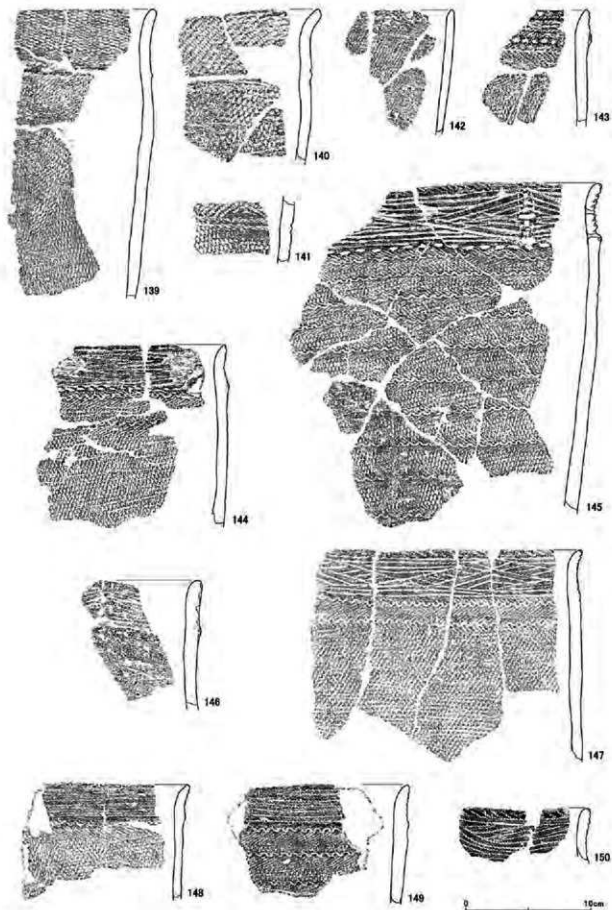
図V-126 包含層土器 II群B類 2b (25)



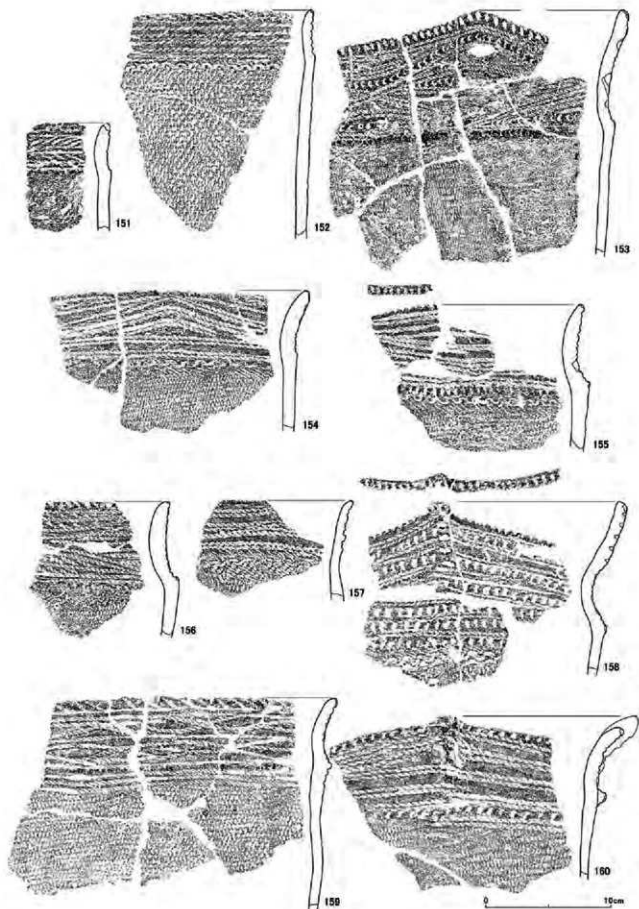
圖V-127 包含層土器 II 群B類 2b (26)



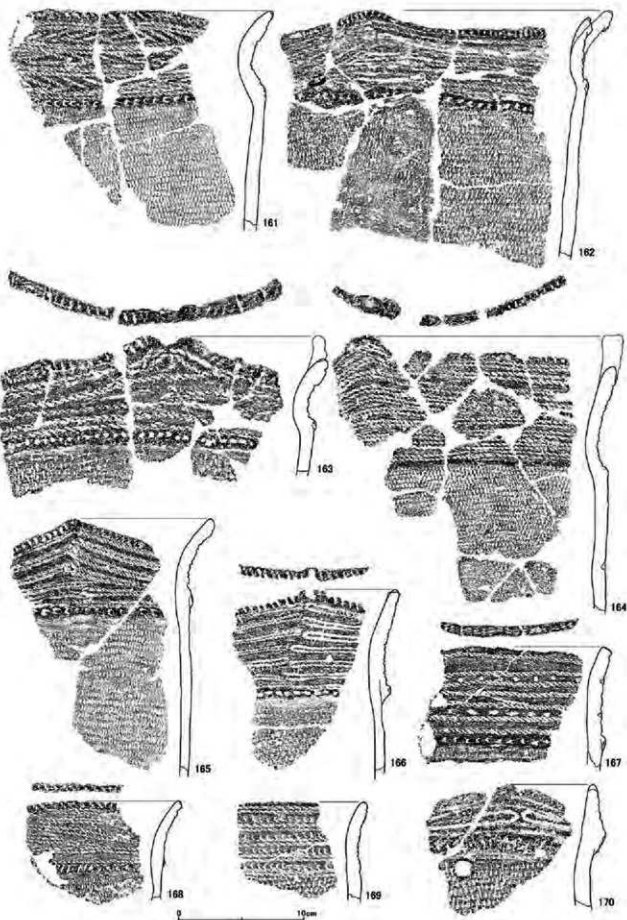
図V-128 包含層土器 II群B類 2b (27)



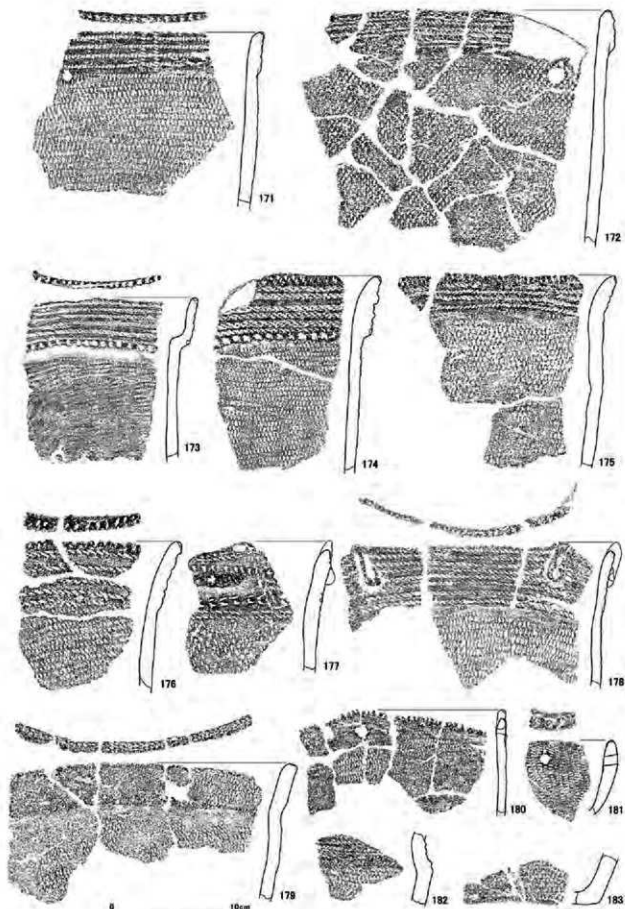
圖V-129 包含層土器 II群B類 2b (28)



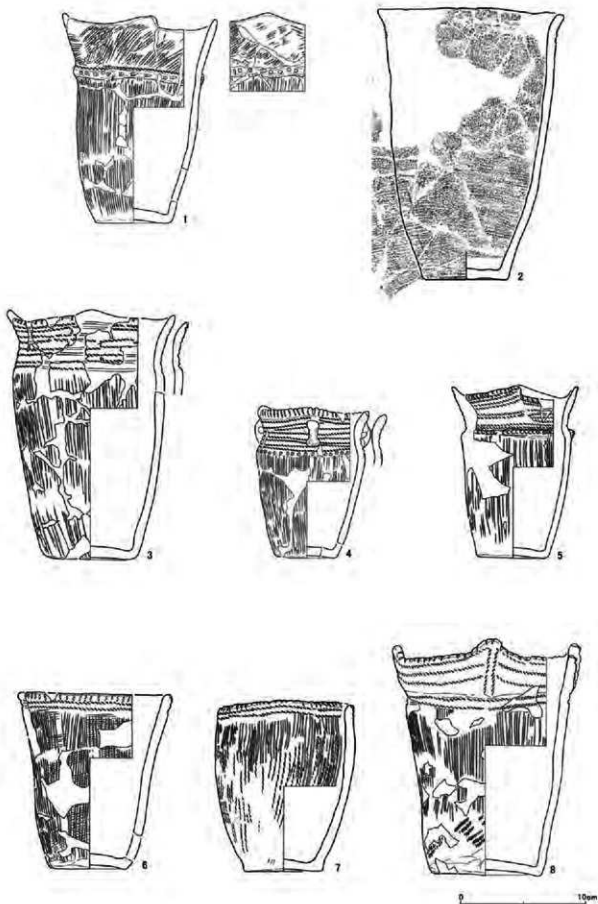
図V-130 包含層土器 II群B類 2b (29)



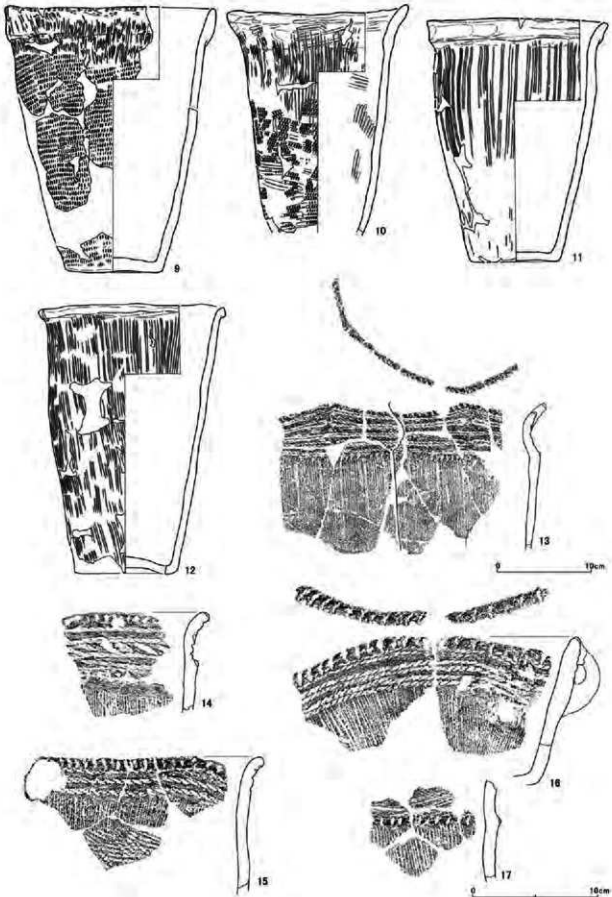
图V-131 包含层土器 II群B類 2b (30)



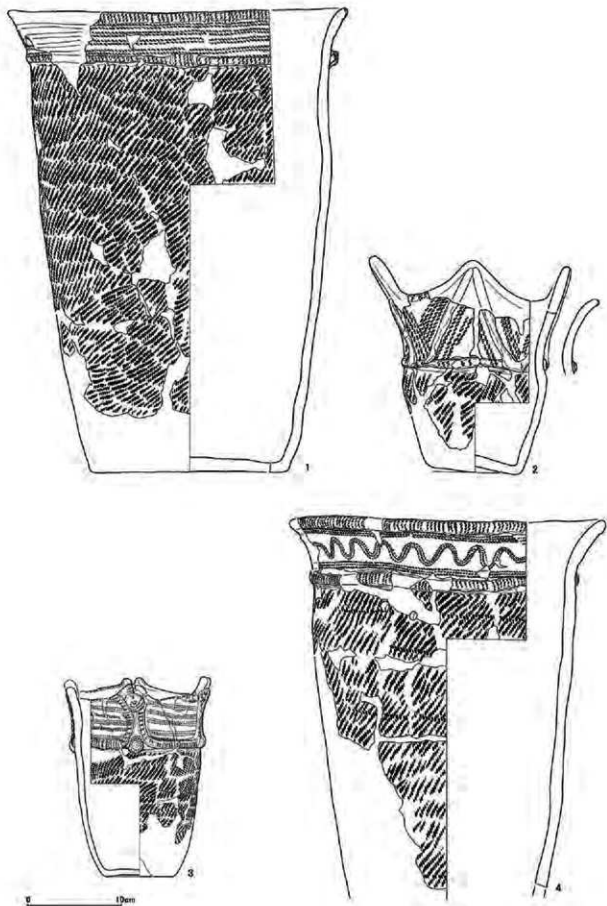
図V-132 包含層土器 II群B類 2b (31)



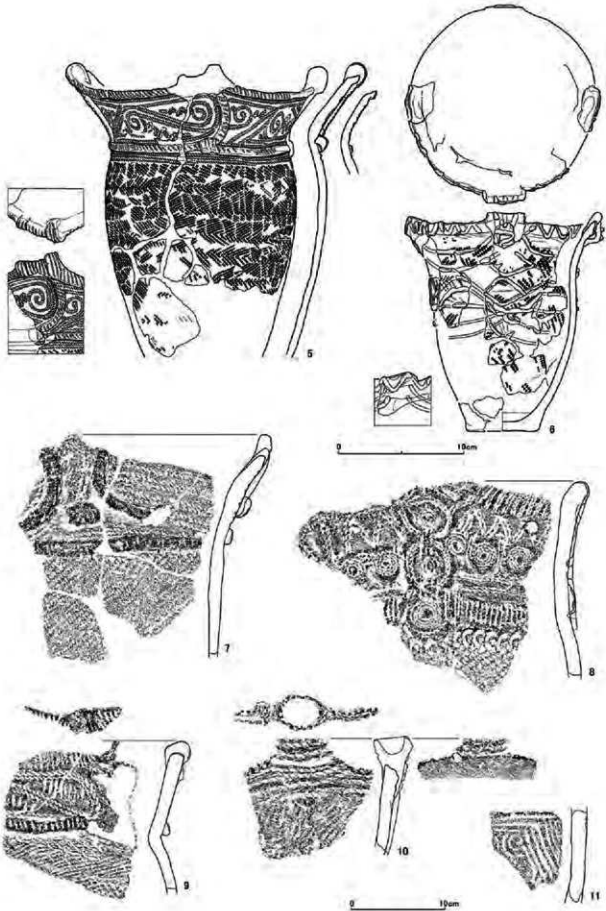
图V-133 包含层土器 I群B類 3b (1)



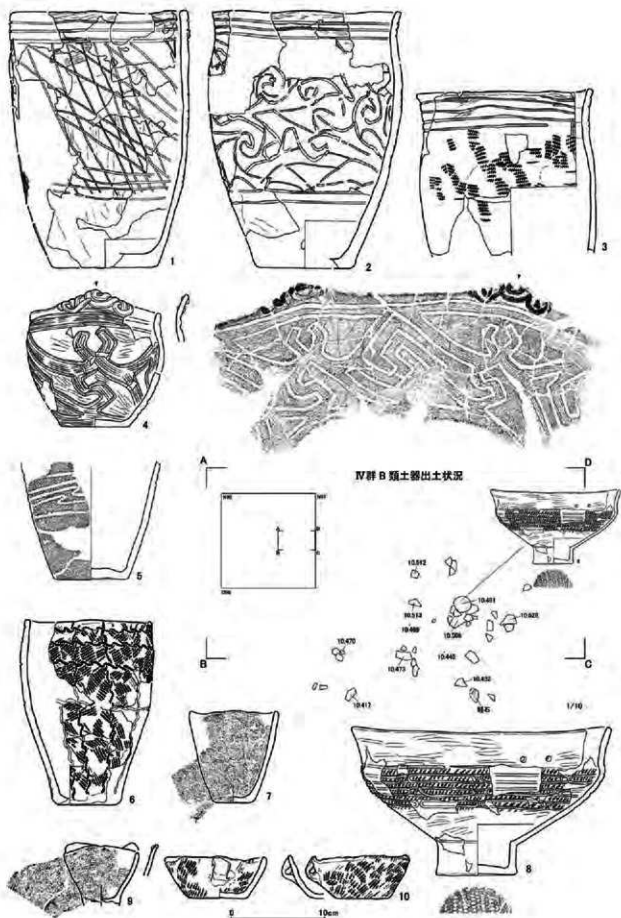
図V-134 包含層土器 I群B類 3b (2)



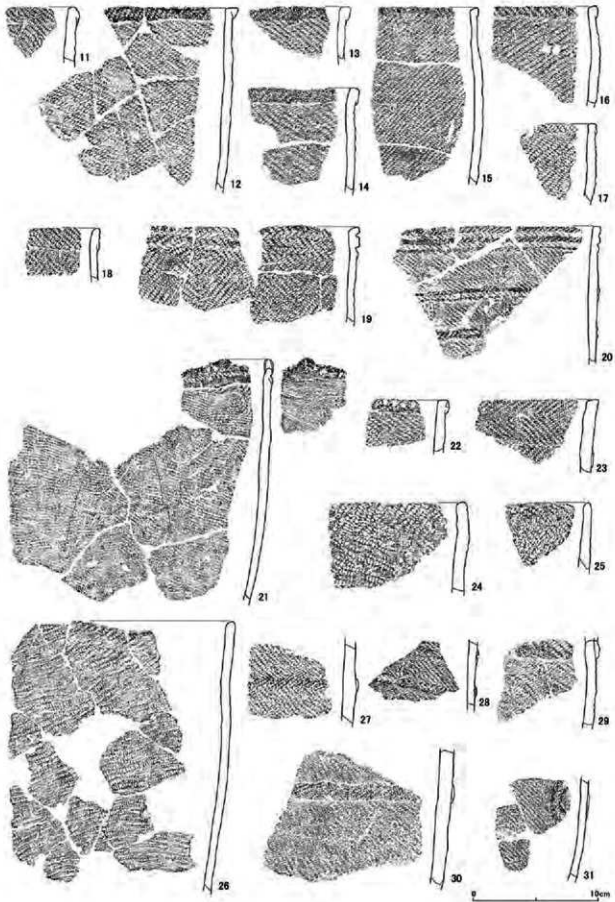
圖V-135 包含層土器 II群A類 (1)



図V-136 包含層土器 II群A類 (2)



图V-137 包含层土器 IV群 (1)



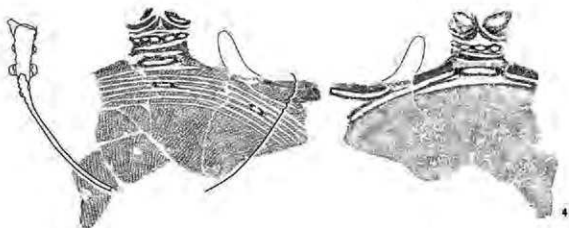
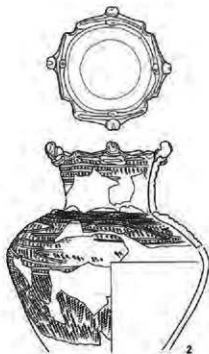
図V-138 包含層土器 IV群 (2)



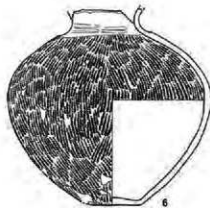
图V-139 包含层土器 IV群 (3)

一括出土 1・2 (2)

一括出土 1



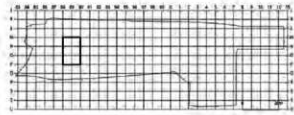
一括出土 2



0 10cm

図V-141 包含層土器 V群C類 (2)

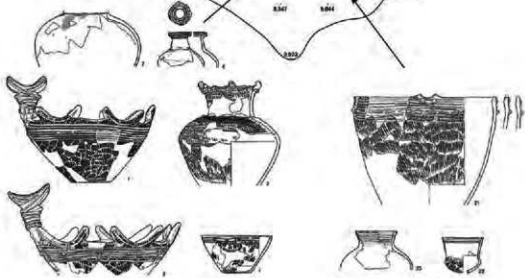
M ~ O88 + 89



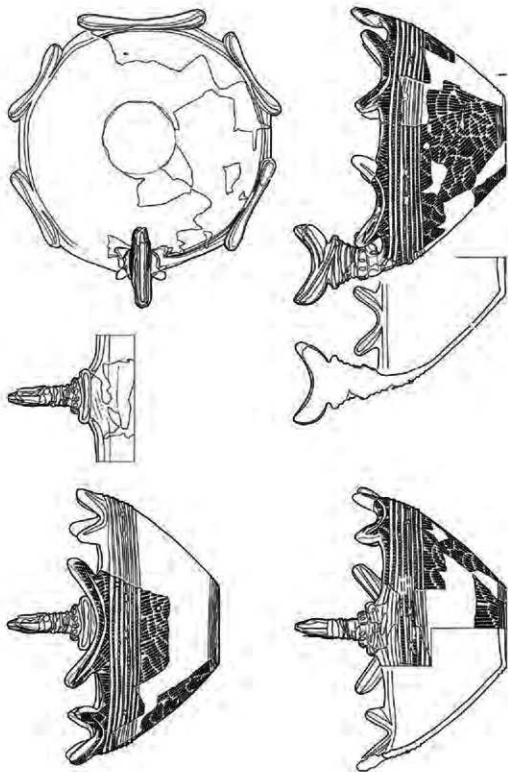
0 5m



H-19

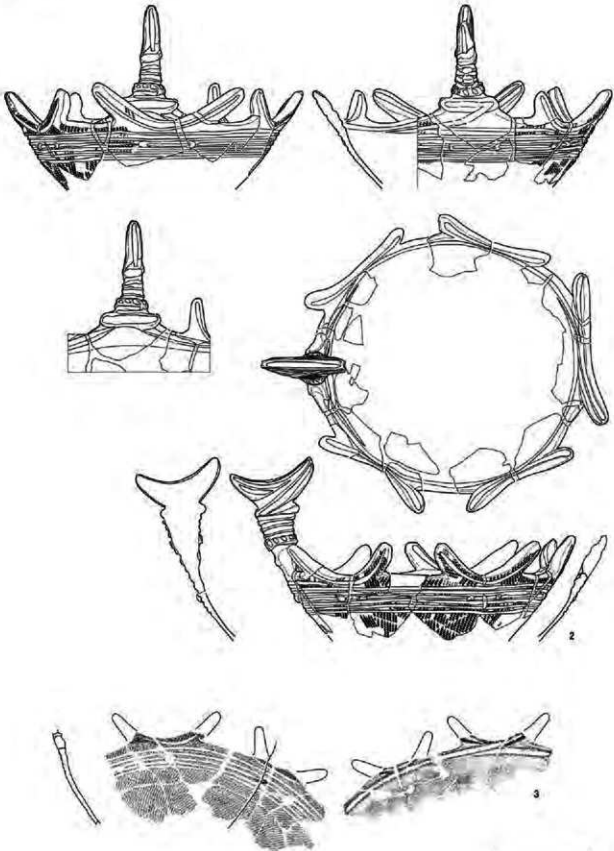


図V-142 包含層土器 V群C類 (3)



图V-143 包含层土器 V群C类 (4)

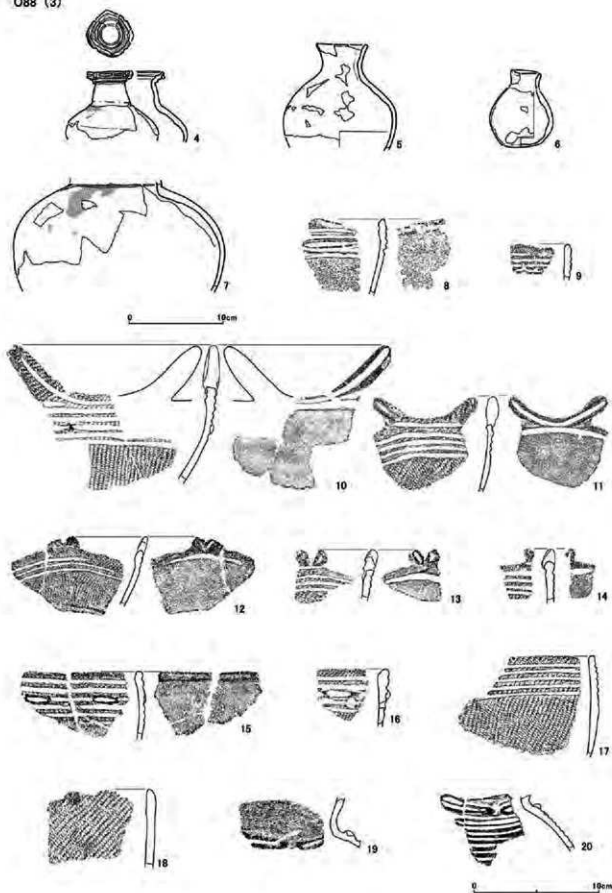
O88 (2)



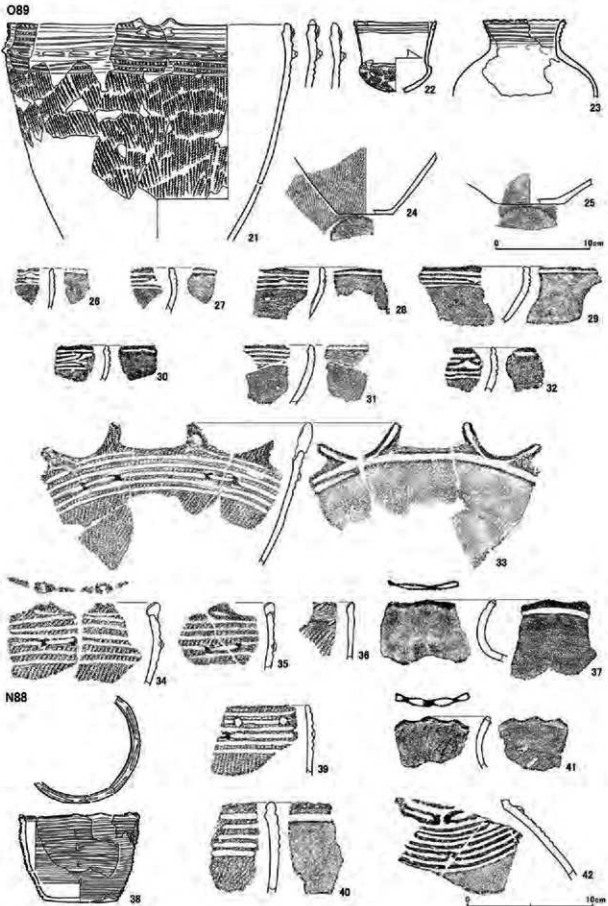
図V-144 包含層土器 V群C類 (5)

0 10cm

O88 (3)

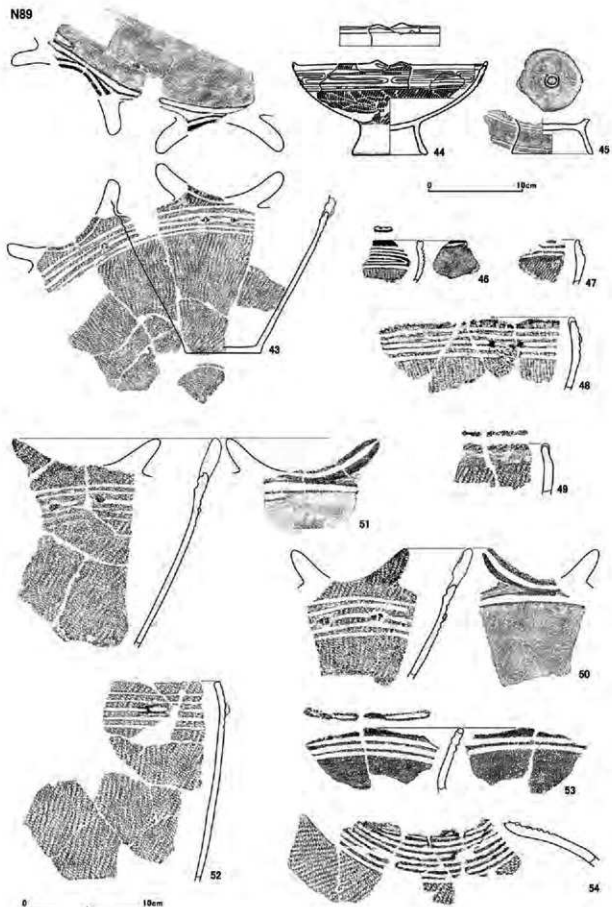


图V-145 包含层土器 V群C类 (6)



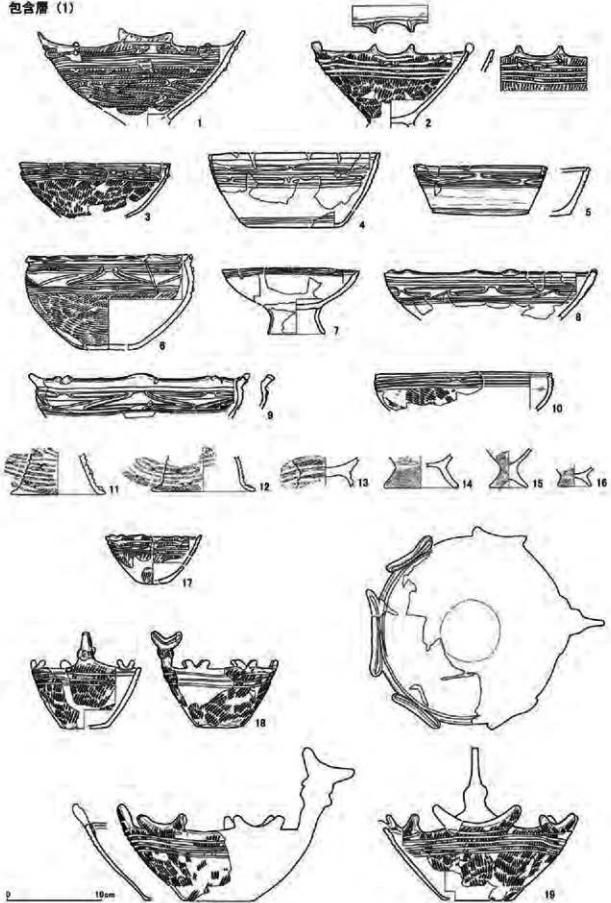
図V-146 包含層土器 V群C類 (7)

N89



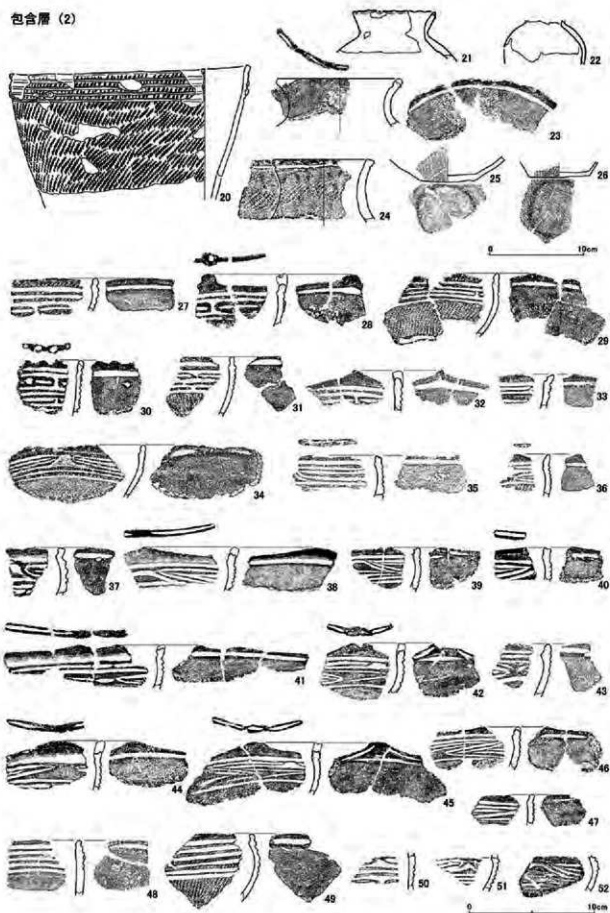
图V-147 包含层土器 V群C类 (8)

包含層 (1)



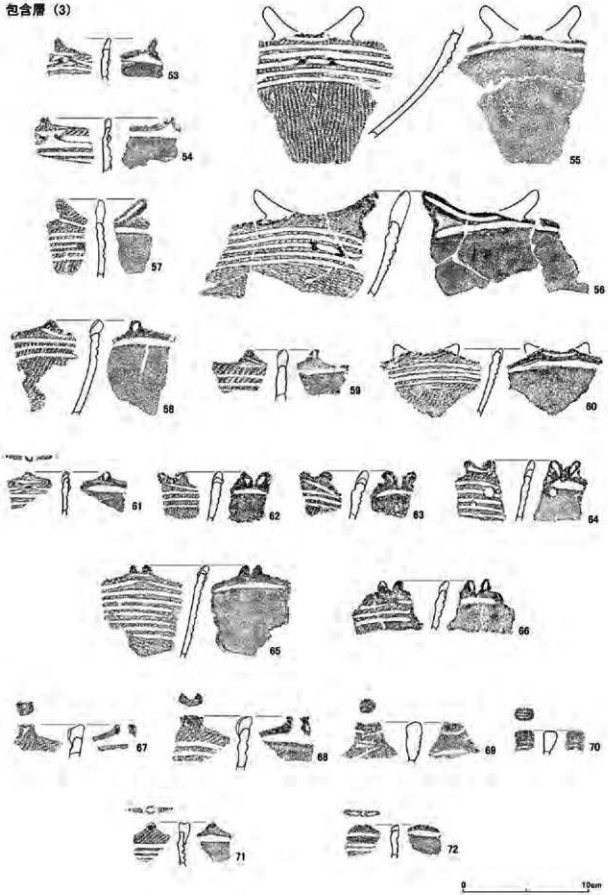
図V-148 包含層土器 V群C類 (9)

包含層 (2)



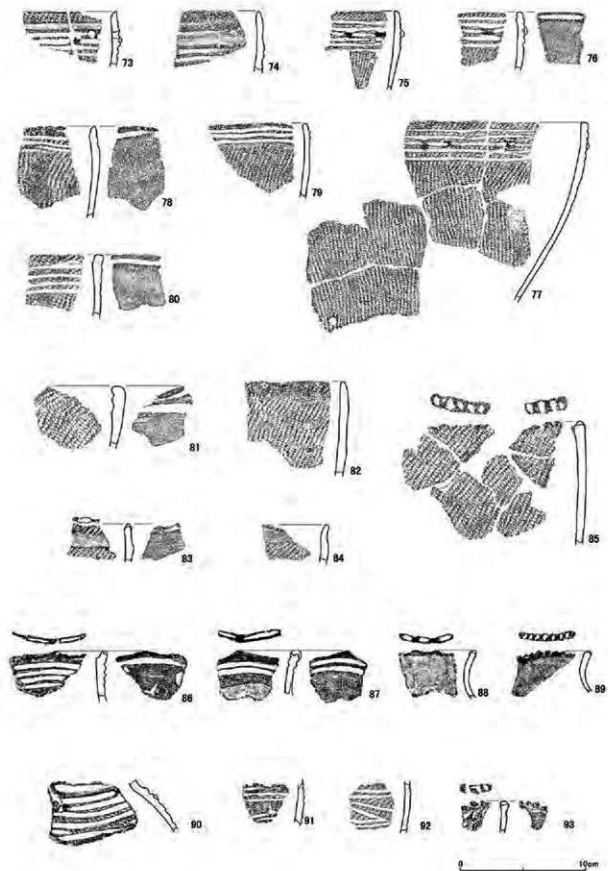
图V-149 包含层土器 V群C类 (10)

包含層 (3)



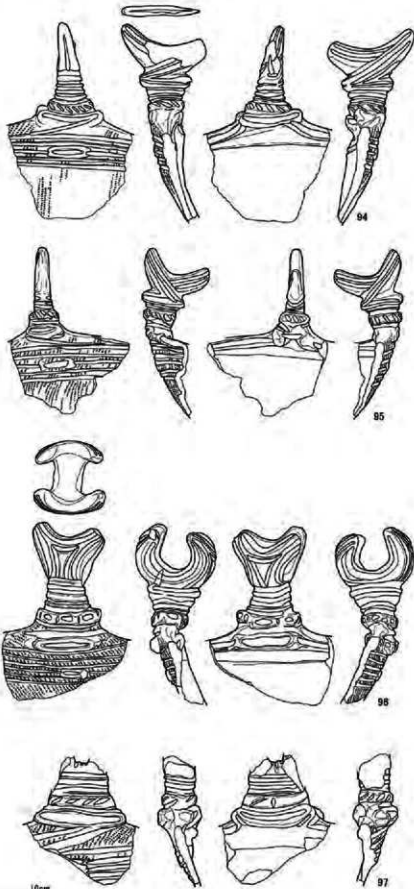
図V-150 包含層土器 V群C類 (11)

包含層 (4)



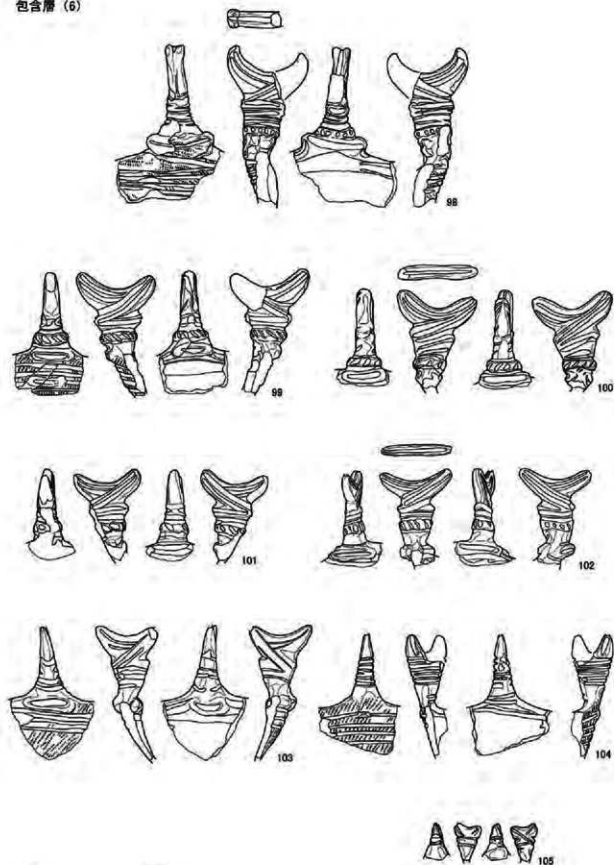
图V-151 包含層土器 V群C類 (12)

包含層 (5)

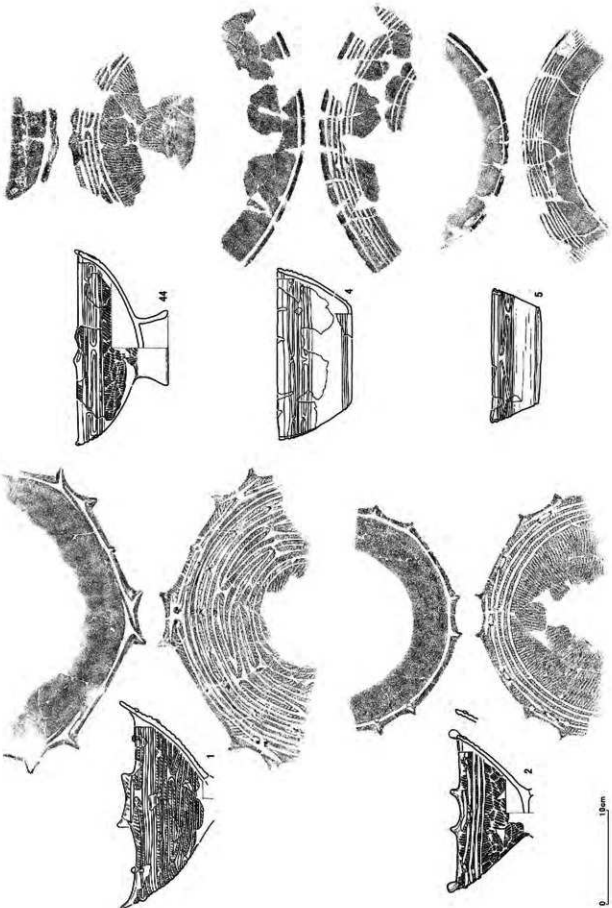


図V-152 包含層土器 V群C類 (13)

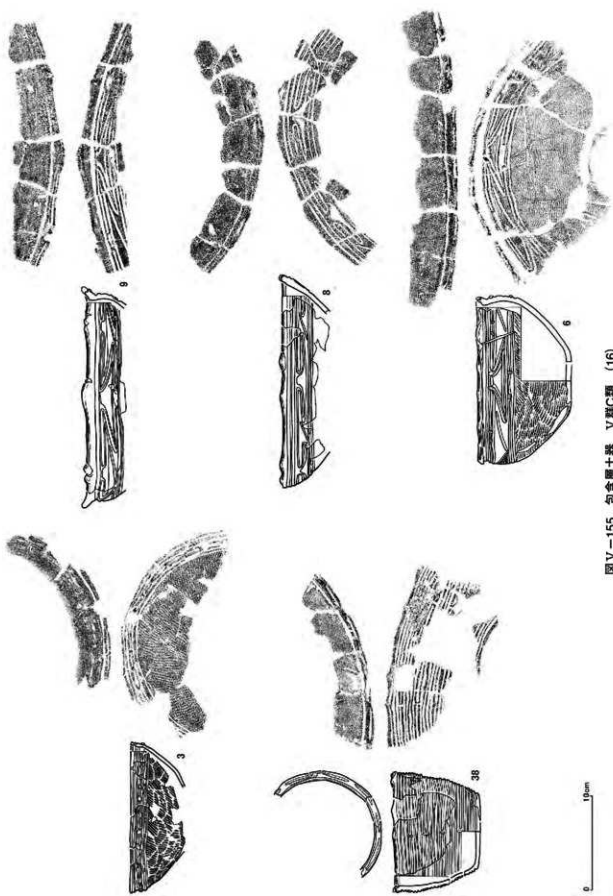
包含層 (6)



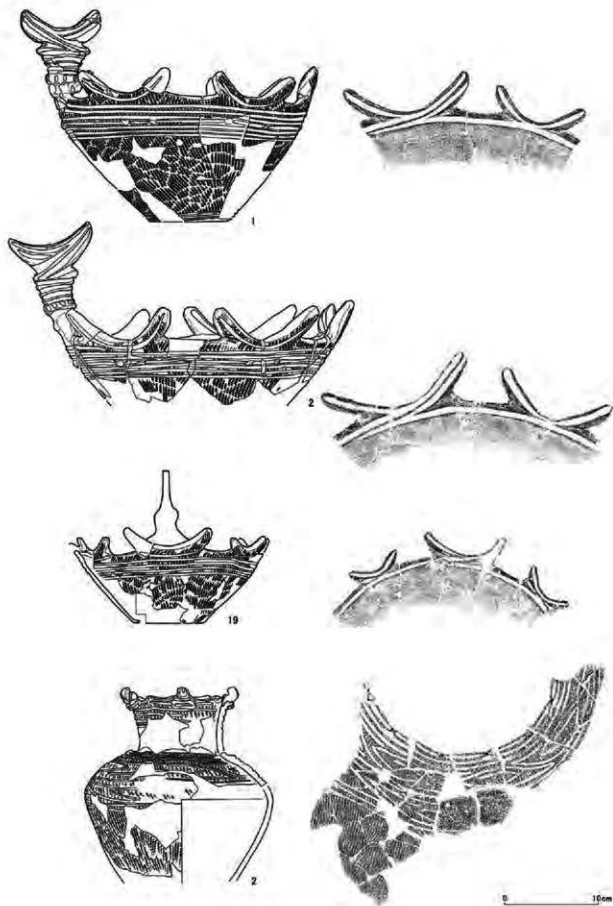
图V-153 包含层土器 V群C类 (14)



図V-154 包含層土器 V群C類 (15)



图V-155 包含层土器 V群C類 (16)



図V-156 包含層土器 V群C類 (17)

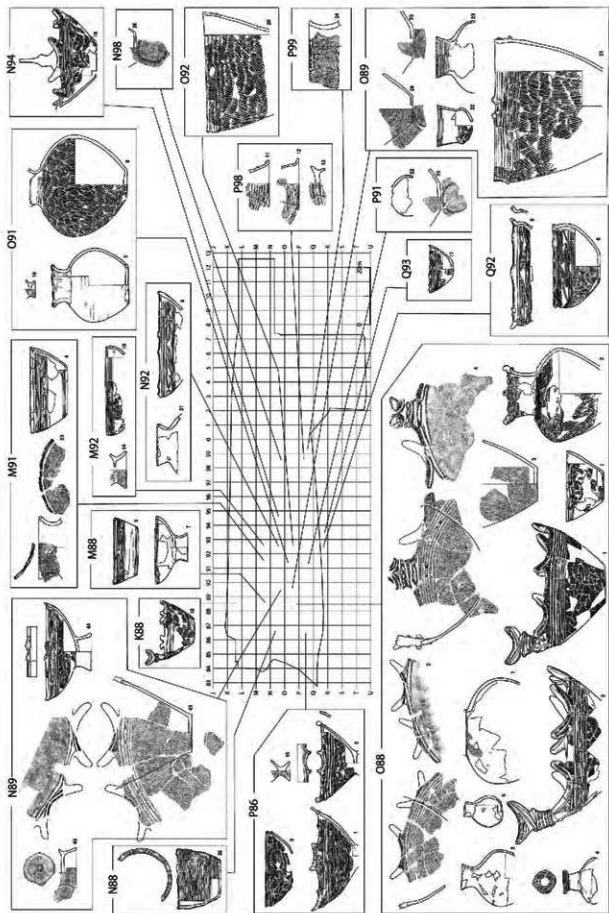
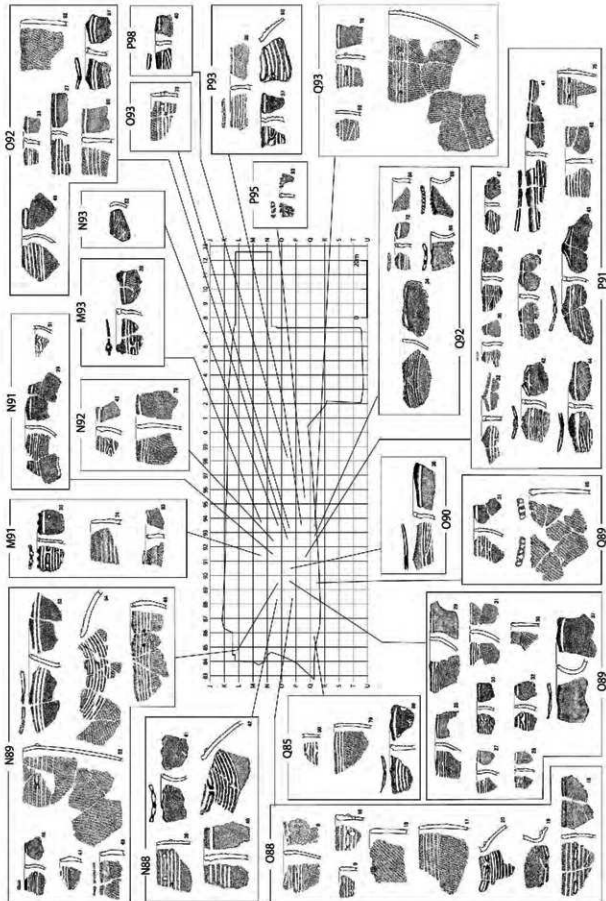
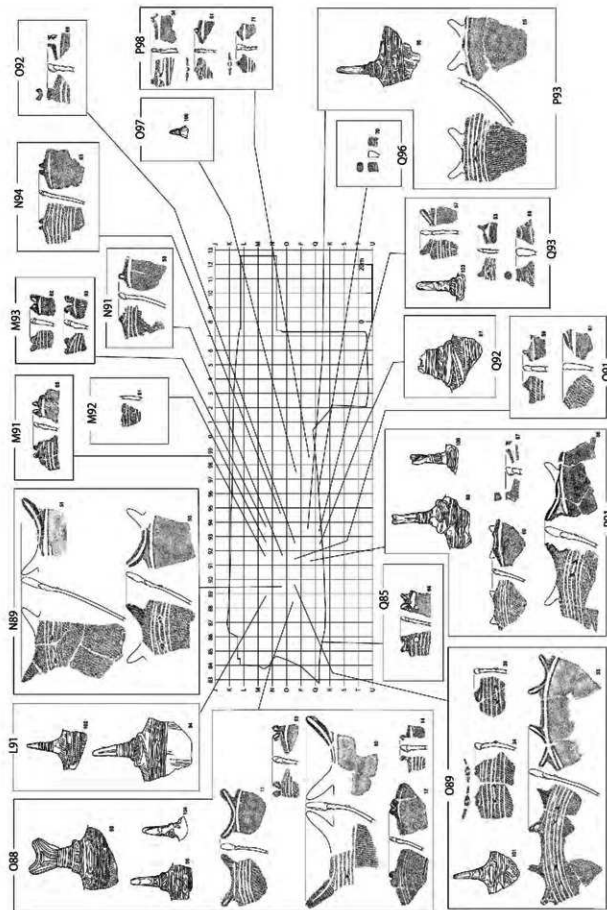


圖 V-157 包含層土器 V 群C類 (18)



図V-158 包含層土器 V群C類 (19)



圖V-159 包含層土器 V群C類 (20)

(2) 石器等 (図V-160～207-1～622/表V-3/図版137～155)

1 概要

遺跡の盛土遺構および包含層から出土した石器等は212,182点である。盛土遺構から出土したものは149,621点、包含層から出土したものは62,561点である。器種は石鏃、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、たたき石、すり石が多く出土している。特にスクレイパー、たたき石、すり石が多く出土している。長さが20cmを超えるような大型の礫石器は非常に少ない。また、石製品では、異形石器、ミニチュアのみつまみ付ナイフ、軽石製石製品、滑石製の玦状耳飾りや垂飾などが出土している。石器等の分布傾向は盛土遺構の範囲と重なり、95～1線間に非常に多く、1グリッドあたり約2,000～9,000点の石器等が出土している。また、86～92線間でも1グリッドあたり1,000点を超える石器等が出土している。剥片石器の石材はほとんどが頁岩で、黒曜石やチャート製のものが若干みられる。礫石器の石材は砂岩、泥岩、凝灰岩、安山岩、頁岩が多くを占める。

2 出土遺物

石鏃 (図V-160・161-1～78/表V-3/図版137)

石鏃は550点出土している。無茎鏃凹基8点、無茎鏃平基19点、有茎鏃105点、尖基鏃190点、円基鏃87点、破片等141点である。分布は石器等の出土傾向と同様で、特にL～N96～99区から多く出土している。石材は頁岩465点、黒曜石65点、チャート10点、メノウ9点、泥岩1点である。このうち78点を掲載した。

1～7は無茎鏃。1～3は凹基のもの、4～7は平基のもの。1・2は挟りの深いもの。3は挟りの浅いもの。4・5は基部：長さが1：1.5以下の正方形に近いもの。6・7は1：1.5以上で二等辺三角形のもの。5は球果のある黒曜石製、その他は頁岩製。

8～26は有茎鏃。8～13は平基のもの。12は基部につまみ状の挟りがみられる。12・13は厚みがあるので石槍の可能性もある。14～26は凸基のもの。14～19は返しのあるもの。20～26は返しの不明瞭なもの。22～24は幅が細くてやや厚みがあり柳葉形の形状をしている。24の基部にアスファルトの付着が確認できる。26は厚みがあり基部につまみ状の加工があることから、つまみのある石槍または両面加工のみつまみ付ナイフの可能性もある。8はメノウ製、10は赤色のチャート製、20は白色のチャート製、12・26は球果のある黒曜石製、21は透明感のある黒曜石製、22は黒曜石製、その他は頁岩製。

27～67は尖基のもの。27～42は菱形に近い形状のもの。43～61は紡錘形の形状をしたもの。60・61は基部両側縁に挟りが入っている。62～67は刃部側縁が内彎する形状をしたもの。28・30・34・60・66は球果のある黒曜石製、44・50は透明感のある黒曜石製、その他は頁岩製。

68～78は円基のもの。68～76は刃部側縁が直線状になっているもの。77・78は刃部側縁が外彎しているもの。69・70は白色のチャート製、73は透明感のある黒曜石製、その他は頁岩製。

石錐 (図V-161・162-79～99/表V-3/図版138)

石錐は194点出土している。棒状や紡錘形のもの66点、つまみ部のあるもの5点、剥片の一部に機能部を作出したもの114点、石鏃などの転用品9点である。分布はM～N96～99区から特に多く出土している。使用される石材は、頁岩182点、黒曜石7点、チャート1点、泥岩3点、砂岩1点である。このうち21点を掲載した。

79～83は棒状のもの。79～81は全面を加工して棒状にして先端部に機能部を設けているもの。79・81は両端部を使用している。80・81の先端部には使用による磨滅がみられる。82・83は棒状の削

片を加工して先端部に機能部を設けているもの。すべて頁岩製。

84～86は両面調整で紡錘状に加工して先端部に機能部を作出したのもの。両端部を使用しており、85・86の先端部には使用による磨滅がみられる。すべて頁岩製。

87～91はつまみ部のあるもの。87はつまみ付ナイフの下端部に機能部を作出したのもの。88～91は全面を両面調整で棒状に加工し下端部に機能部を作出したのもの。87・88・89・91の先端部には使用による磨滅がみられる。91の先端部には使用による光沢が確認できる。90の先端部には微細な剥離がみられる。すべて頁岩製。

92～97は剥片の一部に機能部を作出したのもの。93の先端部には使用による磨滅がみられる。96の先端部は被熱して黒色になっている。97は両面調整によってT字状に整形し、非常に細い機能部を作出している。97は球果のある黒曜石製、その他は頁岩製。

98・99は石織の転用品。有茎錐平基の石織の尖頭部に機能部を作出している。使用による磨滅がみられる。すべて頁岩製。

石槍・ナイフ (図V-162・163-100～113 / 表V-3 / 図版138)

石槍・ナイフは240点出土している。半分以上残存するものは80点で、破片が160点である。分布は石器等の出土傾向と同様でL～N96～99区から特に多く出土している。使用される石材は、頁岩234点、黒曜石1点、チャート2点、泥岩3点である。このうち14点を掲載した。

100～104は有茎のもの。100・101は刃部側縁が直線的なもの。102～104は刃部側縁が外彎するもの。104は基部下端が破損しており、一部再調整が施されている。両頭石槍のようなものであった可能性がある。102は赤色のチャート製、その他は頁岩製。

105は尖基で紡錘形のもの。106・107は円基で柳葉形のもの。すべて頁岩製。

108～113は基部がつまみ状になっているもの。両面調整で基部下端両側縁に抉りが入っている。両面調整のつまみ付ナイフの可能性もある。108は黒曜石製、その他は頁岩製。

つまみ付ナイフ (図V-163～165-114～132 / 表V-3 / 図版138・139)

つまみ付ナイフは638点出土している。半分以上残存するものは511点で、破片が127点である。分布は石器等の出土傾向と同様で、特にL～N96～99区から多く出土している。使用される石材は、頁岩591点、黒曜石33点、チャート6点、泥岩1点、メノウ7点である。このうち19点を掲載した。

114～128は縦型で片面加工のもの。縦長剥片の上端両側縁に抉りを入れてつまみ部を作出している。115はつまみ部と刃部に50°ほどの傾きがある。114～116は側縁に刃部を設けている。117～119は下半部がU字状の刃部になっている。119は側縁を内彎させて刃部を作出している。つまみ部と刃部に50°ほどの傾きがある。120は右側縁が大きく外彎し、半円状になっている。121・122は下半部が切り出し状になっている。123は下端部に抉りがある。124～128は腹面側縁に調整があるもの。下半部は切り出し状の刃部をしている。127の刃部下端は再調整されている。128はつまみ部を明確に作り出されていないが、形状からつまみ付ナイフとした。115・118・124はチャート、その他は頁岩製。124は赤色のチャートである。115～117・120～122・126には使用痕とみられる光沢が確認できる。

129～131は縦型で両面加工のもの。130・131はつまみ部のある石槍の可能性もある。129は透明感のある黒曜石製、130は球果のある黒曜石製、131は灰白色のメノウ製である。

132は横型のもの。縦長剥片の側縁につまみ部を作出し、周縁を加工して刃部を作出している。使用痕とみられる光沢が確認できる。頁岩製。

スクレイパー (図V-165～172-133～219 / 表V-3 / 図版139～141)

スクレイパーは2,959点出土している。分布は石器等の出土傾向と同様で、特にL～N95～99区か

ら多く出土している。使用される石材は、頁岩2,911点、黒曜石7点、チャート9点、泥岩22点、メノウ6点、安山岩2点、珪岩1点、流紋岩1点である。このうち87点を掲載した。

133～140はへら状のもの。両面調整で下端部に急角度の刃部が設けられている。すべて頁岩製。

141～143はトランシェ様石器と類似した形状のもの。横長剥片を使用し、下半部に大きな剥離面を残して下端部を直線状の刃部にしている。下端部には微細な剥離痕がみられる。すべて頁岩製。

144～151は下端部に急角度の刃部が設けられているもの。144・147・150は下端部が直線状のもの、145・146・148・149・151は下端部がU字状のもの。すべて頁岩製。

152～161は縦長剥片の側縁に直線状の刃部を設けているもの。153～159には使用痕とみられる光沢が確認できる。すべて頁岩製。

162・163は縦長剥片の側縁に直線的な刃部、下端に急角度の直線的な刃部を設けたもの。163には使用痕とみられる光沢が確認できる。162は球果のある黒曜石製、163は頁岩製。

164～169は横長剥片の側縁に刃部を設けたもの。164～168は刃部が直線状～弱く外彎している。169は平行四辺形状で、平行する辺に錯行剥離で片面調整の刃部を両面に作り出している。すべて頁岩製で使用痕とみられる光沢が確認できる。

170～183は縦長剥片の側縁に外彎する刃部を設けたもの。172～177・180・182・183には使用痕とみられる光沢が確認できる。179は一部を両面調整で薄い刃部を作出している。すべて頁岩製。

184～191は縦長剥片の側縁に外彎する刃部と直線状の刃部を設けたもの。184～187・190・191には使用痕とみられる光沢が確認できる。直線状の刃部部分に光沢が多く確認できる。すべて頁岩製。

192～197は縦長剥片の下端部をV字状にしているもの。194は両側縁の中央が弱く内彎している。195の両側縁には片面調整の刃部が錯行剥離で作出されており、左側縁は弱く内彎する。196・197はく字状に整形されている。明瞭な光沢は確認できない。すべて頁岩製。

198～200は剥片の側縁に内彎する刃部を設けたもの。198は石錐として使用された可能性がある。すべて頁岩製。

201～205は抉入の刃部があるもの。203・204は抉りの深い刃部がある。すべて頁岩製。

206～216は剥片長軸両端に抉入のあるもの。長辺側縁には直線状～外彎する刃部が設けられている。208・210～216には刃部に使用痕とみられる光沢が確認できる。すべて頁岩製。

217～219は鋸歯状の刃部を設けたもの。218は腹面周縁を調整したのち、背面周縁を鋸歯状にしている。すべて頁岩製。

両面調整石器 (図V-172～178-220～256/表V-3/図版141～143)

両面調整石器は610点出土している。両面調整で調整が粗いものをここに分類した。分布は石器等の出土傾向と同様で、特にK～N95～0区から多く出土している。使用される石材は、頁岩595点、チャート2点、泥岩10点、メノウ1点、凝灰岩2点である。このうち37点を掲載した。剥片集中からも多く出土し、剥片と接合して多くの接合資料を得ている(図IV-33～49-1～35)。盛土遺構・包含層出土のものと同様で、多くの接合資料が得られたと考えられる。

220～225は尖頭器状で柳葉形のもの。226～312は尖頭器状で木葉形のもの。313～318は長楕円形のもの。318は側縁が鋸歯状になっている。319～323はへら形のもの。324～337は円～楕円形のもの。すべて頁岩製。

石斧 (図V-179～181-257～273/表V-3/図版144)

石斧は252点出土している。半分以上残存するものは67点で、破片122点や細片63点が多い。分布は石器等の出土傾向と同様で、特にM～N96～99区から多く出土している。使用される石材は、緑色

泥岩146点、泥岩57点、片岩24点、砂岩17点、安山岩4点、かんらん岩2点、頁岩1点、凝灰岩1点である。このうち17点を掲載した。

257～260は撥形のもの。257は両刃で直刃。楕円礫を研磨して整形し、下端部に刃部を作出している。258～260は両刃で円刃。258は扁平な楕円礫の下端部を研磨して刃部を作出している。259は全面を研磨によって整形している。刃部右側がやや上がっており、使用による再調整とみられる。260は扁平礫の両側縁を加工して研磨で撥状に調整し、刃部を作出している。刃部右側がやや上がっており、使用によって再調整されたものと考えられる。257・258・260は泥岩製、259は角閃岩製。

261～273は短冊形のもの。261～263は片刃で直刃。261は扁平に剥離された礫片を短冊形に加工して側縁を研磨し、刃部を作出している。262は全面を研磨して整形し、刃部を作出している。263は扁平な薄い礫の側縁を打ち欠いて短冊状に整形し、刃部を作出している。264は片刃で円刃。基部を折損している。全面を研磨して調整している。鋸が明瞭にみられる。265・266は両刃で直刃。基部を折損している。265は擦り切り痕が残存している。全面を研磨で整形している。刃部右側がやや上がり、使用による再調整が考えられる。266は全面を研磨で整形している。刃部右側が約15°上がり、使用による再調整が考えられる。267～269は両刃で円刃。全面を研磨で調整している。269は刃部が右側下方に約10°傾く。アスファルトとみられる黒色の付着物が基部背面付近を除き付着している。270～272は刃部に敲打痕がみられるもの。基部を折損している。両側縁に敲打痕がみられる。石斧として使用されて破損したのち、たたき石として再利用された可能性がある。270は折損した基部を敲打によって再調整している。両刃の円刃で全面を研磨によって調整している。271は全面を研磨によって調整している。刃部右側が約10°上がり、使用による再調整が考えられる。両側縁は敲打によって再調整されて弱く内彎し、握部のようにになっている。272は全面を研磨によって調整している。刃部右側が約15°上がり、使用による再調整が考えられる。両側縁は敲打によって再調整されて弱く内彎し、握部のようにになっている。273は未成品。敲打によって整形し、全面を研磨によって調整されている。刃部を作出せずに作成をやめたものと考えられる。261・269は泥岩製、262・264～268・270・271・273は緑色泥岩製、263は片岩製、272は角閃岩製。

石のみ (図V-182-274～284/表V-3/図版144)

石のみは27点出土している。半分以上残存するものは21点で、破片が6点である。分布はL～M 98・99区付近から出土しており、86～92線間からの出土は少ない。使用される石材は、緑色泥岩11点、泥岩11点、片岩4点、凝灰岩1点である。このうち11点を掲載した。

274・275は短冊形で片刃のもの。274は礫片を短冊形に加工し、研磨して調整している。275は扁平な楕円礫の全面を研磨し、刃部を作出している。276・277は棒状のもの。276は右側縁に擦り切り痕が残る。全面を研磨で調整し、片刃の刃部を作出している。277は棒状礫の全面を研磨によって調整し、両刃の刃部を作出している。278・279は急角度の片刃の刃部があるもの。278は左側縁に擦り切り痕がみられる。全面を研磨で調整し、刃角約45°の刃部を作出している。279は両側縁に擦り切り痕がみられる。全面を研磨で調整し、刃角約45°の刃部を作出している。280～282は小型扁平礫の端部に両刃の刃部を設けたもの。283・284は擦り切り残片の端部に片刃の刃部を設けたもの。274・276・277・283・284は緑色泥岩製、275・280～282は泥岩製、276・277は片岩製。

擦り切り残片 (図V-183-285～287/表V-3/図版144)

擦り切り残片は19点出土している。使用される石材は、緑色泥岩17点、泥岩1点、砂岩1点である。このうち3点を掲載した。

285は原材料の長辺を擦り切ったものをさらに短辺で擦り切ったもの。下端部右側縁を一部研磨して

V字状にする加工がみられる。286は両面から擦り切り作業を行い、折り取る際に意図しないところで破損したもの。287は扁平礫を両面から擦り切り作業を行い、折り取った残片である。すべて緑色泥岩製。

たたき石 (図V-183～186-288～326/表V-3/図版144・145)

たたき石は951点出土している。半分以上残存するものが813点で、破片が138点である。分布は石器等の出土傾向と同様で、特にL～O95～99区から多く出土している。使用される石材は、凝灰岩217点、泥岩207点、砂岩203点、頁岩104点、安山岩93点、チャート80点、珪岩22点、メノウ9点、片岩5点、緑色泥岩5点、閃緑岩2点、花崗岩2点、玄武岩1点である。このうち39点を掲載した。

288～295は楕円礫や棒状礫などの端部に敲打痕のあるもの。294は擦り切り残片の下端部に敲打痕がある。295は側縁にも敲打痕がある。296～297は礫の四隅に敲打痕があるもの。298は扁平な楕円礫の角と側縁に敲打痕がある。288・291～293・295・298は砂岩製、289はチャート製、290は泥岩製、294は緑色泥岩製、296・297は頁岩製。

299～313は広い敲打面のあるもの。299～308は扁平な棒状礫や楕円礫の端部を使用した錐形のもの。299は研磨による整形がみられ、石斧の再利用品と考えられる。両端部に長軸に対して約20°傾く平坦な敲打面が設けられている。300は両端部に長軸に対して約10°傾く平坦な敲打面が設けられている。301は左側縁に幅の狭いすり面があり、すり石としても使用されていたと考えられる。下端部に長軸に対して約20°傾く平坦な敲打面が設けられている。302は両端部に円弧状の敲打面があり、下端部の一部に長軸に対して約22°傾く平坦な敲打面が設けられている。303は両端部に長軸に対して約20～30°傾く平坦な敲打面が設けられている。304は下端部に長軸に対して約8°傾く平坦な敲打面が設けられている。305は両端部に長軸に対して16～27°傾く平坦な敲打面が設けられている。下端部は稜があり2面の敲打面がある。306は扁平な楕円礫の下端部に長軸に対して約30°傾く平坦な敲打面が設けられている。307は扁平な棒状礫の下端部に円弧状の敲打面が設けられている。上端部・両側縁にも敲打痕がみられる。308は扁平な楕円礫の両端部に長軸に対して約30°傾く平坦な敲打面を設けられている。上端部には稜があり2面の敲打面がある。309は扁平礫の亜円礫の側縁に広い敲打痕のあるもの。310～313は拳大の円礫に広い敲打面を設けているもの。310は周縁に敲打面を複数設けている。311は下半部に平坦な敲打面を複数設けている。312は楕円礫の下端部に円弧状の敲打面がある。敲打面はかなり磨滅しており、すり石の可能性もある。313は楕円礫の下端部に軸に対して約20°傾く平坦な敲打面が設けられている。301～305・307・308・310～312の敲打面には磨滅したような面があり、すり痕のようにも見える。299・301・302・305・307・308・311は砂岩製、300・306・310はチャート製、303は安山岩製、304・309は頁岩製、312・313は珪岩製。

314・315は三角形礫の端部に敲打痕があるもの。316・317は楕円礫の側縁に敲打痕のあるもの。318・319は扁平な楕円礫の平坦面に敲打痕のあるもの。318の平坦面中央には楕円形の平坦な敲打面が作られている。320・321は扁平な楕円礫の側縁と平坦面に敲打痕のあるもの。321の平坦面中央には円形の平坦な敲打面が作られている。322は棒状の亜角礫の平坦面に敲打痕のあるもの。323は扁平な楕円礫の両端部・側縁・平坦面に敲打痕のあるもの。平坦面の敲打痕は弱く凹んでいる。側縁は打ち欠いて幅の非常に狭い直線状の機能部を作出しているように見えることから、扁平打製石器のように利用された可能性がある。314は緑色泥岩製、315は安山岩製、316・318・323は砂岩製、317・319～322は泥岩製。

324は円礫の全面に敲打痕のあるもの。赤色のチャート製。325・326は礫の端部角に敲打痕があるもの。礫表面の全面にすり痕がみられ、すり石との併用もしくは転用と考えられる。いずれも泥岩製。

凹み石 (図V-186・187-327～341/表V-3/図版145・146)

凹み石は254点出土している。半分以上残存するものは157点で、破片が97点である。分布は石器等の出土傾向と同様で、特にM90区付近とM97区付近からやや多く出土している。使用される石材は、泥岩233点、砂岩6点、凝灰岩5点、安山岩8点、チャート1点、軽石1点である。このうち15点を掲載した。

327～332は扁平礫の平坦面に断面V字状の凹みのあるもの。328は平坦面にすり痕がみられることからすり石の転用品の可能性がある。すべて泥岩製。

333～337は礫の平坦面や側面に凹みのあるもの。333・334は断面半円形と断面V字状の凹みがある。335は割り取って角礫状にしたものの平坦面に断面V字状の凹みを作出している。336・337は断面V字状の凹みが平坦面と側縁にみられる。

338～340は線刻礫からの転用品。338は断面V字状の凹みが平坦面と側縁にみられる。側縁は鋸歯状になっている。平坦面には線刻がみられる。線刻後に凹みを作っている。被熱している。339は断面V字状の凹みが平坦面にみられる。平坦面には線刻がみられる。線刻後に凹みを作っている。被熱している。340は扁平礫の平坦面にすり痕があり、線刻がみられる。そこに敲打痕や断面V字状の凹みが設けられている。平坦面に未貫通の穿孔痕が6か所確認できる。上部に5か所、右側に1か所である。穿孔部は底面が直径約2mm、上面が約2・5・7mm、深さ2・3・8mmである。おそらく同じ器具を用いて穿孔したと考えられる。上部の5か所は穿孔部の配置から人面状に見える。341は砥石からの転用品。砥石の破損品を再利用し、断面V字状の凹みを平坦面に作出している。327～340は泥岩製、341は砂岩製。

すり石 (図V-188～195-342～425/表V-3/図版146～150)

すり石は992点出土している。北海道式石冠、扁平打製石器、その他のすり面のあるものをすり石として扱った。内訳は北海道式石冠が154点、扁平打製石器が718点、その他のすり石が120点である。半分以上残存するものは北海道式石冠が51点、扁平打製石器が281点、その他のすり石が76点で合計337点、破片は北海道式石冠が103点、扁平打製石器が437点、その他のすり石が44点で合計584点である。分布は石器等の出土傾向と同様で、特にN88区付近・L90区付近・L-O95～99区から多く出土している。使用される石材は、安山岩635点、砂岩221点、凝灰岩62点、泥岩45点、頁岩15点、閃緑岩7点、片岩3点、角閃岩2点、斑レイ岩1点、珪岩1点である。すり石9点、北海道式石冠18点、扁平打製石器57点の合計84点を掲載した。

342～348は扁平礫の長辺側縁に幅の狭いすり面を作出したもの。敲打によって敲打面を整形し、その部分を使用してすり面が形成されている。347は端部に敲打痕がみられる。342・344・345は泥岩製、343・346・347は砂岩製、348は安山岩製。

349・350は断面三角形の礫の辺に幅の狭いすり面を作出しているもの。敲打によって敲打面を整形し、その部分を使用してすり面が形成されている。350は側縁部にも敲打痕が伸びている。扁平打製石器のような使用面である。349は安山岩製、350は緑色泥岩製。

351～356は半割した礫の断面部分を使用してすり面としたもの。353の側縁には幅の狭いすり面があることから、すり石の破損品の再利用と考えられる。354の側縁と端部に敲打痕があり、たたき石の破損品を再利用したと考えられる。356の左側縁には幅の狭いすり面があり、そこを打ち欠いて抉りを入れている。上端部と右側縁、平坦面には敲打痕がある。351・353～356は砂岩製、352は泥岩製。

357～363は礫表面にすり痕のあるもの。加工はされておらず原石をそのまま利用している。357～360は礫の全面にすり痕がみられる。361は礫の背面にすり痕がみられ、腹面に比べてやや黒ずん

だ色をしている。362は扁平礫の両平坦面にすり痕がみられる。363は礫の平坦面にすり痕とみられる光沢が確認できる。357～359・362は泥岩製、360は安山岩製、361は頁岩製、362は砂岩製。

364は扁平礫の両側縁に敲打によって幅の狭いすり面を作出したすり石の破損品を再利用したもの。破損面を打ち欠いて扁平打製石器のような幅の非常に狭い機能面を作出するとともに、背面を敲打によって平坦に加工してすり面を作出している。砂岩製。

365～382は北海道式石冠。365～381は全面を敲打によって整形され、握部が作出されている。365・366・368のすり面は敲打による調整が多く残り、すり痕がほとんど見られない。ほとんど使用されなかった、もしくは再調整の可能性がある。367・369・371～373・378・380のすり面は長軸方向・短軸方向に弱く外彎する。378は被熱しているが、被熱後に再調整されて使用している。374～377・379は短軸方向の片側にすり面が傾いている。374・375・379はすり面が約15°、376は約25°、377は約10°の傾きがある。370・381は破損後も再調整されて使用されている。382は握部と使用面を敲打によって作出されている。365～370・372・373・379・381・382は安山岩製、371・374～378は砂岩製、380は斑レイ岩製。

383～425は扁平打製石器。板状礫や扁平礫の長辺を打ち欠いて機能部を作出している。

383～399は半円状のもの。板状礫の周縁を打ち欠いて半円状に整形し、弦の部分に非常に狭い機能部を作出している。392～399は片方もしくは両方の端部を弦に対して垂直に整形している。383・385・387～397は安山岩製、384・386・399は泥岩製、398は砂岩製。

400～410は長軸端部に抉りを設けているもの。401・402は板状礫を長方形に整形し、長辺に非常に幅の狭い機能部を作出している。短辺には抉りを設けている。401は両側縁に機能部を設けている。403～410は扁平な楕円礫の片側縁を打ち欠いて機能部を作出し、長軸端部に抉りを設けている。407・408・410の機能部には、やや幅の広いすり面が作出されている。406～411の平坦面には敲打痕がある。408・410には被熱痕がみられる。400・401・406・407・409は安山岩製、402は泥岩製、403は角閃岩製、404・405・408・412は砂岩製。

411・412は半円状のものの円弧部に抉りのみられるもの。いずれも安山岩製。

413～418は扁平礫の長側縁を打ち欠いて非常に狭い機能部を作出しているもの。414は両側縁に機能部を作出している。417の平坦面には敲打痕がみられる。413・418は安山岩製、414・416は泥岩製、415・417は砂岩製。

419～423は板状礫の側縁を打ち欠いて非常に狭い機能部を作出しているもの。420には幅5mmほどの明瞭なすり面が形成されている。すべて安山岩製。

424・425は板状に剥離した礫片の側縁を打ち欠いて非常に幅の狭い機能部を作出したもの。424は片岩製、425は砂岩製。

石鋸 (図V-195・196-426～438 / 表V-3 / 図版150)

石鋸は117点出土している。半分以上残存するものは25点で、破片が92点である。分布は石器等の出土傾向と同様で、特にM～N97～99区から多く出土している。使用される石材は、安山岩64点、砂岩24点、凝灰岩9点、粘板岩7点、泥岩6点、片岩3点、頁岩1点、チャート1点、流紋岩1点、緑色泥岩1点である。うち13点を掲載した。

426～429は板状礫を半円状に整形しているもの。426～428は弦の部分と円弧の部分に断面U字状の機能部を作出している。429は弦の部分に断面U字状の機能部を作出している。すべて安山岩製。

430～437は直線状の機能部のあるもの。430は断面V字状の機能部を作出している。431・432は扁平礫の側縁に断面U字状の機能部を作出している。433は板状礫の側縁に断面U字状の機能部を作出

している。434～437は複数の機能部を作出しているもの。434は板状礫の側縁に断面U字状の機能部を4か所作出している。435は板状礫の側縁に断面U字状と断面V字状の機能部を1か所ずつ作出している。436は板状礫の両長辺に断面U字状の機能部を作出している。437は断面平行四辺形の柱状礫の鋭角辺に機能部を作出している。430は片岩製、431・432は凝灰岩製、433・435～437は安山岩製、434は砂岩製。

438は板状礫の側縁に内彎する断面U字状の機能部があるもの。凝灰岩製。

砥石 (図V-196-439～444 / 表V-3 / 図版150・151)

砥石は105点出土している。半分以上残存するものは12点で、破片が93点である。分布は石器等の出土傾向と同様で、特にM～N96～99区から多く出土している。使用される石材は、砂岩91点、泥岩5点、凝灰岩5点、安山岩2点、軽石2点である。うち6点を掲載した。

439～442はすり面が浅く凹むもの。439は腹面に断面半円形の凹みがみられ、凹み石と併用していたと考えられる。441・442は両面にすり面がある。442は両面に幅0.1～0.7mmほどの不規則な線刻がみられる。443はすり面が深く凹むもの。すり面は3面確認できる。両面に幅0.7～1.5mmほどの線刻がすり面の方向と同じ方向にみられる。444は浅いすり面の砥石のすり面に、溝状のすり痕や線刻が不規則にあるもの。439～441・443は砂岩製、442・444は泥岩製。

石錘 (図V-197・207-445～449・622 / 表V-3 / 図版151)

石錘は27点出土している。半分以上残存するものは21点で、破片が6点である。分布はN98区付近から多く出土している。使用される石材は、凝灰岩10点、砂岩5点、泥岩4点、安山岩4点、頁岩3点、滑石1点である。うち6点を掲載した。

445・622は挟りが3か所のもの。446～449は挟りが2か所のもの。446は礫の短軸側縁に挟りを入れている。447～449は礫の長軸両端に挟りを入れている。445～447は泥岩製、448・449は頁岩製。622は扁平な滑石原石を利用したもの。3か所の挟りがあり、長軸両端と片側長辺に打ち欠きがある。平坦面両面には敲打痕や断面円錐形の凹みがみられ、たたき石・凹み石としても利用されていた可能性がある。

礫器・石核 (図V-197～199-450～465 / 表V-3 / 図版151)

礫器・石核は365点出土している。分布は石器等の出土傾向と同様で、特にL～N95～0区から多く出土している。使用される石材は、頁岩325点、砂岩3点、チャート6点、泥岩24点、凝灰岩3点、メノウ2点、安山岩1点、珪岩1点である。うち16点を掲載した。剥片集中からも多く出土し、剥片と接合して多くの接合資料を得ている(図IV-33～49-1～35)。これらも剥片との接合作業を行えば、多くの接合資料が得られたと考えられる。

450～456は断面が逆三角形になるもの。両面を剝離調整し側縁から下端にかけて刃部状にしている。450・453・455・456は上端面に原石面が残存する。451・452の上端面には節理面がみられる。452は両面調整石器の破損品の可能性がある。すべて頁岩製。

457～465は礫の側縁を打ち欠いて刃部状にしているもの。両面から打ち欠いてV字状になっている。464は扁平な楕円礫の両端部を打ち欠き、直線状にしている。端部には敲打痕がみられる。また、側縁・背面中央にも敲打痕がみられる。たたき石もしくは扁平打製石器と類似している。457はチャート製、458・465は泥岩製、459～463は頁岩製、464は砂岩製。

台石 (図V-199-466～469 / 表V-3 / 図版151・152)

台石は33点出土している。半分以上残存するものは23点、破片が10点である。分布は石器等の出土傾向と同様である。使用される石材は、安山岩15点、凝灰岩15点、砂岩3点である。長さが20cmを超

える大型のものは2点しかなく、ほとんどは長さ10cm前後のものである。うち4点を掲載した。

466～469は扁平礫の平坦面に敲打痕のあるもの。敲打痕は平坦面中央付近の広い範囲につけられている。469は扁平な楕円形礫の背面に広い敲打痕がみられる。両端部や腹面にも敲打痕がみられ、たたき石として利用された可能性もある。466・468・469は安山岩製、467は泥岩製である。

石皿 (図V-200-470～472 / 表V-3 / 図版152)

石皿は17点出土している。半分以上残存するものは2点で、破片が15点である。分布はN98区付近から多く出土している。使用される石材は、安山岩16点、砂岩1点である。破片から推定して長さが20cmを超える大型のものは7点ほどあると考えられる。うち3点を掲載した。

472は板状礫の平坦面に使用面のあるもの。ほぼ平坦なすり面で被熱により黒ずんでいる。473は扁平礫の平坦面に楕円形の浅く凹んだすり面がある。長軸両端部を欠損している。474は扁平礫の平坦面に楕円形の深く凹んだすり面がある。すり面中央部は平坦になっており、黒色の付着物がみられる。すべて安山岩製。

加工痕ある礫 (図V-200-473 / 表V-3 / 図版152)

加工痕ある礫は86点出土している。分布は石器等の出土傾向と同様である。使用される石材は、頁岩25点、砂岩7点、チャート1点、泥岩20点、凝灰岩23点、片岩3点、安山岩7点である。うち1点を掲載した。473は棒状の角礫の一部に打ち欠きがみられるもの。チャート製。(酒井)

土製品 (図V-201-474～516 / 表V-3 / 図版152・153)

土製品は778点出土している。内訳は、焼成粘土塊646点、有孔土製円板113点、擦切土器片7点、耳栓1点、その他土製品11点である。うち43点を掲載した。

474～506は有孔土製円板。474～489は長軸4.1～8.7mmの大型のもの、490～505は長軸2.8～3.6mmの小型のものである。474・486・496・499・500は穿孔途中のもので、496を除き両面から穿孔が加えられている。487は穿孔が認められないもので、周縁に磨りが加えられている。506は楕円形で形状がやや異なるがここで扱った。

474～480・506は単軸絡条体の回転文が施された土器片を用いたものである。478が無節の原体が用いられた土器片を、478は底面に複節の単軸絡条体の回転文が施された土器の底部破片を用いている。506は土器片の周縁を磨りて整形が加えられている。481～486・491～497は多軸絡条体の回転文が施された土器片を用いたものである。486は貝殻条痕が認められる。487は縄線文が認められ、口縁部破片を再利用したもの。498～500は縄文が施された土器片を再利用したもの。489・504・505底部破片に穿孔を加えたもので、いずれも無文である。488・490・501～503は地文が不明のものである。

508は耳栓。無文の「ツツミ」型ないし「白」型のものである。

511～513は擦切土器片。土器片の側縁を「擦切り手法」で切断したものである。511は斜行縄文、512・513は単軸絡条体の回転文が施された土器片が用いられ、綾絡文が加えられている。

507・509・510・514・515・516は用途不明のもの。土製品としてここで一括して扱った。

507は小型土器ないし小型土器の台部分の可能性が高い。内面には炭化物が付着している。509は、無文の棒状の形状をもつものである。焼成粘土塊の可能性が高い。510は無文で、表面には粗い整形痕が認められる。片側の端部には折れ面が確認できる。長軸下端に3か所のくぼみが認められるが、意図的なものかどうか不明である。514・515は、断面形が楕円形の短冊状のものである。514には多軸絡条体の回転文が施されている。515は摩滅が著しく、詳細は不明。両端に折れ面が確認できる。516は高師小僧。明瞭な加工痕は認められなかったが、装飾品として持ち込まれた可能性がある。

(熊谷)

石製品 (図V-202～207-517～621/表V-3/図版153～155)

石製品は237点出土している。内訳は、異形石器20点、玉類2点、垂飾5点、球状耳飾り20点、つまみ付ナイフミニチュア11点、石棒7点、軽石製石製品68点、線刻燧57点、有孔石29点などが出土した。うち106点を掲載した。

517～536は異形石器。517は石偶。上端部に原石面が残存し、両面調整の袈りを用いて頸部、腕部、脚部を作出している。黒曜石製で産地分析により十勝産との結果を得ている。518～520は両面調整で上部をつまみ状、下端を深く内彎させて二股状に作出したもの。石偶の下半部のようにとらえることもできる。518・519は黒曜石製で産地分析により所山産との結果を得ている。520は白色のチャート製。521～524は両面調整で上部をつまみ状、下端を浅く内彎させて二股状に作出したもの。521・523は黒曜石製、522は白色のチャート製、524は頁岩製。523は産地分析により赤井川産との結果を得ている。525は両面調整で下半部の長いX字状に整形したもの。右側下端部が二股に分かれている。左側下端部が折損しているが、左右対称に作られたと考えられるので、二股に分かれた下端部があったと考えられる。頁岩製。526・527は両面調整で上部をつまみ状、下半を深い袈りで三股状に作出したもの。526は被熱によって全面が暗灰色に曇っている。いずれも黒曜石製。528～530は両面調整で上部をつまみ状、下半を袈りで鋸歯状に作出したもの。すべて頁岩製。531は片面調整でX字状になっているもの。上端を折損している。左右側縁が浅く内彎し、下端が深く内彎している。頁岩製。532は十字状のもの。両面調整で深い袈りを入れて十字状に整形している。泥岩製。533・534は棒状のもの。533は中央上部に上端に浅い凹みのある突起状のものを出し、中央下部には袈りが入っている。534は中央上部に上端に直線状の突起状のものを出し、右端部には摩耗痕がみられる。左端部は欠損しているが、両端部に機能部のある石錐として使用された可能性がある。いずれも頁岩製。535・536は三角形石製品。535は両面調整、536は片面調整で三角形に整形している。535は頁岩製、536は砂岩製。537は両面調整で尖頭器状に整形され、側縁が鋸歯状になっている。全体的に摩耗が進んでいる。頁岩製。

538・539は玉類。538は大珠片。明緑灰色の緑色凝灰岩製で背面の約1/4が残存している。直径約4.0 cmと推定される。表面や穿孔部は非常に丁寧に研磨され、ツルツルしている。539は泥岩製で約1/2が欠損している。小さな亜角礫を亜円形に整形し、両面から穿孔している。研磨はされていない。

540～550は垂飾。540は扁平な亜楕円形のもの。緑色凝灰岩製。表面が風化しているため調整痕は確認できない。右側上部に両面から穿孔が行われている。541～543は棒状のもの。541・542は上端部直下に穿孔がある。穿孔は両面から行われ、穿孔痕が残存している。いずれも痕は確認できない。下端部が折損している。全面を研磨によって非常に丁寧に調整されている。543は側縁を擦り切って扁平な棒状に加工し、全面を研磨によって調整している。下端部側縁を加工して段を作出している。上半部が欠損しているが、垂飾と判断した。544は扁平な隅丸長方形のもの。全面を研磨で調整している。右隅に両面から穿孔が行われている。穿孔痕が残存している。いずれも痕は確認できない。球状耳飾りを再加工した可能性がある。545～550は球状耳飾りを再利用したもの。破損した球状耳飾りに穿孔している。この穿孔は補修孔の可能性もある。545は球状耳飾りの上端部を再利用している。546～549は三角形の球状耳飾りが上端で折れたものを再利用している。546・548・549は破損した球状耳飾りの上端部直下に穿孔している。549は穿孔部が破損したものを別位置で再穿孔する途中でさらに破損している。547は球状耳飾りの下端中央側に穿孔している。550は破損した球状耳飾りの穿孔部の反対側縁に切り込みを入れて、つまみ状に整形している。541～550は滑石製。543は滑石～蛇紋岩製。

551～560は球状耳飾りの破片。551～559は三角形の球状耳飾りが折れたもの。全面を非常に丁

寧に研磨されている。551・552・554・556～559は上部の穿孔付近で折れている。552は両面からの穿孔位置が上下にずれている。559は袂状耳飾りの穿孔部の穿孔痕は研磨によって磨かれている。別々に上部に穿孔痕があるが、穿孔途中で破損したとみられる。垂飾に再加工する途中で破損したと考えられる。560は研磨が粗く、未成品とみられる。551～555・557～560は滑石製。556は白雲母片岩製。

561～571はつまみ付ナイフのミニチュア。561～563は縦型で両面調整のもの。563は背面右側縁に調整がみられる。564～571は縦長剃片の端部側縁につまみ状の打ち欠きがあるもの。側縁には微細な剥離がみられる。561・562・564～566は黒曜石製、563・567～571は頁岩製。

572・573は石刀の破片。片岩製で同一個体かは不明である。572は柄頭～柄部の破片。柄頭部には線刻がされている。573は身部の破片。研磨によって整形されている。

574～580は石棒とみられるもの。574は石棒の頭部と考えられる。全面を研磨で調整している。周回する深く太い線刻が入れられており、この部分から破損している。緑色泥岩製。575は全面を敲打し、右側縁を断面U字状に研磨している。上下が折損している。石鏝の可能性もある。安山岩製。576は側縁にすり痕がみられる。上下が折損している。すり石の可能性もある。安山岩製。577は断面が楕円形の礫の全面を敲打している。上下が折損している。砂岩製。578・579は安山岩の柱状節理のもの。578は断面が長方形で、被熱しており、背面が黒色に変色している。579は断面が六角形の棒状のもので、被熱している。H-23で同一個体とみられるものを報告している（北埋調報321 図IV-127-265）。接合はしなかったが、合わせると30cmを超える長さとなる。580は円柱状のもの。特に加工痕はみられない。泥岩製。

581～594は軽石製石製品。581～586は北海道式石冠状のもの。軽石に握部状の凹みを廻らせ、下部は平坦に整形している。587・588はひょうたん状のもの。587は北海道式石冠状のものに類似している。589～592はすり石状に整形したもの。軽石の一部を平坦に整形して、すり面とみられる平坦面を設けている。593は扁平打製石器状に整形したもの。594はV字状に整形したもの。

595～612は線刻礫。595は扁平な楕円礫の上部に線刻を周回させ、側縁～下端には刻み状の線刻を17本入れている。背面平坦面には上下方向の線刻が施されている。被熱しており、やや黒ずんだ色調をしている。596は扁平な楕円礫の平坦面に線刻があるもの。背面には0.1～0.5mmほどの細い線刻が長軸の上下方向につけられている。597～600はすり切り残片状のもの。扁平礫の長軸平坦面に幅1～2mmほどの太い線刻がみられる。597は2本、600は3本の線刻がある。598・599は線刻部から折り取られている。601は石のみに上下方向の線刻を入れて折り取ったもの。602・603は扁平な棒状礫の端部に敲打痕のあるたたき石の平坦面に、細い線刻が不規則にみられるもの。604は棒状の直角礫の稜にすり痕のあるすり石に、不規則な線刻のみられるもの。605～612は礫の平坦面に細い線刻が不規則にみられるもの。611は直角礫の平坦面と平坦な剥離面に細い線刻が不規則にみられる。612は細い線刻が一部格子状になっている。すべて泥岩製。

613～619は有孔石。穿孔痕や加工痕はみられず、自然礫とみられる。613・616は頁岩、614・615・617～619は泥岩。

620は板状礫を敲打によって整形し、流線型の形状にしたもの。右側は折損している。上面は敲打で外彎する形状に整形した後研磨によって調整されている。下面は敲打によって平坦に整えられている。

621は楕円礫の側縁が鋸歯状になっており、礫中央に断面V字状の凹みがある。表面には線状痕がみられる。泥岩製。

(酒井)

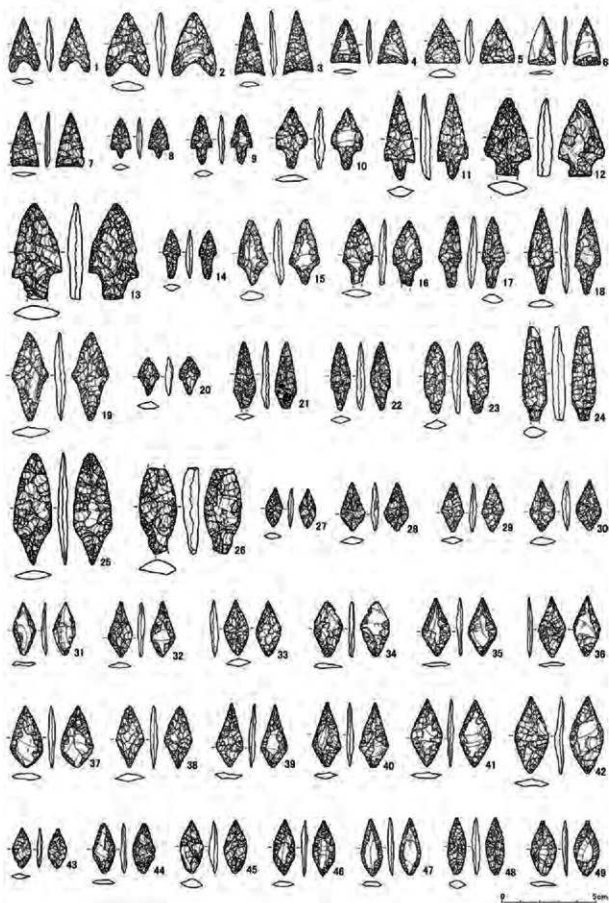
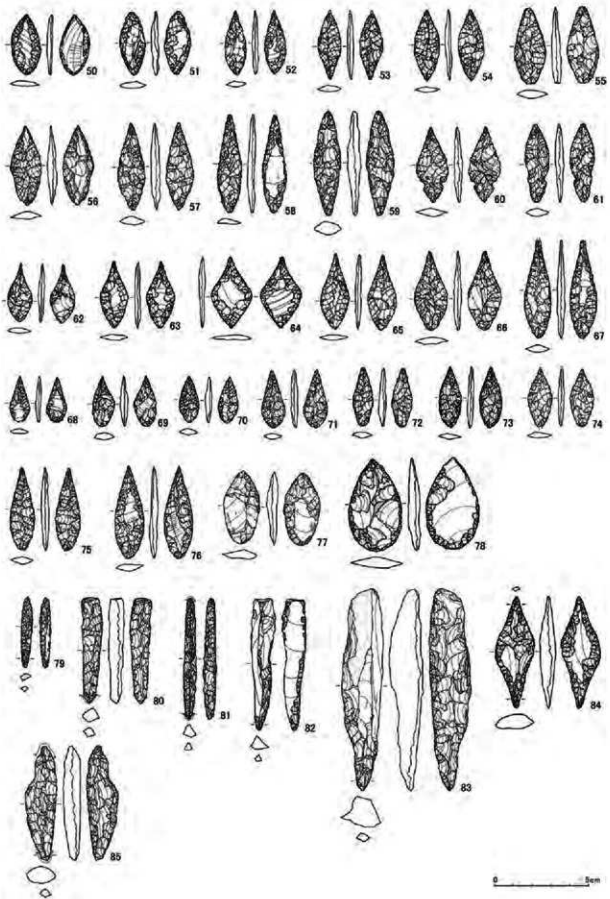
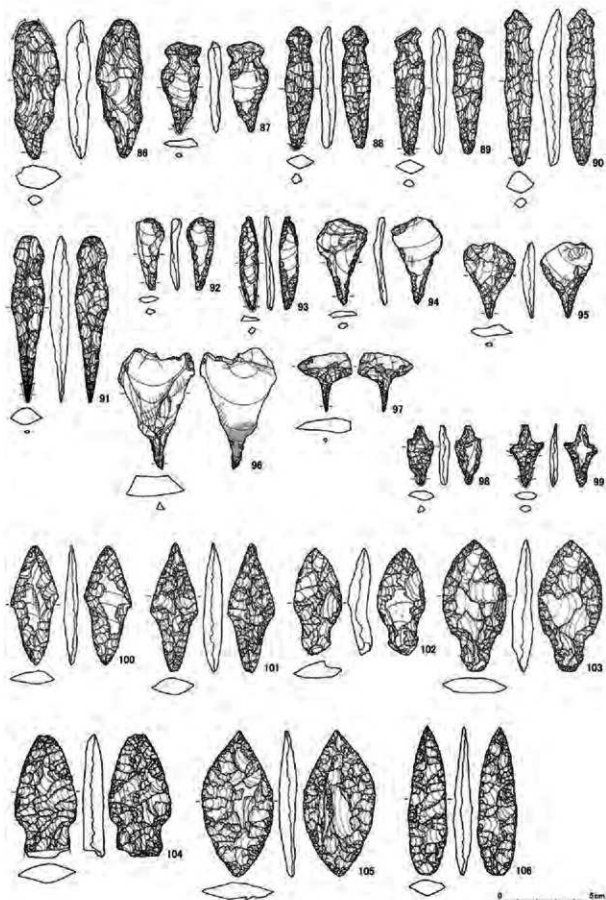


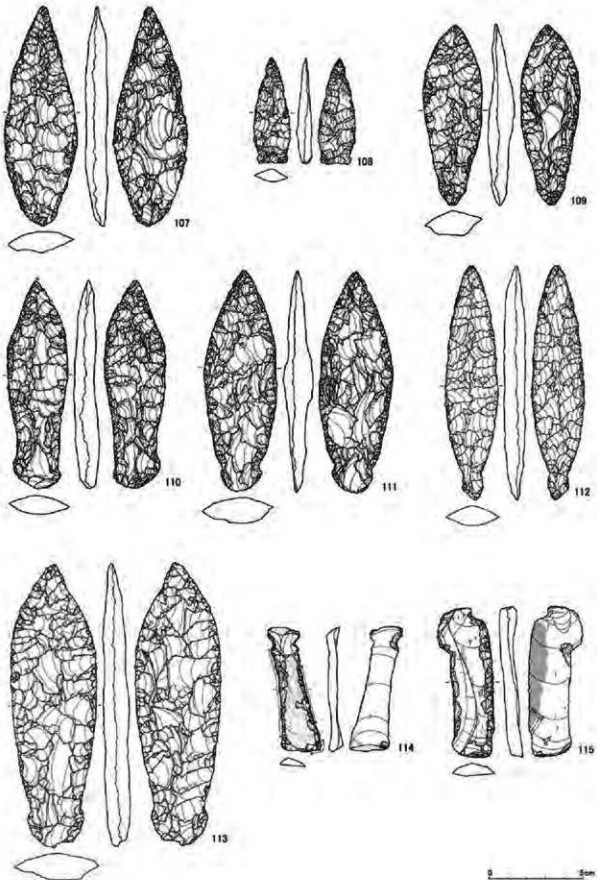
图 V-160 包含层石器 (1)



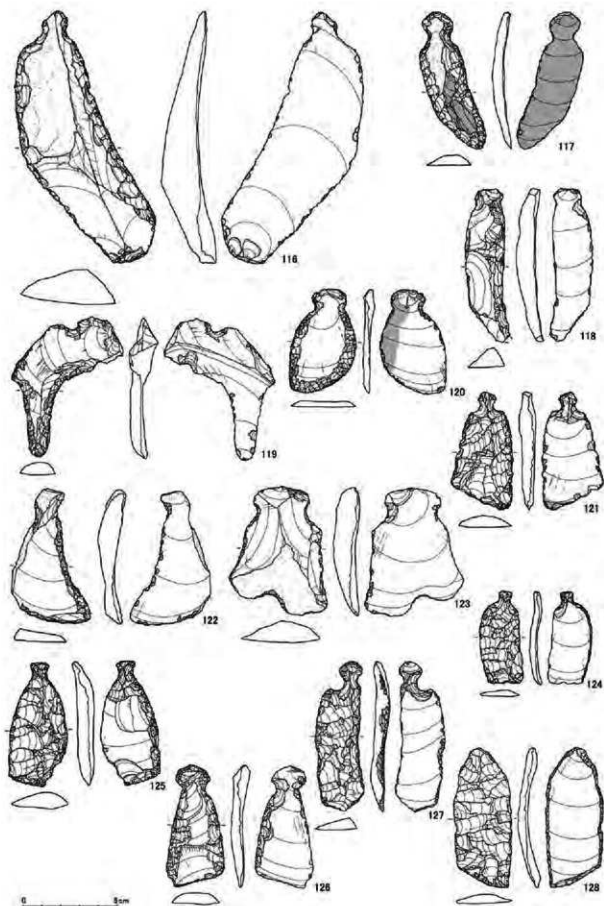
図V-161 包含層石器 (2)



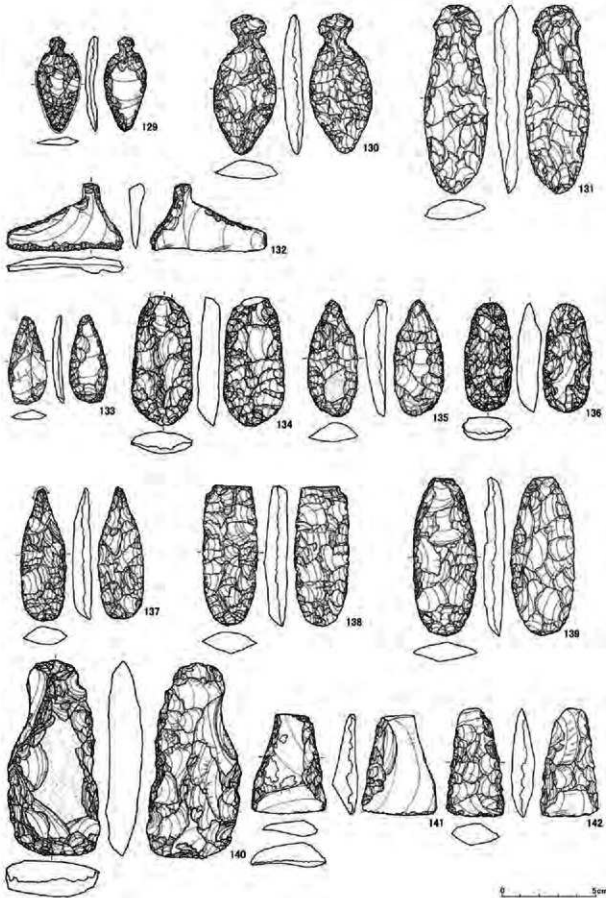
图V-162 包含层石器 (3)



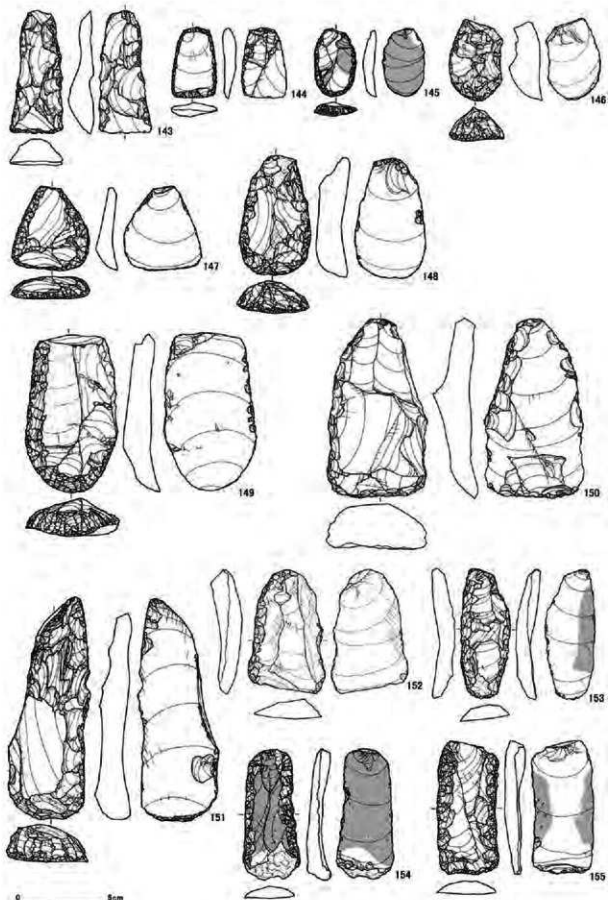
図V-163 包含層石器 (4)



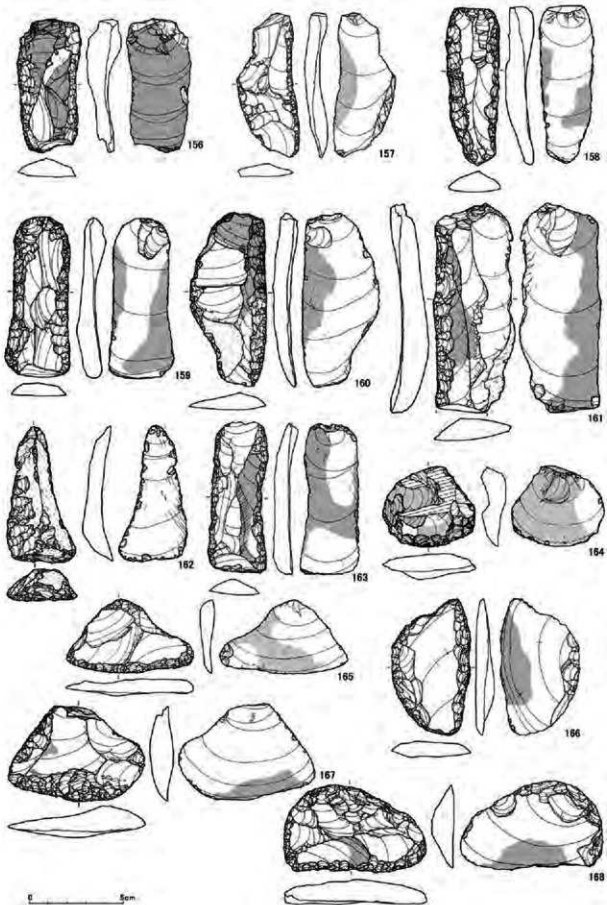
图V-164 包含层石器 (5)



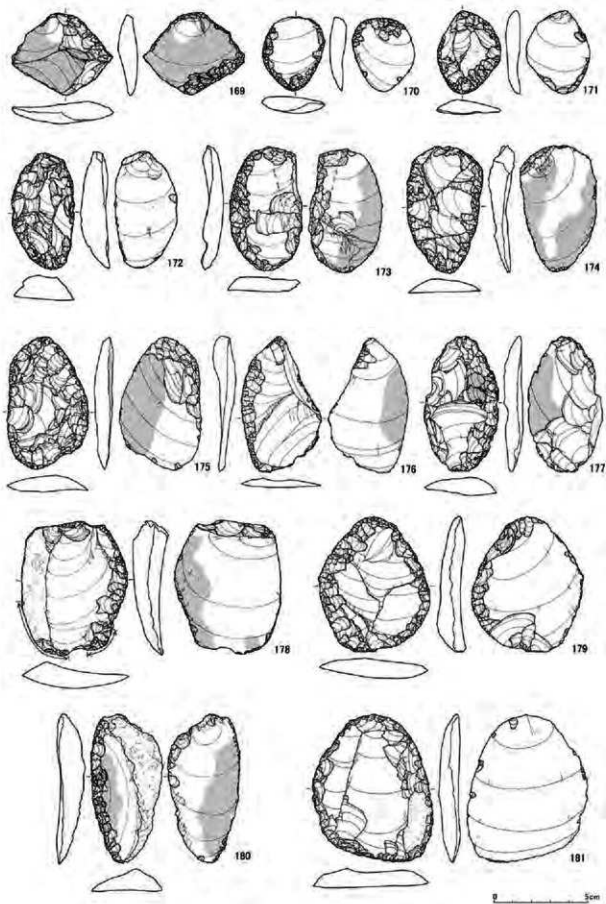
図V-165 包含層石器 (6)



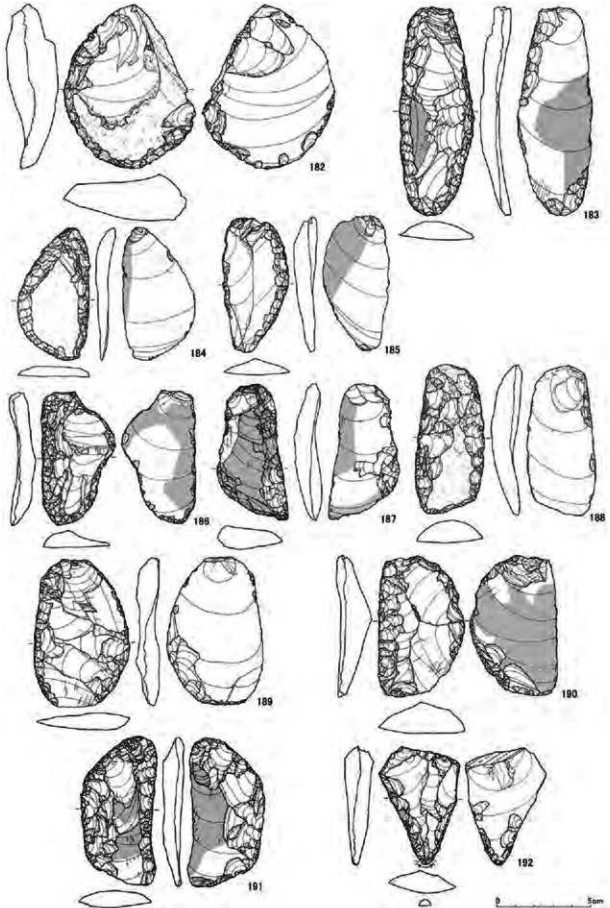
图V-166 包含层石器 (7)



図V-167 包含層石器 (8)



图V-168 包含层石器 (9)



図V-169 包含層石器 (10)

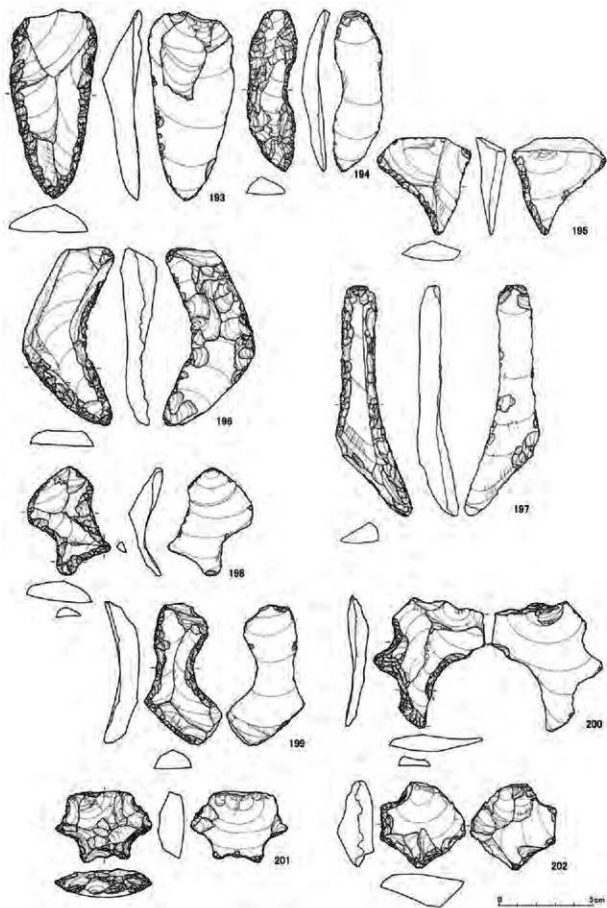
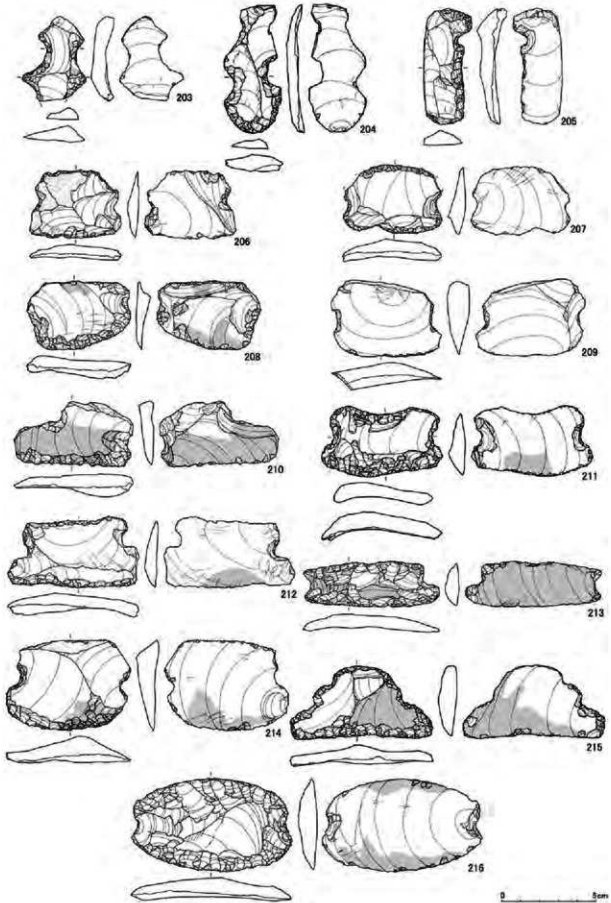
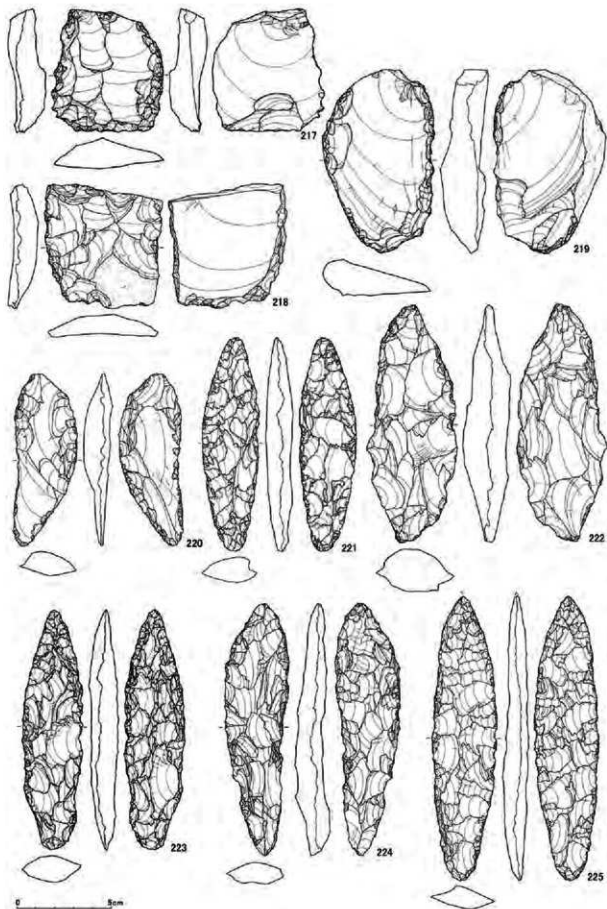


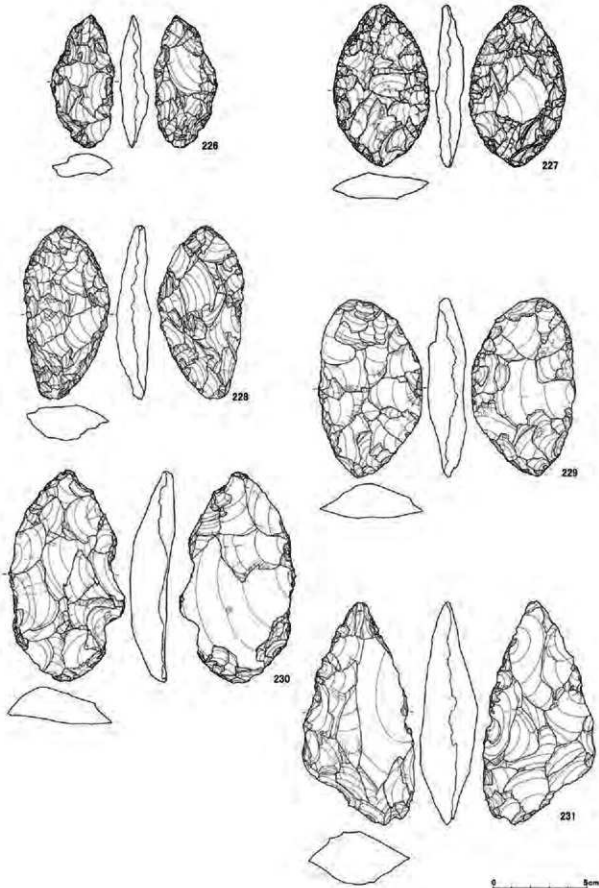
图 V-170 包含层石器 (11)



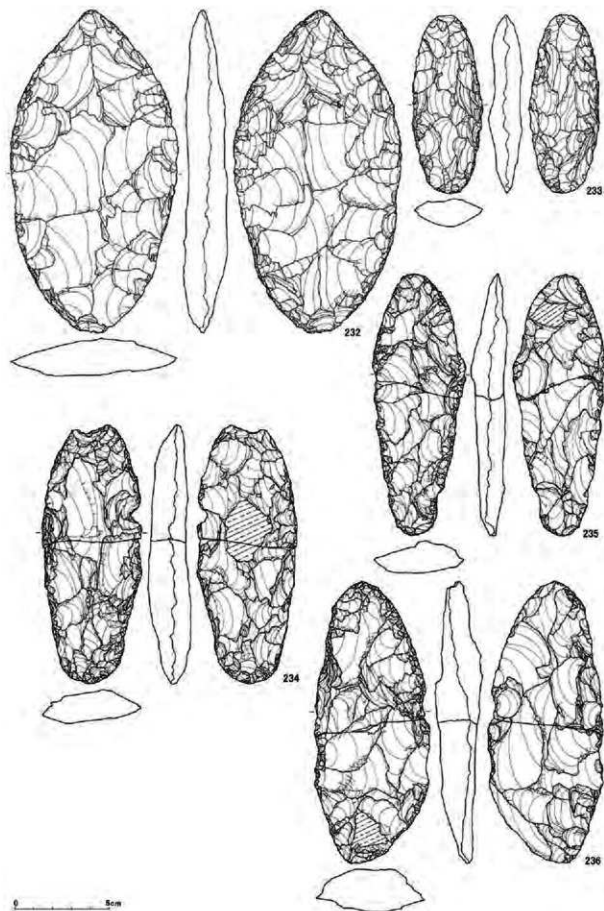
図V-171 包含層石器 (12)



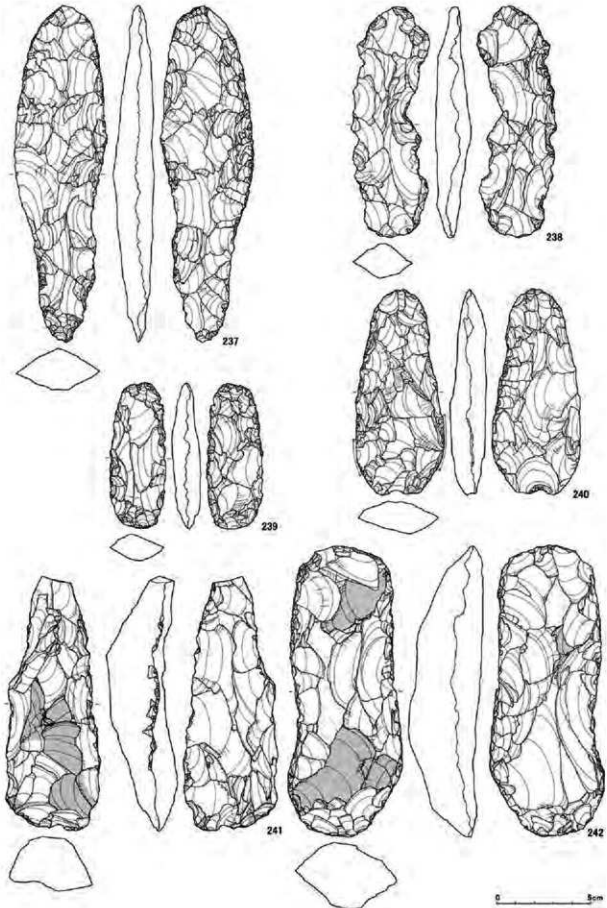
图V-172 包含层石器 (13)



図V-173 包含層石器 (14)



图V-174 包含层石器 (15)



図V-175 包含層石器 (16)

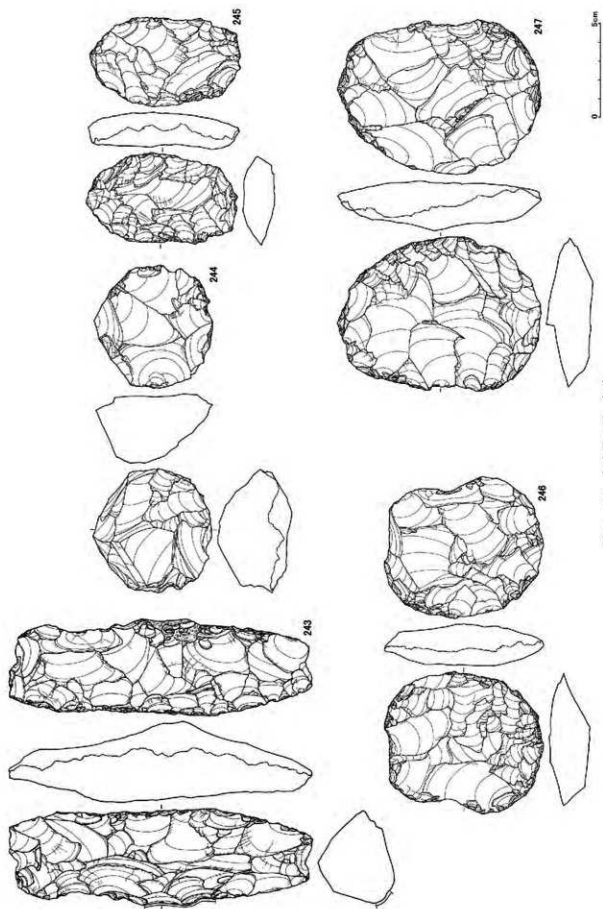


图 V-176 包含燧石器 (17)

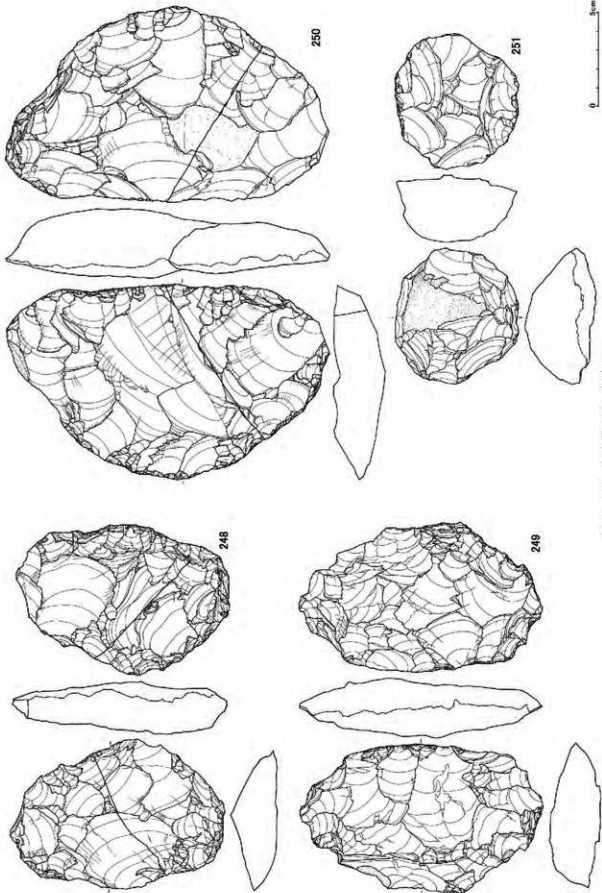


図 V-177 包含層石器 (18)

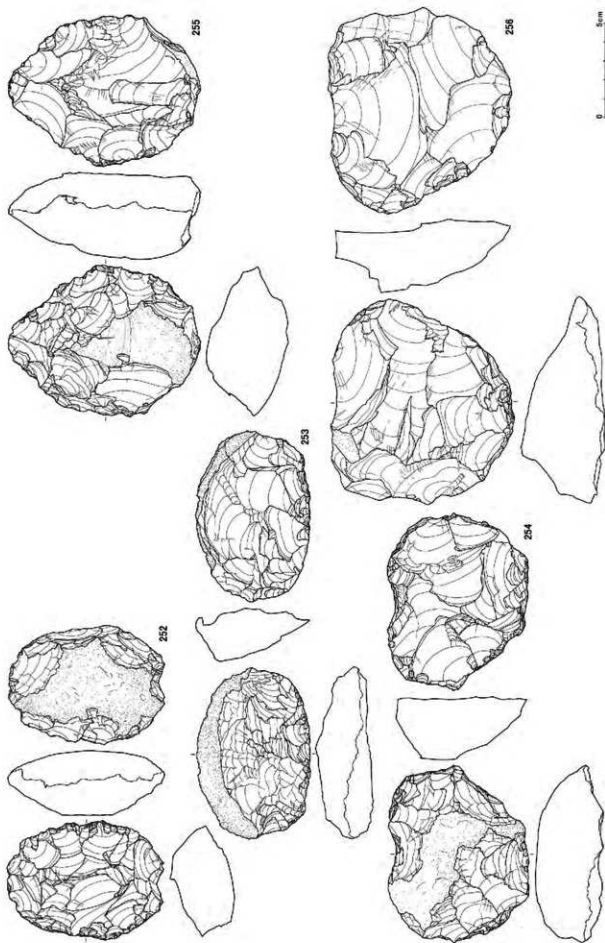
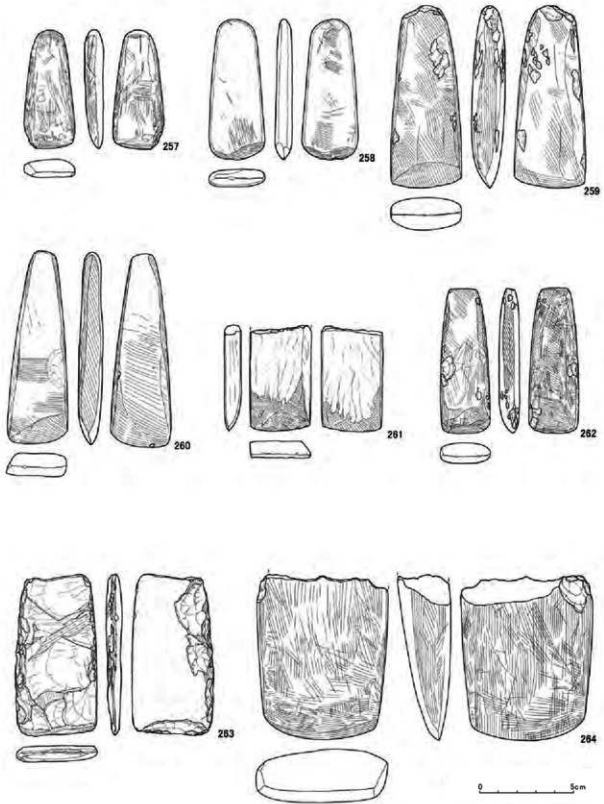


圖 V-178 包含燧石器 (19)



図V-179 包含層石器 (20)

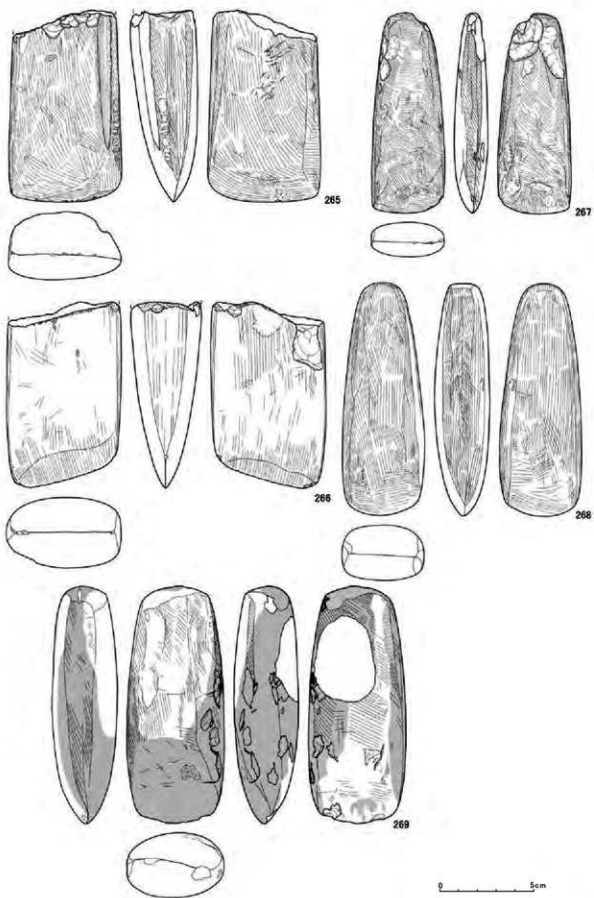
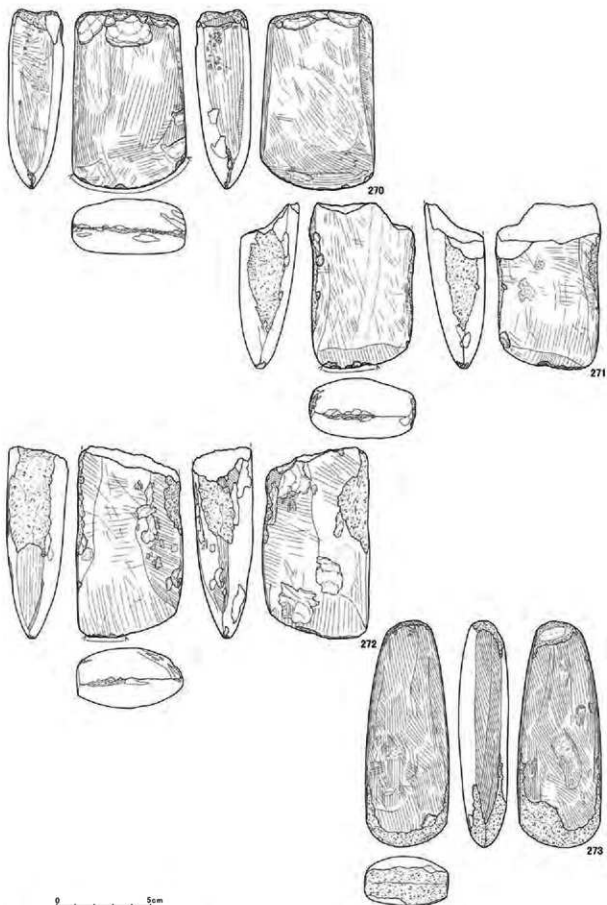


图 V-180 包含层石器 (21)



図V-181 包含層石器 (22)

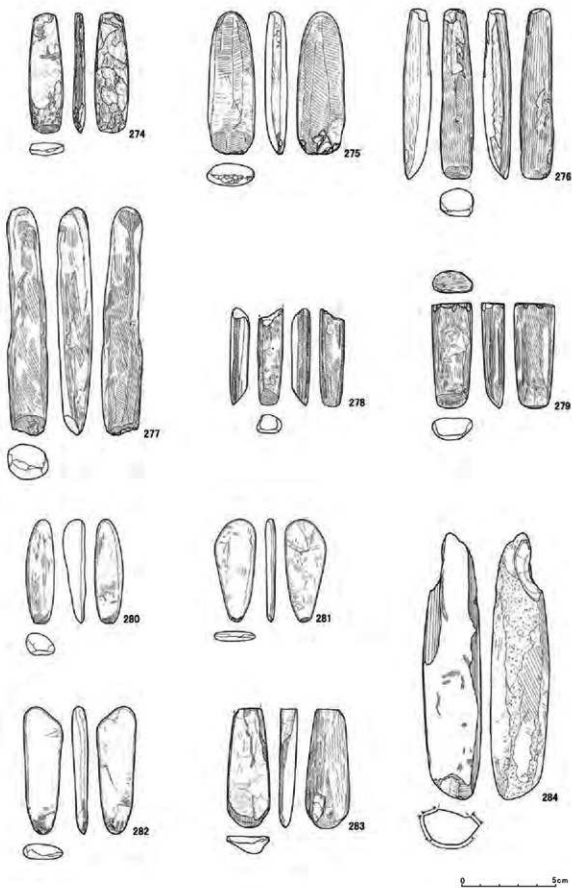
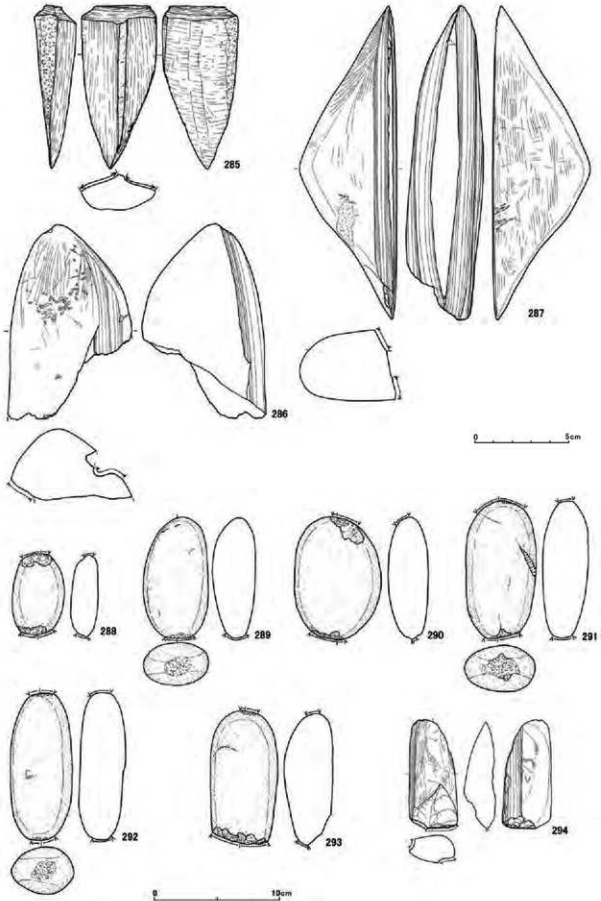


图 V-182 包含层石器 (23)



図V-183 包含層石器 (24)

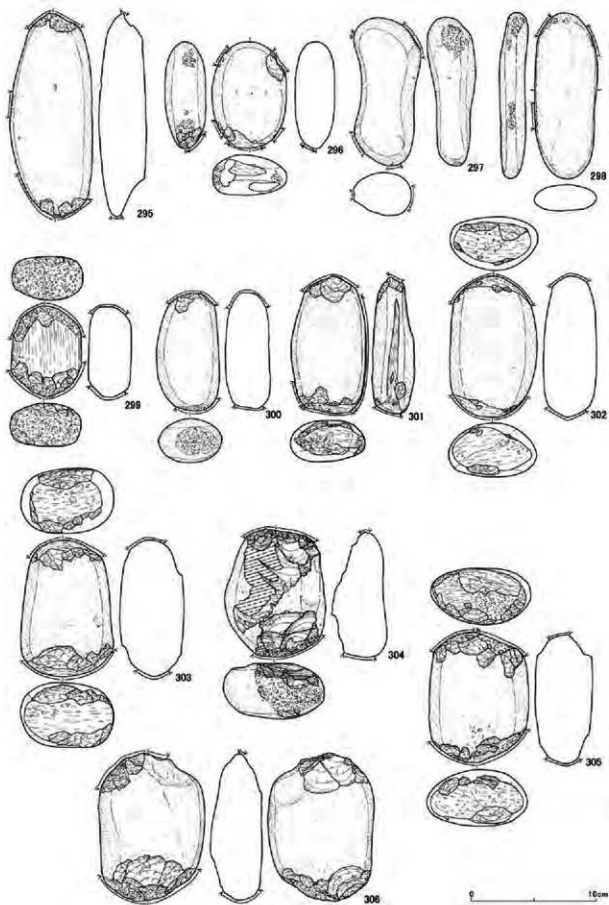
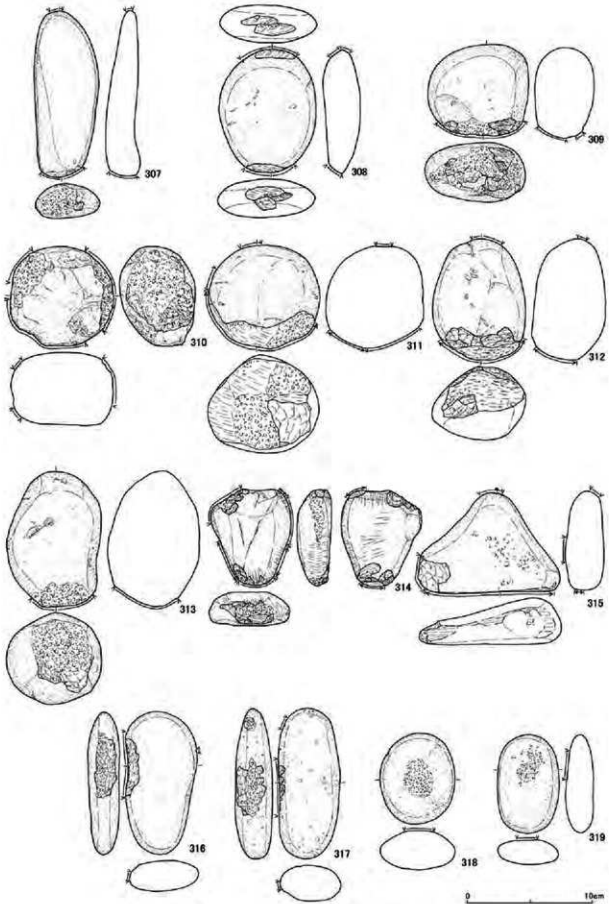


图 V-184 包含厝石器 (25)



図V-185 包含層石器 (26)

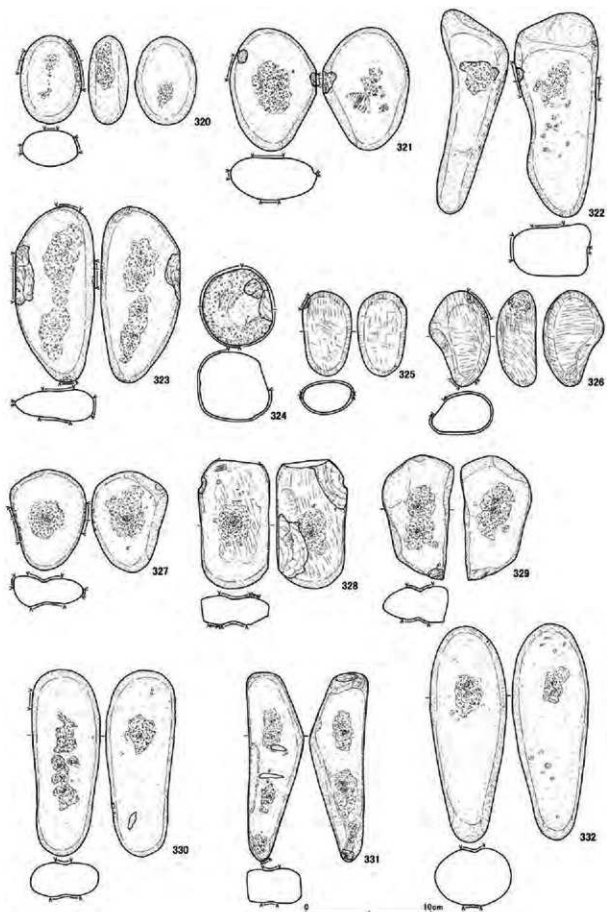
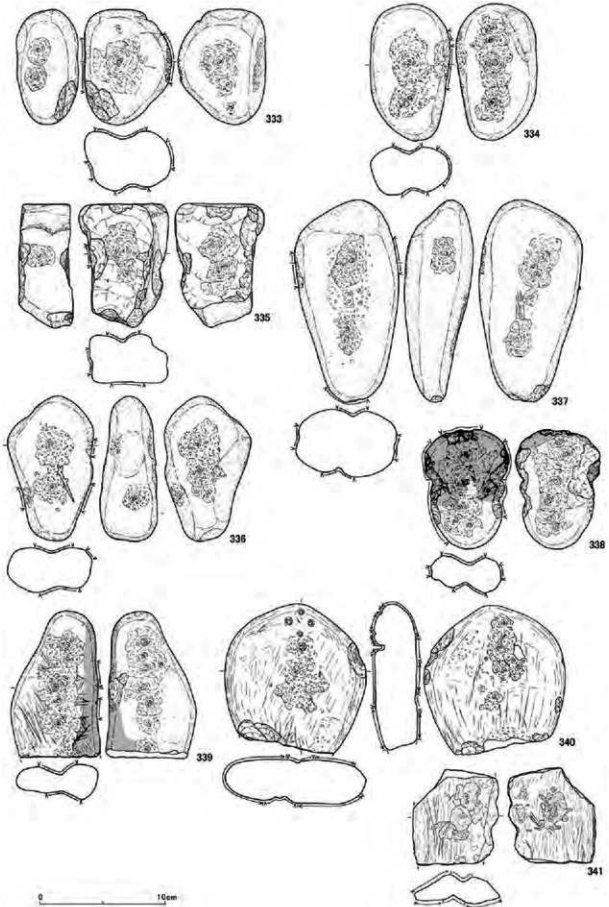


图 V-186 包含层石器 (27)



図V-187 包含層石器 (28)

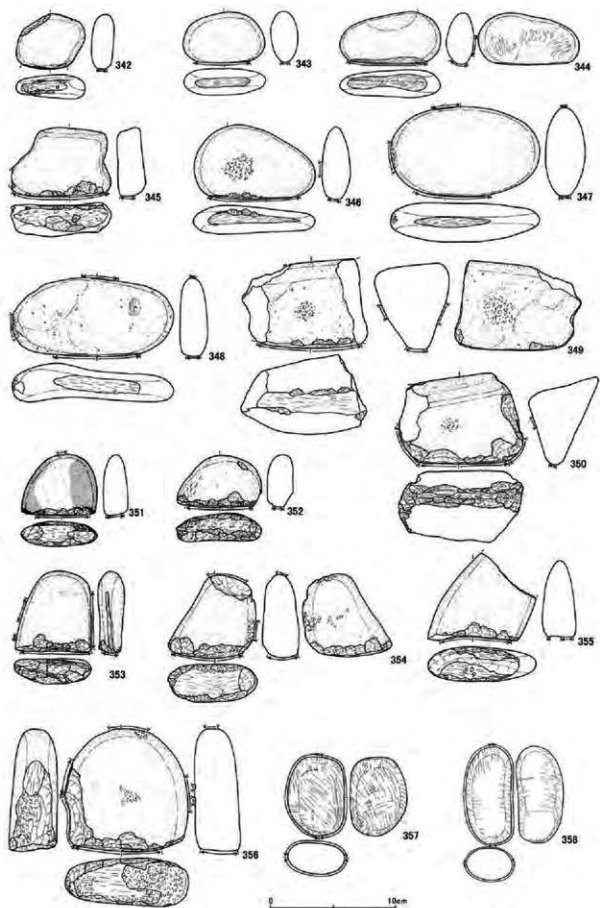
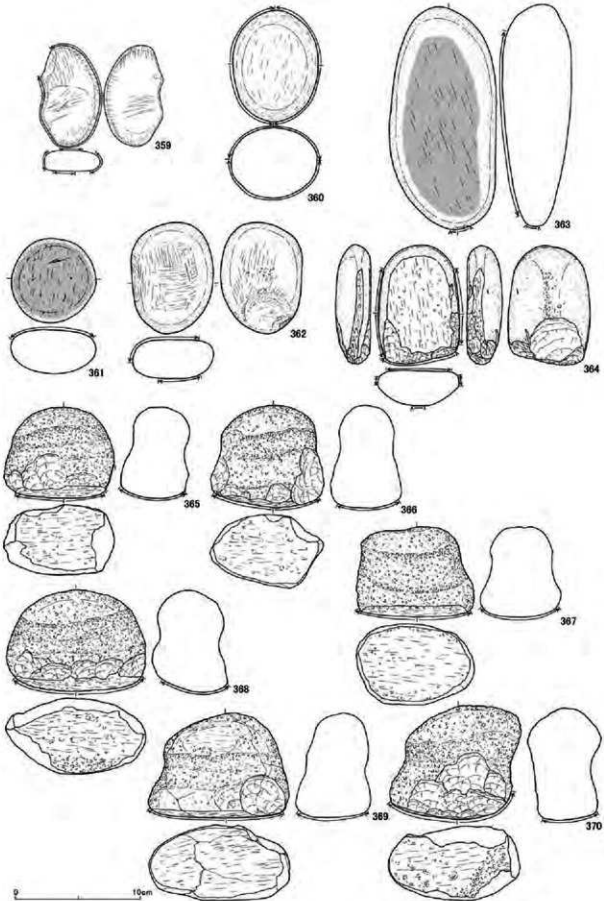
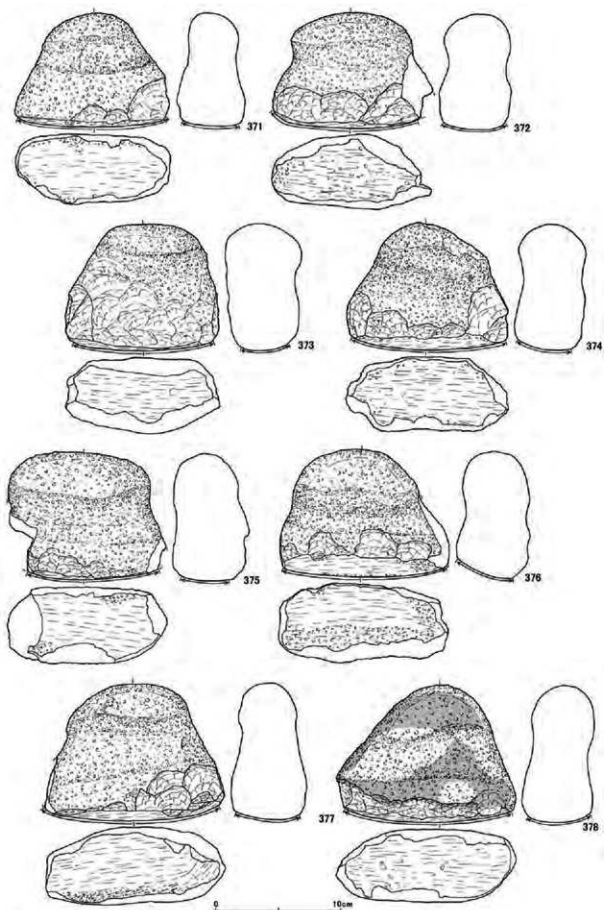


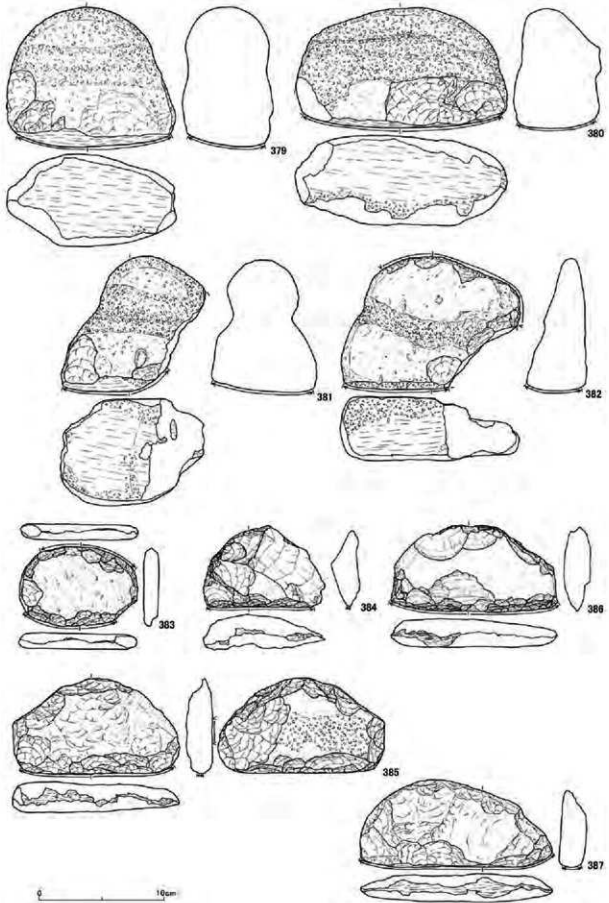
图 V-188 包含屑石器 (29)



図V-189 包含層石器 (30)



图V-190 包含层石器 (31)



図V-191 包含層石器 (32)

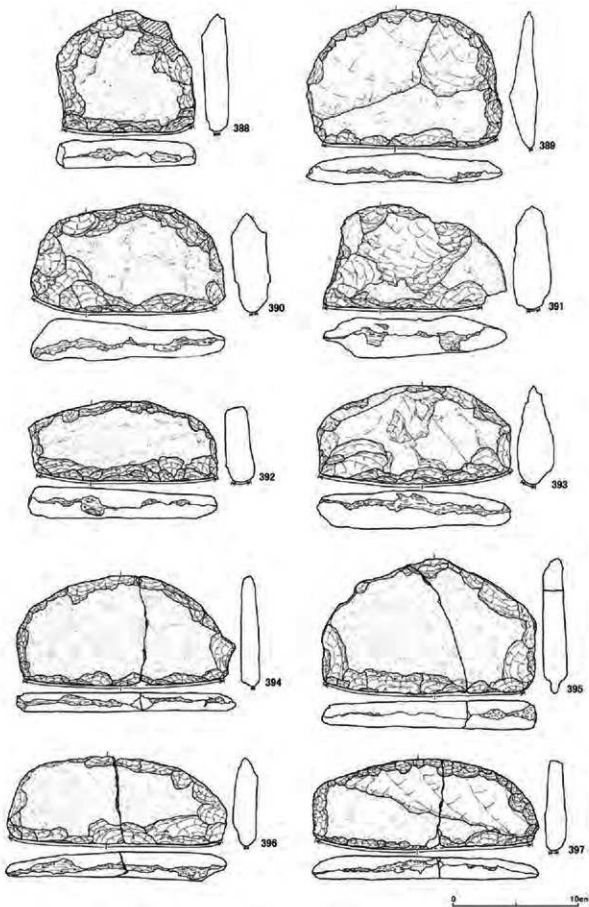
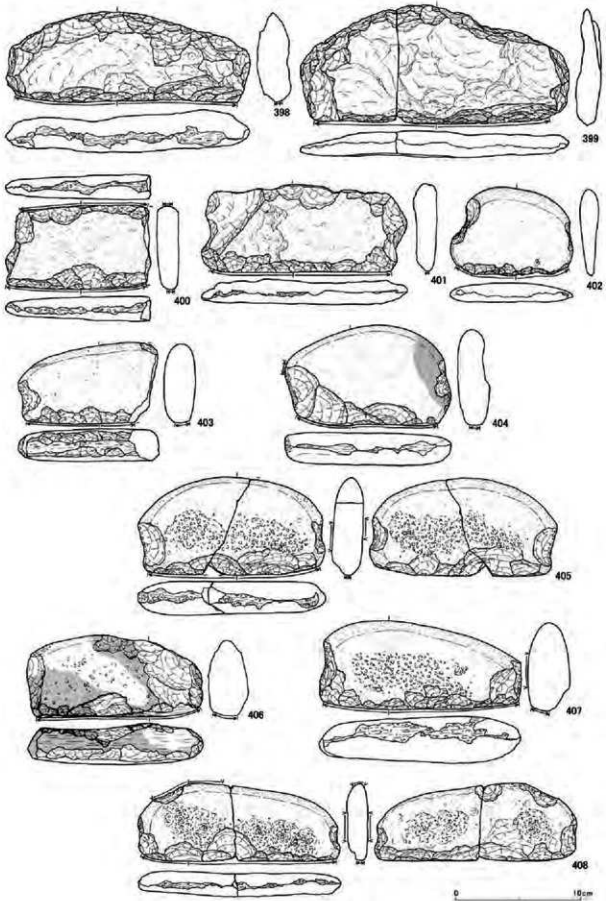


图 V-192 包含层石器 (33)



図V-193 包含層石器 (34)

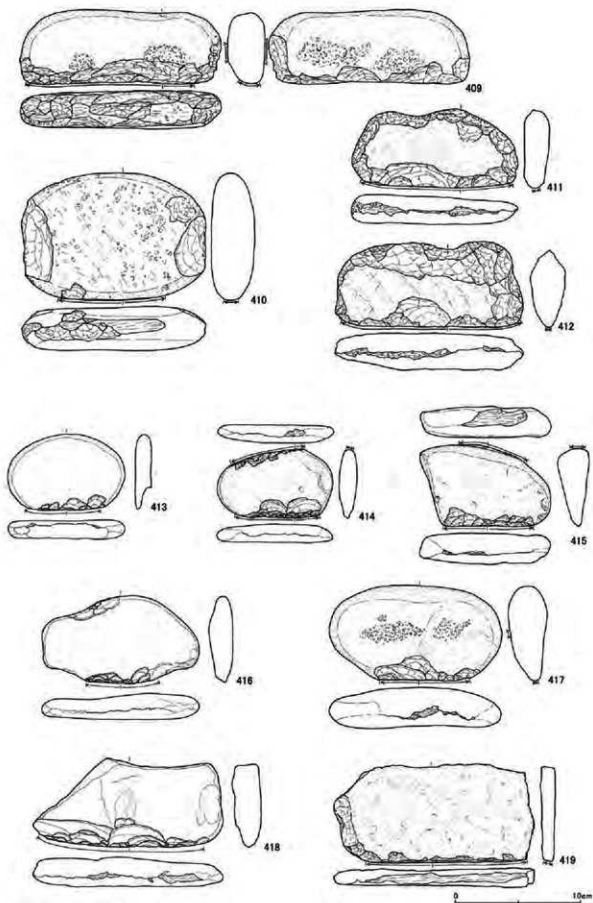
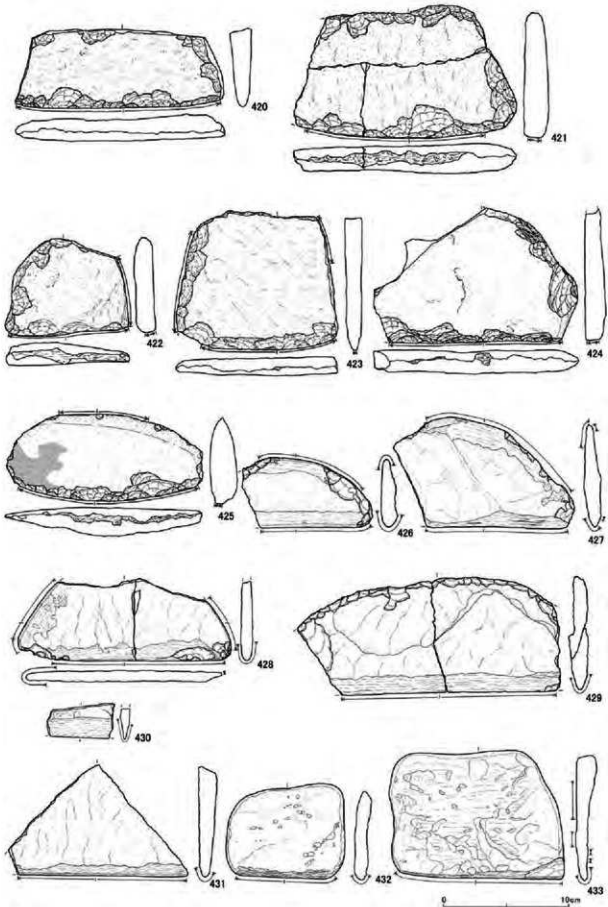


图 V-194 包含层石器 (35)



図V-195 包含層石器 (36)

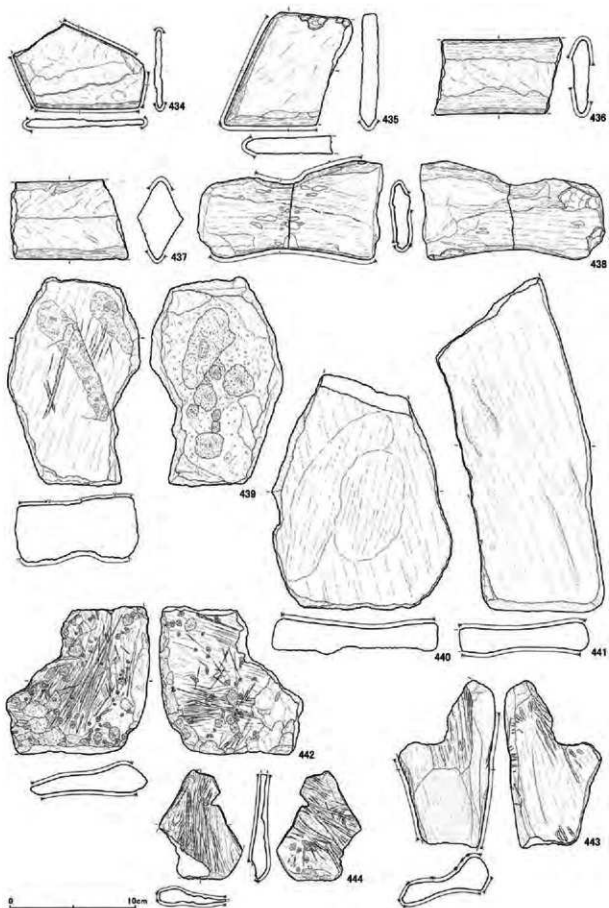


图 V-196 包含屑石器 (37)

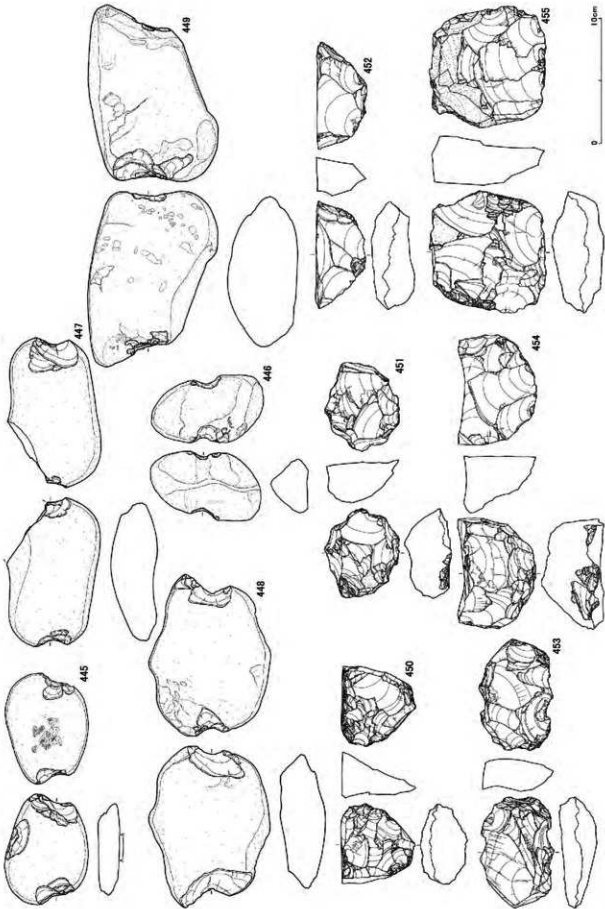


図 V-197 包含層石器 (36)

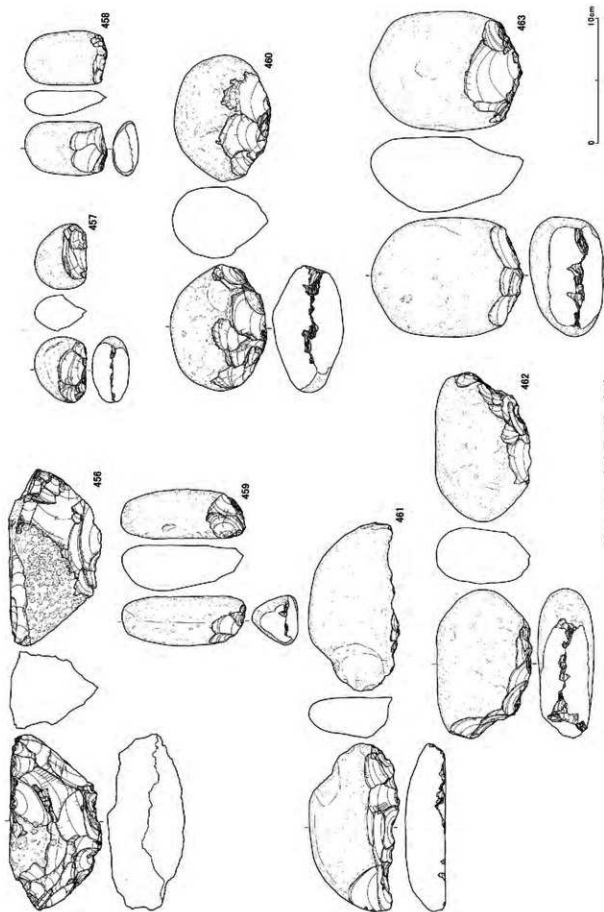


图 V-198 包含燧石器 (39)

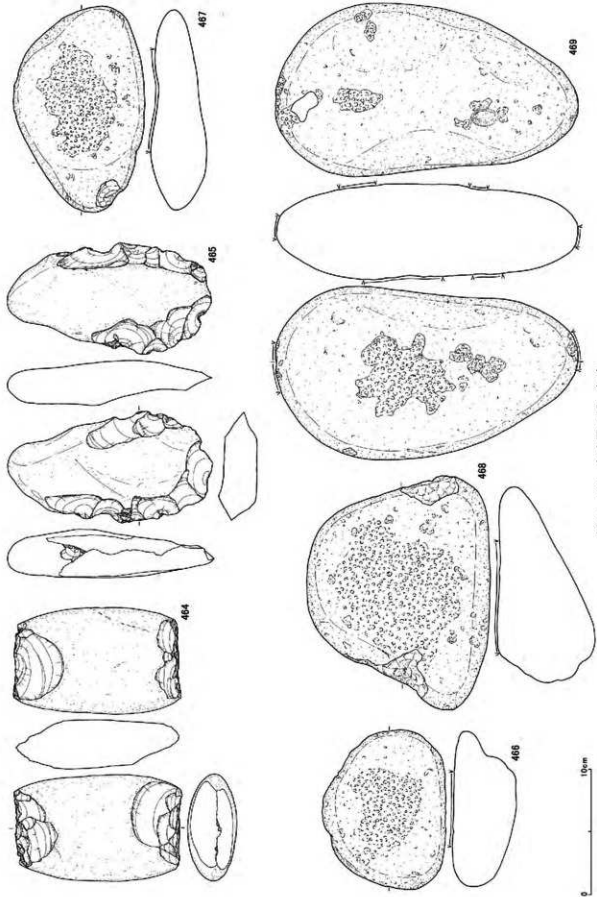
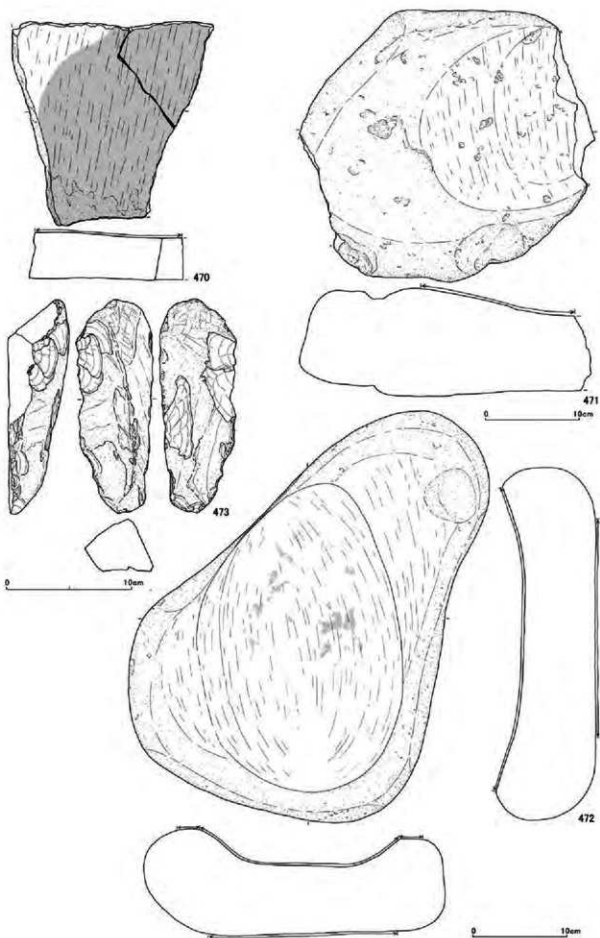
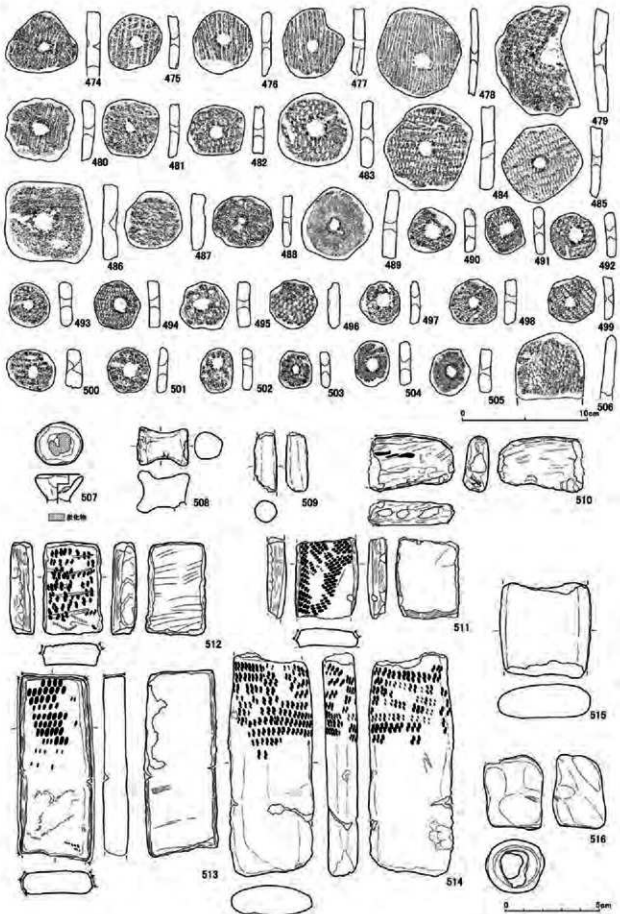


図 V-199 包含層石器 (40)

0 10cm



图V-200 包含屑石器 (41)



図V-201 包含層土製品

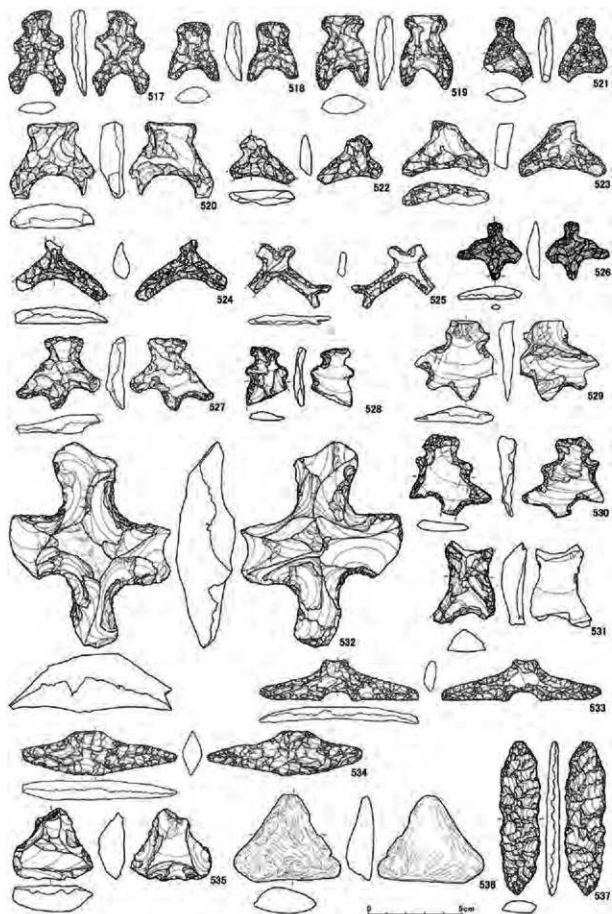


图 V-202 包含层石制品 (1)

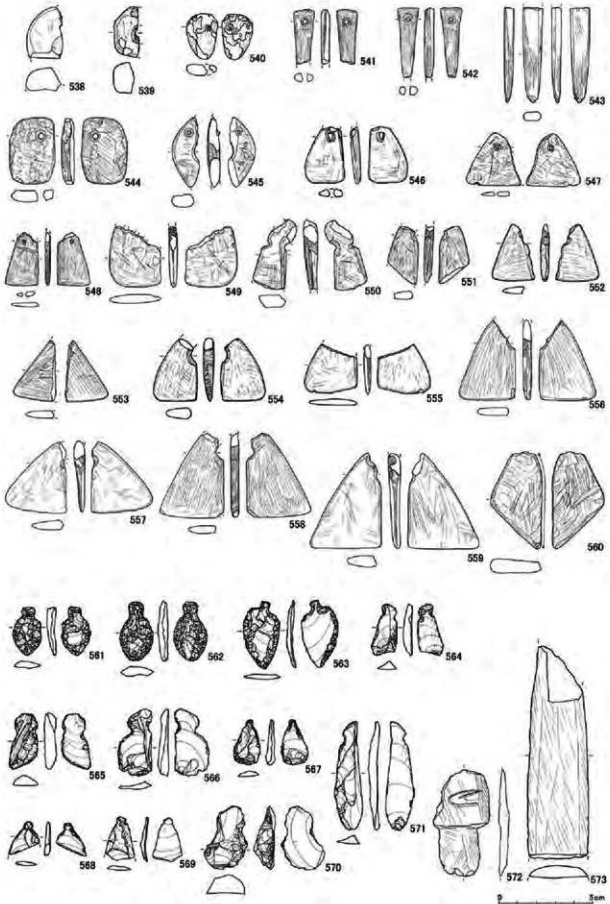


図 V-203 包含層石製品 (2)

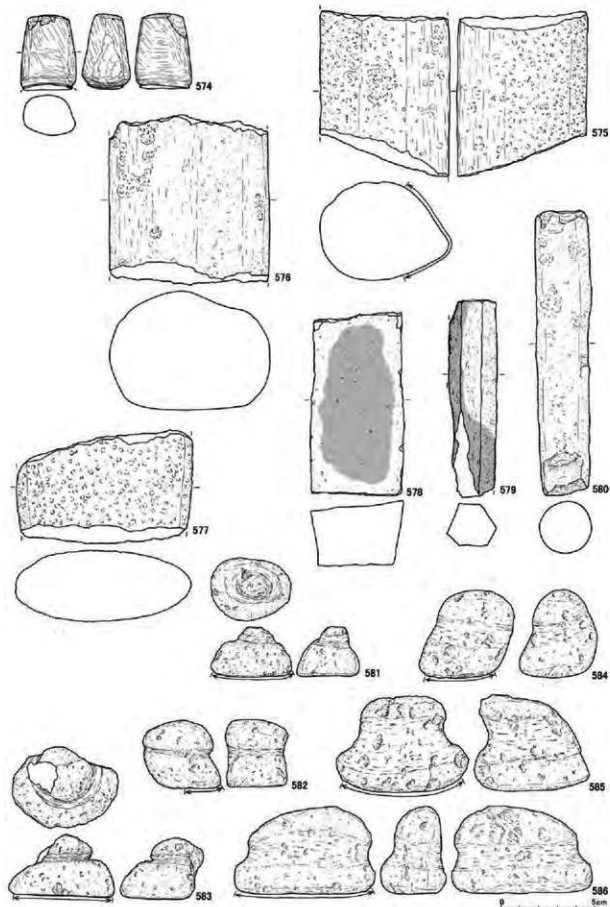
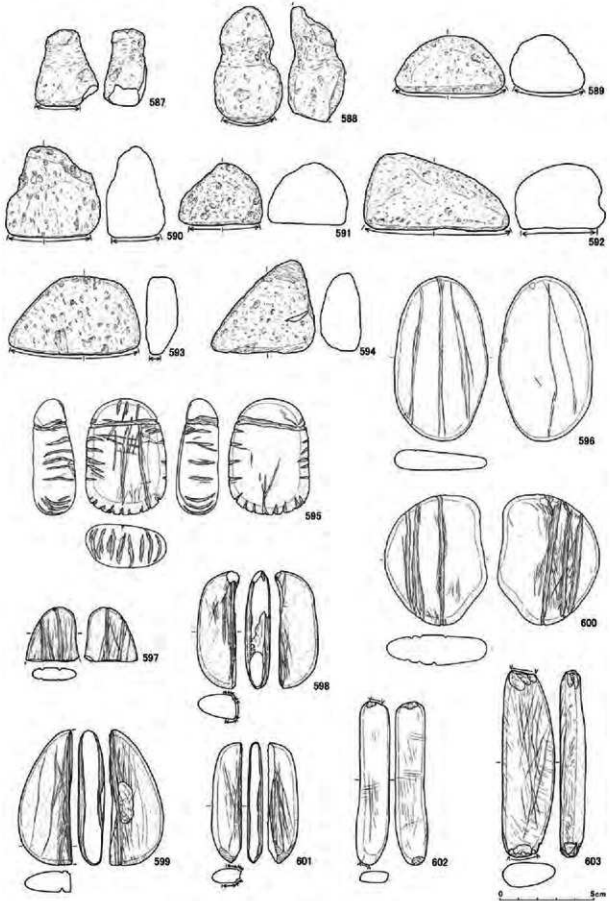


图 V-204 包含层石制品 (3)



図V-205 包含層石製品 (4)

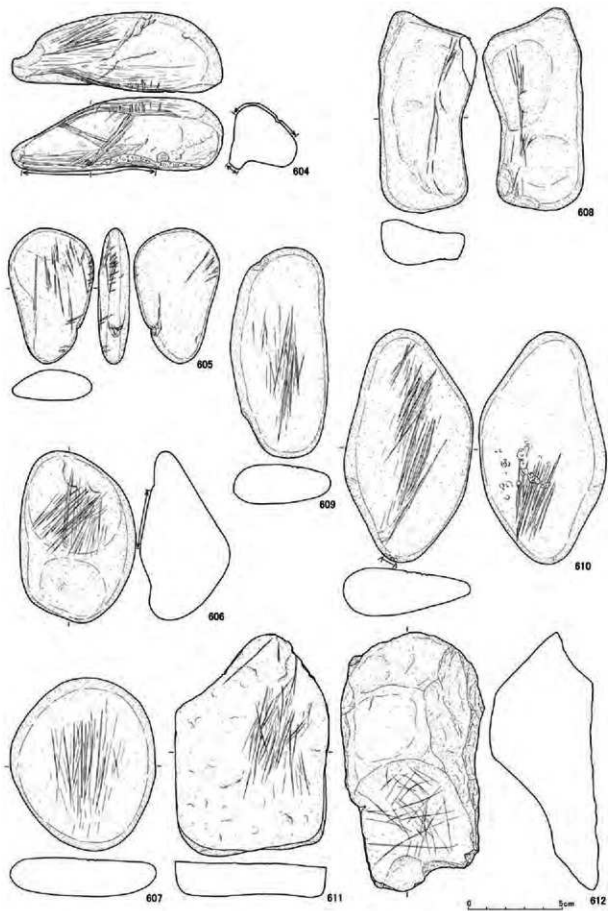
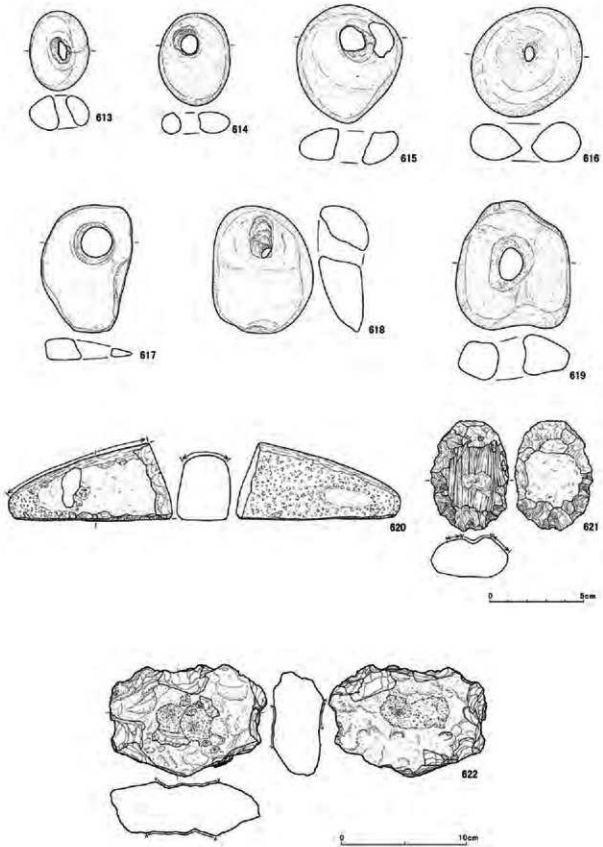
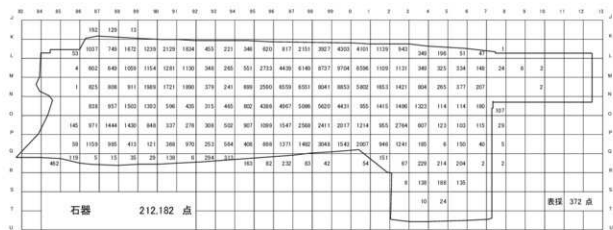
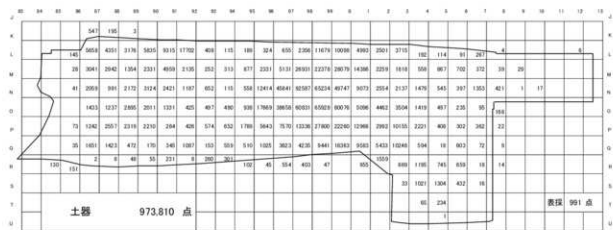
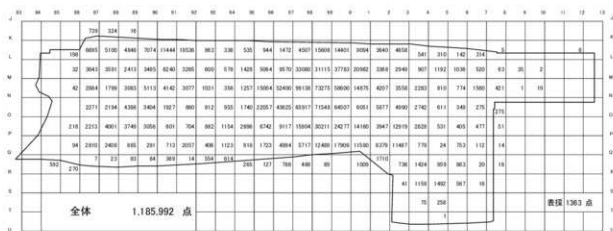


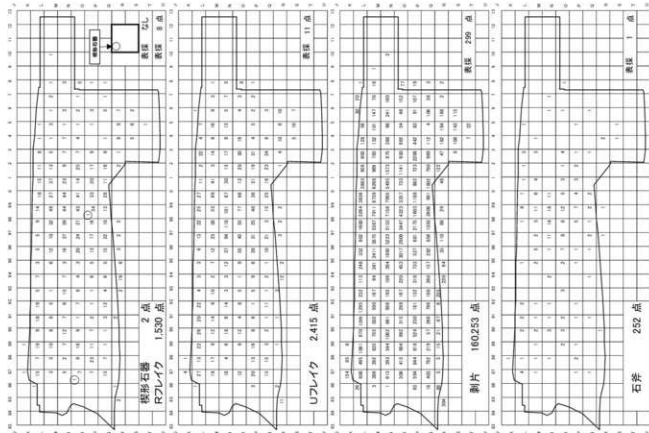
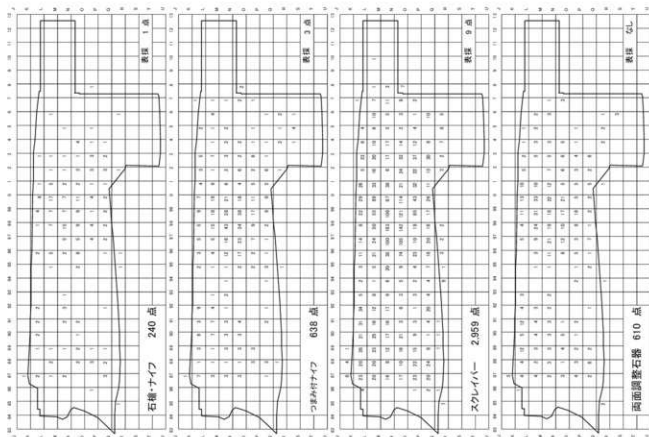
图 V-206 包含层石製品 (5)



図V-207 包含層石製品 (6)



図V-208 盛土遺構・包含層遺物出土分布(1)



図V-212 盛土遺構・包含層遺物出土分布 (5)

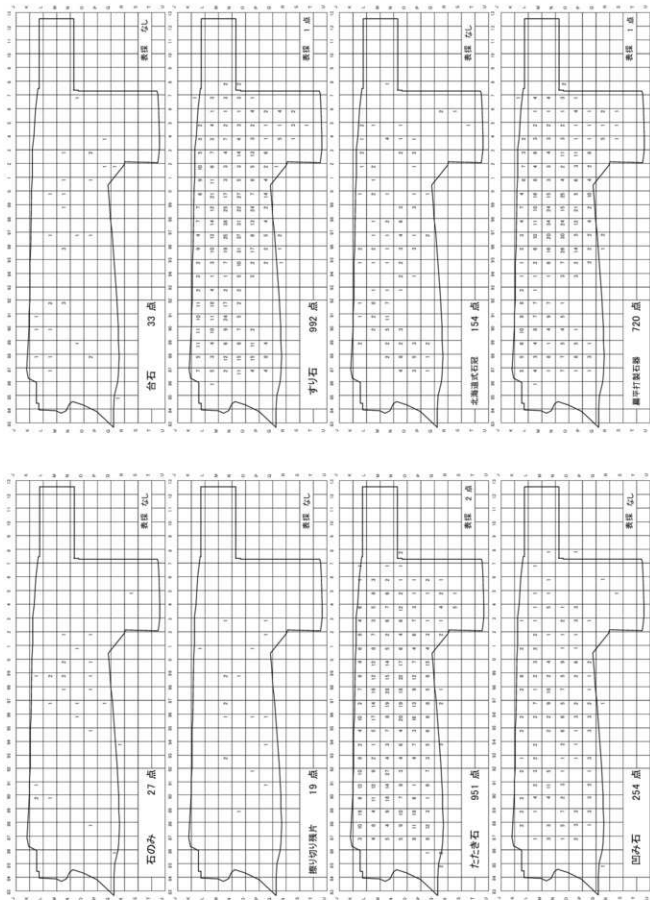
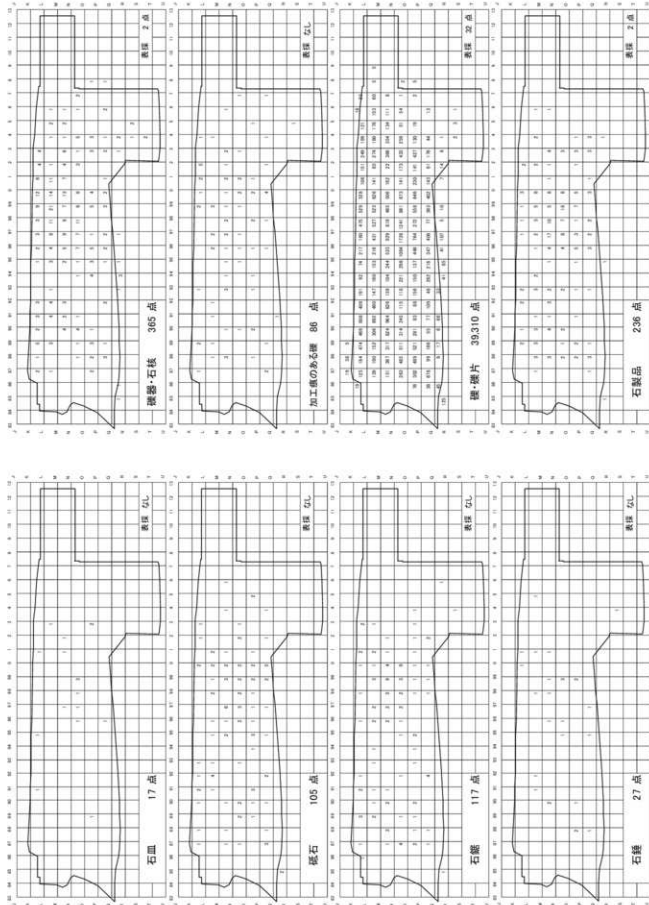


図 V-213 盛土遺構・包含層遺物出土分布 (6)



図V-214 盛土遺構・包含層遺物出土分布 (7)

表V-3 盛土遺構・包含層掘載石器一覽

調査号	調査区	遺物番号	層位	分類	副分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	図面番号	備考
調査V-100-1	M07	190	盛土	石器	野呂片石	2.65	0.43	0.20	1.29	頁岩	図様117	
調査V-100-1	F7	20	盛土	石器	野呂片石	3.27	1.04	0.47	9.10	頁岩	図様117	
調査V-100-1	M07	202	盛土	石器	野呂片石	3.40	1.44	0.41	3.12	頁岩	図様117	
調査V-100-4	L00	107	盛土	石器	野呂片石	3.34	1.63	0.37	3.70	頁岩	図様117	
調査V-100-4	C07	137	盛土層	石器	野呂片石	3.43	1.87	0.36	3.48	頁岩	図様117	
調査V-100-4	M08	183	盛土	石器	野呂片石	3.57	0.50	0.29	0.64	頁岩	図様117	
調査V-100-7	M09	110	盛土	石器	野呂片石	3.69	1.32	0.20	0.67	頁岩	図様117	
調査V-100-7	M09	20	盛土1層	石器	野呂片石	3.85	1.06	0.30	2.70	頁岩	図様117	
調査V-100-4	M08	170	盛土1層	石器	野呂片石	3.91	1.18	0.37	0.67	頁岩	図様117	
調査V-100-10	M0	27	盛土	石器	野呂片石	3.23	1.47	0.42	2.12	チャート	図様117	
調査V-100-11	M08	240	盛土層	石器	野呂片石	4.52	0.63	0.63	3.90	頁岩	図様117	
調査V-100-12	M07	850	盛土層	石器	野呂片石	4.10	3.30	0.70	3.63	頁岩	図様117	
調査V-100-13	M0	11	埋土	石器	野呂片石	5.07	2.00	0.70	6.28	頁岩	図様117	
調査V-100-13	M08	127	盛土	石器	野呂片石	3.57	0.40	0.30	0.63	頁岩	図様117	
調査V-100-12	M08	103	盛土1層	石器	野呂片石	3.87	1.69	0.30	2.14	頁岩	図様117	
調査V-100-10	C07	87	盛土層	石器	野呂片石	3.50	1.00	0.43	1.72	頁岩	図様117	
調査V-100-17	L00	32	盛土層	石器	野呂片石	3.70	1.20	0.32	1.74	頁岩	図様117	
調査V-100-10	M07	633	盛土	石器	野呂片石	4.60	0.42	0.30	1.90	頁岩	図様117	
調査V-100-10	L07	171	盛土	石器	野呂片石	4.70	1.30	0.40	3.10	頁岩	図様117	
調査V-100-20	L04	454	盛土	石器	野呂片石	3.20	1.20	0.30	0.27	チャート	図様117	
調査V-100-21	C04	40	盛土層	石器	野呂片石	3.63	1.10	0.30	3.14	頁岩	図様117	
調査V-100-22	C06	39	盛土	石器	野呂片石	3.62	1.63	0.30	3.74	頁岩	図様117	
調査V-100-21	M00	242	盛土層	石器	野呂片石	3.63	1.25	0.30	2.01	頁岩	図様117	
調査V-100-24	M03	230	盛土層	石器	野呂片石	3.63	1.35	0.30	11.01	頁岩	図様117	アスファルト付
調査V-100-25	L04	104	盛土	石器	野呂片石	3.60	1.00	0.30	3.21	頁岩	図様117	
調査V-100-20	M08	290	盛土	石器	野呂片石	3.90	1.00	0.40	0.70	頁岩	図様117	
調査V-100-27	M09	100	盛土	石器	頁石	3.10	0.80	0.15	0.30	頁岩	図様117	
調査V-100-20	K04	32	盛土1層	石器	頁石	3.85	1.25	0.45	0.67	頁岩	図様117	
調査V-100-20	M02	54	埋土	石器	頁石	3.50	1.15	0.30	0.74	頁岩	図様117	
調査V-100-20	M00	204	盛土1層	石器	頁石	3.75	1.42	0.40	1.03	頁岩	図様117	
調査V-100-1	M00	600	盛土1層	石器	頁石	3.77	1.00	0.35	0.70	頁岩	図様117	
調査V-100-12	M0	131	盛土	石器	頁石	3.93	1.17	0.30	0.97	頁岩	図様117	
調査V-100-10	M07	613	盛土	石器	頁石	3.90	1.40	0.45	1.12	頁岩	図様117	
調査V-100-23	L00	112	盛土層	石器	頁石	3.65	1.52	0.30	3.14	頁岩	図様117	
調査V-100-25	C03	113	盛土	石器	頁石	3.51	1.51	0.30	1.61	頁岩	図様117	
調査V-100-20	M00	417	盛土	石器	頁石	3.23	1.43	0.30	0.90	頁岩	図様117	
調査V-100-27	L00	331	盛土	石器	頁石	3.30	1.75	0.45	1.62	頁岩	図様117	
調査V-100-20	M07	514	盛土	石器	頁石	3.33	1.52	0.40	1.40	頁岩	図様117	
調査V-100-20	M0	27	盛土	石器	頁石	3.27	1.52	0.30	3.15	頁岩	図様117	
調査V-100-20	M09	130	盛土	石器	頁石	3.42	1.50	0.27	1.30	頁岩	図様117	
調査V-100-17	F00	8	埋土	石器	頁石	3.60	1.70	0.35	1.13	頁岩	図様117	
調査V-100-15	M08	773	盛土	石器	頁石	3.60	1.60	0.35	2.52	頁岩	図様117	
調査V-100-41	M07	600	盛土	石器	頁石	3.23	1.62	0.35	0.43	頁岩	図様117	
調査V-100-43	F0	15	埋土	石器	頁石	3.70	1.11	0.35	0.60	頁岩	図様117	
調査V-100-43	L00	427	盛土	石器	頁石	3.67	1.27	0.30	3.10	頁岩	図様117	
調査V-100-40	F2	107	盛土	石器	頁石	3.60	1.20	0.40	0.60	頁岩	図様117	
調査V-100-17	M07	440	盛土	石器	頁石	3.65	1.10	0.35	0.95	頁岩	図様117	
調査V-100-20	P07	60	盛土	石器	頁石	3.67	1.00	0.40	0.60	頁岩	図様117	
調査V-100-40	F4	20	盛土	石器	頁石	3.65	1.40	0.31	0.84	頁岩	図様117	
調査V-101-00	K00	102	盛土層	石器	頁石	3.37	0.83	0.30	1.30	頁岩	図様117	
調査V-101-01	M0	81	1層	石器	頁石	3.27	1.17	0.42	1.77	頁岩	図様117	
調査V-101-02	M00	100	盛土上層	石器	頁石	3.67	1.17	0.30	0.95	頁岩	図様117	
調査V-101-25	L00	200	盛土	石器	頁石	3.72	1.25	0.20	1.14	頁岩	図様117	
調査V-101-25	L00	113	盛土1層	石器	頁石	3.70	1.00	0.40	1.30	頁岩	図様117	
調査V-101-20	M00	300	盛土1層	石器	頁石	3.60	1.72	0.35	2.00	頁岩	図様117	
調査V-101-20	M00	24	盛土	石器	頁石	3.20	1.03	0.32	2.17	頁岩	図様117	
調査V-101-07	M00	232	盛土1層	石器	頁石	4.62	1.44	0.53	2.00	頁岩	図様117	
調査V-101-20	M2	101	盛土	石器	頁石	3.52	1.31	0.45	2.11	頁岩	図様117	
調査V-101-20	M07	903	盛土	石器	頁石	3.57	1.50	0.75	4.05	頁岩	図様117	
調査V-101-20	M00	120	盛土	石器	頁石	4.00	1.70	0.47	2.01	頁岩	図様117	意匠特徴1層目
調査V-101-20	K00	100	盛土	石器	頁石	3.40	1.32	0.40	0.61	頁岩	図様117	意匠特徴1層目
調査V-101-02	L00	270	盛土	石器	意匠片石	3.23	1.20	0.30	0.90	頁岩	図様117	
調査V-101-03	M0	10	埋土1層	石器	意匠片石	3.51	1.53	0.30	1.10	頁岩	図様117	
調査V-101-04	C07	134	盛土	石器	意匠片石	3.70	1.10	0.30	2.13	頁岩	図様117	
調査V-101-03	M00	200	盛土	石器	意匠片石	3.60	1.53	0.45	3.11	頁岩	図様117	
調査V-101-06	M07	702	盛土	石器	意匠片石	4.25	1.70	0.50	1.94	頁岩	図様117	
調査V-101-20	M00	210	盛土	石器	意匠片石	3.23	1.45	0.30	2.17	頁岩	図様117	
調査V-101-00	M00	110	盛土1層	石器	頁石	3.40	1.13	0.35	0.51	頁岩	図様117	
調査V-101-09	K00	20	盛土	石器	頁石	2.60	1.22	0.30	3.14	チャート	図様117	
調査V-101-20	L0	130	盛土	石器	頁石	4.42	1.00	0.40	0.60	チャート	図様117	
調査V-101-21	M07	400	盛土	石器	頁石	3.63	1.20	0.41	3.00	頁岩	図様117	
調査V-101-27	M00	201	盛土	石器	頁石	3.13	1.10	0.45	3.05	頁岩	図様117	
調査V-101-23	M07	523	盛土	石器	頁石	3.23	1.10	0.30	1.07	頁岩	図様117	
調査V-101-21	K00	150	盛土	石器	頁石	3.40	1.10	0.47	1.40	頁岩	図様117	
調査V-101-23	C07	30	埋土1層	石器	頁石	3.40	1.52	0.45	1.85	頁岩	図様117	
調査V-101-20	L07	70	埋土1層	石器	頁石	3.60	1.30	0.31	2.30	頁岩	図様117	
調査V-101-27	M00	220	盛土	石器	頁石	3.60	1.05	0.40	3.52	頁岩	図様117	
調査V-101-20	M07	530	盛土	石器	頁石	3.40	1.30	0.35	2.40	頁岩	図様117	
調査V-101-20	M00	20	埋土	石器	頁石	3.77	0.62	0.42	0.65	頁岩	図様110	
調査V-101-00	L00	40	1層	石器	頁石	3.63	0.84	0.30	0.70	頁岩	図様110	
調査V-101-04	C00	00	埋土	石器	頁石	3.42	1.70	0.71	3.15	頁岩	図様110	
調査V-101-03	M07	732	盛土	石器	頁石	7.00	1.32	1.00	6.40	頁岩	図様110	
調査V-101-03	M0	142	盛土	石器	頁石	10.00	2.23	1.45	23.17	頁岩	図様110	
調査V-101-04	L2	110	盛土	石器	野呂片石	3.60	1.10	0.40	2.20	頁岩	図様110	
調査V-101-03	L1	231	盛土	石器	野呂片石	3.67	1.72	0.45	0.32	頁岩	図様110	

表V-3 盛土遺構・包含層掘載石器一覽

遺構番号	調査年度	遺構番号	層位	土質	掘削層	高さ(m)	幅(m)	長さ(m)	容量(m ³)	材質	遺構番号	備考
遺V-101-01	M00	120	盛土層	赤褐色	掘削層	7.20	2.02	1.43	21.1	赤土	遺構120	
遺V-102-07	M08	207	盛土層	赤褐色	掘削層	4.70	1.18	0.73	0.39	赤土	遺構207	
遺V-102-08	M09	212	盛土層	赤褐色	掘削層	4.90	1.07	0.40	0.20	赤土	遺構212	
遺V-103-03	L06	95	盛土層	赤褐色	掘削層	6.70	1.04	0.43	0.18	赤土	遺構95	
遺V-103-09	R06	91	盛土層	赤褐色	掘削層	6.20	1.14	1.28	1.04	赤土	遺構91	
遺V-103-09	P0	21	盛土層	赤褐色	掘削層	6.60	1.11	1.06	0.72	赤土	遺構21	土器片出
遺V-103-09	M06	413	盛土層	赤褐色	掘削層	5.60	1.45	0.40	0.20	赤土	遺構413	
遺V-103-09	M07	207	盛土層	赤褐色	掘削層	5.90	1.43	0.30	0.20	赤土	遺構207	
遺V-103-09	M05	130	盛土層	赤褐色	掘削層	5.60	1.04	0.43	0.19	赤土	遺構130	
遺V-103-09	K01	40	盛土層	赤褐色	掘削層	4.05	1.74	0.77	1.90	赤土	遺構40	
遺V-103-09	C01	40	盛土層	赤褐色	掘削層	4.00	1.04	1.10	0.45	赤土	遺構40	
遺V-103-07	L07	371	盛土層	赤褐色	掘削層	3.13	1.83	0.45	0.21	赤褐色	遺構371	
遺V-103-06	C01	42	赤土層	赤褐色	赤褐色層	3.17	1.40	0.47	1.66	赤土	遺構42	
遺V-103-06	C09	210	盛土層	赤褐色	赤褐色層	3.20	1.40	0.37	1.08	赤土	遺構210	
遺V-103-06	L09	447	盛土層	赤褐色	赤褐色	4.20	1.12	0.47	0.78	赤土	遺構447	
遺V-103-101	C07	190	赤土層	赤褐色	赤褐色	4.60	1.00	1.00	0.64	赤土	遺構190	
遺V-103-101	M07	402	盛土層	赤褐色	赤褐色	4.67	1.13	1.21	1.04	赤褐色	遺構402	
遺V-103-101	P0	13	盛土層	赤褐色	赤褐色	3.00	1.40	1.00	0.70	赤土	遺構13	
遺V-103-101	M09	413	盛土層	赤褐色	赤褐色	4.40	1.10	1.00	0.70	赤土	遺構413	
遺V-103-101	M07	410	盛土層	赤褐色	赤褐色	3.70	1.40	0.40	0.21	赤土	遺構410	
遺V-103-101	M09	209	赤土層	赤褐色	赤褐色	3.90	1.10	1.00	0.70	赤土	遺構209	
遺V-103-101	M05	203	盛土層	赤褐色	赤褐色	11.60	1.00	1.20	0.12	赤土	遺構203	
遺V-103-104	P01	142	赤土層	赤褐色	掘削層	3.04	2.04	0.40	0.43	赤褐色	遺構142	
遺V-103-104	M07	511	盛土層	赤褐色	掘削層	6.30	1.00	1.20	0.72	赤褐色	遺構511	
遺V-103-110	L04	301	盛土層	赤褐色	掘削層	11.80	1.10	1.20	0.12	赤土	遺構301	
遺V-103-111	M09	410	盛土層	赤褐色	掘削層	11.60	1.00	1.20	0.12	赤土	遺構410	
遺V-103-112	C10	21	赤土層	赤褐色	掘削層	11.20	2.47	1.20	27.14	赤土	遺構21	
遺V-103-112	K07	4	盛土層	赤褐色	掘削層	11.00	1.10	1.40	0.17	赤土	遺構4	
遺V-103-114	P09	177	赤土層	掘削層	4.61	2.42	0.40	2.14	赤土	遺構177	赤土層	
遺V-103-115	C1	34	赤土層	掘削層	6.00	1.03	1.10	0.65	赤褐色	遺構34	赤土層	
遺V-103-116	C0	140	盛土層	掘削層	13.10	1.03	2.44	116.13	赤褐色	遺構140	赤土層	
遺V-103-117	C04	117	赤土層	掘削層	7.30	1.16	1.10	1.01	赤褐色	遺構117	赤土層	
遺V-103-118	C09	203	赤土層	掘削層	6.15	1.11	1.40	0.81	赤褐色	遺構203	赤土層	
遺V-103-118	M04	303	盛土層	掘削層	7.80	1.06	1.11	0.68	赤褐色	遺構303	赤土層	
遺V-103-118	C06	274	盛土層	掘削層	5.58	1.17	0.40	0.33	赤土	遺構274	赤土層	
遺V-103-118	P01	77	赤土層	掘削層	4.23	1.60	0.40	0.40	赤土	遺構77	赤土層	
遺V-103-121	P04	100	赤土層	掘削層	7.11	1.16	1.10	0.71	赤土	遺構100	赤土層	
遺V-103-121	P04	27	盛土層	掘削層	6.03	1.13	1.10	0.41	赤土	遺構27	赤土層	
遺V-103-121	M08	210	赤土層	掘削層	4.00	1.11	0.40	0.13	赤褐色	遺構210	層位不明	
遺V-103-121	M06	140	赤土層	掘削層	4.41	1.11	1.10	0.40	赤褐色	遺構140	層位不明	
遺V-103-121	C16	4	赤土層	掘削層	4.30	1.11	1.40	0.17	赤褐色	遺構4	層位不明	
遺V-103-121	C1	136	盛土層	掘削層	7.93	1.43	1.00	1.54	赤土	遺構136	層位不明	
遺V-103-126	K00	141	赤土層	掘削層	7.00	1.11	1.21	1.10	赤土	遺構141	層位不明	
遺V-103-126	C07	30	赤土層	掘削層	4.01	1.00	0.47	0.14	赤褐色	遺構30	層位不明	
遺V-103-130	C09	114	盛土層	掘削層	1.91	1.17	1.21	0.74	赤褐色	遺構114	赤褐色	
遺V-103-131	L04	2	盛土層	掘削層	9.00	1.00	1.10	0.64	赤褐色	遺構2	赤褐色	
遺V-103-131	P08	130	盛土層	掘削層	5.60	1.10	1.40	0.73	赤褐色	遺構130	赤褐色	
遺V-103-131	M06	130	盛土層	掘削層	5.70	1.00	0.47	0.47	赤褐色	遺構130	赤褐色	
遺V-103-134	M08	180	盛土層	掘削層	5.70	1.10	1.00	0.60	赤土	遺構180	赤褐色	
遺V-103-135	M06	276	赤褐色	掘削層	4.17	0.89	1.30	0.40	赤褐色	遺構276	赤褐色	
遺V-103-136	M04	404	盛土層	掘削層	4.80	1.10	1.10	0.70	赤土	遺構404	赤褐色	
遺V-103-137	M04	411	盛土層	掘削層	7.00	1.11	1.06	0.71	赤土	遺構411	赤褐色	
遺V-103-138	M07	410	盛土層	掘削層	7.41	1.01	1.11	0.70	赤土	遺構410	赤褐色	
遺V-103-139	M05	200	盛土層	掘削層	6.91	1.14	1.11	0.83	赤土	遺構200	赤褐色	
遺V-103-141	K00	44	盛土層	掘削層	5.30	1.00	1.10	0.64	赤土	遺構44	赤褐色	
遺V-103-141	L47	27	盛土層	掘削層	5.61	1.11	1.11	0.70	赤土	遺構27	赤褐色	
遺V-103-141	K01	117	盛土層	掘削層	6.90	1.10	1.10	0.64	赤土	遺構117	赤褐色	
遺V-103-144	L40	210	赤土層	掘削層	3.70	1.10	0.40	0.19	赤褐色	遺構210	赤褐色	
遺V-103-145	M07	407	盛土層	掘削層	3.90	1.10	0.40	0.20	赤褐色	遺構407	赤褐色	
遺V-103-146	K01	30	盛土層	掘削層	1.10	1.00	1.40	0.17	赤土	遺構30	赤褐色	
遺V-103-147	M07	476	盛土層	掘削層	4.40	1.10	1.00	0.74	赤土	遺構476	赤褐色	
遺V-103-148	L47	11	赤土層	掘削層	4.30	1.00	1.40	0.17	赤土	遺構11	赤褐色	
遺V-103-149	M06	140	盛土層	掘削層	6.30	1.00	1.40	0.71	赤土	遺構140	赤褐色	
遺V-103-150	M05	221	盛土層	掘削層	6.30	1.10	1.11	0.67	赤土	遺構221	赤褐色	
遺V-103-151	M09	410	盛土層	掘削層	11.60	1.10	1.21	0.12	赤褐色	遺構410	赤褐色	
遺V-103-152	K1	40	赤土層	掘削層	4.91	1.10	1.40	0.19	赤褐色	遺構40	赤褐色	
遺V-103-153	M05	448	盛土層	掘削層	6.01	1.10	1.10	0.70	赤褐色	遺構448	赤褐色	
遺V-103-154	K1	112	盛土層	掘削層	4.30	1.10	1.10	0.51	赤褐色	遺構112	赤褐色	
遺V-103-155	M06	776	盛土層	掘削層	7.10	1.10	0.60	0.49	赤土	遺構776	赤褐色	
遺V-103-156	M0	30	盛土層	掘削層	1.01	1.13	1.47	0.21	赤土	遺構30	赤褐色	
遺V-103-157	L1	124	赤土層	掘削層	7.61	1.00	0.40	0.41	赤土	遺構124	赤褐色	
遺V-103-158	M08	110	盛土層	掘削層	6.20	1.10	1.10	0.70	赤褐色	遺構110	赤褐色	
遺V-103-159	K00	140	盛土層	掘削層	6.10	1.10	1.10	0.70	赤褐色	遺構140	赤褐色	
遺V-103-160	K01	200	盛土層	掘削層	6.20	1.00	0.40	0.40	赤土	遺構200	赤褐色	
遺V-103-161	P04	131	赤土層	掘削層	11.10	1.00	1.10	0.41	赤褐色	遺構131	赤褐色	
遺V-103-162	K06	47	盛土層	掘削層	7.10	1.00	1.10	0.64	赤褐色	遺構47	赤褐色	
遺V-103-163	C1	47	盛土層	掘削層	1.97	1.14	1.10	0.69	赤褐色	遺構47	赤褐色	
遺V-103-164	L46	214	赤土層	掘削層	1.10	1.10	1.20	0.12	赤土	遺構214	赤褐色	
遺V-103-165	P01	140	盛土層	掘削層	1.90	1.10	1.10	0.49	赤褐色	遺構140	赤褐色	
遺V-103-166	M07	3	1層	掘削層	7.27	1.12	1.01	0.62	赤褐色	遺構3	赤褐色	
遺V-103-167	P0	110	盛土層	掘削層	5.10	1.10	1.10	0.47	赤土	遺構110	赤褐色	
遺V-103-168	L1	110	赤土層	掘削層	4.70	1.10	1.10	0.47	赤土	遺構110	赤褐色	
遺V-103-169	M04	400	盛土層	掘削層	1.70	1.10	1.10	0.15	赤土	遺構400	赤褐色	
遺V-103-170	M07	110	盛土層	赤褐色	1.30	1.00	0.70	0.18	赤褐色	遺構110	赤褐色	

表V-3 盛土遺構・包含層掘載石器一覽

遺構番号	調査表	遺構番号	層位	時期	掘削層	高さ(m)	幅(m)	長さ(m)	巻上げ	材質	遺構番号	備考
盛V-179-210	3097	210	遺土	縄文時代前期	内・掘削層	0.25	2.00	4.25	20.0	灰砂	盛V112	
盛V-179-210	3098	210	遺土	縄文時代前期	内・掘削層	0.25	2.00	4.25	20.0	灰砂	盛V112	
盛V-179-210	3099	147	遺土層	古墳	掘削層	0.25	2.70	2.90	29.00	灰砂	盛V114	
盛V-179-210	3099	111	遺土	古墳	掘削層	1.00	3.05	3.00	23.00	灰砂	盛V114	
盛V-179-210	3100	30	遺土層	古墳	掘削層	0.60	3.70	1.70	103.00	灰砂	盛V114	
盛V-179-210	3097	711	遺土	古墳	掘削層	10.20	3.15	1.25	63.77	灰砂	盛V114	
盛V-179-211	136	63	遺土層	古墳	掘削層	11.60	3.20	0.90	100.20	灰砂	盛V114	遺土
盛V-179-211	137	63	遺土層	古墳	掘削層	7.60	3.60	1.25	58.71	灰砂	盛V114	遺土
盛V-179-211	306	431	遺土	古墳	掘削層	26.50	3.50	0.60	100.70	土砂	盛V114	遺土
盛V-179-214	306	230	遺土	古墳	掘削層	64.70	6.90	2.43	132.43	緑色灰砂	盛V114	遺土
盛V-180-201	809	131	遺土	古墳	掘削層	110.10	5.95	3.00	141.40	緑色灰砂	盛V114	掘削層以外
盛V-180-200	136	97	掘土上	古墳	掘削層	0.60	6.15	3.70	200.20	緑色灰砂	盛V114	
盛V-180-207	309	636	遺土	古墳	掘削層	10.60	6.00	1.00	128.17	緑色灰砂	盛V114	
盛V-180-208	309	20	遺土層	古墳	掘削層	12.25	4.25	2.00	175.03	緑色灰砂	盛V114	
盛V-180-209	137	163	遺土層	古墳	掘削層	12.50	3.70	3.40	200.20	緑色灰砂	盛V114	マニフェスト書
盛V-181-270	306	634	遺土	古墳	掘削層	0.60	3.95	2.00	103.94	緑色灰砂	盛V114	
盛V-181-271	136	62	遺土	古墳	掘削層	0.70	3.50	2.40	111.40	緑色灰砂	盛V114	掘削層外
盛V-181-272	137	90	遺土	古墳	掘削層	116.10	5.60	3.00	130.03	古墳砂	盛V114	掘削層外
盛V-181-273	303	30	遺土層	古墳	掘削層	11.00	5.10	2.40	243.24	緑色灰砂	盛V114	中成土
盛V-181-274	306	230	遺土層	古墳	掘削層	0.20	1.80	0.45	21.00	緑色灰砂	盛V114	
盛V-181-275	136	213	遺土	古墳	掘削層	7.00	3.50	1.15	54.07	灰砂	盛V114	
盛V-181-276	137	130	遺土	古墳	掘削層	0.60	3.70	1.45	30.72	土砂	盛V114	
盛V-181-277	309	430	遺土	古墳	掘削層	12.00	3.10	1.40	69.32	土砂	盛V114	
盛V-181-278	309	10	遺土層	古墳	掘削層	1.00	3.15	0.60	11.00	緑色灰砂	盛V114	
盛V-181-279	136	480	遺土	古墳	掘削層	3.20	3.10	1.15	24.00	緑色灰砂	盛V114	
盛V-181-280	311	27	遺土	古墳	掘削層	0.40	1.00	1.00	6.63	灰砂	盛V114	
盛V-181-281	309	140	遺土	古墳	掘削層	5.60	2.15	0.20	7.00	灰砂	盛V114	
盛V-181-282	806	193	遺土	古墳	掘削層	0.20	2.50	0.75	13.60	灰砂	盛V114	
盛V-181-283	306	430	遺土層	古墳	掘削層以外	6.20	3.00	0.90	38.14	緑色灰砂	盛V114	
盛V-181-284	30	30	遺土	古墳	掘削層以外	11.20	3.05	1.45	103.37	緑色灰砂	盛V114	
盛V-181-285	303	40	掘削層	古墳	掘削層	0.60	4.00	2.20	70.51	緑色灰砂	盛V114	
盛V-181-286	306	692	掘土上層	古墳	掘削層	110.20	6.00	3.45	132.10	緑色灰砂	盛V114	
盛V-181-287	304	31	遺土層	古墳	掘削層	10.80	5.10	3.40	153.10	緑色灰砂	盛V114	
盛V-181-288	307	31	遺土層	古墳	掘削層	0.20	3.10	2.20	66.10	灰砂	盛V114	
盛V-181-289	306	300	遺土	古墳	掘削層	0.20	3.20	3.40	100.00	マニフェスト	盛V114	
盛V-181-290	307	231	遺土	古墳	掘削層	0.60	6.90	2.30	245.70	灰砂	盛V114	
盛V-181-291	309	180	遺土層	古墳	掘削層	10.00	5.60	3.40	126.60	砂	盛V114	
盛V-181-292	303	394	遺土層	古墳	掘削層	117.00	6.10	3.70	103.00	砂	盛V114	
盛V-181-293	304	30	遺土	古墳	掘削層	10.20	5.10	4.00	105.60	砂	盛V114	
盛V-181-294	30	40	遺土	古墳	掘削層	0.60	3.60	3.30	151.73	緑色灰砂	盛V114	掘削層以外
盛V-181-295	137	163	遺土	古墳	掘削層	0.60	4.30	3.40	117.00	灰砂	盛V114	
盛V-181-296	306	197	遺土層	古墳	掘削層	6.40	3.00	3.20	122.70	灰砂	盛V114	
盛V-181-297	303	31	遺土層	古墳	掘削層	11.70	5.30	2.40	303.13	灰砂	盛V114	
盛V-181-298	804	207	遺土	古墳	掘削層+埋藏層	11.00	5.00	2.00	105.94	砂	盛V114	
盛V-181-299	81	47	遺土層	古墳	掘削層	1.20	3.40	3.20	207.45	砂	盛V114	古墳外周部
盛V-181-300	307	141	遺土	古墳	掘削層	0.20	3.00	3.40	200.73	マニフェスト	盛V114	
盛V-181-301	136	133	遺土層	古墳	掘削層	0.60	3.00	3.20	200.07	灰砂	盛V114	
盛V-181-302	136	137	遺土	古墳	掘削層	11.20	4.30	4.40	100.15	砂	盛V114	
盛V-181-303	307	231	遺土	古墳	掘削層	10.70	7.20	3.30	600.00	笠成土	盛V114	
盛V-181-304	803	60	遺土層	古墳	掘削層	10.00	6.00	4.20	100.75	灰砂	盛V114	
盛V-181-305	309	231	遺土	古墳	掘削層	10.20	7.00	4.40	140.20	砂	盛V114	
盛V-181-306	306	181	掘土上層	古墳	掘削層	11.70	6.10	4.20	100.10	マニフェスト	盛V114	
盛V-181-307	147	40	遺土層	古墳	掘削層	0.20	3.10	2.20	200.13	砂	盛V114	
盛V-181-308	308	80	遺土	古墳	掘削層	0.20	3.60	2.00	100.11	砂	盛V114	
盛V-181-309	301	120	遺土層	古墳	掘削層	7.20	7.90	4.40	300.34	灰砂	盛V114	
盛V-181-310	307	41	掘土上	古墳	掘削層	7.00	6.10	3.20	107.00	マニフェスト	盛V114	
盛V-181-311	309	50	遺土	古墳	掘削層	0.20	6.00	2.60	700.00	砂	盛V114	
盛V-181-312	309	17	遺土	古墳	掘削層	0.60	7.20	6.10	147.00	灰砂	盛V114	
盛V-181-313	311	40	遺土層	古墳	掘削層	10.60	7.30	7.10	107.00	灰砂	盛V114	
盛V-181-314	306	240	遺土	古墳	古墳外周部	7.00	6.20	2.40	171.14	緑色灰砂	盛V114	
盛V-181-315	311	43	遺土層	古墳	掘削層	11.20	6.10	3.40	133.11	灰砂	盛V114	古墳外周部
盛V-181-316	304	290	掘土上層	古墳	掘削層	11.20	5.00	2.00	250.00	砂	盛V114	
盛V-181-317	306	151	遺土層	古墳	埋藏層	11.00	6.00	2.00	133.00	灰砂	盛V114	
盛V-181-318	303	71	遺土層	古墳	砂	1.20	5.90	3.20	170.23	砂	盛V114	
盛V-181-319	310	230	遺土	古墳	砂	7.00	5.00	3.20	105.00	灰砂	盛V114	
盛V-181-320	303	140	遺土	古墳	掘削層	7.60	4.00	3.20	139.00	灰砂	盛V114	
盛V-181-321	137	47	遺土層	古墳	掘削層	0.20	3.60	3.20	100.10	灰砂	盛V114	
盛V-181-322	306	413	掘土上層	古墳	古墳外周部	10.20	6.00	4.20	117.17	灰砂	盛V114	
盛V-181-323	306	112	掘土上層	古墳	掘削層+埋藏層	11.00	6.20	2.60	102.12	砂	盛V114	
盛V-181-324	309	11	遺土層	古墳	古墳外周部	0.20	5.00	4.40	102.17	マニフェスト	盛V114	
盛V-181-325	304	23	遺土層	古墳	掘削層	0.70	3.20	2.40	80.00	灰砂	盛V114	古墳外周部
盛V-181-326	304	230	遺土	古墳	掘削層	7.60	6.00	3.10	134.10	灰砂	盛V114	古墳外周部
盛V-181-327	309	230	遺土	古墳	掘削層	7.00	6.00	3.20	100.14	灰砂	盛V114	古墳外周部
盛V-181-328	302	140	遺土	古墳	掘削層	10.20	5.60	2.40	100.10	灰砂	盛V114	古墳外周部
盛V-181-329	304	140	遺土層	古墳	掘削層	0.20	4.60	4.00	200.00	灰砂	盛V114	古墳外周部
盛V-181-330	304	140	遺土層	古墳	掘削層	0.70	5.00	2.90	100.30	灰砂	盛V114	
盛V-181-331	300	153	遺土層	古墳	埋藏層	14.00	5.71	2.40	214.63	灰砂	盛V114	
盛V-181-332	309	400	遺土	古墳	掘削層	14.00	6.50	2.70	100.10	灰砂	盛V114	
盛V-181-333	306	140	掘土上層	古墳	埋藏層	17.20	6.10	4.00	80.41	灰砂	盛V114	
盛V-181-334	300	205	遺土層	古墳	古墳外周部	0.20	6.90	4.60	200.70	灰砂	盛V114	
盛V-181-335	309	140	遺土層	古墳	古墳外周部	0.20	5.70	4.20	200.10	灰砂	盛V114	
盛V-181-336	807	127	遺土層	古墳	古墳外周部	0.70	3.20	4.00	200.00	灰砂	盛V114	
盛V-181-337	130	430	遺土	古墳	古墳外周部	11.20	6.00	4.30	107.07	灰砂	盛V114	
盛V-181-338	130	30	遺土	古墳	古墳外周部	0.60	6.20	4.30	103.30	灰砂	盛V114	
盛V-181-339	808	172	遺土	古墳	古墳外周部	0.60	6.70	3.70	120.20	灰砂	盛V114	埋藏層
盛V-181-340	309	194	遺土	古墳	古墳外周部	11.00	7.00	3.20	120.60	灰砂	盛V114	埋藏層

表V-3 盛土遺構・包含層掘載石器一覽

遺構番号	調査区	遺構番号	階位	分類	副分類	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	築年次	材質	図面番号	備考	
遺V-191-021	306	27	遺土層	中層	超平礎遺構	8.20	15.20	2.20	276.15	灰土	図面110		
遺V-191-022	306	28	遺土層	中層	中層礎	5.20	9.20	1.20	196.71	灰土	図面110		
遺V-191-027	306	76	遺土層	中層	中層礎	5.20	11.20	1.20	1676.10	灰土	図面110		
遺V-191-028	306	78	遺土層	中層	中層礎	16.20	16.20	1.20	1511.71	灰土	図面110		
遺V-191-029	306	113	遺土層	中層	中層礎	9.20	22.00	1.00	1513.00	灰土	図面110		
遺V-191-030	306	80	遺土層	中層	超平礎遺構	12.00	15.10	0.70	1512.21	灰土	図面110		
遺V-191-031	306	110	遺土層	中層	超平礎遺構	10.20	13.00	1.20	1376.47	灰土	図面110		
遺V-191-032	306	116	遺土層	中層	超平礎遺構	7.20	9.20	1.20	1415.16	灰土	図面110		
遺V-191-033	306	101	遺土層	中層	超平礎遺構	15.10	13.00	1.00	1517.63	灰土	図面110		
遺V-191-034	306	103	遺土層	中層	超平礎遺構	8.20	10.00	0.45	1616.29	灰土	図面110		
遺V-191-035	306	109	遺土層	中層	超平礎遺構	5.20	7.20	1.20	1616.74	灰土	図面110		
遺V-191-036	306	111	遺土層	中層	超平礎遺構	5.20	9.20	1.20	1261.14	灰土	図面110		
遺V-191-037	310	81	遺土中層	中層	無断面中層礎遺構	6.20	9.00	3.00	137.11	灰土	図面110		
遺V-191-038	304	70	遺土中層	中層	超平礎遺構	7.00	11.20	1.20	1571.81	灰土	図面110		
遺V-191-039	304	81	遺土中層	中層	超平礎遺構	16.20	10.20	5.20	1621.00	灰土	図面110	敷石・敷石の下の層	
遺V-191-040	309	75	遺土層	中層	超平礎遺構	19.20	14.20	3.20	1611.00	灰土	図面110		
遺V-191-041	302	19	遺土中層	中層	超平礎遺構	16.20	10.20	2.20	636.20	灰土	図面110		
遺V-191-042	301	20	遺土中層	中層	超平礎遺構	11.20	11.20	2.20	1003.44	灰土	図面111	敷石あり	
遺V-191-043	309	102	遺土層	中層	超平礎遺構	12.20	7.20	1.20	1004.63	灰土	図面111	敷石あり	
遺V-191-044	306	86	遺土中層	中層	超平礎遺構	6.00	6.20	1.20	621.97	灰土	図面111	敷石あり	
遺V-191-045	307	94	遺土層	中層	超平礎遺構	8.20	8.20	1.20	1615.25	灰土	図面111		
遺V-191-046	306	73	遺土層	中層	超平礎遺構	2.00	8.20	1.20	1515.22	灰土	図面111		
遺V-191-047	304	83	遺土中層	中層	超平礎遺構	11.20	1.20	2.20	1516.87	灰土	図面111		
遺V-191-048	307	82	遺土中層	中層	超平礎遺構	5.00	12.20	2.00	1612.12	灰土	図面111		
遺V-191-049	305	810	遺土層	中層	超平礎遺構	10.20	11.00	1.00	610.00	灰土	図面111		
遺V-191-050	306	80	遺土層	中層	超平礎遺構	5.20	6.20	3.20	1016.00	灰土	図面111		
遺V-191-051	310	100	遺土層	中層	超平礎遺構	5.00	7.00	3.20	1461.21	灰土	図面111		
遺V-191-052	306	811	遺土中層	中層	超平礎遺構	5.00	6.40	3.40	167.72	灰土	図面111		
遺V-191-053	306	103	遺土中層	中層	超平礎遺構	5.00	6.20	3.00	1411.22	灰土	図面111		
遺V-191-054	306	113	遺土中層	中層	超平礎遺構	6.20	8.20	4.20	171.19	灰土	図面111		
遺V-191-055	306	101	遺土層	中層	超平礎遺構	9.20	9.20	1.10	1261.00	灰土	図面111		
遺V-191-056	309	101	遺土層	中層	超平礎遺構	7.20	11.00	1.10	615.00	灰土	図面111		
遺V-191-057	309	114	遺土層	中層	超平礎遺構	6.10	9.20	2.00	712.21	灰土	図面111		
遺V-191-058	306	81	遺土中層	中層	超平礎遺構	8.20	1.20	2.00	1611.81	灰土	図面111		
遺V-191-059	310	110	遺土中層	中層	超平礎遺構	9.00	3.20	3.00	1719.00	灰土	図面111		
遺V-191-060	305	107	遺土中層	中層	超平礎遺構	7.00	10.00	3.00	1516.20	灰土	図面111		
遺V-191-061	305	115	遺土中層	中層	超平礎遺構	7.20	8.20	1.20	616.20	灰土	図面111		
遺V-191-062	310	111	遺土中層	中層	超平礎遺構	7.00	11.00	1.10	1040.00	灰土	図面111		
遺V-191-063	308	117	遺土中層	中層	超平礎遺構	12.00	9.20	3.00	671.20	灰土	図面111		
遺V-191-064	311	70	遺土中層	中層	超平礎遺構	13.20	6.40	3.00	610.20	灰土	図面111		
遺V-191-065	306	810	遺土中層	中層	超平礎遺構	16.00	8.20	3.20	1371.00	灰土	図面111		
遺V-191-066	312	111	遺土中層	中層	超平礎遺構	9.00	11.00	4.00	761.80	灰土	図面111		
遺V-191-067	308	113	遺土中層	中層	超平礎遺構	10.20	10.20	4.00	1611.81	灰土	図面111		
遺V-191-068	306	106	遺土中層	中層	超平礎遺構	14.00	10.00	4.00	2361.10	灰土	図面112		
遺V-191-069	311	52	遺土中層	中層	超平礎遺構	23.00	11.00	7.00	5300.10	灰土	図面112		
遺V-191-070	306	117	遺土中層	中層	中層	10.10	11.00	3.00	1460.10	灰土	図面112	敷石	
遺V-200-071	800	170	遺土層	中層	超平礎遺構	28.00	20.20	11.00	2100.10	灰土	図面112		
遺V-200-072	800	190	遺土層	中層	超平礎遺構	15.00	20.20	11.00	2100.10	灰土	図面112		
遺V-200-073	810	85	石	中層	超平礎遺構	11.20	1.00	2.20	1611.21	灰土	図面112		
遺V-201-074	307	205	遺土層	中層	超平礎遺構	6.00	1.20	1.20	1715.10	灰土	図面112		
遺V-201-075	305	81	遺土層	中層	超平礎遺構	4.20	1.00	1.20	1612.21	灰土	図面112		
遺V-201-076	301	119	遺土中層	中層	超平礎遺構	6.00	8.20	0.70	1616.29	灰土	図面112		
遺V-201-077	300	115	遺土中層	中層	超平礎遺構	5.20	1.20	0.60	1615.21	灰土	図面112		
遺V-201-078	308	100	遺土中層	中層	超平礎遺構	6.20	6.20	0.60	1612.21	灰土	図面112		
遺V-201-079	107	104	遺土層	中層	超平礎遺構	6.20	6.00	0.60	1611.14	灰土	図面112		
遺V-201-080	309	117	遺土層	中層	超平礎遺構	4.00	1.20	0.60	1615.21	灰土	図面112		
遺V-201-081	306	7	遺土中層	中層	超平礎遺構	5.20	1.20	0.60	1615.21	灰土	図面112		
遺V-201-082	306	81	遺土中層	中層	超平礎遺構	5.20	1.20	0.60	1614.21	灰土	図面112		
遺V-201-083	309	115	遺土中層	中層	超平礎遺構	5.20	1.20	0.60	1615.21	灰土	図面112		
遺V-201-084	308	3	遺土中層	中層	超平礎遺構	6.20	1.20	0.60	1615.21	灰土	図面112		
遺V-201-085	308	101	遺土層	中層	超平礎遺構	5.00	6.00	1.20	1316.21	灰土	図面112		
遺V-201-086	304	11	遺土中層	中層	超平礎遺構	5.00	6.00	1.00	1611.21	灰土	図面112		
遺V-201-087	304	116	遺土中層	中層	超平礎遺構	4.20	1.20	1.00	1611.21	灰土	図面112		
遺V-201-088	307	7	遺土中層	中層	超平礎遺構	3.00	1.20	0.60	1616.29	灰土	図面112		
遺V-201-089	308	400	遺土中層	中層	超平礎遺構	5.20	1.20	0.60	1615.21	灰土	図面112		
遺V-201-090	306	205	遺土中層	中層	超平礎遺構	5.20	1.20	0.60	1611.21	灰土	図面112		
遺V-201-091	307	217	遺土層	中層	超平礎遺構	5.20	1.20	0.60	1611.21	灰土	図面112		
遺V-201-092	307	8	遺土中層	中層	超平礎遺構	4.00	1.20	0.70	1611.21	灰土	図面112		
遺V-201-093	308	8	遺土中層	中層	超平礎遺構	3.20	1.20	0.60	1616.29	灰土	図面112		
遺V-201-094	304	815	遺土中層	中層	超平礎遺構	3.00	1.20	0.70	1611.21	灰土	図面112		
遺V-201-095	309	400	遺土中層	中層	超平礎遺構	3.20	1.20	0.60	1611.21	灰土	図面112		
遺V-201-096	308	400	遺土中層	中層	超平礎遺構	3.00	1.20	0.60	1611.21	灰土	図面112		
遺V-201-097	1067	11	遺土中層	中層	超平礎遺構	3.20	1.20	0.70	612.21	灰土	図面112		
遺V-201-098	308	40	遺土中層	中層	超平礎遺構	3.20	1.20	0.60	1616.29	灰土	図面112		
遺V-201-099	301	61	遺土中層	中層	超平礎遺構	3.00	1.20	0.60	1611.21	灰土	図面112		
遺V-201-100	305	117	遺土層	中層	超平礎遺構	3.00	1.20	1.10	1512.21	灰土	図面112		
遺V-201-101	308	69	遺土中層	中層	超平礎遺構	3.20	1.20	0.70	614.21	灰土	図面112		
遺V-201-102	117	110	遺土中層	中層	超平礎遺構	3.20	1.20	0.70	1611.21	灰土	図面112		
遺V-201-103	308	40	遺土中層	中層	超平礎遺構	3.00	1.20	0.70	1611.21	灰土	図面112		
遺V-201-104	308	140	遺土層	中層	超平礎遺構	3.00	1.20	0.60	612.21	灰土	図面112		
遺V-201-105	307	8	遺土中層	中層	超平礎遺構	3.00	1.20	0.60	611.21	灰土	図面112		
遺V-201-106	112	117	遺土層	中層	超平礎遺構	2.00	1.20	0.60	2219.21	灰土	図面112		
遺V-201-107	304	1	遺土中層	中層	超平礎遺構	1.00	1.20	1.10	311.21	灰土	図面112		
遺V-201-108	309	110	遺土層	中層	超平礎遺構	0.60	0.60	1.20	1.10	1611.21	灰土	図面112	

表V-3 盛土遺構・包含層掘載石器一覧

調査号	調査点	遺物番号	層位	分類	副分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	図面番号	備考
関大-V-01-006	M01	20	盛土下層	石器	土製品	5.10	2.00	1.20	2.17	磨石	図形13	
関大-V-01-007	M01	19	盛土下層	石器	土製品	3.30	2.00	1.10	2.05	磨石	図形13	
関大-V-01-011	M4	30	盛土層	石器	磨石(土器上)	4.10	3.00	0.90	12.30	磨石	図形13	
関大-V-01-012	M4	130	盛土下層	石器	磨石(土器上)	4.00	3.00	1.00	10.15	磨石	図形13	
関大-V-01-013	M07	300	盛土	石器	磨石(土器上)	4.00	3.00	1.10	10.74	磨石	図形13	
関大-V-01-014	M08	130	盛土	石器	土製品	11.70	3.00	1.30	40.41	磨石	図形13	
関大-V-01-015	M09	117	盛土	石器	土製品	4.50	3.70	1.70	40.13	磨石	図形13	
関大-V-01-016	M09	119	盛土	石器	土製品	3.80	3.70	1.70	38.17	磨石	図形13	
関大-V-01-017	M06	301	盛土	石器	磨石(土器上)	5.50	3.00	0.75	7.43	磨石	図形13	遺物分析4(1)層1
関大-V-01-018	M00	10	盛土	石器	磨石(土器上)	3.15	2.70	0.90	3.47	磨石	図形13	遺物分析2(1)層1
関大-V-01-019	L09	3	盛土	石器	磨石(土器上)	3.00	2.00	1.00	3.19	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-020	M04	403	盛土	石器	磨石(土器上)	4.00	18.00	1.30	40.74	チャーム	図形13	
関大-V-01-021	M08	140	盛土	石器	磨石(土器上)	3.40	2.00	0.70	4.02	磨石	図形13	
関大-V-01-022	M05	120	盛土層	石器	磨石(土器上)	2.60	2.00	0.80	2.40	チャーム	図形13	
関大-V-01-023	M06	307	盛土下層	石器	磨石(土器上)	2.90	2.00	0.90	4.00	磨石	図形13	遺物分析4(1)層1
関大-V-01-024	K08	351	盛土層	石器	磨石(土器上)	3.20	3.00	0.80	3.67	磨石	図形13	
関大-V-01-025	M03	1	盛土中層	石器	磨石(土器上)	13.00	10.00	3.00	12.00	灰岩	図形13	
関大-V-01-026	M04	430	盛土	石器	磨石(土器上)	3.10	3.00	0.70	3.19	磨石	図形13	磨石
関大-V-01-027	M06	78	磨石	石器	磨石(土器上)	3.00	10.00	1.00	7.76	磨石	図形13	
関大-V-01-028	M09	307	盛土	石器	磨石(土器上)	3.20	2.30	0.90	3.04	灰岩	図形13	
関大-V-01-029	M06	307	盛土層	石器	磨石(土器上)	4.20	4.20	0.90	4.00	チャーム	図形13	
関大-V-01-030	M07	303	盛土	石器	磨石(土器上)	5.20	3.00	0.80	7.93	灰岩	図形13	
関大-V-01-031	K08	351	盛土	石器	磨石(土器上)	11.20	12.10	2.30	113.00	灰岩	図形13	
関大-V-01-032	G1	30	磨石	石器	磨石(土器上)	10.00	6.30	2.00	140.94	灰岩	図形13	
関大-V-01-033	M08	1	盛土	石器	磨石(土器上)	2.20	4.00	0.65	4.62	灰岩	図形13	
関大-V-01-034	M09	411	盛土層	石器	磨石(土器上)	3.55	4.15	1.00	15.00	灰岩	図形13	水磨石
関大-V-01-035	F7	23	盛土	石器	土製品	2.60	2.20	1.20	17.74	磨石	図形13	
関大-V-01-036	K07	70	磨石上	石器	土製品	4.00	4.00	1.70	38.13	磨石	図形13	
関大-V-01-037	M07	40	盛土層	石器	磨石(土器上)	6.10	2.30	0.80	13.15	灰岩	図形13	磨石
関大-V-01-038	F7	20	盛土	石器	土製品	6.1	5.00	1.10	77.41	磨石(磨石)	図形13	
関大-V-01-039	L04	10	盛土層	石器	土製品	0	17.00	10.00	40.41	灰岩	図形13	
関大-V-01-040	M08	1	盛土	石器	磨石	3.00	1.00	0.70	2.78	磨石(磨石)	図形13	3センチ 目録表166
関大-V-01-041	L09	9	盛土	石器	磨石	12.00	1.00	0.45	12.00	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-042	L09	440	盛土	石器	磨石	13.00	1.20	0.50	10.00	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-043	G04	20	盛土層	石器	磨石	5.00	1.00	0.30	5.11	磨石(磨石)	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-044	M04	1	盛土層	石器	磨石	3.30	2.00	0.80	3.43	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-045	M06	3	盛土下層	石器	遺物(土器上)	11.00	4.00	0.45	13.00	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-046	F7	20	盛土下層	石器	遺物(土器上)	3.00	2.10	0.40	3.14	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-047	M09	3	盛土	石器	遺物(土器上)	10.00	10.00	1.00	12.00	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-048	F7	104	盛土上層	石器	遺物(土器上)	2.40	2.30	0.40	1.67	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-049	L04	20	盛土層	石器	遺物(土器上)	11.00	7.70	0.40	16.00	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-050	M06	3	盛土	石器	遺物(土器上)	3.65	3.70	0.70	6.12	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-051	L04	21	盛土層	石器	遺物(土器上)	13.00	1.00	0.40	12.00	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-052	M04	410	盛土	石器	遺物(土器上)	3.00	3.30	0.40	3.10	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-053	M01	136	盛土	石器	遺物(土器上)	12.10	2.30	0.40	12.00	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-054	M05	11	盛土上層	石器	遺物(土器上)	3.20	2.30	0.50	3.00	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-055	M04	173	盛土	石器	遺物(土器上)	2.00	2.00	0.40	2.00	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-056	M04	7	盛土上層	石器	遺物(土器上)	17.20	2.00	0.40	17.00	磨石(土器上)	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-057	M04	1	盛土	石器	遺物(土器上)	15.70	3.20	0.55	16.00	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-058	L04	1	盛土上層	石器	遺物(土器上)	14.00	3.00	0.40	10.75	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-059	M03	1	盛土	石器	遺物(土器上)	10.00	3.70	0.40	11.00	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-060	L04	1	盛土	石器	遺物(土器上)	5.10	2.70	0.75	13.74	磨石	図形13	遺物分析1(1)層1
関大-V-01-061	M07	473	盛土	石器	つらみかたアフリカノコブ	2.60	1.30	0.40	1.13	磨石	図形13	
関大-V-01-062	K01	407	盛土層	石器	つらみかたアフリカノコブ	3.20	1.60	0.30	1.00	磨石	図形13	
関大-V-01-063	M08	406	盛土	石器	つらみかたアフリカノコブ	3.60	1.90	0.30	1.20	磨石	図形13	
関大-V-01-064	M00	200	盛土	石器	つらみかたアフリカノコブ	2.70	1.40	0.40	1.13	磨石	図形13	
関大-V-01-065	L04	130	盛土	石器	つらみかたアフリカノコブ	3.00	1.60	0.30	1.00	磨石	図形13	
関大-V-01-066	M09	410	盛土	石器	つらみかたアフリカノコブ	3.30	1.60	0.40	1.19	磨石	図形13	
関大-V-01-067	M04	400	盛土上層	石器	つらみかたアフリカノコブ	1.00	1.00	0.20	0.30	磨石	図形13	
関大-V-01-068	L04	130	盛土	石器	つらみかたアフリカノコブ	3.30	1.60	0.30	1.00	磨石	図形13	
関大-V-01-069	M09	290	盛土	石器	つらみかたアフリカノコブ	2.30	1.25	0.17	0.92	磨石	図形13	
関大-V-01-071	M07	410	盛土	石器	つらみかたアフリカノコブ	5.70	1.30	0.30	3.70	磨石	図形13	
関大-V-01-072	M03	41	盛土層	石器	つらみかたアフリカノコブ	11.00	10.00	0.30	10.71	磨石	図形13	
関大-V-01-073	M04	11	盛土層	石器	つらみかたアフリカノコブ	4.00	2.00	0.40	3.00	磨石	図形13	
関大-V-01-074	L11	40	盛土層	石器	つらみかたアフリカノコブ	6.70	4.00	0.30	10.00	磨石	図形13	
関大-V-01-075	M03	110	盛土層	石器	つらみかたアフリカノコブ	10.00	5.00	0.30	150.00	磨石	図形13	
関大-V-01-076	K01	112	盛土	石器	磨石	10.00	6.30	2.00	150.70	磨石	図形13	
関大-V-01-078	M04	171	盛土上層	石器	磨石(土器上)	10.00	6.00	0.50	100.07	安山岩	図形13	磨石
関大-V-01-079	M06	303	盛土下層	石器	磨石(土器上)	10.00	7.00	2.30	100.07	安山岩	図形13	磨石
関大-V-01-080	K01	30	盛土層	石器	磨石	15.00	6.00	2.70	100.00	灰岩	図形13	
関大-V-01-081	M04	1	盛土下層	石器	北陸産水産品	3.70	3.00	0.30	4.03	磨石	図形13	
関大-V-01-082	L07	1	盛土	石器	北陸産水産品	3.00	3.10	0.10	13.10	磨石	図形13	
関大-V-01-083	M09	400	盛土	石器	北陸産水産品	3.20	3.00	0.20	14.00	磨石	図形13	
関大-V-01-084	L07	1	盛土	石器	北陸産水産品	4.00	3.00	0.30	14.00	磨石	図形13	
関大-V-01-085	L1	1	盛土層	石器	北陸産水産品	5.10	3.00	0.30	10.00	磨石	図形13	
関大-V-01-086	M07	402	盛土	石器	北陸産水産品	4.00	3.00	0.30	10.12	磨石	図形13	
関大-V-01-087	M04	1	磨石	石器	つらみかた	4.10	10.00	12.00	40.41	磨石	図形13	
関大-V-01-088	M04	473	盛土	石器	D2つらみかた	6.20	3.40	0.40	40.41	磨石	図形13	
関大-V-01-089	M06	710	盛土下層	石器	字不詳	3.00	3.00	0.60	17.70	磨石	図形13	
関大-V-01-090	M07	210	盛土	石器	字不詳	4.00	3.00	0.20	12.40	磨石	図形13	
関大-V-01-091	M07	410	盛土	石器	字不詳	3.20	1.90	0.40	1.10	磨石	図形13	
関大-V-01-092	L1	741	盛土	石器	字不詳	4.00	7.70	1.00	42.14	磨石	図形13	

表V-3 盛土遺構・包含層掲載石器一覽

調査号	調査区	遺物番号	層位	分類	種別名	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	調査番号	備考
試V-201-001	S08	801	盛土	石製品	扁平石製水磨石	1.20	7.00	1.00	12.17	粘土	試V134	
試V-201-004	L07	707	盛土	石製品	水磨石	1.50	5.50	2.70	8.40	粘土	試V134	
試V-201-005	K02	1	盛土	石製品	磨研棒(片状?)	4.30	4.30	2.15	41.00	灰岩	試V134	
試V-201-006	H6	71	盛土	石製品	磨研棒(片状?)	4.70	4.65	1.65	49.00	灰岩	試V134	
試V-201-007	C06	211	墓下層	石製品	磨研棒(厚板?)	3.90	3.80	0.70	8.70	灰岩	試V134	
試V-201-008	M09	354	盛土	石製品	磨研棒(厚板?)	4.00	3.80	1.20	18.70	灰岩	試V134	
試V-201-009	L06	60	盛土	石製品	磨研棒(厚板?)	7.20	5.70	1.20	28.15	灰岩	試V134	
試V-201-009	P01	20	盛土	石製品	磨研棒(厚板?)	5.40	4.90	1.00	34.01	灰岩	試V134	
試V-201-010	M09	364	盛土	石製品	磨研棒(片状?)	4.30	4.80	0.70	10.31	灰岩	試V134	
試V-201-010	N2	47	盛土	石製品	磨研棒(片状?)	4.60	4.70	1.00	16.32	灰岩	試V134	
試V-201-010	M09	417	盛土	石製品	磨研棒(片状?)	4.80	3.80	1.20	40.14	灰岩	試V134	
試V-201-011	C06	217	盛土	石製品	磨研棒(片状?)	4.20	11.10	0.90	39.01	灰岩	試V134	
試V-201-011	M08	354	盛土	石製品	磨研棒	7.20	4.20	1.20	49.20	灰岩	試V134	
試V-201-011	T2	40	盛土	石製品	磨研棒	9.80	6.10	4.70	222.67	灰岩	試V134	
試V-201-017	L06	100	盛土	石製品	磨研棒	9.20	7.70	2.40	162.15	灰岩	試V134	
試V-201-018	L06	513	盛土	石製品	磨研棒	10.70	5.80	2.20	141.20	灰岩	試V134	
試V-201-019	S07	740	盛土	石製品	磨研棒	11.10	5.10	2.60	120.20	灰岩	試V134	
試V-201-019	S04	588	盛土	石製品	磨研棒	11.10	6.70	2.30	170.02	灰岩	試V134	
試V-201-011	C07	401	盛土	石製品	磨研棒	11.70	6.10	2.60	189.70	灰岩	試V134	
試V-201-012	K08	401	墓下層	石製品	磨研棒	13.70	7.60	3.20	181.00	灰岩	試V134	
試V-201-013	M07	410	盛土	石製品	有孔石	1.20	1.70	1.00	78.10	灰岩	試V134	
試V-201-014	M04	430	盛土中層	石製品	有孔石	1.50	1.80	1.30	26.10	灰岩	試V134	
試V-201-015	M04	740	盛土中層	石製品	有孔石	4.20	5.60	2.10	71.12	灰岩	試V134	
試V-201-016	M01	35	墓下層	石製品	有孔石	4.40	5.40	2.10	89.23	灰岩	試V134	
試V-201-017	L1	35	盛土	石製品	有孔石	4.80	3.80	1.10	29.14	灰岩	試V134	
試V-201-018	K09	100	墓下層	石製品	有孔石	4.70	4.30	2.10	84.00	灰岩	試V134	
試V-201-019	L09	173	盛土	石製品	有孔石	4.80	4.60	3.10	126.25	灰岩	試V134	
試V-201-020	S08	117	墓中層	石製品	有孔石	11.10	10.00	3.00	130.00	砂岩	試V134	
試V-201-021	S02	212	墓中層	石製品	細網状石器	3.80	4.10	2.40	49.40	凝灰岩	試V134	
試V-201-021	M01	300	盛土下	石器	小鏟	4.80	13.10	4.40	104.00	粘土	試V134	

VI 自然科学的分析

1 大平遺跡出土の動物遺体

中村賢太郎 (パレオ・ラボ)

はじめに

大平遺跡は上磯郡木古内町字大平に位置し、津軽海峡に面した海岸段丘上に立地する。発掘調査では縄文時代前期後半の盛土遺構などが検出されている。ここでは動物遺体の同定結果を報告する。

1. 試料と方法

試料は、縄文時代前期後半を中心とする遺構（盛土遺構、住居址、炉など）から検出された動物遺体である。試料の時期は、住居址H-10の試料番号5が擦文期で、それ以外の試料は全て縄文時代前期後半（円筒下層式）である。

試料は水洗選別試料により回収された。水洗選別作業は（公財）北海道埋蔵文化財センターにより行われ、用いられた篩のメッシュサイズは1mmである。

同定は、肉眼および実顕顕微鏡下で、現生標本との比較により行った。哺乳綱や硬骨魚綱など綱までの同定に留まった試料については、数が膨大であったため計数せずにより（+）を記すのみとした。綱よりも下位の分類群として同定できた試料については、破片単位で計数した。

2. 結果と考察

ほぼ全ての試料が真っ白になった焼骨であり、細かい破片が多かった。強い火を被ったと考えられる。

同定された分類群の一覧を表VI-1-1に示す。メジロザメ科、アオザメ属、ツノザメ科、アカエイ科などの軟骨魚綱、カタクチイワシ、ニシン科、マイワシ、サケ属、コイ科、タラ科、アイナメ科、アイナメ属、ホッケ属、カワハギ科、タイ科、サバ属、カツオ/マグロ類などの硬骨魚綱、ヒグマ、シカ、アシカ科などの哺乳綱、種不明の鳥綱が同定された。

同定標本数（NISF）を表VI-1-2に示す。硬骨魚綱が多く、次いで軟骨魚綱と哺乳綱が多く、鳥綱はわずかに見られた。硬骨魚綱のうち、サケ属が最も多い。ただし、サケ属と同定された試料の多くは椎骨の小破片であるので、個体数よりも多く表現されているはずである。次いで、サバ属、アイナメ科（アイナメ

表VI-1-1 同定された分類群一覧

軟骨魚綱 Chondrichthyes	
エイ・サメ類	Elasmobranchii
メジロザメ科	Carcharhinidae
アオザメ属	<i>Isurus</i> sp.
ツノザメ科	Squalidae
アカエイ科	Dasyatidae
硬骨魚綱 Osteichthyes	
カタクチイワシ	<i>Engraulis japonicus</i>
ニシン科	Clupeidae
マイワシ	<i>Sardinops melanostictus</i>
サッパ?	<i>Sardinella zunasi</i> ?
サケ属	<i>Oncorhynchus</i> sp.
コイ科	Cyprinidae
タラ科	Gadidae
フサカサゴ科?	Scorpaenidae?
アイナメ科	Hexagrammidae
アイナメ属	<i>Hexagrammos</i> spp.
ホッケ属	<i>Pleuragrammus</i> sp.
カワハギ科	Monacanthidae
カレイ科?	Pleuronectidae?
タイ科	Sparidae
サバ属	<i>Scomber</i> sp.
カツオ/マグロ類	Thunnini
哺乳綱 Mammal	
ヒグマ	<i>Ursus arctos</i>
シカ	<i>Cervus nippon</i>
アシカ科	Otariidae
鳥綱 Aves	
鳥綱の一種	Aves ord., fam., gen. et sp. indet.

属、ホッケ属)、ニシン科(マイワシ、サッパ?)、コイ科が多い。その他、タイ科やカワハギ科もやや多い。軟骨魚綱は、メジロザメ科、アオザメ属、ツノザメ科、アカエイ科などのエイ・サメ類が見られた。哺乳綱のうち、海獣の骨片が53と多いが、陸獣と思われる骨片は哺乳綱に含まれており計数の対象外となっている。数量で表現できていないが、海獣と陸獣の骨片数は同じかやや陸獣が多い。

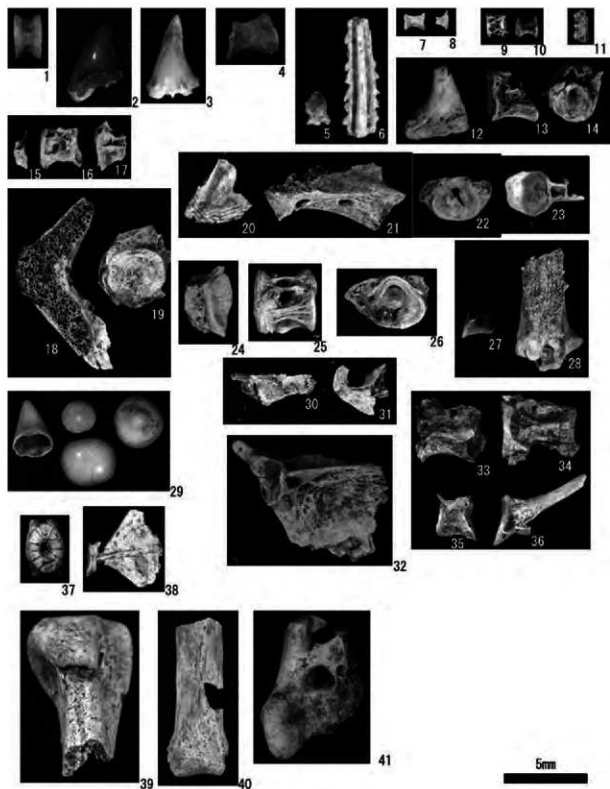
魚類のうち、コイ科は淡水生、サケ属は遡河性、他は海生であり、漁労活動の範囲が海から河川にまたがっていたと考えられる。さらに、海生の魚類では、アイナメ属、ホッケ属、タラ科は沿岸に生息する底生魚であり、カワハギ科やタイ科は沿岸や沖合に生息し、サバ属やマイワシ(ニシン科)やカツオ/マグロ類は沿岸から沖合の表層を回遊する。海では、沿岸から沖合にかけて魚類を対象とした漁労活動が行われていたと考えられ、海岸や海上では、アシカ科など海獣を対象とする狩猟が行われたと考えられる。河口から河川にかけてはサケ属が対象となり、河川の淡水域ではコイ科を対象とする漁労活動が行われたと考えられる。一方、陸上では、シカとヒグマを対象とした狩猟が行われ、鳥類も対象となったと考えられる。

おわりに

縄文時代前期後半の大平遺跡において、エイ・サメ類、サケ属、サバ属、アイナメ科、ニシン科、コイ科などの魚類、シカやヒグマなどの陸獣、アシカ科などの海獣、鳥類の利用が確認された。

表VI-1-2 各分類群の同定標本数 (NISP)

分類群	NISP
軟骨魚綱	
エイ・サメ類	17
エイ・サメ類?	1
メジロザメ科	5
アオザメ属	4
ツノザメ科	12
アカエイ科	15
硬骨魚綱	
カタクチイワシ	2
ニシン科	62
マイワシ	2
サッパ?	1
サケ属	629
サケ属?	3
コイ科	41
タラ科	3
フサカサゴ科?	1
アイナメ科	53
アイナメ属	19
アイナメ属?	3
ホッケ属	2
ホッケ属?	1
カワハギ科	10
カワハギ科?	1
カレイ科?	4
タイ科	24
タイ科?	3
サバ属	127
サバ属?	3
カツオ/マグロ類	2
哺乳綱	
ヒグマ	1
シカ	1
アシカ科	1
海獣	53
鳥綱	
鳥綱の一種	1



図VI-1-1 大平遺跡の動物遺体

1. サメ顎椎骨(試料番号85)
2. メジロザメ科歯(55)
3. アオザメ属歯(110)
4. ツノザメ科椎骨(4)
5. アカエイ科歯板(26)
6. アカエイ科尾棘(143)
7. カタクチエイシロシ腹椎(40)
8. カタクチエイシロシ尾椎(40)
9. ニシン科腹椎(106)
10. ニシン科尾椎(106)
11. マイワシ第1椎骨(74)
12. サケ属歯(16)
- 13-14. サケ属椎骨(4)
15. コイ科第1椎骨(106)
16. コイ科腹椎(106)
17. コイ科尾椎(106)
18. タラ科鱗骨(66)
19. タラ科腹椎(64)
20. アイナメ属左上顎骨(84)
21. アイナメ属左歯骨(11)
22. アイナメ属第1椎骨(44)
23. アイナメ属尾部棒状骨(106)
24. アイナメ科腹椎(44)
25. アイナメ科尾椎(106)
26. ホッケ属第1椎骨(86)
27. カワハギ科歯(102)
28. カワハギ科有鱗第1棘(106)
29. タイ科歯(72)
30. サバ属左歯骨(38)
31. サバ属右歯骨(38)
32. サバ属右主蓋骨(51)
33. サバ属腹椎(38)
- 34-35. サバ属尾椎(38)
36. サバ属尾部棒状骨(106)
37. カツオ/マグロ類尾椎(51)
38. カツオ/マグロ類尾部棒状骨(71)
39. ヒグマ左中手骨(58)
40. アシカ科指骨(54)
41. 烏編右脛足根骨(44)

2 木古内町大平遺跡出土黒曜石製石器の原産地分析

有限会社 遺物材料研究所

はじめに

石器石材の産地を自然科学的な手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサマサイトおよび黒曜石製遺物の石材産地推定を行なっている^{1, 2, 3)}。黒曜石の伝播に関する研究では、伝播距離は千数百キロメートル(図VI-2-1)が一般的で文系考古学(様式学)では更に広い範囲の様式伝搬が推測されてきた。様式伝搬に石材が伴ったかは、理系考古学(自然科学)の結果を取り入れ、真の考古学研究で先史を明らかにする必要がある。6キロメートルを推測する学者もでてきている。このような研究結果が出てきている現在、正確に産地を判定すると言うことは、原理原則に従って同定を行うことである。原理原則は、**同じ元素組成の黒曜石が異なった産地では生成されないという理論がない**ために、少なくとも遺跡から半径数千キロメートルの内にある石器の原産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。ノーベル賞を受賞された益川敏英博士の言を借りれば、科学とは、仮説をたて正しいか否かあらゆる可能性を否定することにある。即ち十分条件の証明が非常に重要であると言ひ換えられると思われる。『遺物原材とある産地の原石が一致したという「必要条件」を満たしても、他の産地の原石にも一致する可能性が残っているから、他の産地には一致しないという「十分条件」を満たして、一致した産地の原石が使用されているとはじめて言い切れる。また、十分条件を求めることにより、一致しなかった産地との交流がなかったと結論でき、考古学に重要な資料が提供される。

1. 産地分析の方法

先ず原石採取であるが、本来、先史・古代人が各産地の何処の地点で原石を採取したか不明であるために、一か所の産地から産出する全ての原石を採取し分析する必要があるが不可能である。そこで、産地から抽出した数十個の原石でも、産地全ての原石を分析して比較した結果と同じ結果が推測される方法として、理論的に証明されている方法で、マハラノビスの距離を求めて行う、ホテリングのT²乗検定がある。ホテリングのT²乗検定法の同定とクラスター判定法(同定ではなく分類)、元素散布図法(散布図範囲に入るか否かで判定)を比較すると、クラスター判定法は判定基準が曖昧である。クラスターを作る産地の組み合わせを変えることにより、クラスターが変動する。例えば、A原産地の石器とA、B、C産地の原石でクラスターを作ったとき遺物はA原石とクラスターを作ると、A原石を抜いて、D、E産地の原石を加えてクラスターを作ると、遺物がE産地とクラスターを作ると、A産地が調査されていないと、遺物はE原産地と判定される可能性があり結果の信頼性に疑問が生じる。A原産地と分かっていけば、E原石とクラスターを作らないように作為的にクラスターを操作できる。元素散布図法は肉眼で原石群元素散布の中に遺物の結果が入るか図示した方法で、原石の含有元素の違いを絶対定量値を求めて地球科学的に議論するには、地質学では最も適した方法であるが、産地分析からみると、クラスター法より、さらに後退した方法で、何個の原石を分析すればその産地を正確に表現されているのか不明で、分析する原石の数で、原石数の少ないときには、A産地とB産地が区別できていたのに、原石数を増やすと、A産地、B産地の区別ができなくなる可能性があり(クラスター法でも同じ危険性がある)判定結果に疑問が残る。産地分析としては、地質学の常識的な知識(高校生)さえあればよく、火山学、堆積学など専門知識は必要なく、分析では非破壊

で遺物の形態の違いによる相対定値の影響を評価しながら、同定を行うことが必要で、地球科学的なことは関係なく、如何に原理原則に従って正確な判定を行うかである。クラスター法、元素散布図法の欠点を解決するために考え出された方法が、理論的に証明された判定法でホテリングのT2乗検定法である。仮に調査した329個の原石・遺物群について散布図を書くと、各群40個の元素分析結果を元素散布図にプロットすると、331群×40個=13240点の元素散布図になり、これが8元素比では28個の2元素比の散布図となり、この図の中に遺物の分析点をプロットして産地を推測することは、想像できても実用的でなく。もし、散布図で判定するなら、あらかじめ遺物の原石産地を決めて、予想した産地のみで散布図を書き産地を決定する。これでは、一致する産地のみを探すのみで、科学的分析のあらゆる可能性を否定することが科学分析であると言うことに反し科学的産地分析と言えない。ある産地の原石組成と遺物組成が一致すれば、その産地の原石と決定できるという理論がないために、多数の産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。考古学では、人工品の様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの人手が加わった調査素材があり一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると言うことは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する重要な意味をもつ結果である。石器の様式による分類ではなく、自然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、産地分析の結果の信頼性は何ヶ所の原材産地の原石と客観的に比較して得られたかにより、比較した産地が少なければ、信頼性の低い結果と言える。黒曜石、安山岩などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して、各平均値からの離れ具合（マハラノビスの距離）を求める。次に、古代人が採取した原石産出地点と現代人が分析のために採取した原石産出地点と異なる地点の可能性は十分に考えられる。従って、分析した有限個の原石から産地全体の無限の個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT2乗検定を行う。この検定を全ての産地について行い、ある遺物原材がA産地に10%の確率で必要条件が満たされたとき、この意味はA産地で10個原石を採取すると1個が遺物と同じ成分だと言うことで、現実であり得ることであり、遺物はA産地原石と判定する。しかし、他の産地について、B産地では0.01%で一万个中に1個の組成の原石に相当し、遺跡人が1万个遺跡に持ち込んだとは考えにくい、従って、B産地ではないと言う十分条件を満足する。またC産地では百万個中に1個、D産地では・・・1個と産地ごとに十分条件を満足させ、客観的な検定結果から必要条件と十分条件をみたしたA産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。即ち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回分析した遺物は北海道木古内町に位置する大平遺跡から出土した黒曜石製遺物について産地分析を行った結果が得られたので報告する。

2. 黒曜石原石の分析

黒曜石原石の自然面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl, Si, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Rb, Sr, Y, Zr, Nbの12元素をそれぞれ分析した。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それをもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K, Ti/K, Mn/Zr, Fe/Zr, Rb/

Zr, Sr/Zr, Y/Zr, Nb/Zrの比の値を産地を区別する指標としてそれぞれ用いる。黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に黒曜石の原産地は分布している。調査を終えている原産地の一部を図VI-2-2に示す。元素組成によってこれら原石を分類し表VI-2-1に示すこの原石群に原産地が不明の遺物で作った遺物群を加えると331個の原石群・遺物群になる。ここでは北海道地域および一部の東北地域の産地について記述すると、白滝地域の原産地は、北海道紋別郡白滝村に位置し、鹿野北方2kmの採石場の赤石山の露頭、鹿野東方約2kmの幌加沢地点、また白土沢、八号沢などより転礫として黒曜石が採取できる。赤石山の大量の黒曜石は色に関係無く赤石山群（旧白滝第1群）にまとまる。また、あじさいの滝の露頭からは赤石山と肉眼観察では区別できない原石が採取でき、あじさい滝群を作った（旧白滝第2群）、また、八号沢の黒曜石原石と白土沢、十勝石川沢の転礫は梨肌の黒曜石で元素組成はあじさい滝群に似るが石肌で区別できる。幌加沢からの転礫の中で70%は幌加沢群になりあじさい滝群と元素組成から両群を区別できず、残りの30%は赤石山群に一致する。置戸地域産原石は、北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取された原石であり、その元素組成は置戸・所山群にまとまり、また同町の秋田林道で採取される原石は置戸山群にまとまる。また、同町中里地区の露頭の小原石（最大約3cm）は、置戸山群、常呂川の転礫で作った常呂川第5群に一致し、同町安住地区の小原石の中には常呂川第3群に一致する原石がみられた。留辺蘂町のケショマップ川一帯で採取される原石はケショマップ第1、第2およびチマキナウシ林道から採取される黒曜石原石から新たにケショマップ第0群（旧ケショマップ第3群に似る）分類される。また、白滝地域、ケショマップ、置戸地域産原石は、湧別川および常呂川に通じる流域にあり、両河川の流域で黒曜石の円礫が採取され、湧別川下流域から採取した黒曜石円礫247個の元素組成分類結果を表VI-2-2に示した。また、中ノ島、北見大橋間の常呂川から採取した658個の円礫の中には、独特の元素組成の原石も見られ、新しい原石群を追加し分類結果を表VI-2-1と表VI-2-3に示した。また、湧別川の上流地域の遠軽町社名湖地域のサナブチ川流域からも独特の元素組成の原石が見られ、表VI-2-1と表VI-2-4に示した。表VI-2-5に示す金華地区から採取した20個の黒曜石円礫は社名湖群、赤石山群などの他に何処の産地にも一致しない黒曜石があり金華群を作った。表VI-2-6の生田原川支流支線川から採取した19個の黒曜石円礫では社名湖群、白滝地区産黒曜石および金華群などが見られた。また同支流の大黒沢採取の5個は社名湖群の黒曜石で表VI-2-7に示す。十勝三股産原石は、北海道河東郡上士幌町の十勝三股露頭があり、また露頭前の十三ノ沢の谷筋および沢の中より原石が採取され、この原石の元素組成は十勝三股群にまとまる。この十勝三股産原石は十勝三股を起点に周辺の河川から転礫として採取され十三ノ沢、タウシュベツ川、音更川、芽登川、美里別川、サンケルベ川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の元素組成は、十勝三股産の原石の元素組成と相互に近似している。これら元素組成の近似した原石の原産地は相互に区別できず、もし遺物石材の産地分析でこの遺物の原産地が十勝三股群に同定されたとしても、これら十勝三股を起点にした周辺の河川の複数の採取地点を考えなければならない。しかし、この複数の産地をまとめて十勝地域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題はないと考えられる。釧路・上阿寒地域の礫層から最大3.5cmの大きさの円礫状黒曜石原石が産出し、成分組成は十勝三股産と一致した。また、清水町、新得町、鹿追町にかけて広がる美蔓台地から産出する黒曜石から2つの美蔓原石群が作られた。この原石は産地近傍の遺跡で使用されている。名寄地域では、朝日川、金沢川、上名寄地区、忠烈布地区、智恵文川、智南地区から円礫状の黒曜石が採取できる。これら名寄地域産出の黒曜石を元素組成で分類すると、名寄第1群と名寄第2群に分類できそれぞれ87%と13%の率になる。これら分類率を表VI-2-5に

示した。旭川市の近文台、台場、嵐山遺跡付近および雨文台北部などから採集される黒曜石の円礫は、20%が近文台第1群、69%が近文台第2群、11%が近文台第3群にそれぞれ分類され、それから台場の砂礫採取場からは近文台諸群に一致するもの以外に、黒、灰色系円礫も見られ、台場第1、2群を作った。また、滝川市江別乙で採集される親指大の黒曜石の礫は、元素組成で分類すると約79%が滝川群にまとめられ、21%が近文台第2、3群に元素組成が一致する。滝川群に一致する元素組成の原石は、北竜市恵袋別川増本社からも採取される。秩父別町の雨竜川に開析された平野を見下す丘陵中腹の緩斜面から小円礫の黒曜石原石が採取される。産出状況と礫の状態は滝川産黒曜石と同じで、秩父別第1群は滝川第1群に元素組成が一致し、第2群も滝川第2群に一致しさらに近文台第2群にも一致する。赤井川産原石は、北海道余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。ここから採取される原石の中で少球果の列が何層にも重なり石器の原材として良質とはいえないもので赤井川第1群を作り、また、球果の非常に少ない握り拳半分大の良質なものなどで赤井川第2群を作った。これら第1、2群の元素組成は非常に似ていて、遺物を分析したときしばしば、赤井川両群に同定される。豊泉産原石は豊浦町から産出し、元素組成によって豊泉第1、2群の両群に区別され、豊泉第2群の原石は斑晶が少なく良質な黒曜石である。豊泉産原石の使用圏は道南地方に広がり、一部は青森県に伝播している。また、青森県教育庁の斉藤岳氏提供の奥尻島幌内川産黒曜石の原石群が確立されている。最近の北見市教育委員会太田敏量氏による原石産地調査で、上足寄地域から上足寄群、津別・相生から相生群、釧路市埋蔵文化財センターの石川朗氏による釧路空港、上阿寒地域からビッチストーン様の黒曜石が調査され、相互に似た組成を示し、それぞれ相生群、釧路空港群を作った。また雄武地域・音稲府川から名寄第2群に組成の似た音稲府群、鶴居・久著呂川から久著呂川群を作り原石群に新たに登録した。出来島群は青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群で、この出来島群と相互に似た元素組成の原石は、岩木山の西側を流れ鯉ヶ沢地区に流入する中村川の上流で1点採取され、また、青森市の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴はみ地区より採取されている。青森県西津軽郡深浦町の海岸と同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で六角沢群を作り、また、八森山産出の原石で八森山群を作った。これら深浦町の両群と相互に似た群は、青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第2群である。戸門第1群、成田群、浪岡町泉島の森地区より産出の大釈迦群(旧浪岡群)は赤井川産原石の第1、2群と弁別は可能であるが原石の元素組成は比較的似ている。戸門、大釈迦産黒曜石の産出量は非常に少なく、希に石鏃が作れる大きさのものがみられるが、鷹森山群は鷹森山麓の成田地区産出の黒曜石で中には5cm大のものもみられる。また、考古学者の話題になる下湯川産黒曜石についても原石群を作った。産地分析は、日本、近隣国を含めた産地の合計331個の原石群・遺物群と比較し、必要条件と十分条件を求めて遺物の原石産地を同定する。

3. 結果と考察

遺跡から出土した黒曜石製石器、石片は風化に対して安定で、表面に薄い水合層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。縄文時代の黒曜石製遺物は表面から約3ミクロン程度の厚さで風化層ができていて、分析はこの風化層を通して遺物の内部の新鮮面をいかに多く測定するかが重要であり蛍光X線分析法の中の電子線励起方式のE PMA分析は表面の分析面積1～数百ミクロン分析されているが、深さ約1ミクロンの風化層しか分析を行っていないために、得られた結果は原石で求めた新鮮面のマトリックスと全く異なった可能性の風化層のみの分析結果になるために、黒曜石遺物は破壊して新鮮面を出して分析する必要がある。

る。従って、非破壊分析された黒曜石製遺物のE PMA測定された産地分析結果は全く信用できないX線励起(50KeV)でマトリックスをシリカとしてモデル計算を行うと、表面から、カリウム元素など軽元素で数ミクロンから10ミクロン、鉄元素で約300ミクロン、ジルコニウムで約800ミクロンの深さまで分析され、鉄元素より重い元素では風化層の影響は相当無視できると思われる。風化層以外に表面に固着した汚染物が超音波洗浄でも除去できないときはその影響を受ける。また、被熱黒曜石の風化層は厚く、表面ひび割れ層に汚染物が入り込んでいるときも分析値に大きく影響する。風化層が厚い場合、軽い元素の分析ほど表面分析になるため、水和層の影響を受けやすいと考えられ、Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行なう。軽元素比を除いて場合、また除かずに産地分析を行った場合、いずれの場合にも同定される産地は同じである。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやゝ不確実さを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。一方、安山岩製石器、石片は、黒曜石製遺物に比べて風化の進行が早く、非破壊で原産地が特定される確率は黒曜石製遺物に比べて相当低くなる。サヌカイト製は風化の進行が早く完全非破壊分析での産地分析ができる確率は黒曜石に比べて相当低くなる。サヌカイト製遺物の表面が白っぽく変色し部分は新鮮な部分と異なった元素組成になっていると考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なっている。今回分析した大平遺跡出土の黒曜石製遺物の分析はセイコーインスツルメンツ社のSEA2110Lシリーズ卓上型蛍光X線分析計で行い分析結果を表VI-2-8に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Zrの一変量だけを考えると、表VI-2-8の試料番号119132番の遺物ではRb/Zrの値は1.045であり、十勝三股群に比較すると、十勝三股群の[平均値] ± [標準偏差値]は、 1.097 ± 0.055 である。遺物と原石群の差を十勝三股群の標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群の平均値から 0.945σ 離れている。ところで十勝三股群原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 0.945\sigma$ のずれより大きいものが34個ある。すなわち、この遺物が、十勝三股群の原石から作られていたと仮定しても、 0.945σ 以上離れる確率は34%であると言える。だから、十勝三股群の平均値から 0.945σ しか離れていないときには、この遺物が十勝三股群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。次にこの遺物を所山群に比較すると、所山群の[平均値] ± [標準偏差値]は、 0.823 ± 0.023 であるので上記と同様に所山群の標準偏差値(σ)を基準にして考えると、この遺物の所山群の平均値からの隔たりは 9.7σ である。これを確率の言葉で表現すると、所山群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 9.7σ 以上離れている確率は、十億分の一であると言える。このように、十億個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、所山群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は十勝三股群に34%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから十勝三股産原石が使用されていると同定され、さらに所山群に一千万分の1%の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たさないことから所山群の原石でないと同定される」。遺物が一ヶ所の産地(十勝三股産地)と一致したからと言って、例え十勝三股群と所山群の原石は成分が異なっても、分析している試料は原石でなく遺物であり、さらに分析誤差が大きくなる不定形(非破壊分析)であることから、他の産地に一致しないとは言えない。同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地(十勝三股産地)に一致し必要条件を満足したと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表VI-2-

1の331個すべての原石群について行ない十分条件を求め、低い確率で帰属された原石群の原石は使用していないとして消していくことにより、はじめて十勝三股産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はRb/Zrといった唯一つの変数だけでなく、前述した8つの変数で取り扱うので変数間の相関を考慮しなければならない。例えば、A原産地のA群でCa元素とRb元素との間に相関がありCaの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変数統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT²乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する^{4, 5)}。産地の同定結果は1個の遺物に対して、黒曜石製のものについては331個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち十勝三股産原石と判定された遺物に対して、カムチャッカ産原石とかロシア、北朝鮮の遺跡で使用されている原石および信州和田峠産の原石の可能性を考える必要がないという結果であり、ここでは高い確率で同定された産地のみの結果を表VI-2-6に記入した。ここで大切なことは、遺物材料研究所で行った結果で、十勝三股群と判定された遺物を使って、先史時代の交流を考察するときには、表VI-2-9に記入された十勝三股群以外の表VI-2-1の330個の原石産地と交流がなかったと言うことを証明している点である。北海道の先史人は北海道と東北範囲のみでしか交流がなかったと仮定して、遺物と比較する産地を北海道、東北の主な産地だけで十分であると考えて遺物の原材産地を求め、十勝三股産原石が使用されているとの結果は、先史時代の交易を一部の範囲に限定することになる(広い地域の範囲の黒曜石と比較していないから、広い範囲との交流は言えない、即ち日本の限定的地域にのみ有効で、東アジア、極東ロシア地域では通用しない結果である)。考古学者の主観的な石器の様式分類が北海道、東北地域に限定されていたとしても、分析された石器がもつ自然科学的結果が何処までの範囲に通用するかが、考古学の交易を考える上に非常に重要で、自分の主観的考察が満足されれば良いとの狭い見では真の考古学的研究とは言えない。他の広い交易範囲を考えている考古学者にも通用する産地分析結果が必要である。論外は、個人知識による肉眼観察を含め、十勝三股産原石が使用されているとの判定を、比較をしていないロシア産黒曜石、ロシア遺跡で使用されている遺物の、肉眼観察とか組成(遺物群)ではないと評価することで、ないと評価するには実際に比較し確認するしかない。また、産地分析の結果を評価するときに、比較する原石群は新鮮面であり、また遺物群は風化面を測定し作った群が表VI-2-1-1-2に示している。風化の程度の差はあるものの風化していない遺物はなく、遺物を分析して原石産地が同定されない場合は、1:風化の影響で分析値が変動し、新鮮面と分析値が大きくことなるとき。2:遺物の厚さが薄く、厚さの影響が分析値に現れたとき。3:未発見の原石産地の原石が使用されているときなど。風化の影響を受けている遺物の黒曜石は光沢なく表面が曇っていて、分析するとカリウムの分析値が大きく分析される。風化の影響が少ないときは軽元素比を抜くことにより同定が行える。風化が激しく、軽元素以外の他の元素まで風化の影響がおよぶと、遺物の産地は同定できなくなったり、新鮮面分析と異なった原石産地に同定されたりすることがあり注意が必要である。原石群を作った原石試料は直径3cm以上で5mm以上の厚さであるが、細石刃などの小さな遺物試料の分析では、遺物の厚さが1.5mm以下の薄い部分を含んで分析すると、厚さの影響を受けて、重い元素は小さく測定され、分析値には大きな誤差範囲が含まれるために、分析値に

実験で求めた厚さ補正值を乗じて同定を行わなければならない。分析平均厚さが0.3mm以下になると補正が困難になり同定できない。細石刃は厚さが薄く、縄文時代の遺物より風化の進んだ遺物もあり、厚さ補正と軽元素を抜いて同定を行っている。

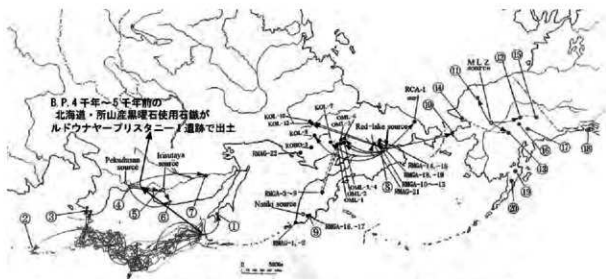
蛍光X線分析では、分析試料の風化による化学的変化（カリウムが大きく観測される）、表面が削られる物理的変化、不定形の小試料では薄い部分を完全に避けて分析できないとき、分析面が遺物の極端な曲面しか分析できない場合など、分析値に影響が残り、また、装置による分析誤差も加わり、分析値は変動し判定結果は一定しない。特に元素比組成の似た原産地同士では区別が困難で、遺物の原産地が原石・遺物群の複数の原産地に同定されるとき、および、信頼限界の0.1%の判定境界に位置する場合は、分析場所を変えて3～12回分析し最も多くの回数同定された産地を判定の欄に記している。風化、厚さ、不定形など比較原石群分析とは異なる誤差が遺物の分析値に含まれるために、産地分析では、一致する産地（必要条件）の結果だけでは信頼性が小さく、他の産地には一致しない（十分条件）ことを満足しなければならない。また、判定結果には推定確率が求められているために、先史時代の交流を推測するときに、低確率（5%以下）の遺物はあまり重要に考えないなど、考古学者が推定確率をみて選択できるために、誤った先史時代交流を推測する可能性がない。

ホテリングのT2乗検定の定量的な同定結果から、石材の成分組成以外の各産地特有の原石の特徴を考慮して遺物の原産地の判定を行うとき、石材の成分組成以外の鉱物組成などの特徴を肉眼観察で求めた場合、キラキラ光る鉱物が多い、少ない、また輝石か、雲母かなど個人的な知識、経験などの主観が加わり判定される。白滝地域産黒曜石の中で、赤石山産原石の割れ面はガラス光沢を持っているが、元素組成が相互に似たあじさい滝、八号沢、白土沢、幌加沢、十勝石川沢などの群の原石は、あじさい滝、幌加沢産はガラス光沢を示し、八号沢、白土沢、十勝石川沢川産は梨肌を示すため、原産地の判定に梨肌か、梨肌でないかを指標に加えた。また、赤井川および十勝産、上阿寒礫層産原石を使用した遺物の判定は複雑になる場合がある。これは青森市戸門、鷹森山地区、浪岡町大釈迦より産出する黒曜石で作られた戸門第1、鷹森山、大釈迦の各群の元素組成が赤井川第1、2群、十勝三股群、上阿寒礫層群に比較的似ているために、遺物独特の風化の影響、不定形による影響を受けた分析値は、分析値への受け方の程度により戸門原産地と赤井川または十勝・上阿寒礫層産地、これら複数の原産地に同時に同定される場合がしばしば見られる。十勝三股群、上阿寒礫層群、赤井川諸群、大釈迦群、戸門第1群、鷹森山群に同定された遺物を定量的に弁別する目的で、元素比の組み合わせを探し、新たに、K/Si、Fe/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Sr/Rb、Y/Rb、Ti/Fe、Si/Feの組み合わせによるホテリングのT2乗検定を行う。また、従来の元素比の組み合わせで同定されなかった原石・遺物群は十分条件となる。従って、判定の必要条件と十分条件は新元素比と従来元素比の両ホテリングのT2乗検定結果の組み合わせで判定する。また、戸門産地の原石が使用されたか否かは、一遺跡で多数の遺物を分析し戸門第1群と第2群に同定される頻度を求め、これを戸門産地における第1群（50%）と第2群（50%）の産出頻度と比較し戸門産地の原石である可能性を推定する。多数分析した遺物のなかに全く戸門第2群に帰属される遺物が見られないときは、戸門産地からの原石は使用されなかったと推測できる。また浪岡町大釈迦産原石は非常に小さい原石が多く使用された可能性は低いと思われる。新たな元素比の組み合わせでも、十勝三股群と上阿寒礫層群は区別ができず、上阿寒礫層群の原石は最大3.5cm以下のローリング痕のない円礫で、遺物の大きさが3.5cm以上の場合十勝産と特定できる。また、石器作成にロスする原石長さを考えると、かなり小さな石器でも上阿寒礫層群の原石は使用できない可能性があるなど、元素分析以外の情報も取り入れて原産地を絞り込んでいる。分析した大平遺跡出土の十勝産原石使用の石偶は大きさが4.47cmで、異形石器は3.18cmでロスを考慮す

ると加工前は3.5cm以上あったと推測され両石器は上阿寒礫層産地から採取されていないと推測した。使用されている十勝産黒曜石は赤井川産原石および青森市内丸山遺跡で使用されている、戸門第1群、鷹森山、大釈迦産黒曜石など青森市黒曜石原石とは新元素比による定量的判定で明確に区別された。今回の使用した産地分析方法から言えることは、所山産地、十勝産地、赤井川産地との交流が同定され、産地地域との生活・文化情報の交換があったと推測できて、そして日本についてはほぼ全土、外国については、表VI-2-1で調査された原石産地と外国遺跡で使用されている黒曜石原材料の範囲内に限定されるが、石器様式が日本に伝搬したと推測されている東アジア、極東ロシアからの伝搬が石器原材料をともなっていなかったことも証明されたと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信 (1975), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (II)。考古学と自然科学, 8:61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌 (1977), (1978), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (III)。(IV)。考古学と自然科学, 10:11:53-81:33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信 (1983), 石器原材料の産地分析。考古学と自然科学, 16:59-89
- 4) 東村武信 (1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9:77-90
- 5) 東村武信 (1990), 考古学と物理化学。学生社



図VI-2-1 日本・朝鮮・極東ロシア・アラスカ州における 表IV-2-1使用の石器原材料伝播図

表M-2-2 湧別川河口域の河床から採取した247個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備考
赤石山群	90個	36%	白滝産地赤石山群に一致
八号沢・白土沢群	120個	49%	割れ面が梨肌黒曜石
あじさい滝群、梶加沢	31個	13%	割れ面が梨肌でないもの
ケシヨマップ第2群	5個	2%	
KS3遺物群	1個	0.04%	

注: 8号沢、白土沢、あじさい滝、梶加沢の一部は組成が類似し、分類は割れ面の梨肌か否かで区別した。

表M-2-3 常呂川(中ノ島～北見大橋)から採取した661個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備考
所山群	321個	49%	常呂川第4群に似る
廣戸山群	75個	11%	常呂川第2群、常呂川第5群、HS2遺物群に似る
ケシヨマップ第1群	65個	10%	FR1、FR2遺物群に似る
ケシヨマップ第2群	96個	9%	同時にケシヨマップ第0群に0.5～0.001%に同定、FR1、FR2遺物群に似る
八号沢群	1個	0.2%	割れ面梨肌
常呂川第2群	14個	2%	廣戸山群、高原山群、HS2遺物群に似る
常呂川第3群	3個	0.5%	
常呂川第4群	70個	11%	KS1遺物群、所山群に似る
常呂川第5群	10個	2%	廣戸山群、HS2遺物群に似る
常呂川第6群	1個	0.2%	FR1遺物群に似る
常呂川第7群	2個	0.3%	FR2遺物群に似る
常呂川第8群	1個	0.2%	名寄第2群に似る
十勝	1個	0.2%	戸門第1群、鷹森山群、大帆遊群に似る
白場第2群	1個	0.2%	美瑛第1群に似る

注: 常呂川第2群は分析場所を変えて複数回測定して作る。

表M-2-4 サナブチ川から採取した80個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備考
社名洞群	69個	86%	
赤石山群	5個	6.3%	白滝産地赤石山群に一致
八号沢・白土沢群	3個	3.8%	割れ面が梨肌黒曜石
常呂川第5群	1個	1.3%	
ケシヨマップ第2群	1個	1.3%	
社名洞第2群	1個	1.3%	

表M-2-5 金華地区から採取した20個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備考
社名洞群	13個	65%	サナブチ川の社名洞群に一致
金華群	3個	15%	十勝三股に似るが一致せず
赤石山群	2個	10%	白滝産地赤石山群に一致
廣戸山群	1個	5%	常呂川第2群、常呂川第5群、HS2遺物群に似る
常呂川第5群	1個	5%	

表M-2-6 生田原川支流支線川から採取した19個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備考
社名洞群	8個	42%	サナブチ川の社名洞群に一致
赤石山群	6個	32%	白滝産地赤石山群に一致
八号沢・白土沢群	2個	10.5%	割れ面が梨肌黒曜石
あじさい滝群、梶加沢	2個	10.5%	割れ面が梨肌でないもの
金華群	1個	5.3%	十勝三股に似るが一致せず

表M-2-7 生田原川支流大黒沢川から採取した5個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備考
社名洞群	5個	100%	サナブチ川の社名洞群に一致

3 大平遺跡出土滑石等の同定

(株) 第四紀地質研究所 井上 巖

はじめに

滑石とは超苦鉄質岩の熱水変質物として、またある種の広域変成岩の主成分として産し、ドロマイト(苦灰岩)の熱変成によってもつくられる(加藤・岩崎2000)。この中で超苦鉄質岩や変成岩のうちの塩基性凝灰岩などという言葉は地質学における岩石名である。これらは本来火成岩に由来するものであり、分析は火成岩の分析としておこなわなければならない。滑石には大きく分けて超塩基性岩の蛇紋岩から変質してなるものと高压型で低温領域の環境で塩基性凝灰岩が変質してなるものがあり、両者の化学組成は異なるのが一般的である。

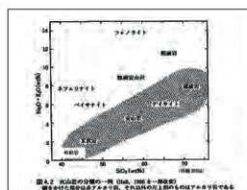
1. 岩石学的分類とは

火成岩の分類とは表VI-3-1火成岩分類表のSiO₂の量によって分類される。岩石の分類は主要元素である珪素(Si)の酸化物濃度で分析値を出さないと何岩を分析しているのかわからないのである。分析者がかってにサヌカイトであるといい、Ca/Kのような比で出すような分析結果では正当な分析ではない。現在の蛍光X線分析装置では岩石の主要元素を指定し、酸化物か元素かを指定すれば酸化物濃度や元素濃度を瞬時にソフトが計算してくれる。蛇紋岩は超塩基性岩であり、表VI-3-1には記載されていない。超塩基性岩とはSiO₂が45%以下のものを言うのである。これらの関係は図VI-3-1火成岩分類図に示してある。

岩石学的に分類するという事は図に示すようにSiO₂が何%であるかを出さない限り分類できないことは明瞭である。

色 相 数	SiO ₂ の量(重量%)	
	多 ← 45	45 → 少
↑ 超塩基性岩	火山岩 (噴出岩)	流紋岩 安山岩 玄武岩
↑ 塩基性岩	平溪成岩	石英斑岩 ひん岩 輝緑岩
↓ 酸性岩	輝成岩	花崗岩 閃緑岩 斑れい岩

表VI-3-1 火成岩分類表



図VI-3-1 火成岩分類図

2. 実験条件

大阪府や京都府の小玉と原石の分析は以下の分析条件で分析した。

- 1) 元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧:15kV、分析法:スプリント法、分析倍率:200倍、分析有効時間:100秒、分析指定元素10元素で行った。また、分析にあたっては標準サンプルを分析し、キャリブレーションを行い、装置の正常さを保って行った。
- 2) 分析対象元素はSi,Ti,Al,Fe,Mn,Mg,Ca,Na,K,Niの10元素、分析値は岩石の含水量=0と仮定し、酸化物の重量%を100%にノーマライズし、表示した。



大平遺跡出土の資料は上の写真に示す分析機器で分析した。分析条件は以下に示すとおりである。

- 3) 分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子製JSX-3200）で行なった。

この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法（F P法）による自動定量計算システムが採用されており、6 C～9 2 Uまでの元素分析ができ、ハイパワーX線源（最大30 k V、4 mA）の採用で微量試料～最大290 mm φ×80 mm Hまでの大型試料の測定が可能である。小形試料では16試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルクF P法でおこなった。F P法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。

実験条件はバルクF P法（スタンダードレス方式）、分析雰囲気=真空、X線管ターゲット素材=R h、加速電圧=30 k V、管電流=自動制御、分析時間=200秒（有効分析時間）である。また、分析にあたっては標準サンプルを分析し、キャリブレーションを行い、装置の正常さを保って行った。

- 4) 分析対象元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, P, Rb, Sr, Y, Zrの14元素、分析値は岩石の含水量=0と仮定し、酸化物の重量%を100%にノーマライズし、表示した。

地質学的には分析値の重量%は小数点以下2桁で表示することになっているが、微量元素のRb, Sr, Y, Zrは重量%では小数点以下3～4桁の微量となり、小数点以下2桁では0と表示される。ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下4桁を用いて化学分析結果を表示した。

主要元素と微量元素の酸化物濃度（重量%）で $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 、 $\text{SiO}_2\text{-MgO,K}_2\text{O-CaO}$ の各相関図を作成した。

3. 遺跡出土滑石系製品と結晶片岩系製品の分析例

遺跡出土遺物としての化学分析は平成2年～5年にわたって、大阪府文化財センターの池島遺跡（池島、神並、佐堂、府教委を総合した呼称）の遺物と和歌山系の滑石の原石、平成6年の京都府埋蔵文化財調査研究センターの下植野南遺跡・桑飼上遺跡出土遺物と八鹿系と大江山系の原石を分析した。当初は大阪府と京都府のデータは別々に分析したものであり、対比はおこなわなかった。その後、池島遺跡の遺物と下植野南遺跡・桑飼上遺跡の遺物を対比し、原石との関連性を検討した。

分析結果に基づいて図VI-3-2 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図、図VI-3-3 $\text{SiO}_2\text{-MgO}$ 図、図VI-3-4 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 図に示すように遺跡出土遺物と原石図を作成した。

- 1) 図VI-3-2 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図に示すように SiO_2 が30～50%、 Al_2O_3 が10～35%の領域には遺跡出土遺物が集中し、その領域は変成岩に由来する領域にあり、三波川系かあるいは御荷鉢系の塩基性凝灰岩と推察される。この領域には大阪府の池島・神並・遺跡の遺物と京都府の下植野南・桑阿上遺跡の遺物が共存し、同じ原石のルートから供給されたものと推察される。八鹿系の原石は SiO_2 が55～65%、 Al_2O_3 が40～10%の領域に分布し、池島遺跡の小玉、石製品がこの領域にあり、原石と石製品との関連性が認められる。和歌山系原石は SiO_2 が40～60%、 Al_2O_3 が40～10%、大江山系の原石は SiO_2 が40～50%、 Al_2O_3 が0～5%の領域に分布し、遺跡出土石製品との関連性は認められない。 SiO_2 が55～70%、 Al_2O_3 が20～30%の領域には池島小玉H2、 SiO_2 が65～80%、 Al_2O_3 が12～18%の領域には池島小玉H3があり、これら2つの領域は池島遺跡の石製品でのみ検出されるタイプである。
- 2) 図VI-3-3 $\text{SiO}_2\text{-MgO}$ 図に示すように SiO_2 が30～50%、 MgO が10～40%の領域には変成岩に由来する緑色岩類の遺跡出土遺物が集中する。 SiO_2 が40～60%、 MgO が20～35%の領域には和歌山系の滑石の原石、 SiO_2 が40～50%、 MgO が45～50%の領域には大江山系の原石が分布する。図VI-3-2 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図では両者は近い領域にあったが図VI-3-3では両者の領域は異なり、異なる原石であることがわかる。 SiO_2 が55～75%、 MgO が20～35%の領域には遺跡出土遺物と八鹿系の原石が共存する。 SiO_2 が55～70%、 MgO が0～2%の領域には池島小玉H2、 SiO_2 が65～85%、 MgO が0～2%の領域には池島小玉H3が分布し、その組成が異なることがわかる。
- 3) 図VI-3-4 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 図に示すように八鹿系、和歌山系、大江山系の各原石は K_2O が微量しか検出されないものが多い。塩基性凝灰岩系の遺跡出土遺物は K_2O が0～3%、 CaO が1%以下の領域、 K_2O が2.7～4.5%、 CaO が1～7%の領域に分布し、前者は塩基性凝灰岩系1、後者を塩基性凝灰岩系2として分類した。

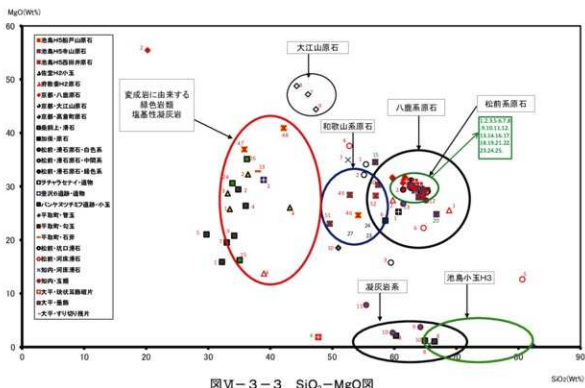
4. 遺跡出土滑石等の分析結果

表VI-3-2 化学分析表には分析結果と原石対比結果が記載してある。表VI-3-3 原石対比表は同定結果のみを記載したものである。

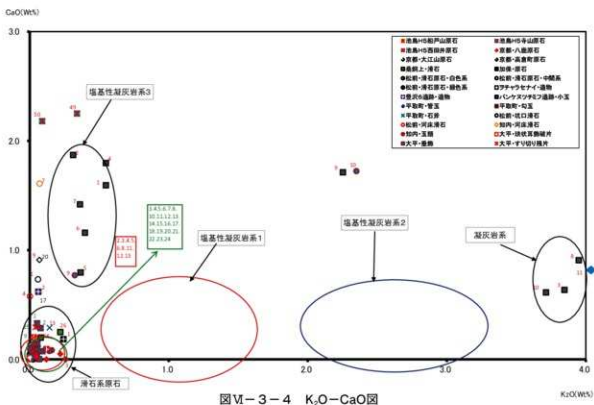
- 1) 松前の滑石は白色、中間色、緑色の3種類あるが組成的はほとんど同じもので、色調による組成の差はほとんどない。
- 2) 大平遺跡の滑石製玉類は表VI-3-3 原産地対比表に示すように、器種を問わず良質な滑石である松前系-1の滑石に対比される。
- 3) 大平-4の珠状耳飾りは CaO の値が高く、異質である。大平-15は松前系-1の領域とは異なるので松前系-2とした。大平-20は松前系-1の領域の外側にあり、松前系-1?とした。

引用文献

- 井上巖1999「滑石製品の分析」『京都府遺跡調査報告書』第25冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 井上巖1999「池島・福万寺遺跡出土滑石製品の分析」『池島・福万寺遺跡2』（財）大阪府文化財センター
- 加藤昭・岩崎正夫2000「滑石」『地学辞典』平凡社
- 周籐賢治・小山内康人2002「解析岩石学」『岩石学概論下』p149-150共立出版



図VI-3-3 SiO₂-MgO図



図VI-3-4 K₂O-CaO図

Ⅶ 総 括

1 土器

1) II群B類について(図Ⅶ-1-1~33、表Ⅶ-1-1・2)

遺構・盛土遺構・包含層から120万点にも及ぶII群B類土器が出土し、整理作業の結果1,300個体ほどの復原土器が得られた。このことから、II群B-1類からII群B-5類の各類の特徴を明確にするとともに、遺構出土の土器の出土状況を再検討し、その変遷について記載する。

なお、II群B-1類は口縁部に不整綾絡文・縄線文が施されたもの。II群B-2類は口頸部文様帯下端に貼付帯が施されたもの。II群B-4類は円筒土器下層d1式に比定され、「文様帯下端に肩状の器形をもたないもの」。II群B-5類は円筒土器下層d2式に比定され、「文様帯下端に肩状の器形をもつもの」とこれに後続するもの。II群B-3類については上記以外のものとして細分し、円筒土器下層b式の新しい段階～円筒土器下層d1式の古い段階のものも含み、その範囲が広い。

各種の縄文について下記の略号を用いて記載した。

縄文：1a、自縄自巻の縄文：1e、直前段反摺りの縄文：1f、単軸絡条体第1類の回転文：2a、

多軸絡条体の回転文：2b、単軸絡条体第5・6類の回転文：2d、縄線：1c

なお、遺構編においてH-26・29・30・37、P-70のII群B-5類の事実記載で、綾絡文と記載したのものについて結束第2種の羽状縄文と訂正する。観察表についても訂正してある。

(1) 復原土器の観察表から見たII群B類について(表Ⅶ-1-1・2)

復原土器について、器形・口縁部形態・口唇部・口頸部文様区画帯・口頸部文様・体部文様・底部形態・胎土について後述する観察記号一覧に従って観察し、記号を用いて観察一覧表を作成した。その結果は次のようにまとめられる。

器形(表Ⅶ-1-1(1)-1・4)

II群B-2類は、15～30cmの小型と30～60cmの大型が認められる。器形は筒形で口頸部にくびれをもつ器形2が多い。バケツ状で底部からストレートに開く器形1・3がそれに次ぐ。II群B-3類は、10～30cmの小型と30～50cmの大型が認められる。器形は筒形で口頸部にくびれをもつ器形2が多い。細身のバケツ状で底部からストレートに開く器形3がそれに次ぐ。徐々に器形4・5が増加し、器形1と共に多く認められるようになる。II群B-4類の器形は全体的に小型化し、10～30cmの小型と30～45cmの大型が認められる。器形4が多く、器形2・3がこれに次ぎ、器形1が激減する。II群B-5類は、10～35cmの小型と35～50cmの大型が認められる。器形はII群B-4類に比べやや大型化する傾向が窺える。器形は、器形5が主体で、器形3・6がこれに続く。文様構成からII群B-5類の古い文様構成をもつものと円筒土器上層式の前段に位置付けられるものがあり、器形5は前者、器形3・6は後者に対応すると考えられる。

口縁部形態(表Ⅶ-1-1(1)-2)

II群B-1類は口縁部2の微かな波状のものが多く、II群B-2類は、口縁部3の波状口縁が多く、平縁の口縁部1・2がこれに次ぐ。II群B-3類は、口縁部1の平縁のものが増加し、口縁部3よりわずかに多く認められるようになり、微かな波状の口縁部2がこれに次ぐ。II群B-4類は、微かな波状の口縁部2がわずかな差であるが口縁部1より多く認められた。波状口縁の口縁部3は大きく減少する傾向が認められた。II群B-5類では、平縁の口縁部1が増加し、II群B-4類で減少する傾向が認められた波状口縁の口縁部3が増加し、これに次ぐ。この時期、口縁部に山形・片流れ状の突

起の貼り付けが加えられた口縁の口縁部6が出現し多用される。口縁部6は器形3・6の口縁部に施される傾向が窺え、新しい口縁形態と考えられる。

口唇部形態 (表Ⅶ-1-1 (1) - 3)

口唇部形態とは口唇部の文様の施文の有無、施文された文様によって区分したものである。

Ⅱ群B-1類・Ⅱ群B-2類は、94個体中1個体に燃糸の圧痕が加えられたものが認められた。他は無文である。円筒土器下層式の古い段階には、刺突文・縄文が口唇に施されたものが多く認められ、今回のⅡ群B-1類・Ⅱ群B-2類はそれらとは趣を異にするものである。Ⅱ群B-3類のほとんどは無文である。541個体中、僅かに縄の圧痕・縄文・単軸絡条体の圧痕文が加えられたもの6個体である。このことから、Ⅱ群B-3類は本来、口唇に施文が加えられない土器群と考えることができる。Ⅱ群B-4類は、214個体中、無文187個体、27個体に縄文・縄や燃糸の圧痕文が加えられている。Ⅱ群B-5類は、無文が大きく減少する。271個体中、縄の圧痕161個体で主体を占める。その他に無文44個体、竹管状工具による刺突や押し文・縄文・単軸絡条体や燃糸の圧痕文等66個体と様々な文様が認められるようになり口唇部の施文はⅡ群B-4類とⅡ群B-5類を境に大きな変化が認められる。

底部形態 (表Ⅶ-1-1 (1) - 6)

底部には平底・上げ底・台付がある。Ⅱ群B-1類～Ⅱ群B-5類は上げ底が主体である。上げ底には僅かな上げ底から大きな上げ底まである。Ⅱ群B-3類のほとんどが上げ底で、その半数の底面に縄文・燃糸文・貝殻条痕が施されている。Ⅱ群B-4類ではほとんどが上げ底で、底面へ施文は、縄文が施されたものが1/3ほどに減少し、無文のものが増加する。

Ⅱ群B-5類は上げ底が主体を占める。平底も増加する。底面への施文は認められなくなる。この時期に台付土器・浅鉢等の器種の底面への施文の増加がみられる。

胎土について (表Ⅶ-1-1 (1) - 5)

胎土については肉眼観察で、胎土中の砂粒・砂礫の有無で、「細」・「中」・「粗」、繊維の混入については「少ない」・「含む」・「多量に含む」、海綿骨針については「含まない」・「含む」・「多量に含む」として細別した。

Ⅱ群B-1類には1a3b3など胎土が細かく、繊維を多く含むものが多い。Ⅱ群B-2類には1a3b3など胎土が細かく、繊維・海綿骨針を多く含むものが多い。その他1a3b2・2a3b1・2a3b2・2a3b1なども認められる。Ⅱ群B-3類には1a3b3が多く認められる。2a3b2・2a3b2・3a3b1・3a3b2なども用いられている。Ⅱ群B-4類には1a3b3が多く、2a3b2・3a3b2・1a3b2なども用いられている。Ⅱ群B-5類には1a3b3が多く認められる。1a3b2・2a2b1・2a2b2・3a2b1・3a2b2なども比較的多く認められた。1a3b2を除くこれらは、Ⅱ群B-1～4類に比べて繊維混入が少ないものが用いられている傾向が認められる。また、1a3b3は各時期に最も胎土として使用されたものであるが、それ以外を概観すると海綿骨針を含まないものが全体の30%ほど用いられており海綿骨針の多少にはあまり頓着していないように思われる。

また、円筒土器下層式の古い段階の胎土は、砂粒を含み・繊維の少ないものが一般的で、Ⅱ群B-1類・Ⅱ群B-2類としたものとの違いが認められる。これらは、Ⅱ群B-3類に類似し、これに含まれるものが多い様に思われる。

口頭部文様帯の文様構成 (表Ⅶ-1-1 (2) - 8)

Ⅱ群B-1類には不整綾絡文(1g)や縄線(1c)が認められた。Ⅱ群B-2類には、不整綾絡文(1g)や縄線(1c)が多く認められ、これに直前段反摺りの縄文(1f)が多く認められ、斜行縄文(1a)・格子目状・網目状の単軸絡条体の回転文(2d)も認められた。Ⅱ群B-3類の主要文様要素として直

II 群日類土器 観察記号一覧
器形

11 その他

口縁部形態

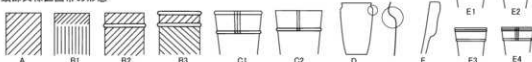
- 1 平縁 4 大きな波状口縁
2 緩やかな波状口縁 5 小波状口縁
3 波状口縁 6 突起



口唇部形態

- 1 無し 2 円形刻突 3 縄圧痕 4 縄文 5 絡糸体圧痕 6 半散竹管状(押し引) 7 圧痕文(刻目) 8 指頭圧痕 9 磨点

口頸部文様区画帯の形態



- A 無し 口縁部・体部が同一地文具で同一方法で施文されているもの
B1 文様帯有り B2 文様帯下縁が区画文で区画されているもの E E1 口縁部が肥厚するもの、内面から押し出されているもの
E2 E1の下縁に文様を加えられているもの
E3 E1の上下縁に文様を加えられているもの
E4 E3の文様帯に縦の区画帯を加えられているもの
C B+縦区画帯 C1 B3に縦の区画帯が加えられたもの
C2 B2に縦の区画帯が加えられたもの
D 文様帯下縁が「肩状」のもの
* B1 文様区画帯無し(文様の方向・種類を変えることで区分)

文様区画帯の形態 文様区画帯は貼付帯・注線・刻突・縄縁文・絡糸体圧痕文・指頭圧痕・絡糸文などの文様要素があり、これらが組み合わされて用いられている。

- | | | |
|----------|---------|-----------------------------------|
| a 貼付 | h1 羽状縄文 | 例
bgzh1 : 沈線+結束第2種による羽状縄文+羽状縄文 |
| b 沈線 | h2 斜行縄文 | |
| c 縄縁 | i 縄圧痕 | |
| d 刻突 | j 組紐状 | |
| e 絡糸体 | k 刻突 | |
| f 指頭 | l 微隆起線 | |
| g1 絡糸文 | m 刻目 | |
| g2 結束第2種 | n 磨点 | |

口頸部文様の形態

- | | | | | | | | |
|--------|-----|---------------|---------------|-----------------|-------------|-------|---------|
| A 地文有り | 1 縄 | 1a 斜行縄文 | 1d 付加縄文 | 2 絡糸体 | 2a 単軸絡糸体回転文 | 3 その他 | 3a 沈線 |
| B 地文無し | 1 縄 | 1a① 結束斜行縄文 | 1e 自縷自巻 | 2b 多軸絡糸体回転文 | 3b 金襴 | | 3b 金襴 |
| | | 1a② 結束斜行縄文 | 1f 直前段反摺 | 2c 綾杉状回転文 | 3c 貝殻象歯 | | 3c 貝殻象歯 |
| | | 1a③ 結束第2種斜行縄文 | 1g 磨り痕 | 2d 格子目・網目状磨点回転文 | 3d 刻突文 | | 3d 刻突文 |
| | | 1b 羽状縄文 | 1h 組紐状の縄縁 | 2e 単軸絡糸体圧痕文 | 3e 無文 | | 3e 無文 |
| | | 1b① 結束羽状縄文 | 1i 絡糸文 | | 3f 貼付 | | 3f 貼付 |
| | | 1b② 結束羽状縄文 | 1j 合部押し | | | | |
| | | 1b③ 結束第2種羽状縄文 | 1k 短縄文(高踏形含む) | | | | |
| | | 1c 縄縁文 | 1l 短縄文 | | | | |
| | | | 1k 短縄文 | | | | |
| | | | 1l 2本一組の縄縁 | | | | |

体部文様帯の形態

- | | | | | | | | |
|--------|-----|---------------|------------|-----------------|-------------|-------|---------|
| A 地文有り | 1 縄 | 1a 斜行縄文 | 1d 付加縄文 | 2 絡糸体 | 2a 単軸絡糸体回転文 | 3 その他 | 3a 沈線 |
| B 地文無し | 1 縄 | 1a① 結束斜行縄文 | 1e 自縷自巻 | 2b 多軸絡糸体回転文 | 3b 金襴 | | 3b 金襴 |
| | | 1a② 結束斜行縄文 | 1f 直前段反摺 | 2c 綾杉状回転文 | 3c 貝殻象歯 | | 3c 貝殻象歯 |
| | | 1a③ 結束第2種斜行縄文 | 1g 磨り痕 | 2d 格子目・網目状磨点回転文 | 3d 刻突文 | | 3d 刻突文 |
| | | 1b 羽状縄文 | 1h 合部押し | 2e 単軸絡糸体圧痕文 | 3e 無文 | | 3e 無文 |
| | | 1b① 結束羽状縄文 | 1i 絡糸文 | | 3f 貼付 | | 3f 貼付 |
| | | 1b② 結束羽状縄文 | 1j 合部押し | | | | |
| | | 1b③ 結束第2種羽状縄文 | 1k 短縄文 | | | | |
| | | 1c 縄縁文 | 1l 短縄文 | | | | |
| | | | 1k 短縄文 | | | | |
| | | | 1l 2本一組の縄縁 | | | | |

底部形態

- 1 平底 a 縄文
2 上げ底 b 磨糸文
3 台付 c 貝殻象歯

胎土

- | | | |
|-------------|----------|---------------|
| 1 細かい | a1 繊維少ない | b1 高矽骨針を含むない |
| 2 中(砂粒を含む) | a2 繊維を含む | b2 高矽骨針を含む |
| 3 粗い(砂粒を含む) | a3 多量の繊維 | b3 高矽骨針を多量に含む |

1. 器形

器形	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
器B		2	1	2								5
器B-1	1	1	5	1								8
器B-2	21	39	24	3	3	1						91
器B-3	77	195	162	54	43	4	1	5	8	2	1	556
器B-4	1	47	47	108	3			3	1	1		212
器B-5	12	3	44	19	117	54	1	1	13	3		272
器A	2		5	1	2	17						27
計	114	287	288	192	166	76	2	6	26	12	1	1172

2. 口縁部形態

口縁部形態	1	2	3	4	5	6	計
器B	1						2
器B-1	2	3	1				6
器B-2	21	13	51		3		88
器B-3	237	106	199	3	5	1	551
器B-4	83	104	29	1			217
器B-5	111	30	80	3			224
器A	2	1	4	10			17
計	457	250	362	17	8	58	1181

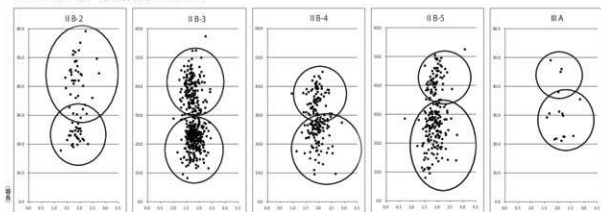
3. 口唇文様

口唇文様	1	2	3	4	5	6	7	8	計
器B	2								2
器B-1	8								8
器B-2	85							1	86
器B-3	525	2	3	1					541
器B-4	187		11	9				7	214
器B-5	44	3	181	17	12	20	6	8	271
器A	3		16		1			5	25
計	984	3	193	29	14	20	6	21	1147

6. 底部

底部	1	2	3	1a	1b	1c	2a	2a1	2a2	2a3	2b	2b1	2b2	計
器B		3												3
器B-1		4												4
器B-2	2	28			1				32		1	3	4	71
器B-3	18	212	2	10			2	197			1	10	17	469
器B-4	7	109	1	1	1		47	1				7	2	176
器B-5	30	179	6	1										219
器A		4												4
計	61	547	12	13	1	2	240	1	1	1	20	23	16	962

4. II B 類土器 分類別器形のまとめ



(口径)・器高

5. 胎土

胎土	1(層)	2(中)	3(層)	計
器B				
器B-1	4	7	1	12
器B-2	38(1)	18	10(1)	63(2)
器B-3	185(1)	92(1)	99(1)	376(3)
器B-4	72(1)	50(1)	71	194(2)
器B-5	72	85(1)	77(3)	334(5)
器A		9(1)	8	17(2)
計	372(3)	252(4)	286(7)	910(14)

1(層)	1a1b1	1a1b2	1a1b3	1a2b1	1a2b2	1a2b3	1a3b1	1a3b2	1a3b3	計
器B										
器B-1				1	1					2
器B-2	1				2	3(1)	4	29	28(1)	45
器B-3	1	2		1	4	16(1)	27	130	180(1)	245
器B-4			1	4	2	5	14(1)	49	75(1)	106
器B-5		1		8	4	10	14	30	72	125
器A										
計	2	3	1	10	14	35(2)	60(1)	236	373(3)	553

2(中)	2a1b1	2a1b2	2a1b3	2a2b1	2a2b2	2a2b3	2a3b1	2a3b2	2a3b3	計
器B										
器B-1							1	1		2
器B-2				1	1		5	5	2	14
器B-3		3		8	11	4	11(1)	31	24	62(1)
器B-4	2(1)			9	8	3	11	14	4	50(1)
器B-5	3(1)	2	1	24	21	2	12	10	8	65(1)
器A	4(1)	1		2	2					9(1)
計	10(2)	6	1	44	41	9	40(1)	61	40	232(4)

3(層)	3a1b1	3a1b2	3a1b3	3a2b1	3a2b2	3a2b3	3a3b1	3a3b2	3a3b3	計
器B										
器B-1										
器B-2	1(1)			2	1		4	2	1	10(1)
器B-3	3	4		17	9	2	33(1)	21	8	69(1)
器B-4	2			7	6	2	12	25	9	51
器B-5	9(2)	2(1)	2	17(1)	21	3	12	9	3(1)	77(5)
器A	3			3	1					7
計	21(2)	6(1)	2	51(1)	38	8	62(1)	57	21(1)	266(7)

表VI-1-1 復原土器属性表(1)

7. 口頸部区画。

口頸部区画	A	B1	B2	B3	C1	C2	D	E1	E2	E3	E4	計
区画	1	1										2
区画-1		6	1				1					8
区画-2	1	8	62	6	1	2	4					81
区画-3	54	158	106	101	78	42	16					557
区画-4	5	63	131	5	3	3	3	1	1			215
区画-5	8	24	32	9	5	5	108	34	27	1	20	273
区画A	2	2	2	2	10	4						25
計	71	282	317	123	97	62	132	36	28	1	22	1171

区画帯に貼付帯(a)を用いているもの

a	B1	B2	B3	C1	C2	D	E1	E2	E4	計
区画										
区画-1										
区画-2		54	8	1	3	1				67
区画-3	1	19	4	5	6					31
区画-4		19	1		2					22
区画-5		19	3	3	4	35	1	3	1	58
区画A		2	2	10	4					20
計	1	96	18	19	21	26	1	3	3	188

区画帯に羽状横文(h)を用いているもの

h1	B1	B2	B3	C1	C2	D	計
区画							
区画-1							
区画-2							
区画-3	1	9	9	5	1		25
区画-4		36					36
区画-5			1	1			2
区画A							4
計	2	106	7	6	2	5	127

区画帯に縁線文(g1)を用いているもの

g1	B2	B3	C1	D	E4	計
区画						
区画-1						
区画-2						1
区画-3	2	4	3	1		10
区画-4	6	2				11
区画-5	7		1	9	1	18
区画A						
計	18	6	4	11	1	40

区画帯に結束第2種(g2)を用いているもの

g2	B2	B3	C1	C2	D	E1	計
区画							
区画-1							
区画-2							
区画-3							
区画-4	14	2		2	1		20
区画-5	5		1		35		41
区画A							
計	19	2	1	2	36	1	61

8. 口頸文様。

口頸文様	1a	1a(1)	1b	1c	1d	1e	1f	1g	1h	1i	1j	1k	2a	2b	2d	2e	2f	2g	2h	2i	2j	2k	2l	計
区画	1						1																	2
区画-1				1				6																7
区画-2	12		2	20	1	14	26			2			4		6	9	1	2						61
区画-3	97	6	74	48	10	16	179	14	17	3		1	21		13	9	3	39						552
区画-4	1	20	102		9				44	1	1	18	18		1	1								215
区画-5	9		1	125		3			11			93	3	2	3	12	4							274
区画A	2		1	4					7			9												25
計	123	7	100	300	11	28	194	46	79	6	1	119	46	2	23	24	8	41	8	4	1168			

1g (不正縁線文)

1g	1g	計
区画		
区画-1	6	6
区画-2	26	26
区画-3	14	14
区画-4		
区画-5		
区画A		
計	46	46

1h (縁線状横文)との組合せ

1h	1a	1b	1c	1e	1f	1h	1i	2a	計
区画									
区画-1									
区画-2									
区画-3	1	11	1	3	9	17		2	44
区画-4		3	1	1	44	1	3	53	
区画-5					11			11	
区画A					3			3	
計	1	14	2	4	9	79	1	5	113

1i (2本一組の縁線)との組合せ

1i	1a	1b	1e	1f	1i	計
区画						
区画-1						
区画-2						
区画-3	1	1	1	4	1	8
区画-4						16
区画-5						92
区画A						9
計	1	2	1	4	1	119

1j(1組結束羽状横文)との組合せ

1j	1a(1)	1b	1e	1f	1g	1h	2a	計
区画								
区画-1								
区画-2								
区画-3	1	67	1	7	1	1	1	79
区画-4		19				2	3	24
区画-5								
区画A		1						1
計	1	89	1	8	1	3	4	107

1c (縁線文)との組合せ

1c	1a	1b	1c	1e	1f	1i	1j	2a	2b	2e	2c	計
区画												
区画-1	1		1									2
区画-2			26			1						27
区画-3	12	5	48		12					2		80
区画-4		1	102	7				6				114
区画-5			125				1		1			128
区画A			6									6
計	13	6	300	7	12	1	1	5	1	1	2	349

表VII-1-1 復原土器属性表(2)

前段反燃りの縄文 (1f)・斜行縄文 (1a)・結束羽状縄文 (1b)・縄線 (1c)・貝殻条痕文 (3c)・単軸絡条体の押圧文 (2e) が認められる。直前段反燃りの縄文 (1f) は地文として多用され、これに縄線 (1c)、組紐状の縄線 (1h)・2本一組の縄線 (1ℓ)・単軸絡条体の押圧文 (2e) 等が組み合わせられて山形・菱目状などの文様構成が作出されている。組紐状の縄線 (1h)・2本一組の縄線 (1ℓ) はこの段階が初現で、結束羽状縄文 (1b) と組み合わせられているものが多い。Ⅱ群B-4類には組紐状の縄線 (1h)・2本一組の縄線 (1ℓ)・縄線 (1c) 等が多用され、横位・山形・菱目状に施文されている。Ⅱ群B-5類には縄線文 (1c) が多用され、これに2本一組の縄線 (1ℓ) がこれに次ぐ。横位・山形・菱目状に施文されている。

口頸部文様帯区画帯 (表Ⅶ-1-1 (2) - 7)

Ⅱ群B-1類には明確な区画帯をもたず体部と同様の施文具の施文方向を変えて施文したもののや、施文具を変えて施文したB1が多く認められた。文様帯は不整綾絡文が施されたものがほとんどである。Ⅱ群B-2類の区画帯は、B2が多く認められ、貼付帯のみのもの、貼付帯と縄線や刺突文と組み合わせられたものが多い。その他、指頭・縄の圧痕・刻目が加えられたものも多い。B1やB3・C2も認められる。Ⅱ群B-3類の区画帯には、B1・B2・B3・C1・C1・Aなどがあり、多様である。いずれも縄線が区画文として用いられているものが多い。B3では縄線も多用されているが、組紐状の縄線の多用が認められている。また、綾絡文 (g1) が他との文様要素との組み合わせが認められる。結束第2種羽状縄文 (g2) は認められない。Ⅱ群B-4類の区画帯には、B2が主体を占める。B2は結束羽状縄文 (h1)との組み合わせが多く認められる。また、結束第2種羽状縄文 (g2) の初現が認められ、貼り付け (a) と刺突 (d) との組み合わせ、刺突文のみとの組み合わせが多いような傾向が窺えた。Ⅱ群B-5類の区画帯には、文様帯下端が「肩」状のもの (D)・下端のみが区画されているもの (B2)、口縁部が肥厚するものや肥厚帯がもの (E1・E2・E4) が多く認められた。

体部文様 (表Ⅶ-1-1 (3) - 9)

体部文様要素には縄文 (1a)、単軸絡条体の回転文 (2a)、直前段反燃りの縄文 (1f)、自縄自巻の縄文 (1e)、多軸絡条体の回転文 (2b) 等がある。Ⅱ群B-1類では、縄文 (1a) と多軸絡条体の回転文 (2b) が1個体ずつ出土している。Ⅱ群B-2類では縄文 (1a) が最も多く出土し、単軸絡条体回転文 (2a)、多軸絡条体の回転文 (2b)、直前段反燃りの縄文 (1f)、単軸絡条体第5・6類の回転文 (2d) などが認められている。これらは単独で施文されているものが多いが、縄文 (1a) は直前段反燃り (1f) と組み合わせで施文されているものが認められる。

Ⅱ群B-3類では直前段反燃りの縄文 (1f) が多用され、直前段反燃りの縄文 (1f)・単軸絡条体回転文 (2a) が急増し、縄文 (1a) がそれに次ぐ。直前段反燃りの縄文 (1f) は他の文様要素と組み合わせで施文されているものが認められる。自縄自巻の縄文 (1e) が初現し、結束羽状縄文 (1b①) と組み合わせで施文されている。また、単軸絡条体回転文 (2a) と結束羽状縄文 (1b①) との組み合わせも確認されている。

Ⅱ群B-4類では縄文 (1a)・直前段反燃りの縄文 (1f) が激減し、自縄自巻の縄文 (1e) が急増し、単軸絡条体の回転文 (2a) と共にこの時期の体部文様の主体を占める。これらと結束羽状縄文 (1b①) との組み合わせが多く認められる。また、結束第2種の羽状縄文 (1b③) がこの時期に出現し、単軸絡条体の回転文 (2a) と自縄自巻の縄文 (1e) の組み合わせも多く認められる。

Ⅱ群B-5類では自縄自巻の縄文 (1e) はほとんど見られなくなり、単軸絡条体の回転文 (2a) が激減する。そして、多軸絡条体の回転文 (2b) と縄文 (1a) が急増する。多軸絡条体の回転文 (2b)

と結束第2種の羽状縄文(1b③)との組み合わせが、結束羽状縄文(1b①)より多く認められる。Ⅲ群A類では多軸絡条体の回転文(2b)の1個体を除き、縄文(1a)となる。

(2) 遺構の出土状況からⅡ群B類の再検討(図Ⅶ-1-1~33)

住居跡・土坑等から535点の復原土器が得られた。その時期は縄文時代前期・中期・後期・晩期、擦文文化期のものがある。本報告の分類ではⅡ群B-1類~Ⅱ群B-5類期・Ⅲ群A類期・Ⅴ群C類土器・Ⅶ群土器である。これらのうちⅡ群B-1類~Ⅱ群B-5類期・Ⅲ群A類期は、住居跡・土坑から多量に出土した。多くの出土土器は個別の番号が与えられ、層毎に取り上げられている。そのような資料の中には、変遷を知る手掛かりとなる出土状況をもつものも多い。このことから、出土状況の良好なものを中心に、出土層位・出土位置・出土土器について再検討を加え、土器の変遷や組み合わせ等について検討する。

特にH-23は、復原土器が多いことから体部の文様別に図版を作成し、各層毎に示した。そして、H-23の出土状況を大まかな時間軸として設定し、その後、他の遺構についても再検討する。

他の遺構についても出土状況が良好なものについては出土層位のわかる垂直分布図・変遷図を図示した。本文中で個別の資料を引用する場合、報告時の体部文様の記号と掲載番号を、遺構の場合は遺構番号と掲載番号を示してある。

H-23(図Ⅶ-1-4~6・14・15)

H-23は盛土の東側に位置する。覆土中から復原土器161個体得られた。覆土8層54個体、覆土7層1個体、覆土6層46個体、覆土5層2個体、覆土4層48個体、覆土3層3個体、覆土1層5個体である。なお、見直しの結果、覆土8層6個体(147・161:体部1a、190・194~196:体部1f)については接合関係から出土層位を覆土6層に変更する。

覆土8層の体部文様は1a(28個体)・1f(10個体)・2a(12個体)、2d(5個体)、2b(1個体)で、口頭部文様帯には縄文が多く施文され、2aや1fがこれに続く。文様帯下端が貼付帯で区画されたものが多く出土し、56個体中21個体で1a(12個体)・1f(4個体)・2a(3個体)・2b(1個体)・2d(1個体)の体部地文との組み合わせが多く認められた。貼付帯は無文で、断面三角形の華奢なものが多い。口頭部文様帯には、斜行・羽状縄文・付加条の縄文等を主要な地文とした1a(16個体)、不整綾絡文(12個体)、1f(9個体)等が多く認められた。単軸絡条体第5類の2d(166・170~173・181)が覆土8層からまとまって出土し、覆土6層からは覆土8層では少ない波頂部から垂下する縦位の区画文が加えられた筒型のもののみが出土し、出土層位毎の器形の違いが認められた。

1fには少量の貼付帯や綾絡文が施されたものも含むが、文様帯が幅広く縄線・単軸絡条体の圧痕文・沈線で文様帯下端が区画されたものが多く、縦位の区画文が加えられたもの、上下端と縦位の区画文が加えられたものなども認められた。文様帯内には縄線・単軸絡条体の圧痕文が多用され、文様構成が複雑化する。そして、単軸絡条体の圧痕文が口頭部文様として多用され、無文地の口頭部文様帯に加えられるなど、体部の縄文に関係なく単軸絡条体の圧痕文が多用された時期があった可能性がある。

覆土6層から46個体が復元された。体部地文は、1a(20個体)・1f(20個体)・2d(4個体)・2a(1個体)・2b(1個体)で、1fは増加し、2aは大きく減少する。口頭部文様は1f(14個体)・1a(10個体)で、貼付帯が施されたものは46個体中11個体に認められ、体部が1a(5個体)・1f(6個体)との組み合わせが認められた。貼付帯が施されたものの中には、新しく位置付けられそうな菱目状の文様構成をもつもの(121・147)が新たに加わる。また、貼付帯・縄線・絡条体圧痕文で文様帯下端と縦位の区画文が施されているもの、無文地に縄線文や絡条体圧痕文が加えられたものが増加する。

覆土4・5層からは、復原土器50個体得られた。Ⅱ群B-2類からⅡ群B-4類まで混在して出

土している。体部地文は、1a (11個体)・2a (16個体)・1f (20個体)・2d (1個体)、自縄自巻の縄文の1e (2個体)である。文様帯の主要文様要素は1a (2個体)・1f (12個体)・2d (2個体)・1c (4個体)、1b① (4個体)、組紐状の圧痕文の1h (2個体)、その他 (4個体)である。体部・文様帯に1f・2aが多用され、自縄自巻の縄文 (1e)が新たに出現する。また、結束羽状縄文 (1b①)・組紐状の縄線文 (1h)が出現し、口頸部文様帯の文様構成は多様化する。体部は1fが主体で、2aが増加し、1aが減少する。

体部1fには、覆土8・6層と同様の文様構成をもつもの (46～58)、1～2本一組の縄線や結束羽状縄文で文様帯を2段ないし多段に区画しているもの (59～64)があり、後者は覆土8・6層から出土しておらず、新しい文様構成と考えられる。体部には2a (32・34)や1a (18)にも類似した文様構成が認められ、地文の関係なく多段化した文様構成をもつ一群があったものと考えられる。そして、縄線は、51～53・56～58のような縄線や単軸絡条体の圧痕文から32～39のような2本一組の縄線や組紐状の縄線に移行したものと考えられる。このような一群にあって体部2a (32・33・34～39)には組紐状の縄線が、1f (61)には1～2本一組の縄線が用いられており、体部地文によって組み合わせられる縄線に違いが認められる。そして、体部1fの覆土8・6層の資料には1～2本一組の縄線が認められ、組紐状の縄線のものが認められないことから、1～2本一組の縄線が古く、組紐状の縄線が新しい要素と考えられる。

体部2aは覆土6層に比べその数が急増する。そして、2a自体も覆土8～6層のものとは異なり細い縷糸文でそれ自体全く異なるものと考えられる。そして先述したように文様帯や区画文の縄線 (1c)は、1本の縄線から2本一組の縄線や組紐状の縄線への変化が窺え、新たな2aとこれらの縄線文の組み合わせが新しい土器群であることを示している。そしてこれまで主体であった幅広の文様帯を作出しているもの (32・33・44)から新たな組み合わせの要素を持つ (34・37・39など)の文様構成が出現する。そして幅の狭い文様帯にこれらが横環するもの (36～39)、文様構成をもつもの (35)、結束羽状縄文で文様帯下端が区画された幅の狭い文様帯に2～3本の縄線が加えられているもの (40・41)等も出土している。さらに新しい要素として結束羽状縄文 (1b①)の出現が認められ、区画帯 (37・40・41)・文様帯内の文様要素 (33)・口縁部文様帯として結束羽状縄文のみのもの (28・29)等多用される。これらは体部にも施文されたものが認められるようになり、さらに新しい文様構成を持つ一群を形成した様子が窺える (38・39・41)。

体部1eは覆土4層で出現する。幅の狭い無文地の文様帯に2本一組の縄線が3本加えられているもの (34)、口縁部文様帯として結束羽状縄文のみのもの (42)で、いずれも体部2aと同様の文様構成をもつものが認められる。体部1eが細い2aとともに新しい要素であることを示している。

覆土3層から3個体 (8・12・13)の復原土器が得られた。文様構成が不明な12を除き、覆土4層で初現が認められた文様帯を2段ないし多段に区画されているⅡ群B-3類 (8)と結束羽状縄文で区画された幅の狭い文様帯に組紐状の縄線が加えられたⅡ群B-4類 (13)である。

覆土1層から4個体が得られた。体部は1a (3)・1f (6)・2a (7)、その他 (2)で、文様帯は1a (3)・組紐状の圧痕文の1h (3)、1f (5)、その他 (7)である。

覆土1層から2aのⅡ群B-4類 (1～3)が出土、口頸部文様は結束羽状縄文で区画され、狭い文様帯には2本の縄線が施されたもの (2)、2本の組紐状の縄線が加えられているもの (1)、区画帯をもたず、文様帯には組紐状の縄線と綾格文が加えられたもの (3)が覆土の最上位から出土した。覆土4・5層・覆土3層からの出土状況から組紐状の縄線が加えられているものが古く位置付けられ、文様帯がやや広めで組紐状の縄線が施されたもの (35～37など)のⅡ群B-3類を介しⅡ群B-4類が成立したのと考えられる。

Ⅱ群B-1類～Ⅱ群B-3類について

H-14・20・36・43・49、P-33・37・38から多くの復原土器が得られている。これらの出土状況を再検討することでⅡ群B-1類～Ⅱ群B-3類の変遷を明らかにする。

Ⅱ群B-1類は、H-30の覆土8層の資料(57)があるが、主に包含層から出土した(1a-1～3・5・6、1f-1)(図VII-1-9)。口縁部に不整綾絡文や斜行縄文の地文上に3本の縄線文が加えられたものである。体部は1aのものが多く、1fのものも認められる。胎土は細かい。Ⅱ群B-1類としたが胎土・器形・器面調整や器厚が薄手であることから、本来はⅡ群B-3類にすべきものと考えられる。

Ⅱ群B-2類については今回の遺構・包含層から文様帯下端に貼付帯が施された復原土器90個体ほど得られ、Ⅱ群B-3類としたものを含めそのほとんどを図VII-1-26に示した。遺構はH-14・23・30・43から出土した。

本遺跡のⅡ群B-2類を概観すると、貼付帯が華奢のものが多い様に思われる。本資料の中で比較的太く、刺突・刻目等が加えられたものと貼付帯が華奢なものに分けられ、さらに後者は縄線等の有無によってさらに細分される。

H-14 (図VII-1-1・17)

H-14は盛土の西側に位置する。床面・床面直上・覆土から多くのⅡ群B-3類の復原土器が得られた。床面・床面直上・覆土から体部文様が2aを主体とする極めて特徴的な出土状況である。復原土器22個体中1aの33・34を除き、18個体が2aで、2個体が(2d)である。床面から1eの破片資料、覆土から1aの復原土器(33)と破片資料(32・35)が出土している。床面から出土の4個体中3個体は口頸部文様帯の区画文をもたないもの(1～3)、下端が1本の縄線で区画され文様帯に斜行縄文が施されているもの1個体(4)である。床面直上から8個体の復原土器が得られ、区画文をもたないもの3個体(8・10・11)、区画帯をもつもの5個体(9・13～16)で区画帯の形態が床面と逆転する。

床面と床面直上出土の土器の特徴から口頸部文様帯の区画文がないもの一区画文をもつものへの変遷が窺える。区画文は1本の縄線→2本一組の縄線や沈線・貼付帯への変化が窺える。文様帯内は単軸絡条体回転文・単軸絡条体第4類の回転文・斜行縄文→斜行縄文が多用され、菱目状の結束羽状縄文、横環する縄線文、不整綾絡文・単軸絡条体の回転文・単軸絡条体第4類の回転文等が施されたものに移行し、縄線の縦位の区画文・鋸歯状の縄線・沈線が加えられる。

H-14の床面・床面直上出土の土器の特徴をH-23の覆土8層と比較すると、区画文のないH-14の1～3の類似資料はH-23から出土していない。また、文様帯下端部を1本の区画文で区画されているもの(4)も出土していない。したがってこれらは、H-23の覆土8層の遺物より古い可能性がある。

H-20 (図VII-1-3・17)

H-20から10個体の復原土器が得られた。覆土は、覆土1～5層に分けられる。掲載番号6をⅡ群B-2類からⅡ群B-3類、9をⅡ群B-2類からⅡ群B-4類に訂正する。

H-20では区画帯をもたないもの(2)・文様帯下端に貼付帯をもつもの(1)・文様帯下端が2本一組の縄線の区画されたもの(3)→口縁部に結束羽状縄文の文様帯をもつもの(13)・Ⅱ群B-4類の結束羽状縄文で区画され、狭い文様帯に組紐状の縄線が加えられているもの(11)への変遷が認められている。

H-49 (図VII-1-3・19)

H-49から11個体の復原土器が得られた。Ⅱ群B-3類～Ⅱ群B-5類が出土した。文様帯上下及び垂下する区画帯が施されたもの→文様帯上下及び垂下する区画帯が施され、文様帯中央に横環する2本一組の縄線が3段加えられているもの(2)→文様帯に横環する2本一組の組紐状の縄線が3段

加えられているものへの変遷が確認されている。これはH-23の覆土4・5層に対応し、H-23でも同様の変遷が確認されている。

H-30 (図VII-1-9・30)

H-30から70個体の復原土器が得られた。床面・覆土8層～覆土4層では、区画帯をもたないもの(57・59～62・65など)・文様帯下端が貼り付けによって区画されているもの(66・69・70・74など)、下端が2本一組の縄線で区画されているもの(73)、下端が2本一組の縄線で区画され、波頂部から垂下する縄線が加えられたもの(74)等、多種多様である。体部文様は縄文(1a)→直前段反摺りの縄文(1f)への変化が認められるものの明確な違いは認められない。

H-43 (図VII-1-11・13)

H-43は、遺物は覆土最下層、覆土、盛土下、盛土中～下位から遺物を取り上げられている。覆土・盛土下・盛土中からⅡ群B-3類～Ⅱ群B-4類の2本一組の組紐状の縄線や2本一組の縄線文が口縁に施されたものが出土し、文様帯は結束羽状縄文で区画されているもので、結束第2種の羽状縄文は認められない。Ⅱ群B-3類の2本一組の組紐状の縄線や2本一組の縄線文が口縁に施されたものには、文様帯中央に横環する2本一組の縄線が加えられているもの(63)、文様帯中央に横環する2本一組の組紐状の縄線が加えられているもの(33・55)、2本一組の縄線で文様帯に菱目状の文様構成を作出したもの(61)、組紐状の縄線で文様帯に菱目状の文様構成を作出したもの(65)、やや幅広の文様帯に結束羽状縄文が施され、上下に組紐状の縄線文が加えられているもの(37・38)などがある。Ⅱ群B-4類の狭い文様帯に組紐状の縄線が施されているもの(39)などが出土し、Ⅱ群B-3類からⅡ群B-4類への変遷が確認されている。これはH-23の覆土4・5層～覆土1層に対応し、H-23でも同様の変遷が確認されている。また、H-49でも同様の出土状況が認められている。

H-36・P-33 (図VII-1-10・19)

H-36・P-33は、遺物の少ない6・7層を挟んで床面～覆土11層、覆土5～1層からⅡ群B-3類が出土した。なお、18(PO-13b)の出土層位を覆土5層から覆土10・11層と訂正する。床面～覆土11層からは、区画帯をもたないもの(5)・貼付帯をもつもの(1)・文様帯上下端が2本と1本の縄線と単軸絡条体の圧痕文で区画されているもの(3)・下端が2本の縄線で区画され波頂部から垂下する縄線が加えられているもの(2)や同様の文様構成を沈線で施文しているもの(15)などのⅡ群B-3類の古手が出土した。覆土5～1層からは、体部に多軸絡条体の回転文が施されたもの(24)、口縁部に幅広く結束羽状縄文が施され、文様帯下端を2本の縄線で区画され、体部に自縄自巻の縄文が施されたもの(23)、体部に単軸絡条体第1A類の回転文が施され、結束羽状縄文・刺突・組紐状の縄線で区画された文様帯に結束羽状縄文が加えられているもの(21)などが出土した。下層では認められなかった文様要素を持つものが出土し、後続するⅡ群B-4類への変遷の萌芽が窺える。

P-37・38 (図VII-1-12・19)

下位の床面・覆土9～7層と上部の覆土5～1層に大きく分けられる。出土層位について掲載番号28・30を覆土5層、29を覆土7層上に訂正する。

床面からは、区画帯をもたない口頭部文様帯に不整綾絡文、体部に単軸絡条体の回転文のもの(1)、口頭部文様帯下端に貼付帯をもつもの。覆土9層から文様帯下端が2本と上端が1本の縄線で区画され、結束羽状縄文を菱目状に施文したもの(3)、覆土7層下からは、区画帯をもたないもの(6・8)、文様帯下端が1本の縄線で区画され、文様帯に斜行縄文(4)・菱目状に結束羽状縄文が施されたもの(5)、波状口縁の無文地に横環する7本の縄線を施し、鋸歯状の縄線文が加えられたもの(7)などが出土した。覆土7層上からは、区画帯をもたず口縁部に不整綾絡文が施されたもの(11)、貼

付帯が施されたもの(12)など古い要素のものも認められるが、器面全体に結束羽状縄文が施されたもの(13)、斜行縄文のみのもの(14・28)、破片資料ではあるがⅡ群B-4類直前に位置付けられそうな資料(15・16)が出土している。

上位の覆土1層～5層からⅡ群B-3類～Ⅱ群B-4類が出土し、口縁部に結束羽状縄文が施されたもの(26)や直前段反摺りの縄文のみのもの(27)、結束羽状縄文のみのもの(30)などのⅡ群B-3類、31～32はⅡ群B-4類である。31は自縄自巻の縄文で、文様帯は結束羽状縄文で区画され、縄線が加えられている。33は文様帯が綾絡文で区画され縄線が加えられている。32は文様帯が貼付帯で区画されたものである。

P-37・38ではⅡ群B-2類・Ⅱ群B-3類の区画帯をもたないもの・口頭部文様下端に貼付帯もつもの→文様帯下端が2本と上端が1本の縄線で区画されるもの→区画帯をもたないもの・文様帯下端が1本の縄線で区画されるもの→口縁部に結束羽状縄文が施されたもの・直前段反摺りの縄文のみのもの・結束羽状縄文のみのもの→Ⅱ群B-4類の体部が自縄自巻の縄文で、文様帯区画帯が結束羽状縄文のもの・文様帯区画帯が綾絡文のもの・文様帯区画帯が貼付帯のものへの変遷が認められる。

H-14・20・36・43・49、P-33・37・38のⅡ群B-1類からⅡ群B-3類の出土状況については述べたが、この出土状況からⅡ群B-2類は第7段階、Ⅱ群B-3類は第9段階の変遷が考えられる。

Ⅱ群B-1類 (図Ⅶ-1-22・27)

H-30覆土8層出土の資料。包含層出土資料を本類とした。体部は1aで、口縁部に不整綾絡文や斜行縄文の地文上に3本の縄線文が加えられたものである。Ⅱ群B-1類の口唇部は無文のものがほとんどである。円筒土器下層の古い段階には口唇に刺突文や縄文などが加えられているものが多く、これらとは趣を異にする。また、胎土の違いや器厚が薄手であることなどから本来はⅡ群B-3類の第1段階にすべきものと考えられる。

Ⅱ群B-2類 第1段階 (図Ⅶ-1-20・26)

縄の圧痕・刺突等が施された比較的太い貼付帯が施されたもの。平縁がほとんどである。体部は縄文(1a)・単軸絡条体の回転文(2a)・単軸絡条体第5・6類(2d)・多軸絡条体の回転文(2b)が認められる。文様帯には、不整綾絡文・斜行縄文や結束羽状縄文を葎目状に構成したもの・単軸絡条体第2類・単軸絡条体第5・6類の回転文(2d)等が施されている。貼付帯には指頭の押圧・円形刺突文・縄線・刻目等が加えられている。なお1a(図Ⅶ-23-1)は文様帯・区画帯直下・体部に綾絡文が施され、他のものより古く位置付けられる。また、1aの18・44のように貼付帯の上下に縄線が加えられたものも認められる。

Ⅱ群B-2類 第2段階 (図Ⅶ-1-20・26)

無文の細い貼付帯が施されたもので、口頭部文様帯に不整綾絡文が施されたもの。平縁と緩やかな波状口縁がある。体部は、縄文(1a)・単軸絡条体回転文(2a)・直前段反摺りの縄文(1f)等がある。貼付帯の上下に、華奢な貼付帯を強調する縄線文が加えられているものが多い。

Ⅱ群B-2類 第3段階 (Ⅱ群B-3類 第2・3段階) (図Ⅶ-1-20・26)

貼付帯が施されたもので、無文地の幅広い口頭部文様帯に縄の圧痕文で横環・鋸歯状・山形などの文様構成が作出されているもの。筒形のものと同径の大きい筒形の大型のものがあるが、同じ文様構成を持つもの、同じ文様構成を施文具を変えて施文しているものも認められる。口縁部は平縁・緩やかな波状口縁、波状口縁がある。口頭部下端の貼付帯の上下に縄線が加えられているものが多く認められた。貼付帯上には刺突文・押し文・縄の圧痕・縄線文等が加えられたものがある。

Ⅱ群B-2類 第4段階 (Ⅱ群B-3類 第3段階) (図Ⅶ-1-21・26)

H-23の覆土8・6層の資料の一部・幅広の口縁部下端に貼付帯が施されたもの。波状口縁のものが多い。体部は、縄文(1a)・直前段反轉りの縄文(1f)等がある。貼付帯には縄の圧痕・刺突文・指頭等が加えられている。口頭部文様帯には、体部1fには1fが、体部1aには1aが加えられている。体部2aが激減する。

II群B-2類 第5段階(II群B-3類 第4段階)(図VII-1-21・26)

文様帯下端に貼付帯が施され、垂下する沈線・縄線・単軸絡条体の圧痕文が加えられている。H-23の覆土8・6層出土資料の一部、H-43の出土資料。平縁と波状口縁が認められる。貼付帯上には指頭の爪形文・刺突文・縄文が加えられている。体部は直前段反轉りの縄文(1f)・斜行縄文(1a)・単軸絡条体の回転文(2a)・単軸絡条体第5・6類の回転文(2d)等がある。文様帯には直前段反轉りの縄文(1f)・斜行縄文(1a)・単軸絡条体の回転文(2a)・不整絞絡文(1g)等が施されている。器形・文様構成はII群B-3類第4段階に類似する。

II群B-2類 第6段階(II群B-3類 第5段階)(図VII-1-21・26)

口頭部文様帯上下端と口縁部から垂下する区画帯が施されたもの。波状口縁である。文様帯下端には貼付帯が施されている。貼付帯の上下に縄線・単軸絡条体の圧痕文加えられたものが多く、貼付帯上には沈線・刺突文等が加えられている。体部は直前段反轉りの縄文(1f)がほとんどである。文様帯は直前段反轉りの縄文を地文とするものが多い。また、単軸絡条体の圧痕文で鋸歯状・山形文様が加えられているものもある。器形・文様構成は後述するII群B-3類第5段階に類似する。

II群B-2類 第7段階(II群B-3類 第6段階)(図VII-1-21・26)

区画帯の施文方法は第6段階と同様である。幅広の口頭部文様帯に菱目状文様構成が施されたもの。波状口縁のものが多い。文様は縄線・単軸絡条体圧痕文等で施文される。体部は、直前段反轉りの縄文(1f)、斜行縄文(1a)、単軸絡条体の回転文(2a)があり、直前段反轉りの縄文(1f)のものが多い。II群B-3類第6段階に器形・文様構成等が類似する。

II群B-3類 第1段階(図VII-1-22・27)

区画帯をもたないもの。器形はバケツ型と筒形がある。平縁がほとんどである。体部は縄文(1a)・単軸絡条体の回転文(2a)が多く、単軸絡条体第5・6類(2d)・多軸絡条体の回転文(2b)が混じる。文様帯には斜行縄文や結束羽状縄文を菱目状に構成したもの・付加条のもの(1a)・単軸絡条体第5・6類(2d)・不整絞絡文等がある。また沈線・縄線が加えられたものもある。H-14の床面・床面直上との出土状況から、口頭部文様区画帯をもたないものから区画されたものへの変遷が確認されている。

II群B-3類 第2段階(図VII-1-22・27)

無文地の口頭部に縄線文が加えられたもの、また、口頭部文様帯の上下を区画したもの。口縁部は平縁のものが多い。区画帯は縄線・単軸絡条体の圧痕文等で施文され、下端1本、上端1本のものと同様2本、上端1本で区画されているものがあり、後者が多い。体部は縄文(1a)・単軸絡条体の回転文(2a)・直前段反轉りの縄文(1f)が多く、多軸絡条体の回転文(2b)・単軸絡条体第5・6類(2d)が混じる。文様帯には斜行縄文や結束羽状縄文を菱目状に構成したもの・直前段反轉りの縄文(1f)などが施されている。

なお、II群B-3類第2段階とII群B-3類第3段階の前後関係については確定できなかった。

作図の際、後続する土器群との関係で便宜的に口頭部文様帯の上下を区画したものをII群B-3類第2段階に、口頭部文様帯下端が区画されているものをII群B-3類第3段階にした。

II群B-3類 第3段階(図VII-1-22・28)

口頭部文様帯下端部が区画されているもの。口頭部文様帯下端が1本の縄線のもの、2本の縄線の

ものが認められ、2本で区画されているものが多い。平縁が多く、緩やかな波状口縁・波状口縁も認められる。波状口縁への移行期と考えられる。区画帯は縄線・単軸絡条体の圧痕文・刺突文等で施文され、2本一組のものが多い。体部は単軸絡条体の回転文(2a)・直前段反轉りの縄文(1f)が多く、少量の単軸絡条体第5・6類(2d)・縄文(1a)が混じる。文様帯には斜行や菱目状の縄文(1a)・不整綾絡文・単軸絡条体の回転文(2a)・直前段反轉りの縄文(1f)が多く、単軸絡条体第5・6類の回転文(2d)が混じる。文様帯には鋸歯状の沈線文・縄線文等が加えられたものもある。

口頭部文様帯下端の区画帯の2本の縄線の出自については、Ⅱ群B-2類第1段階から認められ、Ⅱ群B-2類第2・3段階に多く認められる「貼付帯上下に加えられた縄線文」に求められるのではないかと考えられる。「2本の縄線による区画」が貼付帯の省略形として、Ⅱ群B-2類第2・3段階に併存したものか、やや遅れるものか今回は明確にできなかった。なお、「3本の縄線による区画」のものも認められるが、これらについては「刺突列・縄線が加えられた貼付帯」を省略化したものと考えられる。

「1本の縄線による区画」の出自は、Ⅱ群B-1類土器の口縁部に不整綾絡文や縄文が強く施文され、口頭部文様帯下端に段を生じさせている資料が多く認められることから、これらとの関連が想定される。その出自には貼付帯が無関係と考えることができることからⅡ群B-3類2・3段階の「2本の縄線による区画」より古く位置付けられる可能性がある。

Ⅱ群B-3類 第4段階 (図Ⅶ-1-22・28)

H-23の覆土6層出土の資料。口頭部文様帯下端と口縁部から垂下する区画帯が施されたもの。平縁・緩やかな波状口縁・波状口縁が認められる。波状口縁への移行期と考えられる。体部は、直前段反轉りの縄文(1f)が多く、少量の単軸絡条体第5・6類(2d)・単軸絡条体の回転文(2a)・縄文(1a)が混じる。文様帯には直前段反轉り(1f)が多用され、少量の単軸絡条体の回転文(2a)が混在する。同様の文様構成はⅡ群B-2類第5段階にも認められる。区画文は1~3条のもの多く、2本のものが多用される。垂下するものでは1本のは極めて少なく、貼付帯との関係が考えられる。

Ⅱ群B-3類 第5段階 (図Ⅶ-1-22・29)

H-23の覆土4・5層出土の資料。口頭部文様帯上下端と口縁部から垂下する区画帯が施されたもの。波状口縁が多い。区画帯は縄線・単軸絡条体の圧痕文・沈線・刺突文等があり、2本一組の区画帯内には刺突・綾絡文が加えられているものも認められた。このような手法はⅡ群B-2類第6段階にも認められる。体部は直前段反轉りの縄文(1f)のものも多く、縄文(1a)・単軸絡条体の回転文(2a)等もある。文様帯には不整綾絡文・縄文(1a)・単軸絡条体の回転文(2a)・貝殻条痕文などの多様な文様が施されたものがある。器形・文様構成においてⅡ群B-2類第6段階と類似する。この時期、口頭部文様帯下端に新たに結束羽状縄文が加えられたものが出現する。結束羽状縄文は後続する土器では口頭部文様・区画帯として多用され、Ⅱ群B-4類・Ⅱ群B-5類第3段階まで用いられる。

Ⅱ群B-3類 第6段階 (図Ⅶ-1-22・29)

文様帯の構成要素は第5段階と同様である。幅広い口頭部文様帯に菱目状文様構成が施されたもの。波状口縁のものが多い。口頭部文様は縄線・単軸絡条体圧痕文等で施文されているものが多い。縄線は2本一組の縄線・組紐状の縄線が併存する。体部は直前段反轉りの縄文(1f)のものが多い。文様帯下端に結束羽状縄文が加えられたものが認められるようになる。

Ⅱ群B-3類 第7段階 (図Ⅶ-1-23・29)

H-23覆土4・5層に認められる2本一組の縄線や組紐状の縄線などを2本一組で幅の広い口頭部文様帯の上下及び中央に加えて、多段の文様構成を作出したものの。幅広い文様帯にはlfや結束羽状縄

文が施されている。体部は直前段反撚りの縄文(1f)のものが多く、縄文(1a)・単軸絡条体の回転文(2a)・自縄自巻の縄文(1e)が混在する。H-49において第5段階の土器の上層から出土している。

Ⅱ群B-3類 第8段階 (図Ⅶ-1-23・30)

H-23覆土4・5層に認められる2本一組の縄線や組紐状の縄線などを2本一組で幅の狭い文様帯を区画しているもので、口頸部に結束羽状縄文を施文後に加えている。体部は自縄自巻の縄文(1e)・単軸絡条体の回転文(2a)が多く、直前段反撚りの縄文(1f)は激減する。そして結束羽状縄文は体部にも施文されるようになる。

Ⅱ群B-3類 第9段階 (図Ⅶ-1-23・30)

H-23覆土4・5層出土資料。結束羽状縄文や2本一組の縄線や組紐状の縄線で幅の狭い文様帯が作出され、2本一組の縄線や組紐状の縄線が横環するもの、わずかに菱目状の文様構成が作出されたものなどがある。体部は単軸絡条体の回転文(2a)・自縄自巻の縄文(1e)・直前段反撚りの縄文(1f)が認められる。結束羽状縄文は文様帯の文様要素と区画文として用いられ、体部にも施文されている。

以上のようにⅡ群B-1類・Ⅱ群B-2類を7段階、Ⅱ群B-3類を9段階に細分してその変遷過程について記述した。

このうちⅡ群B-2類第1段階・Ⅱ群B-2類第2段階からⅡ群B-3類第4段階への変遷は、円筒土器下層b式の新しい段階から円筒土器下層c式への変遷を示している。この変遷は貼付帯から縄線文への変化で迎えることができる。

Ⅱ群B-2類第1段階には口頸部文様帯下端に太い貼付帯が施され、Ⅱ群B-2類第2・3段階で貼付帯は華奢なものとなり、それを補うように貼付帯の上下に縄線文や沈線文が加えられ、強調される。Ⅱ群B-2類第5段階に貼付帯が施された土器群は激減し、貼付帯をもたないⅡ群B-2類第5段階と同じ文様構成のⅡ群B-3類第4段階が盛行する。その後、Ⅱ群B-2類第6段階とⅡ群B-3類第5段階、Ⅱ群B-2類第7段階とⅡ群B-3類第6段階のように同様な文様構成をもちながらも、貼付帯が施されたものと無いものが併存する様子が窺える。

Ⅱ群B-2類第3・4段階については一部Ⅱ群B-3類第2段階やⅡ群B-3類第3段階と同じ文様構成をもつものも認められるがその関係性は不明瞭である。

Ⅱ群B-4類について (H-23・25・26・30・43)

Ⅱ群B-4類はH-25・26でまとまって出土。その他にH-23・30・43などから出土した。H-25・26を軸に据えて、他の遺構でのまとまりや層位的な出土状況を考慮しつつ、その変遷について述べる。

H-25 (図Ⅶ-1-7・18)

Ⅱ群B-4類の復原土器14個体が得られた。体部2aは6個体(9・11～13・15・16)、体部1eは8個体(3～8・10・14)である。結束羽状縄文で文様帯が区画されたもの9個体、貼付帯と結束羽状縄文と組み合わされたもの1個体(3)、区画帯をもたないもの3個体、綾絡文のもの1個体(10)である。区画帯をもたないものうち1点は体部に結束羽状縄文が3段施されたもの(12)である。貼付帯と結束羽状縄文と組み合わされたもののように器面に何らかの形で結束羽状縄文が施文されたものは11個体で、H-25は結束羽状縄文が多用された土器群である。また、体部1eのうち結束羽状縄文で文様帯が区画されたものが8個体中5個体(4・6・7・8・14)、2aは6個体のうち結束羽状縄文で文様帯が区画されたもの4個体(11・13・15・16)、で結束羽状縄文と2a・1eとの関係はほぼ変わらない。

文様区画帯として体部の縄文に関係なく結束羽状縄文が多用されている。しかし、口頸部文様帯は、1eはやや幅広く文様構成をもつもの(6)もある。2aは幅の狭い文様帯に縄線文のみが加えられているものが多く、口頸部文様帯の文様構成にわずかな違いが認められる。

H-25のⅡ群B-4類には、後述するH-26やH-30の覆土1～3層の資料では、口頭部区画文として多く認められる結束第2種の羽状縄文がほとんど認められない。このことからH-25のⅡ群B-4類は文様区画帯として結束羽状縄文が多用されている一群の土器と考えられる。

また、結束羽状縄文で区画された土器でありながらH-25のⅡ群B-4類とは異なり文様帯に組紐状の縄線や2本一組の縄線が施された一群と思われる土器がH-23の覆土1～3層(1～3・13)やH-43から出土している。このことから、さらに文様帯内の文様要素の違いから大きく文様帯に組紐状の縄線文・2本一組の縄線が施された一群、文様帯に1本の縄線を用いて縄線文が加えられている一群に分けられる。

そして、H-23の覆土4・5層出土資料には、H-23の覆土1～3層(1～3・13)の資料よりも古く位置付けられそうな組紐状の縄線文・2本一組の縄線が施されたもの(32～39・60～64)や更に古く位置付けられそうなもの(60～62)などがある。Ⅱ群B-3類の終末期には組紐状の縄線文が多用される様子が窺え、この傾向はⅡ群B-4類の初期にも継承されて口頭部文様帯の結束羽状縄文の区画・文様帯の組紐状の縄線文がⅡ群B-4類の古い段階のメルクマルとなるものと考えられる。このような変遷を考慮すると、H-23のⅡ群B-4類(1～3・13)を古く、H-25のⅡ群B-4類が新しく位置付けられる。そして、Ⅱ群B-4類の新しい段階で文様帯の縄線が組紐状の縄線・2本一組の縄線から1本単位の縄線に移行したことによって、文様帯内の文様構成も細かな装飾が可能になり、飛躍的に多様化したと考えられる。その様子はH-26に見ることができる。

H-26 (図Ⅶ-1-7・18)

H-26からⅡ群B-4類の復元土器が11個体出土した。体部1eのものが1個体(4)、体部2aのもの9個体(1～3・5～10)、2dのもの1個体(11)で、体部2aがほとんどである。口頭部区画帯は結束第2種の羽状縄文は11個体中6個体で、結束羽状縄文が2個体で体部2aである(1・2)。綾絡文1個体(7)、貼付帯と結束第2種の羽状縄文との組み合わせ1個体(11)である。

H-26では体部文様では、2aの土器の増加し、それに伴って自縄自巻の縄文(1e)の減少が窺えらると共に多軸絡条体の回転文(2b)が認められるようになる。また、2本一組の縄線や組紐状の縄線を原体とする2a(5・6)が認められる。このような2aは、H-25(16)でも出土しているがやや古い要素のものである。H-26では区画文の結束第2種の羽状縄文の増加に伴い結束羽状縄文が減少し、新たに出現した結束第2種の羽状縄文による区画が多用される。そして、結束羽状縄文で区画された狭い文様帯は、結束第2種の羽状縄文で区画されたものでは幅広に変化し、文様構成も組紐状の縄線・2本一組の縄線から1本の縄線で矢羽状・鋸歯状・山形・菱目状の縄線文が施されるようになる。

H-26から口頭部文様帯下端が肩状で、体部2b、口頭文様帯部下端に「刺突文が施された貼付帯」がめぐり、結束第2種の羽状縄文が加えられた資料が1点出土している。H-26より古く位置付けられそうなH-23・H-25には認められない「肩状の口頭文様帯下端」・「2bの体部」・「口頭部文様帯の貼付帯」の要素は新しい文様要素に位置付けられる。そして「肩状の口頭文様帯下端」はⅡ群B-5類の特徴的な器形である。

「口頭部文様帯下端の貼付帯」をもつものは、H-30の覆土2・3層から4個体(16・17・18・19)、H-25の覆土中から1個体(3)、P-37・38の覆土から1個体(32)、H-26の1個体(11)を含め計7個体である。類似資料の少なさからいえばH-30の4個体は比較的主なものといえる。

H-30の出土状況は覆土2層出土3個体(17・18・19)、覆土3層1点(16)である。17・18の体部は2aで、区画文は刺突文が加えられた貼付帯と結束羽状縄文(17)、結束第2種の羽状縄文(18)と組み合わせられている。19の体部は多軸絡条体の回転文(2b)、文様帯下端が肩形で、貼付帯と結束

第2種の羽状縄文が組み合わせられ、刺突文を欠く。16の体部は2aで、区画帯は2列の綾絡文である。H-26の11はH-30の19に類似し、文様帯下端が肩状で、貼付帯・結束第2種の羽状縄文・刺突文が加えられている。

H-25の資料(3)やP-37・38覆土出土の資料(32)は、口頭部文様帯は刺突の加えられた太い貼付帯と結束羽状縄文で区画されている。狭い文様帯には、3は単軸絡条体の圧痕文、32は縄線が3本施されている。3の体部は1e。32の体部は2aと結束羽状縄文との組み合わせである。7個体中、結束羽状縄文3個体、結束第2種の羽状縄文3個体、綾絡文(結節の回転文)1個体である。結束羽状縄文が施されているものの口頭部文様帯には、3~4本の単軸絡条体の圧痕文や縄線文が施されたもの(H-25・P-37・38)と文様帯がやや幅広く菱目状の縄線文が施されたもの(H-30)がある。綾絡文のものは入れ子の山形文が縄線で施されたもので、外反し文様帯下端が肩状気味である(H-30)。結束第2種の羽状縄文が施されたものは、先述の綾絡文のものに類似した器形・文様構成を持つもの(H-30)と口頭部文様帯下端が肩状で、文様帯は幅広く入れ子の山形文が施されている。いずれも体部は多軸絡条体の回転文(2b)である。このような特徴を考え合わせるとH-25(3)・P-37・38(32)は、区画帯として結束第2種の羽状縄文が用いられていることや口頭部文様帯が幅広く文様構成もつこと等を特徴とするH-30の資料に比べ古い要素が窺えることから、H-25の資料(3)やP-37・38の資料(32)はこれに先行するものと考えられる。

口頭部文様帯下端の貼付帯には3(H-25)・32(P-37・38)のように文様帯を区画するもの、11(H-26)・19(H-30)のように文様帯下端の「肩」を作出・強調するために施されるものがあり、前者は後続する土器群の特徴的器形である「肩をもつ器形」への初現または移行に大きな影響を与えたものと考えられる。そして16・17(H-30)のような中間的なものを介し後者の口縁部下端が肩状で、幅広い文様帯に山形・菱目状などの多様な縄線文が施されるⅡ群B-5類に移行したものと考えられる。

Ⅱ群B-3類からⅡ群B-4類への移行は次のようにまとめられる。

Ⅱ群B-4類 第1段階(図VII-1-23・30)

H-23覆土1~3層のⅡ群B-3類資料。文様帯に組紐状の縄線や2本一組の縄線が施された一群で文様構成を持つものは少ない。文様帯は結束羽状縄文で区画されたものが多い。体部文様には、2a・1e・1fが認められる。体部2a・1eには口頭部文様帯下端の区画文としての結束羽状縄文と組み合わせられているものが多い。体部1fの文様帯区画文には結束羽状縄文との組み合わせは少ない。

Ⅱ群B-4類 第2段階(図VII-1-23・30)

H-25の資料。組紐状の縄線・2本一組の縄線が認められなくなり、1本の縄線が3~4本施されたもの・単純な山形・矢羽根状などが施されているものもある。文様区画帯として結束羽状縄文が多用され、結束第2種の羽状縄文・綾絡文も少量認められる。結束第2種の縄文は幅広い文様帯のものに多く用いられる傾向が認められる。口頭部文様帯は、1eはやや幅広く文様構成をもつものもある。2aは幅の狭い文様帯に縄線文のみが加えられているものが多い。体部2aが多く認められ、体部1eが減少し、体部1fが激減しほとんど認められなくなる。体部が2aには結束羽状縄文と組み合わせられて施文されているものが多い。

Ⅱ群B-4類 第3段階(図VII-1-23・30)

P-37・38覆土出土の資料(32)・H-25の覆土中(3)の資料・H-30の覆土2・3層出土の資料。口頭部文様帯下端は刺突の加えられた貼付帯と結束羽状縄文・結束第2種の羽状縄文・綾絡文で区画される。結束羽状縄文・結束第2種の羽状縄文が多用される。狭い文様帯には縄線や単軸絡条体の圧痕文が数本施されているもの、1本の縄線で矢羽状・鋸歯状・山形・菱目状の縄線文が施されている

ものなどがある。体部は体部2aがほとんどで、少量の体部1eが混じる。

口頭部文様帯下端の貼付帯には、H-30の16・18のように口頭部が外反し、口頭部文様帯下端を強調し、Ⅱ群B-5類の特徴的器形である「肩をもつ器形」への移行を窺わせるような中間的なもの(H-30-16・17)も認められ、後続する土器に大きな影響を与えたものと考えられる。

Ⅱ群B-5類について (H-16・29)

Ⅱ群B-5類は、H-13・16・28・29・P-60からまとまって出土している。しかしこれらはいずれもⅡ群B-5類の新しい段階のものである。Ⅱ群B-4類から後続する資料は盛土遺構から多量に出土している。ここではH-16・29出土のⅡ群B-5類の変遷について述べ、その後、盛土遺構・包含層出土の資料も含めⅡ群B-5類の変遷について記載する。

H-16 (図Ⅶ-1-2・17)

復原土器19個体が得られた。床面から覆土1層まで、Ⅱ群B-5類が主体で、覆土1層ではⅢ群A類が混在する。覆土5・4から口頭部文様帯下端に肩状の器形をもつⅡ群B-5類(39~44)が出土。上層の覆土3・2層からは、片流れ気味の口縁部が大きく開く器形のもの(46)、肩状の器形をもつが口頭部文様帯が多段化し、「複合的な文様帯をもつもの」(47・48)が出土。覆土1層からは、外反し、口縁部に肥厚帯がめぐるものなど(51~56)が出土した。報告でも指摘しているが、覆土1層から出土した51~56の肥厚帯直下にはループ文・ナデ調整・斜行縄文・縄線文などが加えられ、覆土2層から出土した「複合的な文様帯をもつもの」との関連が想定され、その省略形と考えられる。この様に各層毎に違いが認められ、Ⅱ群B-5類は大きく「口頭部文様帯下端に肩状の器形をもつもの」→口頭部文様帯が多段化し「複合的な文様帯をもつもの」→「複合的な文様帯をもつもの」の省略形の「口縁部肥厚帯をもつもの」→Ⅲ群A類土器への変遷を窺がわせている。なお、46については混入と考えている。

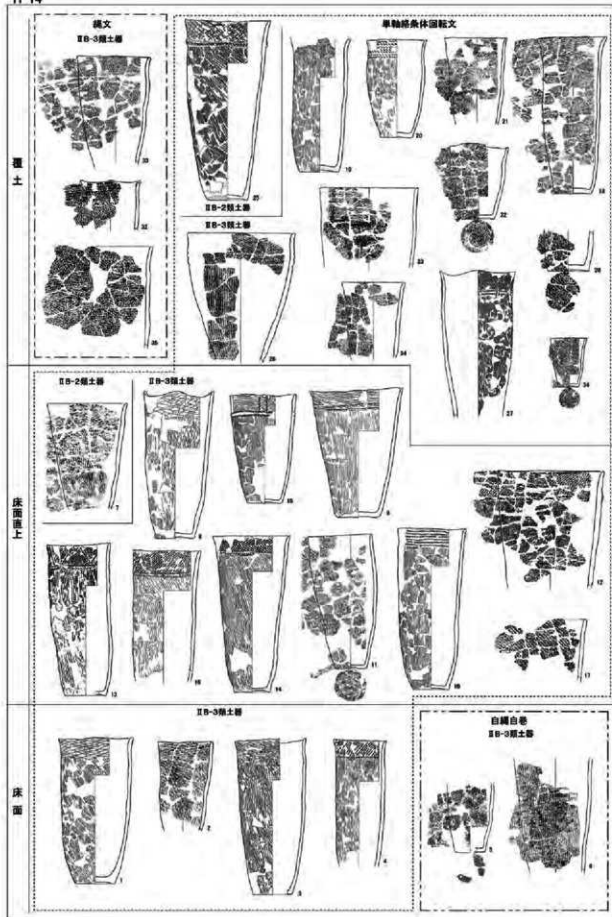
H-28 (図Ⅶ-1-8・18)

床面からⅡ群B-4類、HPからはⅡ群B-3類・Ⅱ群B-4類・Ⅱ群B-5類が出土した。Ⅱ群B-3類は破片資料。Ⅱ群B-4類はHP-16・覆土から口縁部を欠くが、口頭部文様帯下端が肩状で、体部に2a・1eが施された資料4個体(2~5)が得られた。Ⅱ群B-5類は、HP-4から2bが施された口縁部破片が出土。覆土から7個体(PO-1~7)のⅡ群B-5類が出土し、6個体が復原された。出土資料は大きく、肩をもつ器形のもの(8・12・13)、片流れの波状口縁で、口頭部が肥厚・外反し、口頭部文様帯に1~2本一組の縄線が多層されたもの(10・11)で、肥厚帯直下に、10はナデ調整で無文帯を、11は斜行縄文が加えられている。H-16に見られた「複合的な文様帯をもつもの」と関連が想定できそうなもので、肥厚帯直下に強くびれをもち、文様帯を形成しているもの(15・18~20)等に分けられる。出土層位やH-16の出土状況から古く位置付けられそうな8・12・13を除き、これらはⅡ群B-5類の新しい段階の一群をなすものと思われる。また、15・21の橋状把手は文様帯下位に施されている。この手法はP-60の深鉢・浅鉢、1aの103の浅鉢などにも認められる。縦位の橋状把手はP-43の1、包含層1aの95・106・107・120にも認められているがこれらは文様帯間に施され、施文部位に違いが認められ、前者は古く、後者は新しく位置付けられるものと考えられる。

この出土状況から、Ⅱ群B-4類の単軸絡条体の回転文・自縄自巻の縄文の縄文が施されもの→Ⅱ群B-5類の「口頭部文様帯下端が肩状」の器形のもの→「複合的な文様帯をもつもの」と関連が想定できそうなものへの変遷が想定される。

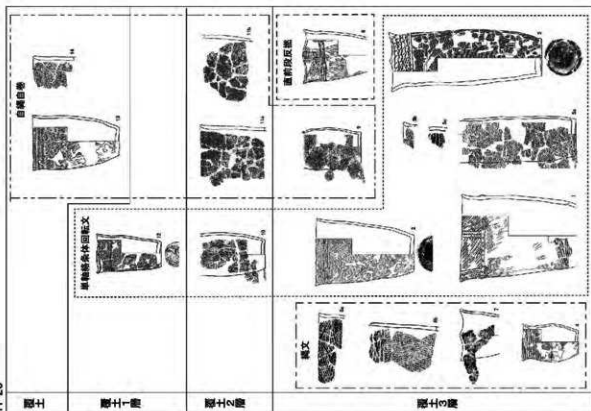
H-29 (図Ⅶ-1-8)

H-14

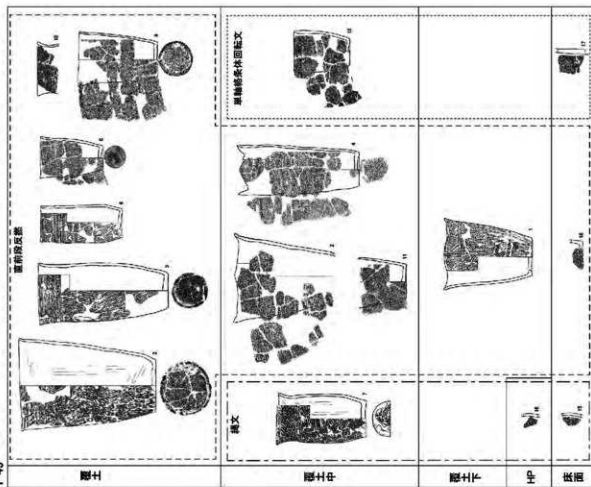


圖VII-1-1 H-14出土土器集成圖

H-20



H-49



図Ⅳ-1-3 H-20・49出土器集成図

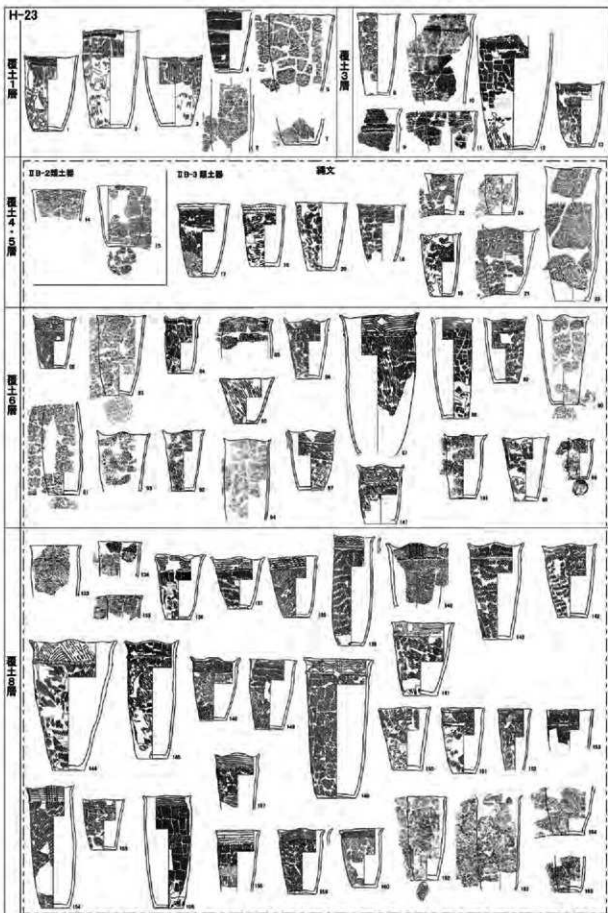
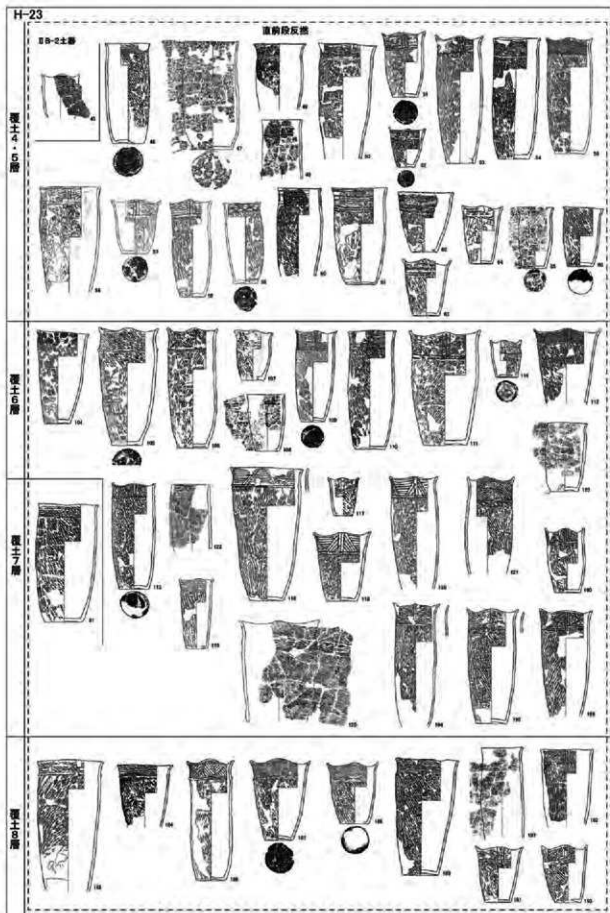
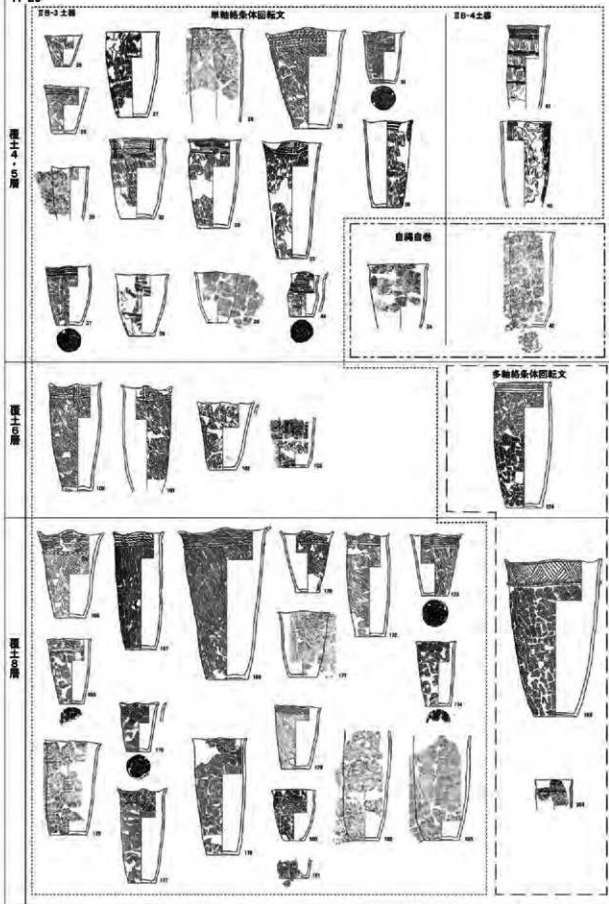


图 VII-1-4 H-23 出土土器集成图 (1)



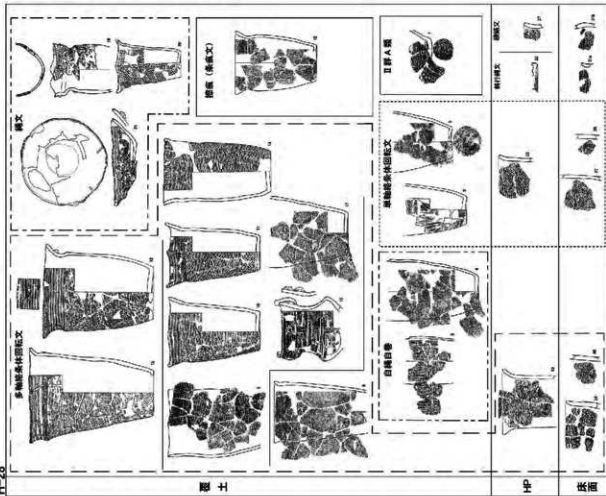
图VII-1-5 H-23出土土器集成图(2)

H-23

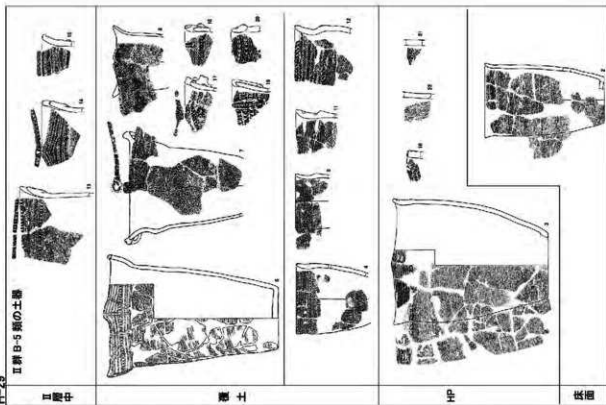


图VII-1-6 H-23出土土器集成图(3)

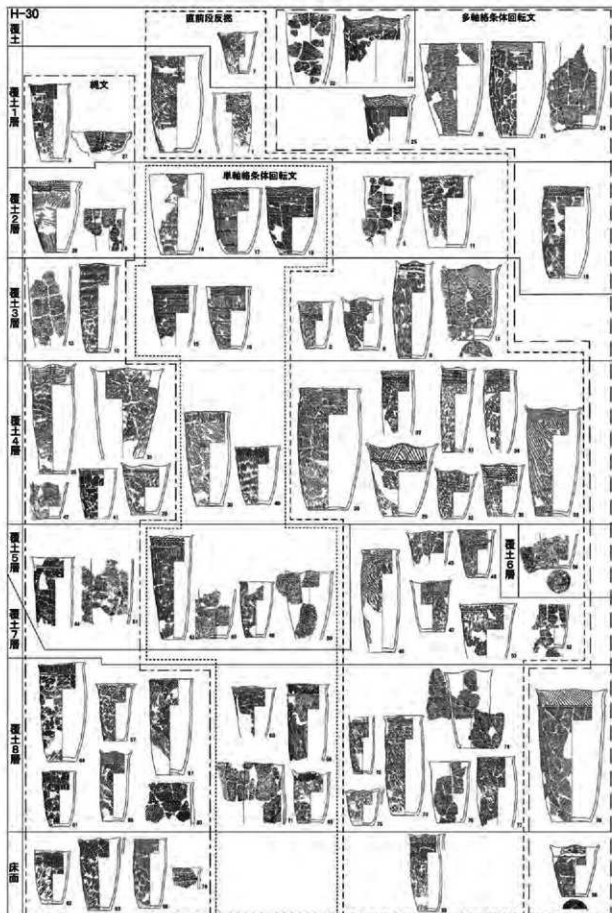
H-28



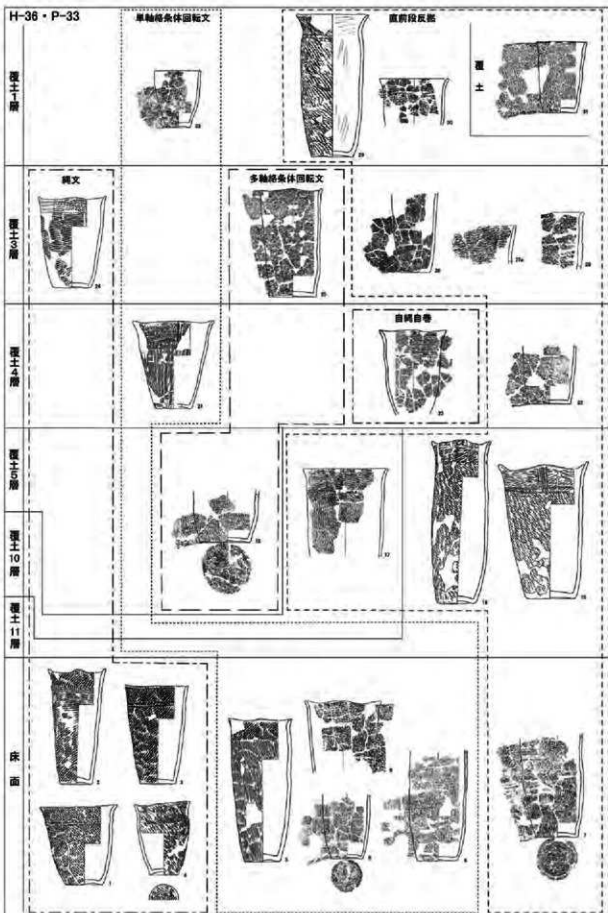
H-29



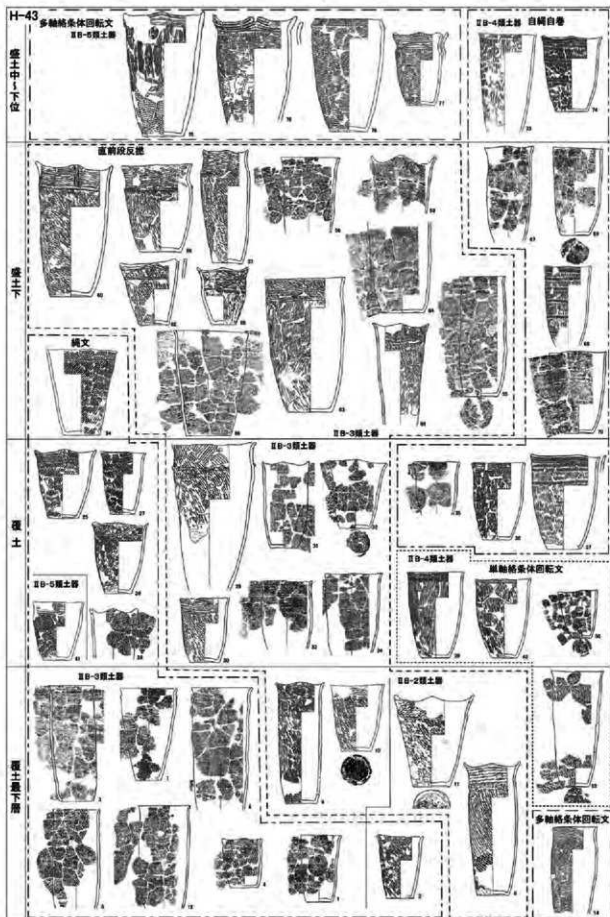
図Ⅳ-1-8 H-28・29出土土器集成図



圖VII-1-9 H-30出土土器集成圖



圖VII-1-10 H-36·P-33出土土器集成圖



圖Ⅶ-1-11 H-43出土土器集成圖

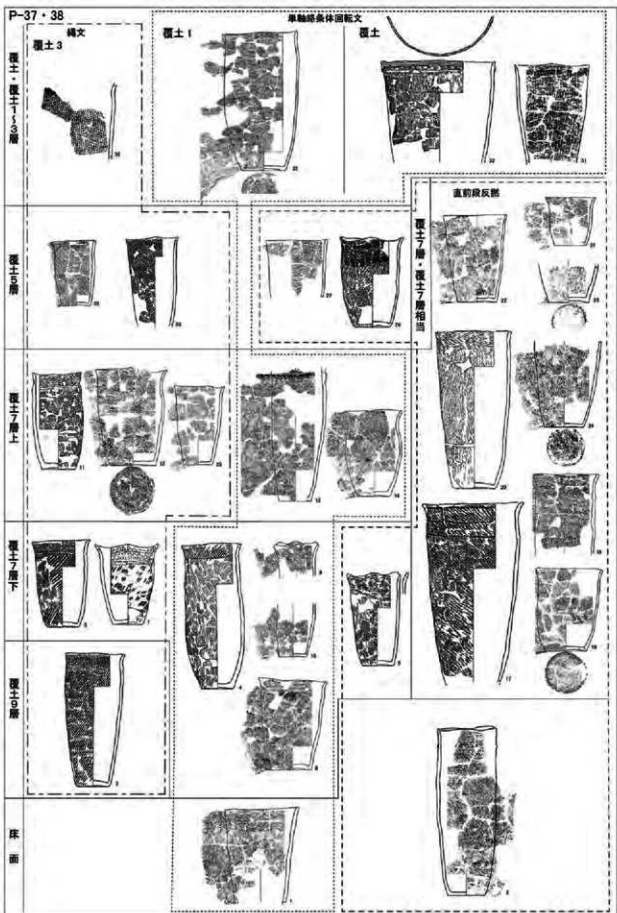
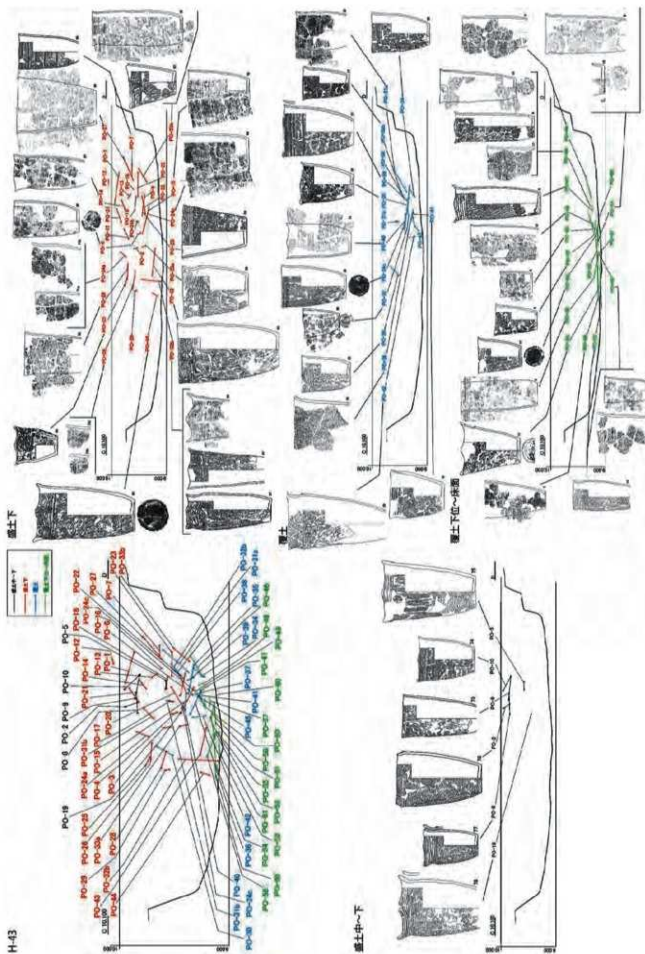


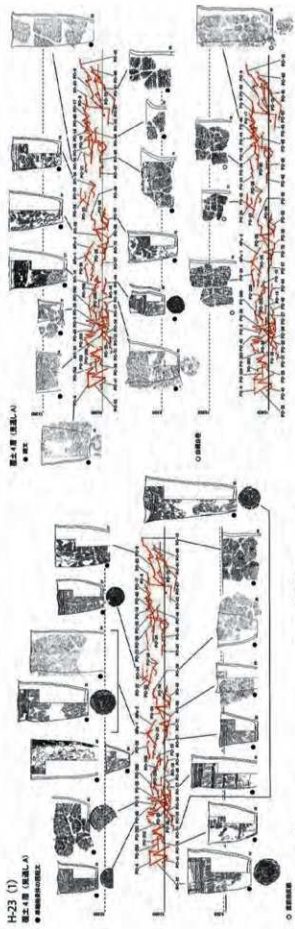
圖 VII-1-12 P-37·38 出土土器集成圖



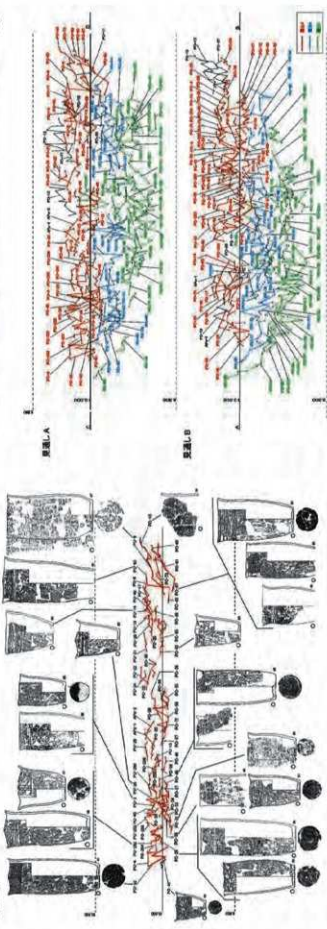
図Ⅶ-1-13 H-43 PO出土状況

H-23 (1)

墓主头像 (墓主头像)

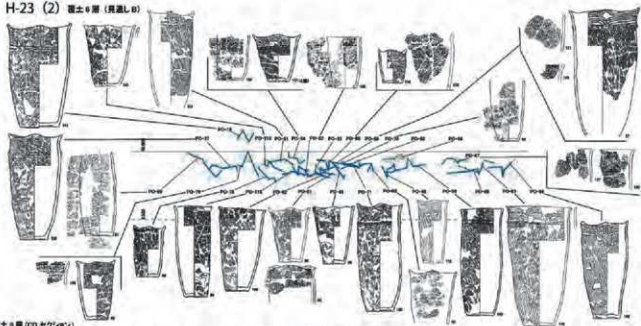


○ 墓主头像



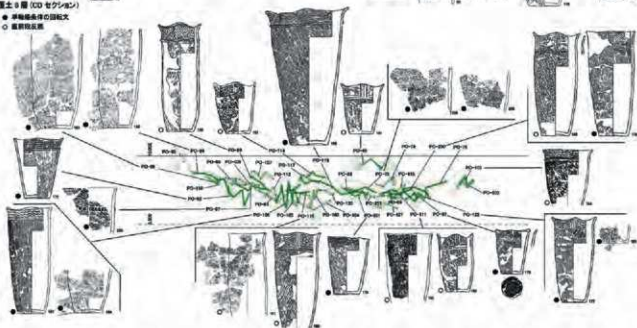
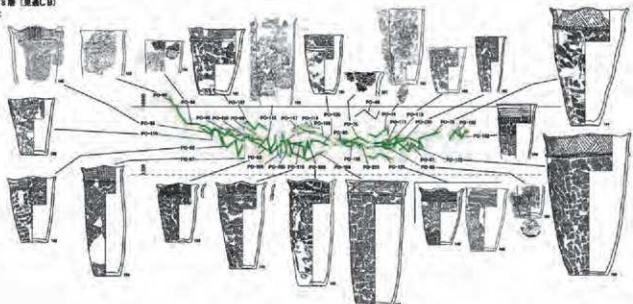
圖VI-1-14 H-23 PO出土狀況 (1)

H-23 (2) 瓦土6層 (見直し①)



瓦土6層 (CD セグメント)

- 多角形床の目録文
- 瓦葺床

瓦土6層 (見直し②)
概文

図Ⅵ-1-15 H-23 PO出土状況 (2)

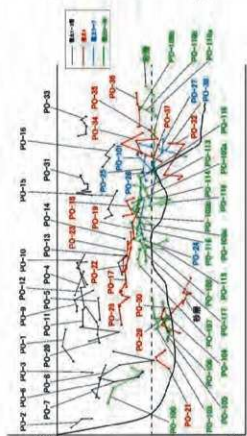


图 H-30

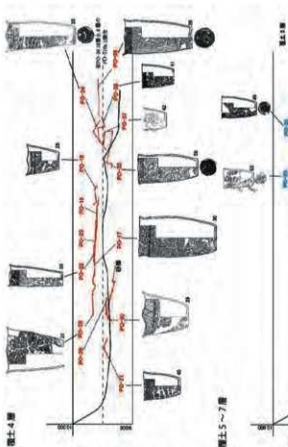


图 H-34

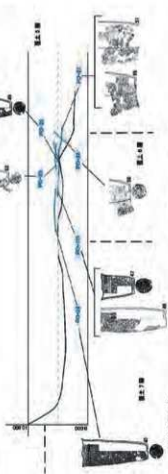


图 H-35

图 H-31~33

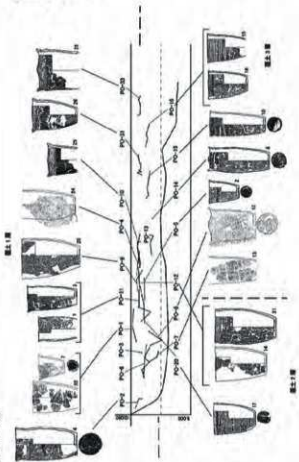


图 H-31

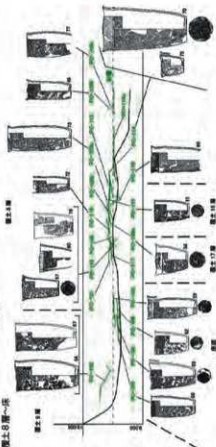
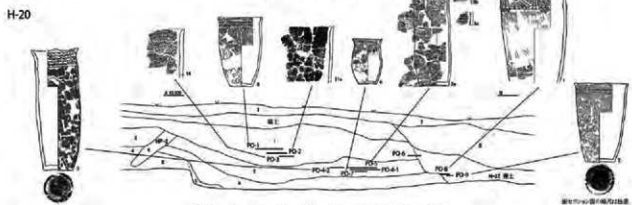
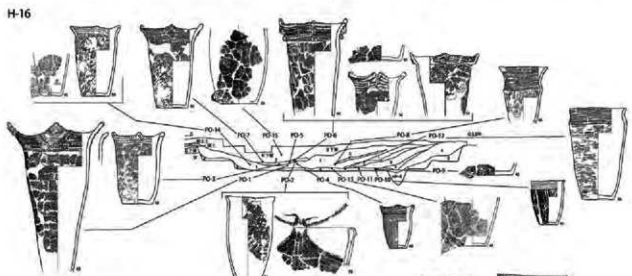
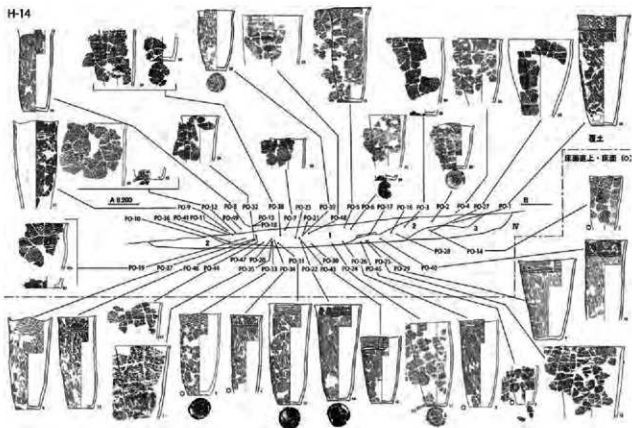


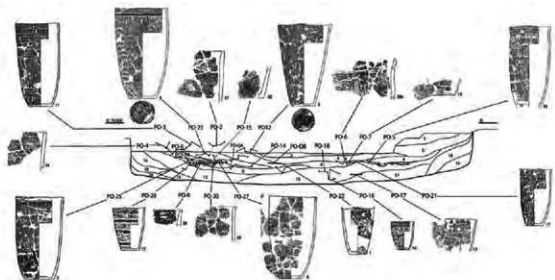
图 H-32

图 H-1~16 H-30 PO出土状况

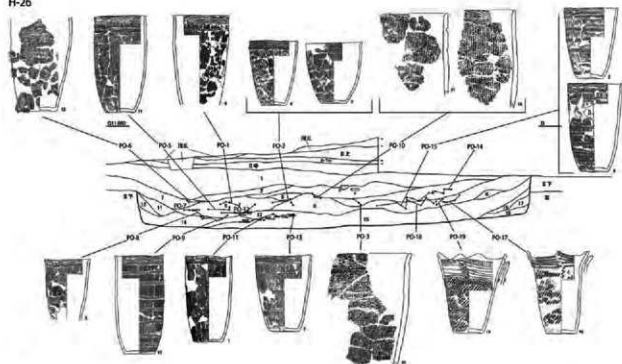


図Ⅶ-1-17 H-14・16・20 PO出土状況

H-25



H-26



H-28

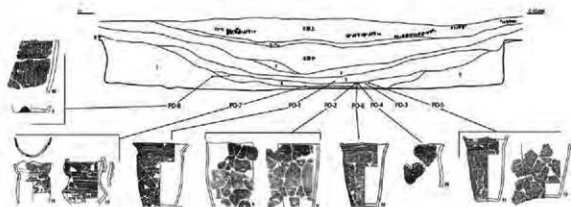
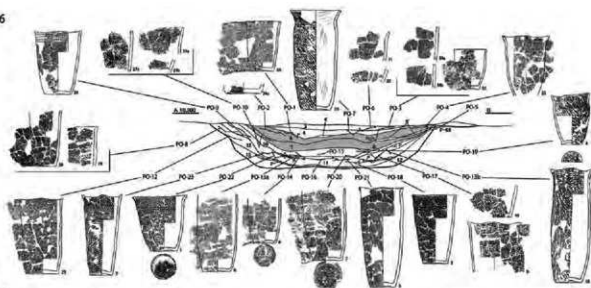
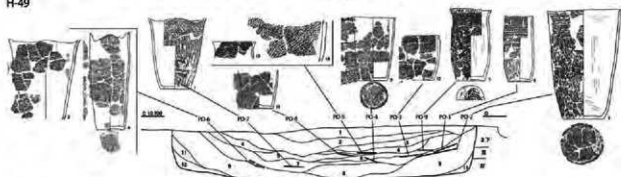


图 VII-1-18 H-25·26·28 PO出土状况

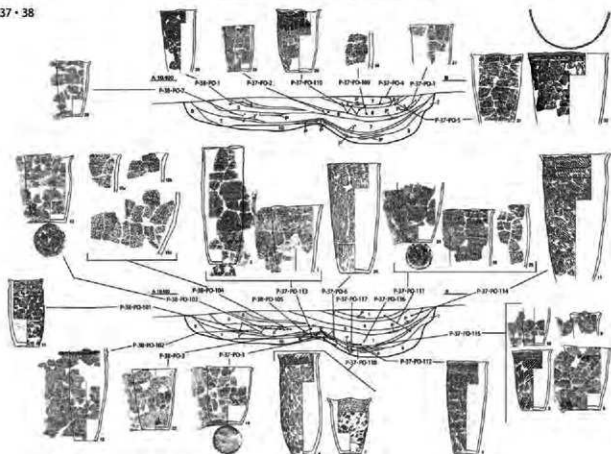
H-36



H-49



H-37・38



圖Ⅶ-1-19 H-36・49・37・38 PO出土狀況

遺構編の報告で2・5・10～12はⅡ群B-4類としたものである。盛土部分の整理によってこれらをⅡ群B-5類と訂正する。また、3・4・11について結節回転文としたが結末第2種と訂正する。

少量のⅡ群B-3・4類を除き、床面～覆土・上部の包含層Ⅱ層の出土資料は、ほとんどはⅡ群B-5類で、床面～覆土出土の「口頭部文様帯下端が肩状」の器形で、口縁部が肥厚し、やや幅広の文様帯をもつもの(2・5・10～12)、覆土から包含層Ⅱ層出土の口頭部が肥厚・外反し、波頂部下位の文様帯に貼付帯が多用されたもの(6～8・13～20)に分けられる。前者の口頭部文様帯下端の区画文は結末第2種の羽状縄文がほとんどで、結末羽状縄文は認められなかった。文様帯には横位の縄線が施されたもの(3・4・12)・菱目状の文様が施されている。波頂部下位には刺突文が施され、これらは出土層位からⅡ群B-5類の資料うち、肩状の器形で口縁部が肥厚しやや幅広の文様帯をもつもの(2・5・10～12)→覆土から包含層Ⅱ層出土の口頭部が肥厚・外反し、波頂部下位の文様帯に貼付帯が多用されたものへの変遷が窺える。

前述のH-16・26・29の出土状況からⅡ群B-5類の変遷は以下のようにまとめられる。

Ⅱ群B-5類 第1段階 (図VII-1-23・30)

H-26出土の資料(1・3～8・10・11)では口唇の圧痕文はほとんど認められない。体部2aがほとんどで、体部1eが少量混在する。口頭部区画帯は結末第2種の羽状縄文のものが多く、結末羽状縄文の減少、綾絡文が少量認められる。口頭部文様帯下端は貼付帯に重ねて区画文が施されるため不明瞭で、「肩」の形状が認められないものとわずかに「肩」状の器形を示すものがある。文様帯はⅡ群B-4類第3段階に比べやや幅広になる。文様構成は前段階の文様構成が引き継がれ、1本の縄線で矢羽状・鋸歯状・山形・菱目状の縄線文が施されているが発達である。Ⅱ群B-5類第1段階では文様帯の幅、文様構成の描き方がメルクマールになるものと考えられる。

Ⅱ群B-5類 第2段階 (図VII-1-24・31)

H-30の覆土1・2層出土資料(19～21)。口縁部は平縁で、口唇には第1段階ではほとんど認められなかった縄・縷系の圧痕文が多く認められるようになる。口縁には平縁のものが多く、25・26の様な緩やかな波状のものが少量認められる。文様帯下部には貼り付けが加えられ、肩の形状が作出されているものも認められる。器形・文様構成は前段階の文様構成が引き継がれるが、1本の縄線で矢羽状・鋸歯状・山形・菱目状の縄線文が施されている。文様構成に多段化が認められ、文様帯はさらに幅広になる。区画文は結末第2種の羽状縄文が多用され、結末羽状縄文が激減する。体部縄文は2bがほとんどになり、少量の2aが認められる。

Ⅱ群B-5類 第3段階 (図VII-1-24・31)

文様帯下端の「肩」を作出・強調や幅広の文様帯の文様構成が大きく発達し、繊細で優美な文様構成になる時期である。口頭部文様帯下端は刺突文や縄の圧痕が加えられた貼付帯と結末第2種の羽状縄文と組み合わせた区画帯が施される。幅広の文様帯には前段階に続き鋸歯状・山形・菱目状の縄線文の文様が施されているが、その施文方法は1本の縄線や2～3本一組の縄線で構成されるものが多く認められ、文様間の空隙を埋める為に短縄線が多用され、文様構成をさらに複雑なものにしている。第2段階の25・26の波頂部下位の文様構成を引き上げたような山形・鋸歯状の文様構成が多い。そして、その頂部の意識から口縁部が平縁から波状口縁に移行する兆しが認められ、波頂部から垂下する刺突列も認められるようになる。体部は多軸絡条体の回転文(2b)のものがほとんどで、少量の2a・1eが混在する。

Ⅱ群B-5類 第4段階 (図VII-1-24・31)

H-29のHP・覆土出土の資料。口頭部文様帯の文様構成に省略・簡略化が進む段階である。文様

帯下端は結束第2種で区画されるものがほとんどである。また、貼付によって肩が強調され、肩部分に縄の圧痕文や刺突文が加えられるものもある。口頭部文様帯には1本の縄線や2～3本一組の縄線で構成される菱目状の文様構成が多用される。波頂部から垂下する刺突列が横位の刺突に変化し、大きくなり貫通するものも認められるようになる。この段階では文様帯単位は4単位で、菱目状の頂点を波頂部として緩やかな波状口縁をなすものが多い。文様単位は、直線的な縄線で描かれ、文様単位の接点は交差して「X」状に描かれ、明確な単位が認められる。体部は2bのものがほとんどで、少量の2aが混在する。菱目内部には入れ子の菱目を加えられたもの、上下に2分する横位の縄線が加えられたものなどがあり、後者は後続する土器群にも残存し、新たな文様構成・器形の初源となる。

Ⅱ群B-5類 第5段階 (図VII-1-24・31)

遺構から層位的な出土は確認されていない。口頭部文様帯に、縄線の「折り曲げ」部分の横「U」字状の縄端を組み合わせて菱目状・山形の文様構成が施された段階である。波状口縁のものが多く、波頂部には圧痕が加えられている。口頭部文様帯下端は、縄の圧痕・刺突文が加えられた貼付帯が多用される。区画帯としての結束羽状縄文はほとんど認められなくなる。結束第2種の羽状縄文・綾絡文もわずかに認められる程度である。口頭部は菱目状・山形の文様構成を主とし、波頂部下位に縄線の「折り曲げ」部分の横「U」字状の縄端を組み合わせて菱目状・山形の文様構成を作り出している。縄線は「折り曲げ」によって作出された2本一組の縄線で、波頂部間及び波頂部下位の文様帯下端間を弧状・鋸歯状に縄線で結び、上下にモール状の文様構成を作出したもの、文様帯中央に文様帯を上下に区画する縄線文が加えられ、空隙にも横位・斜位の縄線が加えられている。口頭部文様帯の文様構成は、菱目状と山形のものがあり、第4段階にみられた菱目状から山形に変化したものと考えられる。波頂部には圧痕が加えられている。これは後述する2頭一組の波頂部や片流れの口縁部波頂部の初源のように考えられる。このほかに2本一組の縄線・絡条体圧痕文で菱目状の文様構成を作出しているもの、口頭部に強いくびれを持ち外反しているものも本類に含めた。文様構成には横環するもの、モール状、鋸歯状なども含めている。

Ⅱ群B-5類 第6段階 (図VII-1-24・31)

遺構から層位的な出土は確認されていない。口頭部文様帯の文様構成は第5段階に類似する。縄線の「折り曲げ」部分の横「U」字状の縄端を組み合わせて菱目状・山形の文様構成が施されている。しかし、文様帯の幅が狭くなり、文様構成が直線的に変化した段階である。波状口縁が多く、片流れの波状口縁が多く認められる。文様帯はやや肥厚気味となる。文様帯下端には押し・刺突文・縄の圧痕が加えられた貼付帯や押し・刺突文・縄の圧痕などが施されている。貼付帯のみのものや綾絡文が施されたものが認められるが「肩をもつ器形」から「なで肩」への変化が認められる。Ⅱ群B-5類第1段階から続いた「肩」をもつ器形から新しい器形への移行期の土器群として位置付けられる。文様帯には横環する2本一組の縄線や新たに小波状の縄線・刺突列が加えられ、後続する「複合的な文様帯をもつもの」との関連が認められる。

Ⅱ群B-5類 第7段階 (図VII-1-25・32)

H-16覆土2層出土の資料。口頭部文様帯に「複合的な文様帯をもつもの」の段階である。波状口縁のものが多く認められる。口縁部は肥厚帯がめぐるものと口縁部内面から外側に押し出し、外見上肥厚帯がめぐるような効果を出したものなどがある。文様帯下端には押し・刺突文・縄の圧痕が加えられ、貼付帯や押し・刺突文・縄の圧痕には圧痕が加えられ、文様帯下端の「肩」はわずかに残るものもある。文様帯は、肥厚帯と肥厚帯直下、幅広い肥厚帯と下位のくびれ部の2つの文様帯からなるものなどがある。体部は2bがほとんどで少量の1a・2aが混在する。単軸絡条体第4類が(2a(4))

が体部に施されたものも認められる。H-16では47・48は、第10段階の51・53の下層から出土、第5段階の39～41の上層から出土した。

Ⅱ群B-5類 第8段階 (図VII-1-25・32)

口頭部文様帯に「複合的な文様帯をもつもの」の新段階と考えられる。口縁部にめぐる肥厚帯と下位のくびれ部の2つの文様帯からなり、比較的幅広の口頭部文様帯をもつものである。口縁部には2個一組の波頂部のもの、貼り付けによって作出された突起をもつもの等がある。文様帯中頃まで垂下する貼付帯やボタン状の貼り付けが多く認められる。文様帯には横環する縄線文が施されている。94には波頂部のわきに短い貼付帯が加えられている。体部は1aが増殖する。2bも少量認められる。そして、単軸絡条体第4類が(2a(4))が体部に施されたものも認められる。なお、第7段階と第8段階については同一段階の可能性はある。

Ⅱ群B-5類 第9段階 (図VII-1-25・32)

口頭部文様帯の幅が狭くなり、文様も直線的に変化した段階である。波状口縁のもの、口縁部に突起が加えられたものも多く認められる。口縁部は、口縁部内面から外側に押し出し、外見上肥厚帯がめぐるような効果を出しているものが多い。文様帯は、前述の肥厚帯と肥厚帯直下に認められる。肥厚帯上には2本一組の縄線文と波頂部から垂下する棒状・「逆T」字状・ボタン状・斜位の貼付文等の多様な貼り付けが多用される。肥厚帯下部には「複合的な文様帯をもつもの」の影響を窺がわせる横位の縄線や押引文やループ文・斜行縄線などが加えられている。体部は2b・1aが多く、少量の2aが混じる。

文様構成は第7・8段階に類似するが、口縁部の張り出しの作出方法が異なること、貼付帯が多用されること等新しい要素が窺がえたことから一群として扱い、「複合的な文様帯をもつもの」の最も新しい段階に位置付けた。

Ⅱ群B-5類 第10段階 (図VII-1-25・33)

遺構から層位的な出土は確認されていない。口頭部文様帯の幅が狭くなり、文様も直線的に変化した段階である。波状口縁のものも多く認められる。口縁部は肥厚帯がめぐるものと口縁部内面から外側に押し出し、外見上肥厚帯がめぐるような効果を出したものなどがある。文様帯は、複数の文様帯からなる。上部文様帯には2本一組の縄線文・刺突文などが、下部には横位の縄線加えられている。「複合的な文様帯をもつもの」2bの90・101の様に平縁のものもある。器形は、体部上半でくびれをもつが、全体的に開き気味である。体部は2bが多く、2aが少量混じる。1aが極めて少ない。

Ⅱ群B-5類 第11段階 (図VII-1-25・33)

H-28・P-60からまとまって出土した橋状把手が文様帯の下位に施文されるものを含む一群である。深鉢は体部上半に膨らみをもつ器形である(H-28-20・P-60-2・1a108)。口縁は波状口縁で、片流れ、2頭一組のものが認められる。文様帯には2本一組の縄線・縄線・単軸絡条体の圧痕文などが加えられている。体部は1aが多い。少量の結束斜行縄文も認められた。体部には縦位の綾絡文が施されているものが多い。体部は2bも認められるが、1aが多い。先述した第10段階では1aが少ない。10・11段階が連続するものと考えた場合、極めて不自然である。10・11は本来同一土器群の可能性はある。12段階にも橋状把手は認められるが、文様帯を飛び越えて施され、違いが認められる。

Ⅱ群B-5類 第12段階 (図VII-1-25・33)

波状口縁のものが多い。幅広の口頭部文様帯に2本一組の縄線文・組紐状の縄線・半截竹管状工具の刺突文等が加えられている。波頂部から垂下する1～2本の貼付帯や「V」「X」「Y」字状の貼付帯・文様帯を飛び越えて施される橋状把手が施される。体部は1aのものが多い。体部には縦位に綾

絡文や単軸絡条体の圧痕文が施されたものがある。

まとめ

遺構の出土状況や盛土遺構・包含層出土の復原土器の細分からⅡ群B-1類を1段階、Ⅱ群B-2類を3段階、Ⅱ群B-3類を9段階、Ⅱ群B-4類を3段階、Ⅱ群B-5類を12段階に細分し、Ⅱ群B-1類～Ⅱ群B-5類を28段階に細分し、Ⅲ群A類までの変遷を述べた。その変遷は円筒土器下層b式の新しい段階から円筒土器上層a式の相当するものと考えられる。

Ⅱ群B-1類については先述したように円筒土器下層a式と異なる特徴が認められることから、本遺跡出土のⅡ群B-1類についてはⅡ群B-3類に含まれるものと考えられる。

今回出土したⅡ群B-2類は、木古内町釜谷遺跡・北斗市館野遺跡の出土資料にみられる太い貼付帯が施されたものが欠落している。

Ⅱ群B-2類第1段階・Ⅱ群B-2類第2段階からⅡ群B-3類第4段階の変遷は、先述したように円筒土器下層b式の新しい段階から円筒土器下層c式への変遷を示し、この変遷は貼付帯から縄線文への変化で迫ることができた。このような「貼り付け」→「沈線・縄線」への変化は、他の時期においてもよく認められ、省略化や「手抜き」と考えられ、土器の変化を考える上で重要である。そして、そのような変化が新しい土器群を創り上げてゆく。Ⅱ群B-2類第5段階に貼付帯が施された土器は激減する。そしてこれを補完する縄線文を区画文とするⅡ群B-3類第4段階に移行することとなる。

Ⅱ群B-3類第6段階からⅡ群B-4類第2段階への変遷は、円筒土器下層c式の新しい段階から円筒土器下層d1式への変遷を示している。この時期の変遷を考える上で、結束羽状縄文・組紐状の縄線文・2本一組の縄線文の出現と変化は、この時期の土器の変遷を知る重要な手掛かりとなる。結束羽状縄文は、Ⅱ群B-3類第2段階の頃、菱目状の口頸部文様を作出するために主に用いられていた。その後、Ⅱ群B-3類の第5・6段階に文様帯下端に加えられる区画文や体部縄文として再度出現する。Ⅱ群B-3類の第7・8段階には口頸部文様要素・区画文・体部への付加文として多用される。Ⅱ群B-3類第9段階の頃から区画文・体部への付加文としての性格が強くなり、この傾向はⅡ群B-4類第3段階まで続き、その後、結束第2種の縄文・綾絡文などに置き換わる。

組紐状の縄線文・2本一組の縄線文の出現は、Ⅱ群B-3類第2段階(If78)に認められるが、その盛行期はⅡ群B-3類の第7～9段階である。この時期の縄線は組紐状の縄線文・2本一組の縄線文で、特に組紐状の縄線文が多い。その傾向はⅡ群B-4類第1段階にも多く認められる。Ⅱ群B-4類第2段階から1本～2本一組の縄線が主体となる。従って、組紐状の縄線は、Ⅱ群B-3類にあっては新しい要素、Ⅱ群B-4類では古い要素と考えることができる。この変遷はH-20やH-23において確認されている。

Ⅱ群B-4類の第2段階～Ⅱ群B-5類の第2段階への変遷は、円筒土器下層d1式から円筒土器下層d2式への変遷を示している。円筒土器下層d2式の特徴である文様帯下端部の肩状の形状はⅡ群B-4類の第3段階の文様帯下端の貼付帯をもつ一群の土器を経て、出現する。この時期を境に区画帯は、結束第2種が結束羽状縄文にかわり多用される様子が窺える。体部は単軸絡条体の回転文(1a)・自縄自巻の縄文(1e)から多軸絡条体の回転文(2b)へと変化し、自縄自巻の縄文(1e)を体部文様とするものは激減し、直前段反燃りの縄文(1f)は見られなくなる。口頸部文様帯下端の貼付帯は、文様帯への意識の高まりを示すもので、幅の狭い文様帯は幅広く、文様構成が単純な縄線・菱目・山形などから複雑な菱目・山形・「く」字状などが認められるようになる。この要因にはⅡ群B-3類の第6段階～Ⅱ群B-4類の第1段階縄線に多用される組紐状の縄線文からⅡ群B-4類第

2段階の頃の1本の縄線への変化に因つてもたらされたものである。Ⅱ群B-3類の第6・7段階は、文様帯幅が広い時期で、口頭部文様帯には組紐状の縄線を用いても十分に文様構成を表現できた。しかし、その後、文様帯は狹隘化が進み、組紐状の縄線では表現できなくなり文様構成が単純化したものと考えられる。そのような状況を打開したものがⅡ群B-4類の第2段階に認められる組紐状の縄線から1本の縄線への変化と考えられる。1本の縄線によって狭い文様帯内でも多様な文様を描くことが可能となり、文様構成が複雑化する。そして、また文様帯自体を幅広にして単帯から多段へ文様の複雑化によって文様帯は幅広となり、さらに文様構成の装飾的要素が強まって縄線は強調を目的に1本から2〜3本一組へ変化する。その様子はⅡ群B-5類の第2・3段階に見られ、Ⅱ群B-5類第5段階には文様構成がさらに複雑に変化し、横「U」字状の縄端が多用された菱目・山形の文様構成を作り上げていった様子が窺える。そして、菱目・山形の文様構成は、平縁から波状口縁に変化する大きな要因となり、波状口縁が多く認められるⅡ群B-5類の第6段階が成立し、その後には波状口縁が多く認められるようになったと考えられる。そして、Ⅱ群B-5類の第7〜9段階の頃には、筒形の器形からの体部上半が開く器形に変化し、円筒土器下層式の器形からの脱却が認められる。

Ⅱ群B-5類の第8・9段階の口頭部文様帯に「複合的な文様帯をもつもの」の段階の頃、体部縄文が多軸絡条体の回転文(2b)から斜行縄文(1a)へ、口頭部文様帯への縦位・ボタン状の貼付文(貼付帯)の多用などが認められ、波頂部から垂下する文様構成など円筒土器上層式へ移行する文様要素が整い、Ⅱ群B-5類の第10〜12段階を経てⅢ群A類土器が成立したものと考えられる。

体部はⅡ群B-2類の古い段階・Ⅱ群B-3類第1段階では縄文(1a)・単軸絡条体の回転文(2a)が主体である。

直前段反捲りの縄文(1f)はⅡ群B-2類の第2段階の頃から認められ、Ⅱ群B-3類では各期を通じて最も多用される体部文様となる。そして、Ⅱ群B-3類の第9段階まで自縄自巻の縄文(1e)や単軸絡条体回転文(2a)と共に用いられているがⅡ群B-4類の第1段階には少量認められるが、Ⅱ群B-4類の第2段階以降認められなくなる。自縄自巻の縄文(1e)はⅡ群B-3類の第7段階の頃に認められるようになりⅡ群B-3類の第8段階の頃に最も多く認められるようになるが、Ⅱ群B-3類の第5段階以降僅かに認められていた単軸絡条体回転文(2a)がⅡ群B-3類の第9段階の頃に再度出現・多用され、Ⅱ群B-5類の第2段階の頃に多軸絡条体の回転文(2b)が出現するまで体部地文の主体的な位置を占めることとなる。

今回の整理において各時期に中間的な要素を持つものや過渡期的な土器が多いことから、従来の形式分類が困難であった。このため、従来の形式分類にとらわれず、大まかな細分を実施した。

その結果、円筒土器下層b式の新しい段階から円筒上層式土器までの間に明確に前後関係が分離できる3か所の転換点に位置付けられる土器群があることが分かった。

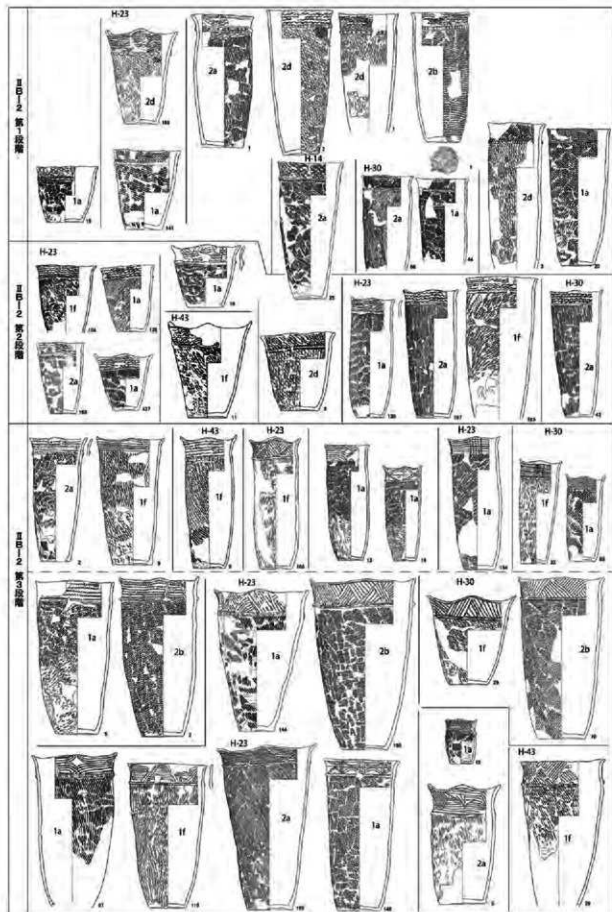
転換点1：Ⅱ群B-4類第1段階である。Ⅱ群B-2類・Ⅱ群B-3類から続く文様要素・文様構成から新しい器形・文様構成の出発点に位置付けられる。

転換点2：Ⅱ群B-4類第3段階である。この時期を境に体部地文・口唇部文様の有無・区画文などに変化が認められた。

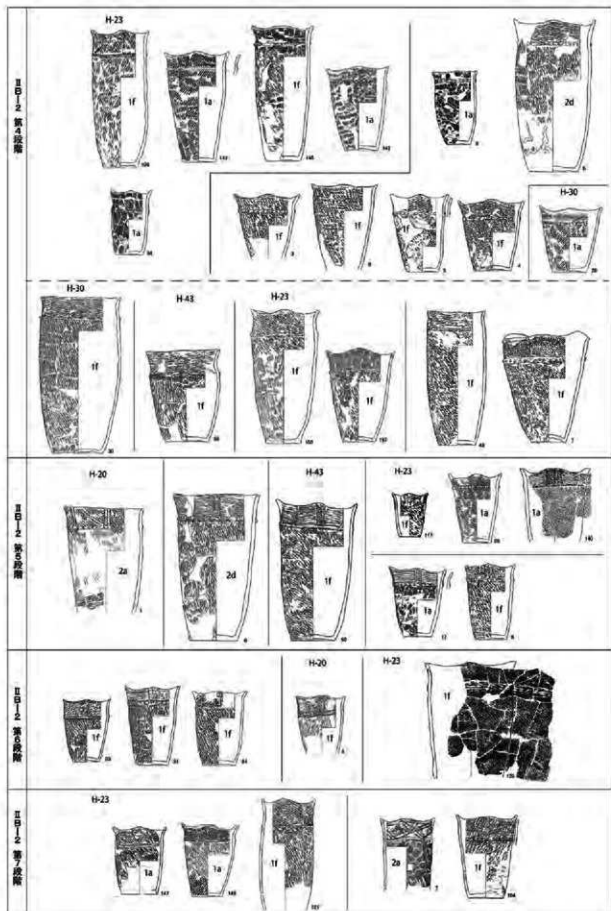
転換点3：Ⅱ群B-5類第6段階を境に器形・文様構成が円筒土器下層式から脱却しⅢ群A類に連なる新たな器形・文様構成が展開する。

報告において他遺跡との比較検討をすることが出来なかった。これらについては今後稿を改めて行う予定である。

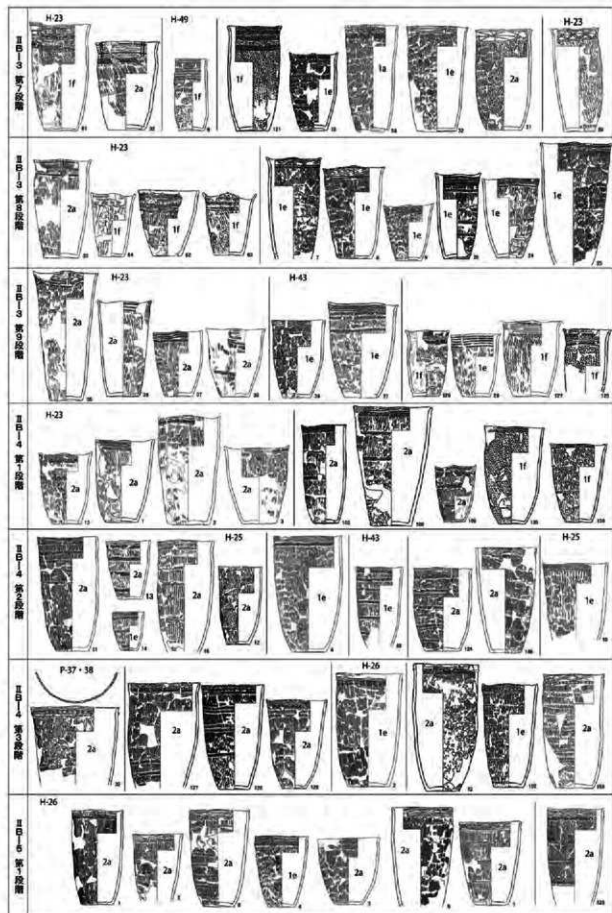
(熊谷)



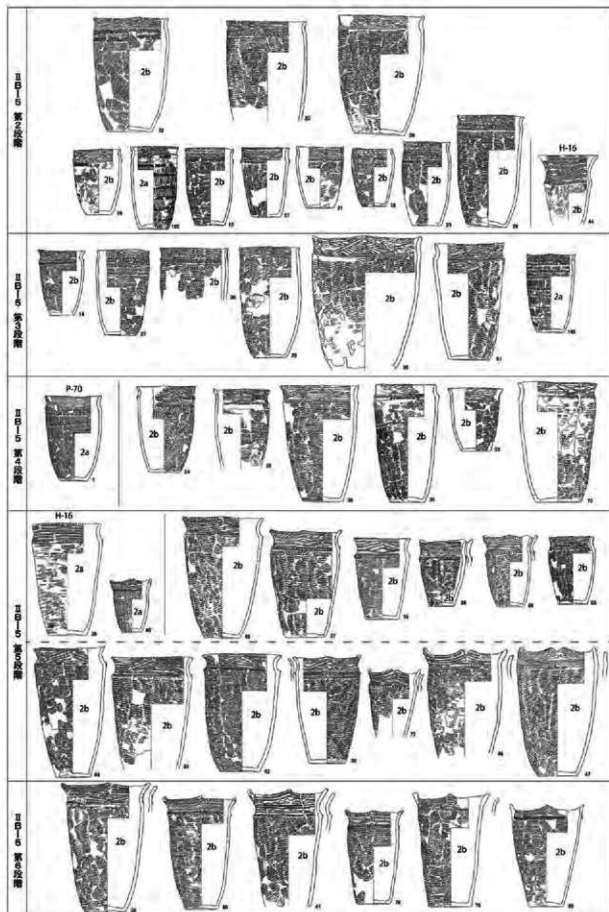
圖VII-1-20 土器變遷模式圖(1)



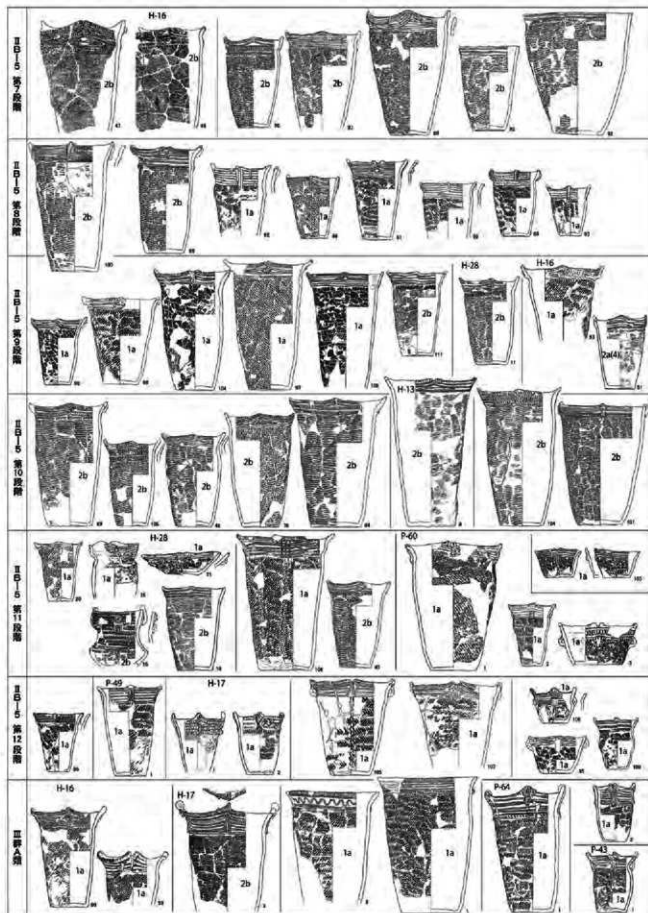
図VI-1-21 土器変遷模式図(2)



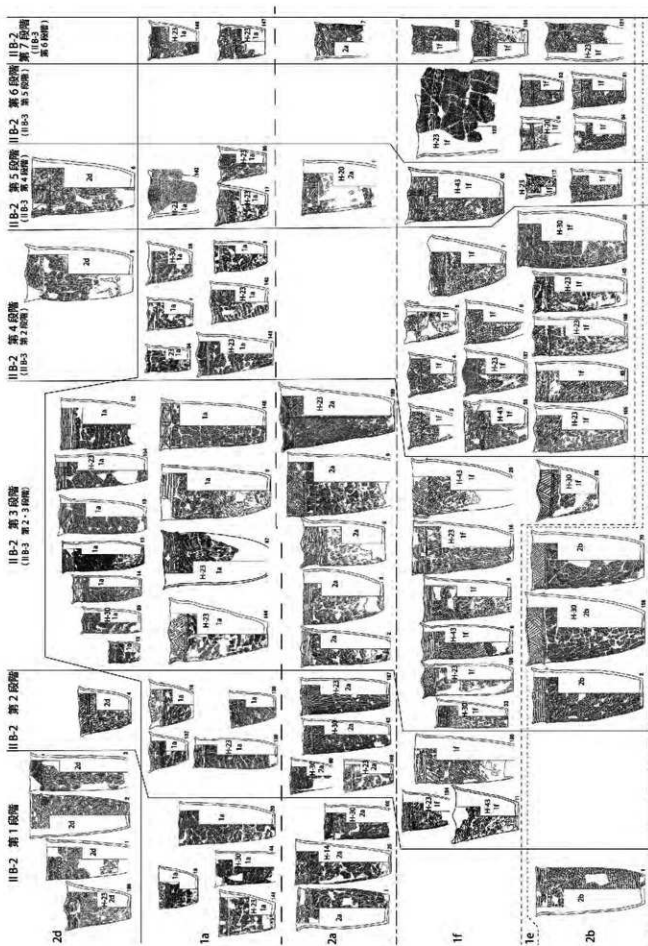
圖VII-1-23 土器變遷模式圖(4)



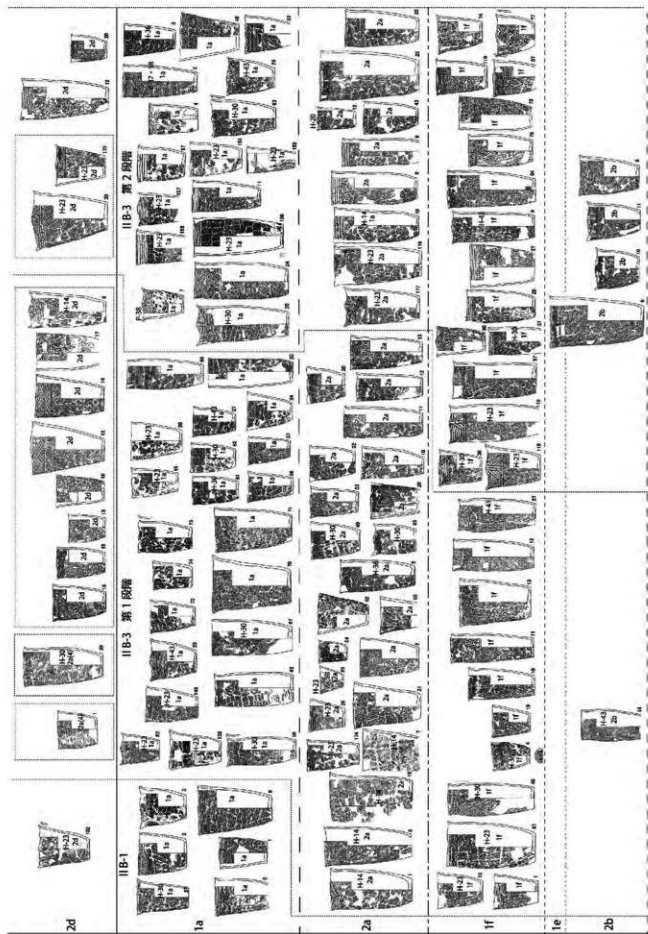
図VII-1-24 土器変遷模式図(5)



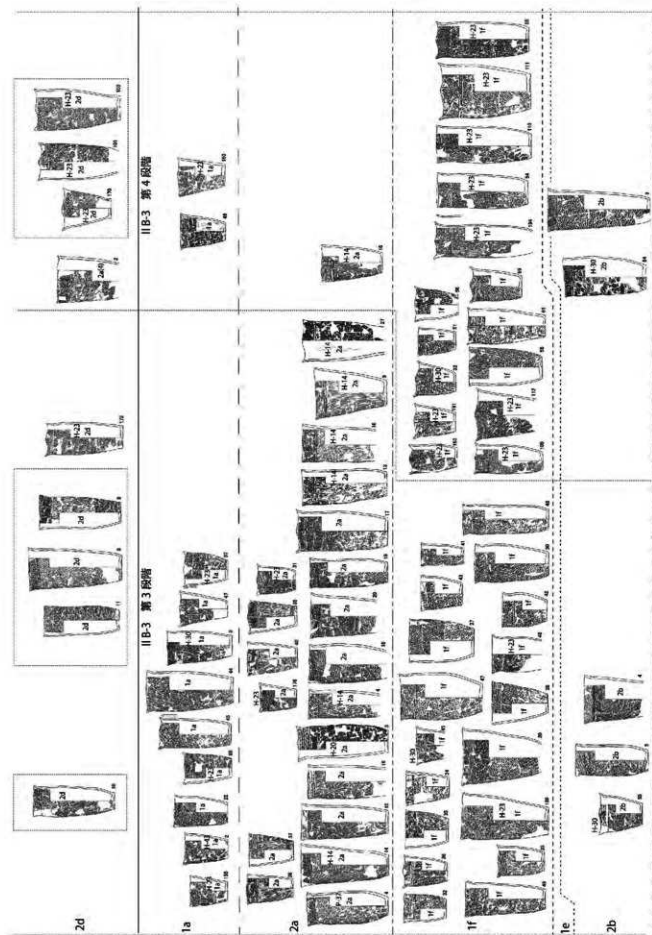
圖VI-1-25 土器變遷模式圖(6)



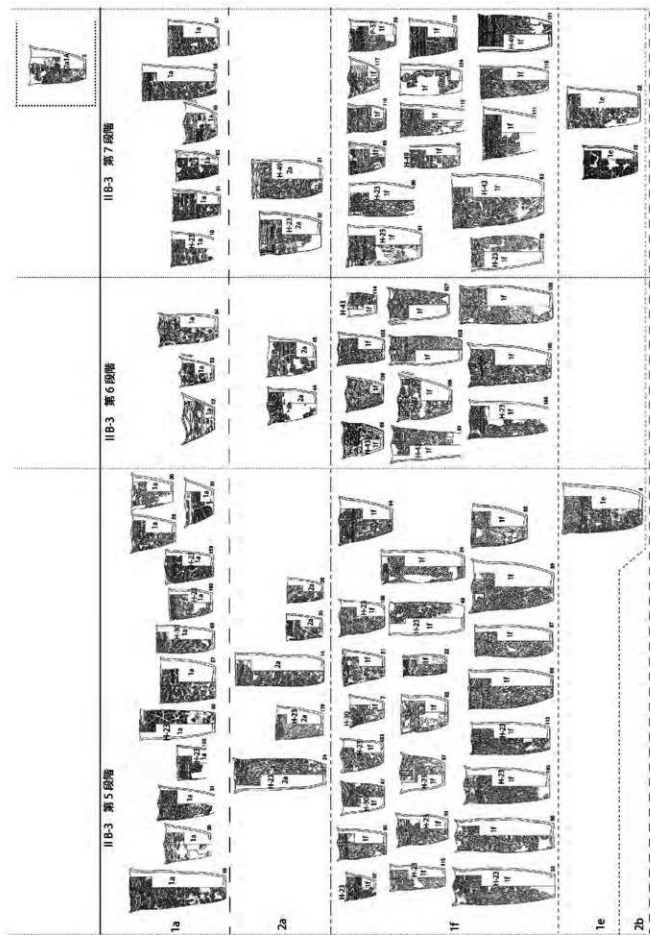
図Ⅶ-1-26 土器変遷図(1)



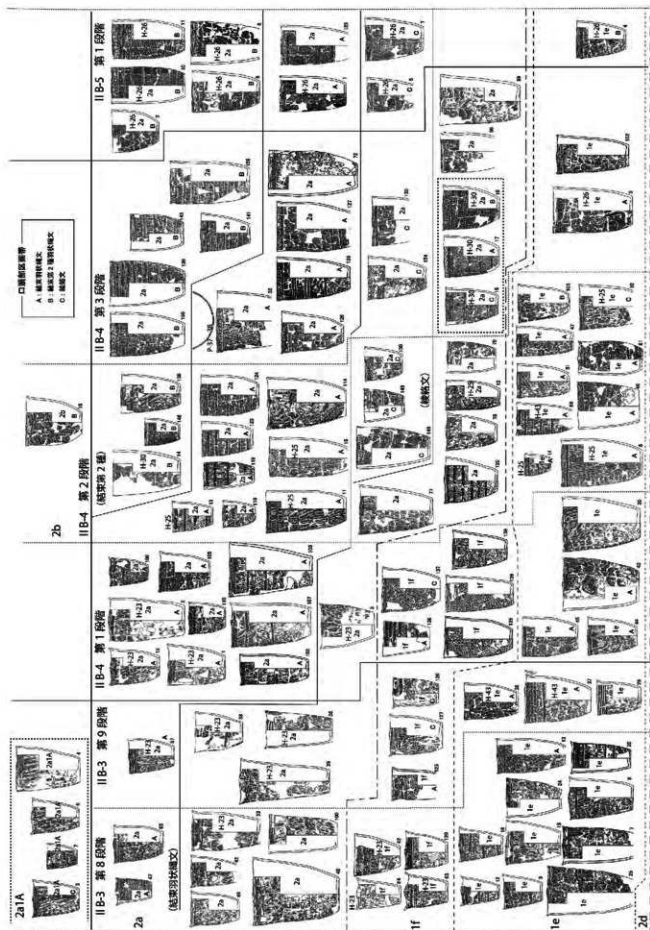
図VI-1-27 土路変遷図(2)



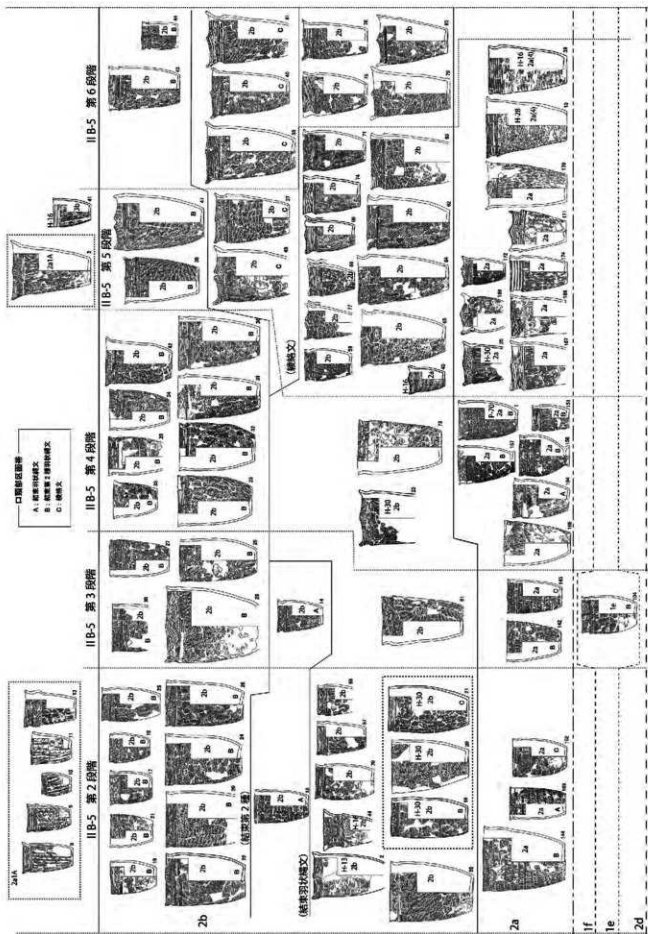
図Ⅶ-1-28 土層変遷図(3)



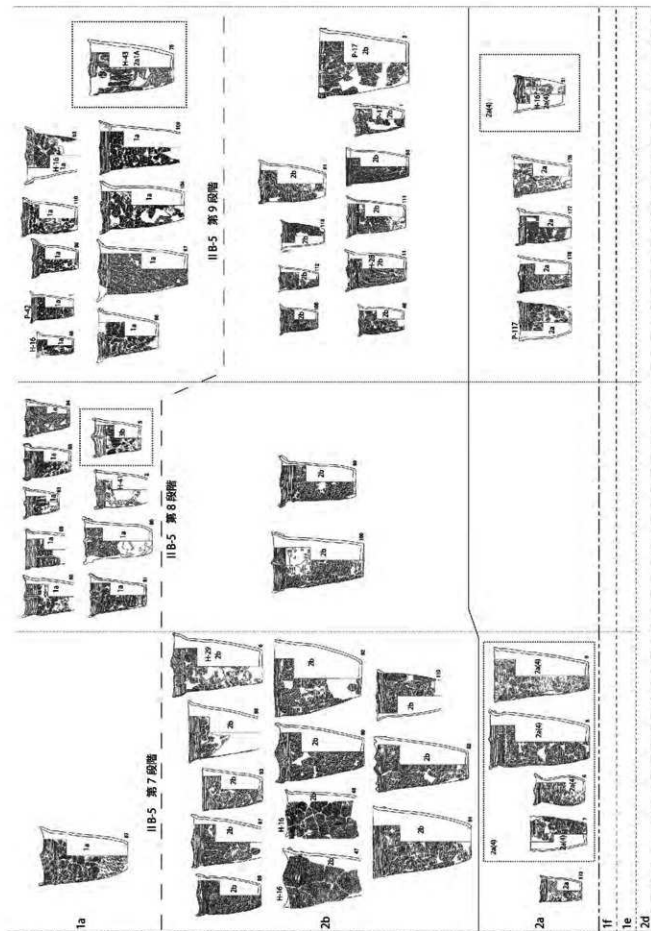
図VI-1-29 土路変遷図(4)



図VII-1-30 土器変遷図(5)

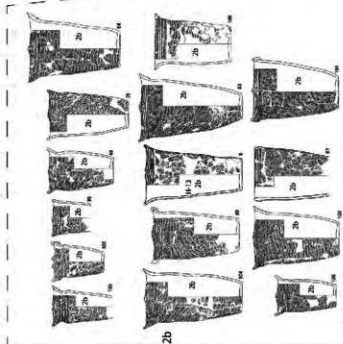


图VI-1-31 土路平面图(6)

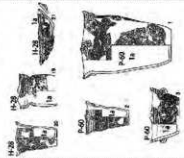


圖Ⅶ-1-92 土器変遷図(7)

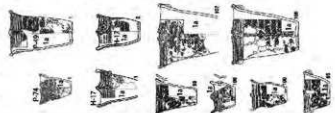
II B-5 第10段階



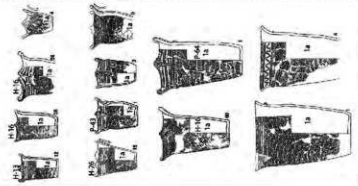
II B-5 第11段階



II B-5 第12段階



III 野A類



図VI-1-33 土路変遷図(8)

2) V群C類土器のⅡ群土器について (図Ⅶ-1-34～37)

今回の調査で、これまで不明な点が多かった変形工字文系土器群が在地系土器と共に出土した。本項では変形工字文系土器群と在地系土器群の特徴を明確にするとともに、器種組成について若干記述する。

(1) 大平遺跡の工字文系土器群・変形工字文系土器群の特徴 (図Ⅶ-1-34、図Ⅶ-1-35)

工字文・変形工字文系土器群は浅鉢7個体(8～14)、台付浅鉢は5個体(20～22・29・30)、壺は3個体(39・48・49)の器形・文様要素が分かる復原土器が得られた。復原土器・破片資料を見る限り鉢・深鉢が欠落している。文様帯には工字文・変形工字文が認められた。変形工字文には所謂「四字文」と「変形四字文」がある。工字文系土器群・変形工字文系土器群の特徴は以下の通りである。

工字文系土器群の特徴 (図Ⅶ-1-34-29)

29:(模式図3) 台付浅鉢で、口縁部に4か所に下位に弧線の沈線が加えられた2頭突起をもつ。地文施文後、多重沈線により文様帯に4単位の横位連続工字文施されている。台部分は下位に向かって開く台形である。2頭突起の下位に弧線が加えられている。2頭突起はⅠ群土器に認められた台付浅鉢のものの省略形ないし変形工字文系土器群の「V」字状突起のように思われる。

変形工字文系土器群の特徴 (図Ⅶ-1-34-8～12・20～22・30)

変形四字文は浅鉢・台付浅鉢・壺形に認められたが、台付浅鉢の台部分は確認されていない。文様帯には所謂「四字文」と「変形四字文」が認められた。「変形四字文」は三角連繫文が施されている。いずれも文様帯が単帯で、文様帯の上下を1～2本の沈線で区画されている。文様帯には極めて小さな貼瘤がみとめられるもの(11)もあるが、僅かに沈線の末端や刺突部分に粘土の盛り上がるものが多く、大きな粘土粒の貼瘤は認められない。11・20・21の単位間には斜に沈線が加えられている。平縁の除き、口縁には、小波状口縁、2個一組の山形突起、山形突起と2個一組の山形突起が交互に施文されたものなどが認められる。山形突起の波頂部は緩やかで、ほとんどの口唇には頂部を結ぶ短い沈線が加えられている。内面には1本の沈線がめぐり、2本のものも少量認められた。体部にはナデ調整・ミガキが加えられ無文地のものが多いが、器面・体部に縄文が認められるものもある。胎土は、きめが細かいもの、砂粒を含むものがあり、後者が多く認められた。

四字文系土器群 (図Ⅶ-1-34-8・12・30・47・48、図Ⅶ-1-35)

30:(図Ⅶ-1-35・模式図4) RLの縄文施文後、正位「四字文」が4単位施されている。

8:(模式図5) 隆線を挟み正位と逆位の「四字文」が8単位施されている。

47・48:(図Ⅶ-1-35・模式図6) 上下は2本の沈線で区画され、正位と逆位の「四字文」が上下で半分ずらし、4単位施されている。

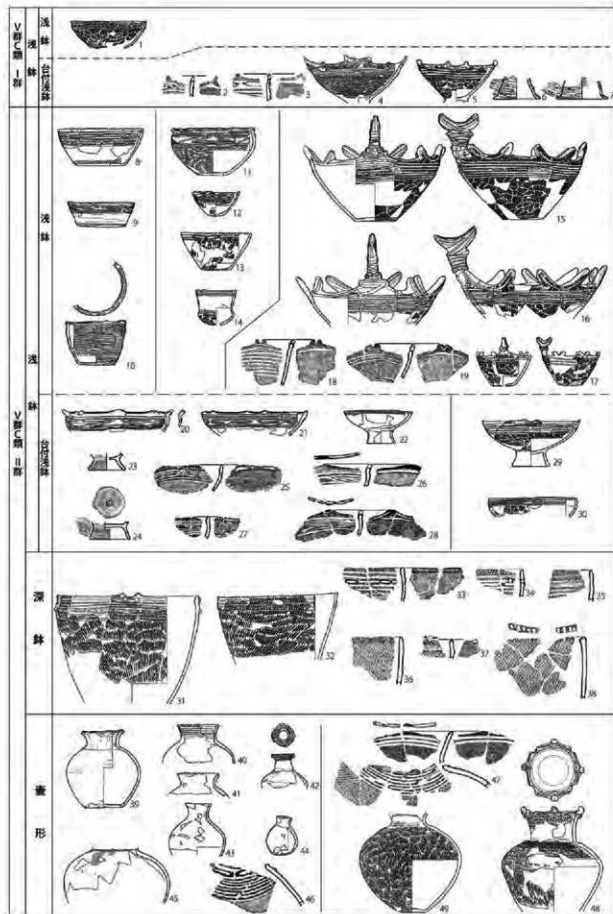
12は小型土器。波状口縁ないしB突起が加えられた口縁部で、器面にLRの斜行縄文を施文後、文様帯には挟りか上下交互に施された「四字文」(横位連続工字文?)が施されている。底部は丸底気味である。破片資料では隆線を挟み正位置の「四字文」が2段施されたもの(図Ⅶ-146-26)、逆位の「四字文」のもの(図Ⅶ-146-29)等が認められている。器種には浅鉢・壺に施文されている。

変形四字文系土器群 (図Ⅶ-1-34-9・11・20・21)

9:(図Ⅶ-1-35・模式図7) 文様帯は、上下は2本の沈線で区画され、文様構成は4単位の三角連繫文で、三角の底辺に1本の沈線が加えられている。

20:(図Ⅶ-1-35・模式図8) 文様帯は、上下は2本の沈線で区画され、文様構成は削り込みやナデ調整で陽部が強調され、6単位の三角連繫文を作出、単位間に斜に沈線が加えられている。

21:(図Ⅶ-1-35・模式図9) 文様帯は、上下は2本の沈線で区画され、文様構成は削り込みや



圖VII-1-34 大平遺跡 V群C類土器集成圖

ナデ調整で文様帯の上下に正位と逆位の四字文風の文様構成が作出され、文様帯中央には三角連繫文の内側に沈線と削り込みを加え、微隆起線で三角連繫文を4単位作出し、単位間に斜めに沈線が加えられている。

11：(図VII-1-35・模式図10) 文様帯は、上下は2本ずつの沈線で区画され、内側の沈線の結合部に2個一組の小さな粘土粒を貼り付け、粘土粒間に沈線を加えB突起風の文様構成を作出し、文様帯中央の三角連繫文の内側に沈線を加え、微隆起線で三角連繫文を4単位作出している。単位間には斜めに沈線が加えられている。

模式図8に認められた削り込みによる陽部が強調されたものは破片資料で多く認められている(図V-149-37～39・50～52)。

変形四字文系土器群の浅鉢(9)と同じ調査区から口縁部に2本の沈線が加えられた台付浅鉢(22)が出土した。器面調整・胎土等が類似していることから変形工字文系土器群に含まれるものと考えられる。この資料から変形四字文系土器群の台付浅鉢の台部は「下位に向かって開く台形」と考えることができる。また、同様な台部分がN89区から出土している(24)。この資料の底部内面には管状の施文具による円形の刺突文が加えられている。変形四字文が施された壺は出土していない。また、四字文・変形四字文が施された深鉢も出土していない。

このほかに体部に横環する平行沈線を密に施し、波頂部下位に縦位の短刻線を3本間隔に加えて、あたかも連続工字文・四字文ないし変形工字文風の文様構成を作出し、口縁部には変形工字文系土器の口縁部形態に類似した緩やかな波状口縁を作出後、波頂部間を結ぶ短沈線が加えられているものもある(10)。また、山形県砂子田遺跡の浅鉢F3に類似した口頸部が広く、丸底様な底部をもつ丸底鉢形土器(14)がある。

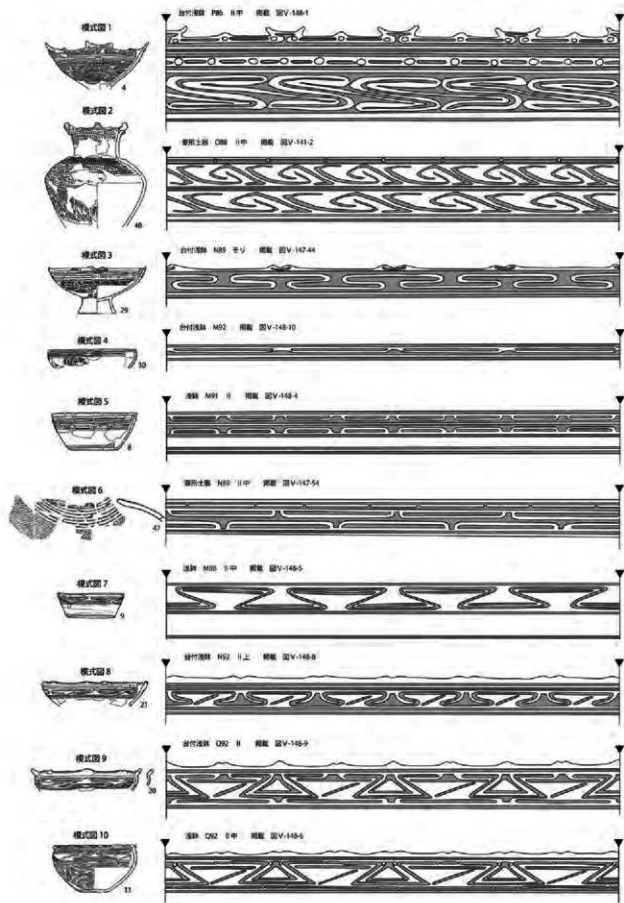
39は壺形で、その口唇に指頭圧痕により波状口縁が作出され、波頂部には沈線が加えられ、変形工字文系土器群と同様の文様構成をもつ。39は一括土器として49と共伴関係をもって出土している。このことから39・49については変形工字文系土器群を構成するものと考えられる。

工字文系土器群・変形工字文系土器群の特徴は以下のようにまとめられる。

変形工字文系土器群は、「四字文」と「変形四字文」が施された浅鉢・台付浅鉢・壺が認められた。浅鉢・台付浅鉢の口縁には平縁と波状口縁が認められる。口縁内面には沈線が加えられている。口縁部の突起・波状口縁の波頂部は緩やかで、口唇には波頂部を結ぶ沈線が加えられている。また、波頂部に指頭の圧痕・刻目・沈線が加えられたものもある。文様帯には四字文のみが施文されたものや四字文と変形四字文が組み合わされて施文されたものも認められる。文様帯は単帯で、文様は4単位のものが殆どで、6単位のものも僅かに認められている(図VII-1-34-21；模式図8；図V-148-8)。変形四字文は三角連繫文で、下端部が連結するものは認められなかった。三角連繫文が沈線で描かれたものと削り込みにより陽部が強調されたものが出土している。三角連繫文が施されたものには、単位間に斜線が加えられたものが多く認められた。文様帯には極めて小さな貼瘤がみとめられるもの(11)、図V-149-41のような沈線内を少量の粘土で埋めて結節沈線を作出しているものもあるが、僅かに沈線の末端や刺突部分に粘土の盛り上がるものが多く、大きな粘土粒の貼瘤は認められない。台付浅鉢の台部は「下位に向かって開く台形」で、底部内面には管状の施文具による円形の刺突文が加えられているものも認められている。胎土に砂粒を含むものが多く、極めて脆弱なものも認められた。焼成も悪い。

(2) 在地土器群の特徴(図VII-1-34-12・15～17・31～38・49)

口頸部文様帯と体部文様帯がB突起やA突起が加えられた区画帯で区画されたもの。またその省略



图VI-1-35 文样模式图

形と考えられるもの。各文様帯には沈線が多用され、器種は特徴的な器形・文様構成をもつ浅鉢や鉢・深鉢に認められる。

浅鉢には、大型のもの(15・16)、小型のもの(17～19)があるが、いずれも「Y」字状・「V」字状の突起をもつ。これらの突起の貼り付けには規則性が認められる。「Y」字状の突起は1か所のみ貼り付けられ、それに対向する位置の口縁には大きめの「V」字状突起が、「Y」字状突起と「V」字状突起間にやや小さめの「V」字状突起が2か所貼り付けられ、突起は計6か所に施され、文様構成は6単位である。内面の沈線も大型の「Y」字状・「V」字状の突起と小型の「V」字状突起では施文方法に違いが認められる(図V-154～156)。「Y」字状突起は口縁部に直交するように施され、下端には刻目が加えられた隆帯・楕円形の貼り付けが加えられている。「Y」字状突起の先端部の両側面には「Z」字状・「y」字状の沈線文が加えられている。先端部の形状にもの幾つかのバリエーションが認められる(図V-152-94～105)。口縁部には4～7条の沈線が施され、「Y」字状・「V」字状の突起下位の上から2ないし3本目の沈線にB突起が加えられ、口頭部文様帯と体部文様帯を区画す区画帯の役目を果たしている。小型のものは、口縁部の沈線・B突起などに省略が認められるが、器形・文様構成は「大型のもの」とほぼ同じである。浅鉢の「Y」字状突起下端に認められた楕円形の貼り付けは、B突起間に沈線を加え連結したものに起源が求められ、浅鉢だけでなく、深鉢(31)や壺形(48)の口縁部にも認められる。

深鉢は、口頭部文様帯と体部文様帯がB突起やA突起が加えられた区画帯で区画されたもの(31～35)、口縁部に数条の沈線が加えられたもの(32・図VII-151-78～80)、縄文のみのもの(36～38)が出土した。区画帯にはA突起が連続的に施された隆帯のもの(31・33)、B突起が施されたもの(32・34)等がある。そして、区画された口頭部文様帯・体部文様帯には共に数条の沈線文が加えられているものが多いが、口頭部文様帯には無文帯が作出されているものもある(35)。口縁部の沈線の本数は、3ないし5本が多い、B突起の貼り付け位置との関連が想定される。縄文のみのものは口唇に指頭圧痕が加えられたもの(36・37)、棒状工具の押圧が加えられた小波状口縁のもの(38)が認められる。表面に縄文が施され、内面に沈線がめぐるものも認められる(図V-151-81)。口縁に軽いナデ調整が加えられ口唇直下に無文帯を作出したもの(36)、強い押圧によって口縁部に無文の凹帯がめぐるもの(37)、棒状工具による押圧がくわえられたもの(38)等が認められる。これらの類似は青森県名川町剣吉荒町遺跡・山形県砂子田遺跡などからも出土し、同期の特徴的深鉢と考えられる。しかし、工字文系土器群・変形工字文系土器群の深鉢は出土していない。

壺形土器は1個体認められている。これは一括出土1から出土したもの(P-O-2:48)である。体部には縄文を施文後、口頭部下端をA突起が施された区画帯で区画され、口頭部下端から肩部分にかけて文様帯を作出している。文様帯内は沈線2条で2段に区画され、文様帯には横位の「C」字、「逆C」字を向い合せて組み合わせで1単位の入組文を作り出している。文様帯は上段には6単位、下段には4単位施文している(48:模式図2)。口縁部外面の突起下位には沈線と中央に横位の短沈線文が加えられた楕円形貼り付けが加えられ、「Y」字状・「V」字状の突起をもつ浅鉢や深鉢の文様構成の共通性や類似性が認められる。類似は青森県外ヶ浜町宇鉄遺跡の第Ⅱ層Cから工字文・匹字文・変形匹文が施された浅鉢・台付浅鉢などが出土している。

(3) 変形工字文系の土器群の類例(図VII-1-36、図VII-1-37)

北海道では、三石町旭町1遺跡・余市町大川遺跡等で変形工字文が施された浅鉢の口縁部破片など、知内町東雷(上雷?)地区では変形工字文が施された口縁部破片が大沼忠春によって資料紹介されているが、いずれも散在的でその実体は不明な点が多い。この様な中において新冠町水川遺跡からは比

較的まとまって出土している。

青森県では弘前市牧野Ⅱ遺跡・名川町剣吉荒町遺跡（現南部町）、むつ市不備無遺跡、佐井村八幡堂遺跡・江豚沢Ⅰ遺跡の出土資料に類例が見られる。新冠町氷川遺跡・弘前市牧野Ⅱ遺跡・名川町剣吉荒町遺跡の出土資料の特徴は次のようにまとめられる。

新冠町氷川遺跡（図Ⅶ-1-37）

氷川遺跡は道内において唯一、変形工字文系土器群が比較的まとまって出土した遺跡である。

氷川遺跡の変形工字文系土器は氷川遺跡第4群第4類に分類され、第4群は縄文時代の土器、第4類は文様構成が「変工字文および変形工字文」とされ、縄文時代の土器群とされた。第4群第4類には鉢形・椀形などがある。鉢には、文様帯は3単位で、大きめの2個の粘土粒の突起・結節沈線などが施されているもの（図Ⅶ-1-37-54）、波状の隆起が高い波頂部や口唇に刻目が加えられた口縁部破片（図Ⅶ-1-37-57）などが出土し、当初は「縄文初頭、大洞A'式に続く恵山式直前の形式」として位置付けられ、「工字文のモチーフは本州における大洞A'式、砂沢式のあとに続く二枚橋遺跡出土の土器の中に類似点を見ることができる」とし、変形工字文は佐井八幡堂出土資料に類例を求めていた。その後、54・57は林謙作によって北海道で唯一の「大洞A'式」とされ、58・59・61・63・65・66は砂沢式に比定された。氷川遺跡第4群については大沼忠春によって「氷川式」と呼称され、余市町大川遺跡・知内町上雷S-18地点の資料などとともに晩期終末に位置付けられている。

氷川式の突起は隆起が高く、波頂部に刻みが加えられている。大平遺跡V群C類Ⅱ群土器の突起は緩やかなものが多く、波頂部に刻みが加えられた資料は出土していない。氷川式の突起は新しい段階の特徴をもつもので大平遺跡V群C類Ⅱ群土器より新しい段階のものと考えられる。

弘前市牧野Ⅱ遺跡（図Ⅶ-1-36）

牧野Ⅱ遺跡の資料は整地による表探資料で、浅鉢・台付浅鉢のみが紹介された。資料は大洞A'式・A'式・砂沢式に相当する土器からなり第Ⅰ～Ⅲ群土器に大別され、さらに細分が加えられている。

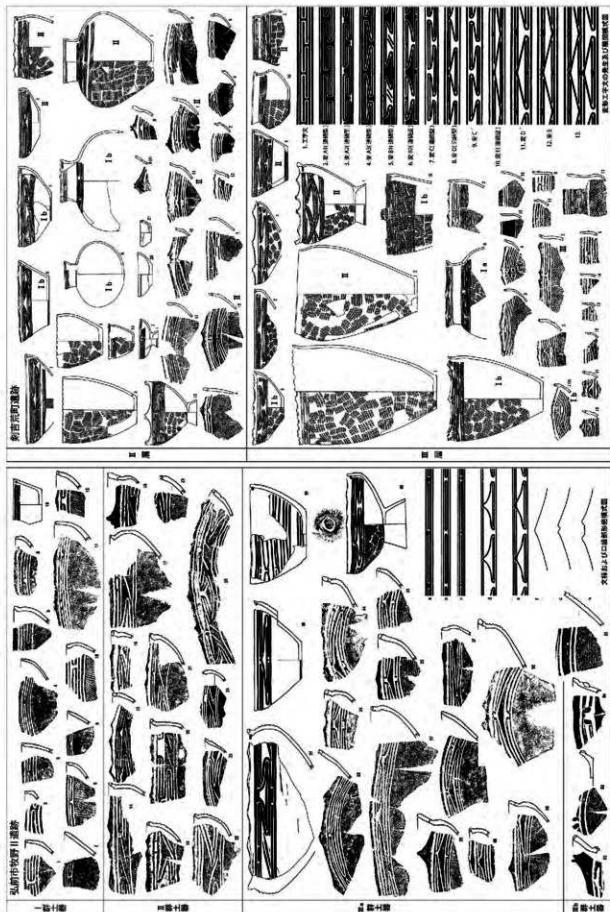
第Ⅰ群土器は平行工字文のみのもので、Ⅰa類・Ⅰb類・Ⅰc類に細部され、Ⅰa類は平行工字文を特徴とし大洞A'式に、Ⅰb類は文様要素から大洞A'式、Ⅰc類は、「π」字形の平行工字文（筆者の「匹字文」）が単独に施文されたものは大洞A'式に、Ⅲa類の三角工字文（筆者：三角連繫文）と組み合わせられたものは大洞A'式に比定されるとした。第Ⅱ群土器には変形工字文間に1～2条の斜行沈線をもつもので、大洞A'式に比定。第Ⅲ群土器には「π」字形の平行工字文（筆者：「匹字文」）や三角工字文（筆者：三角連繫文）と斜行沈線をもつものなど三角工字文（筆者：三角連繫文）といわれる変形工字文のみのもので、三角工字文を描く沈線の幅・太さ・三角工字文間に施される粘土粒の大きさ等によってⅢa類とⅢb類に細分され、Ⅲb類に比べⅢa類は沈線の幅が狭く、粘土粒は小さく扁平、口縁の突起はなだらかな山形等の特徴の他、台部は「下部に向かって開く」、縄文はLRが80%以上など違いを指摘し、Ⅲa類を大洞A'式、Ⅲb類を砂沢式に比定している。

大平遺跡の工字文の模式図3はⅠa類、匹字文が施された模式図4～6はⅠc類に対応する。模式図8～10は牧野Ⅱ遺跡第Ⅱ群土器に、模式図7はⅢa類に比定される。

これらの資料について中村五郎はⅢb類を除く牧野Ⅱ遺跡の資料については大洞A'式の古段階との考えを示している。

名川町剣吉荒町遺跡（図Ⅶ-1-36）

剣吉荒町遺跡は、名川町教育委員会（1982調査）と青森県郷土資料館によって調査された。1982年の調査者の工藤竹久は、剣吉荒町遺跡の浅鉢・台付浅鉢の工字文・変形工字文を分析、7種13種に細分、第2層と第3層における層位別出現率を調査し、第3層では変形工字文A1～3（連続）・変形



図Ⅶ-1-36 Y群C類土器の類別

工字文B1・B2（連続型）が多く、上層の第2層では変形工字文D（完結型）が増える傾向が認められるとし、I群は2期に細分し、変形工字文A1～3（連続）が施されたものを剣吉荒町I群aとし、大洞A式と剣吉荒町I群bの間に位置付けた。変形工字文B1・B2（連続型）を特徴的文様要素としたもの剣吉荒町I群bとした。剣吉荒町I群は、浅鉢の体部は直線的に開くもの、やや内湾するものがある。波状口縁は波状の隆起が低いものが一般的で、台部は台形状を呈し、あまり高くない、変形工字文は文様帯の幅が狭く、4単位を基本とする。沈線中に2個一対の粘土瘤を配した文様などの特徴が指摘されている。

剣吉荒町II群土器は、変形工字文D（完結型）・変形工字文E（連結型）を特徴とし、文様帯の幅は剣吉荒町I群のものと同大差ない。文様帯は4単位から3単位構成、削り込みによる腰部強調の退化などの特徴が指摘されている。そして、大洞A式～大洞A'式の間に位置する土器型式として剣吉荒町I群土器（I群a→I群b）、剣吉荒町I群土器より新しく砂沢式より古い特徴をもつ土器として剣吉荒町II群土器が位置付けられている。このような剣吉荒町I群～剣吉荒町II群の特徴を大平II群土器と比較すると、剣吉荒町I群aの工字文は本遺跡の模式図3、剣吉荒町I群bの変形工字文B1は模式図8・9、変形工字文Cに模式図7、剣吉荒町II群は模式図10に比定される。

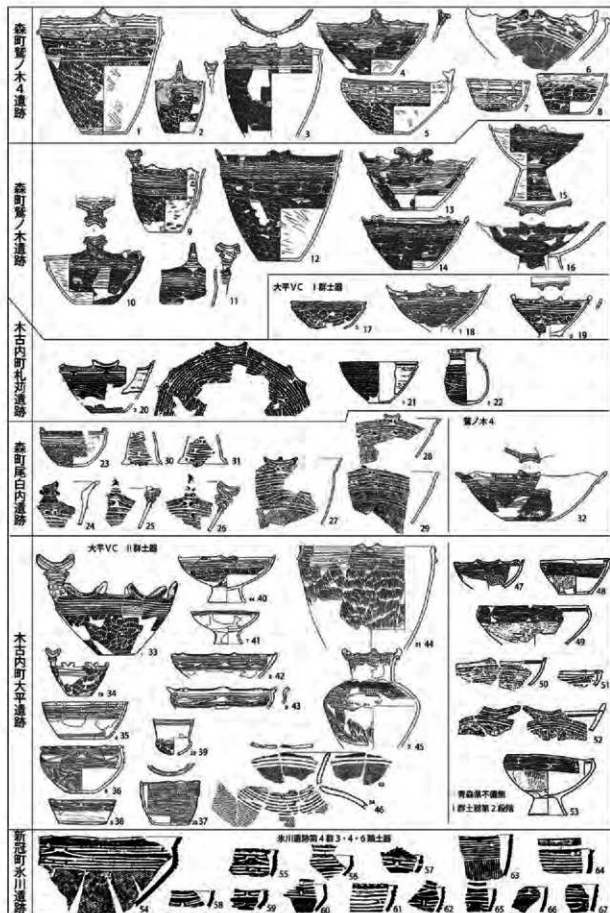
剣吉荒町遺跡では牧野II遺跡Ic類、本遺跡や模式図4～6で多く認められる「π」字形の平行工字文（「匹字文」）が施されたものが1点（第6図-3）しか図示されず極めて少ない様相が窺える。また、大平II群土器に類似する文様構成が多く認められた剣吉荒町I群bにおいても、文様の単位が大平II群土器は4単位なのに対し、剣吉荒町I群bでは3単位で違いが認められ、やや時間差が想定される。この違いは、鉢・深鉢の文様要素・器形等にも認められる。剣吉荒町遺跡では変形工字文や縄文地に波状工字文・斜行沈線文等が施されたもの、平縁・指頭・棒状工具による小波状口縁の縄文が施されたもの、口縁部にナデ調整や指頭の押圧が加えられたもの鉢（台付深鉢）・深鉢が多量に出土している。大平遺跡では後者は認められるものの「変形工字文」が施された鉢・深鉢が欠落する。そして、浅鉢・台付浅鉢の文様要素・器形等では口縁部や突起の形状の違いは明瞭で、大平II群土器は平縁に部分的な貼り付けによって2個一組の山形・山形突起と2個一組の山形が交互施文されたものなどが作出されているのに対し、剣吉荒町I群bでは、口縁部自体が大きく波状で、やや曲線がきつく起伏の大きい陵をもち、頂部に間隔の狭い2個一組の山形・山形突起が作出され、山形突起の先端部の突起や刻み加えられたものが多い。大平II群土器の図V-150-67～72は剣吉荒町遺跡の土器群との関連が想定されるものである。

この他に、むつ市不備無遺跡、佐井村八幡堂遺跡・江豚沢1遺跡・山形県砂子田遺跡・岩手県足沢遺跡などに類例が認められるが詳細に検討することができなかった。

④ 「Y」字状・「V」字状の大形突起をもつ浅鉢の類例

「Y」字状・「V」字状の大形突起をもつ浅鉢の類例は青森県五所川原市市浦五月女遺跡^{五所川原市市浦五月女遺跡}で復原土器1個体知られているのみで不明な点が多い資料であった。剣吉荒町遺跡では「V」字状突起の片側先端部分が「三角形の突起状の土製品」として報告されている。八幡堂遺跡（図50-24：図VII-1-37-52）・不備無遺跡（I群土器）で「V」字状の突起の破片資料（図50-21）が報告されている。不備無遺跡の報告者の関根達人は晩期を6期12段階の細分し、類似資料を不備無1群2段階（図VII-1-37）とし、「聖山式の流れを汲む湯の里遺跡のVc類に共通」とし、その出自に論及している。そして共伴した「匹字文」や「変形匹字文」が施された浅鉢・鉢等をその特徴から不備無1群2段階ならびに八幡堂1群段階とし、晩期5b期の大洞A2式併行に位置付けている（図138-24）。

北海道では、大沼忠春が函館中部高校考古学部所蔵の口縁部破片を報告しているが、個別の資料に



図VII-1-37 V群C類土器変遷図

ついて論及されていない。野村崇は、日ノ浜出土として大形の「Y」字状突起部分を欠く復原資料を報告し、実測図は、「Y」字状突起に対向する大型の「V」字状突起を正面としたもので、その位置付けを日ノ浜期に含まれるとした(1985)。筆者は木古内町新道4遺跡L地区で「Y」字状の突起部を欠く復原土器1個体(図IV-34・LP-7-1)を報告した(2016 北埋320)。

北海道内での位置付けについては、日ノ浜8号遺跡出土の資料や尾白内Ⅰ群土器が示唆的である。日ノ浜8号遺跡出土の資料・尾白内Ⅰ群土器は、大平遺跡Ⅱ群土器の大型の「Y」字状・「V」字状の突起が施されたに土器に類似する特徴をもつ。野村崇は、日ノ浜8号遺跡出土資料のうち、口縁部のやや小ぶりの「Y」字状の突起をもつもの、頭部に平行沈線と矢がすり状の沈線文が施された深鉢(実測図第19図5)と沈線文を主体とした土器を「特徴的な土器破片」(実測図第22図)と呼称し、これらが青森県浜名遺跡の沈線文を主体とした第Ⅳ類に類似するとし、晩期最終末に位置付けた。その後、「特徴的な土器破片」の類似資料が森町尾白内遺跡の調査でまとまって出土し、尾白内Ⅰ群土器と呼称されている。

尾白内Ⅰ群土器でも大平Ⅱ群土器の大型の「Y」字状・「V」字状の突起の類例が出土し「蝶ネジのつまみの様な形の把手」と呼称されている。しかし、大平Ⅱ群土器と尾白内Ⅰ群土器の類似資料には口頭部文様帯と体部文様帯の重層沈線、「Y」字状下端の刻目が加えられた隆帯・楕円形の貼り付け等の有無等に違いが認められる。尾白内Ⅰ群土器の「Y」字状・「V」字状突起が大平Ⅱ群土器に比べ未発達のように思われる。このことから尾白内Ⅰ群土器は大平Ⅱ群土器に先行する土器群と考えられる。

4) 大平Ⅱ群土器の意味と位置付け(図Ⅶ-1-37)

大平Ⅱ群土器によって東北北部と同様の器種組成をもつ変形工字文(「匹字文」・「変形匹字文」)の土器群の存在が明らかになった。

大平Ⅱ群土器の位置付けは、道外の資料との対比では、牧野Ⅱ遺跡の資料内容には鉢形土器のみという限定条件があるもののⅠc類の「π」字形の平行工字文(筆者の「匹字文」)が多用され、Ⅰ群土器・Ⅱ群土器・Ⅲa類の口縁部の突起・波状口縁の波頂部はなだらかな山形で、波頂部を結ぶ沈線が加えられているなど類似点が認められる。剣吉荒町遺跡の剣吉荒町Ⅰ群bについては「変形匹字文」の文様構成には類似点が認められるもの「匹字文」系の土器群が少なく、口縁部自体が大きく波状で、頂部の形状になどに大平Ⅱ群土器との違いが認められる。このことから大平Ⅱ群土器は剣吉荒町Ⅰ群bに先行する土器群のように思われる。

北海道内での位置付けについては、先述したように大平Ⅱ群土器は、尾白内Ⅰ群土器に後続するものと考えられる。また、大平Ⅱ群土器は氷川式より古く位置付けられる。

これまで、北海道には変形工字文土器器種組成のわかる資料が認められなかったことから、北海道南部と東北北部・津軽半島との交流が低調であった推察されている。しかし、今回の大平Ⅱ群土器の存在は北海道南部と東北北部・津軽半島との交流を示すものである。

近年、大洞A式・大洞A'式の再検討、「大洞A2式」の設定などについて、多くの研究者によって論考が加えられている。大平遺跡土器は、少量ながら器種組成が認められ、器種毎に文様構成のわかる良好な資料で、東北北部との対比が可能な土器群である。このことから大平遺跡のV群C類土器の工字文・変形工字文系土器群と在地系土器を含むⅡ群土器を「大平式」と呼称し今後の討検にそなえたい。そして、在地系土器群とした一群についても、東北北部との対比が可能なことからその位置付けについて再検討されなければならないものと考えられる。

2 石器について

平成22・23年度調査で出土した石器等は571,988点になる。堅穴住居跡142,684点、土坑6,925点、フラスコ状ピット4,086点、Tピット91点、柱穴状ピット20点、焼土3,258点、剥片集中202,611点、礫集中131点、盛土遺構・包含層212,182点である(表1-3)。

石器全体の分類別では、剥片が497,502点(87.0%)を占め、次いで礫・礫片・有意の礫56,755点(9.9%)が出土している。剥片・礫・礫片を除く石器17,731点のうち、剥片石器では、スクレイパー3,909点(22.1%)、つまみ付ナイフ822点(4.6%)、石鏃687点(3.9%)、両面調整石器813点(4.6%)、礫石器では、たたき石1,738点(9.8%)、すり石1,571点(8.9%) (北海道式石冠309点(1.7%)、扁平打製石器1,019点(5.8%))、凹み石279点(1.6%)が多く出土している。石製品は316点が出土し、異形石器・球状耳飾り・垂飾・軽石製石製品などが出土している。利用される石材は頁岩が517,605点(90.5%)を占め、ほかにチャート7,764点(1.4%)・黒曜石503点(0.1%)・泥岩9,223点(1.6%)・凝灰岩6,231点(1.1%)・砂岩5,083点(0.9%)・安山岩4,554点(0.8%)などがみられる。分類別の石材利用としては、剥片石器(11,893点)では頁岩が主に使用され11,221点(94.4%)を占める。黒曜石製のものは157点(1.2%)だが、石鏃では687点中75点(10.9%)、つまみ付ナイフでは822点中38点(4.6%)が黒曜石製であり、利用される割合が全体の割合に比べて高くなっている。礫石器(5,522点)では、安山岩1,347点(24.4%)、砂岩961点(17.4%)、頁岩888点(16.1%)、凝灰岩688点(12.5%)、泥岩558点(10.1%)、緑色泥岩258点(4.7%)が主に利用されている。

石器全体の分布をみると、盛土遺構や遺構掘上土のみられる範囲に多量の出土がみられる。86ライン以西の崖面や4ライン以東・Rライン以南の削平が大きい場所では出土量が少ない。また、92～95線間でも遺物数が減少する様子が見られる。

以下、盛土遺構・包含層出土のものを中心に主だった器種について分類別にまとめる。

石鏃：687点が出土した。盛土遺構・包含層からは550点(有茎鏃105点、無茎鏃平基19点、無茎鏃凹基8点、尖基190点、円基87点、破片等141点)が出土している。石材は頁岩465点(84.6%)、黒曜石65点(11.8%)、チャート10点(1.8%)、メノウ9点(1.6%)、泥岩1点(0.2%)である。このうち黒曜石製のものは有茎鏃11点、無茎鏃平基9点、無茎鏃凹基1点、尖基23点、円基7点、破片等14点である。各分類の約10%が黒曜石製であるが、無茎鏃平基のものは19点中9点(47.4%)が黒曜石製であり、特異な存在となっている。

分布は盛土遺構の遺物分布範囲と重なり、96～0ライン間に多くみられる。有茎鏃は88・89ラインにも出土がみられ、晩期後半に伴うものと考えられる。無茎鏃は96ライン以東の盛土遺構範囲から出土している。

石錐：253点が出土した。盛土遺構・包含層からは194点が出土している。石材は頁岩が181点(94.8%)を占める。黒曜石製のものは7点(3.6%)で、使用される石材としては遺跡の剥片石器の比率よりもやや高い。全面を調整して棒状に作られたものやつまみ部のあるもののほか、剥片の一部に機能部を作出したものや石鏃の転用品がある。

石槍・ナイフ：359点が出土した。盛土遺構・包含層からは240点が出土している。石材は頁岩が234点(97.5%)を占め、泥岩3点、チャート2点、黒曜石1点である。器形では有茎のもの11点、紡錘形のもの38点、基部がつまみ状になっているもの14点、破片が148点である。尖頭部や基部の半分～1/3の破片が多く、本来は紡錘形のものであったと推測される。基部がつまみ状になっているものは、山形県高島町押出遺跡で多量に出土したことから命名された「押出型ポイント」に類似する形状のものである。「押出型ポイント」は縄文時代前期を中心として使用されたもので、大平遺跡の時

期とも合っている。木古内町釜谷遺跡、北斗市館野6遺跡などで出土例があり、北関東・東北～道南地方まで使用範囲が広がっていたことが窺える。「押出型ポイント」は近年の使用痕分析の成果でヨシなどを刈り取るための鎌として機能していたという研究がある(鹿又2009)。

つまみ付ナイフ：822点が出土した。盛土遺構・包含層から638点が出土している。石材は頁岩が591点(92.6%)を占め、黒曜石33点(5.2%)、メノウ7点(1.1%)、チャート6点(0.9%)、泥岩1点(0.2%)である。黒曜石が5.2%を占め、使用される石材としては遺跡の剥片石器の比率よりもかなり高い。縦型で片面調整のものが大半を占め、横型のものは6点である。石製品としたが、ミニチュアのもの12点出土している。

スクレイパー：3,909点が出土した。盛土遺構・包含層からは2,959点が出土している。石材は頁岩が2,911点(98.4%)を占める。黒曜石は7点(0.2%)で、使用される石材としては剥片石器全体の比率よりもかなり低い。剥片の側縁に直線状もしくは外彎する刃部を設けているものが大半を占める。ヘラ状のものが49点(1.7%)、トランシェ様のものが4点(0.1%)、挿入のものが100点(3.4%)出土している。また、長軸両端部に抉りのあるものが22点(0.7%)出土している。長軸両端部に抉りのあるものは(図V-171-206～216)、前期後半の遺物が出土する周辺遺跡をみると、大平遺跡、北斗市館野6遺跡、福島町館崎遺跡といった円筒土器下層d₂式土器(Ⅱ群B-5類土器)が多く出土する遺跡から出土し、釜谷遺跡、木古内遺跡、木古内2遺跡、新道4遺跡、蛇内遺跡、湯の里2遺跡といった円筒土器下層d₂式土器の出土が少ない遺跡からは出土がみられないことから、円筒土器下層d₂式土器期に伴うものの可能性が考えられる。

石器腹面もしくは背面に光沢がみられるものが324点(11.0%)で確認されている。ヘラ状のもの、下端に刃部のあるもの、挿入のものでは光沢がみられるものが少なく、側縁に刃部を設けているものや長軸両端部に抉りのあるものでは光沢が多くみられる。特に長軸両端部に抉りのあるものでは11点(50.0%)で確認されている。光沢は使用痕とみられ、野田生4遺跡(北埋遺報171)ではイネ科の植物の刈り取り作業が推定されている。

両面調整石器：813点が出土した。盛土遺構・包含層からは610点が出土している。石材は頁岩595点(97.5%)を占め、泥岩10点(1.6%)、チャート2点(0.3%)などである。剥片集中からも66点が出土しており接合作業を行っている。すべて頁岩製である。盛土遺構・包含層から出土したものについては接合作業を行わなかったが、剥片集中の接合状況を見ると、盛土遺構・包含層から出土した剥片などと接合できた可能性は高い。破損品は232点(38.0%)ある。剥片集中の接合状況も合わせみると、大平遺跡では付近の頁岩原産地から拳大～人頭大の原石を運び入れ、紡錘形や楕円・円形の両面調整石器を多量に製作していた様子が窺われる。長さ10～15cmの中～大型のものが多数あり、大きなものでは長さ20cmを超えるものもみられる。

礫器・石核・剥片：これらについては、剥片集中からも多数出土することから、合わせてまとめる。**(礫器・石核)**684点が出土した。盛土遺構・包含層からは365点出土し、石材は頁岩325点(90.4%)を占める。また、剥片集中からは49点が出土し、石材はすべて頁岩である。頁岩以外の石材は非常に少なく、泥岩24点、チャート6点などが出土している。断面が逆三角形になるものや、礫の側縁や端部を両面から打ち欠いて断面V字状になっているものが多くみられる。辺に微細な剝離がみられたり、敲打痕のようなものがみられたりするものもある。

(剥片)497,502点が出土した。盛土遺構・包含層からは160,253点出土し、石材は頁岩158,879点(99.2%)を占める。また、剥片集中からは頁岩以外の石材の比率は非常に低く、泥岩539点(0.3%)、安山岩330点(0.2%)、黒曜石254点(0.2%)、チャート249点(0.2%)などが出土している。多量に出土し

たところについては剥片集中として取り上げている。剥片集中からは202,273点が出土し、石材は頁岩201,717点(99.7%)を占める。大型の剥片が多数出土し、同一母岩とみられる両面調整石器や礫器・石核もあわせて出土している。

(接合資料)剥片集中から出土したものを中心に接合作業を行い、35点の接合資料を今報告で掲載した。「大平遺跡(2)」においてもH-43出土の剥片集中の接合資料11点を掲載している。両面調整石器や礫器・石核と接合し、417点が接合したものの(図IV-40-11)や長さ23.7cmの両面調整石器と接合したものの(図IV-39-9)がある。また、剥片のみで接合し、空洞のあるもの(図IV-34~38・40~42・44-3・4・5・8・11・14・15・17・18・22・35)もあった。空洞は長さ8~20cmほどで、円形や紡錘形の両面調整石器を取り出したものと考えられる。接合資料から、拳大~人頭大の原石を遺跡に持ち込み、打ち欠いて両面調整石器などを多数製作していたと考えられる。製作の際に出た剥片は、剥片集中の出土状況を見ると一部を除きまとめて廃棄されていたようである。

石斧・石のみ・擦り切り残片：石斧356点、石のみ38点、擦り切り残片30点が出土している。盛土遺構・包含層からは石斧252点、石のみ27点、擦り切り残片19点が出土している。石斧の残存半分以下の破片は185点(73.4%)を占め、破損率が非常に高い。石材は緑色泥岩が石斧146点(57.9%)、石のみ11点(40.7%)、擦り切り残片17点(89.5%)を占める。礫石器全体で180点しか使われていない緑色泥岩のうち、石斧で81.1%、石のみで6.1%、擦り切り残片で9.4%を占め、この3器種で96.7%を占める。このことから、石斧・石のみの製作にあたって緑色泥岩を選考して利用していた様子が窺える。

たたき石：1,738点が出土している。盛土遺構・包含層からは951点が出土している。残存半分以下の破片は138点(14.6%)を占める。石材は凝灰岩217点(22.9%)、泥岩207点(21.9%)、砂岩203点(21.5%)、頁岩103点(10.9%)、安山岩91点(9.6%)、チャート80点(8.5%)、珪岩21点(2.2%)などとなっている。遺跡全体の礫石器の石材利用率から見ると、安山岩が約1/3と少なく、凝灰岩や泥岩、頁岩が約2倍になっている。たたき石の石材として凝灰岩や泥岩といった礫を選考していた様子が窺える。また、礫石器ではあまり利用されない頁岩・チャート・珪岩の比率が高い点も注目される。盛土遺構・包含層から出土した礫石器として利用されている頁岩149点のうち103点(69.1%)、チャートは83点のうち80点(96.4%)、珪岩は22点のうち21点(95.5%)がたたき石である。頁岩は剥片石器製作のため原産地から多量に運び入れていた様子が窺われていることから、たたき石として手ごろな大きさのものが入手しやすかったと推測できる。形状としては、扁平礫を利用したものが多く、礫の腹背面の平坦面や両端部、側縁に敲打痕のあるものが大半を占める。特徴的なものとしては楕円礫や扁平礫などの端部に広い敲打面のある楕形のもの100点出土している。敲打面が円弧状や平坦に調整され、礫長軸に対して約8~30°の傾きが入っており、20°前後の傾きのものが多い。石材は砂岩が26点、チャート18点、頁岩15点、安山岩14点、泥岩11点、珪岩6点、メノウ4点、凝灰岩2点などとなっている。たたき石の石材構成からみてチャート(18.0%)・頁岩(15.0%)・安山岩(14.0%)・珪岩(6.0%)が1.5~2倍ほど比率が高くなり、泥岩(11.0%)・凝灰岩(2.0%)の比率は半分以下になっている。たたき石の中でも形状によって石材の選考が行われていたと考えられる。

凹み石：279点が出土している。盛土遺構・包含層からは254点が出土している。残存半分以下の破片は97点(38.2%)である。石材は泥岩と凝灰岩で238点(93.7%)を占める。使用される泥岩と凝灰岩は柔らかい材質のもので、利用率が示す通り器種に対する石材の選考がなされていると考えられる。凹み部分の直径は8~32mmほどで、20mm前後が最も多い。深さは2~8mmほどで、3~4mmが最も多い。オニグルミなどの堅果類を割る際の下石として使用されたのではないかと考えられる。

すり石：1,571点が出土している。盛土遺構・包含層から992点が出土している。北海道式石冠、扁

平打製石器、その他のすり面のあるものをすり石として扱った。残存半分以下の破片は584点(58.9%)を占める。石材は安山岩が635点(64.0%)を占め、砂岩221点(22.3%)、凝灰岩62点(6.3%)、泥岩45点(4.5%)と続く。以下、分類別にまとめる。表Ⅶ-2-1は大平遺跡の堅穴住居跡から出土したすり石の出土層位別一覧で、これを時期別にまとめたものである。

(北海道式石冠) 309点が出土している。盛土遺構・包含層からは154点が出土した。残存半分以下の破片は103点(66.9%)を占め、破損率がやや高い。全面を敲打によって整形したものが大半を占める。石材は砂岩92点(59.7%)と安山岩58点(37.7%)が150点(97.4%)を占める。砂岩の比率が高く、北海道式石冠の製作にあたって砂岩を嗜好していた様子が窺える。すり面は長軸・短軸方向に緩やかに彎曲している。一部のものはすり面が短軸方向に10～25°傾いている。

表Ⅶ-2-1で示したように、堅穴住居跡を時期別に並べてみると出土の傾向が表れた。堅穴住居跡に伴うと考えられる床面・床面直上・HPで出土する北海道式石冠は、Ⅱ群B-2～4類土器期からは検出されず、Ⅱ群B-5類土器期から検出されるようになる。また、覆土からの出土でもⅡ群B-5類土器期以降の堅穴住居跡から出土量が増大する。木古内町内の遺跡を見てみると、木古内2遺跡ではⅡ群B-2～4類土器が多く出土しているが、北海道式石冠の出土はⅡ群B-4類土器期の住居跡のHP覆土からの1点である。釜谷遺跡ではⅡ群B-2～4類土器期の堅穴住居跡が多く検出されているが堅穴住居跡の床面に伴う北海道式石冠は2軒で2点である。包含層から北海道式石冠が多く出土しているが、「遺構との関連が薄く、出土傾向も異なり、時間的な要因が絡んでいるかもしれない」(木古内町教委)との記述がある。釜谷5遺跡ではⅡ群B類～Ⅲ群A類土器期の堅穴住居跡が検出されているが、北海道式石冠はⅡ群B類土器期の堅穴住居跡からは出土していない。蛇内遺跡ではⅡ群B-2・3類土器期の堅穴住居跡が検出されているが、北海道式石冠は出土していない。Ⅲ群A類土器期の住居跡からは北海道式石冠が出土している。新道2遺跡はⅡ群B-2・3類土器の時期の単純遺跡だが、北海道式石冠は出土していない。札蒔5遺跡ではⅡ群B-3類土器期の住居跡が検出されているが、北海道式石冠は出土していない。これらの遺跡の状況から、木古内地区周辺で北海道式石冠が多くみられるようになるのはⅡ群B-5類土器期以降であり、それ以前はほとんど使用されなかったと推測される。また、分布図(図Ⅴ-213)をみると盛土遺構の縁辺部からの出土が多い傾向が窺えることや、出土層位ではⅡ上層・Ⅱ中層・盛土上層といった新しい時期の層位から多く出土する傾向が見えていることから、北海道式石冠がⅡ群B-5類土器期以降の新しい時期に出土する傾向が推測される。このことは青森県の状況とも類似しており、北海道南部の函館市近郊や噴火湾沿岸の同時期の遺跡で北海道式石冠が多量に出土する傾向とは異なることがわかった。

(扁平打製石器) 1,019点が出土している。盛土遺構・包含層からは719点が出土した。残存半分以下の破片は437点(60.8%)を占め、破損率がやや高い。石材は安山岩546点(75.9%)を占め、砂岩73点(10.2%)、凝灰岩54点(7.5%)、泥岩27点(3.8%)が続く。礫石器の石材の比率に比べて安山岩の使用比率が非常に高い。扁平打製石器の製作にあたって、安山岩を嗜好していることが窺える。細分類では、周縁を加工して半円状に加工した半円状扁平打製石器は203点、長軸両端に抉りのある抉入扁平打製石器は51点、これらに含まれないその他のもの243点、細分類できない破片222点である。細分類別の使用される石材は、半円状扁平打製石器は安山岩が163点(80.3%)を占めるが、抉入扁平打製石器では安山岩が25点(49.0%)、砂岩が17点(33.3%)となり砂岩の比率が高くなる。その他のものは安山岩が162点(66.7%)、凝灰岩28点(11.5%)、砂岩が26点(10.7%)となる。表Ⅶ-2-1にある通り、Ⅱ群B-2～5類土器のすべての時期から出土している。上條(2015)によると、使用痕分析の結果、用途として軟物質の敲打の可能性が挙げられている。堅果類の殻剥き、根茎類の敲

表VII-2-1 竪穴住居跡出土すり石一覽

時期	遺構名	層位	すり石			小計	合計	
			すり石	北海道式石冠	扁平打製石器			
Ⅱ期0-1層 土器層	H-14	1F			0		7	
		礎上			7		7	
	H-20	1F			7		7	
		基礎-水成砂上	2			2		
		礎上	3		3	3	6	
		1F	2		4	6		
	H-23	1F			0		80	
		礎上	3		35	38		
	H-30	1F			0		0	
		礎上	5		35	40		
		1F			1		16	
		礎上	3		7	10		
	H-36	1F			0		13	
		礎上	3		11	14		
		1F			0		0	
		礎上	2		11	13		
	H-37	基礎-水成砂上			2		15	
		1F			1		1	
		礎上	3	1	8	12		
		1F	3	1	11	15		
H-43	1F			0		14		
	礎上	2		12	14			
	1F			0		0		
	礎上	2		12	14			
H-49	1F			0		3		
	礎上		1	2	3			
Ⅱ期0-4層 土器層	H-25	1F			2		13	
		礎上	3		8	11		
		1F			9	9		
		基礎-水成砂上	4		1	5		
	H-26	1F			0		4	
		礎上		3	3	6		
	H-27	1F			0		1	
		礎上		1	1	2		
	H-28	1F			1		21	
		礎上	3	4	11	20		
		1F			0		0	
		礎上	6	4	11	21		
	H-33	1F			0		4	
		礎上	1		3	4		
	H-39	基礎-水成砂上			0		12	
		1F			0		0	
		礎上	3	3	6	12		
		1F	3	3	6	12		
	Ⅱ期0-5層 土器層	H-13	基礎-水成砂上			0		15
			1F			1		1
礎上			2	1	11	14		
1F			2	1	12	15		
H-15		1F			2		16	
		礎上	4	3	5	14		
H-16		基礎-水成砂上			2		16	
		1F			0		89	
		礎上	9	29	43	89		
		1F	11	23	43	89		
H-17		基礎-水成砂上			3		16	
		1F			1		83	
H-21		礎上	13	32	19	63		
		1F	16	44	23	83		
H-22		基礎-水成砂上			1		12	
		1F			0		9	
H-24		礎上	3	4	2	9		
		1F			0		10	
H-29		礎上	1	6	2	9		
		1F			0		0	
H-32	礎上	1	7	2	10			
	1F			0		0		
H-34	礎上	10	4	16	32			
	1F	10	8	18	32			
H-35	礎上	2	3	3	8			
	1F	1	2	2	5			
H-38	礎上	3	3	2	8			
	1F			0		10		
H-41	礎上	1	2	2	5			
	1F			0		6		
H-42	礎上	1	1	1	3			
	1F			0		6		
H-44	礎上	1	3	3	7			
	1F			0		5		
H-45	礎上	1	3	3	7			
	1F			0		10		
H-46	礎上	1	3	3	7			
	1F			0		2		
H-47	礎上	1	3	3	7			
	1F			0		0		
H-48	礎上	1	3	3	7			
	1F			0		0		
H-51	礎上	1	3	3	7			
	1F			0		1		
H-52	礎上	1	3	3	7			
	1F			0		0		
H-53	礎上	1	3	3	7			
	1F			0		0		
H-55	礎上	1	3	3	7			
	1F			0		1		
合 計			112	130	248	488		

砕や繊維のほぐしに使用された可能性を指摘している。

(その他のすり石) 243点が出土している。盛土遺構・包含層からは119点が出土した。残存半分以下の破片は44点(61.4%)を占め、破損率がやや高い。石材は安山岩31点(26.1%)を占め、砂岩56点(47.1%)、泥岩18点(15.1%)が続く。

石鏝: 167点が出土している。盛土遺構・包含層からは117点が出土している。残存半分以下の破片は92点(78.6%)を占め、破損率が高い。石材は安山岩64点(54.7%)、砂岩24点(20.5%)、凝灰岩9点(7.7%)、粘板岩7点(6.0%)、泥岩5点(4.3%)、片岩3点(2.6%)などとなっている。安山岩の比率が非常に高く、板状の安山岩を利用している。粘板岩は石鏝でしか利用されていない。すり面の幅は0.7～1.5cmほどで断面はU字状をしているものがほとんどである。扁平打製石器と似た形状のものが29点出土しており、半円状に整形されたものが17点、挟入のものが3点出土している。断面が菱形や三角形の礫の稜にすり面が設けられているものが3点出土している。

砥石: 146点が出土している。盛土遺構・包含層からは105点が出土している。残存半分以下の破片は93点(88.6%)を占め、破損率が非常に高い。石材は砂岩91点(86.7%)を占め、砥石の製作に際して砂岩を嗜好している様子が窺える。

石鏟: 45点が出土している。盛土遺構・包含層からは29点が出土している。残存半分以下の破片は7点(24.1%)で、破損率が非常に低い。石材は凝灰岩10点(34.5%)、砂岩6点(20.7%)、泥岩5点(17.2%)、安山岩4点(13.8%)などとなり、安山岩がやや少なく、凝灰岩が多く使われている。滑石製のものが1点出土している(図V-207-622)。滑石を利用した遺物は玦状耳飾りや垂飾といった石製品がほとんどで、礫石器として使われているものはこの1点のみである。

台石: 66点が出土している。盛土遺構・包含層からは33点が出土している。残存半分以下の破片は10点(30.3%)で、破損率が低い。石材は安山岩15点(45.5%)、凝灰岩15点(45.5%)、砂岩3点(9.0%)となっている。長さが20cmを超えるような大型礫を利用したものは2点で、長さ15cm以下の中～小型の礫を使用している。

石皿: 47点が出土している。盛土遺構・包含層からは17点が出土している。残存半分以下の破片は15点(88.2%)で、破損率が非常に高い。石材は安山岩16点(94.1%)、砂岩1点(5.9%)となっている。石皿を製作する際に安山岩を嗜好していることが窺われる。破片からの推測も含めて、長さが20cmを超えるような大型礫を利用したものは7点と考えられる。

大平遺跡において、台石・石皿はたつき石やすり石の出土量からみてとても少ない。特に大型の礫を利用した台石・石皿は非常に少なく、遺構出土のものを含めても23点である。遺跡から出土した礫をみても大型のものはほとんど見られないことから、大型の礫を入手することが困難だった様子が窺われる。

石製品: 316点が出土している。盛土遺構・包含層からは236点が出土している。異形石器20点、玉類2点、垂飾5点、玦状耳飾り20点、つまみ付ナイフミニチュア11点、軽石製石製品68点、線刻礫57点、有孔石29点などが出土している。黒曜石製の遺物(異形石器・つまみ付ナイフミニチュア)と滑石製の遺物については後述する。

軽石製石製品では軽石製模造品とみられる、北海道式石冠を模したようなものが8点、すり石のような平坦面の作られているもの4点、扁平打製石器を模したようなもの2点が出土している。このほかすり痕や整形痕のみられるものなどが54点出土している。小島(2005)によると軽石製模造品は縄文時代前期中葉～中期中葉の円筒土器文化圏の北海道に分布がみられるとのことである。大平遺跡では北海道式石冠が多く出土するようになるのは前述のように円筒土器下層d₂式期以降なので、これらの軽石製模造品もこの時期にあたる可能性が高いと考えられる。

線刻礫では岩偶とみられるもの(図V-205-595)が出土している。上部に線刻が周回し、側縁には線刻が施されている。形状から男根状石製品とも考えられる。類似の資料として青森県七戸町矢倉遺跡出土の岩偶(図VII-2-1)がある。矢倉遺跡は縄文時代前期後半の「土器捨て場」があり、大平遺跡と同時期に営まれた遺跡である。遺物はシルト岩製で長軸6.0cm、幅4.5cm、厚さ1.0cmの扁平な楕円礫の頂部にV字型の線刻、側縁に線刻が施されており、前後半のものと考えられている。大平遺跡のものどき、石材、側縁の線刻が類似している。



大平遺跡(図V-205-595)

青森県 矢倉遺跡

図VII-2-1 石製品

礫・礫片：56,625点が出土している。盛土遺構・包含層からは39,311点出土している。小さなものは後述する小礫としたが、大型の礫はみられず、10～15cmほどの円礫や角礫がほとんどである。小礫以外(20,201点)の石材はチャート4,523点(22.4%)、凝灰岩4,466点(22.1%)、泥岩3,606点(17.9%)、頁岩2,441点(12.1%)、砂岩2,089点(10.3%)、安山岩1,661点(8.2%)などである。頁岩やチャートは剥片石器製作のための原石やたき石などに利用するために持ち込まれた可能性がある。泥岩や凝灰岩の中にはマキヤマ・チタニーという海綿の仲間の化石が含まれているものが多数確認できる。

〔小礫〕礫には1点の大きさが、長さ3～7cmほど、重さ30～120gほどの小型の円～楕円礫が多量に出土していたことから、小礫として分類した。盛土遺構・包含層から出土した点数は19,110点で重量は約716kgになる。石材は泥岩、砂岩、頁岩、チャート、ホルンフェルス、珪岩が多くみられた。V～VII層に含まれる礫と同様のものなので、ここから持ってきたものと考えられる。分布は全体の遺物分布と同様に盛土遺構と遺構掘上土のみられる範囲から多く出土している。特にM89～91区付近、N95～99区付近では200～700点と出土量が多い。これは土器分布のⅡ群B-4・5類の分布傾向と類似している。大平遺跡のS-1や木古内2遺跡の縄文時代前期後半の竪穴住居跡(H-1)の覆土中からはややまとまった状態で見つかった。竪穴住居跡や土坑が作られるⅡ～Ⅳ層中からは出土が少ないことから、意図的に盛土遺構に持って来ている可能性がある。(酒井)

3 黒曜石製遺物と黒曜石製品原産地同定について

大平遺跡では多量の石器等が出土している。利用される石材は、剥片石器や石製品の一部では前述のように頁岩がほとんどを占めている。遺構・盛土遺構・包含層を合わせた黒曜石を利用した石器等は合計514点が出土し、全体のわずかに0.09%である。内訳は石鏃76点、つまみ付ナイフ41点、石製品13点、Rフレイク12点、Uフレイク12点、石錐8点、スクレイパー7点、石槍2点、楔形石器2点、剥片338点、礫3点である。なかでも石鏃やつまみ付ナイフは突出して数が多く、分類内における比率では石鏃(10%)、つまみ付ナイフ(5%)、石錐(3.2%)が高くなっている。剥片を除いた剥片石器(12,577点)分類内での黒曜石製品(160点)の平均的な比率は1.3%ほどなので、上記3器種については黒曜石を選んで使用していた可能性がある。

石鏃については器形別でもおよそ10%ほどが黒曜石製であったが、無茎鉄平基のみ47.4%が黒曜石製で特異な比率を示している。

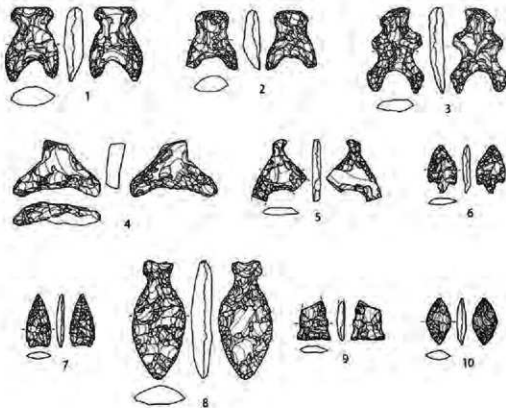
つまみ付ナイフについては、41点のほかに石製品としたミニチュアのものに黒曜石が使用される比率が高くなっている。つまみ付ナイフを模したとみられる上部両側縁に抉りの設けられたミニチュアは12点が出土しているが、黒曜石製5点、頁岩製7点と黒曜石を使用する比率が41.7%と非常に高く、意図的に黒曜石を利用していた可能性がある。図V-203-561・562は両面調整、図V-203-564～566は剥片の一部に加工をしたもので、小型で実用品とは考えられない。同様の黒曜石製の遺物は木古内町釜谷遺跡(木古内町教委1999)でも多数出土している。釜谷遺跡も縄文時代前期後半を主とした同時期の遺跡であり、両遺跡の関連性が考えられる。

石製品では異形石器に黒曜石製のものが7点(図V-203-517～519・521・523・526・527)出土している。上部には擴み部がある。図V-203-517は石偶と考えられるもので、左右対称で頭部・腕部・脚部がある。異形石器としたものは13点であり、53.9%が黒曜石製ということになる。

遺跡から出土する黒曜石製品の状況から見ると、剥片が占める比率が65.8%に過ぎず、製品に比べて少ないことや大型の剥片、石核などが出土していないことから、遺跡内で原石から製作されていたものではなく完成品が搬入されていたと考えられる。遺跡内では製品や破損品の再調整を行っていたと考えられる。このようなことから、黒曜石の原産地を調べるため、原産地同定の依頼を行った。

黒曜石製石製品5点と黒曜石製剥片石器5点について原産地同定を依頼した。同定結果については表VII-2-1のとおりである。異形石器については所山2点、十勝2点、赤井川1点と道東地区に原産地がある黒曜石が多かった。同定した石鏃4点はすべて赤井川産の黒曜石が使用され、つまみ付ナイフは所山産の黒曜石であった。

すべての黒曜石製品の原産地同定を行ったわけではないので推測にすぎないが、石鏃のような実用品については原産地の近い赤井川産のものを利用する遺跡から多く搬入され、異形石器のような特殊な遺物については遺跡間の交流によって所山産や十勝産の黒曜石を利用する遺跡から搬入されたと考えられる。(酒井)



図Ⅲ-3-1 黒曜石製品原産地同定試料

表Ⅶ-3-1 黒曜石製品原産地同定試料一覧

試料 番号	図番号	志保 図帳	図帳番号	調査区	遺物番号	層位	分 類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材 質	分析結果	備 考
1	図Ⅲ-202-523	328	図帳153	H-9	2	礫土	石製品	3.99	2.80	1.90	9.19	黒曜石	西山	鈍形石器(つまみ)
2	図Ⅲ-202-518	328	図帳153	P99	15	礫土	石製品	3.14	2.63	0.84	3.67	黒曜石	西山	鈍形石器(つまみ)
3	図Ⅲ-202-517	328	図帳153	P99	264	礫土	石製品	4.47	2.93	0.76	7.43	黒曜石	十勝	鈍形石器(玉笏)
4	図Ⅲ-202-523	328	図帳153	N96	502	礫土下	石製品	3.91	4.44	1.17	9.66	黒曜石	赤井川	鈍形石器(つまみ)
5	図Ⅲ-237-67	321	図帳137	H-41	293	礫土中位	石製品	33.81	22.95	0.37	32.83	黒曜石	十勝	鈍形石器(つまみ)
6	図Ⅲ-128-266	251	図帳91	H-23	494	礫土8	石器	2.50	1.33	0.40	1.15	黒曜石	赤井川	有茎平蓋
7	図Ⅲ-44-71	321	図帳59	H-16	457	礫土1	石器	2.27	1.13	0.34	1.14	黒曜石	赤井川	三角形平蓋
8	図Ⅲ-44-80	321	図帳59	H-16	1222	礫土1	つまみ付ナイフ	6.19	2.76	1.02	15.61	黒曜石	西山	両面磨製
9	図Ⅲ-227-19	321	図帳123	H-39	77	礫土	石器	2.06	1.77	0.39	1.30	黒曜石	赤井川	三角形平蓋
10	図Ⅲ-236-44	321	図帳136	H-41	319	礫土	石器	2.46	1.29	0.46	1.27	黒曜石	赤井川	六角形

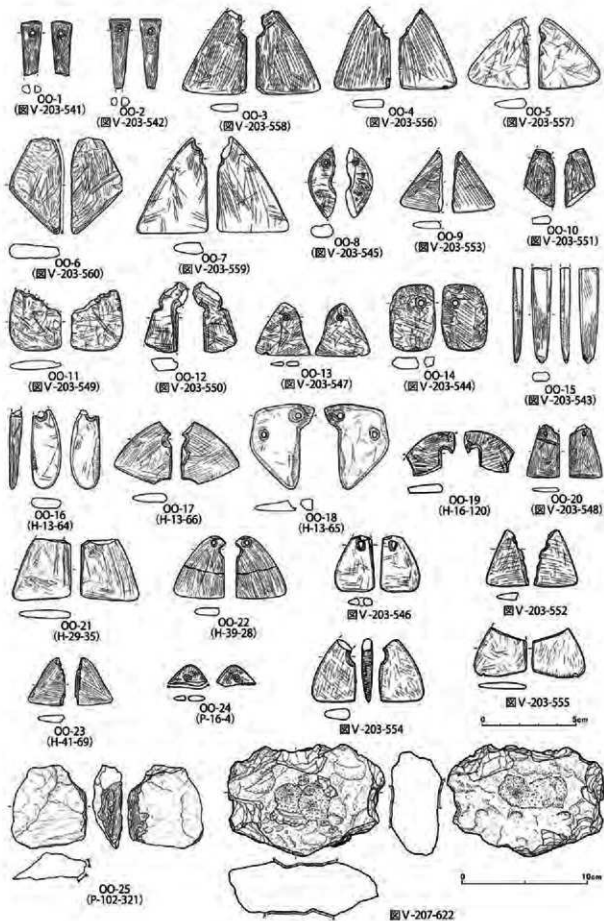
4 滑石製製品と滑石製製品の原産地分析について

大平遺跡からは滑石製のものが35点、滑石～蛇紋岩製のもの1点、白雲母片岩製のもの1点が出土している。珧状耳飾りの破片または珧状耳飾り再加工の垂飾が27点、垂飾5点、石錘1点、擦り切り残片2点、剥片1点、原石1点である。このうち30点について図化し、掲載（図VII-4-1、表VII-4-1）している。

珧状耳飾りの完形品は出土しておらず破片のみの出土である。接合を試みたが、同一個体と判断されるものはなかった。完形品はすべて三角形をしていたと考えられる。破損品に穿孔しているものが8点あり、補修孔もしくは再加工によって垂飾にしたと考えられる。木古内町内から珧状耳飾りが出土するのは初めてである。珧状耳飾りが北海道内の遺跡から出土することは珍しく、大平遺跡を含めてこれまでに35遺跡から158点が出土している。一遺跡当たりでは福島町館崎遺跡の56点（個体数46点）が最も多く、大平遺跡の27点、北斗市館野6遺跡の9点と続き、多くの遺跡は1～3点である。館崎遺跡（35.4%）と大平遺跡（17.1%）だけで全体の半数以上を占める。

滑石製とみられた25点の製品について、(株)第四紀地質研究所の協力で原産地同定分析を行った。分析結果についてはVI章-3に記載しており、表VII-4-1にまとめている。松前系-1産が22点、松前系-1?産が1点（OO-20）、松前系-2産が1点（OO-15）、産地不明が1点（OO-4）という結果であった。多くは松前系の原石を用いているとのことであった。当センターの柳瀬によると、松前系-2とされたOO-15は分析数値ではMgOがやや高く、SiO₂がやや低いことから滑石～蛇紋岩と考えられ、産地不明とされたOO-4はNa₂O、Al₂O₃、K₂Oが多く、MgO、Fe₂O₃が非常に少ないことから滑石ではなく白雲母片岩ではないかとの教示を受けた。白雲母片岩を用いた勾玉・垂飾・珧状耳飾りといった石製品が三内丸山遺跡からも出土している。

大平遺跡から出土する滑石製遺物はほとんどが製品であり、遺跡内で製作されたものではなく搬入品と考えられる。また、同一個体の珧状耳飾りが出土していないことから、遺跡に持ち込まれた時点で破損品であった可能性も考えられる。珧状耳飾り未成品や擦り切り残片のようなものが出土しており、多少の加工等はされていたようである。滑石を使用したものには石錘（図V-203-622）や原石も出土している。肉眼観察では珧状耳飾りなどと同様の岩質とみられる。（酒井）



圖Ⅶ-4-1 滑石等石製品

表VII-4-1 滑石製品產地分析試料一覽

試料番号	製造番号	生産国	製造会社	採取地	用途	分析	含水率	吸油量	比重	比重差	結晶	分析結果	備考						
GO-1	REV-203-041	226	昭和化学	L-90	2	織上	石製品	滑石	12.00	1.20	0.45	12.20	織石	知多産 1					
GO-2	REV-203-042	226	昭和化学	L-90	401	織上	石製品	滑石	12.00	1.20	0.50	12.40	織石	知多産 1					
GO-3	REV-203-043	226	昭和化学	L-90	3	織上 1層	石製品	滑石(天然物混入)	12.40	12.40	0.40	12.80	織石	知多産 1					
GO-4	REV-203-044	226	昭和化学	M-90	3	織上 1層	石製品	滑石(天然物混入)	12.00	12.40	0.40	12.80	白濁石(天然物混入)						
GO-5	REV-203-047	226	昭和化学	N-90	3	織上	石製品	滑石(天然物混入)	12.70	12.20	0.35	12.40	織石	知多産 1					
GO-6	REV-203-048	226	昭和化学	L-90	1	織上	石製品	滑石(天然物混入)	12.00	12.20	0.73	13.70	織石	知多産 1					
GO-7	REV-203-049	226	昭和化学	M-1	1	1層	石製品	滑石(天然物混入)	12.00	12.70	0.60	13.30	織石	知多産 1					
GO-8	REV-203-045	226	昭和化学	N-90	3	織上 1層	石製品	滑石(天然物混入)	12.40	12.60	0.43	13.00	織石	知多産 1					
GO-9	REV-203-051	226	昭和化学	P-97	106	織上 1層	石製品	滑石(天然物混入)	12.10	12.20	0.40	12.40	織石	知多産 1					
GO-10	REV-203-051	226	昭和化学	L-90	31	織上 1層	石製品	滑石(天然物混入)	12.00	12.40	0.43	12.80	織石	知多産 1					
GO-11	REV-203-046	226	昭和化学	L-90	31	織上 1層	石製品	滑石(天然物混入)	12.10	12.70	0.43	13.10	織石	知多産 1					
GO-12	REV-203-050	226	昭和化学	M-90	3	織上	石製品	滑石(天然物混入)	12.60	12.70	0.70	13.30	織石	知多産 1					
GO-13	REV-203-047	226	昭和化学	N-90	3	織上	石製品	滑石(天然物混入)	12.00	12.40	0.20	12.60	織石	知多産 1					
GO-14	REV-203-044	226	昭和化学	Q-90	1	織上 1層	石製品	滑石	3.20	2.20	0.60	3.80	織石	知多産 1					
GO-15	REV-203-043	226	昭和化学	Q-91	30	織上 1層	石製品	滑石	12.60	13.00	0.80	14.40	織石(天然物混入)						
GO-16	REV-203-044	226	昭和化学	H-13 JF-6	273	織上 1層	石製品	滑石	13.10	1.20	0.35	13.40	織石	知多産 1					
GO-17	REV-203-046	226	昭和化学	H-13 JF-6	600	織上 1層	石製品	滑石(天然物混入)	12.70	12.80	0.43	13.10	織石	知多産 1					
GO-18	REV-203-047	226	昭和化学	H-13 JF-1	179	織上	石製品	滑石(天然物混入)	1.20	12.60	0.60	13.80	織石	知多産 1					
GO-19	REV-203-048	226	昭和化学	H-13 JF-1	493	織上 1層	石製品	滑石(天然物混入)	12.00	12.60	0.30	12.90	織石	知多産 1					
GO-20	REV-203-049	226	昭和化学	H-13 JF-1	104	織上 1層	石製品	滑石(天然物混入)	12.60	12.70	0.30	12.90	織石	知多産 1					
GO-21	REV-203-045	226	昭和化学	H-13 JF-1	434	織上	石製品	滑石(天然物混入)	12.20	12.40	0.30	12.50	織石	知多産 1					
GO-22	REV-207-08	261	昭和化学	H-20 JF-1	17	織上	石製品	滑石(天然物混入)	12.30	12.40	0.40	12.70	織石	知多産 1					
GO-23	REV-207-08	261	昭和化学	H-20 JF-1	318	織上 1層	石製品	滑石(天然物混入)	12.50	12.60	0.30	12.80	織石	知多産 1					
GO-24	REV-203-04	261	昭和化学	P-10	30	織上	石製品	滑石(天然物混入)	12.10	12.40	0.30	12.70	織石	知多産 1					
GO-25	REV-203-04	261	昭和化学	P-10	30	織上	石製品	滑石(天然物混入)	8.10	2.40	1.10	9.50	織石	知多産 1					
GO-26	REV-203-046	226	昭和化学	P-10	30	織上 1層	石製品	滑石(天然物混入)	12.60	12.40	0.40	13.00	織石	知多産 1					
GO-27	REV-203-051	226	昭和化学	P-10	30	織上 1層	石製品	滑石(天然物混入)	12.00	12.40	0.40	12.80	織石	知多産 1					
GO-28	REV-203-051	226	昭和化学	P-10	30	織上 1層	石製品	滑石(天然物混入)	12.00	12.40	0.40	12.80	織石	知多産 1					
GO-29	REV-203-051	226	昭和化学	M-10	300	織上 1層	石製品	滑石	8.00	12.20	1.40	9.60	織石	知多産 1					
本分析	昭和化学						石製品	滑石(天然物混入)	13.70	11.30	0.20	14.10	織石						
									M-90	751	織上 1層	石製品	滑石(天然物混入)	11.90	13.40	0.30	13.70	織石	
									N-97	314	織上	石製品	滑石(天然物混入)	11.00	11.80	0.20	11.60	織石	
									N-90	303	織上	石製品	滑石(天然物混入)	11.00	11.20	0.70	12.20	織石	
									K-1	77	織上 1層	石製品	滑石(天然物混入)	12.80	1.10	0.80	13.60	織石	
									O-1	40	織上 1層	石製品	滑石	1.97	1.10	0.35	2.20	織石	
									N-97	314	織上 1層	石製品	滑石	8.42	4.40	1.60	14.40	織石	

引用参考文献

論文・書籍等

- 阿部明義・澤田健 2010 「北海道の袂状耳飾」『玉文化 第7号』日本玉文化研究会
- 石岡憲雄 1986 「施文原体の変遷—円筒土器」『季刊考古学17』雄山閣
- 伊藤信雄・須藤 隆 1982 『瀬野遺跡-青森県下北部脇野沢村清野遺跡の研究』東北考古学会
- 伊藤信雄・須藤 隆 1985 『山王開遺跡調査図録』追討教育委員会
- 稲野祐介 1979 「亀ヶ岡文化における石剣類の研究—文様に基づく分類—」『北奥古代文化 第11号』北奥古代文化研究会
- 大坂 拓 2007 「第2章 第3節 1.土器」『青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報(2006年度)』江豚沢遺跡調査グループ
- 大坂 拓 2009 「大河A₂式土器の再検討-山形県天童市砂子田遺跡・山形市北柳1遺跡出土土器群の編年的位置」『考古学集刊』5
- 大和久震平 1960 「円筒上層式の細分」『秋田考古学 第16号』秋田考古学会
- 大沼忠春 1980 「6 縄文文化」『北海道考古学講座』みやま書房
- 大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌 第66巻第4号』日本考古学会
- 大沼忠春 1984 「道南の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学20』北海道考古学会
- 大沼忠春 1986a 「道南の縄文前期土器群の編年について(II)」『北海道考古学22』北海道考古学会
- 大沼忠春 1986b 「施文原体の変遷—東館路式土器」『季刊考古学17』雄山閣
- 上條信彦 2014 「「扁平石器」の形態的分布から見た円筒土器文化圏の動態—半円状扁平打製石器、挟入扁平打製石器、挟入扁平磨製石器を中心に—」『青森県考古学 第22号』青森県考古学会
- 上條信彦 2015 『縄文時代における脱殻・粉砕技術の研究』六一書房
- 茅野嘉雄 2008 「円筒下層式土器」『総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会
- 川崎 保 2001 「三内丸山遺跡出土の石製装身具の流通・交易経路の解明」『特別史跡三内丸山遺跡 年報4』青森県教育委員会
- 工藤竹久 1987 「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌 第72巻 第4号』日本考古学会
- 熊野善藏・八木光則 1974 「茅部郡森町森川A遺跡出土の前期縄文式土器群」『北海道考古学10』北海道考古学会
- 小島朋夏 1999 「北海道式冠の分布とその意義」『北海道考古学35』北海道考古学会
- 小島朋夏 2005 「縄文時代における軽石製模造品について—北海道南西部を中心として—」『北奥の考古学』葛西勤先生還暦記念論文集刊行会
- 小山彦逸 2005 「青森県七戸町矢倉遺跡出土の縄文前期の岩偶」『北奥の考古学』葛西勤先生還暦記念論文集刊行会
- 小山正忠・竹原秀雄 2007 『新版標準土色帖29版』日本色研事業株式会社
- 齋藤 岳 2010 「青森県内出土例を中心とした異形石楯について」『青森県考古学 第18号』青森県考古学会
- 鹿又喜隆 2009 「押出遺跡の石器の機能」『日本考古学協会2009年度山形大会 研究発表資料集』日本考古学協会2009年度山形大会実行委員会
- 鈴木克彦 1999 「北海道渡島・松山地域の中期末葉から後期初頭の編年」『北海道考古学35』北海道考古学会
- 鈴木克彦 2005 「石偶に関する研究」『北奥の考古学』葛西勤先生還暦記念論文集刊行会
- 鈴木正博 1985 「弥生式への長い途」『古代 第80号』早稲田大学考古学会
- 鈴木正博 1991 「栃木「先史土器」研究の課題(2)」『古代 第91号』早稲田大学考古学会
- 須藤 隆 1983 「東北地方の初期弥生土器-山王III層式」『考古学雑誌』68-3
- 須藤 隆 1998 『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』纂集堂
- 須藤 隆編 1999 『岩手県足利遺跡資料 山内清男 参考資料10』奈良国立文化財研究所
- 芹沢長介 1960 『石器時代の日本』築地書店
- 高瀬克範 2000 「東北地方における弥生土器の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告 第83集』国立歴史民俗博物館
- 高橋正勝 1994 「北海道南部の土器」『縄文文化の研究4(第2版)』雄山閣
- 田部井功 1985 「縄文晩期・浮線文土器の研究」『古代探叢II』早稲田大学出版部
- 田部井功 1993 「大河A₂式に関する覚書」『古代 第95号』早稲田大学考古学会
- 戸蒔賢二・土屋 薫 2000 『北海道の石』北海道大学図書刊行会
- 中村五郎 1988 『弥生文化の曙光』未来社
- 中村五郎 1990 「①大河A₂式土器をめぐる」『荒屋敷遺跡II』福島県会津若松建設事務所・三島町教育委員会
- 成田滋彦 2005 「円筒下層期党書—土偶・土製品の基礎的資料—」『北奥の考古学』葛西勤先生還暦記念論文集刊行会

- 野村 崇 1979 『北海道日ノ浜8号遺跡出土の晩期縄文土器について』『北海道開拓記念館研究年報』7
- 野村 崇 1985 『北海道縄文時代終末期の研究』みやま書房
- 野村 崇 1994 『北海道南部・中部の土器』『縄文文化の研究』4 (第2版) 雄山閣
- 林 謙作 1981 『北海道』『縄文土器大成4-晩期』講談社
- 林 謙作 1964 『事実誤認と見解の相違』『考古学研究』第11巻 第2号 考古学研究会
- 福田友之 2005 『ヒスイ以前の津軽海峡域—縄文前期以前の石製装身具を中心にして—』『北奥の考古学』
葛西勲先生還暦記念論文集刊行会
- 福田裕二 2005 『亀田半島における前期末葉～中期初頭の様相』
『東北・北海道の縄文時代前期末葉～中期初頭土器の課題—資料集—』海峽土器福年研究会
- 南 久和 1993 『工字状文』『古代』第95号 早稲田大学考古学会
- 三宅徹也 1974 『青森県における円筒下層式土器群の地域展開』『北奥古代文化』第6号 北奥古代文化研究会
- 三宅徹也 1989 『円筒土器下層様式』『縄文土器大観2』小学館
- 三宅徹也 1994 『円筒土器』『縄文文化の研究』3 (第2版) 雄山閣
- 村越 潔 1984 『増補 円筒土器文化』雄山閣
- 山内清男編 1964 『日本原始美術』講談社

団体・組織刊行物

- 木古内町史編纂委員会 1982 『木古内町史』木古内町
- 北海道火山灰命名委員会 1982 『北海道の火山灰』北海道火山灰命名委員会
- 角川日本地名大辞典編纂委員会 1987 『角川日本地名大辞典1 北海道 上巻』
- 大川清・鈴木公雄・工藤善通編 1996 『日本土器事典』雄山閣
- 南北海道考古学情報交換会編 1995 『円筒土器下層式図録集』南北海道考古学情報交換会
- 南北海道考古学情報交換会編 1996 『円筒土器下層式遺構編』南北海道考古学情報交換会
- 日本ベドロジー学会 1997 『土壌調査ハンドブック 改訂版』博友社
- 地学団体研究会道南班編 2002 『道南の自然を歩く』北海道大学図書刊行会
- 永井秀夫監修 2003 『北海道の地名』日本歴史地名大系第一巻 平凡社
- 弘前大学考古学研究会 1981 『弘前大学考古学研究』第1号
- 国立歴史民俗博物館研究報告編集委員会 2000 『国立歴史民俗博物館研究報告 第83集』国立歴史民俗博物館

ホームページ

- 木古内町公式ホームページ
北海道教育委員会ホームページ「北の遺跡案内」

埋蔵文化財発掘調査報告書

木古内町教育委員会

- | | | |
|------------------|------------------|--------------------|
| 1974 『札苜遺跡』 | 1989 『鶴岡2遺跡Ⅰ』 | 1990 『鶴岡2遺跡Ⅱ』 |
| 1991 『釜谷4遺跡』 | 1995 『釜谷5遺跡』 | 1997 『新道3遺跡』 |
| 1998a 『亀川2遺跡』 | 1998b 『亀川3遺跡』 | 1998c 『泉沢3遺跡』 |
| 1999a 『釜谷遺跡』 | 1999b 『新道2遺跡』 | 2003a 『新道2遺跡Ⅱ北地点』 |
| 2003b 『大釜谷3遺跡』 | 2003c 『泉沢2遺跡A地点』 | 2003d 『泉沢2遺跡(B地点)』 |
| 2004a 『泉沢2遺跡C地点』 | 2004b 『蛇内遺跡』 | |

松前町教育委員会

- 1991 『松城遺跡』

七飯町教育委員会

- 2000 『国立療養所裏遺跡』

新冠町教育委員会

- 1975 『水川遺跡』

南茅部町埋蔵文化財調査団(現 函館市)

- 1992 『八木B遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
- 1993 『八木A遺跡 ハマナス野遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
- 1997 『八木A遺跡Ⅲ 八木C遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団

戸井町教育委員会(現 函館市)

- 1990 『浜町A遺跡』
- 1991 『浜町A遺跡Ⅱ』
- 1993 『戸井貝塚Ⅱ』
- 1994 『戸井貝塚Ⅳ』
- 2001 『高屋敷川1遺跡』

寿都町教育委員会

1980 『寿都町文化財調査報告Ⅱ』

北海道開拓記念館 1976 『札苺』

⑧北海道埋蔵文化財センター、(公財)北海道埋蔵文化財センター

1985 『知内町 湯の里遺跡群』北埋調報18

1986a 『木古内町 建川1・新道4遺跡』北埋調報33 1986b 『木古内町 札苺遺跡』北埋調報34

1987 『木古内町 建川2・新道4遺跡』北埋調報43 1988 『木古内町 新道4遺跡』北埋調報52

1998 『上磯町 茂別遺跡』北埋調報121

1999 『長万部町 花岡2遺跡・花岡3遺跡』北埋調報139

2000 『八雲町 シラリカ2遺跡』北埋調報142

2002a 『八雲町 山崎5遺跡』北埋調報165 2002b 『八雲町 野田生4遺跡』北埋調報171

2002c 『白老町 虎杖浜2遺跡』北埋調報172

2003 『八雲町 野田生1遺跡』北埋調報183

2005a 『森町 森川4遺跡』北埋調報218 2005b 『共和町 リヤムナイ3遺跡(1)』北埋調報220

2005c 『共和町 上リヤムナイ遺跡・リヤムナイ3遺跡(3)』北埋調報227

2010 『恵庭市 西松島2遺跡』北埋調報265

2011a 『木古内町 木古内2遺跡』北埋調報278 2011b 『木古内町 大平遺跡・大平4遺跡』北埋調報280

2011c 『木古内町 蛇内2遺跡』北埋調報281 2011d 調査年報23

2012a 『木古内町 大平4遺跡(2)・蛇内2遺跡(2)』北埋調報292

2012b 『木古内町 木古内2遺跡(2)』北埋調報293 2012c 調査年報24

2013a 『木古内町 札苺5遺跡』北埋調報294 2013b 調査年報25

2014a 『木古内町 札苺6遺跡』北埋調報301 2014b 『木古内町 木古内遺跡』北埋調報304

2014c 『木古内町 釜谷8遺跡』北埋調報305 2014d 調査年報26

2015a 『北斗市 押上1遺跡』北埋調報301 2015b 調査年報27

2015c 『木古内町 新道4遺跡(4)』北埋調報320

2016a 『北斗市 館野6遺跡(2)』北埋調報327 2016b 調査年報28

青森県

1970 『石神遺跡』森田村教育委員会

1984 『剣吉荒町遺跡』名川町教育委員会

1988 『白座遺跡 野場遺跡(3)』階上町教育委員会

1994 『畑内遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書161

1995 『畑内遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書178

1996 『宇鉄遺跡』青森県三坂村教育委員会

1996 『三内丸山遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査報告書230

1997 『三内丸山遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書249

1997 『三内丸山遺跡Ⅸ』青森県埋蔵文化財調査報告書250

2002 『矢倉遺跡Ⅳ』七戸町埋蔵文化財調査報告書36集 青森県七戸町教育委員会

2006 『東道ノ上(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書424

2012a 『江豚沢Ⅰ』江豚沢遺跡調査グループ

2012b 『下北半島における亀ヶ岡文化の研究』「青森県むつ市 不備無遺跡発掘調査報告書」

弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター

岩手県

1995 『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団第225集

秋田県

1999 『池内遺跡 遺物・資料編』秋田県埋蔵文化財調査報告書282

山形県

2003 『砂子田遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第113集

奈良県

1999 『岩手県足沢遺跡資料』奈良国立文化財研究所史料 第50冊 奈良国立文化財研究所

2009 『浜浜貝塚資料・福浦島貝塚資料・橋本貝塚資料』奈良文化財研究所史料 第84冊 奈良文化財研究所

東京都

2009 『東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎研究』

研究代表者 安藤広道(慶應義塾大学文学部)

報告書抄録

ふりがな	きこないちろう おおひらいせき(3) もりどいこう・ほうがんそうへん							
書名	本吉内町 大平遺跡(3) 一盛土遺構・包含層編							
副書名	北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	なし							
シリーズ名	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第328集							
編著者名	中山昭六・鈴木宏行・芝田直人・酒井秀治・熊谷仁志・佐藤和雄・立川マサ							
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 江別市西野町685-1 TEL(011)386-3231 FAX(011)386-3238 E-mail mail@domaibun.or.jp ホームページ http://www.domaibun.or.jp							
発行機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
発行年月日	平成29(西暦2017)年3月24日							
ふりがな 収録遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおいでせき 大平遺跡	おおいでせきまきふく 上磯郡本吉内町 あらいの 字大平63	01334	B-05-07					
				MO杭		20100506 ～20101105 20110509 ～20111111	4,375㎡	北海道新幹線 建設に伴う 記録保存
				M90杭				
				41度41分 26.55157秒	140度26分 52.06337秒			
				41度41分 25.30961秒	140度26分 50.67402秒			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な報告遺構			主な遺物	
大平遺跡	集落跡	縄文時代 前期後半～中期前半 後期前葉・晩期後葉		焼土935ヶ所、割片集中1215ヶ所、 礫集中22ヶ所、盛土遺構1ヶ所			土器 石器等	
要約	<p>遺跡はJR本吉内駅から南西へ約1.8km、本吉内川と雄有川に挟まれた平坦な低地海岸段丘上に立地し、標高は15～20mである。</p> <p>遺跡の調査は平成21年度と平成22・23年度に行われ、今回の報告が3冊目の報告書となる。2冊目の大平遺跡(2)「遺構編」(北埋調報321)では竪穴住居跡45軒、土坑5基、フラスコ状ピット63基、Tピット2基、柱状ピット36基の報告を行っている。今回の報告書は焼土・割片集中・礫集中・盛土遺構とその遺物、および包含層出土の遺物についての報告である。</p> <p>焼土は1935ヶ所検出されている。フローテーションを行い炭化物(オニグルミ・クリ・ニワトコなど)や焼骨片(サメ類・イナメなどの魚類、シカ・クマなどの哺乳類)が検出されている。</p> <p>割片集中は1215ヶ所検出されている。頁岩割片を主とした203,199点の遺物が出土した。長さ20cmを超える大型の両面調整石器や礫器・石核なども多く出土している。接合作業を行い35点の接合資料を掲載した。接合点数が400点を超える接合資料もある。</p> <p>礫集中は22ヶ所検出されている。5cmほどの小礫が集まって出土しているものや2～10cmほどの礫が集まって出土しているものが検出されている。</p> <p>盛土遺構と包含層から出土した遺物は土器973,810点、石器等212,182点、合計1,185,992点である。土器はⅡ群B類土器が約97%を占め、Ⅱ群B-3～5類土器が特に多い。石器等はスクレイパー、たたく石、すり石が多く出土している。土製品では有孔土製円板、擦切土器片、耳栓、焼成粘土塊などが出土している。石製品では異形石器、滑石製の垂飾や珠状耳飾り、つまみ付ナイフミニチュア、線刻鏡、軽石製石製品(北海道式石冠状、すり石状など)が出土している。</p>							

遺跡番号は北海道埋蔵文化財包蔵地周辺資料登録番号、経緯度は世界測地系による。

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第328集

き こ ない ちよう おお ひら
木古内町 大平遺跡(3)

—盛土遺構・包含層編—

—北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書—

第1分冊 (本文編)

平成29 (2017) 年 3 月24日

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地1
TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238
URL <http://www.domaibun.or.jp>
E-mail mail@domaibun.or.jp

印刷 株式会社須田製版
〒063-8603 札幌市西区二十四軒2条6丁目1番8号
TEL (011) 621-1000 FAX (011) 621-1500

